

# 白井遺跡群 - 中世・近世編 -

(白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)  
(白井南中道遺跡)

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

資料整理室

1998

建設省  
群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



S H I R O I

# 白井遺跡群 - 中世・近世編 -

(白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

1998

建 設 省  
群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

本県を新潟に向けて縦断する国道17号線は、これまで主要幹線道路としても、県北部と県平野部を結ぶ地域のアクセス道路としても、鯉沢交差点が渋滞のボトルネックの一つとなっていました。鯉沢バイパスは、こうした交通混雑解消のために、県民の期待を担って平成8年10月に開通し、子持村と渋川市を結ぶ道路事情が大幅に改善されました。

この工事に関連した埋蔵文化財調査は、建設省の委託を受けた県教委からの再委託で財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、子持村の白井遺跡群を中心として通算6年次に及び、報告書年次計画に沿って、継続的に行ってきており既に第1集～第5集が刊行されております。編集は遺跡単位、時代単位で行っており、本報告書には「白井丸岩遺跡」と「白井北中道遺跡」の中世、近世に属する遺構、遺物及び「白井二位屋・南中道遺跡の中世補遺」を報告するものです。

本報告書で注目される点は、トレンチ調査ながら、中世に長尾氏の居城であった白井城の東遠構(ひがしとおがまえ)と北遠構(きたとおがまえ)の一部を発掘したことにあります。なおご参考までに、仁居谷城の堀の一部に関する報告は第一集でおこなっています。

この埋蔵文化財調査の成果が出版される機会に、これまでお世話になった建設省高崎工事事務所、県教育委員会文化財保護課、渋川市教育委員会には深甚の謝意を表し、本報告書の出版が地域の歴史理解の一助となることを念じつつ、報告書の序といたします。

平成10年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**



## 例 言

1 本書は一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う、白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡の中世および近世に関する発掘調査報告書である。また、既刊の『白井遺跡群—中世編—(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡)』の補遺編も納めている。白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡は事業名称をそれぞれ中宿遺跡・白井1遺跡と呼称していた。また、白井地区の鯉沢バイパス関係の各遺跡をとりまとめて「白井遺跡群」の名称を使用することとする。

2 本遺跡は群馬県北群馬郡子持村大字白井に所在する。

3 事業主体 建設省関東地方建設局

4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5 調査期間 平成2年7月2日～平成2年11月28日(平成2年度、北中道)

平成3年4月1日～平成4年3月31日(平成3年度、丸岩・北中道)

平成4年4月1日～平成4年12月11日(平成4年度、丸岩・北中道)

平成5年4月1日～平成5年5月31日(平成5年度第1次、丸岩・北中道)

平成5年12月1日～平成6年3月31日(平成5年度第2次、丸岩・北中道)

平成6年4月1日～平成6年7月31日(平成6年度、北中道)

平成7年4月1日～平成7年12月11日(平成7年度、丸岩・北中道)

6 調査組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

常務理事 邊見長雄(平成2～4年度) 中村英一(平成5～7年度)

事務局長 松本浩一(平成2～3年度) 近藤 功(平成4～6年度)

原田恒弘(平成7年度)

管理部長 田口紀雄(平成2年度) 佐藤 勉(平成3～5年度)

蜂巢 実(平成6～7年度)

調査研究部長 神保侑史(平成2～7年度)

庶務課長 岩丸大作(平成2～3年度) 斉藤俊一(平成4～6年度)

小淵 淳(平成7年度)

調査研究部第2課長 能登 健(平成2～5年度)

調査研究部第4課長 中束耕志(平成6～7年度)

事務担当 国定 均 笠原秀樹 小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津 茂

高橋定義 松下 登 大澤友治 野島のぶ江 並木綾子 吉田恵子 今井

もと子 角田みづほ 松井美智代 塩浦ひろみ 内山佳子 星野美智子

羽鳥京子 菅原淑子

調査担当 平成2年度 下城 正 根岸 仁 高井佳弘

平成3年度 飯塚卓二 大木紳一郎 坂口 一 洞口正史 徳江秀夫

麻生敏隆 南雲芳昭 黒田 晃 志塚雅美 井上昌美

関口博幸 (嘱託員 外山政子)

平成4年度 大木紳一郎 洞口正史 徳江秀夫 南雲芳昭 飯森康広 井上昌美

平成5年度 綿貫邦男 洞口正史 南雲芳昭 井上昌美 矢口裕之  
平成6年度 洞口正史 井上昌美 矢口裕之  
平成7年度 洞口正史 斎藤利昭 廣津英一

- 7 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 整理期間 平成6年10月1日～平成7年3月31日（白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡補遺編）  
平成9年4月1日～平成10年3月31日（白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡）
- 9 整理組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 常務理事 中村英一（平成6年度） 菅野 清（平成9年度）
- 事務局長 近藤 功（平成6年度） 原田恒弘（平成9年度）
- 副事務局長 赤山容造（平成9年度、調査研究第1部長兼務）
- 管理部長 蜂巢 実（平成6年度） 渡辺 健（平成9年度）
- 調査研究部長 神保侑史（平成6年度）
- 総務課長 斉藤俊一（平成6年度） 小淵 淳（平成9年度）
- 調査研究部第4課長 中束耕志（平成6年度）
- 調査研究部第2課長 能登 健（平成9年度）
- 事務担当 国定 均 笠原秀樹 井上 剛 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 岡嶋伸昌  
高橋定義 宮崎忠司 大澤友治 並木綾子 今井もと子 吉田恵子  
塩浦ひろみ 松井美智代 内山佳子 星野美智子 羽鳥京子 佐藤美佐子  
若田 誠 本間久美子 北原かおり 本地友美 狩野真子
- 整理担当 南雲芳昭（平成6年度） 井上昌美（平成9年度）
- 整理班員 青木静江 藤井輝子 吉田文子 岩淵フミ子 阿部和子 岸トキ子  
大友美代子 千代谷和子 木原幸子 池田和子 中曽根貞子 佐藤久美子  
田中佐恵子 大野容子

- 10 本書作成の担当者は次のとおりである。

編 集 井上昌美

執 筆 5章遺物観察表 大西雅弘

6章 本文中に記載

上記以外 井上昌美

遺構・遺物図面整理、図版作成等

青木静江 藤井輝子 吉田文子 岩淵フミ子 阿部和子 岸トキ子 大友美代子

千代谷和子 木原幸子 池田和子 中曽根貞子 佐藤久美子 田中佐恵子 大野容子

遺物写真 佐藤元彦

保存科学 関 邦一 小材浩一 土橋まり子 小沼恵子 樋口一之 萩原妙子

- 11 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめとして、遠方からも多数の方々に参加していただいた。調査に尽力していただいた作業員の方々に感謝の意を表す次第である。

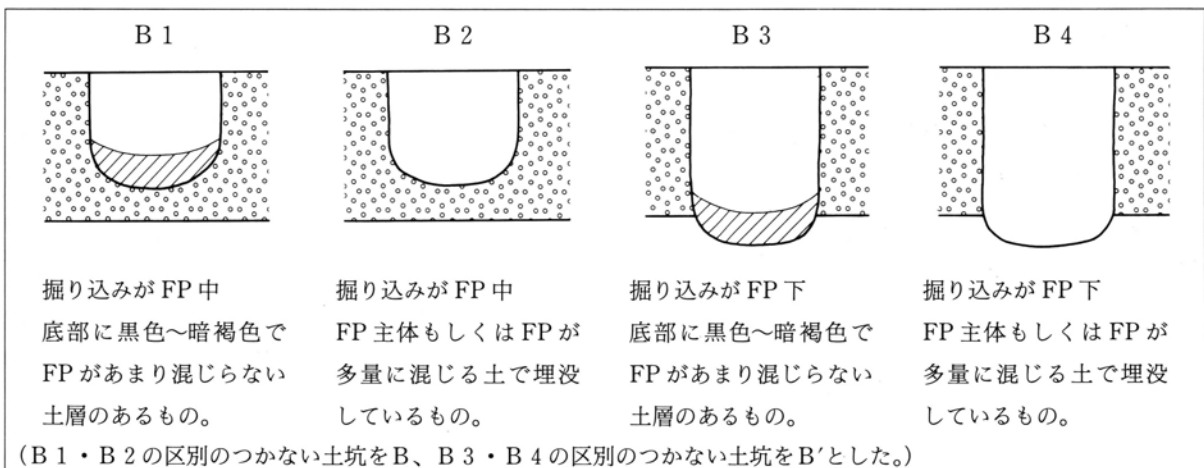
- 12 出土遺物と、白井遺跡群に関する整理済み記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。



# 凡 例

- 1 調査区域には、国家座標に基づいて4m間隔のグリッドを設定した。白井丸岩遺跡のグリッドの原点AA-00は日本平面直角座標系第IX系のX=55.650km、Y=-72.800kmで、白井二位屋・白井南中道遺跡と同じ原点を使用している。白井北中道遺跡のグリッド原点AA-00は、第IX系のX=55.650km、Y=-72.400kmで、AA-100が白井丸岩遺跡などのAA-00にあたる。
- 2 遺構平面図では基本的に最寄りのグリッド杭を記載し位置を示しているが、グリッド杭が近くない場合はグリッドライン上の任意の点で示す。例 AB-10+2mの場合、AB-10の杭から西へ2mの点を示す。同様にAB+2m-10は、AB-10の杭から北へ2mの点を示す。
- 3 本書では榛名山の噴出物である、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)層をFAと表記し、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)層をFPと表記する。
- 4 遺構番号は、白井丸岩遺跡は区を越えた通番を、白井北中道遺跡は区ごとに番号を付している。
- 5 本文中で使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図「前橋」、「榛名山」、「中之条」、「沼田」、20万分の1の地勢図「宇都宮」、「長野」である。付図は子持村都市計画図(1/2,500)を資料とした。
- 6 遺構および遺物実測図の縮尺は各図中に表示してある。また、挿図中の「L=○○m」は、断面図の水糸標高を示す。
- 7 土坑一覧表における土坑の分類は、以下の様な基準で行った。
  - A 土墳墓(人骨が出土している土坑)。
  - B 溝状または細長い長方形の土坑。土坑の深さ、埋没土により細分(下図参照)。
  - C 隅丸方形の土坑。 D 円形・楕円形の土坑。 E その他の土坑。 F 長径1m以下のピット。
- 8 土層断面の注記に用いた色調は、概ね農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。
- 9 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
  - (1) 胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壌物理研究会による基準に従い、細砂粒(<0.5mm)、粗砂粒(0.5~2.0mm)、細礫(2.0~5.0mm)、中礫(5.0mm<)とした。
  - (2) 色調は農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。

土坑分類図



# 目 次

序  
例 言  
凡 例  
報告書抄録

第1章 調査の経緯	1
第2章 地理的・歴史的環境	5
第3章 白井丸岩遺跡	
第1節 FP上面の概要	12
第2節 白井丸岩遺跡1区	13
第3節 白井丸岩遺跡2区	24
第4節 白井丸岩遺跡3区	30
土坑一覧表	35
第4章 白井北中道遺跡	
第1節 FP上面の概要	42
第2節 白井北中道遺跡1区	43
第3節 白井北中道遺跡2区	53
第4節 白井北中道遺跡3区	59
第5節 白井北中道遺跡4区	81
第6節 白井北中道遺跡5区	86
第7節 白井北中道遺跡6区	88
土坑一覧表	91

第5章 白井二位屋・南中道遺跡 (白井遺跡群第1集補遺)	
第1節 補遺編の経緯	98
第2節 白井二位屋遺跡	99
第3節 白井南中道遺跡	100
第6章 まとめ	
白井城周辺における渡河と街道	142
溝状土坑について	149
白井遺跡群の人骨・馬骨	152
仁居谷城の地下レーダー探査について	157

## 写真図版

カラー図版	PL 1
白井丸岩遺跡	PL 5
白井北中道遺跡	PL 31
白井南中道遺跡	PL 74
白井二位屋遺跡	PL 88

## 付図 白井城東遠構 現地測量図

### 白井遺跡群発掘調査報告書

#### 既刊

- 第1集 白井遺跡群—中世編—(二位屋・南中道遺跡)
- 第2集 白井遺跡群—集落編I—(二位屋遺跡)
- 第3集 白井遺跡群—集落編II—(南中道遺跡)
- 第4集 白井遺跡群—古墳時代編—  
(二位屋・南中道・丸岩・北中道遺跡)

#### 同時刊行

- 第5集 白井遺跡群—旧石器・縄文時代編—  
(二位屋・南中道・丸岩・北中道遺跡)

## 報告書抄録

ふりがな	しろいいせきぐん ちゅうせい・きんせいへん							
書名	白井遺跡群一中世・近世編一(白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)							
副書名	一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第6集							
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告							
シリーズ番号	第235集							
編著者名	井上昌美							
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団							
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511							
発行年月日	西暦1998年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろいまるいわ 白井丸岩	きたぐんまぐん 北群馬郡 こもちむらあざしろい 子持村字白井	10341	—	36° 30' 29"	139° 01' 08"	19910401～19921031	} 5,718 1,815 1,612	道路建設
						19930401～19930531		
						19931201～19940331		
						19950401～19951211		
しろいきたなかみち 白井北中道	きたぐんまぐん 北群馬郡 こもちむらあざしろい 子持村字白井	10341	—	36° 30' 42"	139° 01' 13"	19900702～19901128	} 3,500 8,070 3,929 3,036	道路建設
						19910715～19921211		
						19930401～19930531		
						19931201～19940731		
						19950401～19951211		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
白井丸岩	墓 その他	中世～近世	墓壇 6基 土坑 283基 ピット群		陶磁器、石 製品、古銭 人骨			
白井北中道	城館 生産 墓 その他	中世～近世	堀 2箇所 畠跡 2箇所 墓壇 2基 溝 2条、道路遺構 1条 土坑 307基		陶磁器、石 製品、古銭 人骨	白井城の北遠構と東遠構の一部を調査。		
白井南中道	その他	中世～近世	土坑		陶磁器	第1集補遺。		
白井二位屋					焼印	第2集の掲載漏れ遺物。		



# 第1章

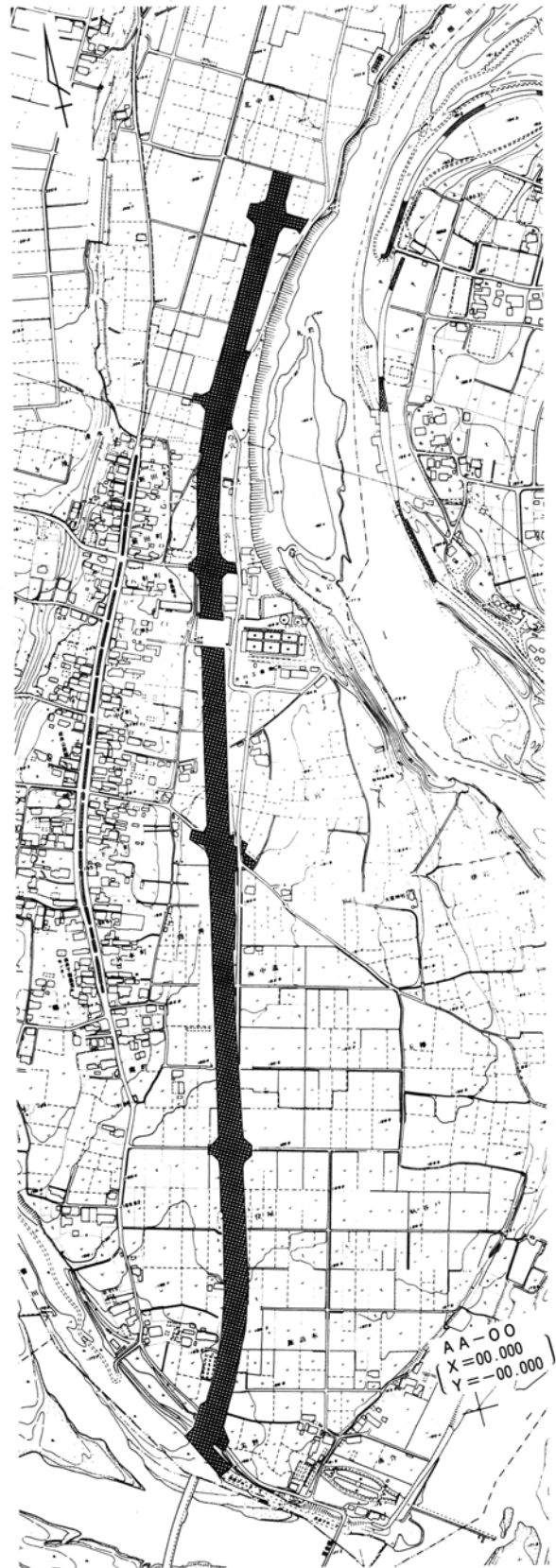
## 調査の経緯

## 第1節 調査の経緯

鯉沢バイパスは、国道17号線の渋川市や子持村の市街地および、子持村鯉沢交差点付近での渋滞を緩和するために計画された、渋川市東町から子持村上白井までの5.5kmのバイパスである。東町から白井字北中道の国道353号線バイパスとの交差点までが第1期工事区間で、約2.3kmに及び、それ以北が第2期工事区間となっている。

この地域は、古墳時代の集落遺跡で日本のポンペイと呼ばれる国指定史跡黒井峯遺跡から南東へ2kmほどに位置しており、第1期工事区間で5遺跡、第2期工事区間で5遺跡が確認された。まず第1期工事区間の発掘調査を実施することになり、1990(平成2)年に白井二位屋遺跡(事業名称：仁位屋遺跡)・白井南中道遺跡(事業名称：下宿遺跡)・白井北中道遺跡(事業名称：白井1遺跡)の調査を着手した。翌年からは白井丸岩遺跡(事業名称：中宿遺跡)の調査も加わり、子持村白井における調査は1995(平成7年)まで続いた。1996(平成8)年の東町関下遺跡(事業名称：東町遺跡)の調査をもって、第1期工事区間の発掘調査を終了した。

報告書作成にあたっては、子持村白井に所在する4遺跡をまとめて白井遺跡群と呼称することとした。これら4遺跡は一連の地域であること、古墳時代における榛名山の2度の噴火による堆積物を挟んで、それぞれ5面の調査を行っていることから、単独の遺跡ごとの報告にせず、遺跡を越えて各面ごと(すなわち各時代ごと)の報告とすることとした。このことにより各時代ごとに、広範囲にわたっての遺構のあり方を捉えることができる。本報告書で扱う内容は、このうちの白井丸岩・白井北中道遺跡の、中世および近世の遺構・遺物の報告と、既刊の白井二位屋・白井南中道遺跡の中世編の補遺である。なお本報告をもって、第1期工事区間の白井遺跡群の、発掘調査報告はすべて終了する。



第1図 鯉沢バイパス路線図 (S=10,000)

## 第2節 調査の方法

第1期工事区間の子持村分の遺跡は、路線のセンター杭番号No.30～45が白井二位屋遺跡で、調査区を1～3区に分けた。同様にNo.45～71が白井南中道遺跡で1～5区の調査区を、No.72～85が白井丸岩遺跡で1～3区の調査区を、No.88～119が白井北中道遺跡で1～6区の調査区を設定した。

調査区域には、国家座標に基づいて4m間隔のグリッドを設定した。東西をアルファベット、南北をアラビア数字で呼称し、南東隅のグリッド杭の名称をグリッドの名称とした。白井二位屋・白井南中道・白井丸岩遺跡におけるグリッドの原点AA-00は、日本平面直角座標系第IX系のX=55.650km、Y=-72.800kmである。白井北中道遺跡のグリッド原点AA-00は、同座標系第IX系のX=55.650km、Y=-

## 第3節 白井遺跡群の概要

子持村白井地区は、古墳時代における榛名山の2度の噴火に伴う火山灰(FA)と軽石(FP)の層が堆積しており、調査はこれらの層の上面・下面および縄文時代の包含層の5面にわたり、さらに旧石器時代の試掘調査を行った。その結果、旧石器時代、縄文時代草創期・前期・中期の遺物、古墳時代の放牧地、奈良・平安時代の集落、中世の城郭の堀、近世の土坑群などを検出した。

縄文時代で特筆されるのは、北中道遺跡で草創期の隆起線文土器・有舌尖頭器などがまとまって出土したことである<sup>(1)</sup>。古墳時代の調査では、6世紀中葉の榛名山の噴火による降下軽石(FP)によって埋もれていた馬の放牧地が注目を集めた。FP下の当時の地表面からは、多少の粗密はあるものの、二位屋遺跡から北中道遺跡に至るまで、5万㎡を超える調査区のほとんどで、ウマの蹄跡が確認され、蹄跡に規則性が認められないことから、馬の放牧地と考えられている<sup>(2)</sup>。このことは当時の農業形態やウマの飼育のあり方に、重要な視点を投げかけた。

72.400kmで、白井北中道遺跡のAA-100が白井丸岩遺跡などのAA-00に相当する。

この地域は榛名山の噴火に伴う火山灰層(FA)と軽石層(FP)があり、各遺跡とも5面の調査と旧石器の試掘を行っている。表土層とFP軽石層の除去にあたっては、大型掘削重機(バックホー)を用い、その他は基本的に手作業による遺構・遺物の検出を行った。

中世・近世の遺構の調査は、FP軽石層(基本土層III層)の上面を検出面とした。基本土層I層とした現在の耕作土下に、基本土層II層の黒褐色土層があり、本来ならばこの層の上面で遺構の検出を行う必要があるが、I層とII層は似たような土で分離が難しいこと、II層の欠落する場所があることなどから、III層上面を調査の第1面とした。

FP上面の調査では、二位屋遺跡・南中道遺跡で、7世紀～10世紀の竪穴住居を合わせて131軒検出し、そのうち35軒から獣骨が出土している<sup>(3)</sup>。また、北中道遺跡では、中世に長尾氏の居城であった白井城の東遠構と北遠構の一部を、二位屋遺跡では仁居谷城の堀の一部を調査している。この他に中世の大規模なローム採掘坑を南中道遺跡で検出している。また、4遺跡を通じて、中世から近世にかけての墓墳や土坑を多数検出している<sup>(4)</sup>。

### 文献

- (1)『白井遺跡群—旧石器・縄文時代編—』一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 1998
- (2)『白井遺跡群—古墳時代編—』同第4集 1997
- (3)『白井遺跡群—集落編I—』同第2集 1994  
『白井遺跡群—集落編II—』同第3集 1996
- (4)『白井遺跡群—中世編—(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡)』同第1集 1993  
『白井遺跡群—中世・近世編—(白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(本報告書)

## 第4節 基本土層

白井遺跡群の立地する地域は、段丘礫層を基盤として、その上位に砂礫層、ローム層、火山噴出物を挟む黒ボク土が堆積している。現在は平坦な地形であるが、下位にいくにしたがって小さな谷や微高地が表れ、VIII層からXIII層は地点により堆積状況が様々である。すべての層が一度にそろうところはない。

I層：黒褐色土。現在の耕作土で、Hr-FP、As-B軽石が混じる。20cm～50cmの層厚をもつ。

II層：黒褐色土。Hr-FP、As-B軽石が混じる。I層よりも色調が暗い。

III層：Hr-FP。白色軽石。榛名山の噴火に伴う軽石で、噴出年代は6世紀中葉と考えられている。最大粒径20cm、40cm～190cmの層厚をもつ。上面が奈良・平安時代以降の遺構確認面で、下面は6世紀中葉の旧地表面。

IV層：黒褐色土～暗褐色土。FAとFPの間の土壤層。5cm～10cmの層厚をもつ。2つのテフラに挟まれた限られた時間に形成された層。

V層：Hr-FA。あずき色火山灰、灰色火砕流など。榛名山の噴火に伴うもので、噴出年代は6世紀初頭と考えられている。8cm～40cmの層厚をもつ。上面が6世紀前半の痕跡調査の検出面で、下面が6世紀初頭の旧地表面。

VI層：黒褐色土。上部にAs-C軽石を含む。縄文時代の遺物包含層。

VII層：暗褐色土。いわゆる淡色黒ボク土。縄文時代の遺物包含層。

VIII層：黒褐色土。谷部分に堆積する。縄文時代の遺物包含層。

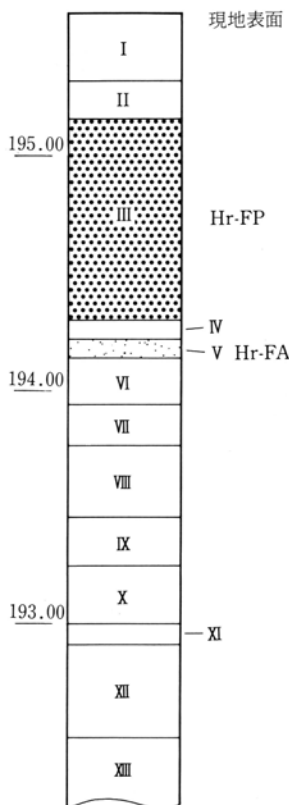
IX層：暗褐色土。ローム層との漸移層。縄文時代の遺物包含層。

X層：褐色土。ローム層。軟質。

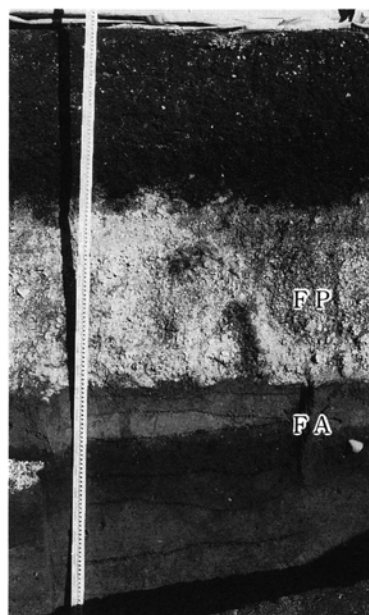
XI層：褐色土。ローム層。硬質で、やや砂質。部分的にAs-YP(1.3万～1.4万年前)を含む。旧石器時代の遺物を僅かに含む。

XII層：砂礫層。シルト層、細粒～粗粒砂層、拳大の礫を含む層まで様々な層の互層。ラミナの発達する層もある。

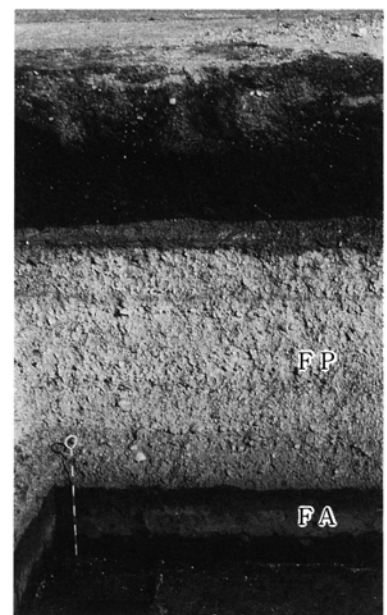
XIII層：段丘礫層。利根川の旧河床で、段丘面の基盤層。最大で直径1m程度の礫を含む。



第2図 柱状図 (丸岩遺跡)



丸岩遺跡 1区



北中道遺跡 1区



## 第 2 章

### 地理的・歷史的環境

## 第1節

### 遺跡の位置と周辺の地形

白井遺跡群は、渋川市の市街地から北東へ1.5kmほど離れた子持村大字白井に所在しており、群馬県の中央部やや北よりにあたる。子持村は新潟へ向かう国道17号と長野方面に向かう国道353号の分岐点で交通の要衝となっている。

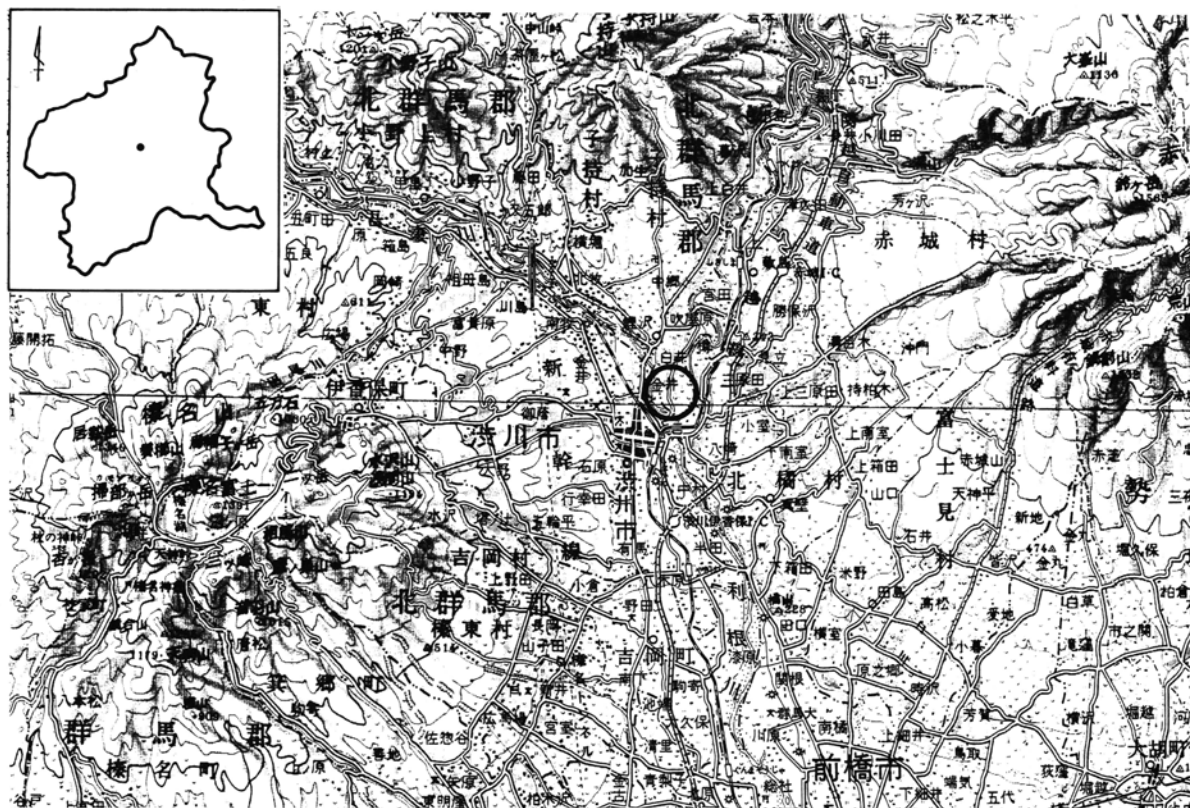
村の主な産業は、こんにゃくの生産と軽量ブロックの製造であるが、これらは古墳時代の榛名山の噴火による軽石層の存在によるものである。遺跡の所在する白井地区には、中世の白井城跡や近世市場町の町並みが保存されており、白井宿として観光名所となっている。

子持村は東に赤城山、西に榛名山、北に子持山・小野子山と三方を山に囲まれ、関東平野の北端部に位置している。また北から利根川、北西から吾妻川が流下し、村の南端部でそれらが合流する。

山地から平野部への変換点にあたる村の南部では、利根川と吾妻川により形成された河岸段丘が発達している。これらの段丘面は形成年代の古い順に、雙林寺面、長坂面、西伊熊面、白井面、浅田面と呼ばれている。白井遺跡群は、利根川と吾妻川の合流点にほど近い、利根川右岸の白井面上に立地している。ちなみに、長坂面の南端に白井城の本丸が、雙林寺面には黒井峯遺跡が立地している。

白井遺跡群付近の白井面は、標高190~210m前後で、利根川の現在の河床からの比高は15mほどである。上位段丘の長坂面との比高差は概ね10mほどで、全体にほぼ平坦であり、北から南へ向けて緩やかに傾斜している。

この白井遺跡群の立地する白井面は、面積が約100haである。この面には河川がなく、長坂面との段丘崖よりに湧水点が1カ所確認されているが、比較的水に乏しい。現在では、戦後に開発された一部の水田を除いて、他のほとんどの部分は畑として利用されている。



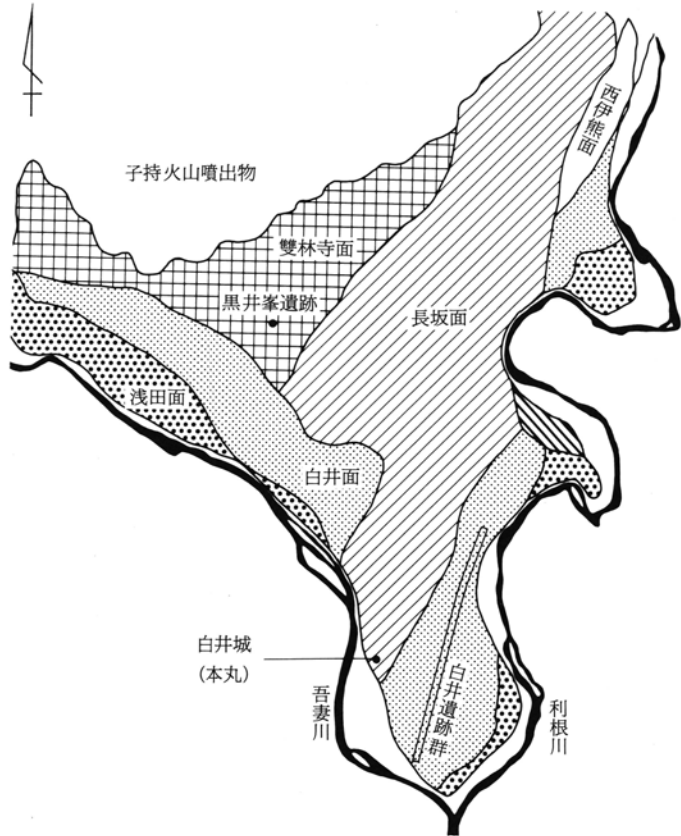
第3図 遺跡位置図

(S = 1 : 20万)

白井面の形成された年代は、段丘礫層上に浅間山起源の浅間一板鼻黄色軽石 (As-YP) が部分的に認められることから、約1万4千年前頃に離水したものと考えられる。

この地域はその後、古墳時代になって2度の火山災害に見舞われた。6世紀初頭の榛名山の噴火に伴う、火山灰と火砕流の堆積物 (Hr-FA) が、白井二位屋遺跡で約40cm認められる。この火山灰は遺跡群の北側に行くにしたがって薄くなり、白井北中道遺跡では約8cm認められる。

榛名山の6世紀中葉の噴火では、軽石と火山灰が降下しており (Hr-FP)、白井二位屋遺跡で約40cm堆積している。これはFAとは逆に、遺跡群の北側に行くにしたがって厚くなり、白井北中道遺跡では最大190cm堆積している。なお、白井遺跡群は噴火口から東北東へ約10kmの位置に所在している。



第4図 段丘面分類図 (文献：『子持村誌上巻』) (S = 1 : 50,000)

## 第2節 周辺の遺跡

本報告書では中世および近世の遺構・遺物を扱っているため、周辺の遺跡については特に同時期のものを中心に取り上げることとする。

白井遺跡群のすぐ西側に白井城が位置する。この城の遠構の外側に鯉沢バイパスが通過するのである。白井城は利根川と吾妻川の合流点にほど近い、吾妻川に面した断崖上に築かれている。全体の構造は、吾妻川と北遠構および東遠構で区切られた三角形を呈した梯郭式の城である。中央部に本丸があり、高さ3～4mの土塁で囲まれている。北側の中央に桁形門の跡が現在も残っている。本丸から北へ、二の丸・三の丸・北郭があり、その間に堀切りが存在する。

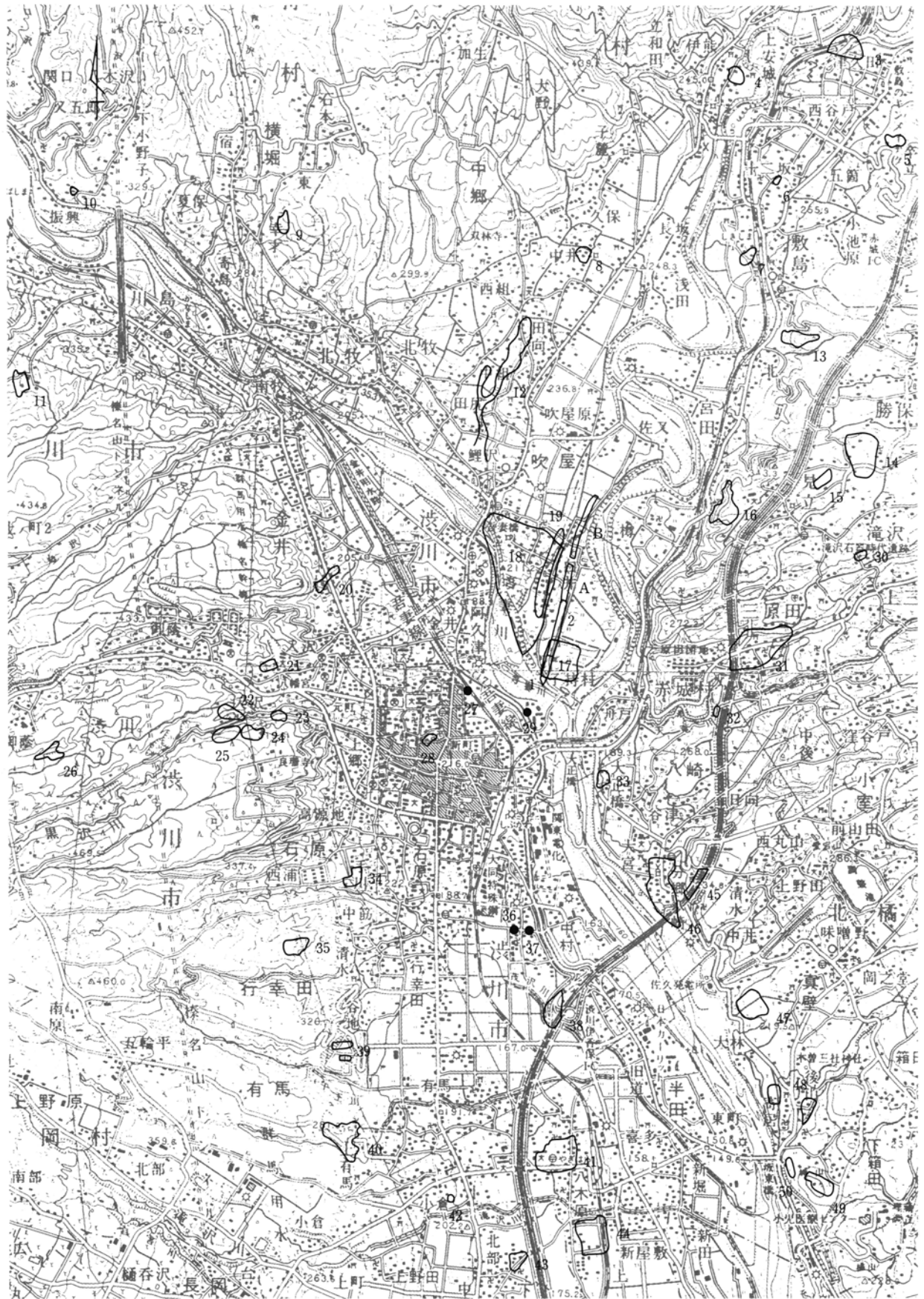
築城年代は不明であるが、享徳の乱 (1454年) の前後 (15世紀中頃) に、長尾景仲によって築城されたと考えられている。白井は越後と上野を結ぶ交通の要地であり、両国の守護である山内上杉氏の被官として長尾氏が入部していた。その後戦国の時代の

中で武田氏、北条氏などに属するが、天正18年 (1590) に開城している。江戸時代に入ると、本多氏が白井城主となるが、元和9年 (1623) 本多紀貞の病没により白井城は廃城となる。

周辺には白井城を囲むようにして数多くの城や砦が造られている。特に白井城からみた利根川の対岸の崖上には、南北に長尾氏の属城や砦群が連なっている。

白井城の総郭内の段丘崖と東遠構に挟まれた地区には、「白井宿」と呼ばれている近世の町並みが残っている。当初は白井城の城下町として成立したものが、廃城後に市場町として栄え、この地域の中心として重要な位置を占めていた。

白井遺跡群の吾妻川を挟んだ対岸には東町関下遺跡がある。この遺跡は白井遺跡群と同様に、鯉沢バイパス建設に伴って調査された遺跡である。その結果、近世前期の洪水層下から水田が、天明3年 (1783) の浅間山の噴火に伴う泥流層下から畠が検出されている。



第5図 周辺の遺跡

(S = 1 : 50,000)

周辺遺跡一覧表

番号	名称 (別称)	所在地	立地	現況	遺構・遺物等	年代	築・在城者 (推定伝承)	文献
A	白井丸岩遺跡	北群馬郡子持村白井	平地	道路	土坑、墓壇	中世～近世		本報告書
B	白井北中道遺跡	北群馬郡子持村白井	平地	道路	堀、溝、土坑、墓壇、畠跡	中世～近世		本報告書
1	白井二位屋遺跡	北群馬郡子持村白井	平地	道路	堀、池、土坑、墓壇	中世～近世		1
2	白井南中道遺跡	北群馬郡子持村白井	平地	道路	堀、土坑、墓壇	中世～近世		1
3	津久田城	勢多郡赤城村津久田	崖端	山林、畠、田	堀、土居、腰郭	16世紀	長尾氏 狩野氏	7～9
4	伊熊の砦	北群馬郡子持村伊熊	崖端	畠、社地	土居、堀	16世紀	荒木氏	8、9
5	津久田の砦	勢多郡赤城村津久田	山	山林	堀切、土居	16世紀		8、9
6	六郎兵衛屋敷	勢多郡赤城村津久田	平地	宅地、畠	堀			8、9
7	猫の寄居	勢多郡赤城村敷島	崖端	宅地、畠				8、9
8	白井上城	北群馬郡子持村上白井	山脚	畠、宅地	五輪塔	15世紀	白井長尾氏	8、9
9	戸隠山烽火台 (戸隠権現の砦)	北群馬郡子持村横堀	山頂	山林	土居、腰郭	16世紀	白井長尾氏	9
10	金比羅山の砦	北群馬郡小野上村宮原	傾斜地	畠	石垣		飯塚氏	
11	川島中祖遺跡	渋川市川島馬場	平地	畠	馬場跡、五輪塔	室町時代?		11
12	白井遠堀	北群馬郡子持村中郷	窪地	畠、田		16世紀	白井長尾氏	8、9
13	猫城(猫山城)	勢多郡赤城村敷島	山	山林	腰郭、戸口	16世紀	牧和泉守	8、9
14	勝保沢城	勢多郡赤城村勝保沢	崖端	山林、畠、宅地、寺院	堀、土居、戸口	16世紀	斉藤加賀守	8、9
15	鳥山屋敷	勢多郡赤城村見立	平地	畠	堀切	16世紀	鳥山十兵衛	1
16	見立城(見城) (不動山城)	勢多郡赤城村見立	崖端	山林、畠	堀、土居、戸口、腰郭、 竪堀、堀切	16世紀	長尾氏	2 6～9
17	仁居谷城 (二位屋城)	北群馬郡子持村二居谷	平地	畠、田	堀、土壇		白井常忠	1、8、9
18	白井城	北群馬郡子持村白井	崖端	畠、田、宅地等	堀、土居、櫓台、石垣、 土橋、櫓形戸口	15～16世紀	白井長尾氏 上杉定昌 本田氏	2～4 7～9
19	白井宿	北群馬郡子持村白井	平地	宅地	市場町	近世		10
20	金井の寄居	渋川市寄居	丘陵	畠	堀切、戸口			8、9
21	袋山館	渋川市入沢	丘の脚	校地				8、9
22	入沢城	渋川市入沢	丘陵	畠、宅地	堀切、土居	16世紀	入沢氏	8、9
23	引越山の砦	渋川市入沢	残丘	畠	戸口			8、9
24	鑑山の砦	渋川市入沢	丘陵	畠、山林	堀切、土居、戸口、櫓台			8、9
25	渋川古城址	渋川市入沢	丘陵	畠	五輪塔、板碑		渋川義顕	11
26	高館山の砦	渋川市折原	山	山林				8、9
27	坂之下城跡	渋川市坂之下	平地	宅地	溝	15世紀		15
28	渋川の寄居	渋川市寄居	崖端	寺、宅地	堀切、戸口	16世紀	渋川地衆	8、9
29	東町関下遺跡	渋川市東町	平地	道路	水田、畠	近世		21
30	滝沢館	勢多郡赤城村滝沢	崖端	山林、畠、宅地	堀、土居		木暮氏か	8、9
31	三原田城	勢多郡赤城村三原田	丘陵	宅地、畠、 寺社境内	堀、戸口、腰郭、櫓台、 堀切	15～16世紀	三原田義高 永井氏	7、8、9
32	房谷戸の砦	勢多郡北橘村八崎	崖端	畠	堀、堀切		神庭圖所	19
33	八崎の寄居	勢多郡北橘村八崎	崖端	宅地	堀			8、9
34	石原西浦遺跡	渋川市石原	丘陵	宅地、畠	墓壇、井戸、暗渠、建物 址	17～18世紀	大島氏	12
35	行幸田城 (三角城)	渋川市行幸田	崖端	畠、山林	堀切、戸口、腰郭	16世紀		7～9
36	中村日焼田遺跡	渋川市中村	平地	道路	畠、水田、道	天明泥流下		16
37	中村久保田遺跡	渋川市中村	平地	道路	畠、水田、道	天明泥流下		17
38	中村遺跡	渋川市中村	平地	高速道路	竪穴状遺構、地下式土坑、 井戸、墓壇、溝 畠、道、水田、用水	中世～近世 天明泥流下		13
39	三重貝戸の砦	渋川市行幸田	丘陵	畠、山林	のろし台、腰郭、 別に砦が並ぶ			20

## 第2章 地理的・歴史的環境

番号	名称 (別称)	所在地	立地	現況	遺構・遺物等	年代	築・在城者 (推定伝承)	文献
40	有馬城	渋川市有馬	崖端	畠、山林	堀、腰郭、土居、戸口			8、9
41	八木原城	渋川市八木原	平地	校地、宅地	土居、根小屋	16世紀	八木原氏	22
42	小倉屋敷	北群馬郡吉岡村小倉	平地	宅地	堀、土居			7
43	見城	北群馬郡吉岡村下野田	平地	高速道路				7
44	剣城	渋川市半田	平地	畠	堀、土居、戸口、石垣			7～9
45	分郷八崎遺跡	勢多郡北橋村分郷八崎	丘陵	高速道路	柵列、掘立柱建物、土坑、竪穴状遺構、墓	中世～近世		14
46	八崎城 (不動山城)	勢多郡北橋村分郷八崎	崖端	宅地、畠、田	堀、暗渠、本丸	16世紀	長尾氏	2、4、5 6、8、9
47	塚原城	勢多郡北橋村真壁	丘陵	畠	堀			23
48	真壁城 (同寄居)	勢多郡北橋村真壁	丘陵	畠	堀、土居、戸口 堀、土居			2、3 6～9
49	箱田城	勢多郡北橋村下箱田	丘陵	山林 保養施設	堀、土居、戸口、檣台		箱田地衆	6～9
50	下箱田向山遺跡	勢多郡北橋村下箱田	崖端	道路	溝、土坑、墓、柵列	中世以降		18

### —文献—

- (1) 『白井遺跡群—中世編—』 一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (2) 『上州故城墨記』 著者不明 宝暦(1751～1764)頃
- (3) 『上野志』 毛呂權造 安永3年(1774)
- (4) 『上野国誌』 栗原信充 万延元年(1680)
- (5) 『上野風土記』 西田美英 江戸時代後期
- (6) 『前橋風土記』 古市剛(撰) 貞享元年(1684)
- (7) 『上野国郡村誌』 群馬県文化事業振興会 1981
- (8) 『群馬県古城塁址の研究 下巻』 山崎一 1972
- (9) 『日本城郭大系 第4巻 茨城、栃木、群馬』 山崎一他 1979
- (10) 『子持村誌 上巻』 子持村 1987
- (11) 『群馬県遺跡台帳II 西毛編』 群馬県教育委員会 1972
- (12) 『西浦遺跡』 渋川市発掘調査報告書第9集 渋川市教育委員会 1986
- (13) 『中村遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 KCII 渋川市教育委員会 1986
- (14) 『分郷八崎遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 北橋村教育委員会 1986
- (15) 『坂之下遺跡』 渋川市発掘調査報告書第20集 渋川市教育委員会 1988
- (16) 『石原東・中村日焼田遺跡』 渋川市発掘調査報告書第26集 渋川市教育委員会 1991
- (17) 『半田中原・南原遺跡』 渋川市発掘調査報告書第41集 渋川市教育委員会、群馬県企業局 1994
- (18) 『下箱田向山遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (19) 『房谷戸遺跡I』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (20) 『行幸田山遺跡』 渋川市発掘調査報告書第12集 渋川市教育委員会 1987
- (21) 『年報16』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
- (22) 『渋川市誌 第二巻』 渋川市誌編さん委員会 1993
- (23) 『北橋村埋蔵文化財分布地図(改訂版)』 北橋村教育委員会 1995

## 第 3 章

### 白井丸岩遺跡

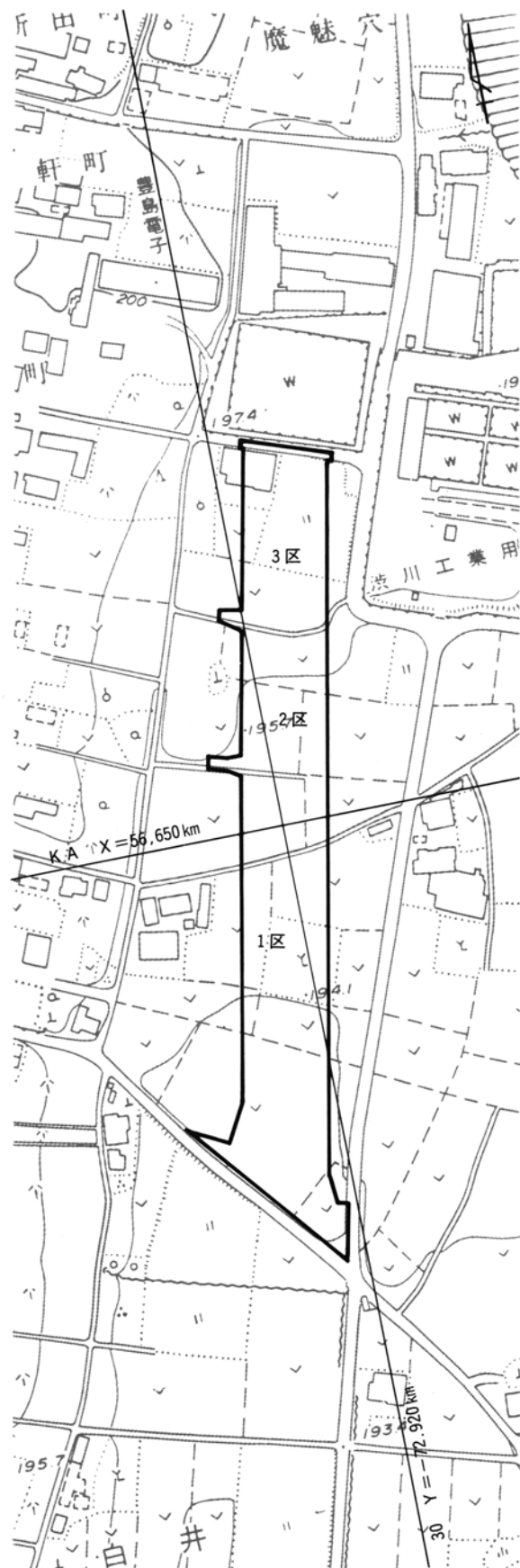
## 第1節

### 白井丸岩遺跡F P上面の概要

白井丸岩遺跡は白井宿の東側に位置する。白井城の東の木戸口の外側で、城内から渡屋の渡しへ至る道の北側にあたる。1区は調査の工程上、北部・南西部・南東部の三分割調査となった。同じく3区は北西部の一部が別途調査となっている。

1区では多数の土坑を検出した。北部では小さめの円形～楕円形の土坑が多い。南部は新しい攪乱が多く土坑の形状がはっきりしないものもある。人骨が出土し墓壇と確認できたものが3基あった。また、南部では性格不明のピット列を5列確認している。2区は南部と北辺に溝状土坑あり、その中間は長方形や楕円形の土坑が主である。人骨の出土した土坑は1基である。3区は、1区・2区に比べて円形～楕円形の土坑が少なくなっている。各区を通じて溝状土坑を検出したが、1区の南部以外は走向がほぼ一致し、北から東へ $13^{\circ}\sim 17^{\circ}$ 傾いたものとそれに直行するものがほとんどで、規則性がみられる。1区南部では北から東へ $40^{\circ}$ 前後傾いたものとそれに直行するものが多い。

人骨と遺物の出土した墓壇は、遺物から中世のものと考えられる。その他の土坑の年代は、覆土中の遺物が江戸時代後期(18世紀後半～19世紀前半)の陶磁器類に集中することから、近世のものが大半と考えられる。ただし、近代や現代でも畑の隅にイモ等を貯蔵する穴を掘っていたという聞き取り調査の結果があることから、それらの土坑が混じっていると思われる。

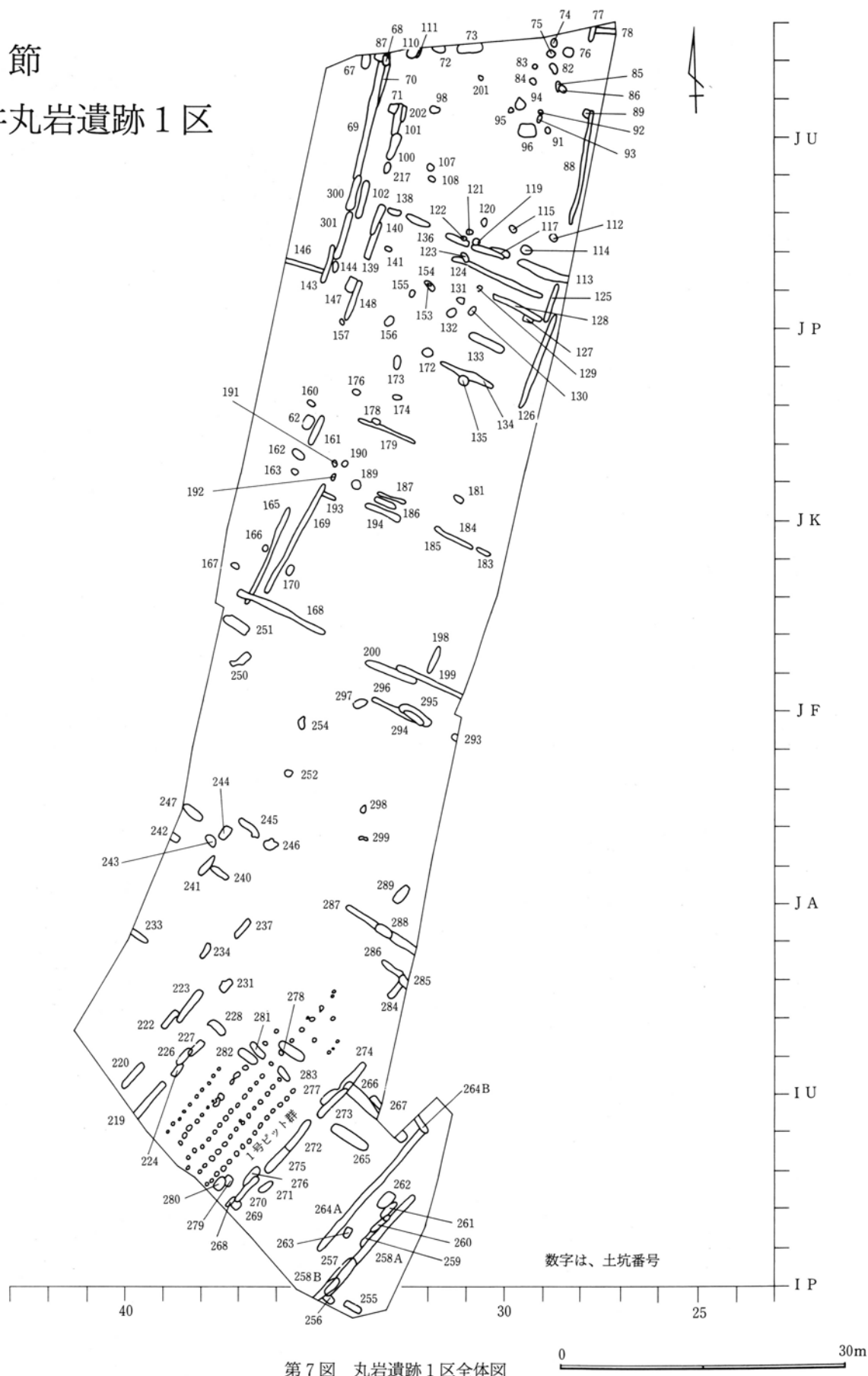


第6図 丸岩遺跡全体図 (S=1:2,500)



第2節

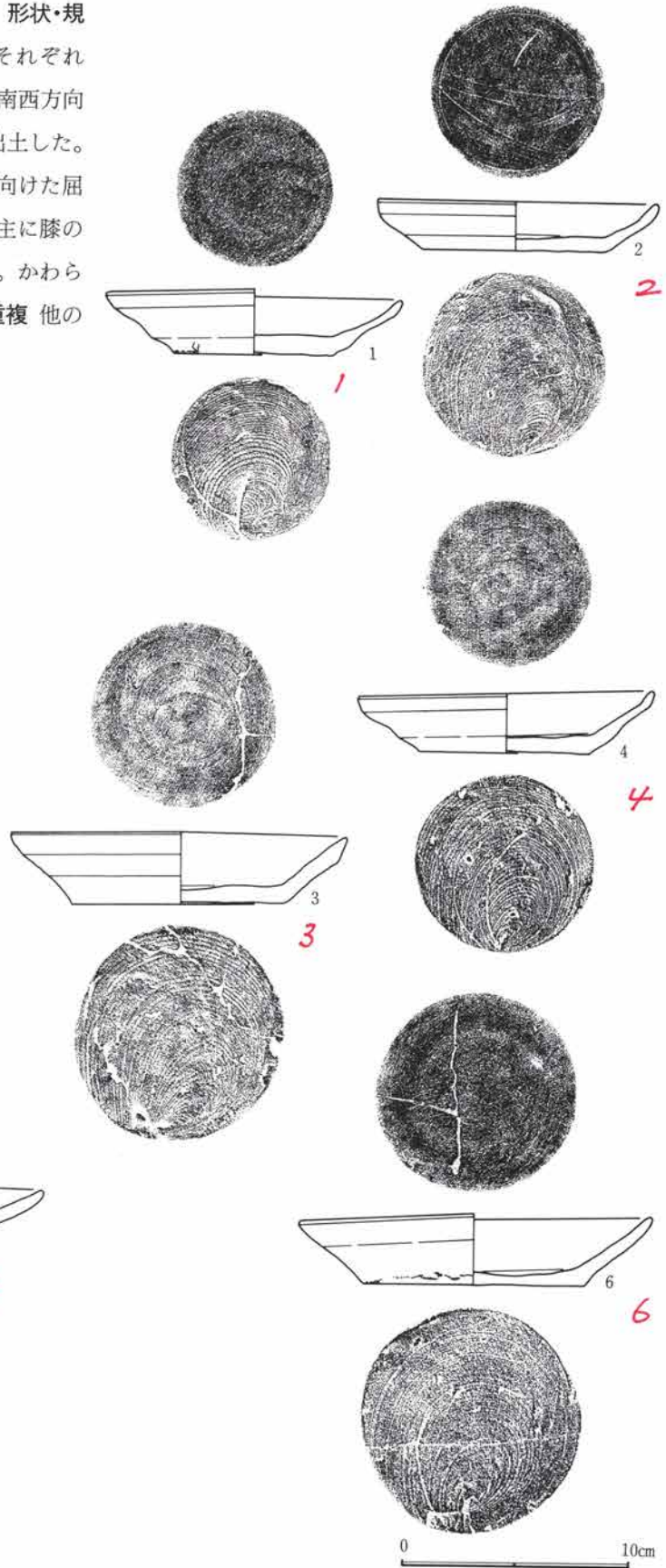
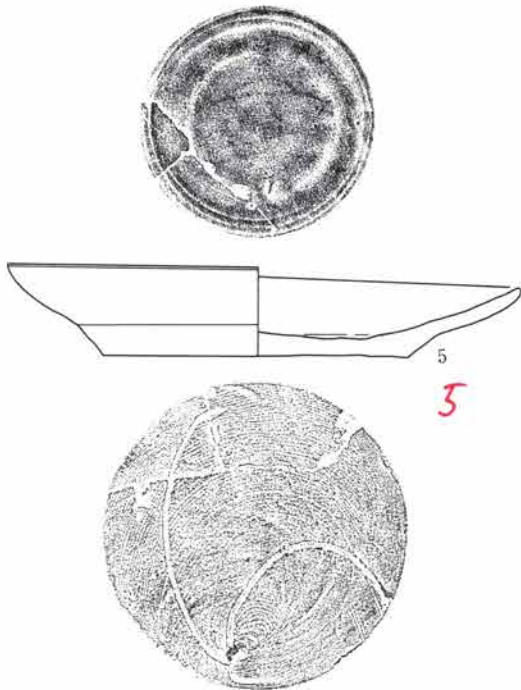
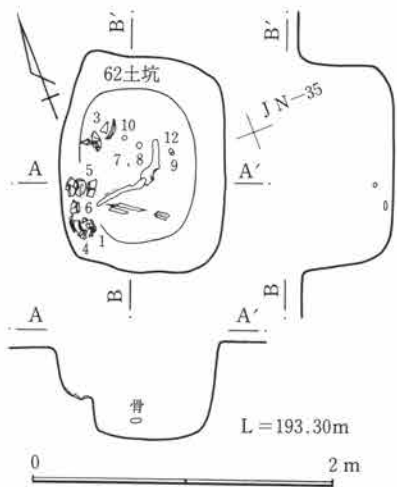
白井丸岩遺跡1区



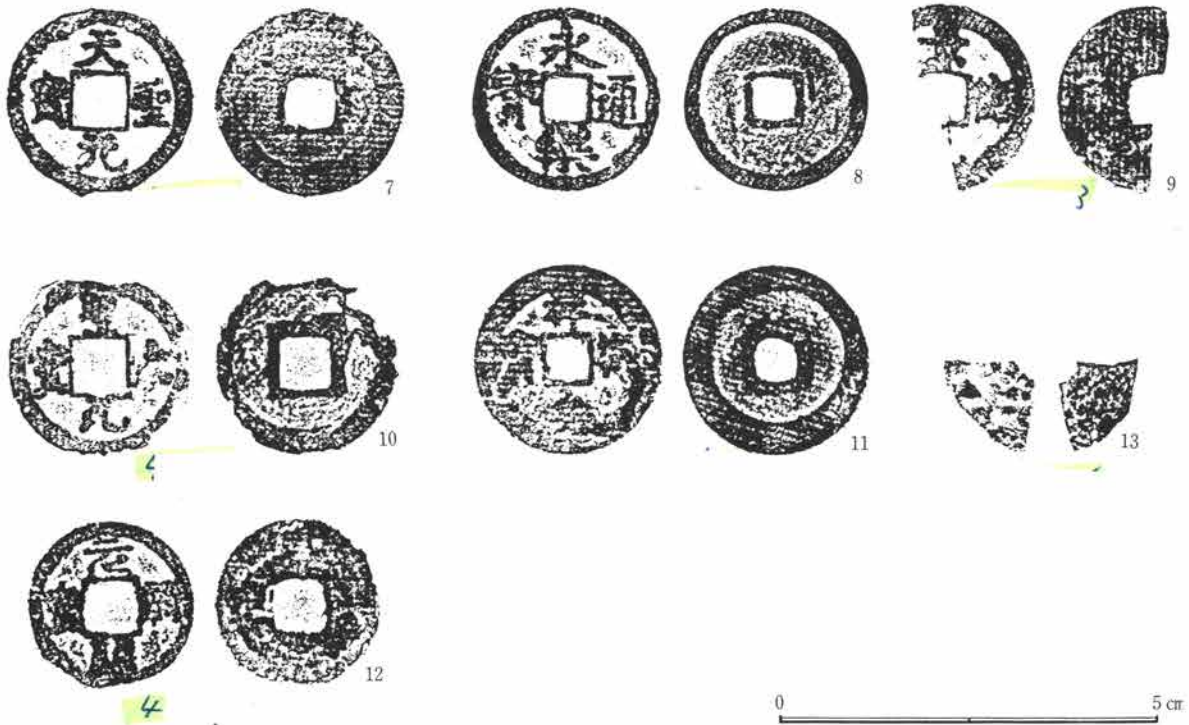
第7図 丸岩遺跡1区全体図

第3章 白井丸岩遺跡

62号土坑 位置 JM-35、1区中央部。形状・規模 楕円形を呈し、短軸・長軸・深さは、それぞれ1.1×1.4×0.6mである。長軸は北北東-南南西方向である。遺物 人骨・かわらけ・古銭が出土した。その残存状況から頭を北にして、顔を西に向けた屈葬である。性別・年齢は不明。かわらけは主に膝の辺りで出土し、古銭は胸の辺りで検出した。かわらけから年代は15世紀ころと考えられる。重複 他の土坑との重複関係はない。分類 A



第8図 62号土坑平・断面図及び出土遺物



第9図 62号土坑出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
62土-1	かわらけ 皿	+24	口 13.0 底 7.1 高 3.0	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整 内面 体部轆轤整形、底部指撫で	①細砂粒、粗砂粒 ②普通 ③橙色	完形 15世紀
62土-2	かわらけ 皿	覆土	口 12.2 底 4.0 高 2.1	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整 内面 体部轆轤整形、底部指撫で	①粗砂粒、細礫 ②普通 ③橙色	ほぼ完形 15世紀
62土-3	かわらけ 皿	+7	口 14.8 底 9.4 高 3.1	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整 内面 体部轆轤整形、底部指撫で	①細砂粒、粗砂粒 ②普通 ③明褐色	完形 15世紀
62土-4	かわらけ 皿	+27	口 13.1 底 7.5 高 2.8	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整 内面 体部轆轤整形、底部指撫で	①細砂粒、粗砂粒 ②普通 ③橙色	完形 15世紀
62土-5	かわらけ 皿	+17	口 20.4 底 12.0 高 3.5	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整 内面 体部轆轤整形、底部指撫で	①細砂粒、粗砂粒 ②普通 ③橙色	完形 15世紀
62土-6	かわらけ 皿	+24	口 15.5 底 9.7 高 3.1	外面 体部轆轤整形、底部左回転糸切り未調整 内面 体部轆轤整形、底部指撫で	①細砂粒、粗砂粒 ②普通 ③橙色	ほぼ完形 15世紀
62土-7	古銭	+1	径 2.5 重 3.2	天聖元寶、穿の径7mm		完形
62土-8	古銭	+1	径 2.5 重 2.2	永樂通寶、穿の径6mm		完形
62土-9	古銭	底面 直上	径 — 重 1.3	不明		1/2
62土-10	古銭	底面 直上	径 — 重 1.4	不明		完形
62土-11	古銭	覆土	径 2.5 重 3.3	不明、穿の径6mm		完形
62土-12	古銭	底面 直上	径 2.2 重 1.5	元□□寶、穿の径7mm		完形
62土-13	古銭	覆土	径 — 重 0.5	不明		1/4

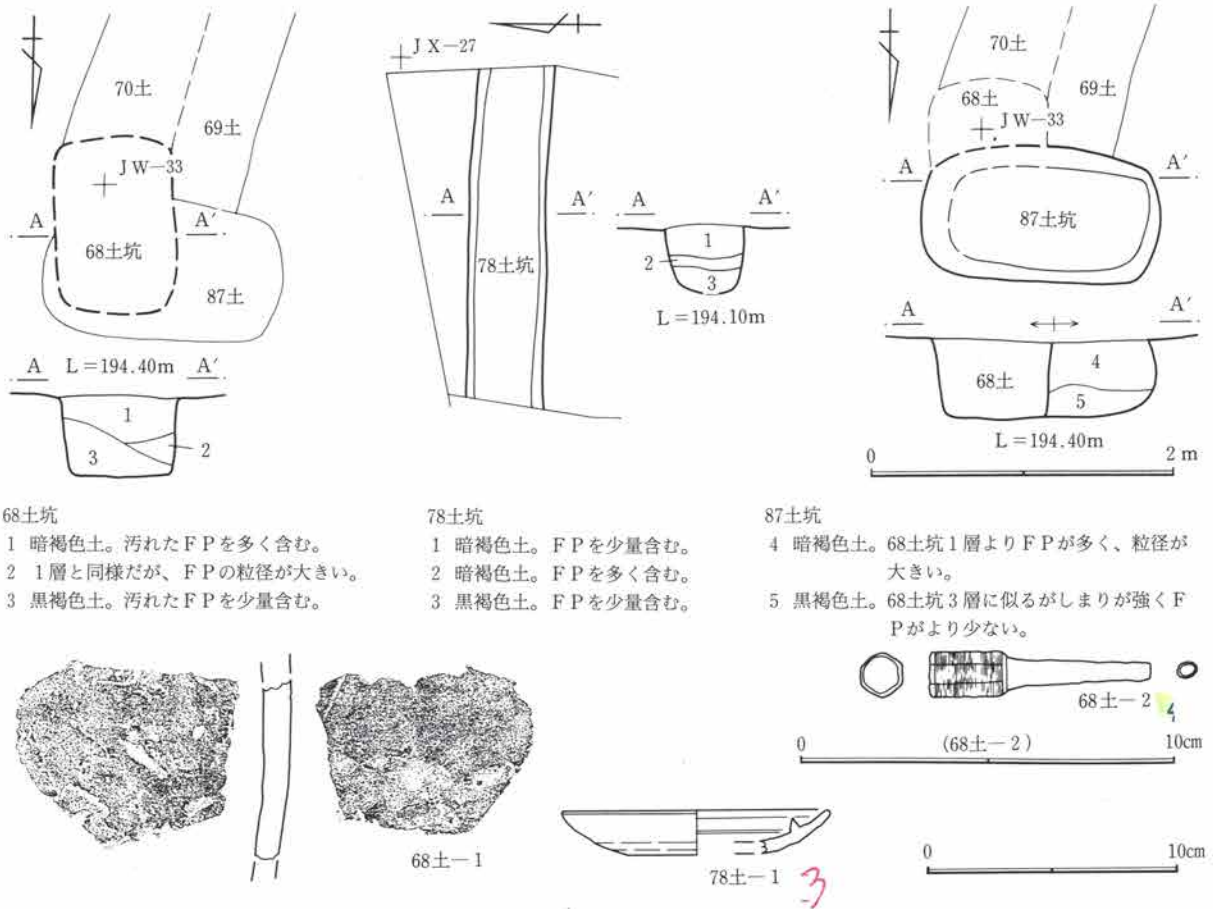
第3章 白井丸岩遺跡

**68号土坑** 位置 JV-34、1区北端部。形状・規模 重複が激しくはっきりした形状は不明だが、楕円形～隅丸方形と推定できる。短軸・長軸・深さは、それぞれ(0.8)×(1.0)×0.5mである。遺物 陶器の甕片とキセルの吸口が出土しているが、出土地点が明確でなく、87号土坑のもの可能性もある。重複 70号土坑と87号土坑と重複しており、87号土坑よりも新しい。分類 C

**78号土坑** 位置 JW-27、1区北東部。形状・規模 調査区の端に位置するため部分的な検出だが、溝

状を呈すると考えられる。短軸は0.5m、深さは0.4mである。埋没土 中位にFPを多く含む層を挟む。遺物 灯明皿の受け皿が出土している。重複 77号土坑より古い。分類 B1

**87号土坑** 位置 JV-34、1区北端部。形状・規模 楕円形を呈し、短軸・長軸・深さは、それぞれ0.9×1.6×0.5mである。長軸は東-西方向である。遺物 68号土坑で記載した遺物が、本土坑出土の可能性はある。重複 68号・69号・70号土坑と重複している。68号土坑より古い。分類 C

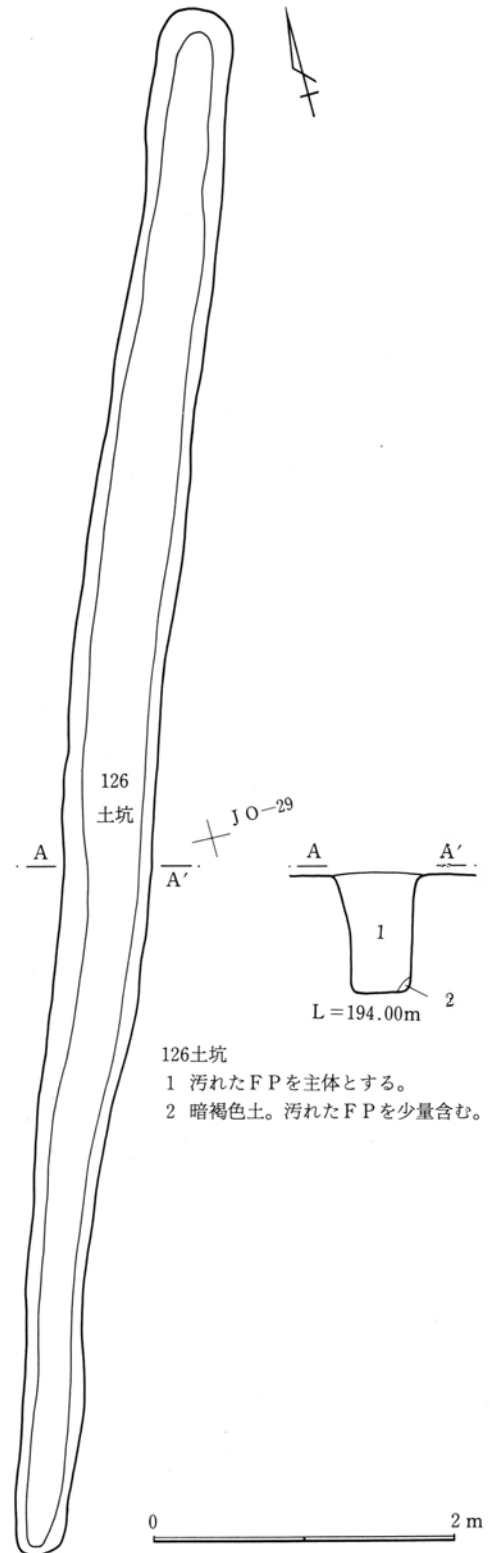
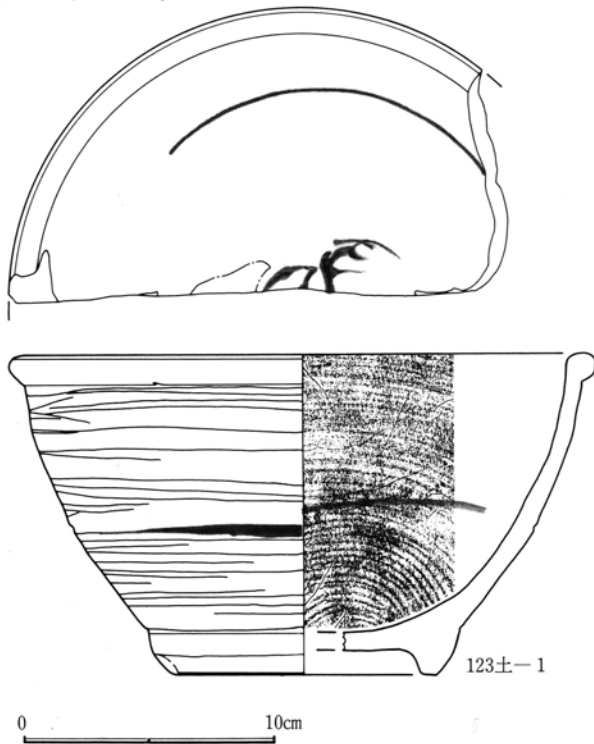
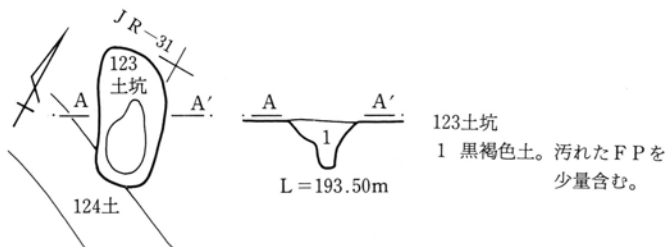


第10図 68号・78号・87号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
68土-1	知多陶器甕	覆土	口底高	内面 黒色。	錆釉	破片、中世87土出土の可能性あり
68土-2	金属器キセル吸口	覆土	最大径 1.2 最小径 0.4 長 5.9	羅字側六角柱、口側円形。鐵継目あり、色は黒味強い。羅字側の六角柱には横に細かな加飾の刻み目あり。錆色は少し黄緑がかる。	銅主材	完形 19C以降か
78土-1	不明陶器灯明皿受皿	覆土	口(10.6) 底(5.2) 高(1.7)	外面 口縁部以下袖拭い取る	錆釉	1/5

123号土坑 位置 JQ-31、1区中央部北寄り。形状・規模 楕円形。小さな土坑で、短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×0.9×0.3mである。遺物 唐津産と思われる片口が出土している。重複 124号土坑より新しい。分類 F

126号土坑 位置 JO-29、1区中央部北寄り。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×10.3×0.8mである。掘り込みはFP下面にまで達する。この土坑の延長上には、同じく溝状を呈する88号土坑がある。埋没土 表面の汚れたFPで埋まる。重複 なし。分類 B4



第11図 123号・126号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
123土 -1	不明 陶器 片口	覆土	口 (23.2) 底 (16.0) 高 12.6	外面 体部下半鉄釉、上半灰褐色の釉を施す。口縁端部無釉。白土掛けのための凹凸あり。 内面 灰褐色の釉を施す。底部に窯道具の跡あり。	鉄釉等	1/2

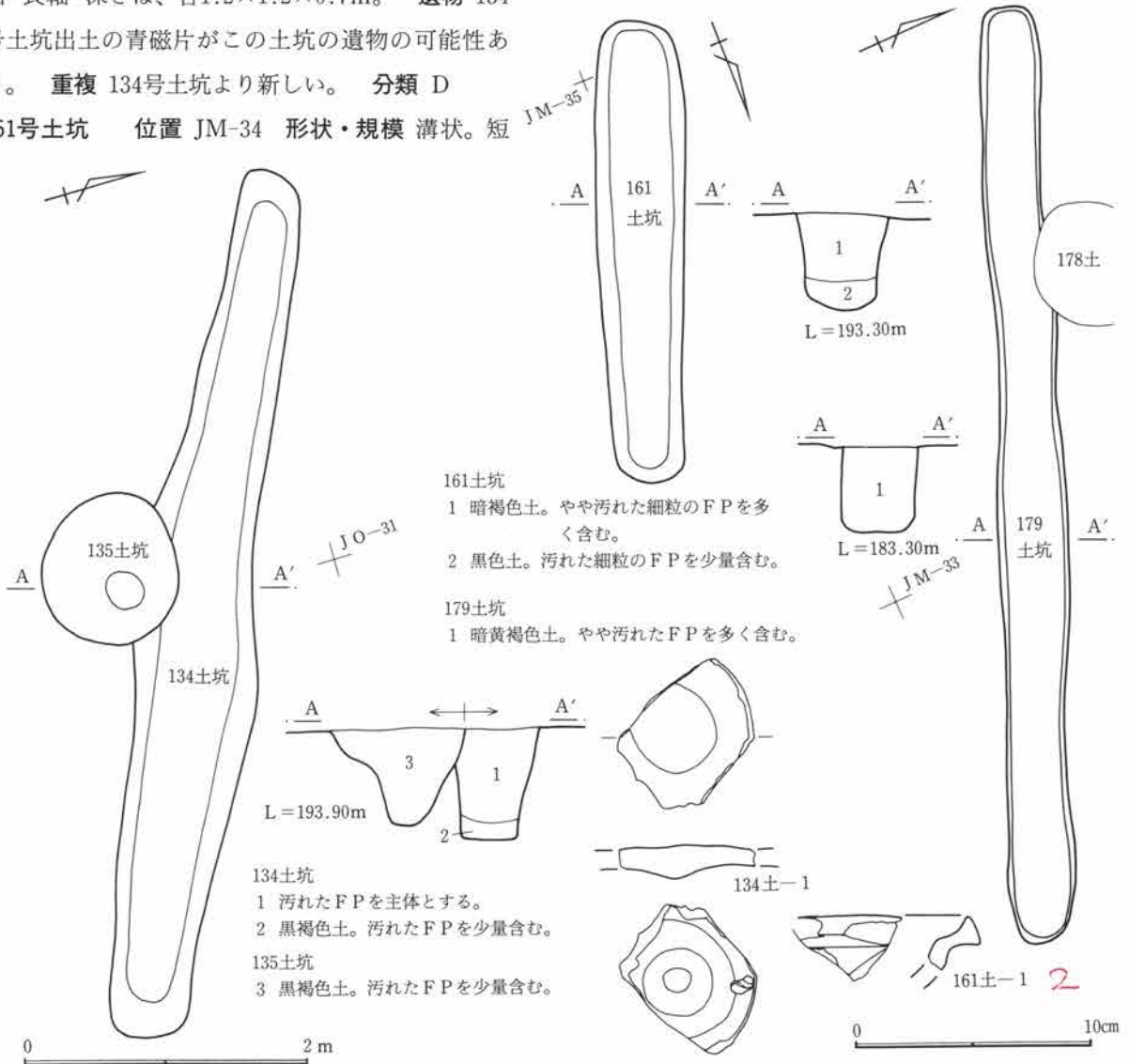
**134号土坑** 位置 JN-30、1区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、各0.9×6.1×0.8m。埋没土 FPを主体とするが、底部には厚さ約10cmの黒褐色土が堆積する。遺物 中国産の青磁片が出土。出土位置が不明確で135号土坑に伴う遺物の可能性もある。重複 135号土坑より古い。分類 B3

**135号土坑** 位置 JN-31 形状・規模 円形。短軸・長軸・深さは、各1.2×1.2×0.7m。遺物 134号土坑出土の青磁片がこの土坑の遺物の可能性あり。重複 134号土坑より新しい。分類 D

**161号土坑** 位置 JM-34 形状・規模 溝状。短

軸・長軸・深さは、各0.5×3.2×0.7m。埋没土 底部に約15cmの黒色土が堆積。遺物 17世紀代と思われる播り鉢の口縁部片が出土。分類 B1

**179号土坑** 位置 JM-33 形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、各0.5×6.5×0.6m。埋没土 FPを多く含む暗黄褐色土。重複 178号土坑より古い。分類 B2



第12図 134号・135号・161号・179号土坑平・断面図及び出土遺物

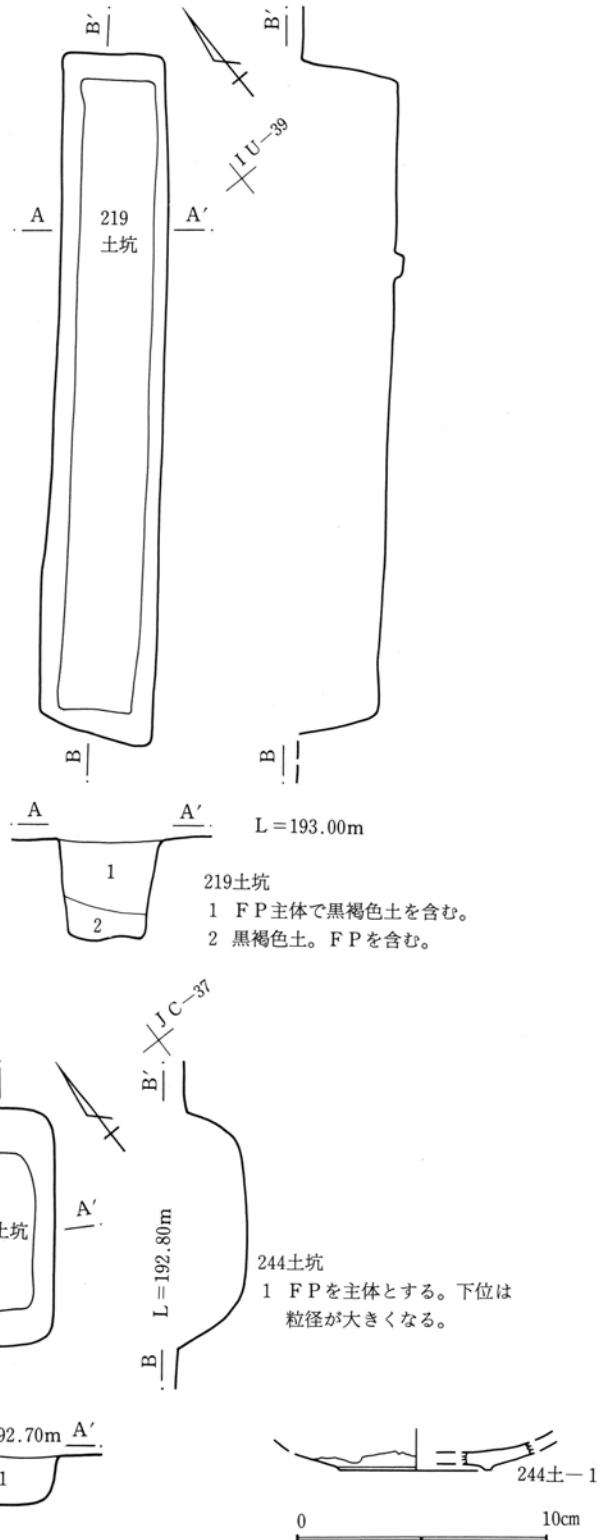
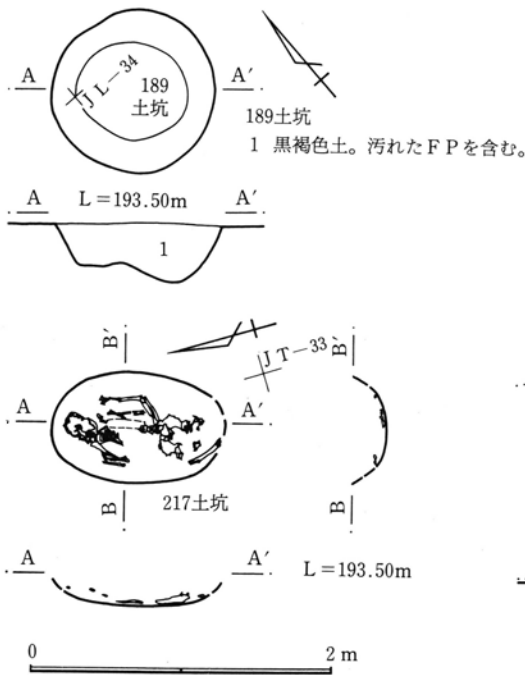
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
134土 -1	中国 青磁 不明	覆土	口 底 高	内面 中央部が盛り上がる。	青磁釉	底部破片 135土出土の 可能性あり
161土 -1	瀬戸・美濃 陶器 播り鉢	覆土	口 底 高	内外面とも施釉。	錆釉	破片 17c初～前 大窯末期

189号土坑 位置 JK-33、1区中央部。形状・規模 円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.0×1.1×0.4mである。埋没土 FPを含む黒褐色土。分類 D

217号土坑 位置 JT-33、1区北部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸は、それぞれ0.7×1.1mである。遺物 頭を北に向けた形で、人骨が出土した。成人の男性の可能性が大きい(P.152参照)。左右の腕の姿勢が異なる。脛骨は調査中に出土位置がやや動いてしまった。分類 A

219号土坑 位置 IT-39、1区南部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×4.5×0.6m。埋没土 底部に15cm程の黒褐色土が堆積し、その上位はFPを主体としている。分類 B3

244号土坑 位置 JB-37、1区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×1.6×0.3mである。埋没土 FP主体。遺物 陶器の皿片が出土。分類 C



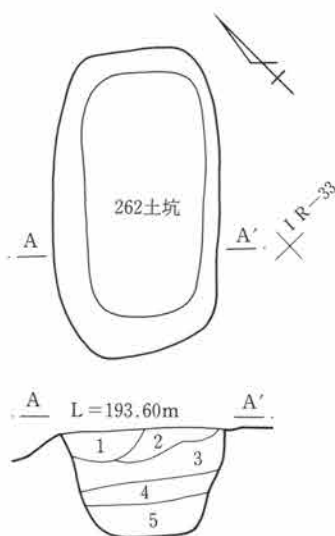
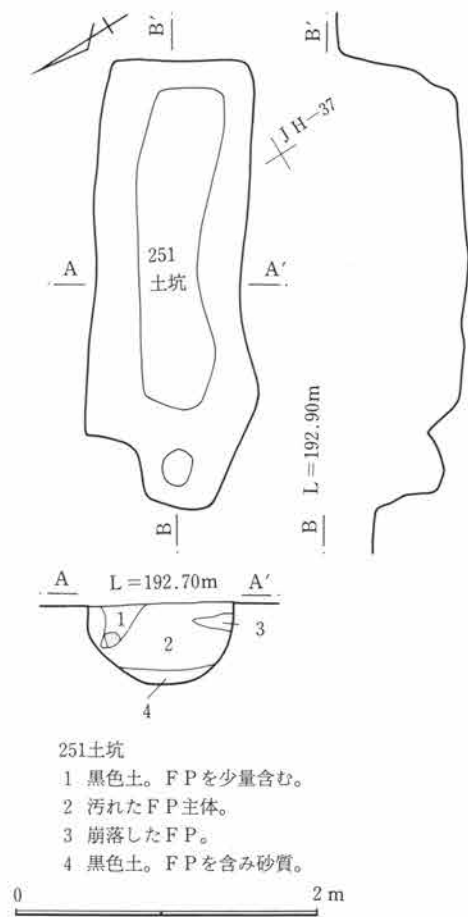
第13図 189号・217号・219号・244号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
244土-1	瀬戸・美濃 陶器 皿	覆土	口 底 高 — (6.0) —	内外面とも施釉。器面あれている。	長石釉	破片

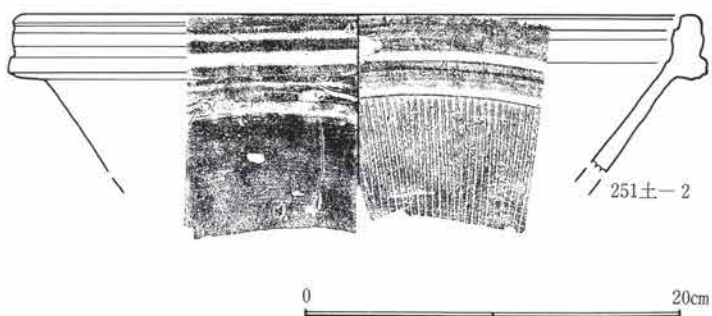
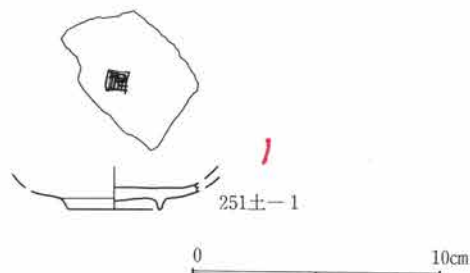
第3章 白井丸岩遺跡

**251号土坑** 位置 JH-37、1区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.0×2.9×0.6mである。張出し部分は別のピットの可能性あり。埋没土 底部に黒色土が堆積し、その上部はFPが主体となる。遺物 見込みに角福の銘がある磁器片と、堺・明石方面の播り鉢が出土している。分類 B3

**262号土坑** 位置 IR-33、1区南部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.1×2.0×0.7m。埋没土 下位から、FP主体→黒褐色土→FP主体→暗褐色土と互層になっている。分類 C



- 262土坑  
1 褐色土。径1～5cmの汚れたFP主体。  
2 暗褐色土。径1～3cmの汚れたFP主体。  
3 FP主体。径3～5cm。  
4 黒褐色土。径1cm大の汚れたFPを含む。ややしまりあり。  
5 FP主体。径1～3cm。



第14図 251号・262号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
251土 -1	肥前 磁器 不明	覆土	口 底 高 — — —	内面 見込み角福銘	染付	破片
251土 -2	堺・明石 焼締陶器 播鉢	覆土	口 底 高 (18.3) — —	外面 口縁部直下から横位篋削り。 内面 口縁部播り目撫で消す。	①粗砂粒、細礫 ②良好 ③赤褐色	破片 18c後～ 19c前

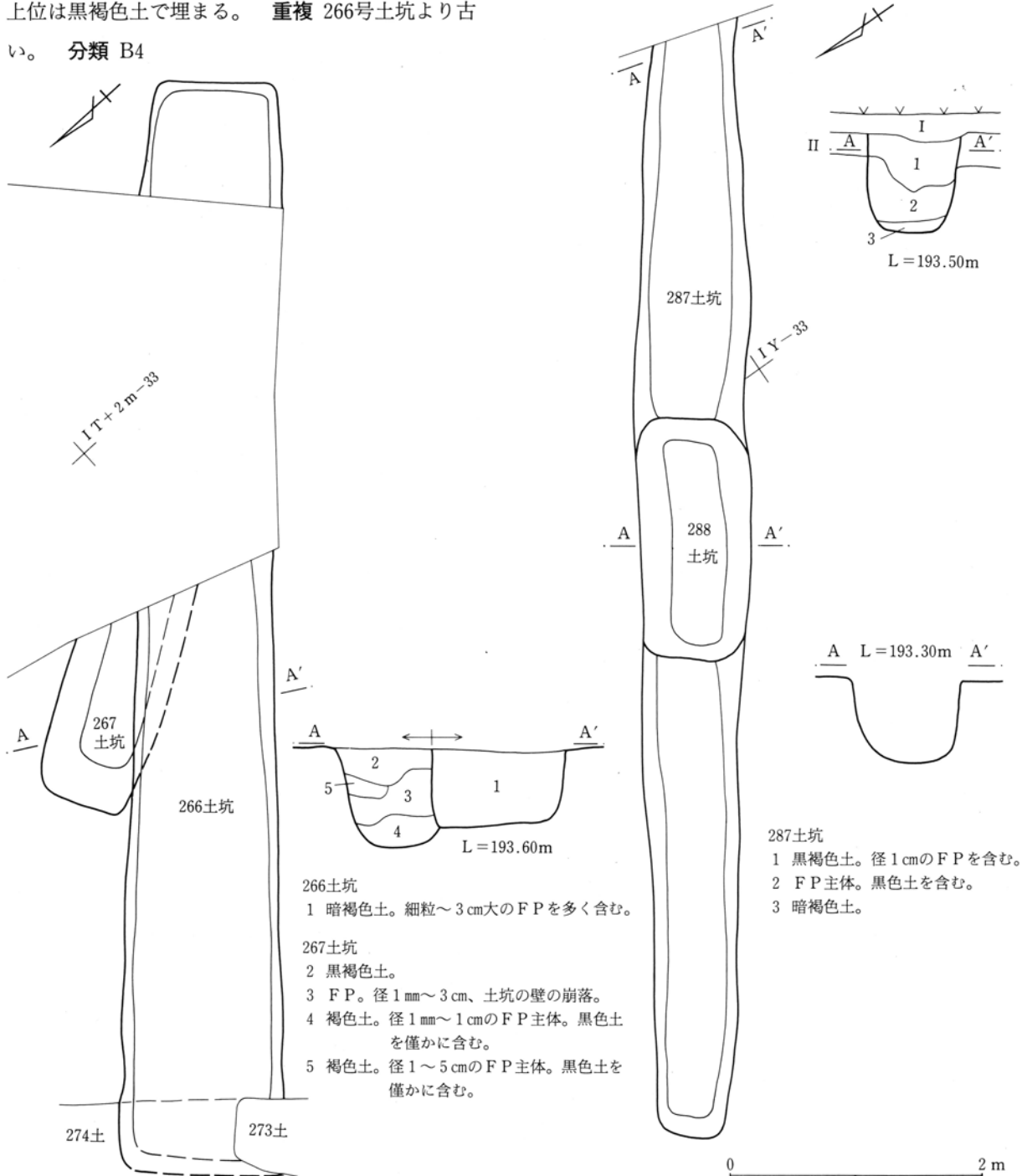


266号土坑 位置 IT-33、1区南部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、各1.2×(8.6)×0.6m。底面は西寄りではFP下面におよぶが、東側ではFP中である。埋没土 FPを多く含む暗褐色土。重複 267号土坑より新しい。分類 B4

267号土坑 位置 IT-33 形状・規模 長方形。短軸と深さは、ともに0.8m。埋没土 下位は褐色土、上位は黒褐色土で埋まる。重複 266号土坑より古い。分類 B4

287号土坑 位置 IX-32 形状・規模 溝状。短軸と深さは、ともに0.8mで、長さは8.7mを超える。埋没土 中位にFP主体の層を挟む。重複 288号土坑と重複するが、関係は不明。分類 B1

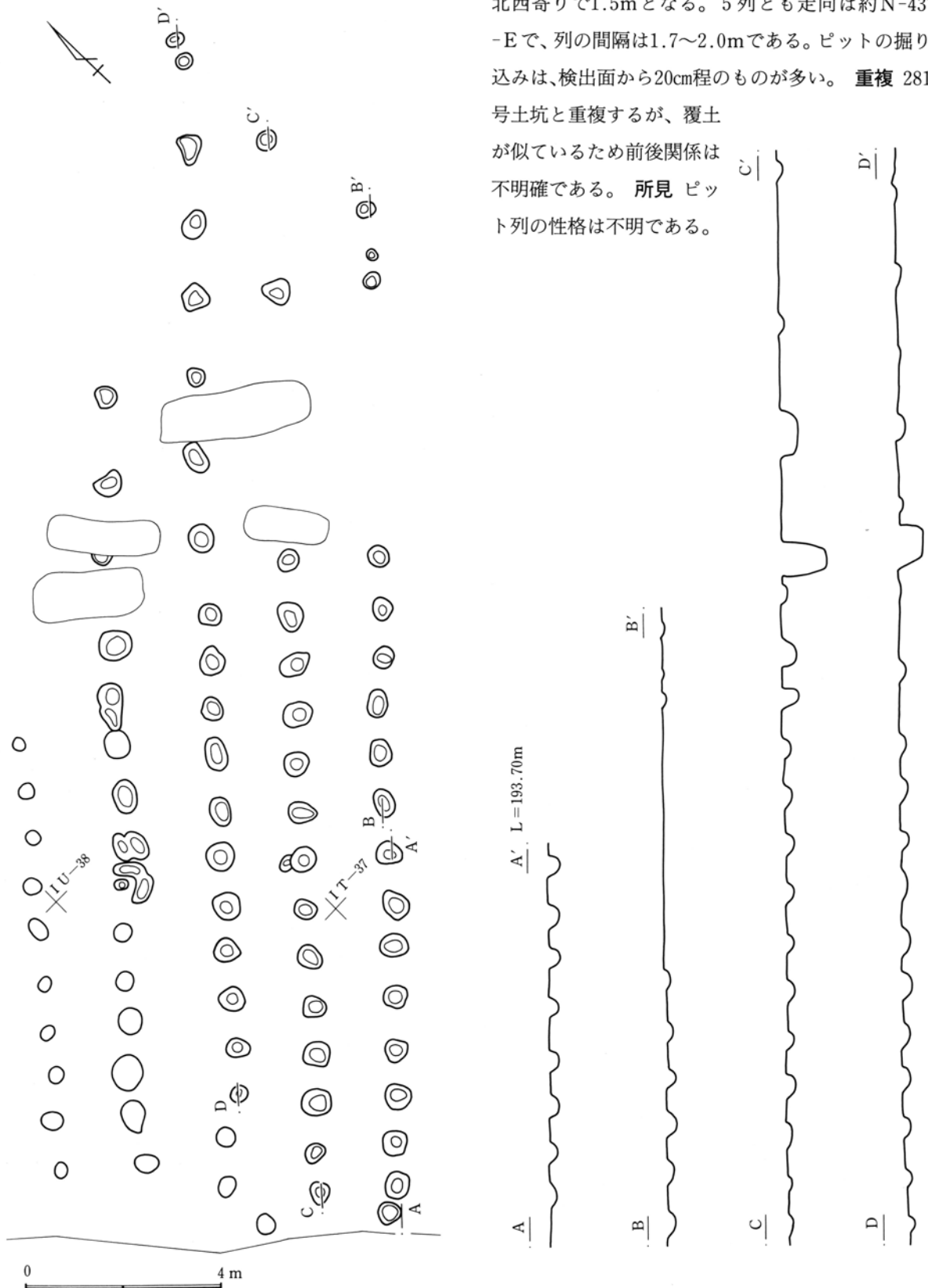
288号土坑 位置 IY-33 形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各0.9×1.9×0.7m。重複 287号土坑。分類 B'



第15図 266号・267号・287号・288号土坑平・断面図

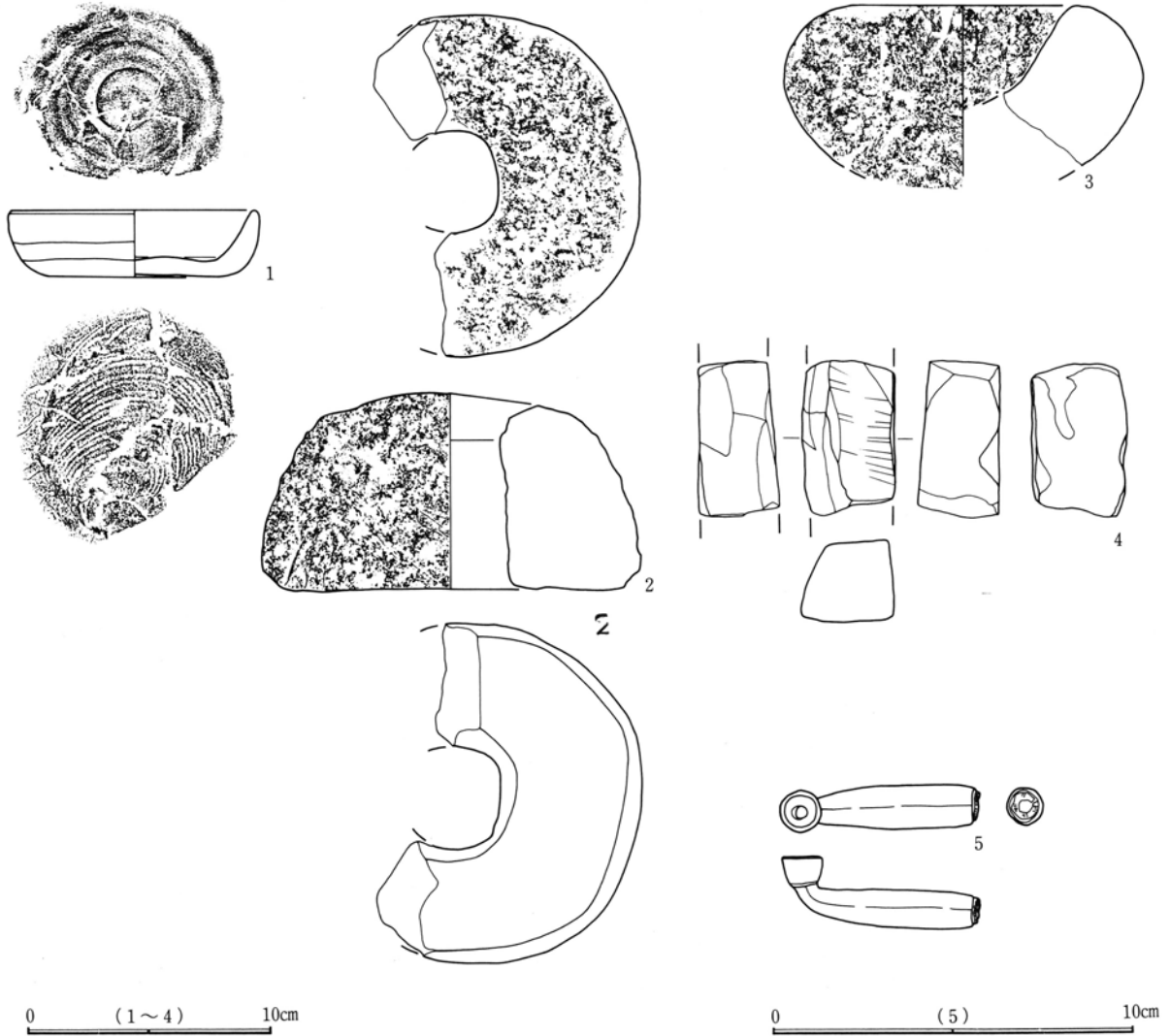
1号ピット群 位置 IT-37、1区南部。形状・規模 大きさが30~50cmのピットの連続する列を5

列検出した。最も長い列では、24mにわたって21個のピットが連なり、ピットの間隔は南西寄りで1m、北西寄りで1.5mとなる。5列とも走向は約N-43°-Eで、列の間隔は1.7~2.0mである。ピットの掘り込みは、検出面から20cm程のものが多い。重複 281号土坑と重複するが、覆土が似ているため前後関係は不明確である。所見 ピット列の性格は不明である。



第16図 1号ピット群平・断面図

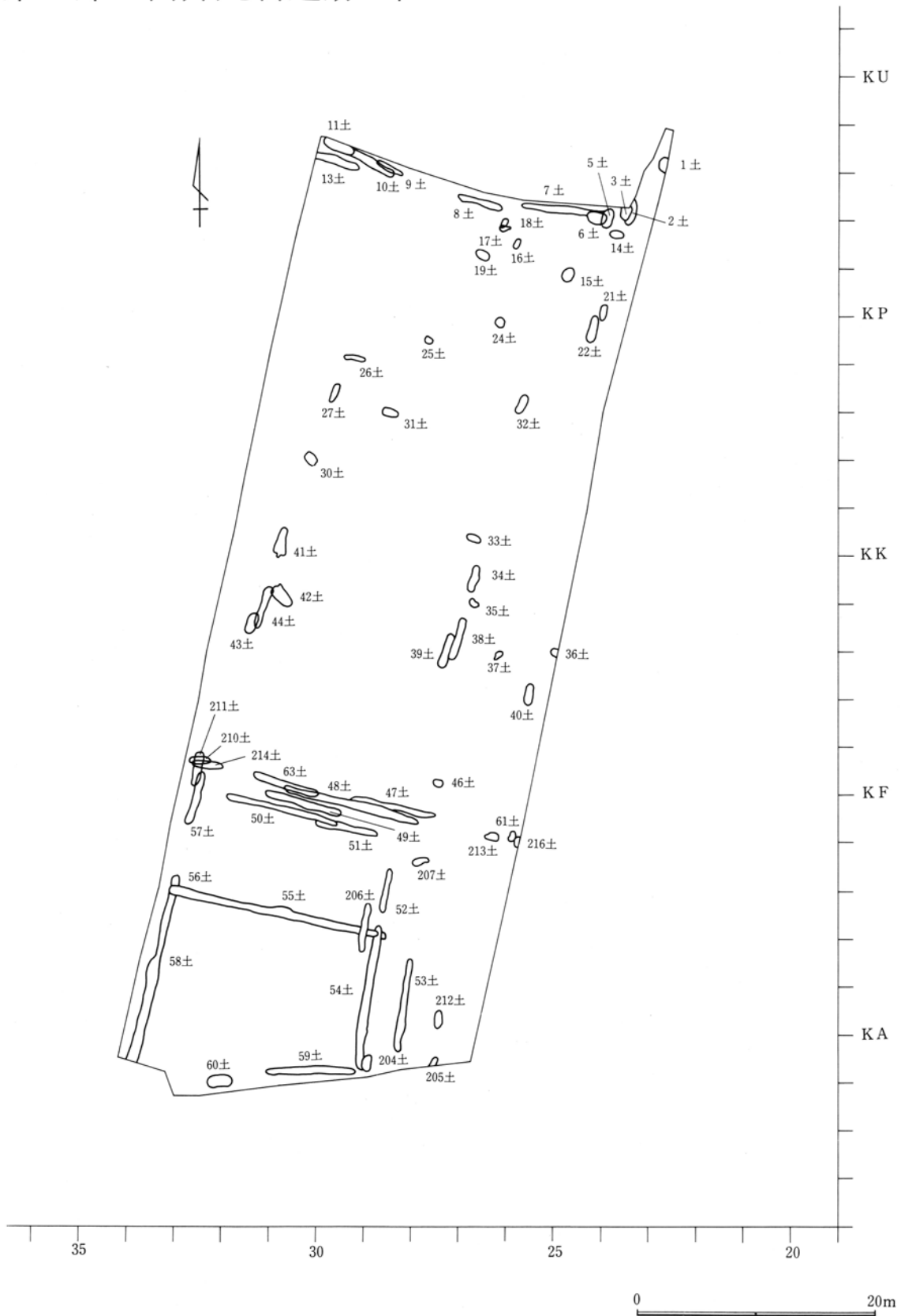
遺構外出土遺物



第17図 遺構外出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
遺構外 -1	皿	表土	口 10.1 底 7.5 高 2.7	外面 体部横撫で、底部左回転糸切り未調整。 内面 轆轤整形。	①細砂粒 ②不良 ③明赤褐色	1/2
遺構外 -2	石製品 相輪部材か	表土	最大径 15.4 重 971	多孔質の割に重く、硬い。中央に軸穴状穿孔あり。工具 痕あり。平部は丁寧な仕上げで、側部は突きノミ状の痕 跡あり。	粗粒輝石安山岩 (多孔質)	1/2
遺構外 -3	石製品 凹石 用途不明	表土	残存長 12.2 重 286	中窪みの用途不明石製品。窪内はわずかに工具痕が残さ れるが、極めて丁寧な消耗か加工。側部は自然面が残る。 裏面は工具痕あり。	角閃石安山岩 (二ツ岳)	1/3
遺構外 -4	石製品 砥石	表土	幅 3.6 長 6.1 厚 3.0	質は流紋岩に近い。使用は表・裏の2面で浅い。側部は 製品化の削りあり。両小口は欠損。中砥としては、目不 揃いの感あり。	デイスait	破片 中砥級
遺構外 -5	金属器 キセル 雁首	表土	最大径 1.2 口径 1.1 長 5.5	皿は小さく新様。鐵継目は口側から見て、9時の位置。 錆色は黒～黄緑味と変化があり、被熱か。羅宇の一部が 残存。	銅主材	完形

第3節 白井丸岩遺跡2区



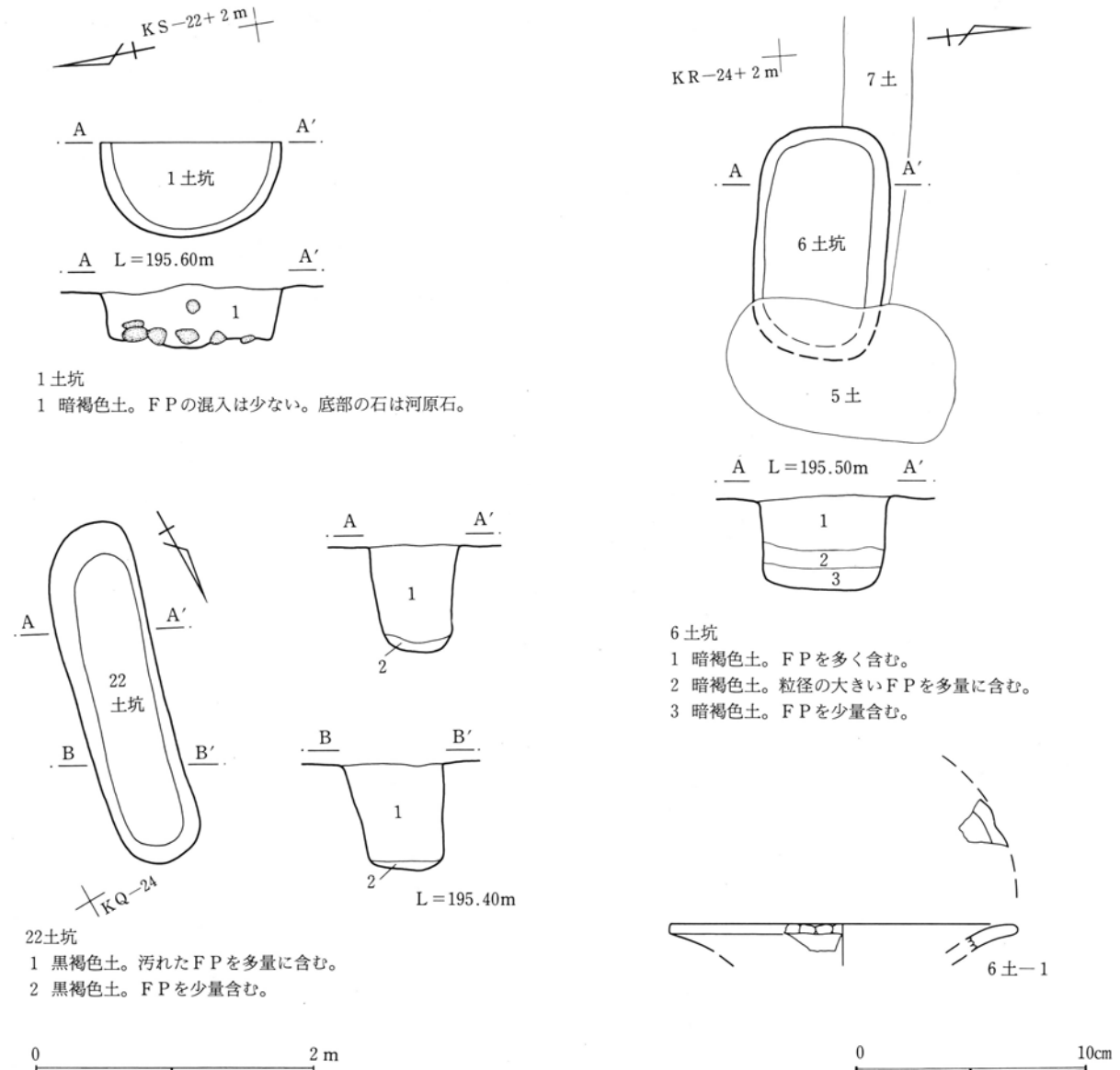
第18図 白井丸岩遺跡2区全体図

**1号土坑** 位置 KS-22、2区北部。形状・規模 円形。直径1.3m、深さ0.4m。埋没土 暗褐色土で、底部には径15cm前後の円礫を含む。分類 D

**6号土坑** 位置 KR-24、2区北部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.0×(1.7)×0.7mである。埋没土 底部にFPの少ない暗褐色土があり、上部はFPを多量に含む暗褐色土となる。遺物 中国産の青磁片が出土。他に江戸時代の陶器

片が数点出土している。重複 7号土坑よりも新しく、5号土坑よりも古い。分類 C

**22号土坑** 位置 KP-24、2区北部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×2.5×0.8mである。底面はFP下面におよぶ。埋没土 底部に厚さ8cm程の黒褐色土があり、その上位はFPを多量に含む黒褐色土となる。分類 B3



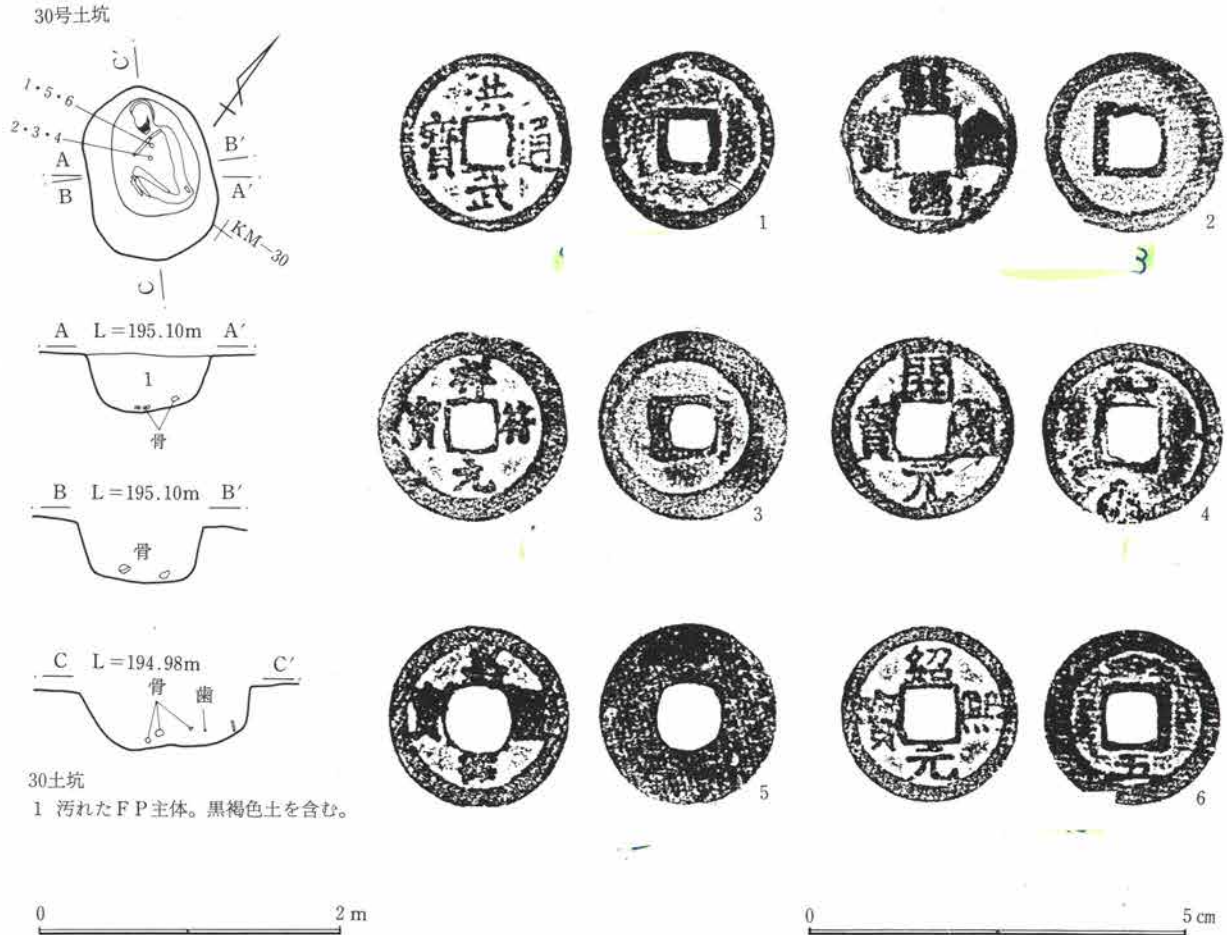
第19図 1号・6号・22号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
6土-1	中国 青磁 皿	覆土	口 底 高 (14.8) — —	内面 口縁部に文様あり。	青磁釉	破片 15c後~ 16c前

第3章 白井丸岩遺跡

**30号土坑** 位置 KM-30、2区中央部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×1.1×0.4mである。長軸は北西-南東方向を向く。埋没土 表面が汚れたFPを主体とした層で埋まる。遺物 人骨と古銭が出土した。人骨は頭部を北西に

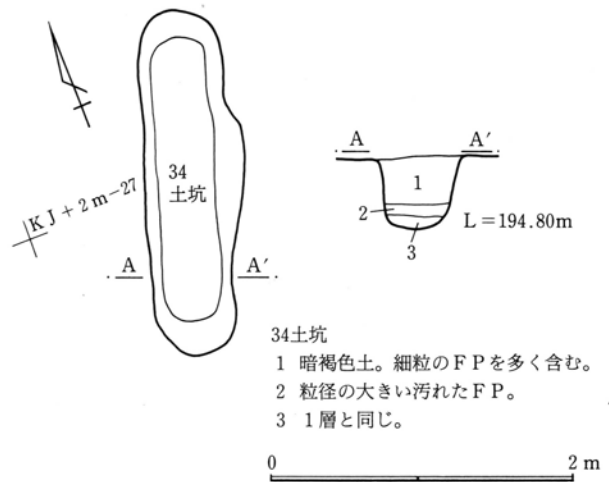
置き、顔を西に向けた横臥屈葬の状態で見出され、成人の女性と考えられる(P152参照)。懐にあたる位置で、洪武通寶(初鑄造年1368年)などの古銭が6点出土し、中世の土壌墓と考えられる。重複なし。分類 A



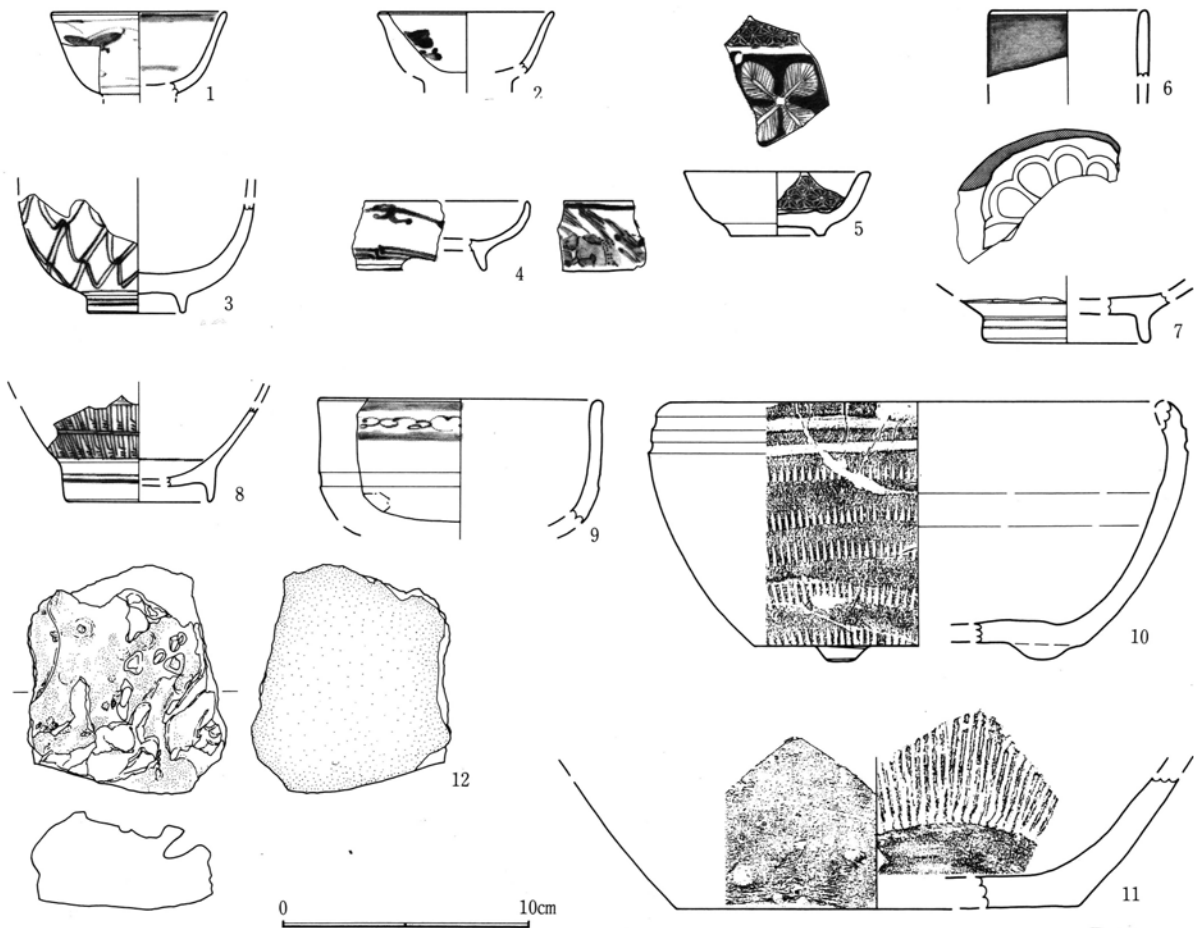
第20図 30号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
30土-1	古銭	+1	径 2.4 重 2.8	洪武通寶、穿の径6mm		完形
30土-2	古銭	+2	径 2.4 重 3.8	□□□寶、穿の径7mm		完形
30土-3	古銭	+2	径 2.6 重 2.8	祥符元寶、穿の径6mm		完形
30土-4	古銭	+2	径 2.4 重 2.4	開元通寶、穿の径7mm		完形
30土-5	古銭	+1	径 2.4 重 3.0	□祐通寶、穿の径9mm		完形
30土-6	古銭	+1	径 2.4 重 2.5	紹熙元寶、穿の径7mm		完形

34号土坑 位置 KJ-26、2区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×2.4×0.5mである。底面の掘り込みはFP中でとまる。埋没土 FPを多く含む暗褐色土の中間に、粒径の大きい汚れたFPの層を挟む。遺物 陶器、磁器、鉄滓など多くの遺物が出土したが、いずれも破片である。なかには、国産の青磁片があり、焼き継ぎを行った痕跡が残っている。遺物は概ね18世紀後半から19世紀にかけてのものである。分類 B2



34土坑  
1 暗褐色土。細粒のFPを多く含む。  
2 粒径の大きい汚れたFP。  
3 1層と同じ。



第21図 34号土坑平・断面図及び出土遺物

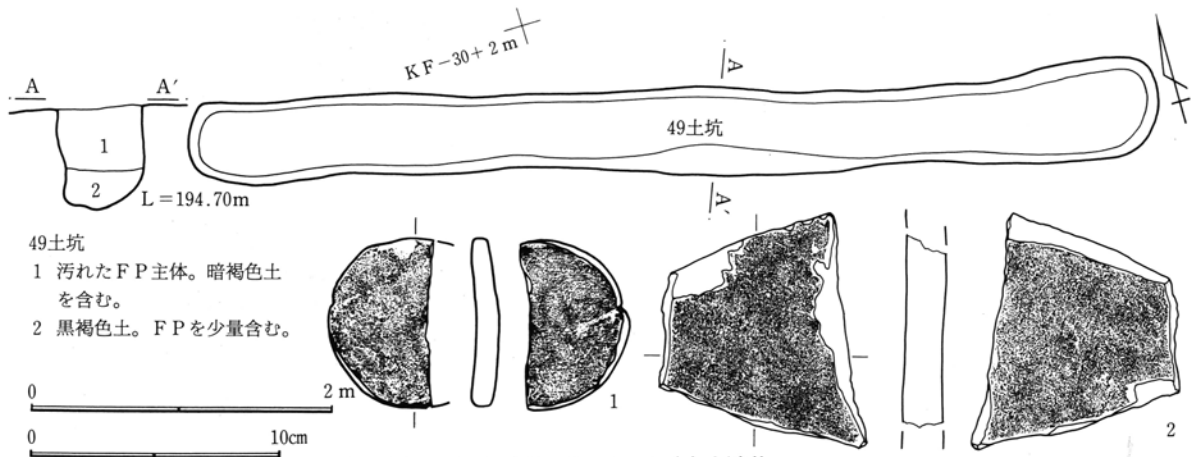
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
34土-1	瀬戸・美濃 磁器 碗	覆土	口 (7.0) 底 — 高 —	外面 螺文様	染付	破片
34土-2	瀬戸・美濃 磁器 碗	覆土	口 (7.0) 底 — 高 —	外面 不明文様	染付	破片 幕末～明治

第3章 白井丸岩遺跡

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
34土-3	肥前 磁器 碗	覆土	口 — 底 (3.8) 高 —	外面 二重網目文	染付	胴～底部1/2 18c後～ 19c前
34土-4	肥前 磁器 皿	覆土	口 — 底 — 高 2.7	外面 唐草文、高台外面雷門。 内面 山水文? 型紙と手描きを併用。	染付	口～底部破片 18c前
34土-5	瀬戸・美濃 磁器 皿	覆土	口 (7.5) 底 (3.7) 高 2.5	内面 麻の葉文、見込み花卉文。 いずれも型押し。 方形小皿。	染付	口～底部破片
34土-6	瀬戸・美濃 磁器 碗	覆土	口 (6.2) 底 — 高 —	外面 呉須を塗る。	染付	破片 幕末～明治
34土-7	国産 磁器 鉢	覆土	口 — 底 (6.5) 高 —	外面 染付。 内面 青磁釉、見込み菊花文型押し。 焼継の痕跡あり。	青磁染付	底部破片 18c後～19c
34土-8	肥前 磁器 碗	覆土	口 — 底 (4.8) 高 —	外面 梵字文様。 広東碗。	染付	破片 18c後～ 19c前
34土-9	肥前 陶器 碗	覆土	口 (11.0) 底 — 高 —	外面 口縁部に施文。 内面 無文。	陶胎染付	破片 18c
34土-10	不明 軟質陶器 手あぶり?	覆土	口 (20.2) 底 (13.0) 高 (10.1)	外面 回転の施文具使用。表面は黒色。 内面 黒色。 胴丸形。	①粗砂粒 ②普通 ③橙色	1/4 江戸?
34土-11	堺・明石 焼締陶器 播鉢	覆土	口 — 底 (16.0) 高 —	内面 底部の現存部には播り目なし。 体部の播り目深い。	①粗砂粒、細礫 ②良好 ③暗赤褐色	破片 18c後～ 19c前
34土-12	鉄滓	覆土	重 246	底面には大型炉(精錬)の底面痕、砂粒付着。表面には珪 化物付着。全体的に軽く、黒～緑黒味おびる。		中世以降

49号土坑 位置 KE-30、2区南部。形状・規模  
溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×6.4×  
0.6mである。周囲に同様の溝状土坑が多い。埋没

土 底部に厚さ25cm程の黒褐色土があり、その上位は  
FPが主体となる。遺物 用途不明の円盤状の土製  
品と、棧瓦が出土している。分類 B1



- 49号土坑  
1 汚れたFP主体。暗褐色土  
を含む。  
2 黒褐色土。FPを少量含む。

第22図 50号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
49土-1	土製品 不明	覆土	径 7.0 厚 0.9	円盤状の土製品。片面に布目痕あり。	①細砂粒、粗砂粒 ②普通 ③橙色	1/2
49土-2	棧瓦	覆土	厚 1.5	表・裏面とも撫痕あり。全体に黒色煙かかる。部分的に 色調の変化があり、被熱か。	①やや重く黒粒入 る②還元	破片 近世以降

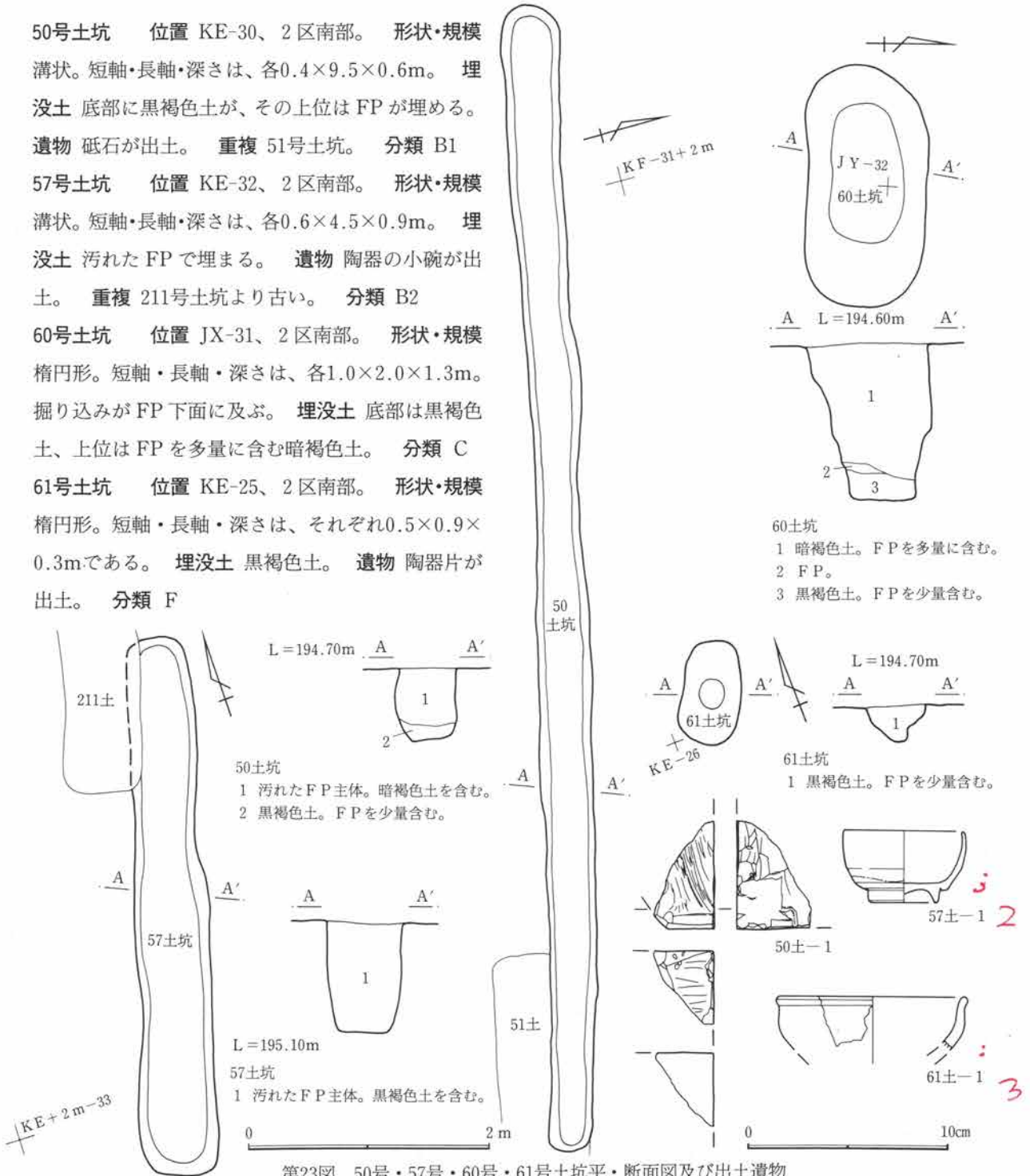


50号土坑 位置 KE-30、2区南部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、各0.4×9.5×0.6m。埋没土 底部に黒褐色土が、その上位はFPが埋める。遺物 砥石が出土。重複 51号土坑。分類 B1

57号土坑 位置 KE-32、2区南部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、各0.6×4.5×0.9m。埋没土 汚れたFPで埋まる。遺物 陶器の小碗が出土。重複 211号土坑より古い。分類 B2

60号土坑 位置 JX-31、2区南部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、各1.0×2.0×1.3m。掘り込みがFP下面に及ぶ。埋没土 底部は黒褐色土、上位はFPを多量に含む暗褐色土。分類 C

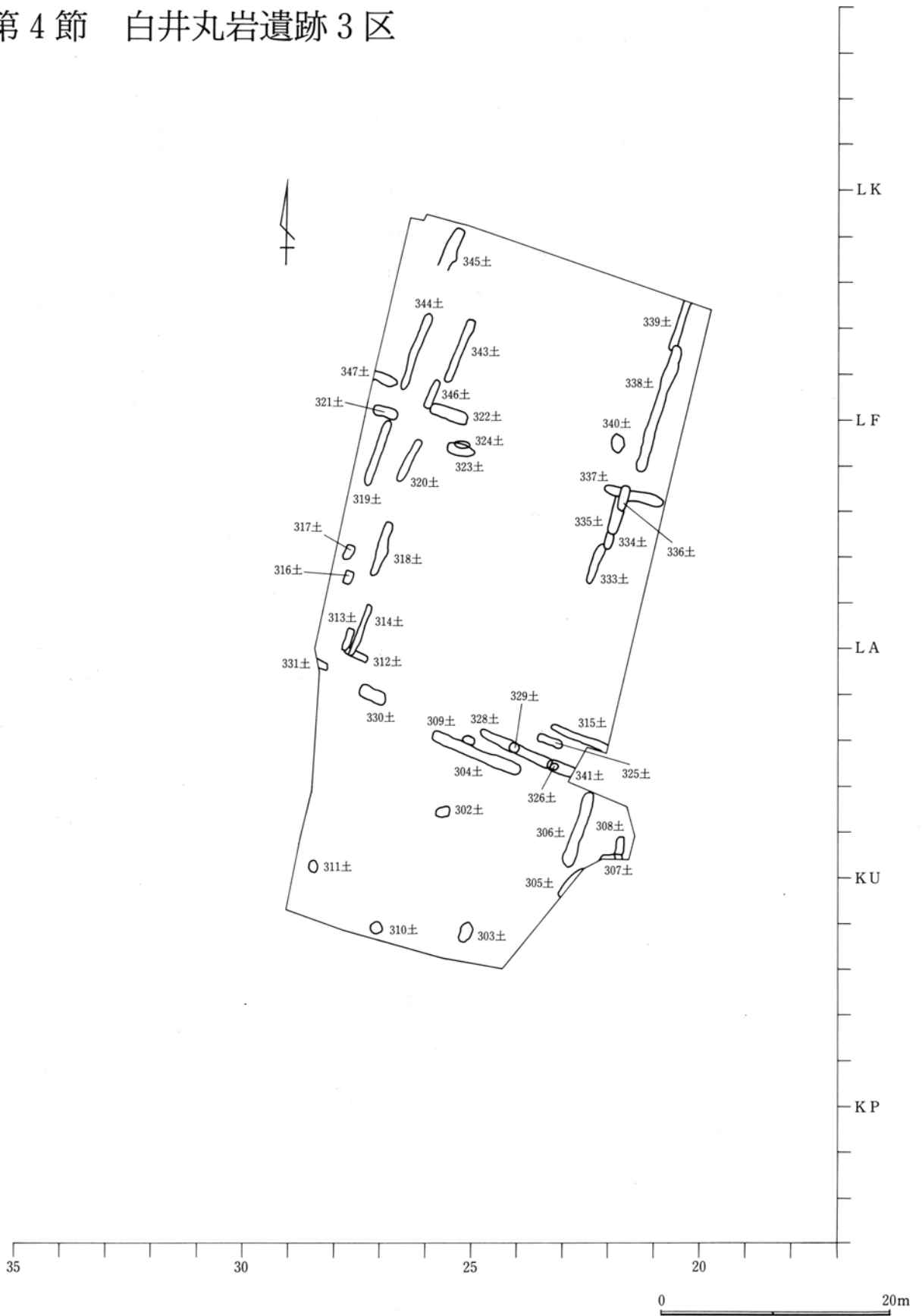
61号土坑 位置 KE-25、2区南部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×0.9×0.3mである。埋没土 黒褐色土。遺物 陶器片が出土。分類 F



第23図 50号・57号・60号・61号土坑・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
50土-1	石製品 砥石	覆土	長 5.2 重 45	表面使用で、側部にも研磨痕あり。側部に製品化の削り目、小口に削り跡あり。合砥として合わせの痕跡は少ない。質は硬調。	デイサイト	破片、中砥土～合砥級 中世以降
57土-1	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土	口 (5.8) 底 3.4 高 3.5	外面 高台脇以下無釉。	灰釉	2/3 18世紀
61土-1	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土	口 (9.4) 底 — 高 —	天目茶碗。	鉄釉	破片 大窯の終わり頃か?

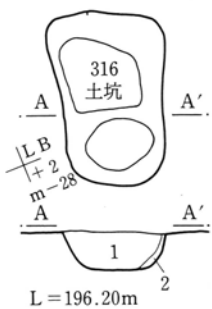
第4節 白井丸岩遺跡3区



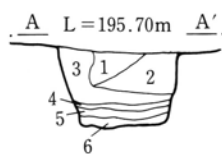
第24図 丸岩遺跡3区全体図

304号土坑 位置 KW-24、3区南部。形状・規模 溝状。短軸・長軸は、それぞれ0.9×8.3mである。土坑の中央部を境に底面の深さが異なり、東側で0.5m、西側で0.4mとなる。このことから、この土坑は2つの土坑に分かれる可能性がある。埋没土 下位から黒褐色土→FP→黒褐色土→FPの順に堆積している。分類 B2

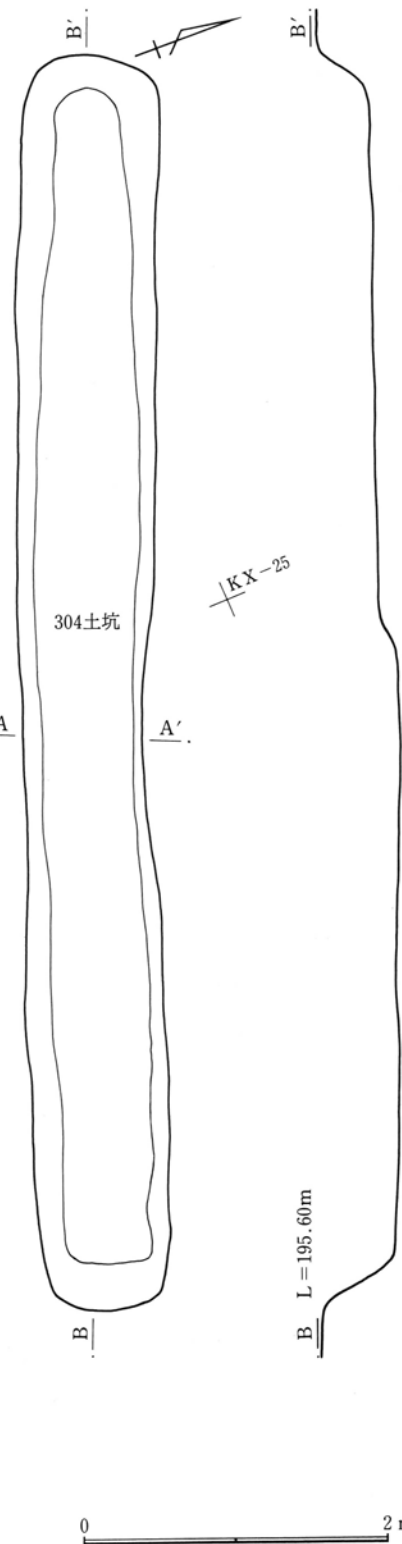
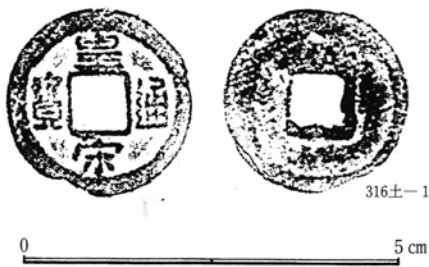
316号土坑 位置 LB-27、3区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×1.1×0.2mである。埋没土 FPを少量含む暗褐色土。遺物 皇宋通寶が1点出土した。分類 C



316号土坑  
1 暗褐色土。径0.5~1.0cmのFPを少量含む。



304号土坑  
1 黄褐色FP。2層で汚れた径1cmほどのFP主体。  
2 黒褐色土。6層に似るが色調淡くしまりなし。FPを多量に含む。  
3 黄褐色FP。径1~5cmの汚れたFP主体。  
4 黒褐色土。FPを含む。  
5 黄褐色FP。径0.5cmほどの汚れたFP主体。  
6 黒褐色土。FPを多量に含む。



第25図 304号・316号土坑平・断面図及び出土遺物

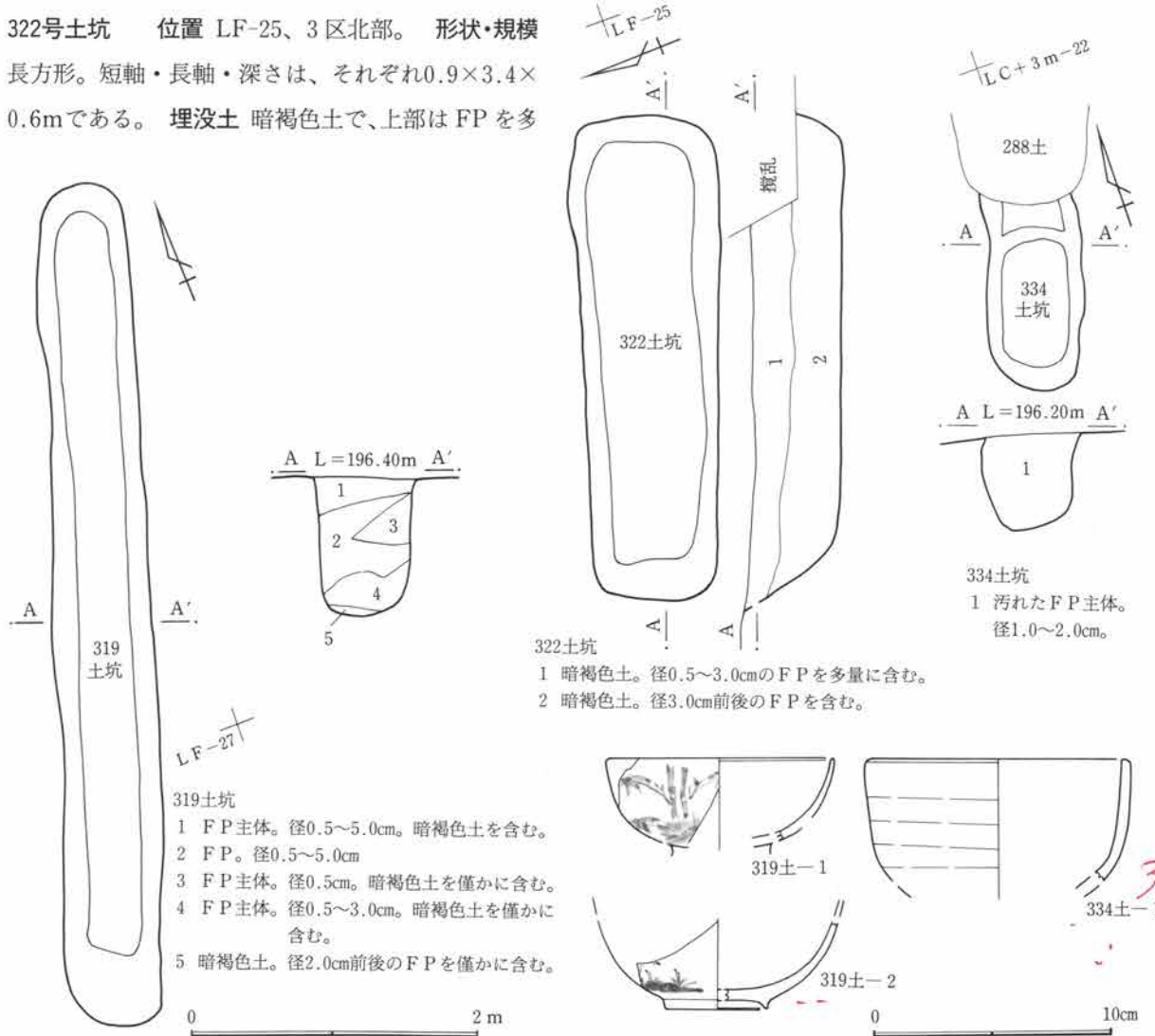
番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
316土 -1	古銭	覆土	径 2.5 重 3.7	皇宋通寶、穿の径7mm		完形

**319号土坑** 位置 LE-27、3区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×5.9×1.0mである。掘り込みがFP下面におよぶ。埋没土 底部に6cm程の暗褐色土があり、その上位はFPが主体となる。遺物 磁器の破片が出土している。分類 B3

**322号土坑** 位置 LF-25、3区北部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.9×3.4×0.6mである。埋没土 暗褐色土で、上部はFPを多

く含む。分類 B1

**334号土坑** 位置 LC-22、3区中央部。形状・規模 楕円形？。短軸・深さは、それぞれ0.7×0.6mである。埋没土 汚れたFPが主体。遺物 陶器片が出土。重複 333号土坑より新しい。335号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。分類 D

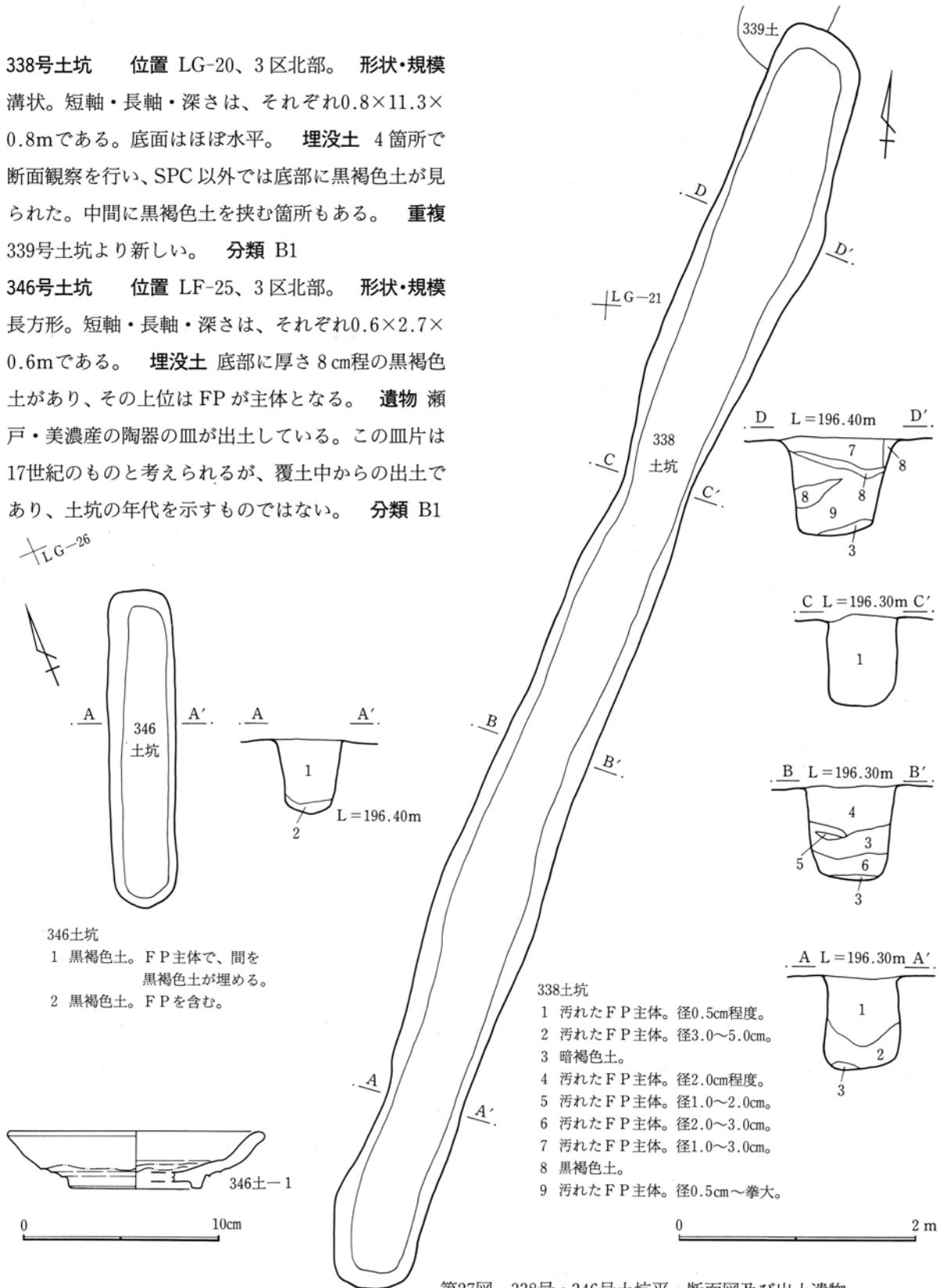


第26図 319号・322号・334号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
319土 -1	肥前 磁器 碗	覆土	口 底 高 (9.5) — —	外面 竹文。 内面 無文。	染付	破片 18c後～ 19c前
319土 -2	肥前 磁器 碗	覆土	口 底 高 (4.2) — —	外面 草文。 内面 無文。	染付	胴～底部破片 18c後～ 19c前
334土 -1	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土	口 底 高 — — —	内外面 施釉。	鉄釉	口～胴部破片

338号土坑 位置 LG-20、3区北部。形状・規模  
溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×11.3×  
0.8mである。底面はほぼ水平。埋没土 4箇所  
断面観察を行い、SPC 以外では底部に黒褐色土が  
見られた。中間に黒褐色土を挟む箇所もある。重複  
339号土坑より新しい。分類 B1

346号土坑 位置 LF-25、3区北部。形状・規模  
長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×2.7×  
0.6mである。埋没土 底部に厚さ8cm程の黒褐色  
土があり、その上位はFPが主体となる。遺物 瀬  
戸・美濃産の陶器の皿が出土している。この皿片は  
17世紀のものと考えられるが、覆土中からの出土で  
あり、土坑の年代を示すものではない。分類 B1



- 346土坑
- 1 黒褐色土。FP主体で、間を黒褐色土が埋める。
  - 2 黒褐色土。FPを含む。

- 338土坑
- 1 汚れたFP主体。径0.5cm程度。
  - 2 汚れたFP主体。径3.0~5.0cm。
  - 3 暗褐色土。
  - 4 汚れたFP主体。径2.0cm程度。
  - 5 汚れたFP主体。径1.0~2.0cm。
  - 6 汚れたFP主体。径2.0~3.0cm。
  - 7 汚れたFP主体。径1.0~3.0cm。
  - 8 黒褐色土。
  - 9 汚れたFP主体。径0.5cm~拳大。

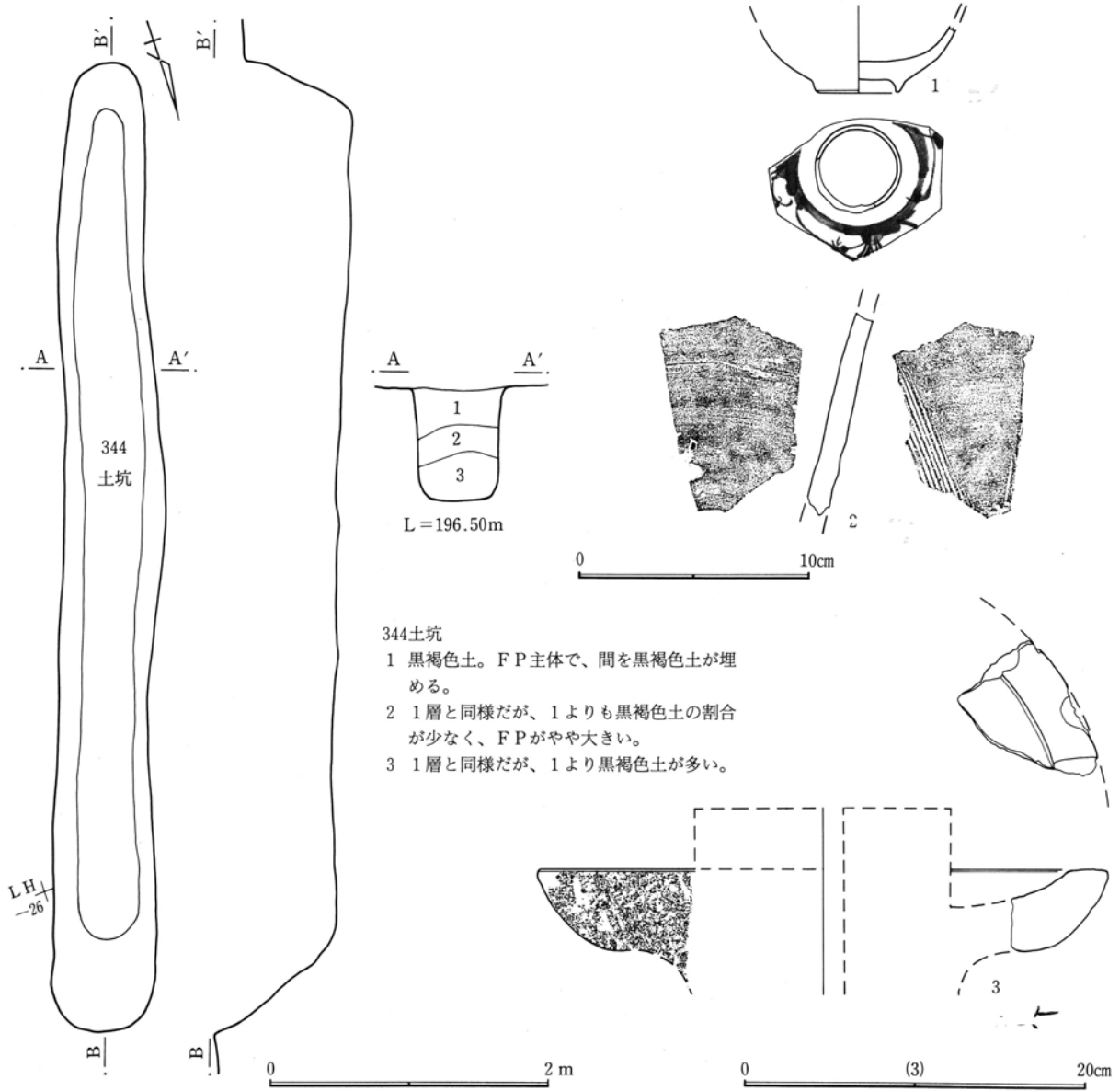
第27図 338号・346号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
346土 -1	瀬戸・美濃 陶器 皿	覆土	口 (13.1) 底 (6.8) 高 2.9	外面 高台脇以下無釉、高台の断面は台形。 内面 輪糸皿。見込み釉剥ぎ。	灰釉	1/4 17c中~後

第3章 白井丸岩遺跡

**344号土坑** 位置 LG-26、3区北部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×7.0×0.8 mである。掘り込みの深さはFP下面におよぶ。埋没土 FPが主体の黒褐色土で、含まれるFPの量に

よって細分できる。底部に近い部分に黒褐色土が多い。遺物 磁器の碗、掘り鉢、石臼が出土。いずれも破片で、遺物に時代差がある。分類 B4



第28図 344号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉葉または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
344土 -1	肥前 磁器 碗	覆土	口 — 底 4.0 高 —	外面 草花文?	染付	胴下位~底部 18c後~ 19c前
344土 -2	瀬戸・美濃 陶器 掘り鉢	覆土	口 — 底 — 高 —	内外面 施釉。	錆釉	破片 16c
344土 -3	石製品 茶臼型下臼	覆土	残存長 8.4 径 (33.0)	はんぎり部。質は柔らかかやや軽い。器面はやや荒れて 消耗。整形はナラシの工具整形あり。	粗粒輝石安山岩 (多孔質)	破片

第4節 白井丸岩遺跡3区

白井丸岩遺跡 土坑一覧表

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規 模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
1	2	KS-22	円形	D	1.3	—	0.4		—		25	19
2	2	KR-23	長方形	B 2	(0.7)	(2.5)	0.6		3(新)			
3	2	KR-23	長方形	B 2	0.8	—	0.5		2(古)			
4	2	欠番										
5	2	KR-22	楕円形	D	0.9	1.7	0.5	播り鉢	6(古)			19
6	2	KR-23	長方形	C	1.0	(1.7)	0.7	青磁, 陶器	5(新), 7(古)		25	19
7	2	KR-23	溝状	B 2	0.5	7.0	0.5		6(新?)			
8	2	KK-26	長方形	B 1	0.5	4.0	0.6		—			
9	2	KS-28	長方形	B 1	0.4	(2.6)	0.1		10(新)			20
10	2	KS-28	長方形	B 1	0.7	(4.3)	0.4		9(古), 11(不明)			20
11	2	KS-29	長方形	B 1	0.8	(2.6)	0.7		10(不明)			
12	2	欠番										
13	2	KS-29	溝状?	B 2	0.7	—	0.6		—			
14	2	KQ-23	楕円形	F	0.6	1.2	0.5		—			
15	2	KP-24	楕円形	D	0.9	1.2	0.2		—			20
16	2	KQ-25	楕円形	F	0.5	0.8	0.1		—			20
17	2	KO-26	円形	F	0.6	0.6	0.3		18(新)			20
18	2	KO-26	楕円形	F	0.5	0.9	0.2		17(古)			20
19	2	KQ-26	楕円形	F	0.7	1.2	0.4		—			20
20	2	欠番										
21	2	KP-24	楕円形	D	0.6	1.3	0.1		—			
22	2	KO-24	長方形	B 3	0.7	2.5	0.8		—		25	20
23	2	欠番										20
24	2	KO-26	楕円形	F	0.7	0.9	0.2		—			21
25	2	KO-27	長方形	F	0.5	0.6	0.1		—			
26	2	KO-29	長方形	B 1	0.4	1.8	0.1		—			
27	2	KN-29	長方形	B 1	0.4	1.8	0.2		—			
28	2	欠番										
29	2	欠番										
30	2	KM-30	楕円形	A	0.8	1.1	0.4	骨, 古銭	—		26	21
31	2	KM-28	長方形	D	0.6	1.3	0.1		—			
32	2	KN-25	楕円形	D	0.7	1.7	0.3		—			
33	2	KK-26	楕円形	D	0.6	1.2	0.8		—			
34	2	KJ-26	長方形	B 2	0.6	2.3	0.5	陶磁器, 鉄滓	—	遺物量多い	27	21
35	2	KI-26	楕円形?	F	0.5	0.9	0.4		—			22
36	2	KH-25	楕円形?	F	0.6	—	0.3		—			22
37	2	KH-26	楕円形	F	0.6	0.9	0.4		—			22
38	2	KI-27	長方形	B 1	0.6	3.6	0.3		39(古)			22
39	2	KH-27	溝状	B 2	0.6	(3.0)	0.2		38(新)			22
40	2	KH-25	楕円形	B 2	0.7	1.8	0.4		—			22
41	2	KK-30	長方形	B 1	0.8	2.4	0.2		—			
42	2	KJ-30	楕円形	B 2	1.0	2.1	0.3		44(古)			23
43	2	KI-31	楕円形	B 1	0.8	2.0	0.5		44(新)			
44	2	KI-31	長方形	B 1	0.5	3.7	0.4		42(新), 43(古)			
45	2	KF-29	正方形	F	0.8	0.9	0.2		—			23
46	2	KF-27	円形	F	0.7	0.8	0.2		—			23
47	2	KE-28	溝状	B 1	0.5	7.3	0.6		48(新)			23
48	2	KE-29	溝状	B 2	0.7	11.5	0.4		47(古), 63(古)			23
49	2	KE-30	溝状	B 1	0.6	6.4	0.6	土製品, 瓦	—		28	23
50	2	KE-30	溝状	B 1	0.4	9.5	0.6	砥石	51(不明)		29	23
51	2	KE-29	溝状	B 1	0.6	5.1	0.2		50(不明)			23
52	2	KC-28	長方形	B 1	0.5	3.6	0.3		—			
53	2	KA-28	溝状	B 1	0.5	7.7	0.2		—			
54	2	KA-28	溝状	B 2	0.9	—	0.8		204(不明), 215(不明)			24
55	2	KC-30	溝状	B 1	0.9	—	0.6		56(不明), 206(新), 215(不明)			
56	2	KC-32	溝状	B 4	0.7	—	1.0		55(不明), 58(不明)			24
57	2	KE-32	長方形	B 2	0.6	4.5	0.9	陶器	211(新)		29	24
58	2	KA-33	溝状	B 2	0.8	—	0.7		56(不明)			
59	2	JY-30	溝状	B 2	0.6	7.6	0.6		—			

第3章 白井丸岩遺跡

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規 模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
60	2	J Y-32	楕円形	C	1.0	2.0	1.3		—		29	
61	2	KE-25	楕円形	F	0.5	0.9	0.3	陶器			29	24
62	1	J M-35	楕円形	A	1.1	1.4	0.6	人骨,カワラケ等	—		14	7
63	2	K F-30	溝状	B 1	0.6	(5.7)	0.5		48(新)			23
64	1	欠番										
65	1	欠番										
66	1	欠番										
67	1	J X-33	溝状?	B 2	0.9	—	0.3	磁器(江戸)	—			
68	1	J V-34	長方形	C	(0.8)	(1.2)	0.5	陶器,キセル	87(古),70(不明)	遺物87土に所属か?	16	8
69	1	J U-33	溝状	B 2	0.7	(13.0)	0.2		70(古),87(不明),101(新)			8
70	1	J V-33	溝状	B 1	0.8	(5.3)	0.6		69(新)			8
71	1	J U-32	楕円形	C	0.9	1.1	0.5		101(古)			
72	1	J W-31	長方形?	C	1.2	—	0.1		—			8
73	1	J W-30	長方形	B 2	1.0	2.9	0.7	陶器(江戸~明治)	—			
74	1	J W-28	楕円形	F	0.6	0.8	0.3		—			8
75	1	J W-28	正方形	F	0.8	0.8	0.3		—			8
76	1	J W-28	楕円形	F	1.0	1.1	0.4		—			8
77	1	J W-27	溝状?	B 2	0.6	—	0.2		78(古)			9
78	1	J W-27	溝状	B 1	0.5	—	0.4	灯明皿受け皿	77(新)		16	9
79	1	欠番										
80	1	欠番										
81	1	欠番										
82	1	J V-28	楕円形	F	0.6	1.2	0.1		—			9
83	1	J V-29	円形	F	0.5	0.5	0.2		—			9
84	1	J V-29	楕円形	F	0.6	0.7	0.2		—			9
85	1	J V-28	楕円形	F	0.4	1.0	0.3		86(新)			9
86	1	J V-28	楕円形	F	0.6	0.8	0.2		85(古)			9
87	1	J W-33	楕円形	C	0.9	1.6	0.5		68(新),69(不明),70(不明)		16	8
88	1	J T-27	溝状	B 1	0.5	12.0	0.7		89(古)			
89	1	J U-27	正方形	F	0.7	(0.8)	0.2		88(新)			9
90	1	欠番										
91	1	J U-28	円形	F	0.5	0.6	0.4		—			10
92	1	J U-28	円形	F	0.5	0.6	0.1		—			10
93	1	J U-29	楕円形	F	0.5	1.0	0.2		—			10
94	1	J U-29	楕円形	F	1.0	1.0	0.4		—			10
95	1	J U-29	楕円形	F	0.5	0.8	0.3		—			
96	1	J U-29	長方形	C	1.4	1.9	0.3		—			10
97	1	欠番										
98	1	J U-31	楕円形	F	0.8	1.0	0.3		—			10
99	1	欠番										
100	1	J T-32	楕円形	C	1.0	2.9	0.4		101(古)			10
101	1	J U-32	楕円形	B 2	0.7	(3.2)	0.7		71(新),100(新),202(新)			15
102	1	J S-33	長方形	B 1	0.7	4.0	0.2	磁器(江戸)	—			
103	1	欠番										
104	1	欠番										
105	1	欠番										
106	1	欠番										
107	1	J T-31	楕円形	F	0.6	0.7	0.3		—			
108	1	J S-31	楕円形	F	0.5	0.8	0.2		—			10
109	1	欠番										
110	1	J W-32	長方形?	C	1.1	—	0.4		111(古)			11
111	1	J W-32	溝状?	B 1	(0.6)	—	0.5		110(新)			11
112	1	J R-28	楕円形	F	0.6	0.9	0.3		—			
113A	1	J Q-29	長方形	B 3	0.8	(4.2)	0.6		113B(新)			11
113B	1	J Q-28	長方形	B 3	0.7	—	0.7		113A(古)			11
114	1	J R-29	円形	D	1.0	1.2	0.4		—			11
115	1	J R-29	円形	F	0.7	0.8	0.3		—			11
116	1	欠番										
117	1	J Q-30	長方形	A	(0.8)	(1.9)	0.3	骨片	118(新)			
118	1	J Q-30	長方形	B 1	0.7	3.8	0.5		117(古),119(新)			



第4節 白井丸岩遺跡3区

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規 模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
119	1	J R-30	円形	F	0.8	0.8	0.3		118(古)			11
120	1	J R-30	円形	F	0.7	0.8	0.2		—			
121	1	J R-30	正方形	F	0.5	0.6	0.2		—			
122	1	J R-31	正方形	F	0.4	0.5	0.2		218(古)			
123	1	J Q-31	楕円形	F	0.5	0.9	0.3	陶器(片口)	124(古)		17	11
124	1	J Q-30	溝状	B 1	0.6	10.4	0.7		123(新)			
125	1	J P-28	長方形	B 2	0.5	4.1	0.4		—			
126	1	J N-29	溝状	B 4	0.6	10.3	0.8		—		17	12
127	1	J P-29	長方形	F	0.6	(0.8)	0.3		128(新)			12
128	1	J P-29	溝状	B 2	0.6	(5.9)	0.8		127(古)			
129	1	J Q-30	楕円形	F	0.5	0.7	0.2		—			12
130	1	J P-30	楕円形	F	0.6	1.0	0.4		—			
131	1	J P-31	楕円形	F	0.7	0.8	0.2		—			12
132	1	J O-31	長方形	F	0.9	1.0	0.5		—			12
133	1	J O-30	溝状	B 2	0.8	(3.8)	0.7	陶器(江戸)	—			
134	1	J N-30	溝状	B 3	0.9	6.1	0.8	青磁片	135(新)		18	12
135	1	J N-31	円形	D	1.2	1.2	0.7		134(古)		18	12
136	1	J R-32	長方形	B 2	0.6	2.6	0.2		—			
137	1	欠番										
138	1	J S-32	長方形	C	0.6	1.5	0.4		—			
139	1	J R-33	長方形	B 2	0.8	(4.4)	0.3		140(新)			12
140	1	J R-33	長方形	B 2	0.7	3.3	0.7		139(古)			12
141	1	J R-33	楕円形	F	0.5	0.8	0.4		—			
142	1	欠番										
143	1	J Q-34	長方形	B 1	0.5	4.0	0.6		146(古)			
144	1	J Q-34	楕円形	C	0.6	1.1	0.3		—			
145	1	欠番										
146	1	J Q-34	長方形	B 1	0.5	—	0.3		143(新)			
147	1	J Q-33	長方形	C	0.9	1.5	0.3		148(古)			
148	1	J P-33	長方形	B 2	0.6	4.3	0.3		147(新)			
149	1	欠番										
150	1	欠番										
151	1	欠番										
152	1	欠番										
153	1	J Q-31	楕円形	F	0.5	(0.7)	(0.9)		154(新)			
154	1	J Q-31	楕円形	C	0.6	1.3	0.1		153(古)			
155	1	J P-32	円形	F	0.6	0.7	0.4	磁器(明治)	—			
156	1	J P-33	楕円形	F	0.8	1.2	0.4		—			13
157	1	J P-34	長方形	F	0.4	0.6	0.2		—			
158	1	欠番										
159	1	欠番										
160	1	J N-35	長方形	F	0.5	0.8	0.6		—			13
161	1	J M-34	長方形	B 1	0.6	3.2	0.7	陶器(播り鉢片)	—		18	13
162	1	J L-35	楕円形	C	0.8	1.5	0.2		—			
163	1	J L-35	楕円形	F	0.6	0.8	0.2		—			13
164	1	欠番										
165	1	J I-36	溝状	B 2	0.6	11.0	0.5		168(新)			13
166	1	J J-36	円形	F	0.6	0.8	0.3		—			
167	1	J I-37	楕円形	F	0.5	0.9	0.2		—			13
168	1	J H-35	溝状	B 2	0.7	9.9	0.7		165(古)			13
169	1	J J-35	溝状	B 1	0.5	12.9	0.7		193(古)			
170	1	J I-35	楕円形	D	0.7	1.0	0.3		—			14
171	1	欠番										
172	1	J O-32	楕円形	F	1.0	1.1	0.4		—			
173	1	J O-32	楕円形	C	0.6	1.4	0.3		—			
174	1	J N-32	長方形	F	0.5	0.8	0.3		—			14
175	1	欠番										
176	1	J N-33	長方形	F	0.6	0.7	0.3		—			14
177	1	欠番										
178	1	J M-33	円形	D	0.8	0.9	0.3		179(古)			

第3章 白井丸岩遺跡

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規 模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
179	1	J M-33	溝状	B 2	0.5	6.6	0.6		178(新)		18	14
180	1	欠番										
181	1	J K-31	長方形	F	0.5	1.1	0.1		—			
182	1	欠番										
183	1	J J-30	長方形	B 2	0.5	1.7	0.2		—			
184	1	J J-31	長方形	B 1	0.5	(2.4)	0.6		185(不明)			14
185	1	J J-31	長方形	B	0.5	(2.1)	0.6		184(不明)			14
186	1	J K-33	長方形	B 2	0.5	2.4	0.7		—			
187	1	J K-33	長方形	B 2	0.3	3.2	0.7		—			
188	1	欠番										
189	1	J K-33	円形	D	1.1	1.1	0.4		—		19	14
190	1	J L-34	楕円形	F	0.5	0.7	0.2		—			
191	1	J L-34	楕円形	F	0.5	0.7	0.3		—			14
192	1	J L-34	楕円形	F	0.6	0.8	0.3		—			
193	1	J K-34	長方形	B 1	0.4	(1.6)	0.7	陶器(明治)	169(新)			
194	1	J K-33	長方形	B 1	0.6	4.0	0.7		—			
195	1	欠番										
196	1	欠番										
197	1	欠番										
198	1	J G-31	長方形	B 1	0.5	3.0	0.4		—			
199	1	J F-31	溝状?	B 1	0.6	—	0.6		—			15
200	1	J F-32	溝状?	B 3	0.8	—	0.7		—			
201	1	J V-30	楕円形	F	0.4	0.5	0.1		—			
202	1	J U-32	長方形	B 1	0.4	1.7	0.1		101(古)			15
203	2	欠番										
204	2	J Y-28	楕円形	D	0.8	1.3	0.7		54(不明)			
205	2	J Y-27	楕円形?	F	0.5	—	0.7		—			
206	2	K C-28	長方形	B 1	0.5	4.1	0.2		55(古)			
207	2	K D-27	楕円形	D	0.5	1.4	0.2		—			
208	2	欠番										
209	2	欠番										
210	2	K F-32	楕円形	B 2	0.7	(1.9)	0.5		211(新), 214(古)			
211	2	K F-32	長方形	B 1	0.6	2.9	0.4		57(古), 210(古), 214(古)			
212	2	K A-27	楕円形	D	0.6	1.6	0.5		—			24
213	2	K E-26	楕円形	D	0.6	1.2	0.2		—			24
214	2	K F-32	長方形	B 2	(0.5)	(2.7)	0.6		210(新), 211(新)			
215	2	K B-28	溝状	B 1	0.7	—	0.1		54(不明), 55(不明)			
216	2	K D-25	—	F	(0.5)	1.0	0.4		—			
217	1	J T-33	楕円形	A	0.7	1.1	—	人骨	—		19	15
218	1	J R-31	長方形	B 1	0.6	2.7	0.2		122(新)			
219	1	I T-39	長方形	B 3	0.7	4.5	0.6		—		19	15
220	1	I U-39	長方形	B 1	0.8	3.4	0.3		—			15
221	1	欠番										
222	1	I W-38	長方形	B 1	0.7	2.3	0.5		—			15
223	1	I W-38	長方形	B 1	0.8	4.1	0.5		—			
224	1	I U-38	長方形	B 1	0.6	(1.5)	0.3		226(不明)			15
225	1	欠番										
226	1	I V-38	長方形	B 1	0.7	(2.1)	0.2		224(不明), 227(不明)			15
227	1	I V-38	長方形	B 1	0.7	(2.2)	0.3		226(不明)			15
228	1	I V-37	長方形	B 2	0.9	2.0	0.6		—			16
229	1	欠番										
230	1	欠番										
231	1	I W-37	長方形	C	0.8	1.6	0.1		—			16
232	1	欠番										
233	1	I Y-39	長方形?	B 2	0.6	—	0.2		—			
234	1	I X-37	長方形	B 1	0.5	1.6	0.2		—			16
235	1	欠番										
236	1	欠番										
237	1	I Y-36	長方形	B 2	0.6	2.2	0.4		—			16
238	1	欠番										

第4節 白井丸岩遺跡3区

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規 模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
239	1	欠番										
240	1	J A-37	長方形	B 1	0.6	2.2	0.4		—			16
241	1	J B-37	長方形	B 4	0.7	2.4	0.6		—			16
242	1	J B-38	長方形	B 1	0.8	1.1	0.4		—			16
243	1	J B-37	楕円形	C	0.7	1.4	0.2		—			16
244	1	J B-37	長方形	C	0.8	1.6	0.3	陶器	—		19	16
245	1	J B-36	長方形	B 1	0.7	2.8	0.1		—			16
246	1	J B-36	不定形	D	1.0	1.5	0.4		—			16
247	1	J C-38	長方形	B 3	0.8	2.9	0.7		—			
248	1	欠番										
249	1	欠番										
250	1	J G-36	長方形	C	0.8	2.3	0.2		—			16
251	1	J H-37	長方形	B 3	1.0	2.9	0.6	磁器, 播り鉢	—		20	16
252	1	J D-35	円形	F	0.7	0.8	0.7		—			
253	1	欠番										
254	1	J E-35	長方形	F	0.6	1.4	0.2		—			
255	1	I O-34	長方形	B 1	0.7	1.9	0.4		—			
256	1	I O-34	長方形	C	0.9	1.9	0.4		258 A (新), 258 B (新)			17
257	1	I P-34	長方形	B 2	1.1	(5.0)	0.3		258 A (新), 258 B (新)			17
258 A	1	I P-34	溝状	B 4	0.8	13.8	0.7		256 (古), 257 (古), 258 B (不明)			17
258 B	1	I O-34	長方形	B 4	0.9	(3.3)	0.6		256 (古), 257 (古), 258 A (不明), 259 (古)			17
259	1	I Q-33	長方形	C	(0.8)	2.1	0.3		258 A (新)			17
260	1	I Q-33	長方形	B 1	0.6	2.0	0.5		259 (古), 261 (古)			17
261	1	I Q-33	長方形	B 2	0.6	2.3	0.2		260 (新)			17
262	1	I R-33	長方形	C	1.1	2.0	0.7		—		20	17
263	1	I Q-34	長方形	C	0.7	1.3	0.3		—			17
264 A	1	I Q-34	溝状	B 4	0.7	16.8	0.6		264 B (不明)			17
264 B	1	I T-32	長方形	B	0.7	—	0.4		264 A (不明)			17
265	1	I T-34	長方形	B 3	1.1	4.3	0.7		—			17
266	1	I T-33	溝状	B 4	1.2	(8.6)	0.6		274 (不明), 267 (新)		21	17
267	1	I T-33	長方形	B 4	0.8	—	0.8		266 (古)		21	17
268	1	I R-37	長方形	B 4	0.5	1.4	0.9		269 (古), 270 (古)			
269	1	I R-37	長方形	C	1.1	(1.1)	0.5		268 (新), 270 (新)			
270	1	I R-36	長方形	B 4	0.6	3.3	0.8		269 (古), 268 (新), 276 (古)			
271	1	I R-36	楕円形	B 4	0.8	1.7	0.7		—			
272	1	I S-35	長方形	B 3	0.7	3.8	0.8		275 (古)			17
273	1	I T-34	長方形	B 3	0.6	4.3	0.7		277 (新), 274 (古)			17
274	1	I U-34	長方形	B 3	0.9	—	0.5		273 (新), 277 (不明), 266 (不明)			
275	1	I S-35	長方形	B	0.7	—	0.3		272 (新)			
276	1	I R-36	長方形	B	0.8	(2.0)	0.3		270 (新)			
277	1	I T-34	長方形	B 3	(0.7)	2.0	0.6		273 (新), 274 (不明)			17
278	1	I V-35	長方形	B 4	1.0	3.0	0.3		—			17
279	1	I R-37	正方形	B 4	0.9	0.9	0.4		280 (新)			17
280	1	I R-37	楕円形	B 4	1.0	1.4	0.6		279 (古)			17
281	1	I V-36	長方形	B 3	0.7	2.2	0.5		—			17
282	1	I V-36	長方形	B 4	1.0	2.2	0.6		—			17
283	1	I U-35	長方形	B 3	0.7	1.7	0.9		—			17
284	1	I W-32	長方形	B 1	0.7	(2.0)	0.3		285 (不明)			18
285	1	I W-32	長方形	B 4	0.9	—	0.8		284 (不明), 286 (不明)			18
286	1	I X-32	長方形	B	0.8	(2.6)	0.6		285 (不明)			18
287	1	I X-32	溝状	B 1	0.8	—	0.9		288 (不明)	長さは8.7mを超える	21	18
288	1	I Y-33	長方形	B'	0.9	1.9	0.6		287 (不明)		21	18
289	1	J A-32	長方形	B 2	0.9	2.1	0.6		—			18
290	1	欠番										
291	1	欠番										
292	1	欠番										
293	1	J E-31	長方形	B 1	0.7	—	0.9		—			
294	1	J E-32	長方形	B 1	(0.4)	(2.3)	0.4		295 (古), 296 (古)			18
295	1	J E-32	長方形	B 2	1.1	3.8	0.4		294 (新), 296 (不明)			18
296	1	J E-32	溝状	B 1	0.6	5.7	0.3		294 (新), 295 (不明)			18

第3章 白井丸岩遺跡

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規 模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
297	1	J F-33	楕円形	D	0.9	1.4	0.4		—			18
298	1	J C-33	楕円形	F	0.5	0.9	0.4		—			18
299	1	J B-33	楕円形	F	0.4	0.6	0.6		—			18
300	1	J S-33	長方形	B	0.6	3.7	0.4		69(古)			8
301	1	J R-34	溝状	B	0.7	5.1	0.7		—			
302	3	K V-25	楕円形	D	1.0	1.2	0.4		—			25
303	3	K S-25	楕円形	A	0.9	1.8	0.4		—			26
304	3	K W-24	溝状	B 2	0.9	8.4	0.5		—		31	25
305	3	K T-22	長方形?	B 1	—	—	0.2		—			
306	3	K V-22	溝状	B 1	0.9	6.9	0.5		—			26
307	3	K U-23	長方形?	B 1	—	—	0.5		308(不明)			26
308	3	K U-23	長方形?	B 1	0.7	—	0.7		307(不明)			26
309	3	K X-26	楕円形	D	0.5	1.0	0.6		—			25
310	3	K S-27	円形	D	1.1	1.0	0.7		—			
311	3	K U-28	楕円形	A	0.8	1.2	0.3		—			26
312	3	K Y-27	長方形	B	0.5	2.2	0.3		314(新)			26
313	3	L A-27	長方形	B 1	0.6	2.0	0.6		—			26
314	3	L A-27	長方形	B 1	0.5	4.8	0.4		312(古)			26
315	3	K X-22	溝状	B 3	0.6	—	0.9		—			26
316	3	L B-27	長方形	C	0.7	1.1	0.2	古銭	—		31	27
317	3	L C-27	長方形	C	0.8	1.3	0.2		—			27
318	3	L C-26	長方形	B 1	0.8	3.5	0.7		—			
319	3	L E-27	溝状	B 3	0.7	5.9	1.0	磁器	—		32	27
320	3	L E-26	長方形	B 1	0.6	4.0	0.6		—			27
321	3	L F-26	長方形	B 1	0.8	2.2	0.7		—			27
322	3	L F-25	長方形	B 1	0.9	3.4	0.6		—		32	27
323	3	L E-25	楕円形	B 2	0.9	2.5	0.5		324(古)			27
324	3	L E-25	楕円形	C	(0.8)	(1.4)	0.4		323(新)			27
325	3	K X-23	長方形	B 2	0.6	2.3	0.5		—			26
326	3	K W-23	円形	F	0.7	0.8	0.4		341(古)			27
327	3	K W-23	溝状	B 1	0.8	—	0.2		328(不明), 341(不明)			27
328	3	K X-24	長方形	C	0.6	—	0.3		327(不明)			27
329	3	欠番										
330	3	K Y-27	長方形	C	1.0	2.4	0.1		—			27
331	3	K Y-28	長方形	B	0.7	—	0.4		—			28
332	3	欠番										
333	3	L B-22	長方形	B 1	0.7	3.6	0.6		334(新)			28
334	3	L C-22	楕円形?	D	0.7	—	0.7	陶器	333(古), 335(不明)		32	28
335	3	L C-21	長方形	B 1	1.0	(3.6)	0.6		334(不明), 336(古), 337(不明)			28
336	3	L D-21	長方形	B 1	0.8	(3.4)	0.7		335(新), 337(古)			28
337	3	L D-21	溝状	B 1	0.9	5.4	0.5		335(不明), 336(新)			28
338	3	L E-21	溝状	B 1	0.8	11.3	0.8		339(古)		33	28
339	3	L G-20	溝状	B 1	0.7	—	0.6		338(新)			
340	3	L E-21	楕円形	D	1.0	1.6	0.4		—			
341	3	K W-23	溝状	B 1	0.9	—	0.2		326(新), 327(不明)			
342	3	欠番										
343	3	L G-24	溝状	B 1	0.7	5.8	0.6		—			28
344	3	L G-26	溝状	B 4	0.7	7.0	0.8	陶磁器, 石臼	—		34	29
345	3	L I-25	長方形?	B 3	1.1	—	0.7		—			28
346	3	L F-25	長方形	B 1	0.6	(2.7)	0.6	陶器	—		33	29
347	3	L F-26	長方形?	B 4	0.8	—	1.0		—			28

※重複の記載について

例えば、2号土坑の重複で「3(新)」と記入してある場合は、3号土坑と重複し、3号土坑の方が新しいことを意味する。

## 第4章

### 白井北中道遺跡

## 第1節 FP上面の概要

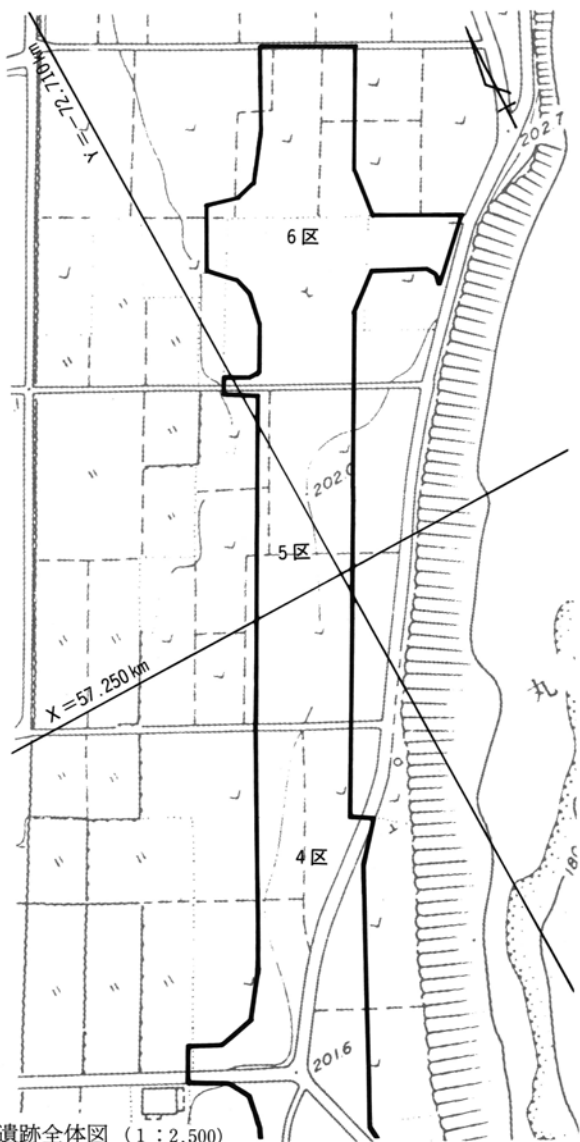
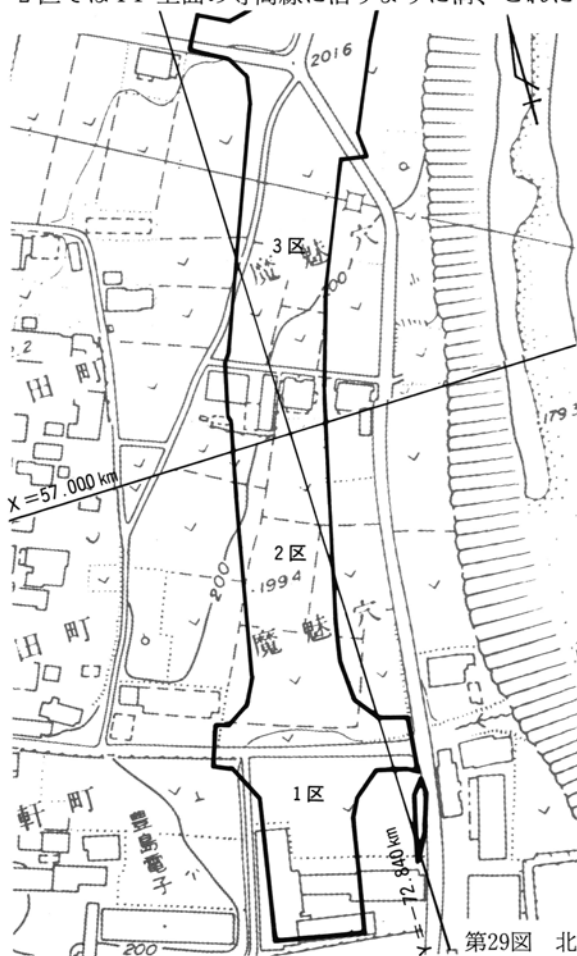
白井北中道遺跡は白井宿の北東に位置し、白井城の北遠構を挟んで南側に1区、北側に2～6区を設定した。1区では工事用車両の通行のため現道を一部拡幅した部分の調査を行った。6区はトレンチ調査を行い、遺構の検出された部分を拡張した。

表土層を除去しFP上面を検出したところで、現状では平坦な2区と3区で谷地形が現れた。これらはFP下面の地形の影響を受けている。3区の南部では一次堆積のFPを切って、ラミナの発達するFPの二次堆積層が広範囲にあり、FP堆積後(6世紀中葉以降)かなりの水の流れたと思われる。

1区では白井城の北遠構と東遠構の一部を調査した。僅かな面積であったため遺構の形状等を明らかにすることはできなかった。また、溝状の土坑群が格子状に配されているのが、この区の特徴である。2区ではFP上面の等高線に沿うように溝、これに

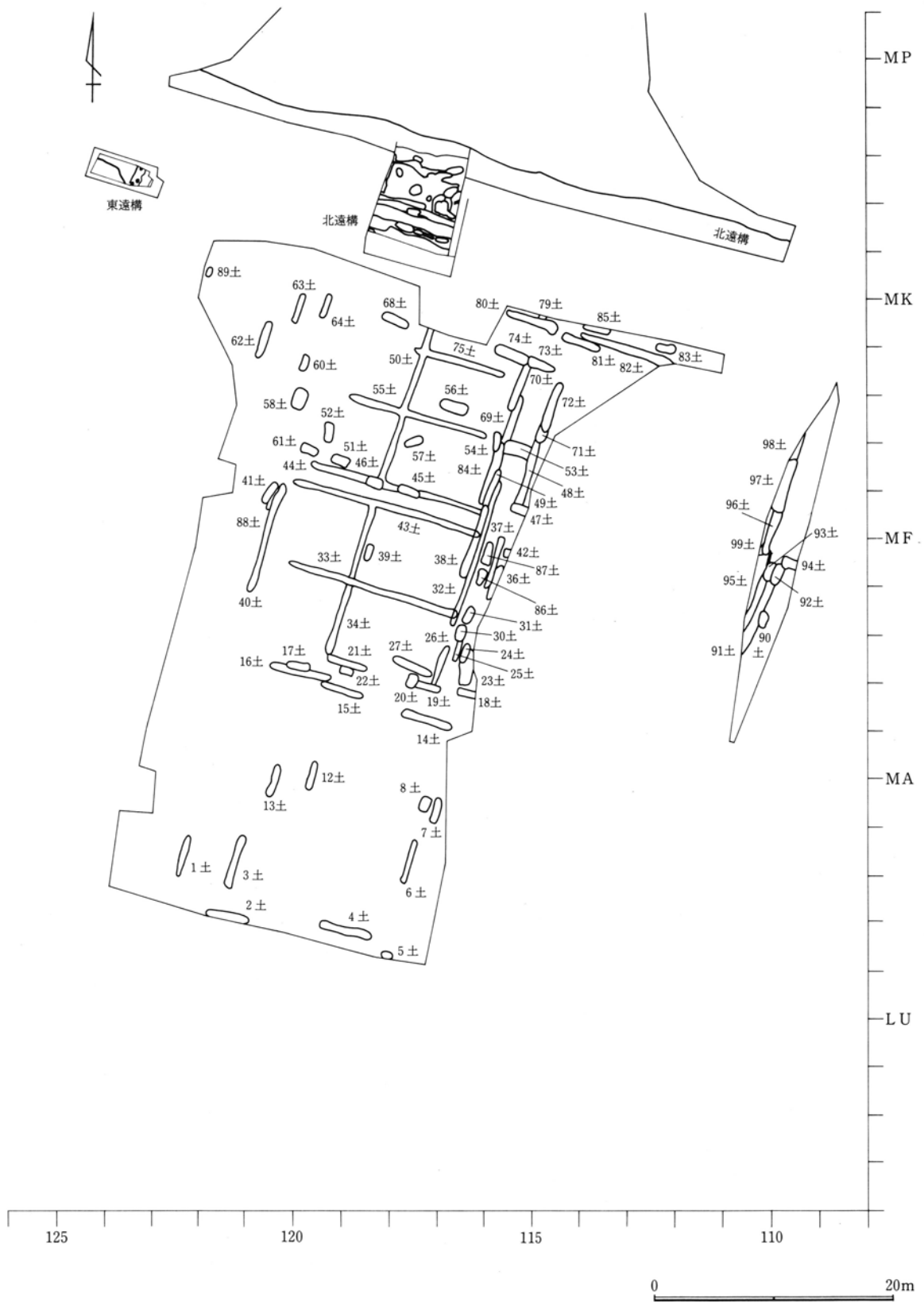
重複する畠跡などが検出され、調査区の北部に円形土坑がまとまっている。3区は南部で溝が、北東部で道路遺構が検出された。道路遺構は近世に「夜盗道」と呼ばれていた道と関連するものと思われる。

4区では壁土などに利用する土を採掘したと考えられる土坑を検出している。また、各区を通じて溝状の土坑が多数検出されたが、これらは1区を除いては、走向が北から東へ25°～30°傾いたものとそれに直行するものがほとんどで、きわめて規則的である。これらの土坑は、出土遺物が江戸時代後期(18世紀後半～19世紀前半)の陶磁器に集中していることから、一部の中世の土壌墓を除いては、近世のものが大半と考えられる。



第29図 北中道遺跡全体図 (1:2,500)

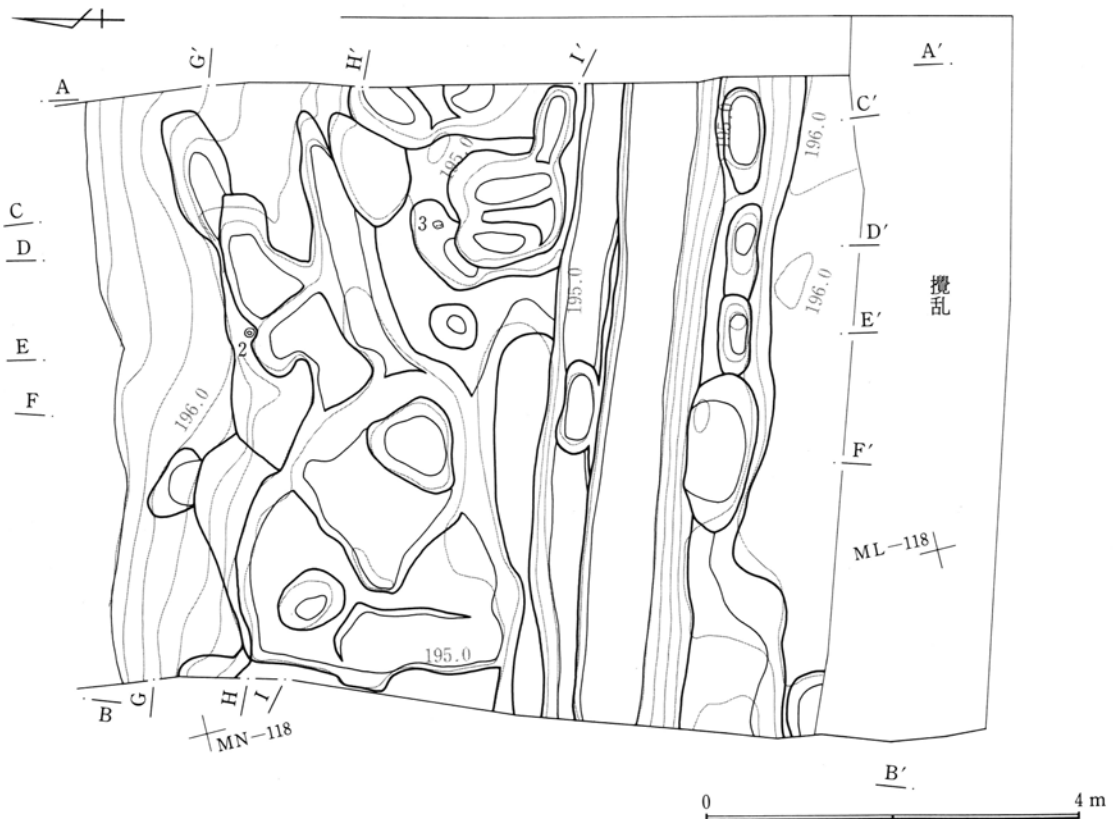
# 第2節 白井北中道遺跡1区



第30図 北中道遺跡1区全体図

**北遠構** 位置 白井城の北遠構が利根川に達する部分のやや西側(第32図)で、現在の道路下をトレンチ調査した。ML-117付近。1区と2区の間。 **形状・規模** 検出できた幅は9mに達するが、堀よりも新しい時期の土坑が重複し、実際の堀の幅は不明である。現在の地表面から底面までの深さは、およそ3mである。最深部は幅70cmの箱型の溝となっている。この北側に、やや底面が浅い幅50cmの溝状の落ち込みがほぼ平行する。さらに北寄りでは、不定形の落ち込みが数多く見られ、底面の凹凸が激しい。南側の斜面部分には東西に並ぶように、幅40~70cmの土坑が連なる。 **埋没土** 最も深い溝部分では、底部に粘質土があり、その上位は地山のローム、砂層、粘質土などが互層をなしている。これらを切るように、断面Aでは4a層が、断面Bでは5b層・2層が堆積している。これは形状のところで記載したやや浅い溝状部分にあたる。この2条の溝状部分を覆うように硬化面が存在する。断面Bでは硬化面は、中間に粘質土・砂層を挟んで2層確認できるが、断面A

では間層がなく一体化している。この硬化面を切るようにして、北側の不定形の落ち込み部分が掘り込まれている。堀の中位から上位の土層は、粘質土や砂層が部分的に互層をなすが、大部分はFPを含む暗褐色土である。中央部に幅40cm弱の掘り込みがあり、堀の中位に達している。埋没土は炭化物や焼土を含んでいる。 **遺物** 北側の不定形の落ち込みの底部で、天目茶碗と鉄滓が出土し、覆土中から磁器片が出土している。いずれも北遠構の築造に関するものではない。 **所見** 今回のトレンチ調査では、白井城が存続していた時期の、北遠構の形状はよくわからなかった。最深部の溝状に掘り込まれている部分や、その北側の溝状の部分は遠構としての掘り込みと考えられるが、不定形の落ち込み部分は、出土遺物や土層断面の状況から、後世のものである。白井二位屋遺跡の調査で、仁居谷城の堀の斜面部に後世になって土坑が掘られる例があり、同様な土坑の可能性はある。

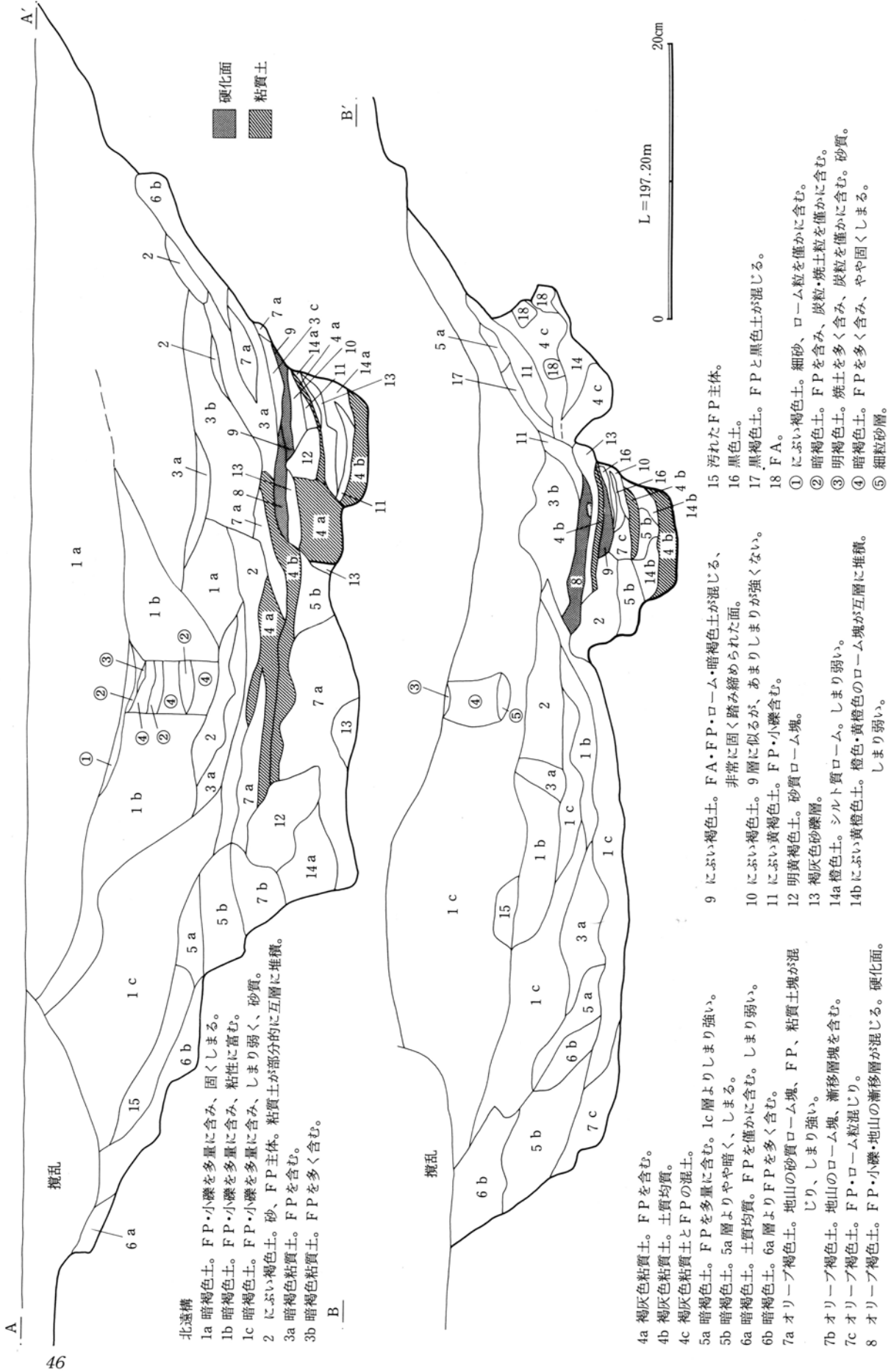


第31図 北遠構平面図

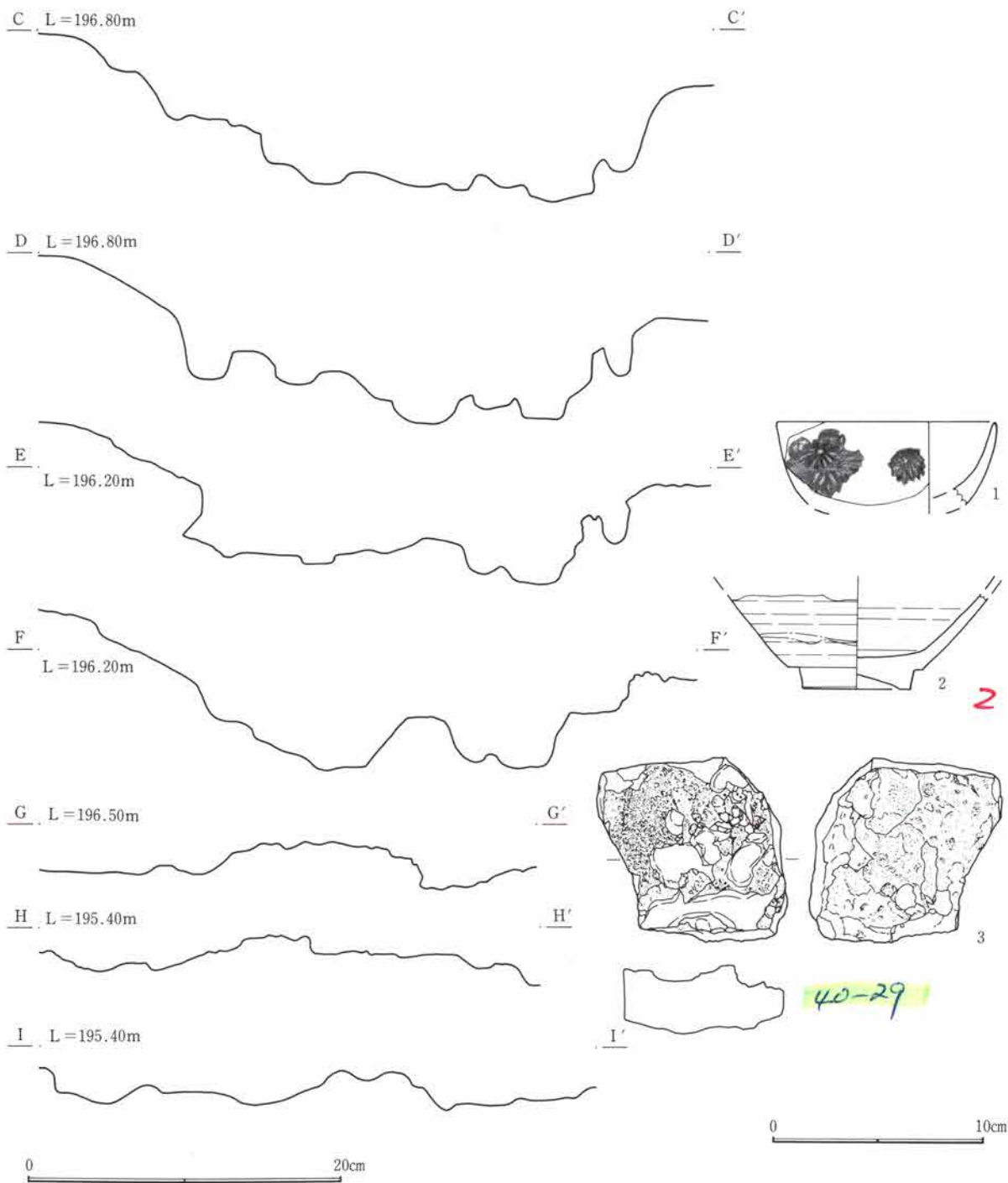




第32図 遠構トレンチ位置図 (『群馬県古城壘址の研究 下巻』1972に加筆)



第33図 北遠構断面図



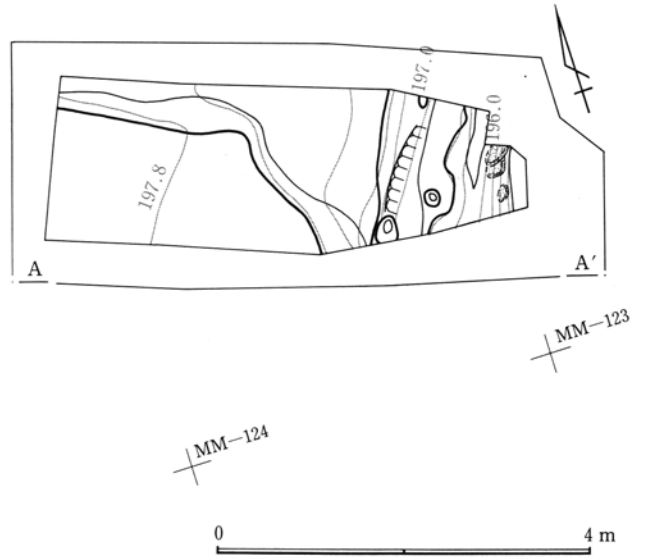
第34図 北遠構断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
北遠構 -1	肥前 磁器 碗	覆土	口 底 高 — — — (10.4)	外面 コンニャク印判蔦の葉文。	染付	口～胴部1/5 18c後～ 19c前
北遠構 -2	瀬戸・美濃 陶器 碗	+1	口 底 高 — — — 5.0	天目茶碗。底部径が大きく、高台端部の幅が狭い。 高台脇の段が明瞭。体部が直線的でやや外反する。 高台脇以下鉄化粧。	鉄釉	体～底部 17c前～中
北遠構 -3	鉄滓	底面 直上	幅 長 重 7.5 8.5 444	裏面は大型炉底を思わせる。鉄滓としては重い方。割れ は人為。銚の未成状態か。		

第4章 白井北中道遺跡

**東遠構** 位置 白井城の東遠構が北遠構と交わる部分でトレンチ調査を行った。MM-123、1区北西部。 **形状・規模** 狭い範囲のトレンチのため、南北に延びる堀の西側の落ち際のみ調査となり、規模の確認はできなかった。現在の地表面から2.6m掘り下げたが底面には至っていない。斜面部にはピット状の落ち込みがある。また、トレンチの底部付近では径20cmを超える円礫が斜面部に数点認められたが、石を組んでいる様子はない。北遠構との交点は確認できなかった。 **埋没土** FPを含む暗褐色土が主体である。東遠構の外側になるが、汚れたFPを主体とする層の上面に砂質の黒褐色土が薄い層をなしている。 **現地測量** 東遠構は、小さな段丘に沿って作られており、近世の頃は夜盗道と呼ばれる道として利用されていた。現在では宅地化や畑地化のため、埋め戻されている部分があるが、点々と窪地が続いており、その存在を追うことができる（付図1）。現地の測量を行った結果、僅かに蛇行しながら580mにわたって堀跡を確認することができた。遠

構の痕跡の窪地が途切れる部分は、埋め戻したと思われるような斜面の他に、掘り残したかのように西側の高い面が迫り出している箇所が認められた。この部分が当時の掘り残しなのか、後世の盛土なのかは不明である。



A L=197.20m

A'



東遠構

- 1 暗褐色土。拳大の礫、FP (径2~3cm)を含む。
- 2 褐色土。FP (径0.5~2cm)を含む。
- 3 黄褐色土。土粒細かく、FP (径0.5cm)を少量含む。
- 4 黒褐色土。FP (径0.5~3cm)を多く含む。
- 5 汚れたFP主体。
- 6 黒褐色土。砂質。縞状に入る。
- 7 暗褐色土。土粒細かい。FP (径1cm)を僅かに含む。  
下部では大きな礫を含む。

第35図 東遠構平・断面図

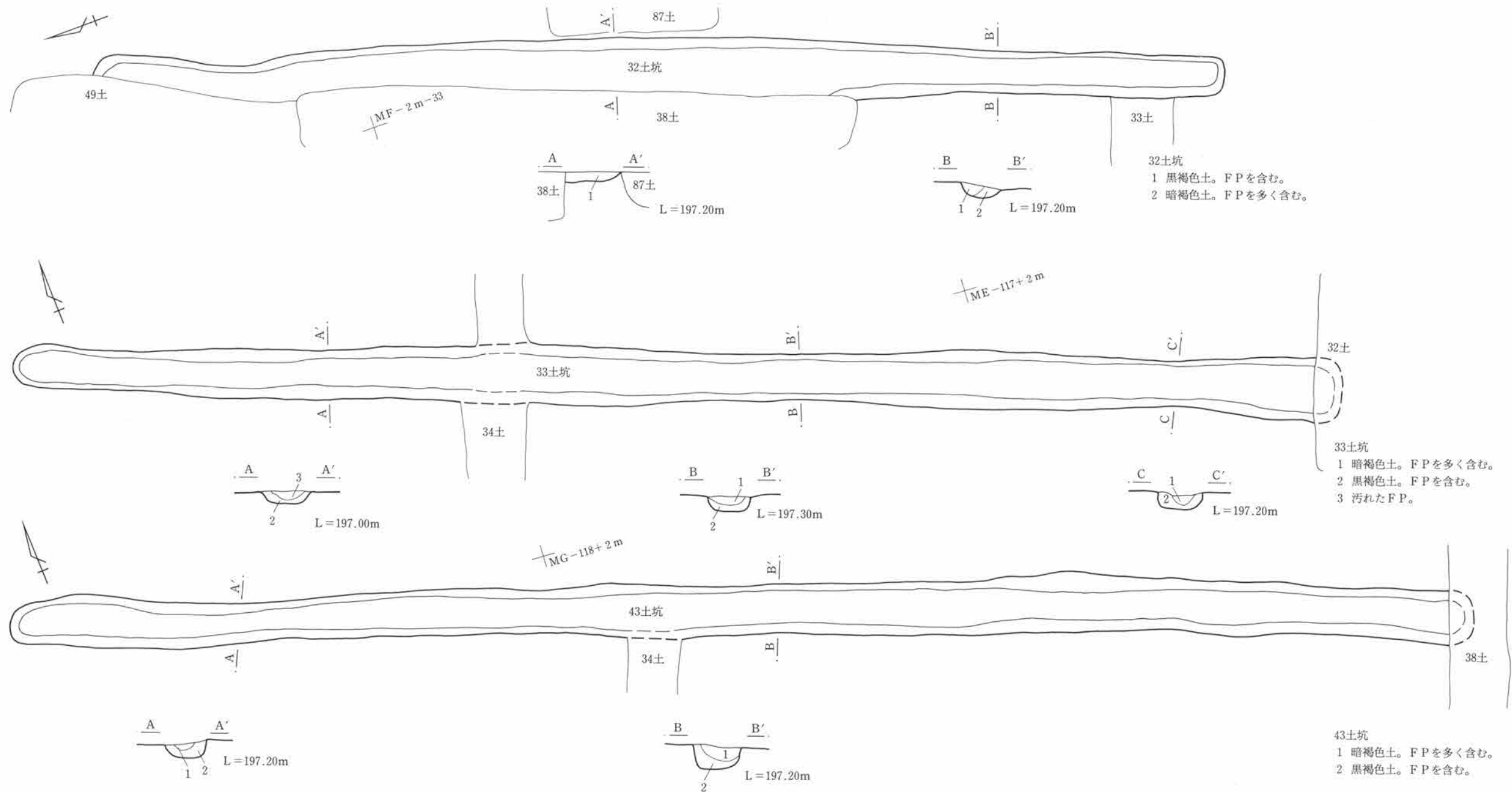
32号土坑 位置 ME-116、1区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×16.8×0.1mである。埋没土 黒褐色土。重複 38号・49号土坑より古い。33号土坑と重複するが、新旧関係は不明。分類 B1

33号土坑 位置 MD-117、1区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×

(14.7)×0.2mである。埋没土 底部には黒褐色土が堆積している。重複 32号・34号土坑と直交するが、新旧関係は不明である。分類 B1

43号土坑 位置 MF-118、1区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×(15.8)×0.3mである。埋没土 底部には黒褐色土が堆積する。遺物 江戸時代のものと思われる陶磁

器の破片が出土している。重複 34号・38号土坑と直交するが、新旧関係は不明である。分類 B1



第36図 32号・33号・43号土坑平・断面図

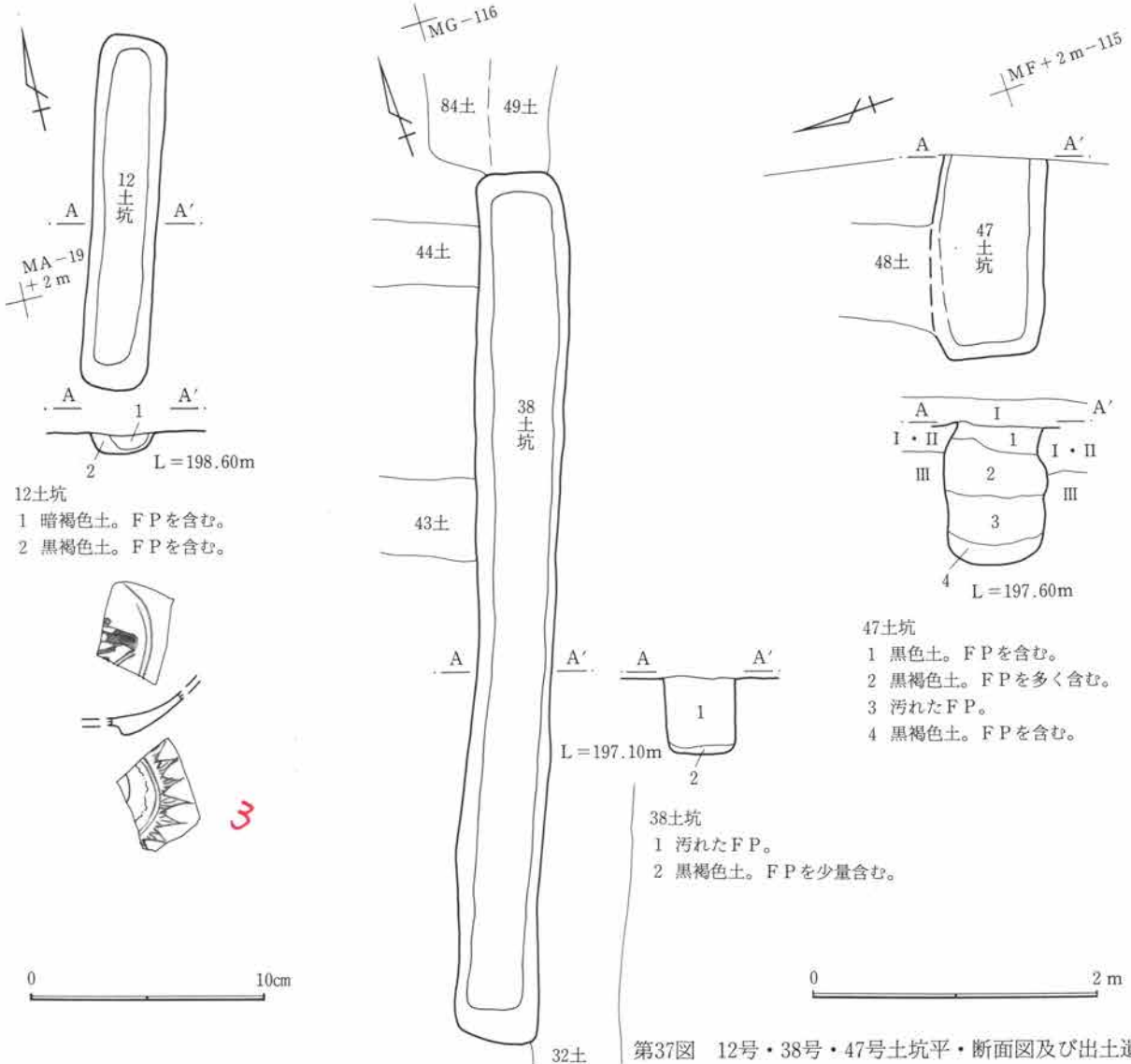


**12号土坑** 位置 MA-119、1区南部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各0.5×2.5×0.2 m。埋没土 暗褐色土と黒褐色土で埋まり、FPの量は多くない。遺物 中国産の磁器の破片が出土しており、中世のものと考えられる。この土坑からは他に江戸時代の磁器片も出土している。分類 B1

**38号土坑** 位置 ME-116、1区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×6.2×0.5mである。埋没土 底部に厚さ5 cm程の黒褐色土があり、その上位は表面が汚れたFPで埋まる。

**重複** 32号・49号土坑より新しい。43号・44号土坑とは、重複するが新旧関係は不明である。分類 B3

**47号土坑** 位置 MF-115、1区中央部。形状・規模 長方形。短軸・深さは、それぞれ0.8×1.0mである。この土坑は調査区外へ続いており、現在の地表面からの断面が確認できた。基本土層II層(FP層の上位の黒褐色土)は土坑に切られている。埋没土 底部から黒褐色土→FP主体→黒色土の順に堆積している。重複 48号土坑と重複するが、新旧関係は不明。分類 B1



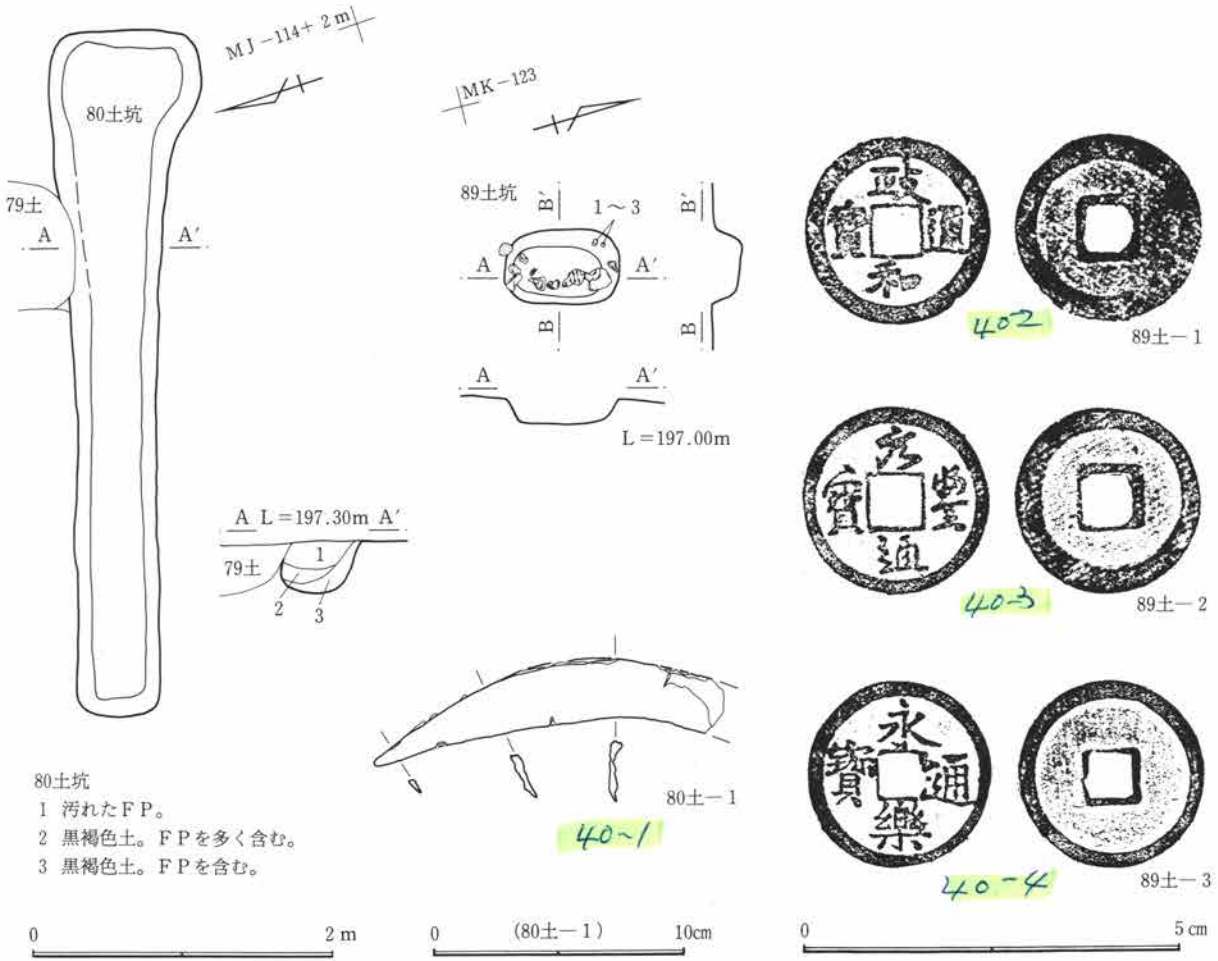
第37図 12号・38号・47号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
12土-1	中国 磁器 皿	覆土	口 底 高	— — — 外面 蓮弁様の文様。 内面 不明文様。 碁笥底。	染付	破片 15c 後～ 16c 前

**80号土坑** 位置 MJ-115、1区北部。形状・規模 溝状だが、東端部が広がっている。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×4.6×0.3mである。埋没土 下位に黒褐色土があり、上位ほどFPを多く含むようになる。遺物 鎌の刃が出土しているが、柄に装着する部分は欠損している。重複 79号土坑より古い。分類 B1

楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×0.8×0.2mである。遺物 人骨と古銭が出土。人骨は残存状況が悪く、計測可能なものはない。北端で歯が、南端で大腿骨の破片が出土していることや骨片の出土状況、土坑の規模から、西向き横臥屈葬と考えられる。古銭は頭部の西側で3点検出され、永楽通寶を含んでいる。分類 A

**89号土坑** 位置 MK-121、1区北部。形状・規模



第38図 80号・89号土坑平・断面図及び出土遺物

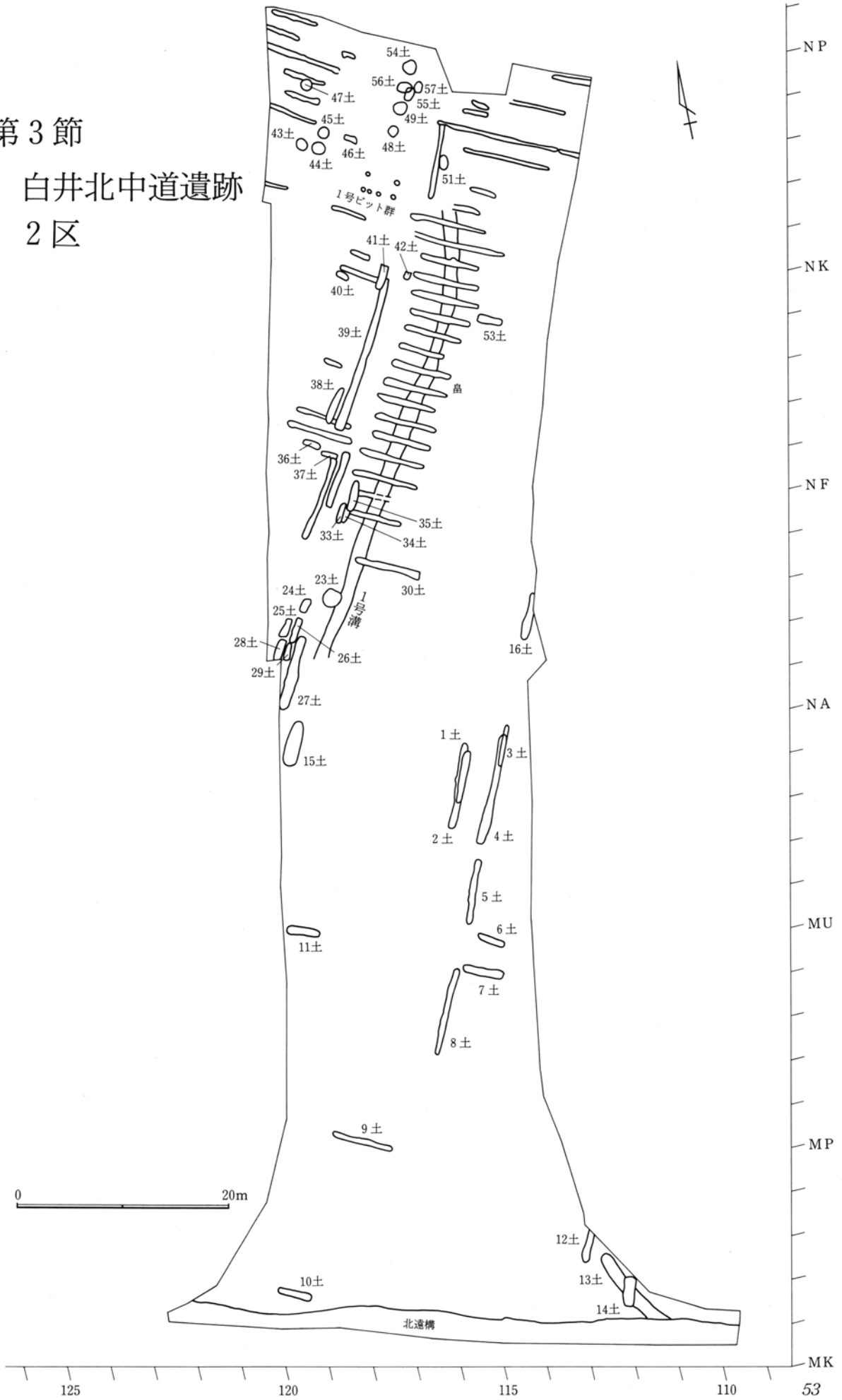
番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
80土-1	鉄製品 鎌	覆土	最大幅 2.4 最小幅 0.7 現存長 14.2	細かな層状剝落は発達せず、大きなクラック状の錆割れ。使用消耗顕著で身細くなる。元側の割れは調査時欠損。	洋鉄か	3/4 明治以降
89土-1	古銭	覆土	径 2.5 重 3.1	政和通寶、穿の径7mm		完形
89土-2	古銭	覆土	径 2.5 重 3.4	元豊通寶、穿の径7mm		完形
89土-3	古銭	覆土	径 2.5 重 3.5	永楽通寶、穿の径6mm		完形



第3節

白井北中道遺跡

2区



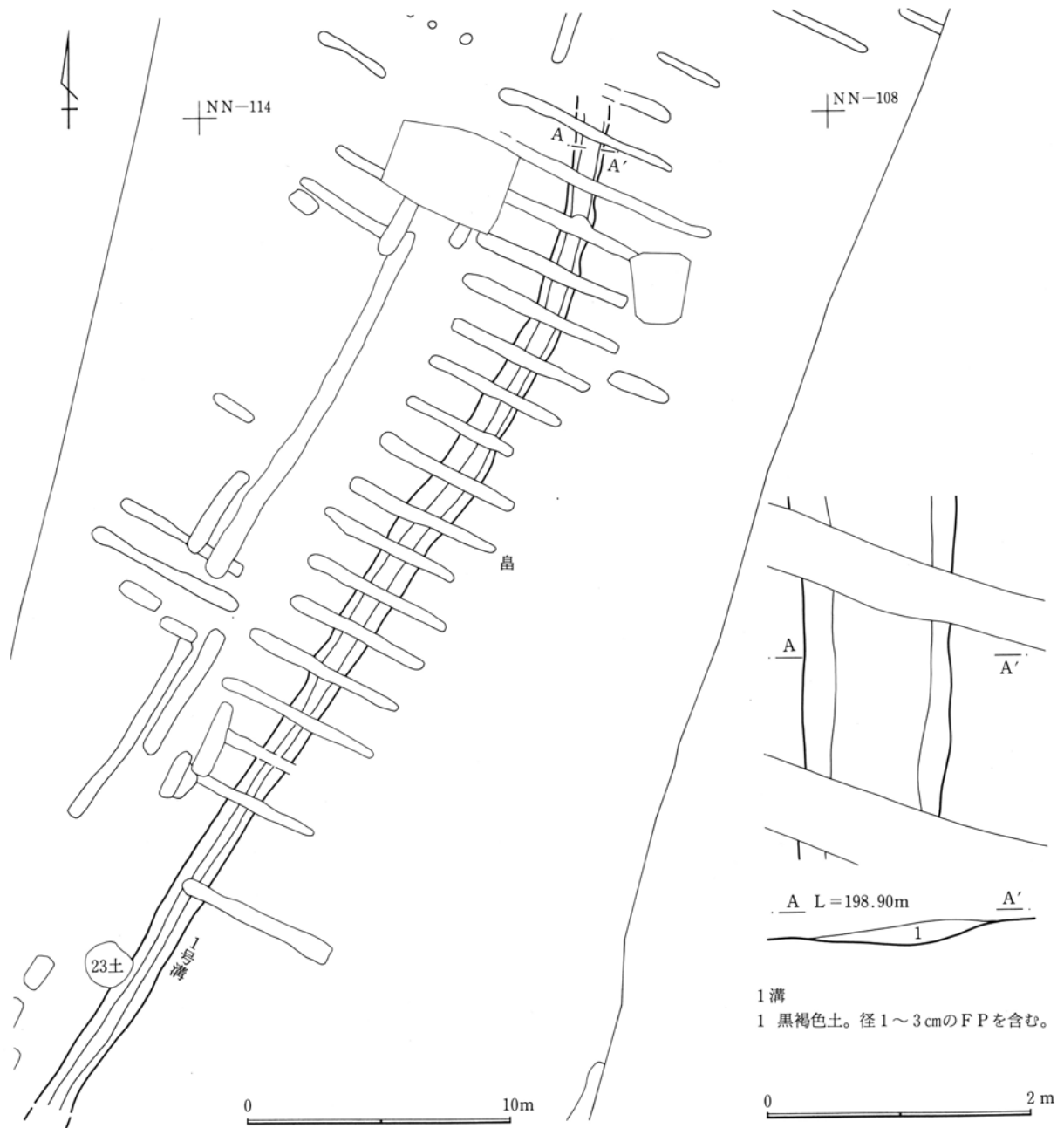
第39図 北中道遺跡 2区全体図

第4章 白井北中道遺跡

**北遠構** 位置 2区南部。 **形状・規模** 調査区の南端で、N-106°-Eの走向をもつ堀の北側の南端を検出した。 **埋没土** FPを多く含む黒褐色土～暗褐色土で埋もれる。

**1号溝** 位置 2区中央部～北部。 **形状・規模** 検出面の等高線に沿うように延びる幅1.2mの溝を、約45mにわたって検出した。検出面からの深さは15cm程度と浅く、溝の両端は確認できなかった。底面は南に向かって傾斜しており、検出した北端と南端で

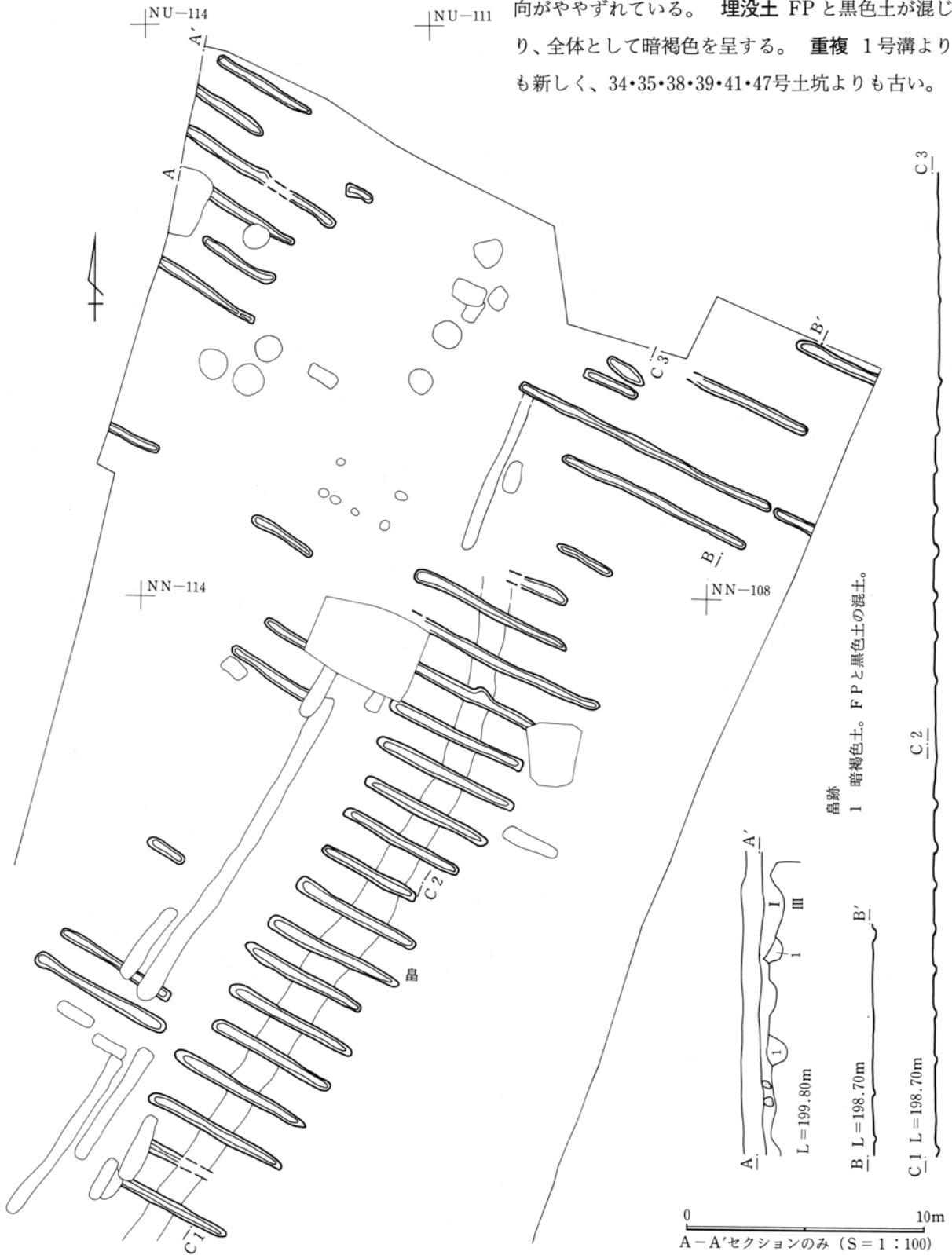
は35cmの落差がある。検出面のFP層上面は、1号溝の延びる部分の西側が高く、東側が低くなり、地形の変換点に溝が存在している。 **埋没土** FPを含む黒褐色土で埋まり、水の流れたような形跡はない。溝の底面はFP軽石層の上部を掘り込む程度である。 **遺物** なし。 **重複** 畠跡および23号土坑、30号土坑よりも古い。 **所見** 溝の年代は出土遺物がなことから明かではない。



第40図 1号溝平・断面図

**畠跡** 位置 2区北部。形状・規模 畠の畝間と考えられる溝状の落ち込み列を、約1,000㎡にわたって検出した。それらの1本1本は、幅50cm程度、深

さ5~20cmの溝状で、1.7~2.0mの間隔で平行に並んでいる。検出できる個々の長さは2~12mとまちまちである。調査区の北西隅にある一群は、他と走向がやわずれている。埋没土 FP と黒色土が混じり、全体として暗褐色を呈する。重複 1号溝よりも新しく、34・35・38・39・41・47号土坑よりも古い。



第41図 畠跡平・断面図

23号土坑 位置 NE-114、2区中央部。形状・規模 円形。短軸・長軸・深さは、各1.6×1.7×0.8 m。

埋没土 FP を多く含む黒褐色土主体で、中間に暗褐色土を挟む。重複 1号溝より新しい。分類 D

26号土坑 位置 NE-116、2区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×2.4×0.5mである。

埋没土 底部に厚さ5cm程の黒褐色土があり、その上位はFPが主体となる。遺物 □元重□の破片が出土。分類 B1

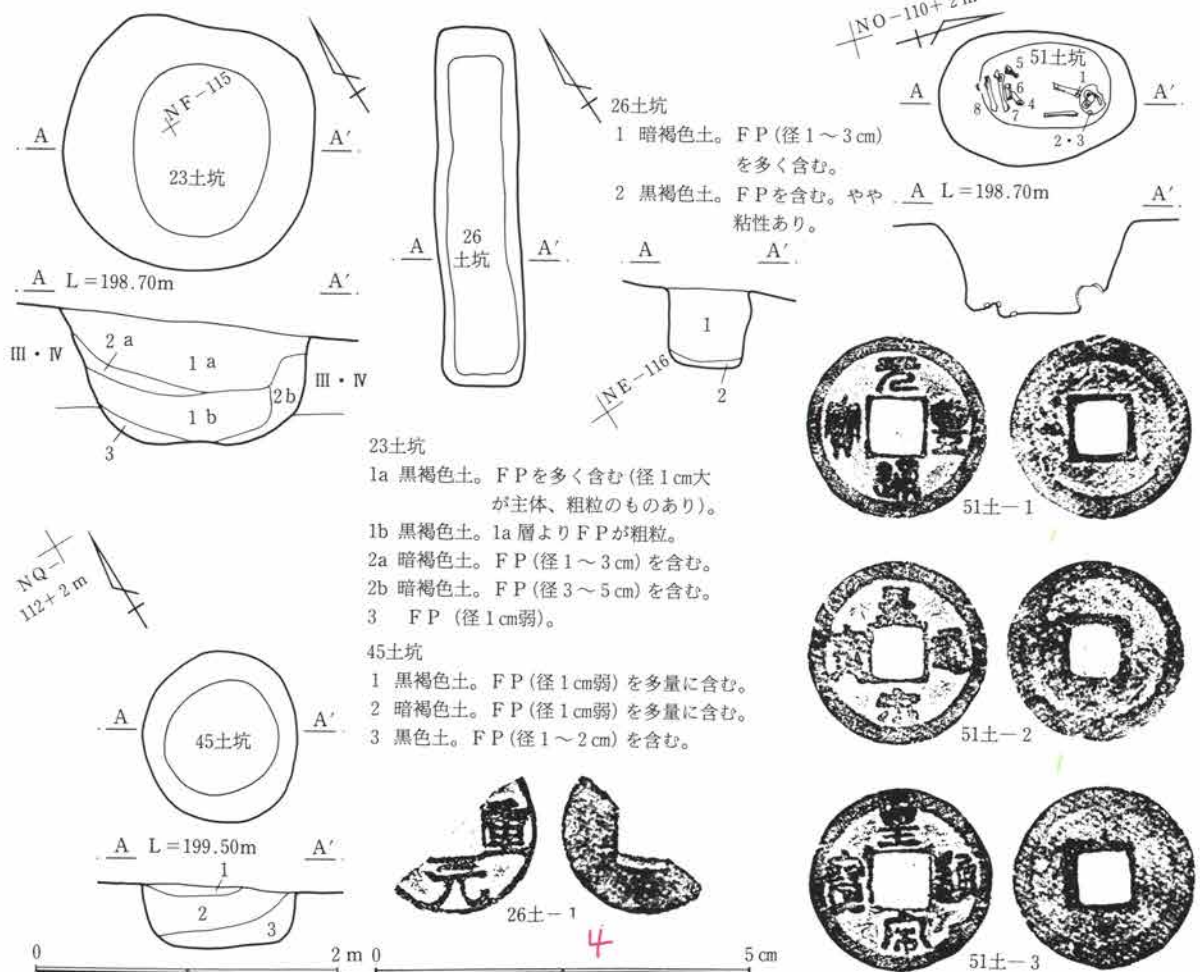
45号土坑 位置 NP-112、北部。形状・規模 円形。短軸・長軸・深さは、各1.0×1.1×0.4m。底面は平坦である。

埋没土 底部に黒色土があり、その上位はFPを多量に含む暗褐色土となる。分類 D

51号土坑 位置 NO-110、2区北部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×1.4×0.6mである。

遺物 人骨と古銭が出土した。骨は、3が上腕骨、4と6が大腿骨、7と8が脛骨で、上顎は出土しなかった(P152参照)。

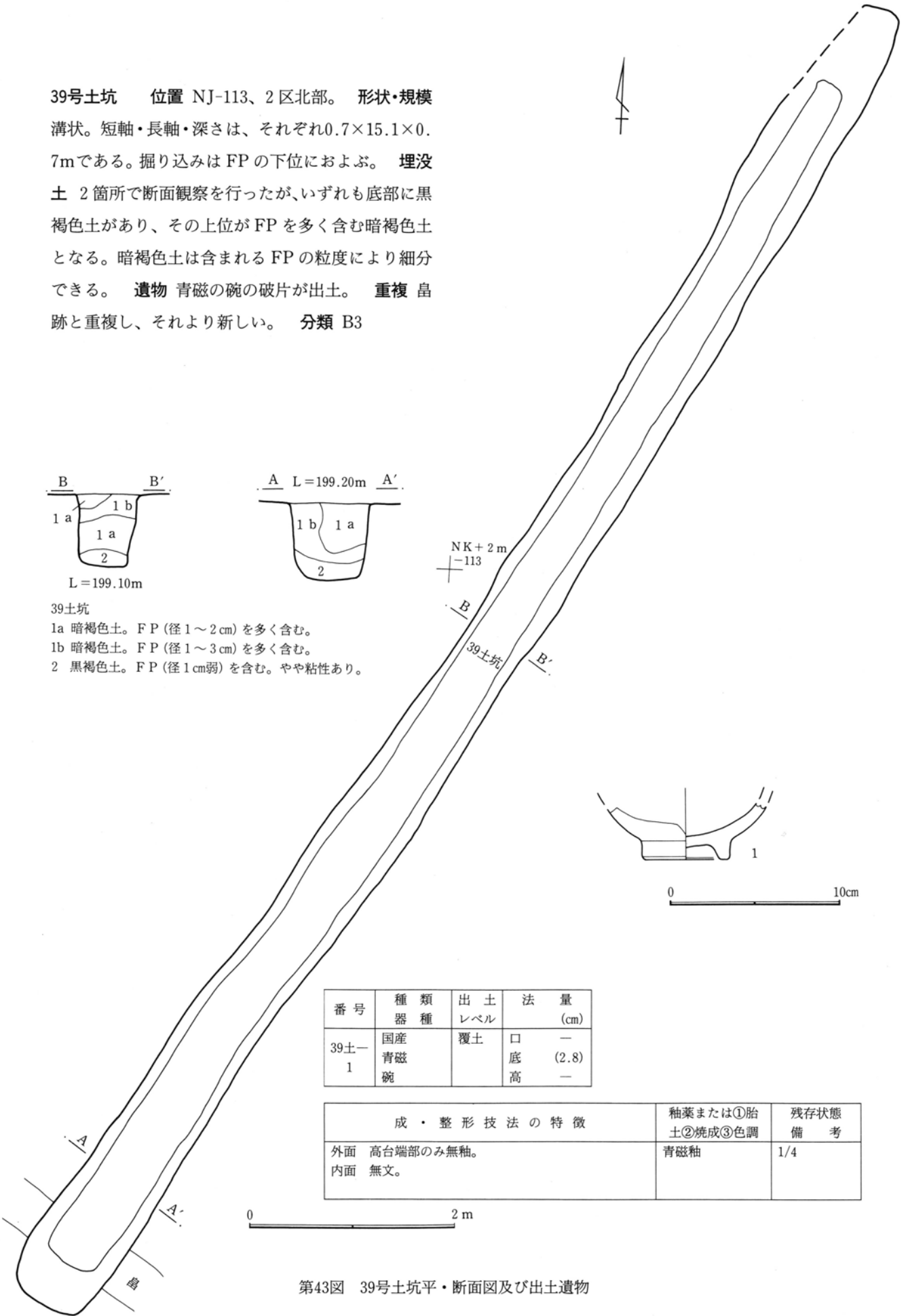
頭部を北に向けた横臥屈葬と思われる。古銭は頭部周辺で、元豊通寶と皇宋通寶が出土している。分類 A



第42図 23号・26号・45号・51号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
26土-1	古銭	覆土	径 重 — 0.9	□元重□		1/2
51土-1	古銭	+8	径 重 2.5 2.9	元豊通寶、穿の径7mm		完形
51土-2	古銭	底面 直上	径 重 2.4 2.3	皇宋通寶、穿の径7mm		完形
51土-3	古銭	+8	径 重 2.4 3.1	皇宋通寶、穿の径7mm		完形

39号土坑 位置 NJ-113、2区北部。形状・規模  
溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×15.1×0.  
7mである。掘り込みはFPの下位におよぶ。埋没  
土 2箇所で断面観察を行ったが、いずれも底部に黒  
褐色土があり、その上位がFPを多く含む暗褐色土  
となる。暗褐色土は含まれるFPの粒度により細分  
できる。遺物 青磁の碗の破片が出土。重複 畠  
跡と重複し、それより新しい。分類 B3



- 39土坑  
1a 暗褐色土。FP (径1~2cm) を多く含む。  
1b 暗褐色土。FP (径1~3cm) を多く含む。  
2 黒褐色土。FP (径1cm弱) を含む。やや粘性あり。

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)
39土- 1	国産 青磁 碗	覆土	口 — 底 (2.8) 高 —

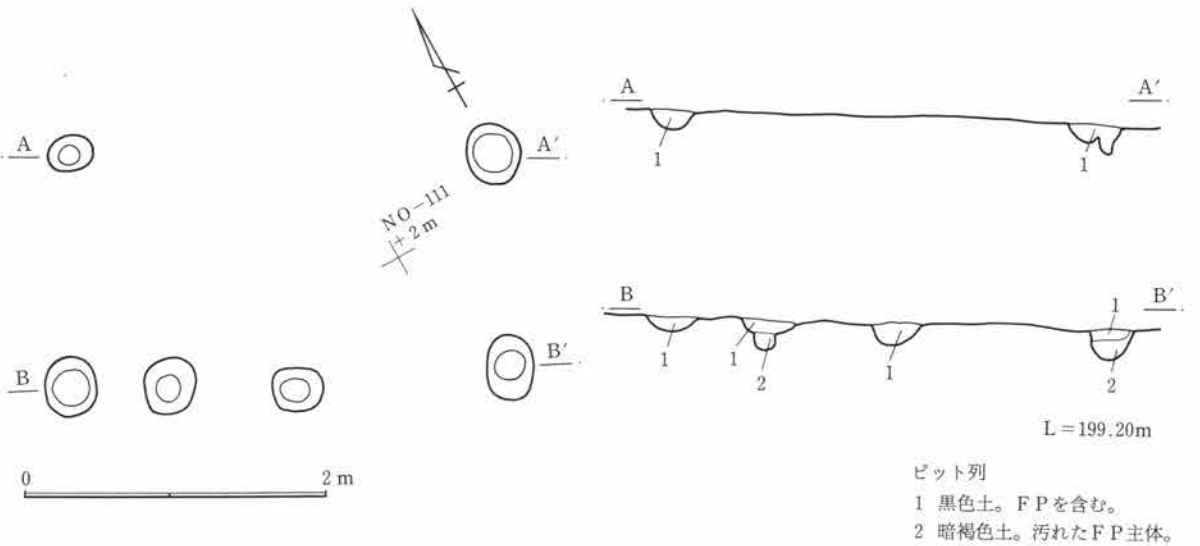
成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
外面 高台端部のみ無釉。 内面 無文。	青磁釉	1/4

第43図 39号土坑平・断面図及び出土遺物

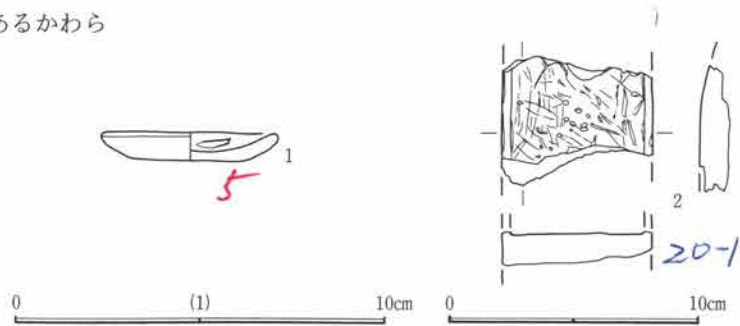
第4章 白井北中道遺跡

**1号ピット群** 位置 NO-111、2区北部。形状・規模 直径30~40cmのピット6個が、南東—北西方向に長い長方形に並ぶ。北側の長辺は2.8mで2個のピットが、南側の長辺は2.9mで4個のピットが並び、西側の短辺は1.5m、東側の短辺は1.4mである。ピットの深さは、浅いもので10cm、深いもので20cm

である。埋没土 FP を含む黒色土で、2号・4号ピットはその下位に FP が主体の暗褐色土が堆積している。所見 遺物の出土がなく、他の遺構との重複関係もないことから、ピット群の年代は不明である。また、建物の柱穴とするにはピットの間隔が中途半端で、遺構の性格も不明である。



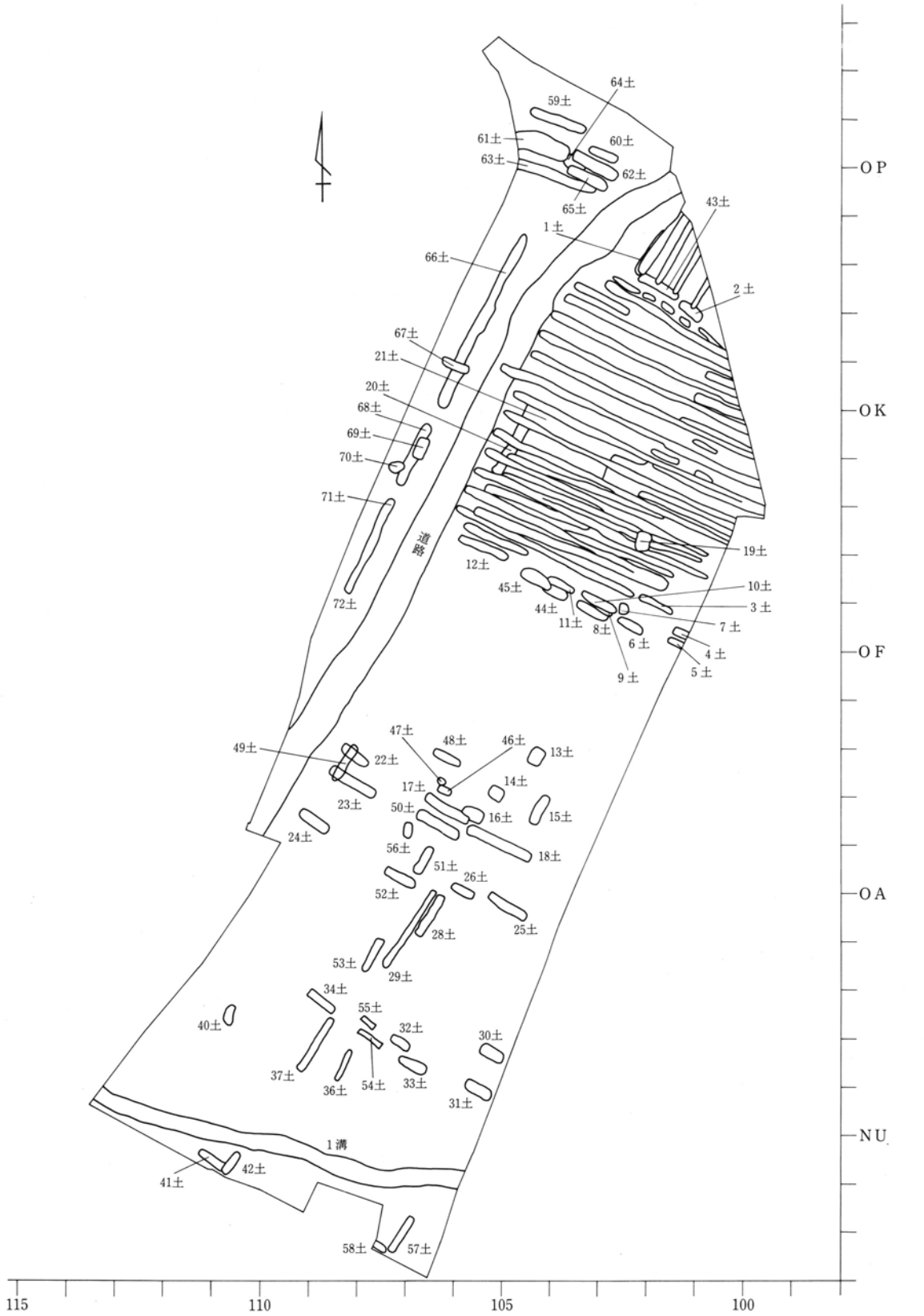
**遺構外出土遺物** NM-111グリッド付近で、頁岩製の碗の破片が出土した。また、線刻のあるかわらけの小皿が出土している。



第44図 ピット群平・断面図及び遺構外出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
遺構外 -1	かわらけ 皿	表土	口 (4.6) 底 (3.0) 高 0.7	手びねり。 内面 線刻あり。		1/5
遺構外 -2	石製品 碗	表土	幅 5.9 厚さ 1.3 重 50	石質は、頁岩中では軟らか。表の陸から海部にかけ、使用による光沢があり、さらに小傷と小ハガ跡あり。両側部鋸挽き後、研磨仕上げ。	頁岩	1/3 中世以降

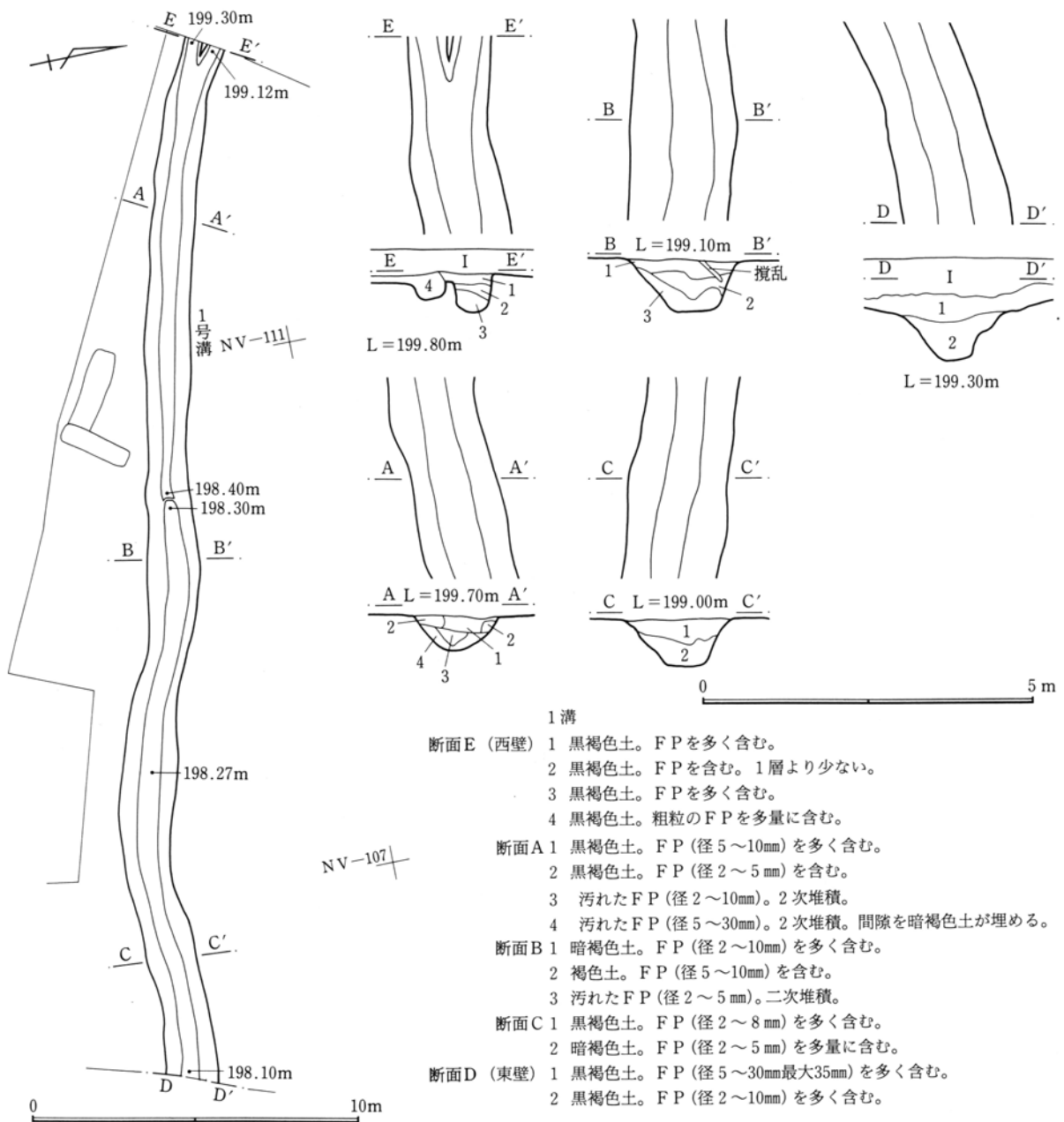
第4節 白井北中道遺跡3区



第45図 北中道遺跡3区全体図

**1号溝** 位置 3区南部。形状・規模 検出面での上幅が1.2~1.5m、深さが55~75cmの溝を31mにわたって検出した。走向はほぼ東西方向で、僅かに蛇行し、調査区を横切っている。溝の底面の標高は西端で199.12m、東端で198.10mを測り、落差は約1mである。途中、断面Bのやや西寄りで底面に16cmの段差が形成され、この場所を境にして、溝の底面が西側ではFP層中、東側ではFP層の下位まで掘り込んでいる。また、西端の調査区際では、溝が二股に分かれている。埋没土 FPを含む黒褐色土

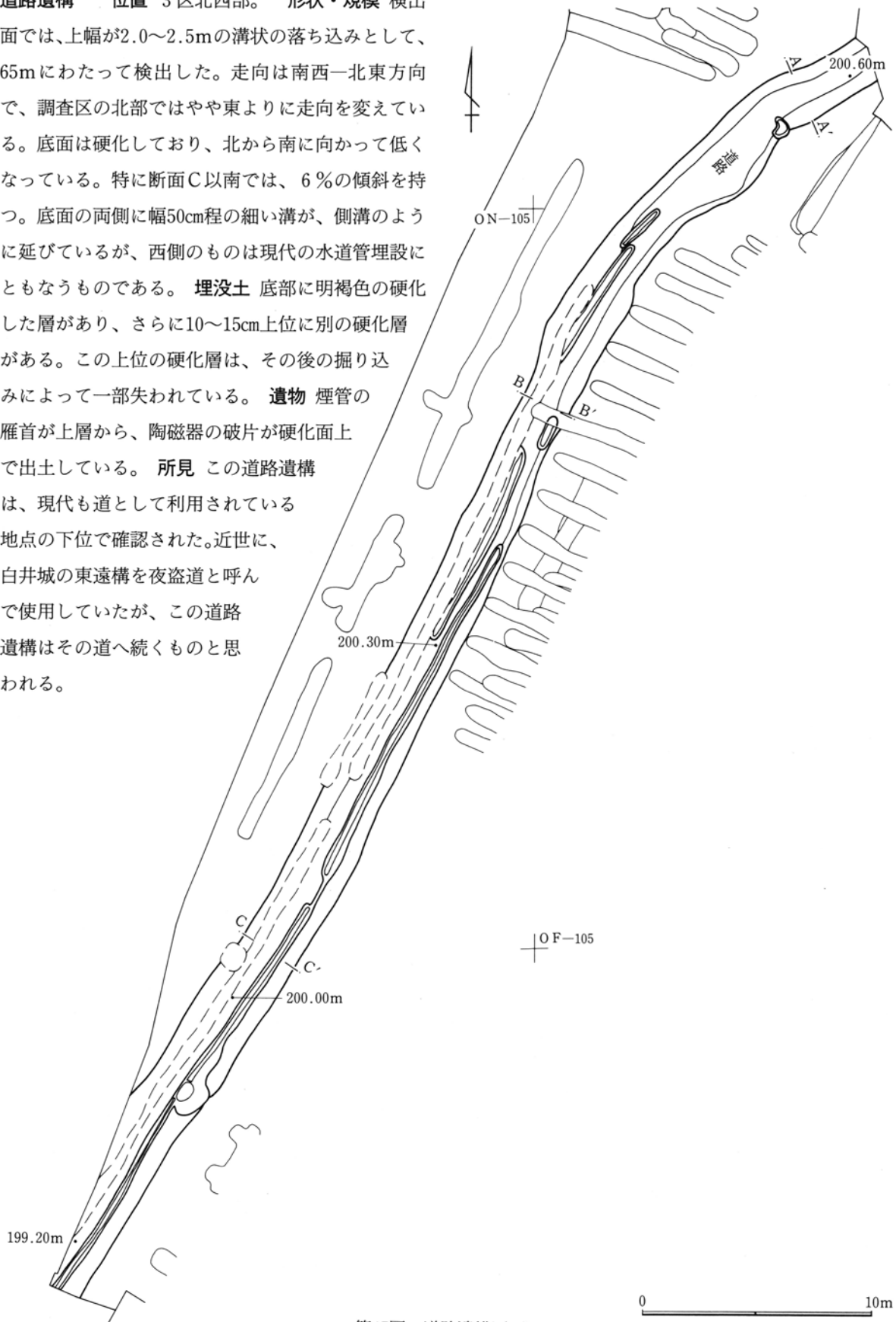
を主体として埋没しており、断面AとBでは、底部にFPを主体とする層がある。遺物 江戸時代のものと思われる陶器の破片が2点出土。所見 この溝は、埋没土には砂層など水の流れた痕跡はないが、底面が西から東に向かって約3%の傾斜をもつこと、溝は利根川に向かって直線的に延びており、およそ30mで現在の川となることなどから、水路の可能性が考えられる。出土遺物が僅かで、他の遺構との重複関係もないことから、遺構の詳しい年代は不明である。



第46図 1号溝平・断面図

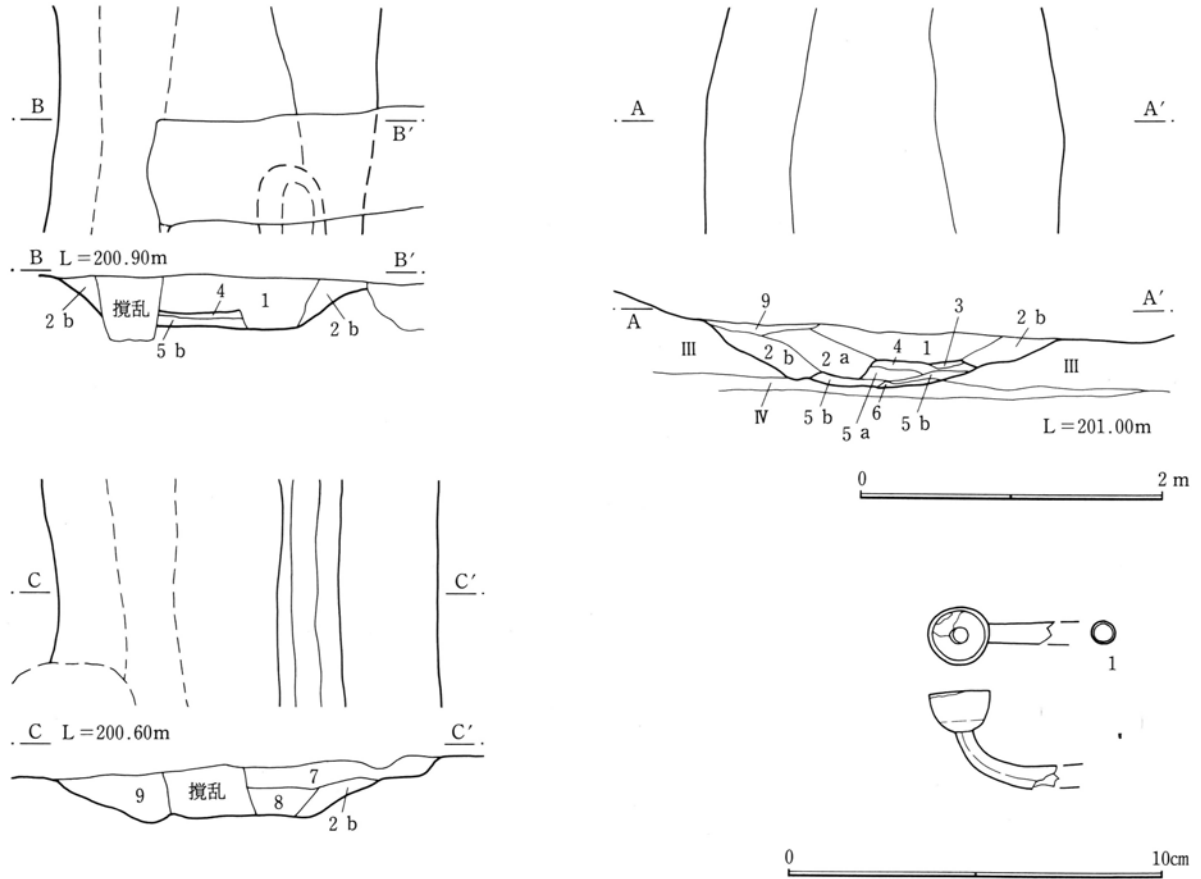


**道路遺構** 位置 3区北西部。 **形状・規模** 検出面では、上幅が2.0~2.5mの溝状の落ち込みとして、65mにわたって検出した。走向は南西-北東方向で、調査区の北部ではやや東よりに走向を変えている。底面は硬化しており、北から南に向かって低くなっている。特に断面C以南では、6%の傾斜を持つ。底面の両側に幅50cm程の細い溝が、側溝のように延びているが、西側のものは現代の水道管理設にともなうものである。 **埋没土** 底部に明褐色の硬化した層があり、さらに10~15cm上位に別の硬化層がある。この上位の硬化層は、その後の掘り込みによって一部失われている。 **遺物** 煙管の雁首が上層から、陶磁器の破片が硬化面上で出土している。 **所見** この道路遺構は、現代も道として利用されている地点の下位で確認された。近世に、白井城の東遠構を夜盗道と呼んで使用していたが、この道路遺構はその道へ続くものと思われる。



第47図 道路遺構平面図

第4章 白井北中道遺跡

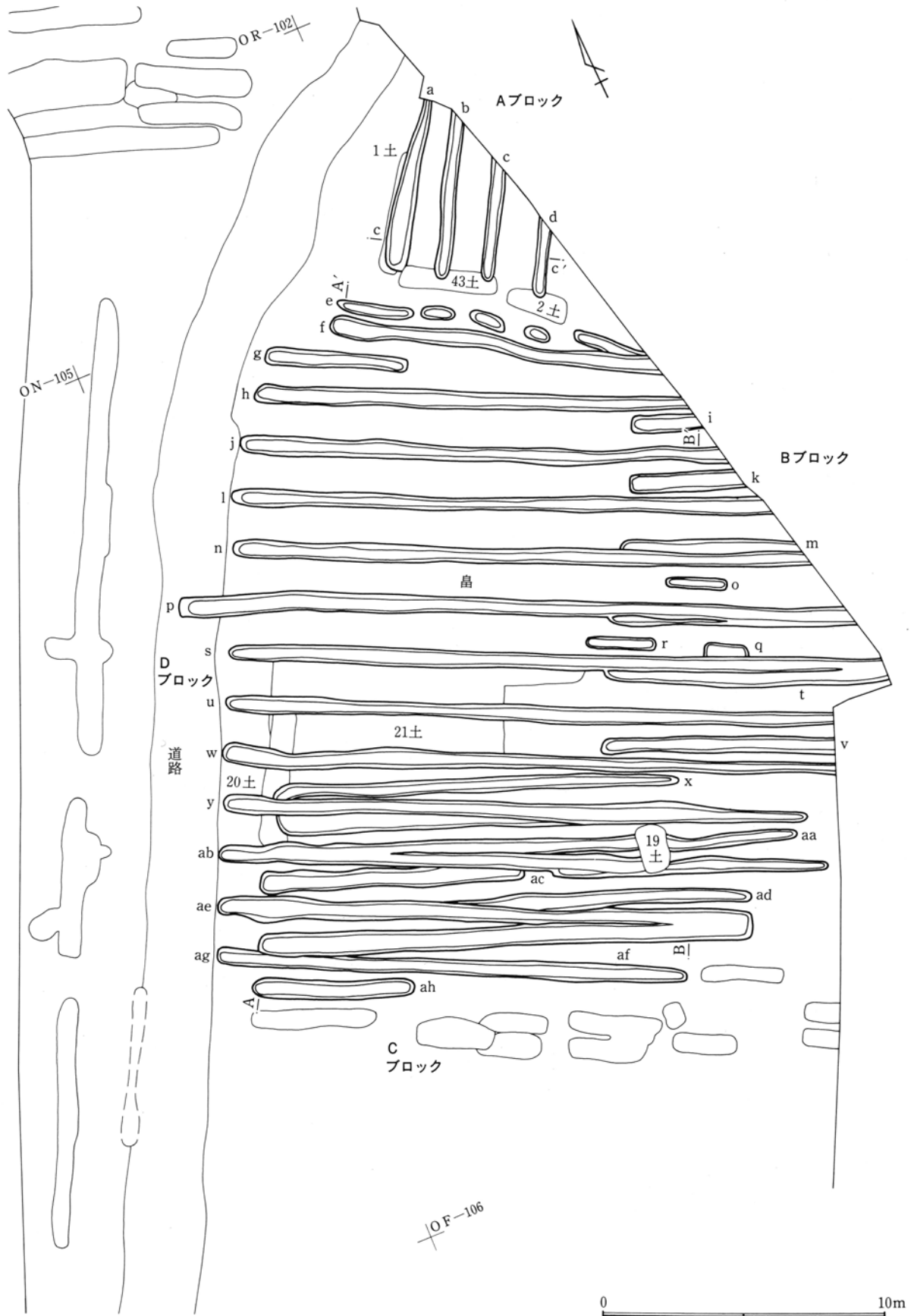


道路遺構 (各セクション図共通)

- 1 黒褐色土。FP・小礫を含む。しまりはあるがボソボソした層。
- 2a 暗褐色土。FP(1cm大)を含む。しまりあり。
- 2b 暗褐色土。2a層よりしまり強い。FPを含む。
- 3 浅黄色土。FPを敷いたような層。FP主体で、FPが踏まれて粉状になったもの。
- 4 褐灰色土。しまり強く、FP粒を含む。粒子細かくノロ状のものが硬化したような層。(埋没途中、路面復旧)ー第1面
- 5a 褐色土。FP(1cm大)を多く含み、固くしまる。灰褐色土を含む。
- 5b 褐色土。FP(1cm大)を含む。底面に鉄分が凝集し、表面が橙色になったFPあり。
- 6 明褐色土。FP・灰褐色土が入り混じり硬化したもの。(掘り方、路面)ー第2面
- 7 暗褐色土。FPを含む。中央部で細粒砂、シルト、粘質土が互層に堆積。(現道下部分)
- 8 暗褐色土。礫主体、暗渠か?
- 9 黒褐色土。現耕作土。しまり弱くFPを含む。

第48図 道路遺構断面図及び出土遺物

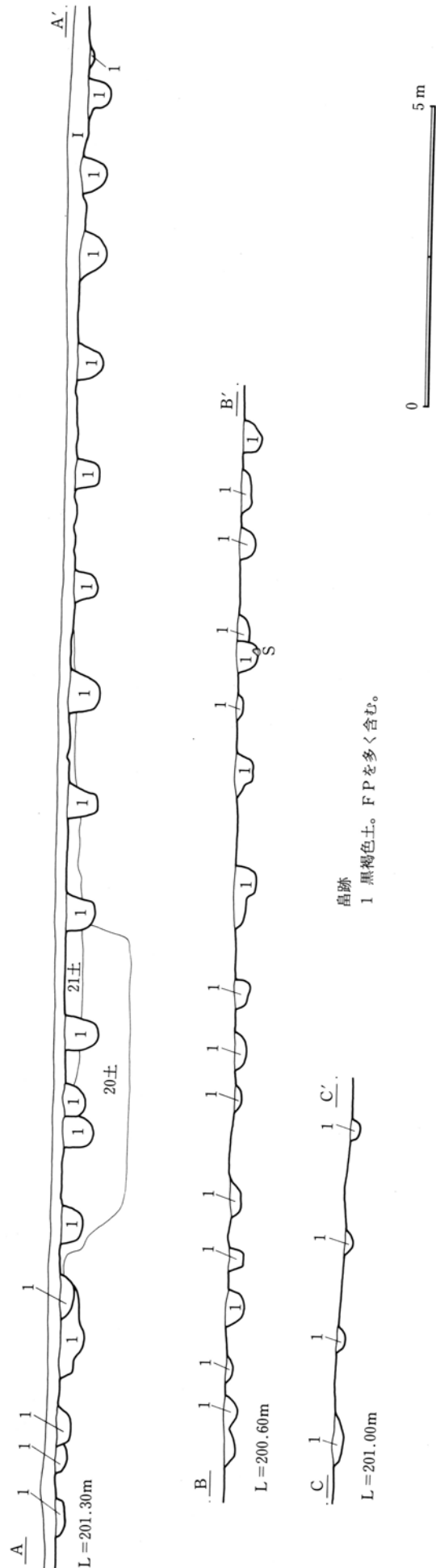
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
道路遺 構-1	金属器 キセル 雁首	覆土	口 1.6 長 -	首細く古様。口に対して9時の位置に管鐵継目あり。継 目は一律で良好。錆色はやや黒ずむ。	銅主材	一部欠 17~18c



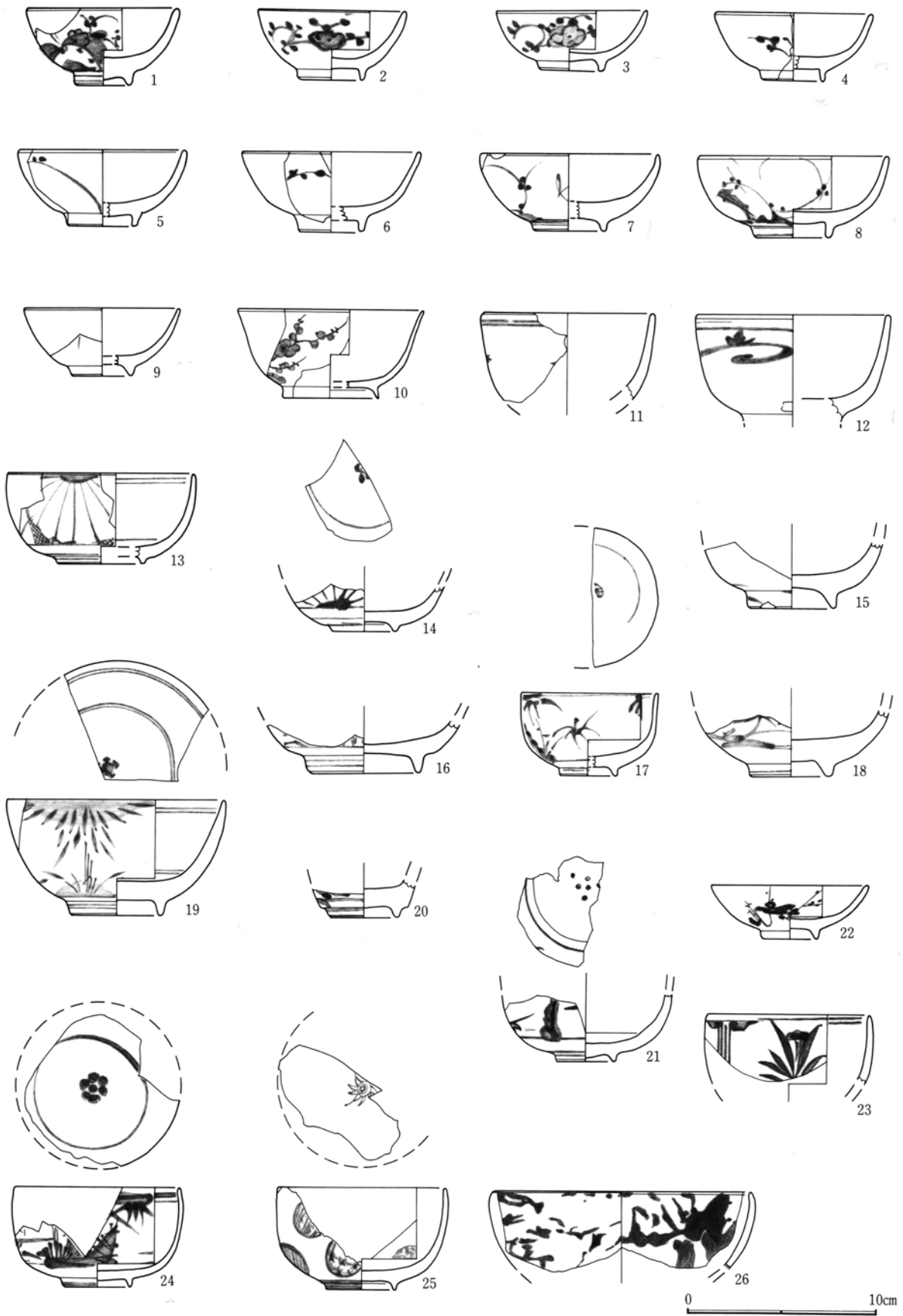
第49図 畠跡平面図

第4章 白井北中道遺跡

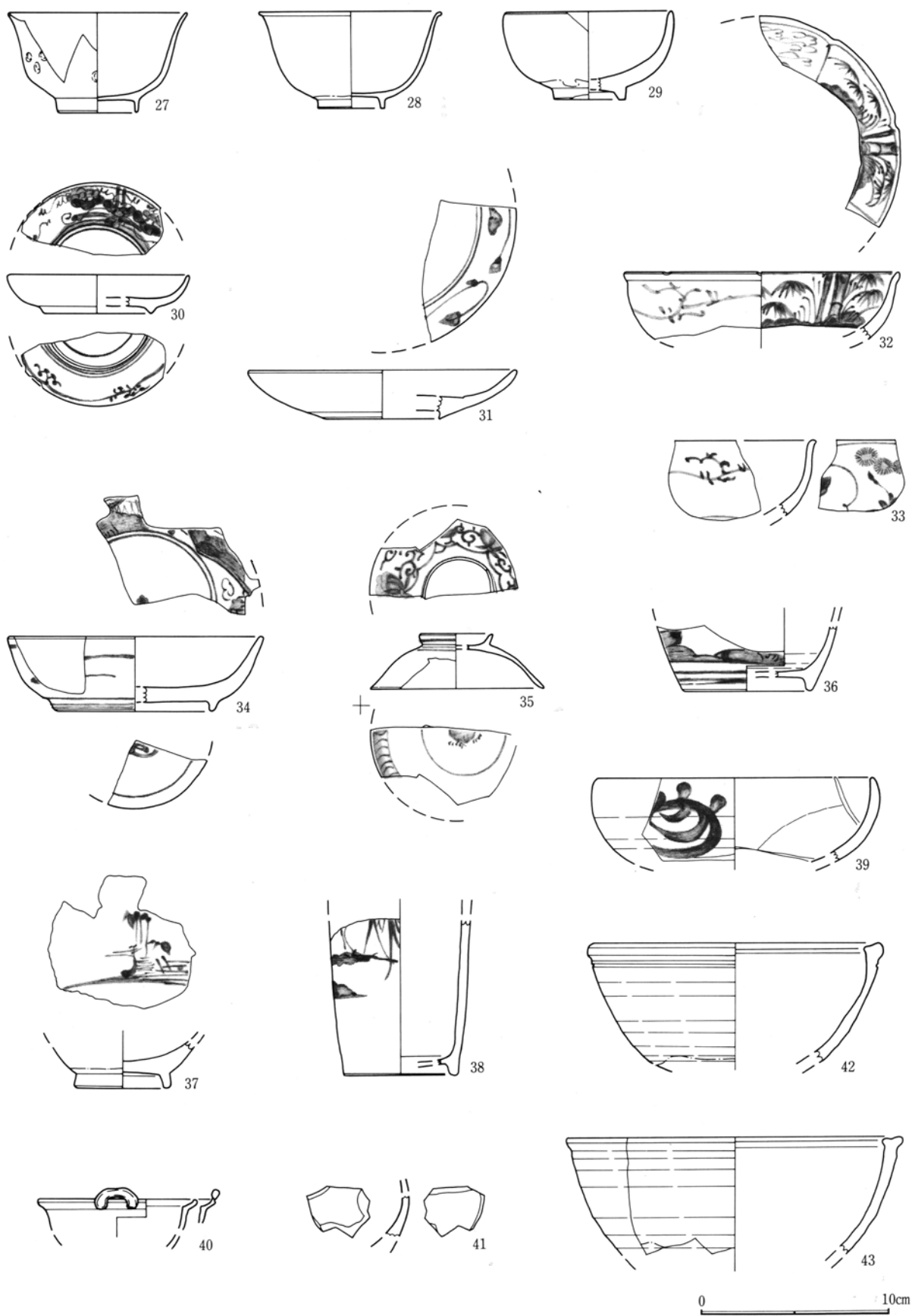
**畠跡** 位置 3区北部。形状・規模 約500㎡にわたって畠の畝間の跡を、溝状の落ち込みとして検出した。これらはその走向や分布範囲から、4つのブロックに分けることができる。Aブロックにはa・b・c・dの4列の畝間があり、幅約50cm、深さ約12cm、畝間の間隔は1.5～2.0mである。Bブロックにはi・k・m・q・t・vの6列があり、幅約60cm、深さ約20cm、畝間の間隔は2.0～2.5mである。Cブロックにはx・z・aa・ac・ad・af・ahの7列があり、幅約60cm、深さ約35cm、畝間の間隔は1.0～1.5mである。Dブロックには、e～h・j・l・n・p・s・u・w・y・ab・ae・agの15列があり、幅約60cm、深さ約20cm、畝間の間隔は1.8mである。 **埋没土** いずれもFPを多く含む黒褐色土。このため重複関係を見きわめるのが困難である。 **遺物** 多くの陶磁器その他の遺物が出土した。遺物の年代は18世紀後半～19世紀前半が主体で、畠のブロックごとによる差異は認められない。 **重複** 20号・21号土坑より新しい。新旧関係は不明だが、1号・2号・19号・43号土坑とも重複する。DブロックのP列が道路遺構と重複しているが、他の列が道路の手前で終わっていることから、別の土坑が重複しているものと思われる。 **所見** この畠跡は4ブロックに分かれているが、形状、埋没土、出土遺物に大きな差はないため、おそらくすべて近世のものと考えられる。



第50図 畠跡断面図

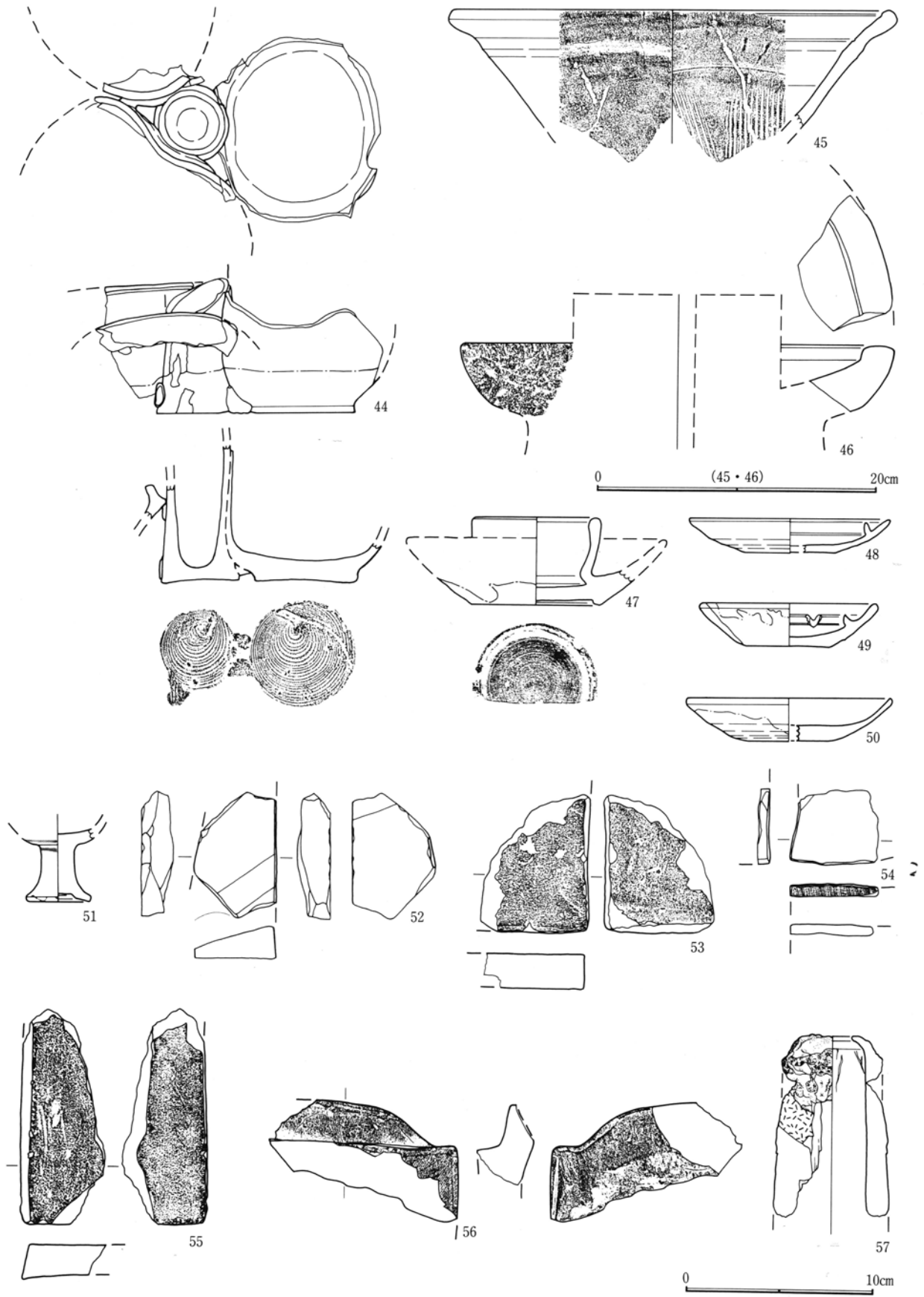


第51図 畠跡出土遺物



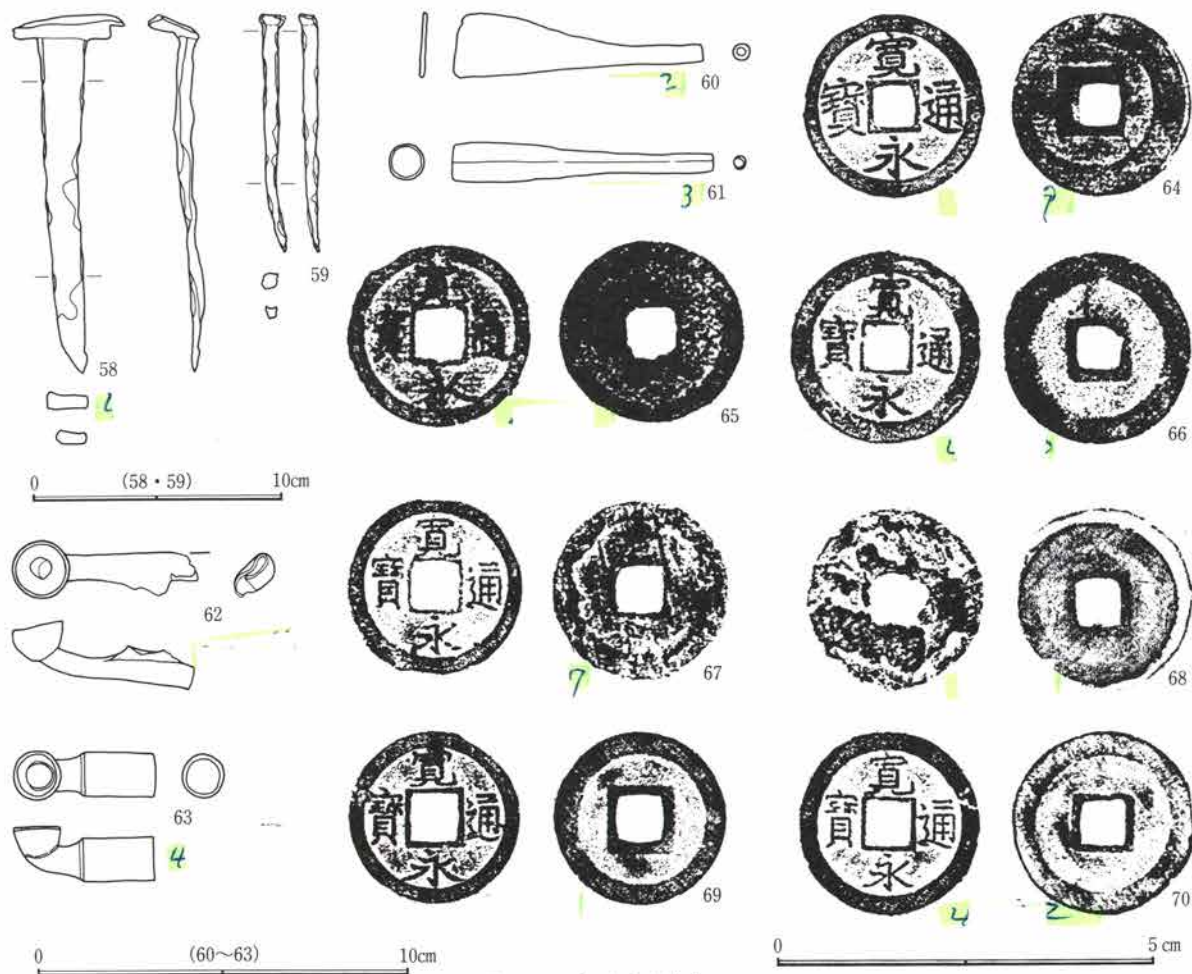
第52図 畠跡出土遺物

第4節 白井北中道遺跡3区



第53図 晶跡出土遺物

第4章 白井北中道遺跡



第54図 畠跡出土遺物

番号	種類	出土レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態備考
畠-1	肥前磁器碗	覆土	口 (8.0) 底 (3.0) 高 4.0	くらわんか碗。 外面 雪輪梅樹文。 内面 無文。	染付	1/4 18c後～ 19c前
畠-2	肥前磁器碗	覆土s列	口 7.8 底 (3.6) 高 3.6	外面 折枝梅文。 内面 無文。	染付	ほぼ完形 18c後～ 19c前
畠-3	肥前磁器碗	覆土l列	口 7.8 底 3.2 高 3.1	外面 折枝梅文。 内面 無文。	染付	3/4 18c後～ 19c前
畠-4	肥前磁器碗	覆土a b列	口 (8.3) 底 (3.4) 高 3.4	外面 折枝梅文。 内面 無文。	染付	1/3 18c後～ 19c前
畠-5	肥前磁器碗	覆土x列	口 (8.9) 底 (3.6) 高 3.9	外面 草花文または梅樹文。 内面 無文。	染付	1/3 18c後～ 19c前
畠-6	肥前磁器碗	覆土p列	口 (9.4) 底 (3.5) 高 (4.2)	外面 折枝梅文。 内面 無文。	染付	破片 18c後～ 19c前
畠-7	肥前磁器碗	覆土a c列	口 (9.4) 底 (3.6) 高 5.0	くらわんか碗。 外面 梅樹文。 内面 無文。	染付	口～底部1/2 18c後～ 19c前
畠-8	肥前磁器碗	覆土a g列	口 (10.0) 底 (4.0) 高 4.2	外面 雪輪梅樹文。 内面 無文。	染付	1/4 18c後～ 19c前



第4節 白井北中道遺跡3区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
畠-9	肥前 磁器 碗	覆土 a g 列	口 (8.2) 底 (3.1) 高 3.5	外面 不明文様。 内面 無文。	染付	口～高台破片 18c 後～ 19c 前
畠-10	肥前 磁器 碗	覆土 a a 列 a h 列	口 (9.8) 底 (5.1) 高 4.6	外面 梅樹文。 内面 無文。	染付	1/8 18c 後～ 19c 前
畠-11	肥前 陶胎 碗	覆土 v 列	口 (9.0) 底 — 高 —	陶胎染付。 外面 口縁部界線2条。 内面 無文。	染付	口～胴部1/5
畠-12	肥前 陶胎 碗	覆土 a g 列	口 (10.2) 底 — 高 —	陶胎染付。 外面 不明文様。 内面 無文。	染付	1/4 18世紀
畠-13	肥前 磁器 碗	覆土 x 列	口 (9.9) 底 (4.5) 高 4.7	外面 菊花散らし文。 内面 界線。	染付	1/6 18c 後～ 19c 前
畠-14	肥前 磁器 碗	覆土 a b 列	口 — 底 3.4 高 —	外面 菊花散らし文。 内面 見込み崩れた五弁花。	染付	破片 18c 後～ 19c 前
畠-15	肥前 陶胎 碗	覆土 u 列	口 — 底 (4.4) 高 —	陶胎染付。 外面 不明文様。 内面 無文。	染付	胴～底部1/4 18世紀
畠-16	肥前 陶胎 碗	覆土 t 列	口 — 底 (3.0) 高 —	陶胎染付。 外面 不明文様。 内面 無文。	染付	胴～底部破片 17c 後～ 18c 前
畠-17	肥前 磁器 碗	覆土 l 列	口 (7.2) 底 (3.0) 高 4.3	外面 雪輪竹文(孟宗譚?)。 内面 見込み不明文様。	染付 焼成不良	1/2 18c 後～ 19c 前
畠-18	肥前 陶胎 碗	覆土 a b 列	口 — 底 4.4 高 —	陶胎染付。 外面 竹文? 内面 無文。	染付	胴～底部1/2 18世紀
畠-19	肥前 磁器 碗	覆土 a h 列	口 (11.6) 底 (4.6) 高 6.0	外面 竹文。高台底部に砂が付着。 内面 見込みコンニャク印判五弁花。	染付	1/4 18世紀後
畠-20	肥前 磁器 碗	覆土 a a 列	口 — 底 3.7 高 —	外面 不明文様。 内面 無文。	染付	底部のみ 18c 後～ 19c 前
畠-21	瀬戸・美濃 陶胎 碗	覆土 a b 列	口 — 底 (3.0) 高 —	陶胎染付。 外面 雪輪竹文(孟宗譚?)。 内面 見込み点文。	染付	胴～底部破片 18c 後～ 19c 前
畠-22	瀬戸・美濃 磁器 碗	覆土 j 列	口 (8.2) 底 (2.9) 高 2.8	外面 梅樹文。 内面 無文。	染付	1/2 19世紀前
畠-23	肥前 磁器 碗	覆土 x 列	口 (8.6) 底 — 高 —	外面 草花文。縦線4本で区画。 内面 口縁部界線2条。	染付	口縁部破片 18c 後～ 19c 前
畠-24	瀬戸・美濃 陶胎 碗	覆土 a a 列	口 (8.7) 底 3.5 高 5.2	陶胎染付。 外面 雪持竹(孟宗譚?)。 内面 見込み六弁花。	染付	1/4 18c 後～ 19c 前
畠-25	肥前 磁器 碗	覆土 p 列	口 (9.0) 底 (3.6) 高 5.3	外面 丸文づくし。 内面 見込み火炎文。	染付	1/4 18c 後～ 19c 前
畠-26	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土 l 列	口 (15.2) 底 — 高 —	刷毛目碗。 内外面とも刷毛目。	灰釉	破片 19世紀前
畠-27	不明 磁器 碗	覆土 j 列	口 (9.5) 底 (4.2) 高 5.1	外面 点状に凹まして文様とする。 内面 無文。	白磁	口～底部1/4 幕末～明治
畠-28	不明 陶器 碗	覆土 x 列	口 (9.4) 底 3.5 高 5.0	内外面 貫入が全面に入る。貫入に墨を入れる。 高台無釉。	灰釉	口～底部1/4 幕末～明治

第4章 白井北中道遺跡

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
畠-29	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土 u列	口 (8.7) 底 (3.7) 高 4.5	外面 無文。高台脇以下無釉。 内面 無文。	鉄釉	口～底部1/4 18世紀
畠-30	肥前 磁器 皿	覆土 u列	口 (9.6) 底 (5.6) 高 2.0	外面 唐草文。 内面 不明文様。	染付	口～底部1/4
畠-31	肥前 磁器 皿	覆土 a a列	口 (14.0) 底 (6.0) 高 2.5	外面 無文。 内面 唐草文。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	染付	口～底部破片 18c後～ 19c前
畠-32	肥前 磁器 皿	覆土 a b列・ a h列	口 (14.4) 底 — 高 —	外面 唐草文。 内面 竹文。	染付	口～胴部1/3 18c後～ 19c前
畠-33	肥前 磁器 皿	覆土 r列	口 — 底 — 高 —	外面 唐草文。 内面 草花文。	染付	破片 18c後～ 19c前
畠-34	肥前 磁器 皿	覆土 h列	口 (13.5) 底 (8.5) 高 3.9	外面 唐草文？高台内不明文様。 内面 不明文様。見込み五弁花。	染付	口～底部1/3 18c後～ 19c前
畠-35	肥前 磁器 蓋	覆土 a g列	口 (3.8) 口 (9.0) 高 2.9	外面 花唐草。 内面 天井部不明文様。	染付	1/4 19c前～中
畠-36	肥前 磁器 瓶	覆土	口 — 底 (6.8) 高 —	外面 不明文様。 内面 無釉。	染付	底部片 18c後～ 19c前
畠-37	肥前 陶器 碗	覆土 a g列	口 — 底 (7.9) 高 —	京焼風。 外面 無文。高台部無釉。 内面 鉄絵山水文？	灰釉	胴～底部1/3 18世紀
畠-38	肥前 磁器 瓶	覆土 m列	口 — 底 (6.0) 高 —	外面 不明文様。 内面 無釉。	染付	胴～底部1/4 18c後～ 19c前
畠-39	瀬戸・美濃 陶器 鉢	覆土 u列	口 (14.8) 底 — 高 —	外面 白化粧および鉄絵。 内面 口縁部から体部上半にかけて白化粧。	透明釉	破片 19世紀
畠-40	不明 陶器 鍋	覆土 f列	口 (8.2) 底 — 高 —	内外 面無文。 ミニチュア。	鉄釉 光沢強い	口縁部破片 19世紀
畠-41	不明 陶器 ミニチュア陶器	覆土 e列	口 — 底 — 高 —	内外面 透明な釉薬をかける。	透明釉 ②普通 ③橙色	破片
畠-42	瀬戸・美濃 陶器 片口	覆土 a a列	口 (15.6) 底 — 高 —	外面 口縁部下に沈線が巡る。体部下半一部無釉。 内面 施釉。	灰釉	破片 18c末～ 19c初
畠-43	瀬戸・美濃 陶器 片口	覆土 n列	口 (17.6) 底 — 高 —	外面 口縁部が外反する。体部下半一部無釉。 内面 施釉。	灰釉	破片 18c末～ 19c初
畠-44	不明 陶器 不明	覆土 a c列	筒底 4.2 碗底 5.5	外面 体部下半以下無釉。底部左回転糸切り未調整。 内面 施釉。 筒状のものを中心に3つの碗が囲む。	オリブ灰色の釉 ③にぶい赤褐色	1/4
畠-45	瀬戸・美濃 陶器 播鉢	覆土 a a列	口 (16.0) 底 — 高 —	内外 面ともに施釉。	鉄釉	破片
畠-46	石製品 茶臼型	覆土 x列	口 (31.0) 残存長 8.7	下白はんぎり部で、表面・側面とも欠損後の傷、消耗多い。石室は重く、硬い。	粗粒輝石安山岩	破片 14世紀以降
畠-47	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿台	覆土 w列	口 (6.9) 底 7.0 高 5.6	外面 体部下半～底部無釉。一部に煤付着。	灰釉	受け部欠1/2
畠-48	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿受皿	覆土 h列	口 (10.7) 底 (4.8) 高 1.7	外面 体部下半、釉を拭い取る。	錆釉	1/2 18c末～ 19c前

第4節 白井北中道遺跡3区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
畠-49	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿受皿	覆土 a g 列	口 (9.6) 底 (4.6) 高 2.3	外面 体部～底部、釉を拭い取る。 内面 受け部切り込み1箇所。	鉄釉	1/2 19c 前～中
畠-50	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	覆土 a d 列	口 (10.8) 底 (3.8) 高 2.3	外面 体部～底部、釉を拭い取る。 内面 見込み重ね焼き痕あり。	錆釉	1/2 18c 末～19c
畠-51	肥前 磁器 仏飯器	覆土 a e 列	口 — 底 3.3 高 —	外面 界線2条。	染付	脚部のみ 18c 後～ 19c 前
畠-52	石製品 砥石	覆土 y 列	残存長 6.7 残存幅 4.4	頁岩中では軟質な合砥。使用は1面で、平滑で合せて使用の感あり。使用面を除くと各面は消耗している。	頁岩	破片 合砥級軟質
畠-53	棧瓦	覆土 a b 列	厚 1.8	表面・裏面・側部とも撫整形。各面に乾燥時の小割れあり。全体に燻の黒色化あり。	①白粒・白鈹物含。 軽い ②還元	破片 近代以降 藤岡産か？
畠-54	石製品 砥石？	覆土 a b 列	現存長 4.6 現存幅 0.6	使用面1面あり。側部に鋸の挽目あり。石室は頁岩の中でも軟質。表・裏とも剥落。	頁岩	破片 中世以降 合砥級
畠-55	棧瓦	覆土 a c 列	長 (11.4) 幅 (4.5) 厚 1.8	表面に撫跡。裏面に少し荒い撫痕と傷あり。欠損後の被熱の吸炭あり。側部は撫で。	①白粒入る。軽い。 ②酸化	破片 近代以降 小泉産か
畠-56	男瓦	覆土 a a 列	現存幅 10.0	表面に雲母状の光沢粒付着。裏面は編物か細かな刺し子状の圧痕あり。側部は面取り後、撫で。	①灰色粘土粒、鈹物入る。軽い。 ②還元	破片 近代以降 深谷産か
畠-57	羽口	覆土 a a 列	最大径 (6.2) 残存長 9.6	先端4cmに珪化物付着、色は黒～緑黒。酸化部分が多く、芯側は先端1.5cmまで酸化。芯穴は径3cmで、全体に薄作り。	①微鈹物多。軽い。	1/5
畠-58	鉄製品 いぬくぎ	覆土 t 列	長 14.0 幅 4.5	色調は茶色味がかかる青黒で被熱色変。使用済らしく曲りあり。錆化に層状剥落少なく、小さな穴状の剥落あり。	和鉄か洋鉄	ほぼ完形
畠-59	鉄製品 釘	覆土 j 列	長 9.3 幅 0.7	色調は茶色味がかかる青黒で被熱色変。使用済らしく曲りあり。錆化に層状剥離少なく、小さな穴状の剥落あり。	和鉄か洋鉄	ほぼ完形
畠-60	金属器 キセル	覆土 f 列	口小 4.5 長 6.6	羅字側はつられる。鑢継目は極めて細く、色調は黒灰色。錆色は黒味強い。	銅主材	ほぼ完形
畠-61	金属器 キセル 吸口	覆土 a a 列	口大 0.9 小 0.3 長 7.0	細く長い吸口で、最大径が羅字側約1.5cm手前にあり。鑢継目細く、色調黒い。錆色は黒味強い。	銅主材	完形
畠-62	金属器 キセル 雁首	覆土 j 列	口 1.5 長さ 5.0	皿大きく古様。管部鑢継目で割れている。継目は、口から見て10時の位置。錆色は黒味強い。	銅主材	一部欠 17c～18c
畠-63	金属器 キセル 雁首	覆土 a a 列	口 1.2 長さ 3.8	皿小さく新様。管部に細かな刻目が入る。鑢継目は、口から見て3時の位置で黒味が強い。錆色は青み弱く、黄緑味多い。	銅主材	完形 19世紀以降
畠-64	古銭	覆土 a d 列	径 2.4 重 2.9	寛永通寶、穿の径6mm		完形
畠-65	古銭	覆土 p 列	径 2.5 重 2.8	寛永通寶、穿の径7mm		完形
畠-66	古銭	覆土 p 列	径 2.5 重 3.1	寛永通寶、穿の径6mm		完形
畠-67	古銭	覆土 p 列	径 2.4 重 2.1	寛永通寶、穿の径6mm		完形
畠-68	古銭	覆土 p 列	径 2.4 重 4.9	不明、2枚重ね、穿の径6mm		完形
畠-69	古銭	覆土 u 列	径 2.3 重 2.2	寛永通寶、穿の径7mm		完形
畠-70	古銭	覆土	径 2.5 重 3.1	寛永通寶、穿の径6mm		完形

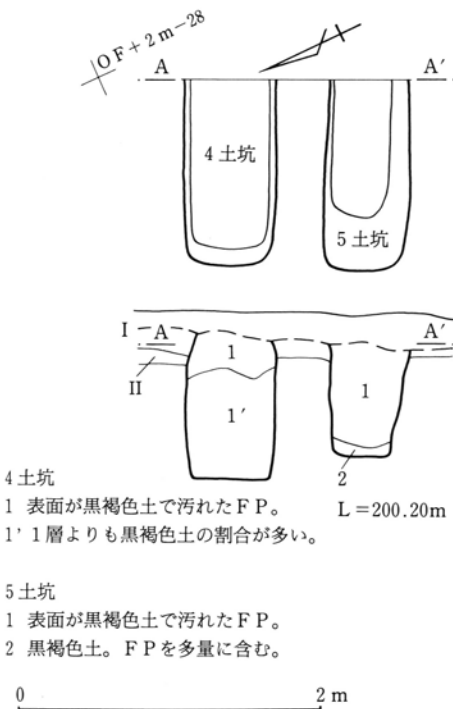
**4号土坑** 位置 OF-101。形状・規模 長方形?。短軸と深さは、0.6m、0.9mである。基本土層 I 層の途中から掘り込み、底面は FP の下位におよぶ。**埋没土** 表面が汚れた FP が主体である。**遺物** 江戸時代の陶器片が出土している。**分類** B4

**5号土坑** 位置 OF-101、3区中央部。形状・規模 長方形?。短軸と深さは、それぞれ0.5m、0.7mである。基本土層 I 層の途中から掘り込み、底面は FP の下位におよぶ。**埋没土** 底部に黒褐色土があり、その上位は FP が主体となる。**分類** B3

**18号土坑** 位置 OB-105。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、0.7×5.9×1.0m。底面は FP 層の下位におよぶ。**埋没土** 底部に黒褐色土があり、その上位は FP が主体。**遺物** 磁器と縄文時代遺跡からの混入と考えられる石器が出土。**分類** B3

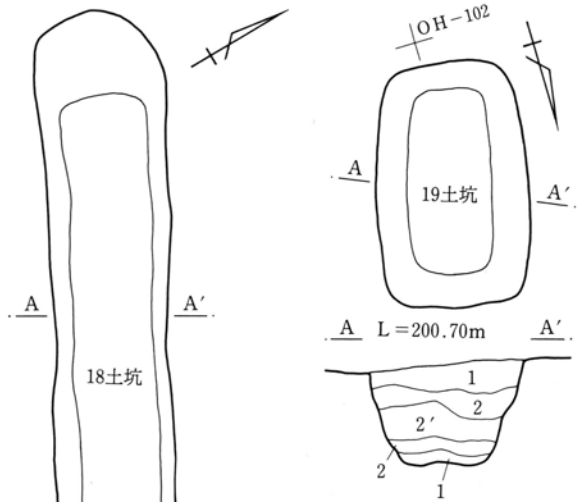
**19号土坑** 位置 OH-102。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各1.0×1.6×0.7m。**埋没土**

底部と上部に黒褐色土があり、中間は FP 主体となる。**重複** 畠跡との新旧関係は不明。**分類** C



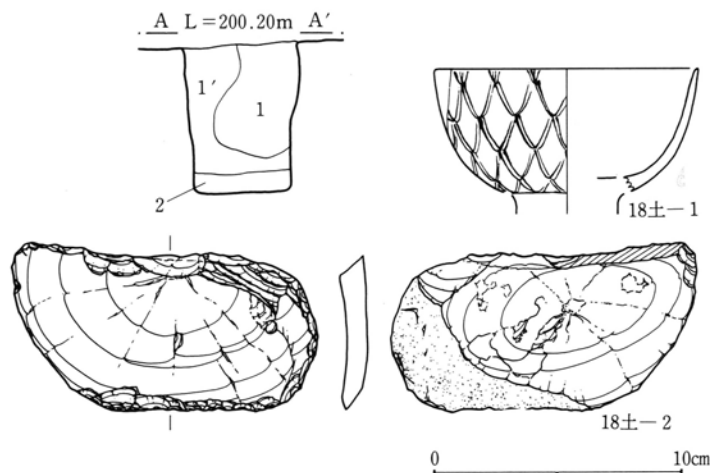
**4号土坑**  
1 表面が黒褐色土で汚れた FP。  
1' 1層よりも黒褐色土の割合が多い。 L=200.20m

**5号土坑**  
1 表面が黒褐色土で汚れた FP。  
2 黒褐色土。FPを多量に含む。



**18号土坑**  
1 表面が黒褐色土で汚れた FP。  
1' 1層より軽石の粒径大きい。  
2 黒褐色土。FPを多く含む。

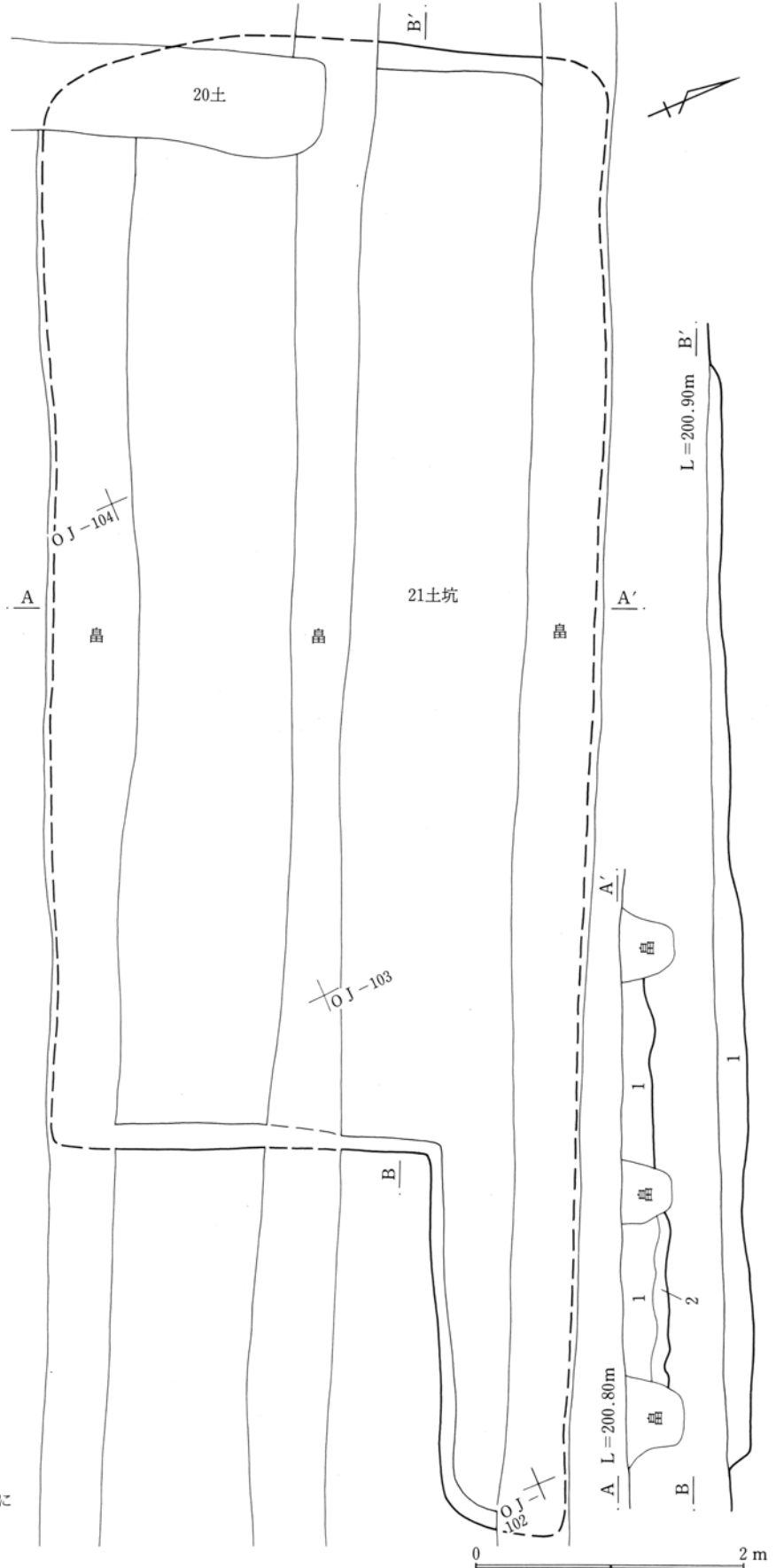
**19号土坑**  
1 黒褐色土。FPを多く含む。  
2 黒褐色土で汚れた FP。  
2' 2よりも黒褐色土の割合高い。



第55図 4号・5号・18号・19号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
18土-1	肥前磁器 碗	覆土	口 (10.4) 底 — 高 —	外面 二重網目文。 内面 無文。	染付	1/4 18c 後~ 19c 前
18土-2	石器 スクレイパー	覆土	長さ 6.6 幅 12.1 厚さ 1.1		黒色頁岩	完形

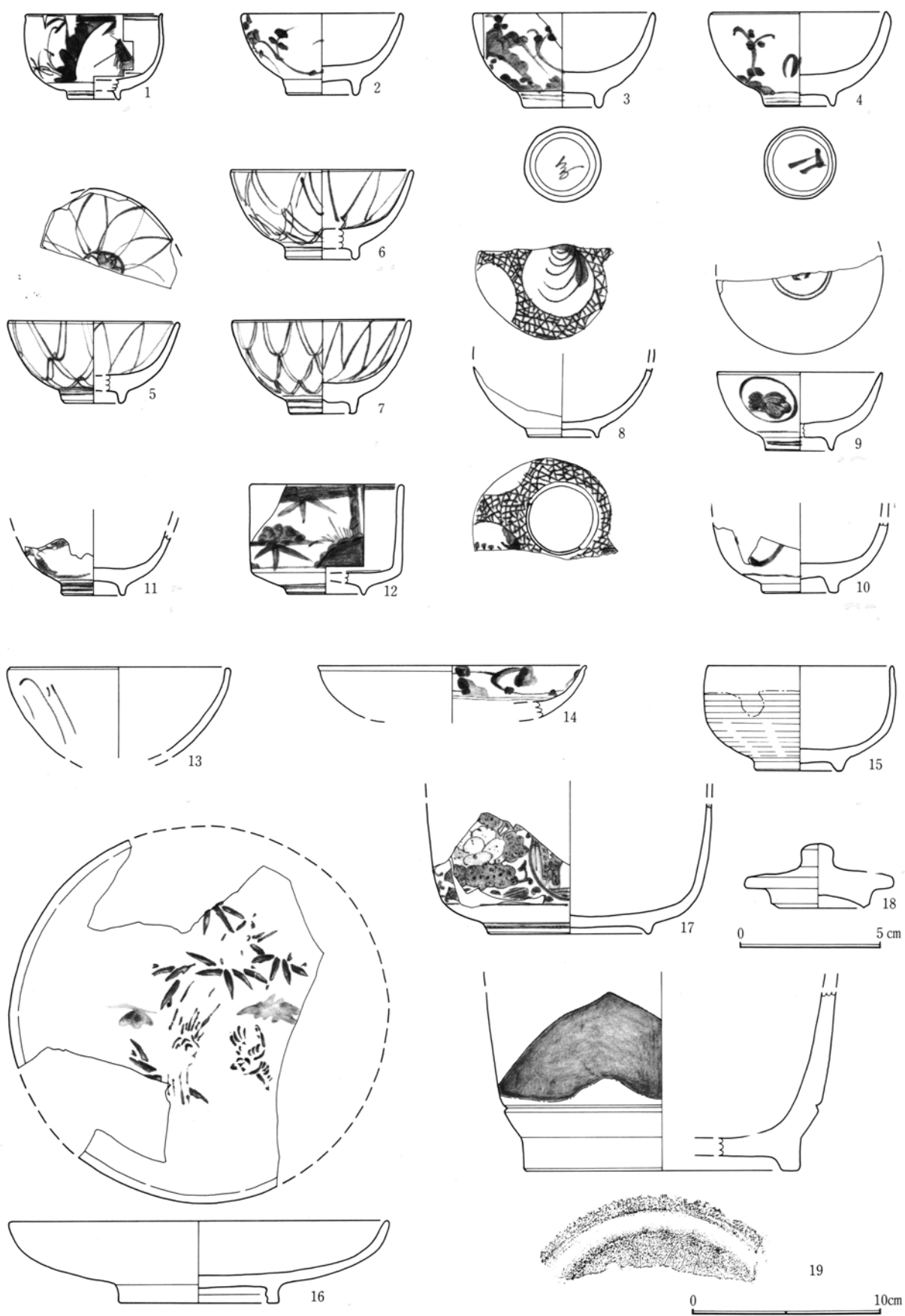
21号土坑 位置 OH-102、3区中央部。形状・規模 長方形で東辺の北東隅に張出しがある。短軸・長軸・深さは、それぞれ(4.1)×11.0×0.4mである。短軸は畝跡との重複で土坑の範囲が不明確なため、推定値である。埋没土FPを多く含む暗褐色土で、中に炭化物の集中する層がある。遺物 多くの陶磁器類が出土し、それらの大半は18世紀後半～19世紀前半のものである。重複 畝跡の断面Aから判断すると、畝跡よりも古く、20号土坑よりも新しい。分類 E



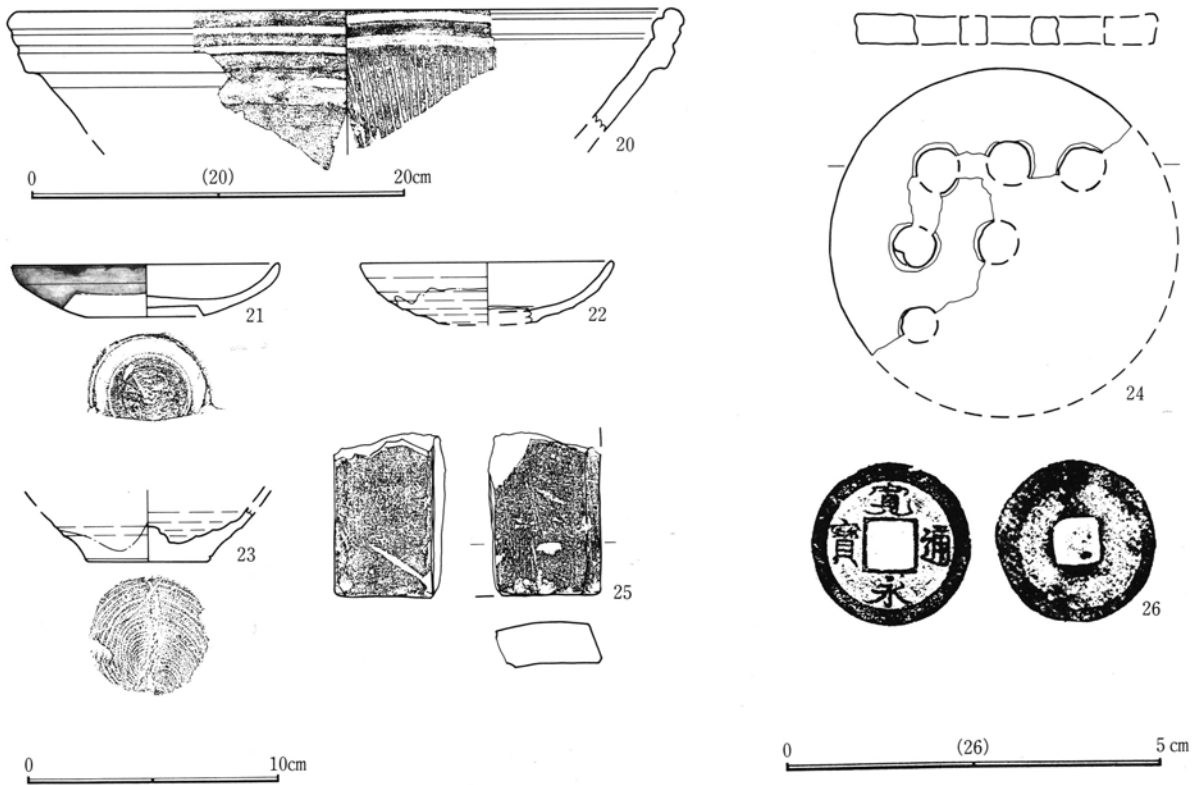
21土坑

- 1 暗褐色土。FPを多く含む。
- 2 1層と同じ。1層と2層の境界に炭化物のブロックが集中する。

第56図 21号土坑平・断面図



第57図 21号土坑出土遺物



第58図 21号土坑出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
21土-1	肥前 磁器 碗	覆土	口 (7.2) 底 (2.9) 高 4.5	外面 孟宗譚。 内面 口縁部と体部下方に界線。	染付	1/4 18c後～ 19c前
21土-2	肥前 磁器 碗	覆土	口 (8.7) 底 3.9 高 4.3	外面 梅樹文？ 内面 無文。	染付	3/4 18c後～ 19c前
21土-3	肥前 磁器 碗	覆土	口 9.7 底 4.2 高 5.0	くらわんか碗。 外面 雪輪梅樹文。高台内字文様。 内面 無文。	染付	3/4 18c後～ 19c前
21土-4	肥前 磁器 碗	覆土	口 (10.0) 底 3.6 高 5.0	くらわんか碗。 外面 梅樹文。高台内字文様。 内面 無文。	染付	1/2 18c後～ 19c前
21土-5	肥前 磁器 碗	覆土	口 (9.1) 底 (3.3) 高 4.7	外面 二重網目文。 内面 網目文。見込みコンニャク印判菊花。	染付	1/3 18c後～ 19c前
21土-6	肥前 磁器 碗	覆土	口 (9.7) 底 (3.8) 高 4.7	外面 二重網目文。 内面 網目文。見込みコンニャク印判菊花。	染付	1/4 18c後～ 19c前
21土-7	肥前 磁器 碗	覆土	口 (9.5) 底 (3.6) 高 4.9	外面 二重網目文。 内面 網目文。見込みコンニャク印判菊花。	染付	1/3 18c後～ 19c前
21土-8	肥前 磁器 碗	覆土	口 — 底 (3.8) 高 —	内外面 氷裂文。窓絵薄？など。	染付	胴～底部1/4 18c後～ 19c前
21土-9	肥前 磁器 碗	覆土	口 (8.8) 底 (3.5) 高 4.1	外面 コンニャク印判丸に蔦の葉。 内面 見込みコンニャク印判五弁花。	染付	1/2 18c後～ 19c前
21土-10	肥前 陶器 碗	覆土	口 — 底 4.0 高 —	陶胎染付。 外面 不明文様。高台底部のみ無釉。 内面 無文。	染付 ②不良	1/2

第4章 白井北中道遺跡

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
21土-11	肥前 磁器 碗	覆土	口 — 底 3.4 高 —	外面 不明文様。 内面 無文。	染付	1/3 18c 後～ 19c 前
21土-12	肥前 磁器 碗	覆土	口 (8.2) 底 (4.1) 高 5.7	外面 雪持竹文。 内面 底部の外縁に界線2条巡る。	染付	1/4 18c 後～ 19c 前
21土-13	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土	口 (11.8) 底 — 高 —	柳茶碗。 外面 呉須絵。 内面 無文。	灰釉	口～胴部1/4 18c 後～ 19c 前
21土-14	肥前 磁器 皿	覆土	口 (14.2) 底 — 高 —	外面 無文。 内面 唐草文。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	染付	口縁部1/4 18c 後～ 19c 前
21土-15	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土	口 (9.8) 底 4.6 高 5.5	腰錆碗。 外面 口縁部灰釉、以下鉄釉。 内面 灰釉。	鉄釉, 灰釉	1/2 18c 後～
21土-16	瀬戸・美濃 陶器 皿	覆土	口 (20.0) 底 8.5 高 4.3	摺絵皿。 外面 高台底面無釉。 内面 型絵鉄釉竹と雀、呉須で竹文を手描き。	灰釉	1/2 17c 末～ 18c 前
21土-17	肥前 磁器 蓋物	覆土	口 — 底 (8.5) 高 —	外面 牡丹文。 内面 無文。	染付	1/3 18c 後～ 19c 前
21土-18	不明 陶器 蓋	覆土	最大径 5.2 底 3.5 高 2.2	外面 上面に黄色の細かな斑点あり。側面にはない。 内面 無釉。 摘1.2cm。	鉄釉	完形
21土-19	瀬戸・美濃 陶器 甕	覆土	口 — 底 (14.2) 高 —	半胴甕。 外面 高台脇以下釉を拭う。高台の断面四角。 内面 施釉。	鉄釉	胴～底部1/4 江戸時代
21土-20	堺・明石 焼締陶器 搦鉢	覆土	口 (35.0) 底 — 高 —	外面 口縁部直下から篋削り。 内面 口縁部の摺り目撫で消す。		口～胴部破片 18c 後～ 19c 前
21土-21	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	覆土	口 (10.5) 底 (4.6) 高 2.0	外面 体部下半～底部無釉。碁笥底。 内面 窯道具痕あり。	灰釉	1/2 18c 後半
21土-22	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	覆土	口 (10.1) 底 (4.0) 高 (2.5)	外面 体部～底部釉を拭う。 内面 輪状の重ね焼き痕あり。	鉄釉	1/3 19世紀
21土-23	瀬戸・美濃 陶器 蓋	覆土	口 — 底 4.9 高 —	外面 体部下半～底部無釉。底部右回転糸切り未調整。 内面 施釉。	錆釉	2/3 18世紀
21土-24	土製品 さな	覆土	径 13.6 厚 1.2	残存する部分で6個の穴が確認できる。	①細砂粒、粗砂粒 ②普通 ③にぶい黄橙色	1/2
21土-25	棧瓦	覆土	厚 1.6	表・裏面・側部に撫痕。全体に黒色燻あり。欠損部は3方に切り目入り、さらに割られた面を成す。	①少し重い ②還元	破片 近代以降 深谷産か
21土-26	古銭		径 2.2 重 2.0	寛永通寶、穿の径7mm		完形

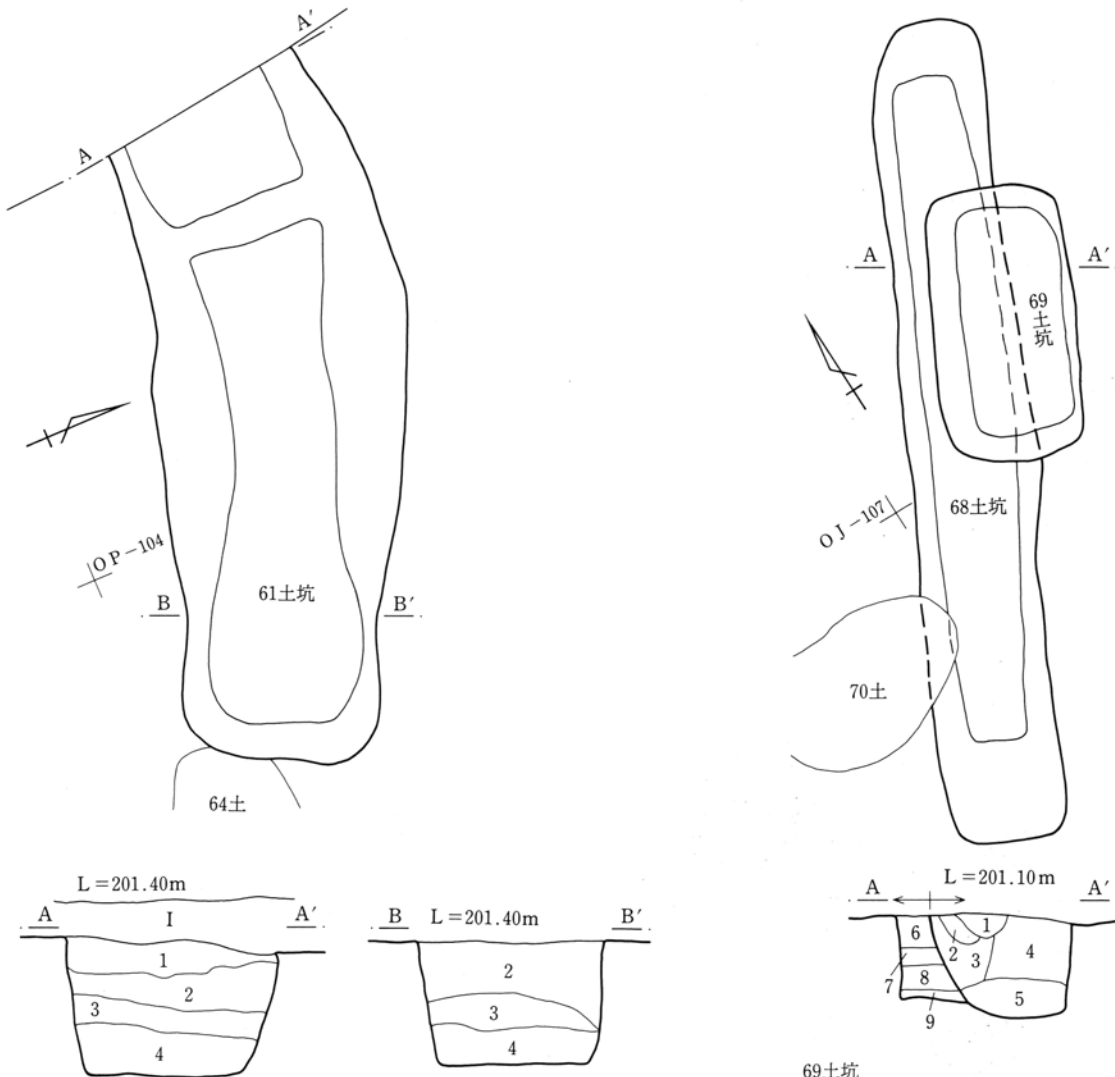


61号土坑 位置 OP-104。形状・規模 不定形。短軸と深さは、それぞれ1.6m、0.8mである。断面形は箱形を呈している。埋没土 汚れたFPが主体で、断面B付近では下部の層に砂が混じる。重複 64号土坑と僅かに重なるが、新旧関係は不明。分類 E

68号土坑 位置 OJ-106。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、各0.8×5.5×0.6m。埋没土 暗

褐色土とFPが互層をなしている。70号土坑と重複する箇所での断面観察でも同様な互層をなしている。重複 69号・70号土坑よりも古い。分類 B1

69号土坑 位置 OJ-106、3区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各1.0×1.8×0.7m。埋没土 FPを含む暗褐色土～褐色土。重複 68号土坑より新しい。分類 C



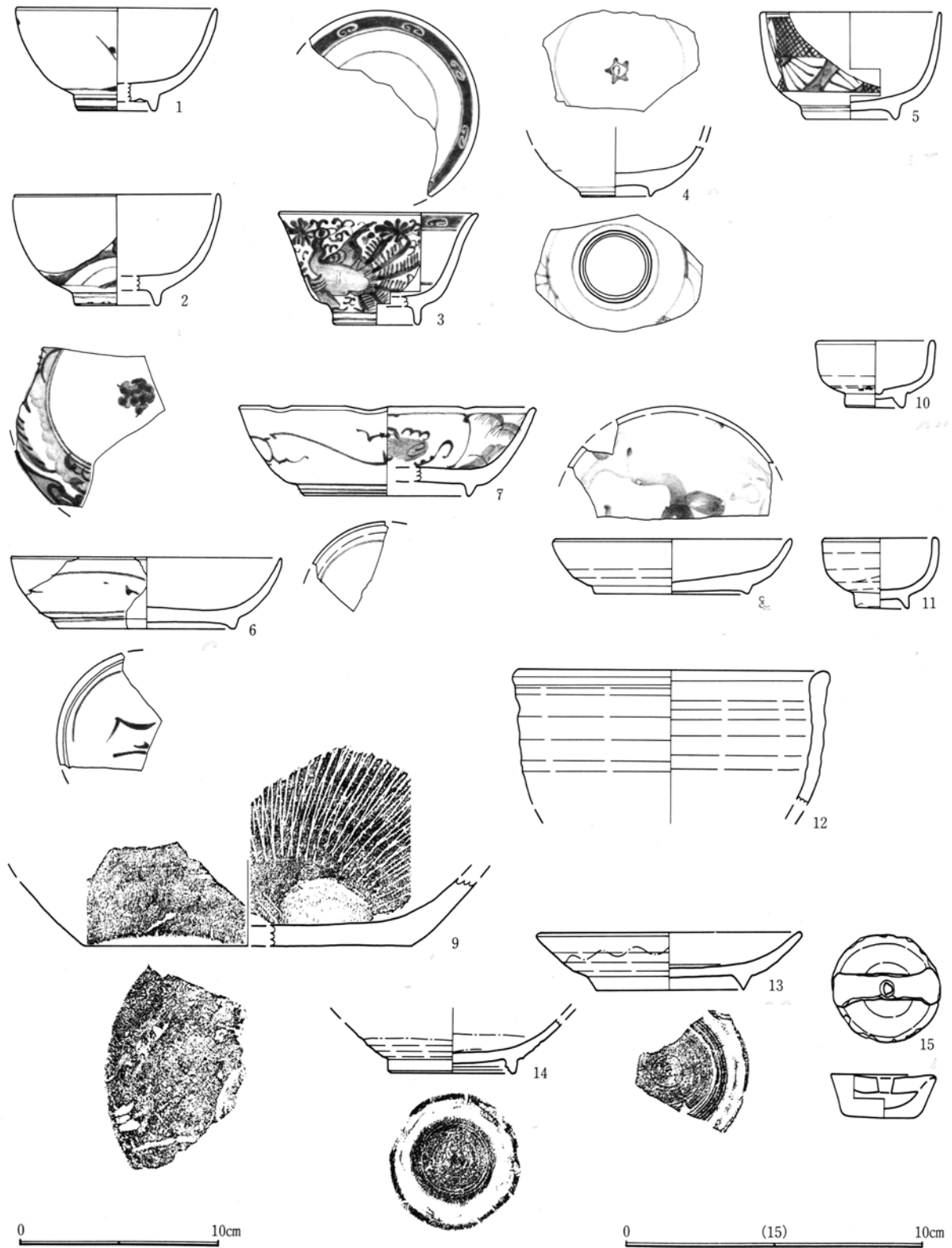
- 61号土坑
- 1 黒褐色土。FP(5mm~1cm)を多量に含む。
  - 2 汚れたFP。
  - 3 汚れたFP(5mm~2cm)。2層より細かい。
  - 4 やや汚れたFP。SP.B付近では砂が混じる。

- 69号土坑
- 1 褐色土。FPを含む。
  - 2 暗褐色土。FPを含む。
  - 3 暗褐色土。2層より多くFPを含む。
  - 4 褐色土。3層より多くFPを含む。
  - 5 暗褐色土。FPを含む。
- 68号土坑
- 6 汚れたFP(径3~5cm)。
  - 7 暗褐色土。FPを含む。
  - 8 汚れたFP(径1mm~10mm)。
  - 9 暗褐色土。FP(径10mm程度)を含む。

第59図 61号・68号・69号土坑平・断面図

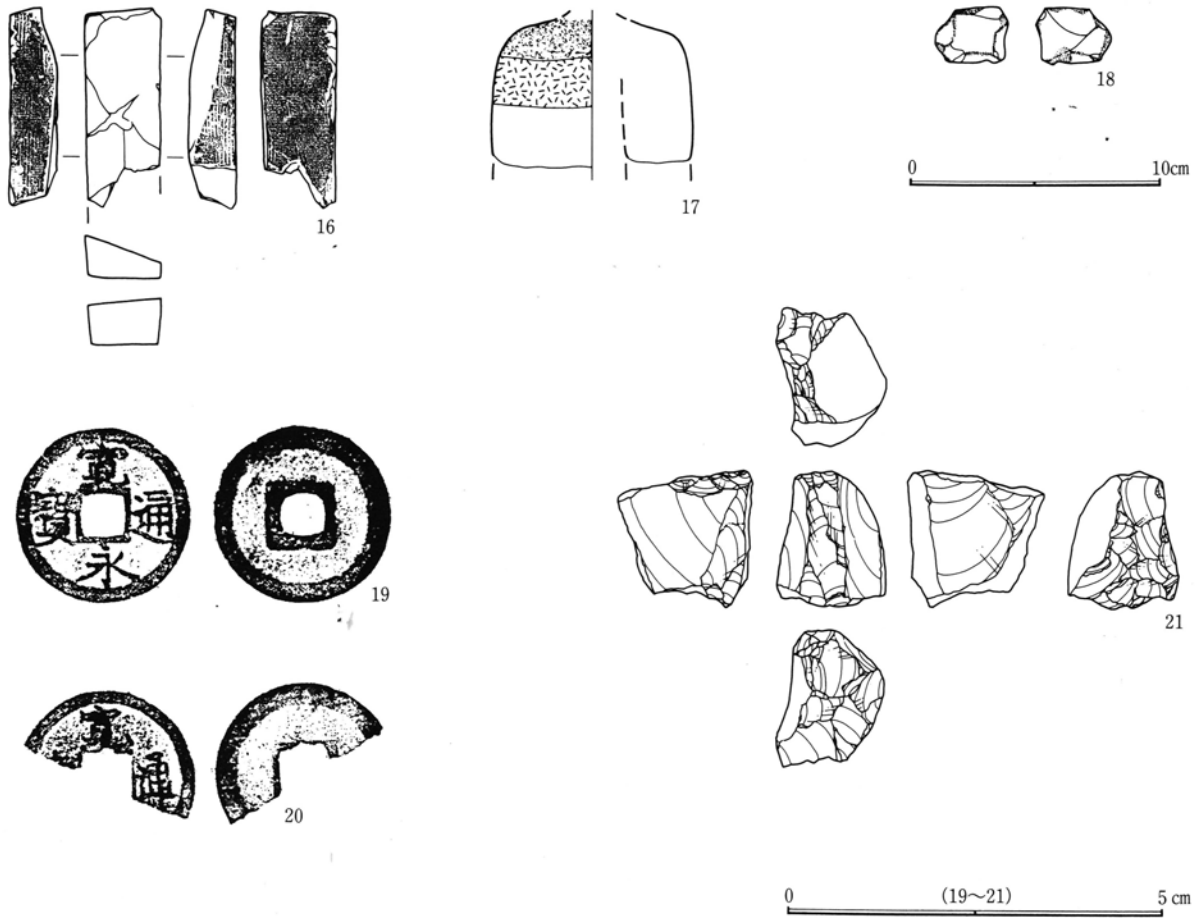
第4章 白井北中道遺跡

遺構外出土遺物 畠跡や21号土坑で出土している  
陶磁器類と同時期の遺物が、多数出土している。



第60図 遺構外出土遺物

第4節 白井北中道遺跡3区



第61図 遺構外出土遺物

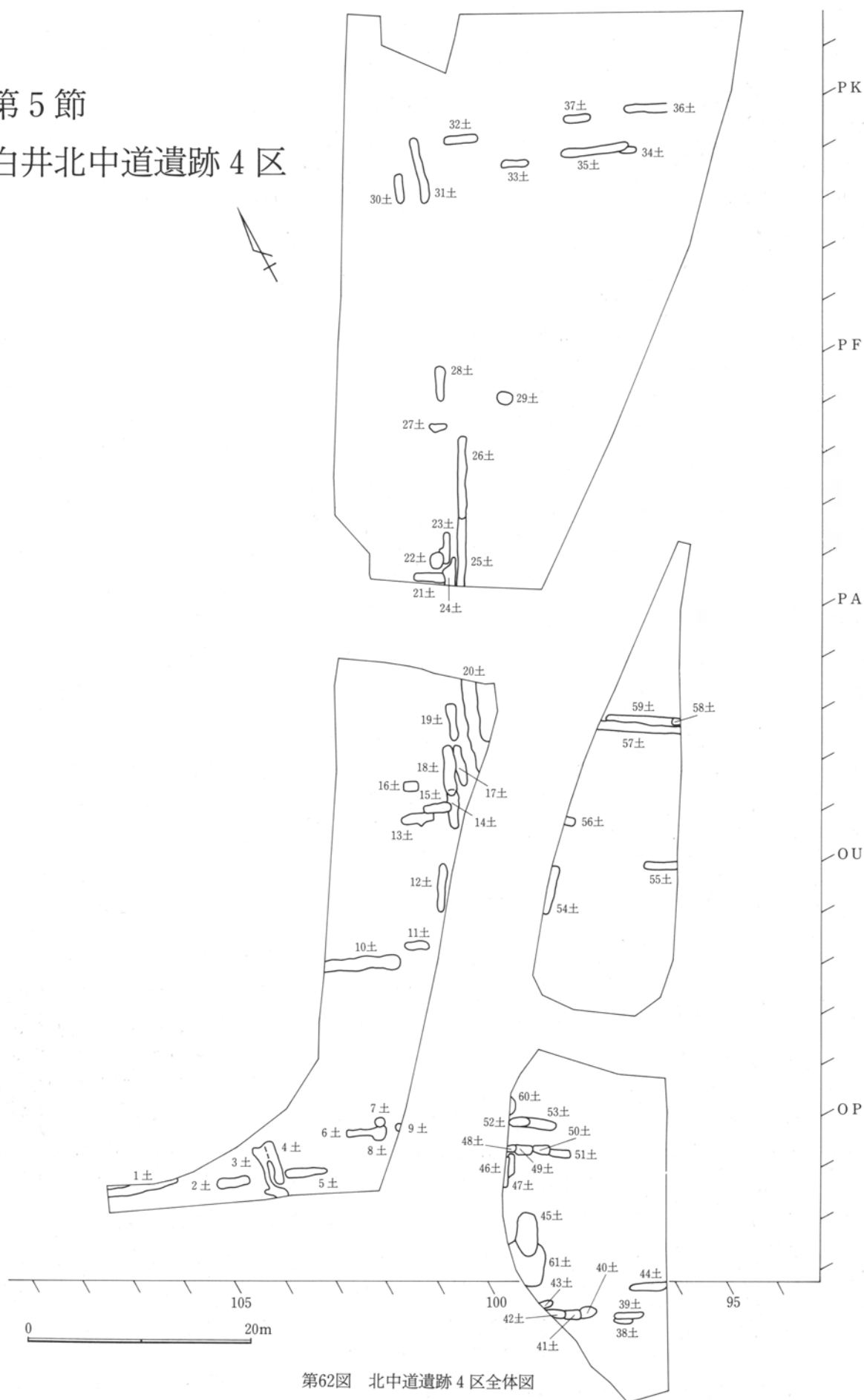
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
遺構外 -1	肥前 磁器 碗	表土	口 (10.0) 底 (3.8) 高 5.1	外面 梅樹文? 内面 無文。	染付	口～底部1/4 18c後～ 19c前
遺構外 -2	肥前 磁器 碗	表土	口 (10.4) 底 (4.2) 高 5.5	外面 雪輪梅樹文。 内面 無文。	染付	口～底部1/3 18c後～ 19c前
遺構外 -3	瀬戸・美濃 磁器 碗	表土	口 (10.0) 底 (4.6) 高 5.6	外面 鳳凰と菊唐草。 内面 口縁部に如意頭状の文様が巡る。	染付	1/3 幕末～明治
遺構外 -4	肥前 磁器 碗	表土	口 — 底 3.6 高 —	外面 菊花散文。 内面 見込み崩れた五弁花か。	染付	胴～底部 18c後～ 19c前
遺構外 -5	肥前 磁器 蓋物	表土	口 (9.0) 底 4.6 高 5.3	外面 扇文。 内面 口縁部の釉を剥いている。	染付	1/3 18c後～ 19c前
遺構外 -6	肥前 磁器 皿	表土	口 (13.6) 底 (8.9) 高 3.6	外面 唐草文。高台内に字文様。 内面 見込み手描き五弁花。	染付	1/4 18c前～中
遺構外 -7	肥前 磁器 皿	表土	口 (14.8) 底 (8.2) 高 4.4	外面 唐草文。 内面 宝文と竹文。	染付	1/6 18c後～ 19c前
遺構外 -8	瀬戸・美濃 陶器 皿	表土	口 (12.0) 底 (7.8) 高 2.7	外面 無文。輪高台。 内面 鉄絵。目痕2箇所あり。	灰釉	1/3 17世紀

第4章 白井北中道遺跡

番号	種類 種類	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎 土②焼成③色調	残存状態 備考
遺構外 -9	堺・明石 焼締陶器 播鉢	表土	口 — 底 (16.4) 高 —	内面 底部の一部に播り目あり。	①粗砂粒、細礫 ②良好 ③明赤褐色	底部1/4 18c後～ 19c前
遺構外 -10	瀬戸・美濃 陶器 碗	表土	口 (6.0) 底 3.0 高 3.3	外面 高台脇以下無釉。 内面 見込み中央が凹む。	灰釉	1/3 19世紀
遺構外 -11	瀬戸・美濃 陶器 碗	表土	口 5.9 底 2.7 高 3.5	外面 高台以下無釉。体部に溶着した痕跡あり。	灰釉	完形 19世紀
遺構外 -12	瀬戸・美濃 陶器 片口	表土	口 (16.0) 底 — 高 —	外面 口縁部肥厚する。 内面 施釉。	鉄釉	破片 18世紀中
遺構外 -13	瀬戸・美濃 陶器 皿	表土	口 (13.0) 底 (7.4) 高 2.9	外面 体部下半以下無釉。高台断面三角形。 内面 輪状の重ね焼き痕跡あり。	灰釉	1/4 18世紀
遺構外 -14	瀬戸・美濃 陶器 皿	表土	口 — 底 6.4 高 —	輪禿皿。 外面 高台脇以下無釉。 内面 蛇ノ目釉剥ぎ。	灰釉	1/2 18世紀
遺構外 -15	不明 陶器 灯明具	表土	口 3.5 底 2.5 高 1.4	外面 無釉。 内面 釉薬をかける。穴の脇に煤付着。		完形
遺構外 -16	石製品 砥石	表土	長さ (7.8) 幅 3.0 厚さ 1.8	やや流紋岩質。使用は表・裏・片小口・片側部の4面。 両側部には、ブラシの猫掻状工具痕残る。	ダイサイト。	破片 近世以降 中砥級
遺構外 -17	羽口	表土	最大径 8.0 現存長 5.9	先端に薄く珪化物付着、色は黒～緑黒。還元部少なく、 長さ3.5cm以上が、表面酸化気味。芯穴は残存せず。	①白色粒含 細砂～シルト質	1/5
遺構外 -18	火打石	表土	長さ 2.2 幅 2.9	稜線に沿って新しい割れ口が見られる。	石英	完形
遺構外 -19	古銭	表土	径 2.3 重 2.8	寛永通寶、穿の径6mm		完形
遺構外 -20	古銭	表土	径 — 重 1.1	寛永通寶		1/2
遺構外 -21	石核	表土	長さ 1.7 幅 1.5 厚さ 1.8		赤色珪質岩	

第5節

白井北中道遺跡4区



第62図 北中道遺跡4区全体図

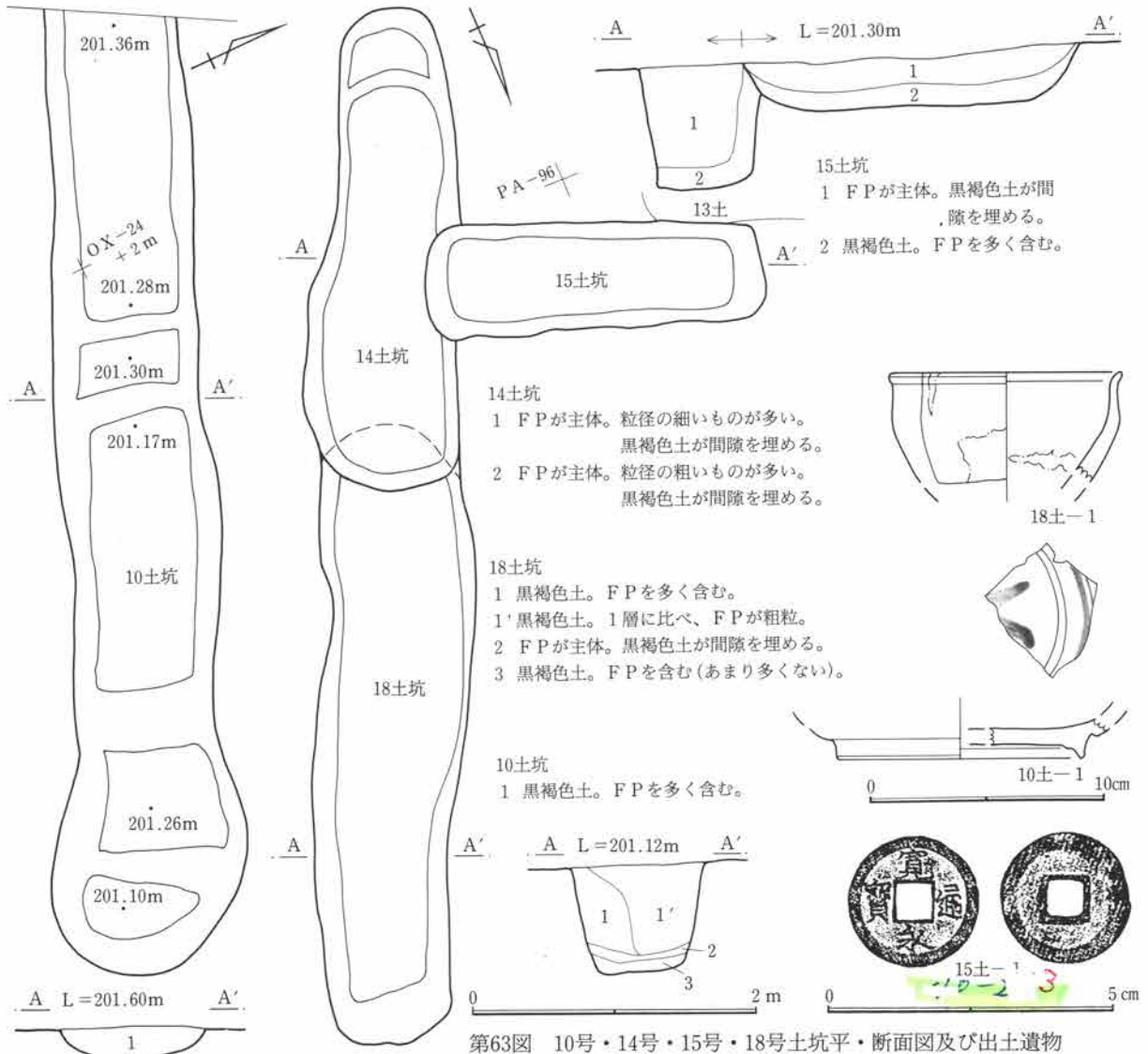
10号土坑 位置 OW-98。形状・規模 溝状。短軸と深さは、各1.1m、0.2m。埋没土 多く含む黒褐色土。遺物 陶器片が出土。分類 B1

14号土坑 位置 OY-95。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各1.0×3.4×0.9m。埋没土 FPが主体となる。重複 15号土坑より古い。18号土坑との新旧関係は不明。分類 B4

15号土坑 位置 PA-96。形状・規模 長方形。

短軸・長軸・深さは、各0.7×2.4×0.4m。埋没土 下部が黒褐色土、上部がFP主体となる。遺物 寛永通寶。重複 14号土坑より新しい。分類 B1

18号土坑 位置 PA-95。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各1.1×(3.9)×0.7m。埋没土 底面から約10cmのところからFPが主体となる層を挟む他は、黒褐色土である。遺物 陶器片。重複 14号土坑と重複するが新旧関係は不明。分類 B3



番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
18土-1	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土	口 (9.8) 底 — 高 —	天目茶碗。 外面 焼成時に灰がかかり一部胎釉のようになる。	鉄釉	口縁～胴1/8 17世紀?
10土-1	瀬戸・美濃 陶器 皿	覆土	口 — 底 (10.3) 高 —	外面 現存部は無釉。 内面 鉄絵。輪状の重ね焼き痕あり。	灰釉	底部1/4 17世紀
15土-1	古銭	覆土	径 2.3 重 2.4	寛永通寶、穿の径7mm		完形

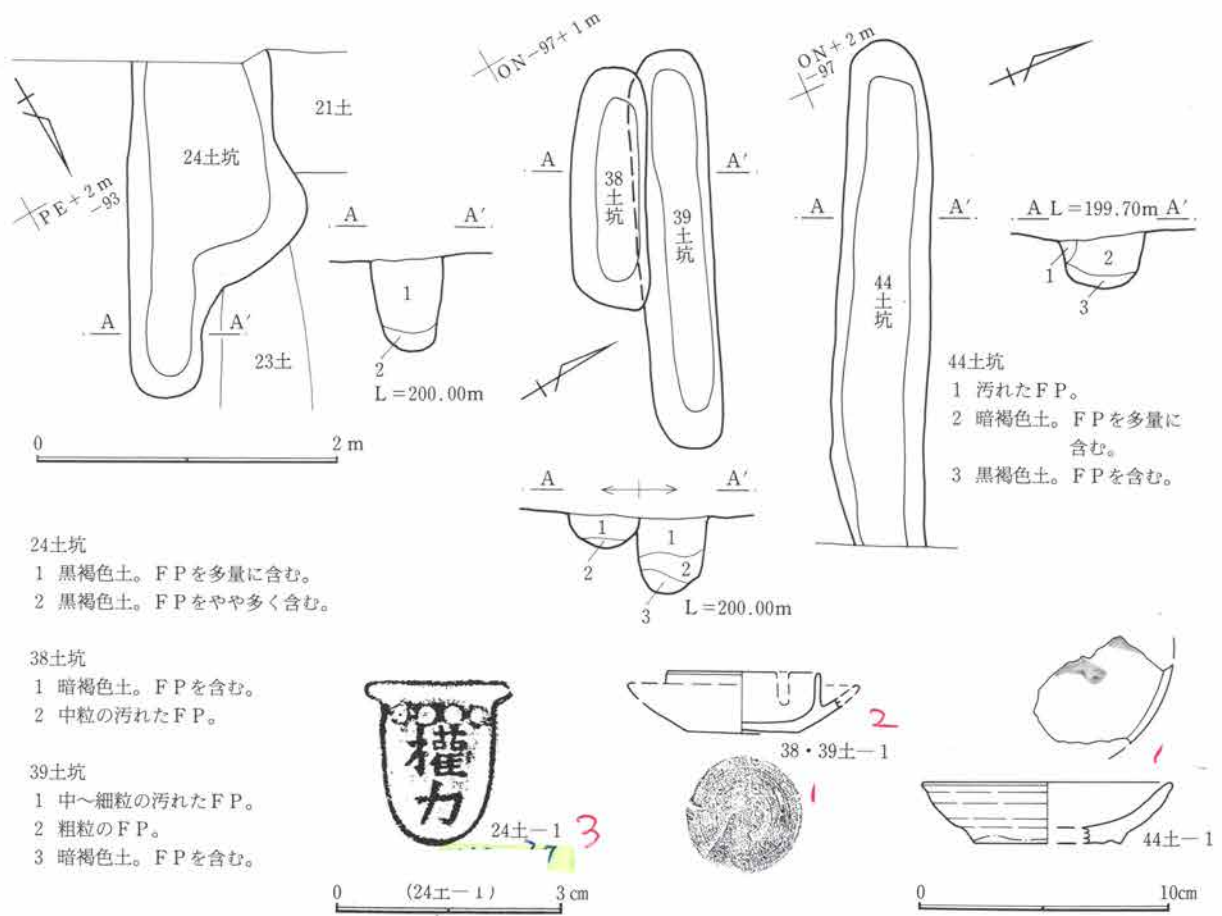
**24号土坑** 位置 PE-93、4区中央部。形状・規模 不定形。短軸と深さは、それぞれ1.2m、0.6mである。平面確認の段階で1つの土坑として捉えたが、複数の土坑に分離できる可能性もある。埋没土 FPを多量に含む黒褐色土だが、底部はFPがやや少なくなる。遺物 こはぜが出土。重複 21号・23号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。分類 B1

**38号土坑** 位置 ON-97、4区南部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各0.5×1.6×0.2m。埋没土 暗褐色土。底部に汚れたFPがある。

遺物 灯明皿の受皿が出土している。重複 39号土坑より新しい。分類 B2

**39号土坑** 位置 ON-97。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各0.5×2.6×0.5m。埋没土 底部に暗褐色土があり、その上位はFPが主体となる。重複 38号土坑より古い。分類 B1

**44号土坑** 位置 ON-96、4区南部。形状・規模 溝状。短軸と深さは、それぞれ0.6m、0.4mである。埋没土 底部は黒褐色土、その上はFPを多量に含む暗褐色土となる。遺物 陶器片。分類 B1



第64図 24号・38号・39号・44号土坑平・断面図及び出土遺物

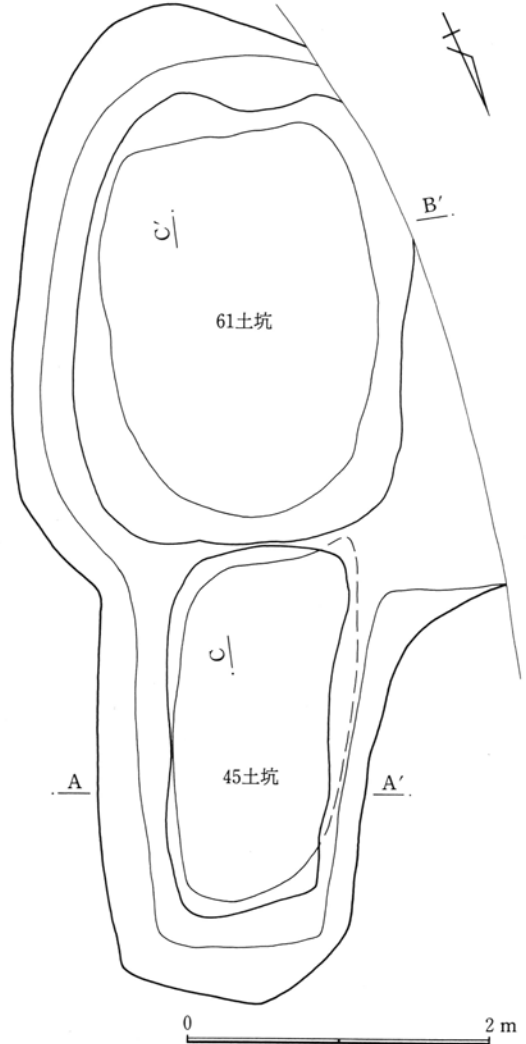
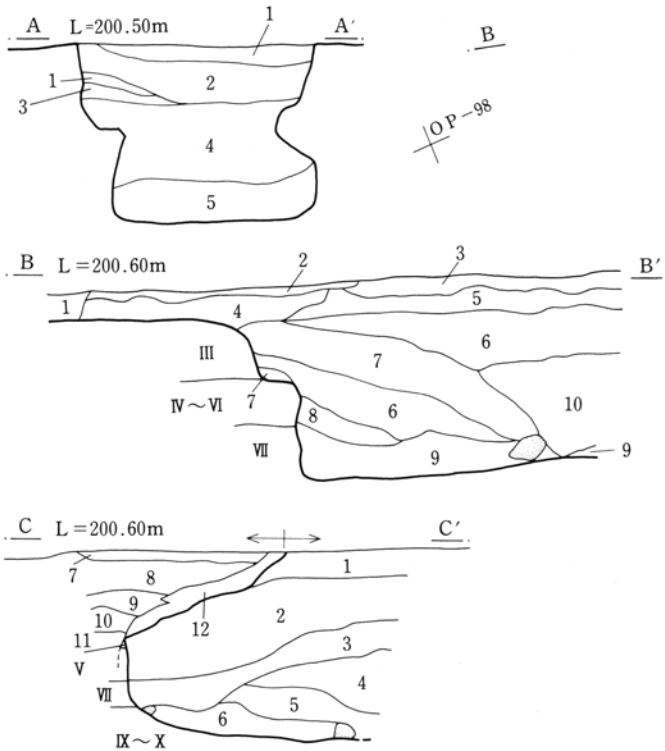
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
44土-1	瀬戸・美濃 陶器 皿	覆土	口 (10.0) 底 (5.8) 高 2.4	外面 底面無釉。 内面 鉄絵。	灰釉 ②不良	1/4 17世紀
38土-1	不明 陶器 灯明皿受皿	覆土	口 (6.2) 底 4.4 高 2.4	外面 体部下半~底部無釉。 内面 施釉。	錆釉	2/3 受け部欠
24土-1	こはぜ	覆土	長 2.1 最大幅 1.5	「権力」の銘あり。		完形

第4章 白井北中道遺跡

**45号土坑** 位置 OP-98、4区南部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.8×4.1×1.2mである。西壁側は下部がより掘り込まれ、断面が袋状を呈している。壁面全体に工具の痕跡が残されており、中位では右上から左下へ斜めに、下位では垂直方向の痕跡となっている。埋没土 FPが主体で、黒褐色土を挟む。遺物 なし。重複 61号土坑より新しい。分類 E。

**61号土坑** 位置 OP-98、4区南部。形状・規模

楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ2.8×3.5×1.3mである。僅かな幅であるが中段がある。段を作っている高さは、地山となる基本土層のIII層(FP)



断面A 45号土坑

- 1 汚れの少ないFP。
- 2 汚れたFP。部分的に黒色土の薄い層を挟む。
- 3 黒褐色土。FPを多量に含む。
- 4 中～細粒の汚れたFP。汚れは上層より少ない。
- 5 粗粒の汚れたFP。汚れは上層より少ない。河原石を少量含む。

断面B 61号土坑

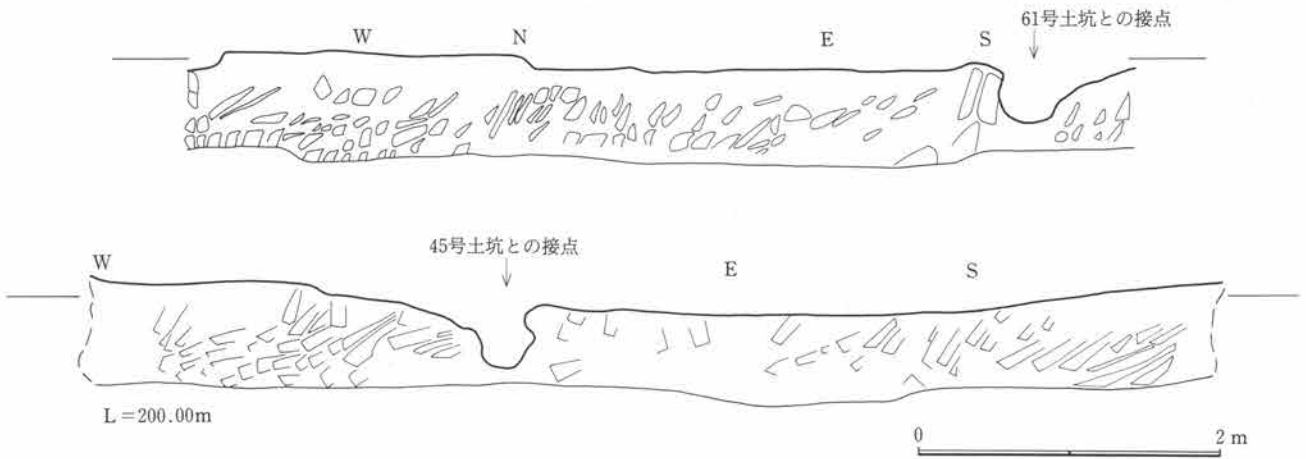
- 1 褐色土。FPを含む。耕土。
- 2 1層類似土中にロームブロックを含む。45号土坑に連続する。
- 3 黒褐色土。FAブロックを多く含む。ローム粒と少量のFPを含む。
- 4 ロームブロック主体。黒色土を縞状に含む。45号土坑から続く層。
- 5 黒褐色土。FAブロックを含む。
- 6 汚れの少ないFP。10層よりやや粗い。
- 7 汚れたFP。
- 8 7層と同様だが、黒色が7層より強い。地山(VI層)の崩れたものが混じっていると思われる。
- 9 汚れの少ないFP。河原石(ローム中のものか)を含む。
- 10 汚れの少ないFP。6層よりやや細かい。

断面C 61号土坑

- 1 黒褐色土。FAのブロックと少量のロームを含む。
  - 2 汚れの少ないFP。数回に分けて埋められており、汚れの度合いの異なる層が見える。
  - 3 黒褐色土。中粒～粗粒のFPを多く含む。
  - 4 黒褐色土。中粒のFPを多量に含む。
  - 5 黒褐色土。細粒のFPを多く含む。
  - 6 粗粒のFP主体。
- 45号土坑
- 7 褐色土。ロームブロックを多く含む。
  - 8 汚れの少ないFP。
  - 9 黒褐色土。中粒～粗粒のFPを多く含む。
  - 10 汚れた粗粒のFP。
  - 11 黒褐色土。中粒のFPを多量に含む。
  - 12 黒褐色土。FAとロームのブロックを多く含む。

第65図 45号・61号土坑平・断面図



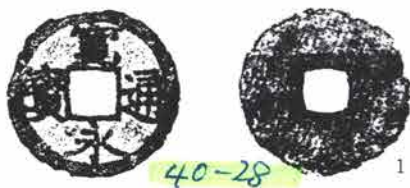


第66図 ローム採掘坑断面図

とIV層の境界にあたる。壁面には工具の痕跡が残されており、右上から左下に向かっていて、底部に近づくにつれ角度が浅くなり、水平方向に近くなる。工具痕の端部の幅は、5～6cmと8～9cmのものが多い。埋没土 FPが主体だが、一番上位には黒褐色土層がある。遺物 なし。重複 45号土坑より古い。分類 E。所見 45号土坑と61号土坑は、ともに土の採掘のための土坑と考えられる。その理由は、白井南中道遺跡で大規模に確認されたローム

採掘坑に類似していること、工具の痕跡が残されたままできれいに仕上げられた様子がないこと、現代に至るまで家屋の壁土を採取していたという例(近隣住民への聞き取りによる)があることである。この地域では、FP降下後の土壌にはかなりのFPが混じっており、軽石の混じらない土を手に入れるには土坑を掘るしか方法がなかったのである。また、土坑の年代は、南中道遺跡のものが中世で、現代まで例があることから、その間と考えられる。

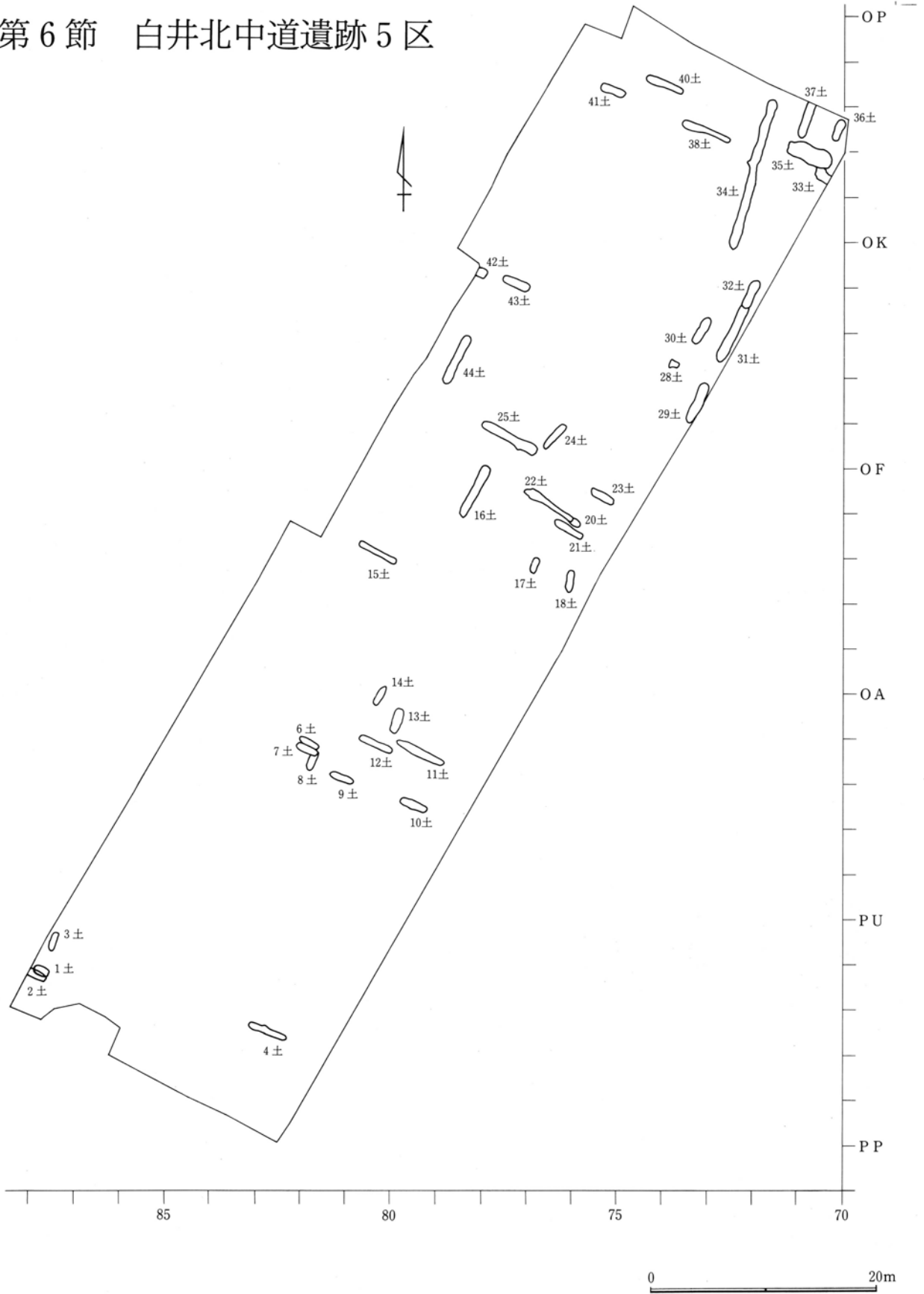
遺構外出土遺物



第67図 遺構外出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
遺構外 -1	古銭	表土	径 2.3 重 2.4	寛永通寶、穿の径6mm		完形

第6節 白井北中道遺跡5区



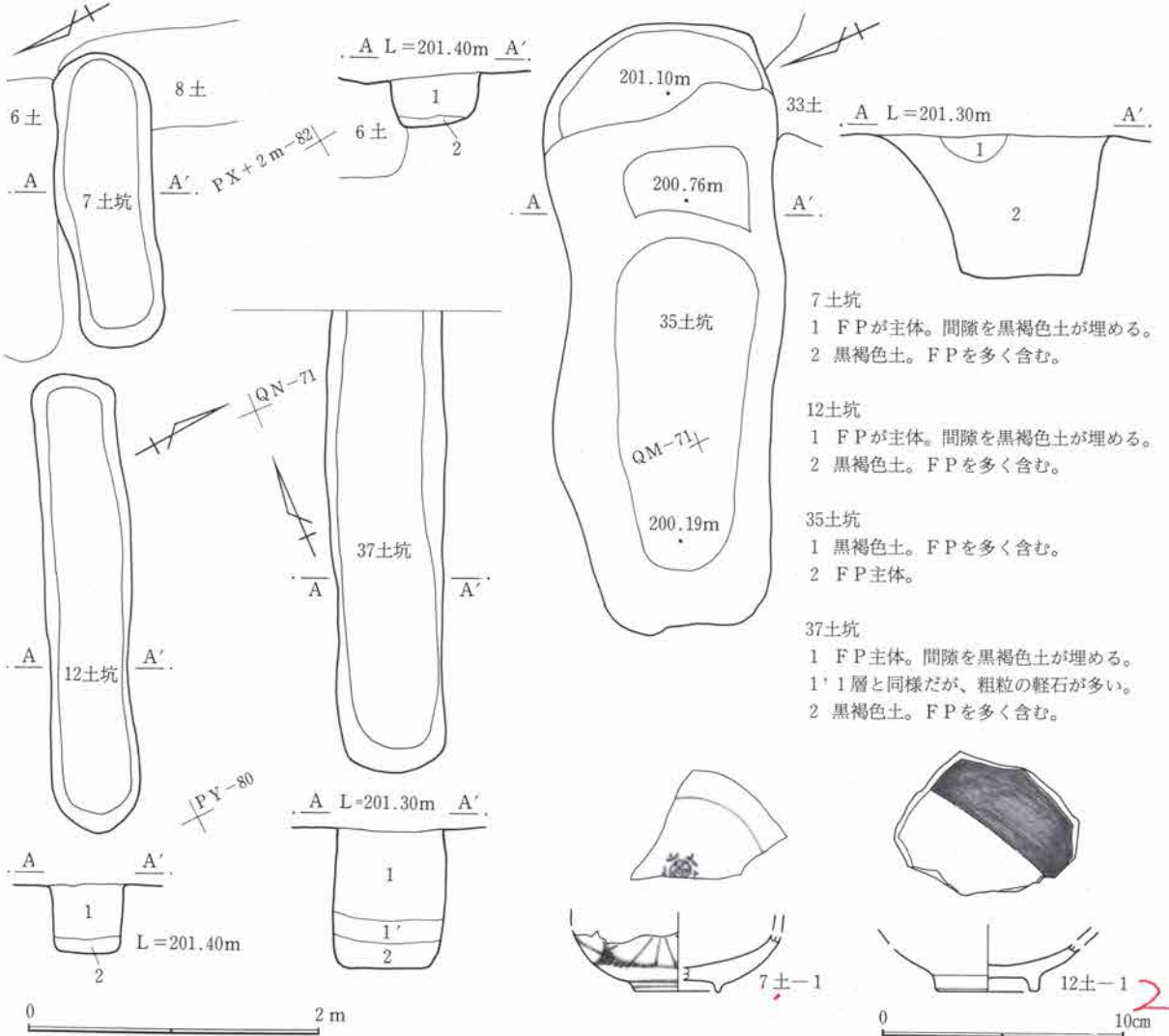
第68図 北中道遺跡5区全体図

7号土坑 位置 PX-81、5区南部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×2.0×0.3mである。埋没土 FPが主体で、底部に黒褐色土がある。遺物 磁器片が出土。重複 6号・8号土坑より新しい。分類 B1

12号土坑 位置 PY-80、5区南部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×3.1×0.5mである。埋没土 FPが主体で、底部に黒褐色土がある。遺物 陶器片が出土。分類 B1

35号土坑 位置 QL-70、5区北部。形状・規模 不定形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.5×4.2×1.0mである。埋没土 FPを主体とする。重複 33号土坑と重複するが、新旧関係は不明。分類 E

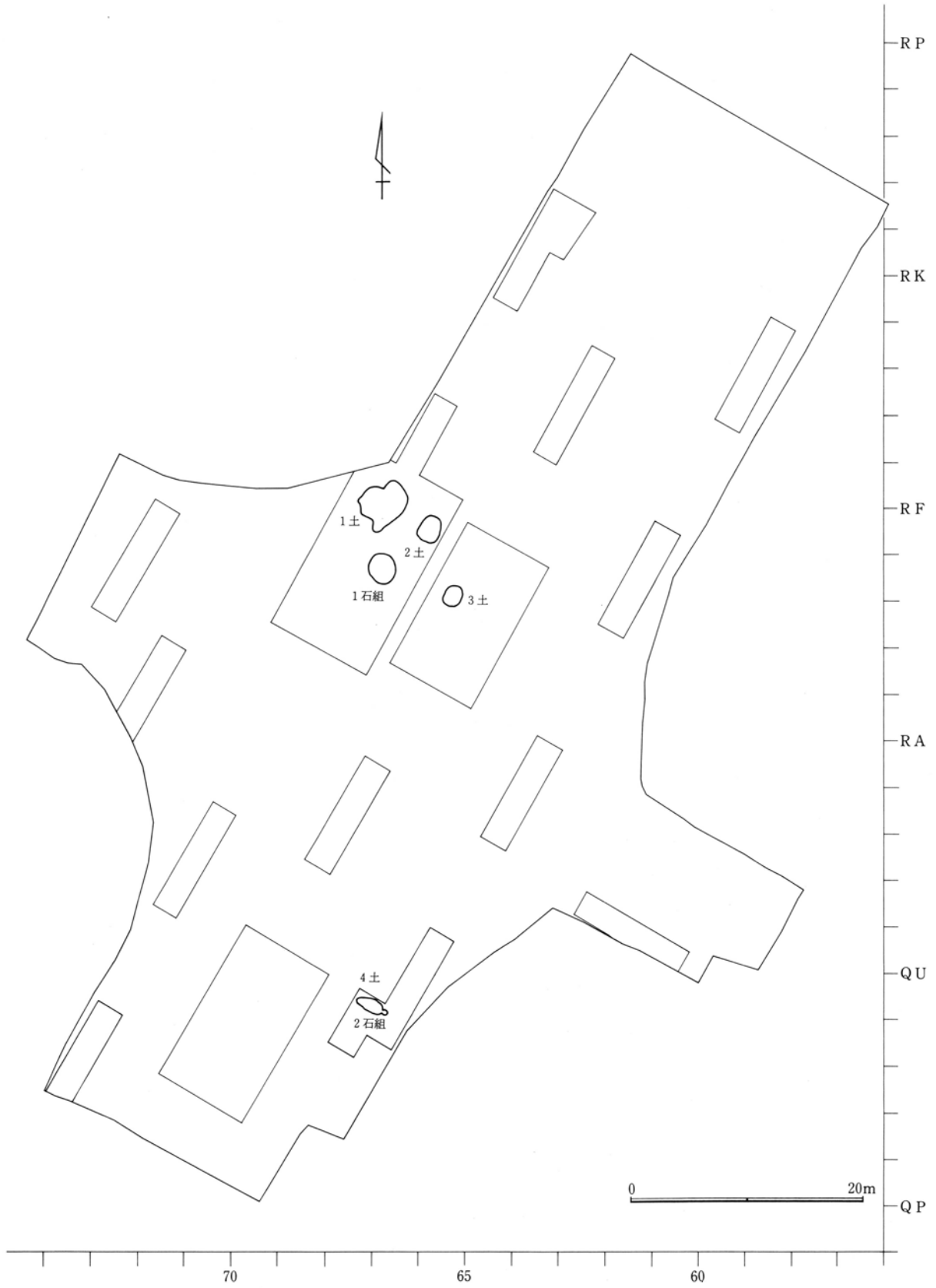
37号土坑 位置 QM-70、5区北部。形状・規模 溝状。短軸と深さは、それぞれ0.7m、0.9mである。埋没土 FPが主体であるが、中間に黒褐色土の層を挟む。分類 B3



第69図 7号・12号・35号・37号土坑平・断面図及び出土遺物

番号	種類 器種	出土 レベル	法	量 (cm)	成・整形技法の特徴	釉薬または①胎土②焼成③色調	残存状態 備考
7土-1	肥前 磁器 碗	覆土	口 底 高	— 3.6 —	外面 菊花散らし文。 内面 見込み手描き五弁花。	染付	胴～底部1/5 18世紀後～19 世紀前
12土-1	瀬戸・美濃 陶器 碗	覆土	口 底 高	— 4.2 —	内外面 鉄釉と灰釉を掛け分ける。 外面 底部中央に無釉の部分あり。	鉄釉、灰釉	底部のみ 18世紀

第7節 白井北中道遺跡6区

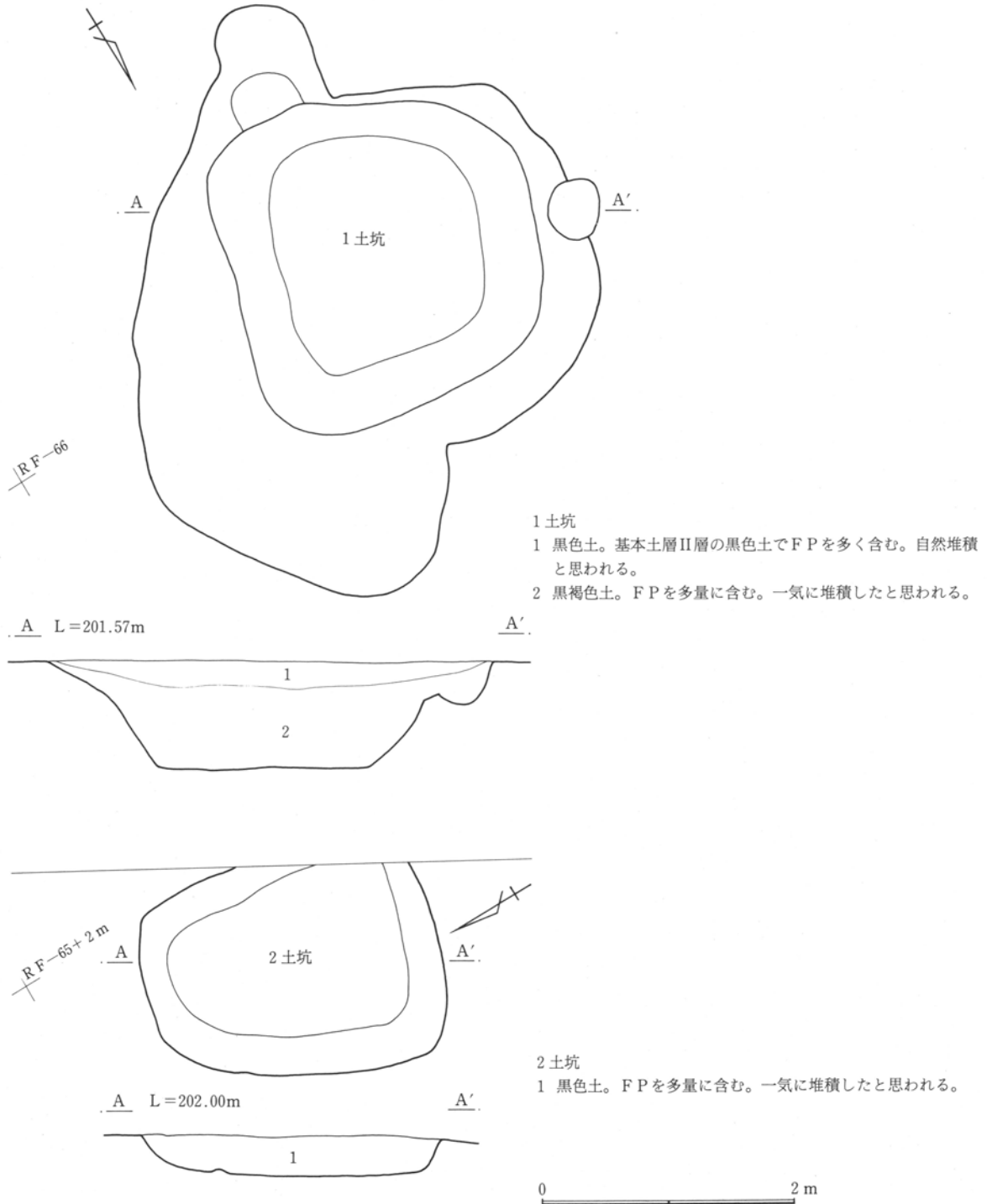


第70図 北中道遺跡6区全体図

**1号土坑** 位置 RE-66、6区中央部。形状・規模 不定形。短軸・長軸・深さは、それぞれ3.3×4.2×0.8mである。底面は平坦で、FP層中で終わっている。断面の形状は朝顔形に上部が開いている。埋没土 多量のFPを含む黒褐色土で埋まり、上部は

基本土層II層に対応すると思われる黒色土が堆積している。遺物 なし。分類 E

**2号土坑** 位置 RE-65、6区中央部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ(1.7)×2.4×0.3mである。埋没土 FPを多量に含む黒色土。遺物 なし。分類 C



第71図 1号・2号土坑平・断面図

第4章 白井北中道遺跡

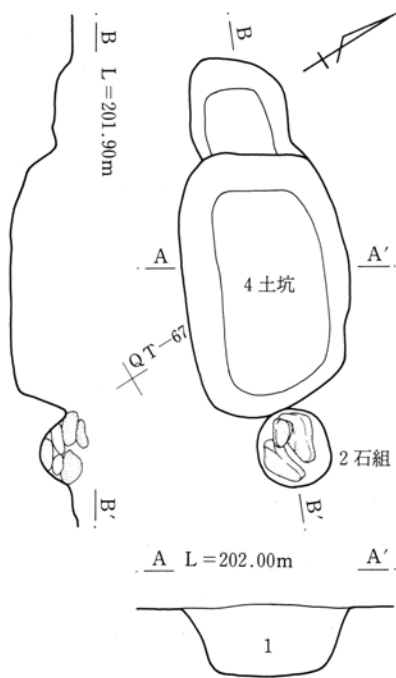
**3号土坑** 位置 RD-65、6区中央部。形状・規模 円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.6×1.9×0.4mである。埋没土 FPを多量に含む黒色土。遺物 なし。分類 D

**4号土坑** 位置 QT-66、6区南部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.1×2.4×0.5mである。西側に張出しがある。埋没土 FPを多量に含む黒色土。遺物 なし。重複 重複はしていないが、2号石組遺構が隣接する。分類 C

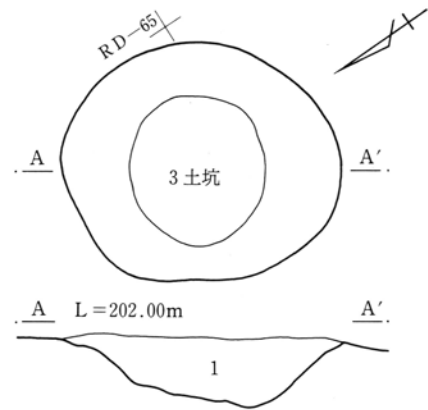
**1号石組遺構** 位置 RE-66、6区中央部。形状・規模 円形の土坑内に自然礫が詰まっている。土坑の規模は短軸・長軸・深さが、それぞれ0.6×0.6×0.3mである。礫に焼けた様子はない。埋没土 FPを多量に含む黒色土。遺物 なし。所見 遺構の

性格は不明である。

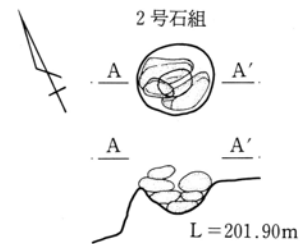
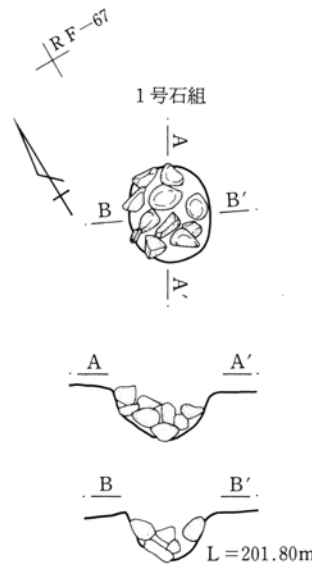
**2号石組遺構** 位置 QT-66、6区南部。形状・規模 円形の土坑内に自然礫が詰まっている。土坑の規模は短軸・長軸・深さが、それぞれ0.5×0.5×0.2mである。礫に焼けた様子はない。埋没土 FPを多量に含む黒色土。遺物 なし。重複 4号土坑と接する。所見 遺構の性格は不明。



4号土坑  
1 黒色土。FPを多く含む。一気に堆積したと思われる。



3号土坑  
1 黒色土。FPを多量に含む。



0 2 m

第72図 3号・4号土坑、1号・2号石組遺構平・断面図

第7節 白井北中道遺跡6区

白井北中道遺跡 土坑一覽表

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
1	1	LX-122	長方形	B1	0.6	3.5	0.1	土器片(江戸)	—			33
2	1	LW-121	長方形	B1	0.7	3.8	0.2		—			33
3	1	LX-121	長方形	B1	0.6	4.5	0.2		—			33
4	1	LV-118	長方形	B1	0.7	4.5	0.5		—			33
5	1	LV-117	楕円形	D	(0.8)	1.0	0.2		—			33
6	1	LX-117	長方形	B1	0.5	3.7	0.4		—			33
7	1	LY-116	長方形	B1	0.6	2.2	0.6	土器片(江戸)	—			34
8	1	LY-117	長方形	C	0.9	1.3	0.1		—			34
9	1	欠番										
10	1	欠番										
11	1	欠番										
12	1	MA-119	長方形	B1	0.5	2.5	0.2	磁器(江戸)等	—	中国染付出土	51	33
13	1	LY-120	長方形	B2	0.6	2.9	0.5	土器(江戸)	—			34
14	1	MB-117	長方形	B1	0.7	—	0.3		—			34
15	1	MB-118	長方形	B1	0.5	3.7	0.5		—			34
16	1	MC-119	溝状	B1	0.7	5.3	0.4		17(新)			34
17	1	MC-119	長方形	B1	0.6	1.9	0.1		16(古)			34
18	1	MB-116	長方形	B1	0.6	—	0.4		—			34
19	1	MB-117	長方形	B1	0.5	—	0.1		20(新),26(古)			34
20	1	MC-117	楕円形	C	0.8	1.2	0.3		19(古)			34
21	1	MC-118	長方形	B1	0.5	3.5	0.1		22(古)			34
22	1	MC-118	方形	C	1.0	—	0.2		21(新)			34
23A	1	MC-116	長方形	B1	0.6	2.9	0.3		23B(新)	23Bよりやや深い		35
23B	1	MC-116	長方形	B1	0.6	2.9	0.3		23A(古),24(新)			35
24	1	MC-116	長方形	B	0.6	1.6	0.4		23B(古)			35
25	1	MC-116	長方形	B1	0.5	(2.0)	0.2		30(不明)			35
26	1	MC-116	長方形	B1	0.5	(3.7)	0.1	陶器(江戸)	19(新)			34
27	1	MC-117	長方形	B4	0.7	3.5	0.4		—			34
28	1	欠番										
29	1	欠番										
30	1	MD-116	楕円形	C	0.8	1.4	0.3		25(不明)			35
31	1	MD-116	楕円形	C	0.7	1.5	0.4		—			35
32	1	ME-116	溝状	B1	0.6	12.6	0.1		33(不明),38(新),49(新)		49	35
33	1	MD-117	溝状	B1	0.6	(14.7)	0.2		32(不明),34(不明)		49	35
34	1	ME-118	溝状	B1	0.5	(13.0)	0.2		33(不明),43(不明)			36
35	1	欠番										
36	1	ME-115	長方形	B1	0.4	3.0	0.2		—			35
37	1	ME-115	長方形	B1	0.6	4.5	0.4		—			35
38	1	ME-116	溝状	B3	0.6	6.2	0.5	ほうろく片	32(古),43(不明),44(不明),49(古)		51	35
39	1	ME-118	楕円形	C	0.7	1.2	0.4		—			36
40	1	MF-120	溝状	B1	0.6	9.4	0.5		88(古)			36
41	1	MG-120	長方形	B1	0.6	1.9	0.3	土器,軟質陶器	—	江戸		36
42	1	ME-115	方形	B1	0.7	—	0.6		—			35
43	1	MF-118	溝状	B1	0.6	(16.1)	0.3	陶器,磁器	34(不明),38(不明)	江戸	49	36
44	1	MG-118	溝状	B1	0.6	(15.0)	0.2		38(不明),45(不明),46(不明),50(不明)			36
45	1	MG-117	長方形	B1	0.6	2.0	0.3	軟質陶器,磁器	44(不明)	江戸~明治		36
46	1	MG-118	長方形	C	0.9	1.4	0.3		44(不明)			36
47	1	MF-115	長方形	B1	0.8	—	1.0		48(不明)	現表土下からの深さ	51	37
48	1	MG-114	溝状	B1	0.8	—	0.5	陶器,磁器,瓦	47(不),53(不),71(不)	江戸		35
49	1	MG-115	長方形	B2	(0.5)	(3.5)	0.3		32(古),38(不明),84(古)			35
50	1	MH-117	溝状	B1	0.6	—	0.2	軟質陶器(江戸)	44(不明),46(不明),55(不明),75(不明)			37
51	1	MG-118	長方形	C	0.8	1.5	0.4		—			37
52	1	MH-119	長方形	C	0.7	1.6	0.3		—			37
53	1	MG-115	長方形	C	1.2	2.3	0.3	軟質陶器(江戸)	48(不明),69(古),84(不明)			37
54	1	MH-115	長方形	D	0.5	1.6	0.2		84(不明)			37
55	1	MH-117	溝状	B1	0.5	11.9	0.2		50(不明)			37
56	1	MH-116	長方形	C	0.9	2.3	0.4	土器(江戸)	—			37
57	1	MH-117	長方形	C	0.7	1.5	0.6		—	F P下まで掘り込む		37
58	1	MH-119	楕円形	C	1.2	1.7	0.7		—			37

第4章 白井北中道遺跡

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
59	1	欠番										
60	1	MI-119	長方形	C	0.6	1.4	0.1		—			37
61	1	MG-119	長方形	C	0.7	1.5	0.3		—			37
62	1	MJ-120	長方形?	B1	0.6	—	0.2		—			38
63	1	MJ-119	長方形	B1	0.5	2.5	0.1		—			37
64	1	MJ-119	長方形	B1	0.5	2.1	0.2		—			38
65	1	欠番										
66	1	欠番										
67	1	欠番										
68	1	MJ-117	長方形	B4	0.7	2.4	0.4		—			38
69	1	MH-115	長方形	B1	0.6	(4.5)	0.1		53(新),70(古),84(新)			35
70	1	MI-115	長方形	B1	0.6	4.8	0.3		69(新),73(不明),74(新)			35
71	1	MH-114	不定形	B1	—	—	0.3		48(不明),72(新)			35
72	1	MH-114	長方形	B3	0.7	4.4	0.6		71(古)			35
73	1	MI-114	楕円形	B1	0.7	(2.5)	0.1		70(不明)			35
74	1	MI-115	長方形	B3	0.9	2.9	0.6		70(古)			38
75	1	MI-116	溝状	B2	0.6	7.9	0.1		50(不明)			37
76	1	欠番										
77	1	欠番										
78	1	欠番										
79	1	MJ-114	不定形	B2	—	—	0.3		80(古)			38
80	1	MJ-114	長方形	B1	0.6	4.6	0.3	鎌	79(新)		52	38
81	1	MJ-113	長方形	B1	0.6	3.3	0.4		—			38
82	1	MJ-113	溝状	B1	0.7	(8.1)	0.3		—			38
83	1	MI-112	長方形	C	0.6	1.6	0.3		—			38
84	1	MG-117	溝状	B1	0.8	5.3	0.3		49(新),53(不明),54(不明)			35
85	1	MJ-113	長方形	B1	0.4	2.2	0.2		—			38
86	1	ME-116	長方形	C	0.6	1.3	0.2		—			39
87	1	ME-115	長方形	C	0.8	1.9	0.4		—			39
88	1	MF-120	楕円形?	D	—	—	0.2		40(新)			36
89	1	MK-121	楕円形	A	0.5	0.8	0.2	人骨,古銭	—		52	39
90	1	MD-110	楕円形	C	0.8	1.4	0.4	陶器(江戸)	91(古)			
91	1	MD-110	溝状	B1	0.9	—	0.2		90(新),92(新),93(新)			
92	1	ME-109	長方形	D	0.8	1.7	0.6		91(古),93(古)			39
93	1	ME-110	楕円形	D	(0.7)	1.5	0.3		91(古),92(新)			39
94	1	ME-109	楕円形?	B3	0.8	—	0.6		—			
95	1	ME-110	溝状?	B	0.9	—	0.6		96(新),99(新)			
96	1	MF-109	長方形	B3	0.7	(3.7)	0.7		95(古),97(不明),99(不明)			
97	1	MG-109	長方形	B4	0.9	(4.8)	0.6		96(不明),98(不明)			
98	1	MG-109	溝状?	B	(0.5)	—	—		97(不明)			
99	1	ME-110	溝状?	B2	0.7	—	0.6		95(古),96(不明)			
1	2	MY-113	溝状	B	0.6	7.8	0.1		2(不明)			42
2	2	LA-112	長方形	B	0.6	4.9	0.2		1(不明)			42
3	2	NA-111	長方形	B	0.4	3.9	0.2		4(古)			42
4	2	MY-112	溝状	B1	0.8	10.7	0.1		3(新)			42
5	2	MW-113	溝状	B	0.7	6.1	0.2		—			42
6	2	MV-113	長方形	B	0.5	2.7	0.1		—			42
7	2	MU-113	長方形	B	0.7	4.0	0.5		—			42
8	2	MT-114	溝状	B	0.6	8.3	0.2		—			42
9	2	MK-117	長方形	B	0.5	5.8	0.1		—			42
10	2	MO-119	長方形	B	0.5	3.3	0.2		—			42
11	2	MW-117	長方形	B	0.6	3.2	0.2		—			42
12	2	MN-112	溝状	B	0.6	—	0.4		—			42
13	2	MM-111	溝状	B	1.0	—	0.1		14(新)			42
14	2	MM-111	長方形	B	1.0	2.9	—		13(古)			42
15	2	MB-116	長方形	B'	1.4	(4.1)	0.6		—			42
16	2	ND-110	長方形	B	0.6	4.4	0.1		—			42
17	2	欠番										
18	2	欠番										
19	2	欠番										



第7節 白井北中道遺跡6区

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
20	2	欠番										
21	2	欠番										
22	2	欠番										
23	2	NE-114	円形	D	1.6	1.7	0.8		1号溝(古)		56	42
24	2	NE-115	長方形	C	0.8	1.3	0.9		—	FA下まで掘り込む		43
25	2	NE-116	長方形	B1	0.7	1.7	0.3					43
26	2	NE-116	長方形	B1	0.5	2.4	0.5	古銭	—		56	43
27	2	ND-116	溝状	B3	0.8	—	0.7		—			43
28	2	ND-116	長方形	B1	0.9	2.0	0.4		—			43
29	2	NE-116	長方形	B1	0.6	1.7	0.2		—			43
30	2	NE-113	溝状	B1	0.6	6.2	0.5		—			43
31	2	NK-114	溝状	B1	0.5	7.9	0.2		—			43
32	2	NK-114	溝状	B2	0.6	5.4	0.3		—			43
33	2	NJ-114	長方形	B3	0.5	2.0	0.4		34(古)			43
34	2	NJ-114	楕円形	D	—	(1.2)	0.2		33(新), 畠(古)			43
35	2	NK-113	長方形	B3	0.7	2.9	0.6		畠(古)			43
36	2	NL-114	長方形	B1	0.5	1.7	0.5		—			43
37	2	NL-114	長方形	B1	0.5	1.5	0.5		—			43
38	2	NJ-113	長方形	B4	0.6	3.6	0.7		畠(古)			44
39	2	NJ-113	溝状	B3	0.7	15.1	0.7	青磁	畠(古)		57	44
40	2	NI-112	長方形	C	0.6	1.1	0.7		—			44
41	2	NL-112	長方形	B1	0.7	—	0.7		畠(古)			44
42	2	NL-111	長方形	B3	0.6	—	0.7		—			44
43	2	NP-113	楕円形	D	1.0	1.2	0.7		—			44
44	2	NP-112	円形	D	1.3	1.3	0.6		—			44
45	2	NP-112	円形	D	1.0	1.1	0.4		—		56	44
46	2	NP-112	長方形	C	0.5	1.3	0.4		—			45
47	2	NQ-112	円形	D	1.0	1.1	0.3		畠(古)			45
48	2	NP-111	円形	D	1.0	1.0	0.3		—			45
49	2	NP-110	円形	D	1.1	1.2	0.3		—			45
50	2	欠番										
51	2	NO-110	楕円形	A	0.9	1.3	0.6	骨, 古銭	—		56	45
52	2	NO-110	溝状	B4	0.5	—	0.8		畠(古)			45
53	2	NK-109	長方形	B1	0.6	2.4	0.4		—			45
54	2	NQ-110	楕円形	D	1.1	1.3	0.4		—			45
55	2	NQ-110	楕円形	F	0.6	1.3	0.2		56(古)			45
56	2	NQ-110	長方形	C	0.9	1.4	0.3		55(新)			45
57	2	NQ-110	楕円形	F	0.7	1.0	0.4		—			45
1	3	ON-101	長方形	B4	0.7	4.2	1.1	陶磁器(江戸)	畠(不明)			54
2	3	OL-100	長方形	B4	0.8	2.1	0.8		1号畠(不明)			54
3	3	OF-101	長方形	B2	0.5	2.9	0.7	陶器(江戸)	—			54
4	3	OF-101	長方形?	B4	0.6	—	1.0	陶器(江戸)	—		72	54
5	3	OF-101	長方形?	B3	0.5	—	0.7		—		72	54
6	3	OF-102	長方形	B3	0.7	2.2	0.8	磁器(江戸)	—			55
7	3	OF-102	長方形	F	0.7	0.9	0.7	磁器(明治)	—			55
8	3	OF-103	長方形	B4	0.7	2.7	1.0	陶磁器(江戸)	9(新)			55
9	3	OF-102	長方形	B1	0.5	1.5	0.3		8(古), 10(古)			55
10	3	OF-102	長方形	B3	0.7	3.3	0.6		9(新)			55
11	3	OG-103	長方形	B4	0.6	2.3	0.9	陶磁器(明治)	—			55
12	3	OH-105	溝状	B1	0.6	—	0.6	陶磁器(江戸)	—			55
13	3	OC-104	長方形	C	1.1	1.5	0.6	土器(江戸)	—			55
14	3	OC-105	長方形	C	1.0	1.3	0.7		—			55
15	3	OB-104	長方形	B4	0.8	2.5	0.8		—			56
16	3	OB-105	長方形	C	1.0	1.7	0.3		17(不明)			55
17	3	OB-106	長方形	B1	0.8	4.2	0.3	軟質陶器(江戸)	16(不明)			55
18	3	OB-105	溝状	B3	0.8	5.9	1.0	磁器等	—		72	56
19	3	OH-101	長方形	C	1.0	1.6	0.7		畠(不明)		72	56
20	3	OJ-104	長方形	B3	(0.8)	5.0	0.9		畠(新), 21(新)			56
21	3	OJ-113	—	E	(4.1)	11.0	0.4	陶磁器等	畠(新), 20(古)		73	57
22	3	OC-107	溝状	B3	0.8	—	0.7	陶器(江戸)	49(不明)			56

第4章 白井北中道遺跡

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
23	3	OC-108	溝状	B 1	0.8	—	0.3	磁器(明治)	49(不明)			58
24	3	OB-108	溝状	B 2	0.8	—	0.4		—			58
25	3	NY-104	長方形	B 2	0.7	3.4	0.4	陶磁器(江戸)	—			58
26	3	OA-105	長方形	B 4	0.6	2.1	0.4	陶器(江戸)	—			58
27	3	欠番										
28	3	NY-106	長方形	B 4	0.6	3.9	0.5	陶磁器(江戸)	—			58
29	3	NY-106	溝状	B 1	0.6	7.5	0.1	陶器(明治)	—			58
30	3	NV-105	長方形	B 1	1.0	2.1	0.7	土器(江戸)	—			59
31	3	NV-105	長方形	B 1	0.9	2.3	0.5	土器(江戸)	—			59
32	3	NV-106	長方形	B 1	0.7	1.7	0.1		—			59
33	3	NV-106	長方形	B 3	0.7	2.4	0.3		—			59
34	3	NW-108	長方形	B 3	0.6	2.6	0.3		—			59
35	3	欠番										
36	3	NV-108	長方形	B 3	0.4	2.9	0.4		—			59
37	3	NW-108	溝状	B 3	0.5	5.1	0.5	陶器(江戸)	—			59
38	3	欠番										
39	3	欠番										
40	3	NW-110	長方形	D	0.7	1.6	0.3		—			59
41	3	NT-110	長方形	B	0.7	(2.4)	0.4		42(新)			59
42	3	NT-110	長方形	B'	0.6	2.1	0.7		41(古)			60
43	3	OM-101	長方形	B 4	0.7	3.5	0.6		畠(不明)			60
44	3	OG-103	長方形	B	0.9	1.7	0.9		—			
45	3	OG-104	長方形	B 4	1.0	2.8	0.9		—			60
46	3	OC-106	楕円形	F	0.5	0.7	0.2		—			60
47	3	OC-106	長方形	F	0.5	1.2	0.2	磁器(江戸)	—			60
48	3	OC-106	長方形	B 2	0.7	2.6	0.6		—			60
49	3	OC-108	長方形	B	0.5	3.4	0.6		22(不明), 23(不明)			60
50	3	OB-106	長方形	B 2	0.7	3.8	0.5	磁器(明治)	—			55
51	3	OA-106	長方形	B 3	0.7	2.4	0.6	土器(江戸)	—			60
52	3	OA-107	長方形	B 2	0.7	2.8	0.4		—			60
53	3	NX-107	長方形	B 3	0.7	2.7	0.4	軟質陶器(江戸)	—			60
54	3	NW-107	長方形	B 3	0.5	2.5	0.2	磁器(江戸)	—			61
55	3	NW-107	長方形	B 1	0.6	1.4	0.4		—			61
56	3	OB-106	長方形	D	0.8	1.2	0.2		—			61
57	3	NS-107	長方形	B 1	0.6	3.3	0.3	陶磁器(江戸)	—			61
58	3	NR-107	長方形?	B 3	0.5	—	0.5	陶器(江戸)	—			61
59	3	OP-101	長方形	B 4	0.7	4.9	0.9		—			61
60	3	OP-102	長方形	B 4	0.6	2.4	0.8		—			61
61	3	OP-104	不定形	E	1.6	—	0.8		64(不明)		77	61
62	3	OO-102	長方形	B 4	0.9	4.1	0.8		64(不明)			61
63	3	OO-103	溝状	B 3	0.9	—	1.1		—			61
64	3	OO-103	楕円形	D	(0.9)	1.8	0.8		61(不明), 62(不明), 65(不明)			61
65	3	OO-103	長方形	B 4	0.8	3.6	0.7		64(不明)			61
66	3	OL-105	溝状	B 4	0.8	15.9	0.8		67(不明)			61
67	3	OR-106	長方形	B 3	0.7	2.3	0.8		66(不明)			61
68	3	OJ-106	溝状	B 1	0.8	5.5	0.6		69(新), 70(新)		77	61
69	3	OJ-106	長方形	C	1.0	1.8	0.7		68(古)		77	61
70	3	OI-107	楕円形	D	0.9	1.4	1.0		68(古)			61
71	3	OH-107	溝状	B 1	0.7	(4.9)	0.7		72(不明)			61
72	3	OG-108	溝状	B 3	0.6	—	0.6		71(不明)			61
73	3	欠番										
74	3	欠番										
1	4	OU-105	溝状	B 3	0.8	—	0.9		—			62
2	4	OT-103	楕円形	B 1	0.8	3.0	0.5		—			62
3	4	OT-103	不定形	B 4	0.6	4.4	0.8		4(不明)			
4	4	OT-102	長方形	B 4	0.7	3.9	0.8		3(不明)			
5	4	OT-102	長方形	B 1	0.8	3.7	0.4		—			63
6	4	OT-100	長方形	B 1	0.6	(2.3)	0.6		8(不明)			62
7	4	OT-100	円形	F	0.8	0.8	0.7		8(新)			
8	4	OT-100	正方形	C	1.2	1.3	0.7		6(不明), 7(古)			

第7節 白井北中道遺跡6区

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
9	4	OT-100	楕円形?	B 4	0.6	—	0.6		—			
10	4	OW-98	溝状	B 1	1.1	—	0.2	陶器	—		82	
11	4	OW-97	長方形	B 1	0.7	2.2	0.4		—			
12	4	OX-96	長方形	B 3	0.7	4.4	0.7		—			63
13	4	PA-96	長方形	B 1	0.8	2.9	0.6		—			
14	4	OY-95	長方形	B 4	1.0	3.4	0.9		15(新),18(不明)		82	63
15	4	PA-96	長方形	B 1	0.7	2.4	0.4	古銭	14(古)		82	
16	4	PA-96	長方形	C	0.9	1.3	0.4		—			
17	4	PA-95	長方形	B 1	0.7	3.6	0.1	陶器(江戸)	—			
18	4	PA-95	長方形	B 3	1.1	(4.3)	0.7	陶器	14(不明)		82	
19	4	PB-94	長方形	B 1	0.7	3.3	0.2	陶器(江戸)等	—			
20	4	PB-94	溝状	B 2	1.2	—	0.6	陶磁器(明治)	—			
21	4	PE-93	長方形	B 2	0.7	(3.2)	0.3		24(不明)			
22	4	PE-93	楕円形	D	1.1	1.4	0.5	軟質陶器(江戸)	—			
23	4	PE-93	長方形	B 2	0.6	(3.4)	0.4		24(不明)			
24	4	PE-93	不定形	B 1	1.2	—	0.6	こはぜ	21(不明),23(不明)		83	
25	4	PF-92	溝状	B 1	0.8	—	0.4	陶器(江戸)	26(不明)			
26	4	PG-91	溝状	B 2	0.7	(5.6)	0.3	陶器(明治)	25(不明)			63
27	4	PH-91	長方形	B 1	0.5	1.5	0.4		—			63
28	4	PI-91	長方形	B 1	0.6	3.0	0.4		—			63
29	4	PH-90	円形	D	1.2	1.3	0.2		—			63
30	4	PL-90	長方形	B 1	0.7	2.5	0.5		—			
31	4	PM-89	溝状	B 2	0.6	5.8	0.3	陶器(江戸)	—			
32	4	PM-88	長方形	B 1	0.6	3.1	0.3		—			
33	4	PL-87	長方形	B 1	0.6	2.4	0.3		—			
34	4	PK-85	長方形	B	0.5	1.5	0.3		35(不明)			
35	4	PL-86	溝状	B 1	0.8	6.0	0.5	陶器(江戸)	34(不明)			63
36	4	PK-84	溝状	B 1	0.7	—	0.7		—			
37	4	PM-86	長方形	B 1	0.6	2.3	0.4		—			
38	4	ON-97	長方形	B 2	0.5	1.6	0.2	陶器	39(古)		83	64
39	4	ON-97	長方形	B 1	0.5	2.6	0.5		38(新)		83	64
40	4	ON-98	楕円形	D	0.9	1.5	0.6		41(不明)			64
41	4	ON-98	長方形	B	0.8	(1.5)	0.5		40(不明),42(不明)			64
42	4	ON-98	長方形	B 3	0.8	—	0.8		41(不明)			64
43	4	OO-98	長方形	B 1	0.7	—	0.5		—			64
44	4	ON-96	溝状	B 1	0.6	—	0.4	陶器	—		83	65
45	4	OP-98	楕円形	E	1.8	4.1	1.2		61(古)	ローム採掘坑	84	65
46	4	OR-98	長方形	B 4	(0.6)	2.5	0.5		47(新)			
47	4	OR-98	長方形	B 1	0.6	1.8	0.4	陶器(江戸)	46(古)			
48	4	OR-97	長方形?	B 1	0.6	—	0.2		49(古)			67
49	4	OR-97	長方形?	B 1	(0.8)	1.6	0.4		48(新)			67
50	4	OR-97	楕円形	C	0.8	1.4	0.7		—			67
51	4	OR-97	長方形	B 1	0.7	1.9	0.6		—			67
52	4	OS-97	楕円形	B 3	0.8	1.9	0.6		53(不明)			67
53	4	OR-97	長方形	B 2	0.8	4.3	0.4		52(不明)			67
54	4	OW-94	長方形	B 2	0.7	4.3	0.7		—			68
55	4	OV-92	溝状	B 1	0.6	—	0.1		—			68
56	4	OX-93	長方形	B 1	0.8	—	0.6		—			68
57	4	OY-91	溝状	B 1	0.8	—	0.7		59(新)			69
58	4	OY-90	溝状?	B 1	0.6	—	0.8	磁器(江戸)	59(不明)			69
59	4	OY-90	溝状	B 1	0.8	—	0.2		57(古),58(不明)			69
60	4	OS-97	円形?	D	—	1.5	0.8		—			69
61	4	OP-98	楕円形	E	2.8	3.5	1.3		45(新)	ローム採掘坑	84	65
1	5	PS-87	楕円形	C	0.7	1.4	0.6	陶器(江戸)	2(古)			
2	5	PS-87	楕円形	B 1	(0.7)	—	0.3		1(新)			
3	5	PT-87	楕円形	B 1	0.6	1.9	0.3	磁器(明治以降)	—			
4	5	PR-82	長方形	B 1	0.6	3.6	0.5		—			
5	5	欠番										
6	5	PX-81	楕円形	B 1	0.6	1.9	0.7		7(新)			
7	5	PX-81	楕円形	B 1	0.7	2.0	0.3	磁器	6(古),8(古)		87	70

第4章 白井北中道遺跡

土坑 番号	調査 区	グリッド	形 状	分類	規模(m)			遺 物	重 複	備 考	本文 頁	写真 頁
					短軸	長軸	深さ					
8	5	PX-81	楕円形	B1	0.7	2.0	0.3		7(新)			
9	5	PX-81	楕円形	B1	0.6	2.3	0.7		—			70
10	5	PW-79	楕円形	B1	0.7	2.6	0.5		—			
11	5	PX-79	長方形	B1	0.7	4.7	0.9		—			
12	5	PY-80	長方形	B1	0.6	3.1	0.5	陶器	—		87	70
13	5	PY-79	長方形	B1	0.7	2.6	0.8	播り鉢(江戸)	—			70
14	5	PY-80	溝状?	B1	0.4	—	0.2	磁器(江戸)	—			
15	5	QD-80	長方形	B1	0.5	3.7	0.2	陶磁器(江戸)	—			
16	5	QE-78	溝状	B1	0.7	5.1	0.2		—			
17	5	QC-76	楕円形	C	0.6	1.4	0.5		—			
18	5	QC-76	楕円形	B2	0.6	2.0	0.5		—			
19	5	欠番										
20	5	QD-75	長方形	B1	0.5	—	0.2		22(不明)			
21	5	QD-76	長方形	B2	0.7	2.9	0.3		—			
22	5	QE-76	長方形	B2	0.8	—	0.3		20(不明)			
23	5	QE-75	長方形	B1	0.7	2.3	0.3		—			
24	5	QF-76	長方形	B1	0.6	2.9	0.7		—			
25	5	QF-77	溝状	B1	0.8	5.6	0.6	土器(江戸)	—			70
26	5	欠番										
27	5	欠番										
28	5	QH-73	長方形	F	0.5	0.9	0.2		—			
29	5	QG-73	長方形	B1	0.8	3.9	0.4	陶器(江戸)	—			
30	5	QI-73	長方形	B1	0.6	2.5	0.2		—			
31	5	QH-72	溝状	B1	0.8	7.8	0.5		32(不明)			
32	5	QI-72	長方形	B1	0.8	2.7	0.7	土器(江戸)	31(不明)			
33	5	QL-70	長方形?	B2	0.7	—	0.5		35(不明)			
34	5	QK-72	溝状	B3	0.9	13.6	1.0		—			
35	5	QL-70	不定形	E	1.5	4.2	1.0		33(不明)		87	
36	5	QM-70	長方形	B1	0.7	2.0	0.4		—			
37	5	QM-70	溝状	B3	0.7	—	0.9		—		87	
38	5	QM-73	溝状	B1	0.7	5.0	0.5		—			
39	5	欠番										
40	5	QN-74	長方形	B1	0.6	3.7	0.4	陶磁器(江戸)	—			
41	5	QN-75	長方形	B1	0.6	2.3	0.5	陶磁器(江戸)	—			
42	5	QJ-78	長方形?	B	0.8	—	0.7		—			
43	5	QJ-77	長方形	B'	0.7	2.6	0.7		—			
44	5	QH-78	長方形	B	0.7	4.6	0.6		—			
1	6	RE-66	不定形	E	3.3	4.2	0.8		—		89	71
2	6	RE-65	楕円形	C	(1.7)	2.4	0.3		—		89	71
3	6	RD-65	円形	D	1.6	1.9	0.4		—		90	72
4	6	QT-66	長方形	C	1.1	2.4	0.5		—		90	72

※重複の記載について

例えば、2号土坑の重複で「3(新)」と記入してある場合は、3号土坑と重複し、3号土坑の方が新しいことを意味する。

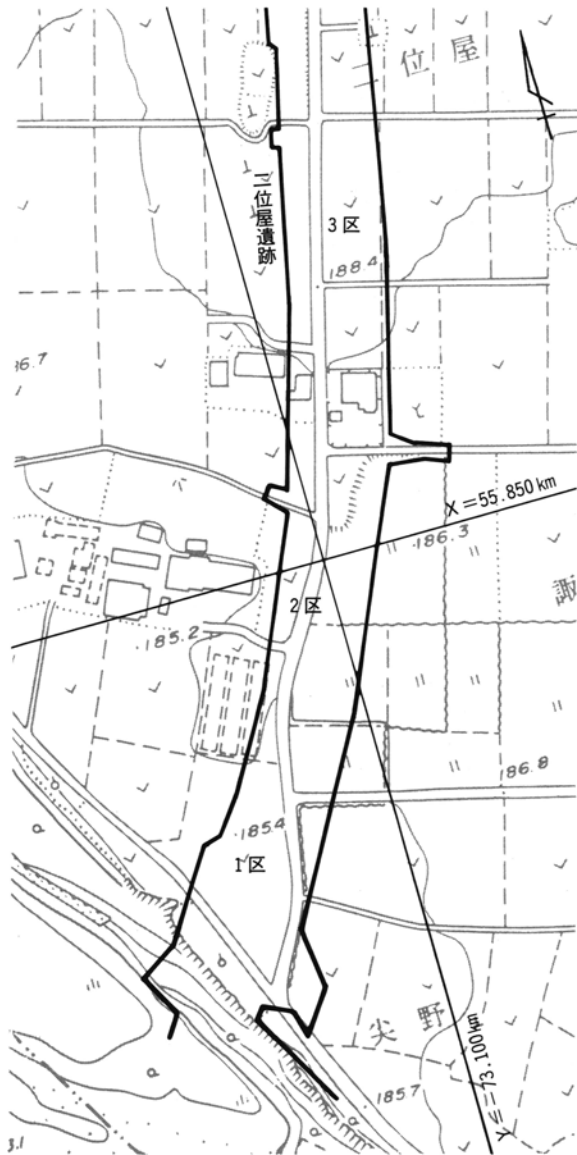
## 第5章

### 白井二位屋・南中道遺跡 (第1集補遺)

## 第1節 補遺編の経緯

白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡のFP上面の調査については、平成5年に一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集『白井遺跡群—中世編—』として報告書が刊行された。しかし、この報告書を編集している段階では、南中道遺跡の5区の一部が未調査であった。そのため本報告書で追加報告をするに至った。

また、第3集以降の報告書編集中に、第1集および第2集に関わる遺物が混入していることが確認され、合わせて本報告書に掲載することとした。



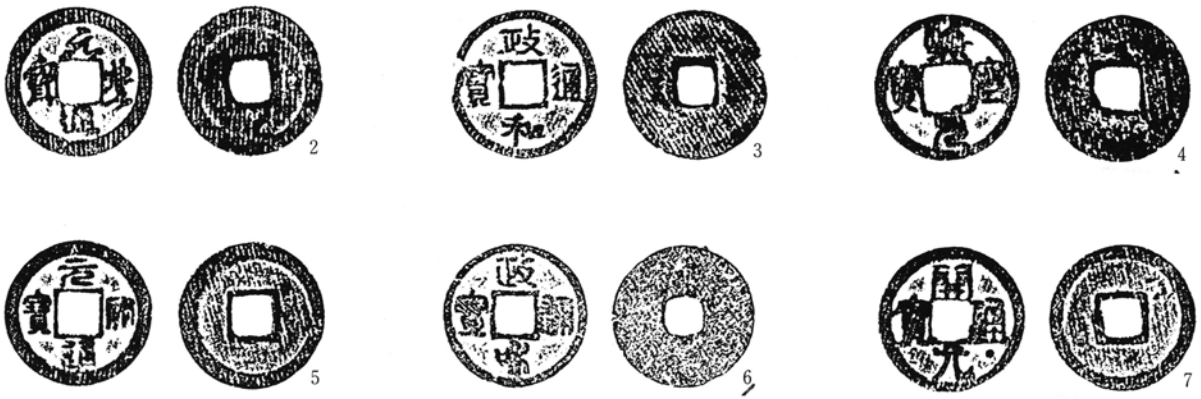
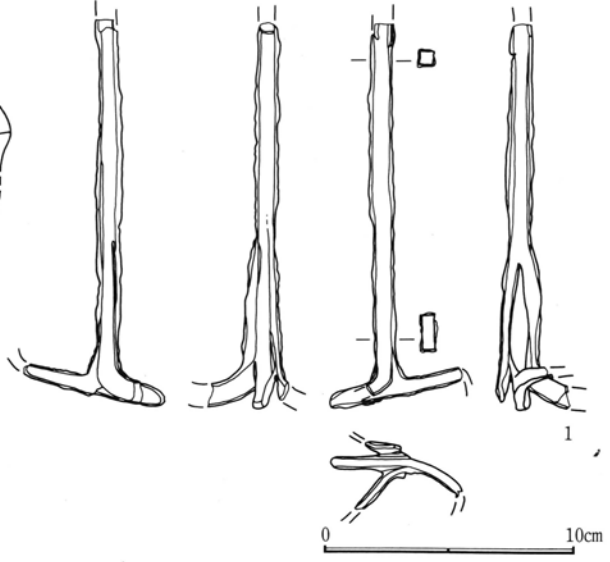
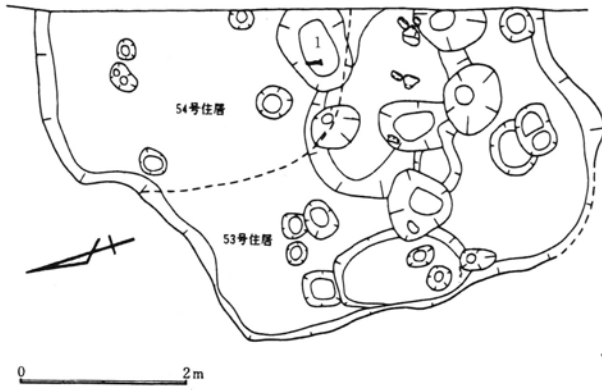
第73図 二位屋・南中道遺跡全体図

(1:2,500)

# 第2節 白井二位屋遺跡

第2集『白井遺跡群—集落編I—』に掲載されて

いる53号住居と54号住居が重複する部分で、鉄製の焼印が出土している。焼印は文字の一部が欠損しており、判読はできなかった。



第74図 二位屋遺跡平面図及び出土遺物

0 5 cm

白井二位屋遺跡

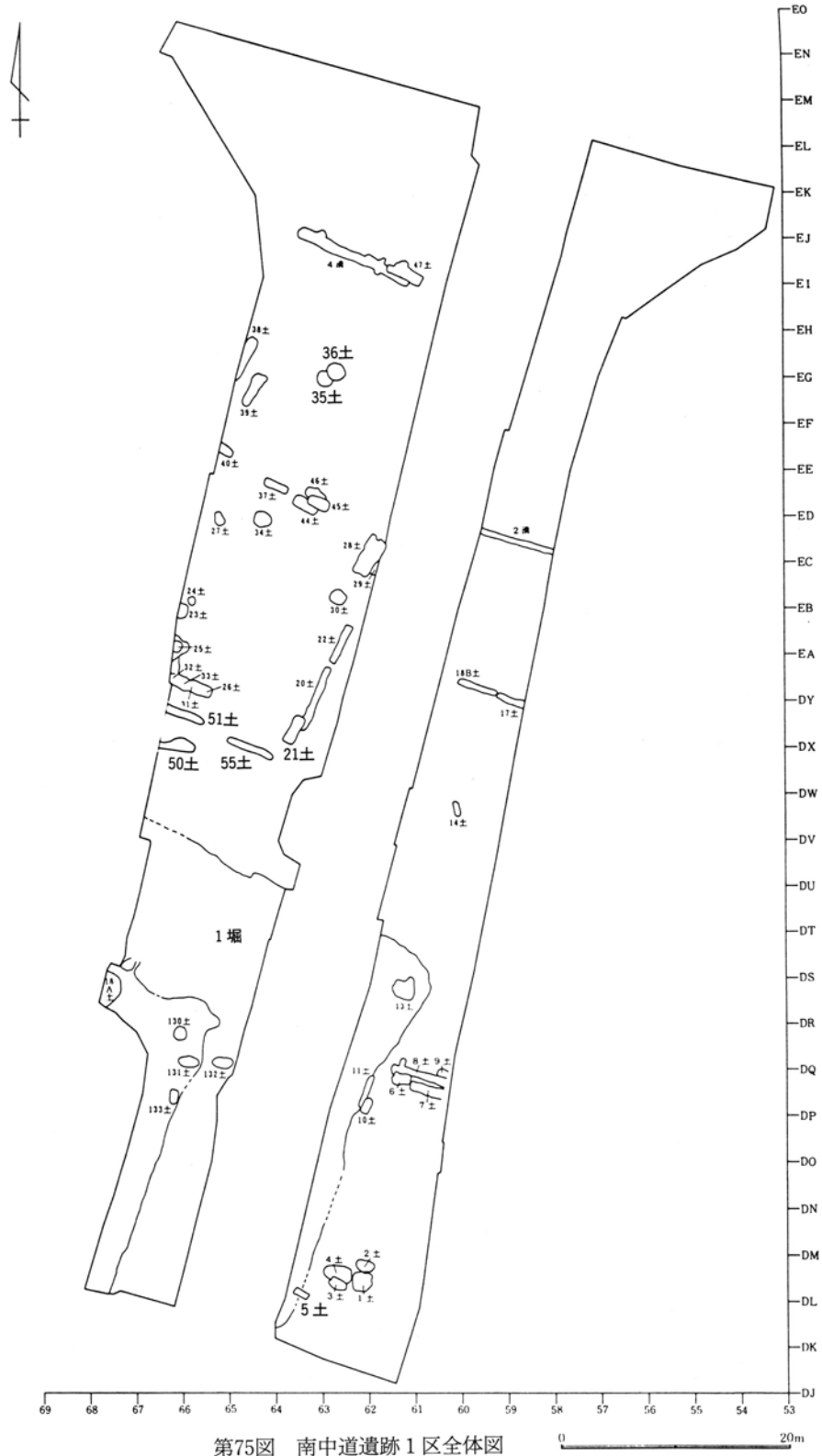
番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm, g)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
1	鉄製品 焼印	53住	残存長 15.1	2枚の柱状鉄の間に、別の短い柱状鉄が挟み込まれ、それらで印面を構成している。残存する印面の大きさは5.2×2.8cm。文字は判読不能。		一部欠損
2	古銭	遺構外	径 2.43 重 2.98	元豊通寶、穿の径69mm		完形
3	古銭	遺構外	径 2.44 重 2.56	政和通寶、穿の径65mm		ほぼ完形
4	古銭	遺構外	径 2.40 重 2.70	元豊通寶、穿の径74mm		完形
5	古銭	遺構外	径 2.43 重 3.50	元豊通寶、穿の径67mm		完形
6	古銭	遺構外	径 2.40 重 2.60	政和通寶、穿の径63mm		完形
7	古銭	遺構外	径 2.43 重 2.51	開元通寶、穿の径63mm		完形

### 第3節 白井南中道遺跡

#### 南中道遺跡1区

南部で確認した。堀の斜面部に土坑が重複する例も認められた。また、この調査区は7世紀～10世紀の集落となっており、堅穴住居も多数検出していることから、土坑の覆土中には多様な遺物が含まれている。

南中道1区は、仁居谷城の堀の屈曲部を調査区の

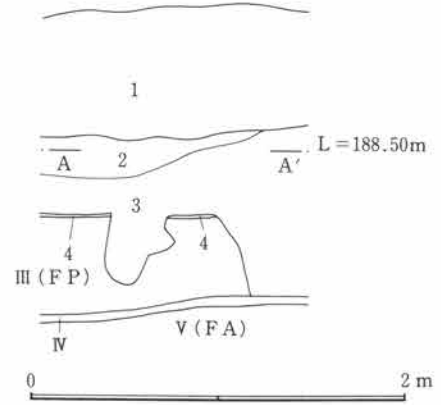


第75図 南中道遺跡1区全体図



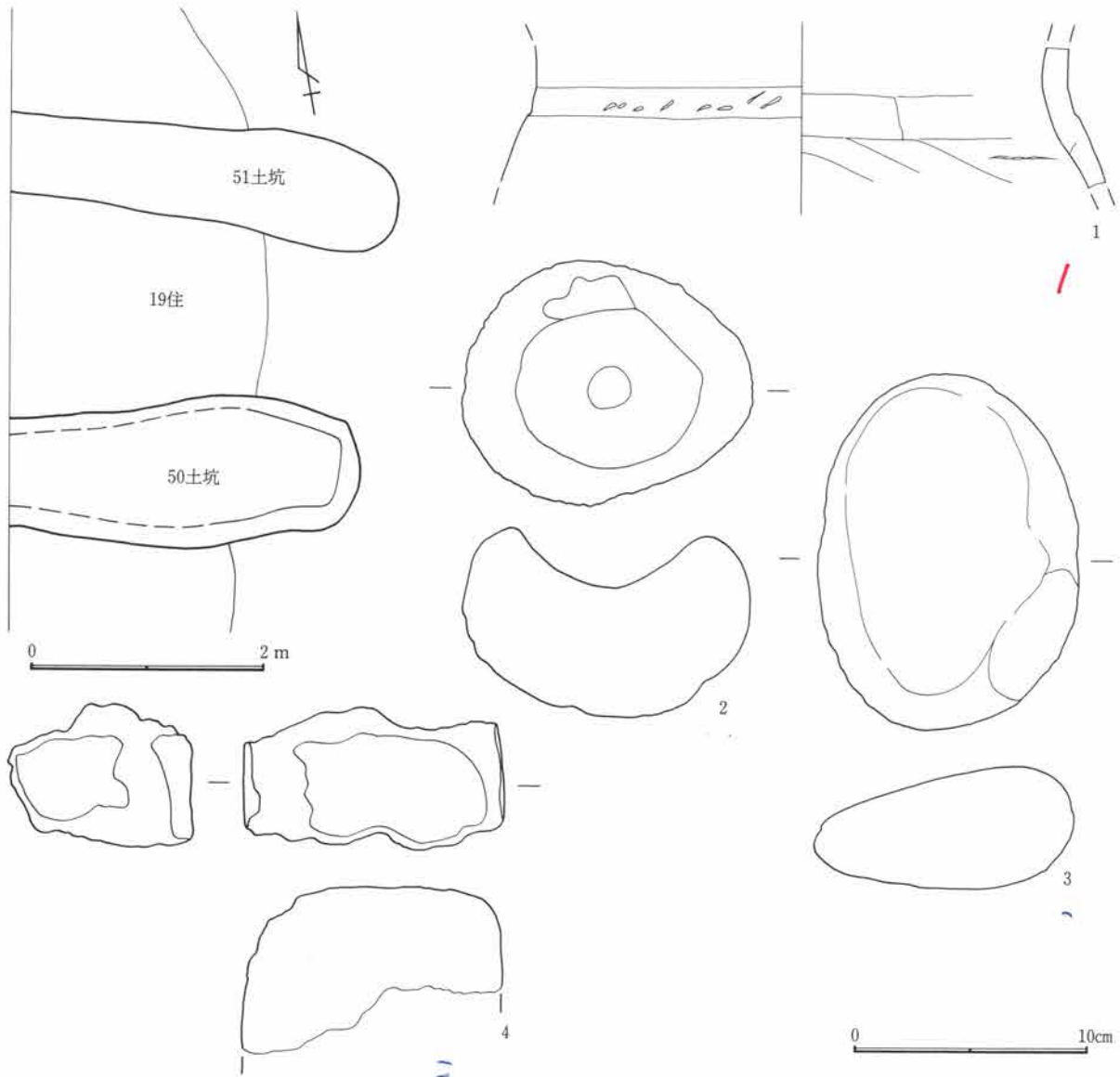
**仁居谷城の土塁** 1区の南西部に仁居谷城に伴う土塁がある。この土塁は僅かに調査区域に入っていたが、崩れる恐れのあることから、調査区に面している一部の土層確認のみを行った。これによるとFP層の上位に薄い黒色土層があり、さらにFPの混じる黒褐色土と暗褐色土が重なっていた。

**50号・51号土坑** 位置 DW-66、1区中央部。形状・規模 調査区外に続くため全景は不明だが、ともに細長い長方形と考えられる。50号土坑は幅0.8m、51号土坑は幅1.2mである。遺物 土師器の甕片、石製品が出土。重複 19号住居より新しい。

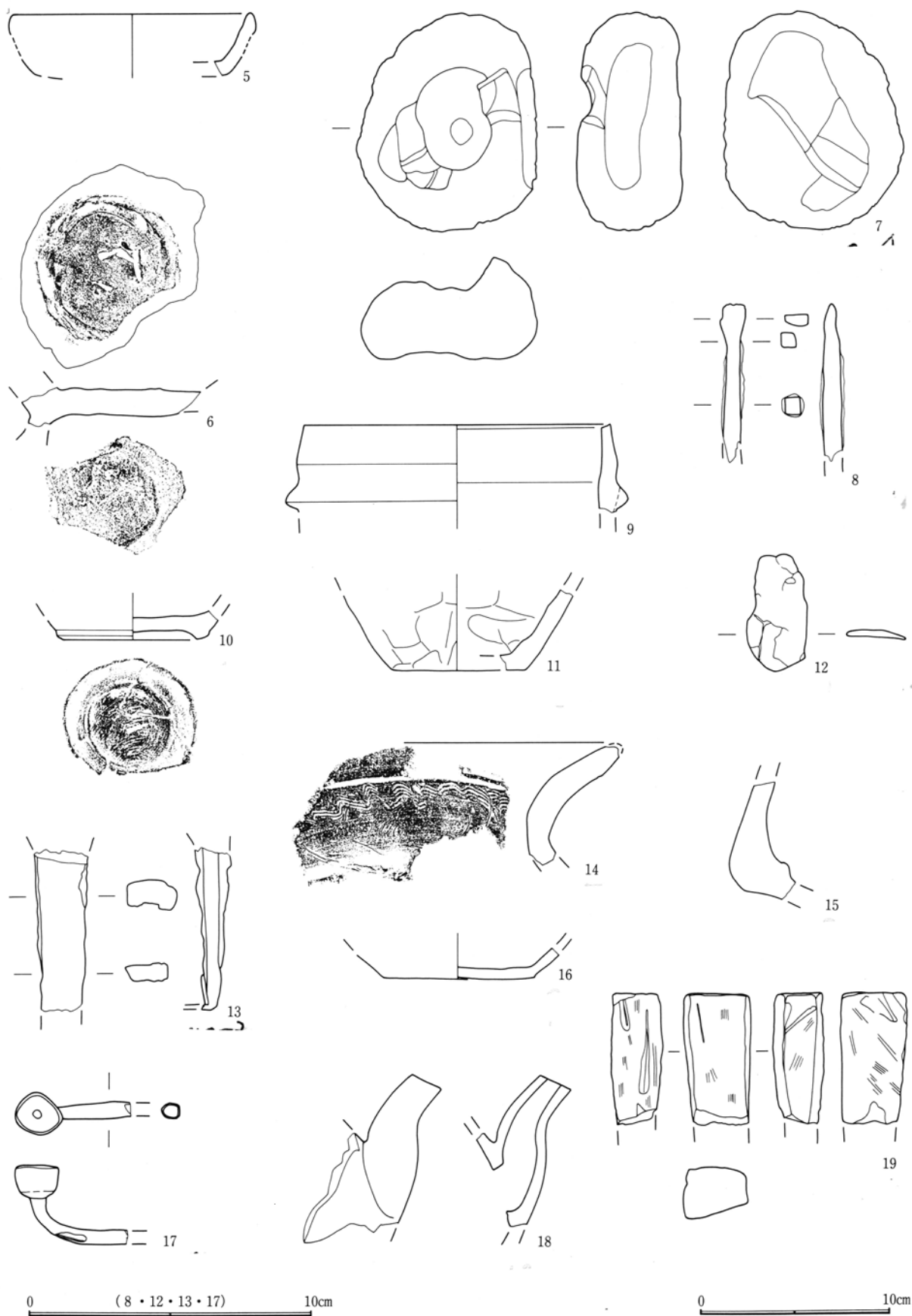


土塁

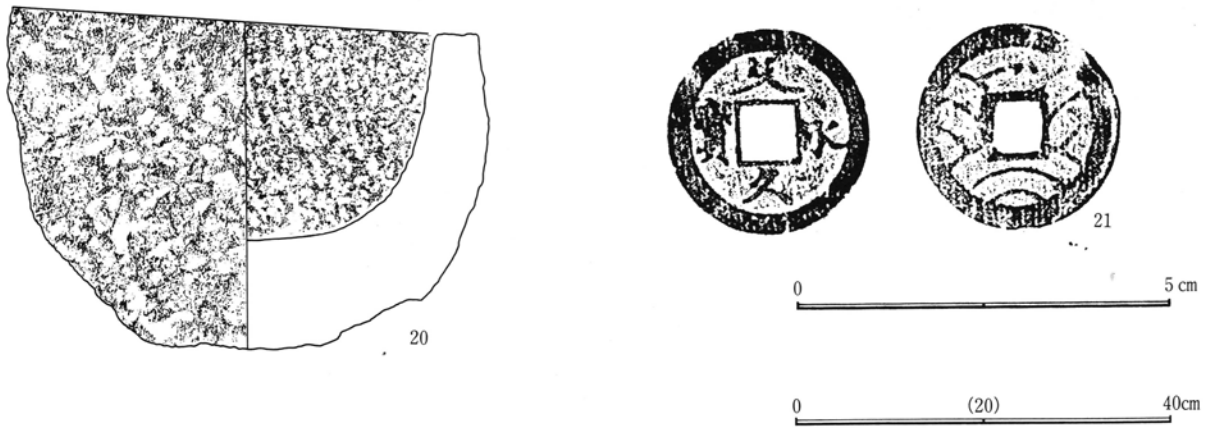
- 1 暗褐色土。FPを含む。
- 2 暗褐色土。汚れたFPを多量に含む。
- 3 黒褐色土。FPを少量含む。
- 4 黒色土。



第76図 土塁断面図、50号・51号土坑平面図及び出土遺物



第77図 1区出土遺物



第78図 1区出土遺物

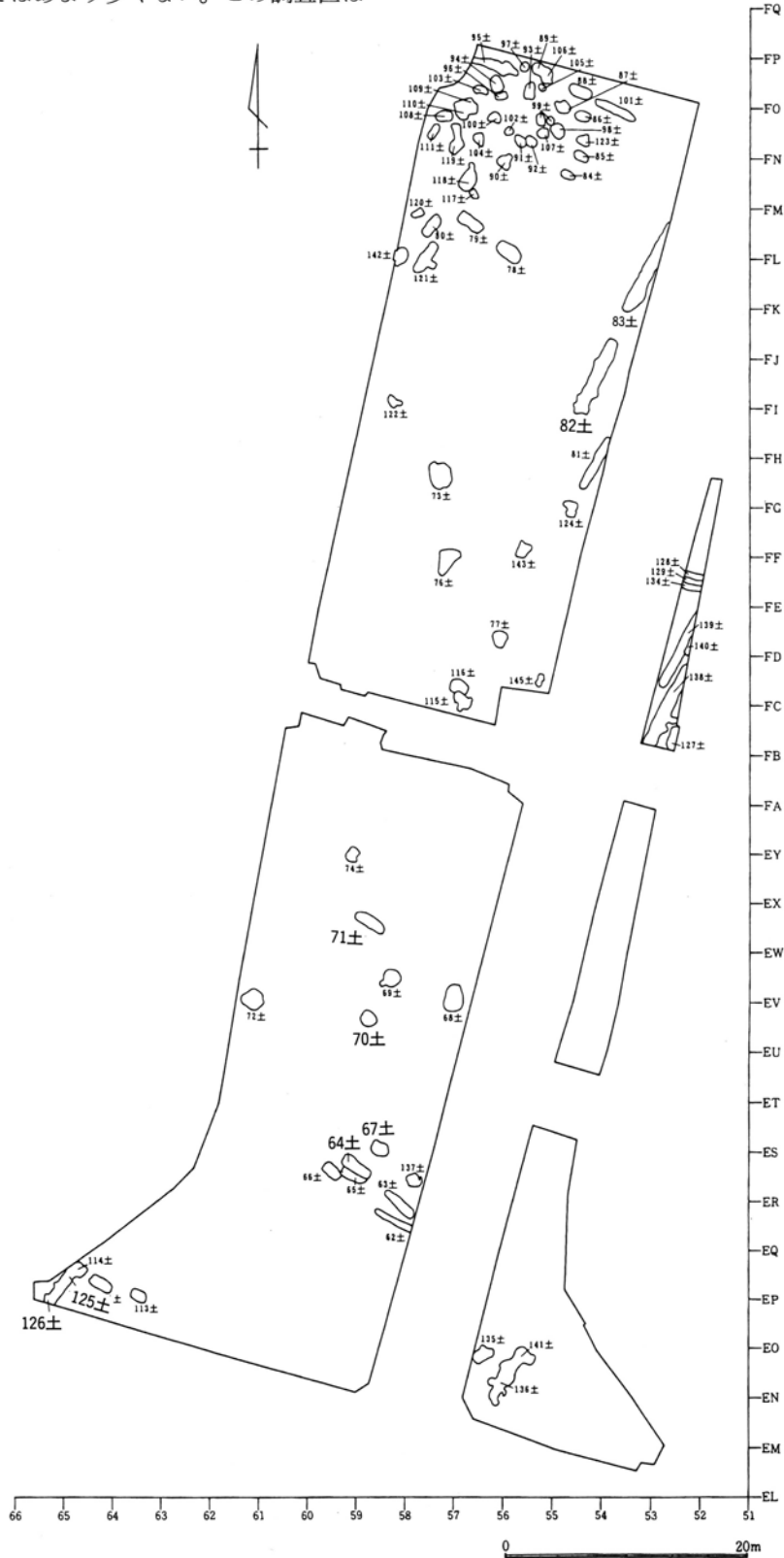
白井南中道遺跡1区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
1	土師器 甕	50土 覆土	口 — 底 — 高 —	外面 体部笥削り 内面 撫で、刷毛調整	①金雲母 ②普通 ③橙色	頸部小片 平安時代
2	石製品 凹石	50土 覆土	長 12.2 幅 10.2 厚 7.2	用途不明、窪みの中央部は摩耗している	角閃石安山岩 (二ツ岳)	
3	円礫	51土 覆土	長 15.0 幅 11.2 厚 5.1	一面が摩耗している	粗粒輝石安山岩	
4	石製品 カマド材	51土 覆土	残存幅 10.5	カマド構築材の破片、被熱のため赤変している	砂岩	
5	陶器 香炉?	7住 覆土	口 12.6 底 — 高 —	型造り	①細砂粒 ②還元 ③灰白色	江戸時代?
6	須恵器 壺	35住1	口 — 底 — 高 —	外面 貼り付け高台 内面 調整は粗い	①粗砂 ②普通 ③灰白色	底部片 平安時代
7	石製品 凹石	21土 覆土	長 11.5 幅 9.5 厚 5.4	用途不明、表・裏・側部に工具痕あり	軽石 (二ツ岳)	
8	鉄釘?	5土	長 —	頭部は扁平、体部と平行に木目残る、合釘か		覆土
9	須恵器 羽釜	35・36 土 覆土	口 (16.0) 底 — 高 —	外面 轆轤調整 内面 轆轤調整	①細砂②普通 ③断面黒灰 器表灰白色	小片 平安時代
10	須恵器 椀	35・36 土 覆土	口 — 底 — 高 17.0	外面 回転糸切り無調整、高台貼り付け	①細砂 ②普通 ③鈍黄橙色	底部片 平安時代
11	土師器 甕	35・36 土 覆土	口 — 底 (7.0) 高 —	外面 笥削り 内面 撫で	①細砂 ②普通 ③橙色	底部片 平安時代
12	鉄製品 不明	35・36 土覆土	厚 0.3	板状を呈するが、小片のため用途は不明		
13	鉄製品 タガネ?	55土 覆土	最大厚 1.2 最大幅 2.0	現存長 5.7cm、先端部と思われる薄い方は曲がり、欠損する		
14	須恵器 甕	1溝 覆土	口 — 底 — 高 —	外面 沈線下に波状文、口縁端部欠損	①細砂 ②普通 ③黒灰色	口縁部片
15	須恵器 甕	1溝 覆土	口 — 底 — 高 —	外面 いわゆる補強帯を貼り付ける	①細砂 ②普通 ③灰白色	頸部片

## 南中道遺跡2区

南中道2区は、北部に土坑の集中する箇所があるが、そこを除いてはあまり多くない。この調査区は

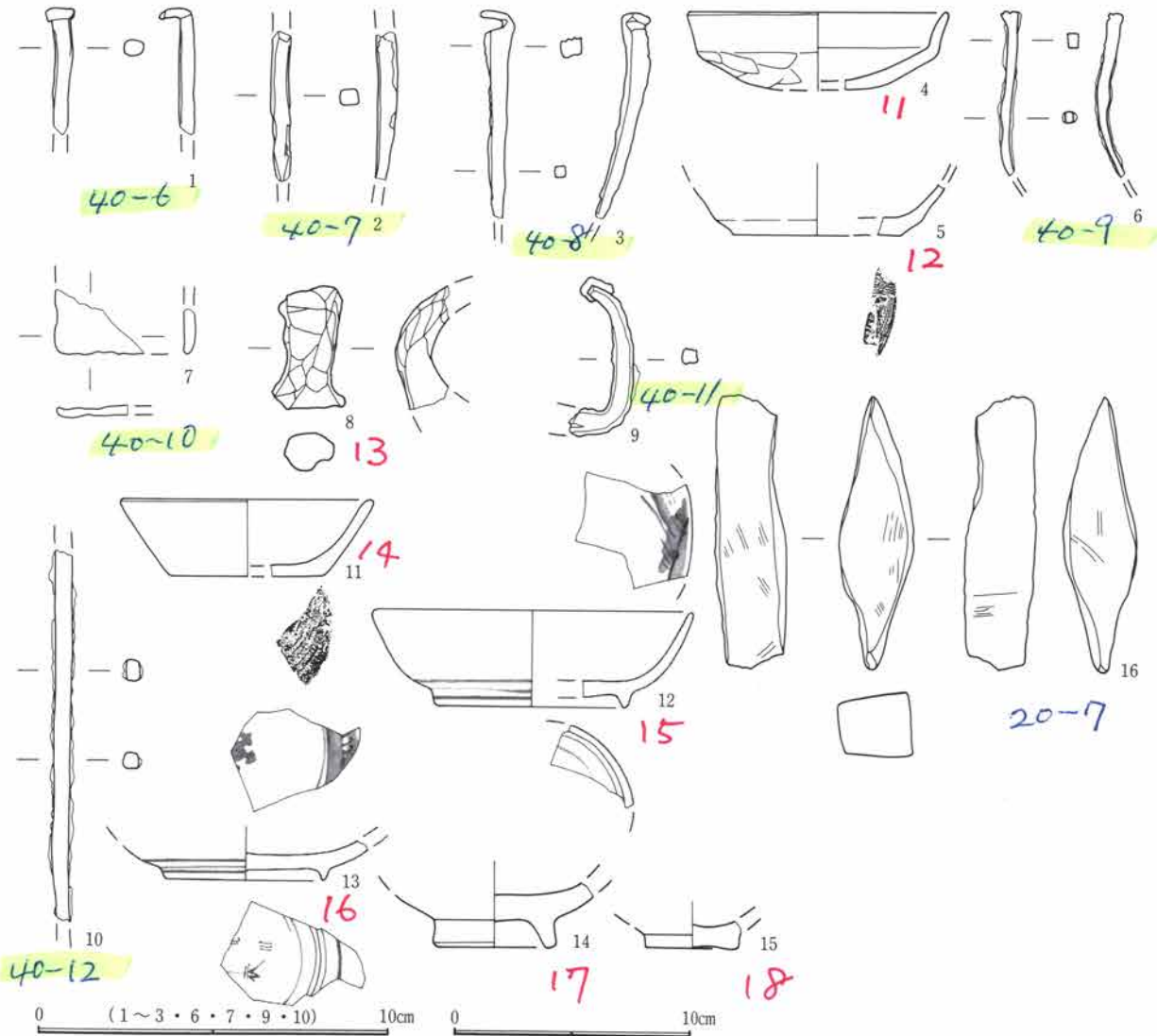
7世紀～10世紀の集落となっており竪穴住居を多数検出していることから、土坑の覆土中には集落に伴う遺物も含まれている。



第79図 南中道遺跡2区全体図

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
16	須恵器 杯	1溝 覆土	口— 底(5.3) 高—	外面 底部回転筥削り調整 内面 轆轤目立つ	①細砂 ②普通 ③灰白色	1/4
17	銅製品 煙管雁首	1溝 覆土	火皿径 1.6 最大径 0.6	雁首の羅字側端部は欠損、首は長く伸びる		
18	瀬戸・美濃 陶器 水注	遺構外	口— 底— 高—	鉄釉水注の注ぎ口	①細砂 ②普通 ③灰白色	18世紀
19	石製品 砥石	遺構外	残存長 6.7 幅 3.5 厚 2.5	2面使用、小口に楡羽状タガネ痕あり	流紋岩	
20	石製品 石鉢	遺構外	口 59.6 高 41.2	深さ27.2cm掘り込む、内面わずかに摩耗 外面 工具痕残る	粗粒輝石安山岩	
21	銅銭 文久永寶	遺構外		径2.708~2.715cm、厚さ0.103~0.113cm、草文		

南中道遺跡 2区出土遺物



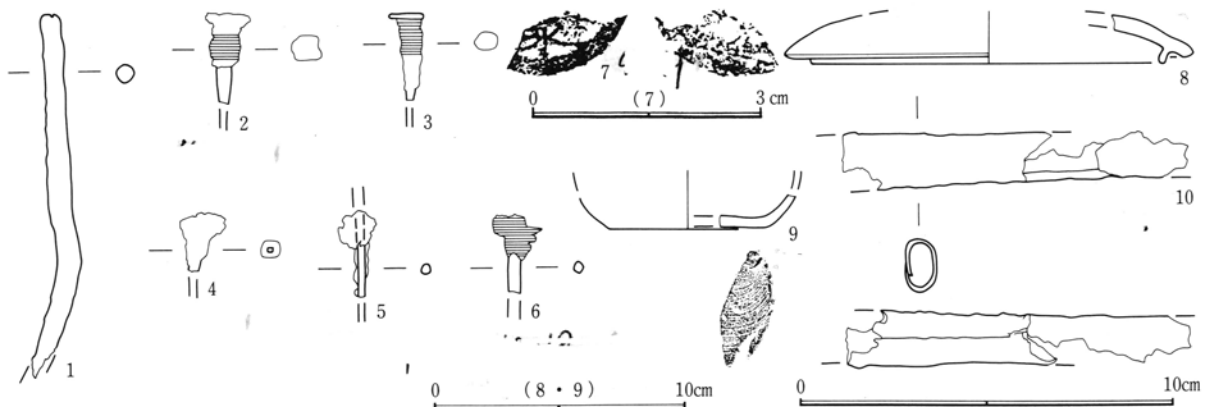
第80図 2区出土遺物

第5章 白井二位屋・南中道遺跡（第1集補遺）

白井南中道遺跡2区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
1	鉄釘	64土	現存長 3.6	平折釘、先端部欠損		
2	鉄釘	64土	現存長 4.2	頭部、先端部共に欠損		
3	鉄釘	67土	現存長 5.8	頭部は平たく潰した後に折り曲げる、先端欠損		
4	土師器 杯	70土 覆土	口 (10.4) 底 — 高 —	外面 口縁部横撫で、底部篋削り 内面 撫で	①細砂 ②普通 ③鈍橙色	1/4
5	須恵器 杯	70土 覆土	口 — 底 (7.0) 高 —	外面 底部回転系切り無調整	①細砂②普通 ③断面灰白 器表黒灰色	小片
6	鉄釘	71土	現存長 4.6	頭部形状不詳、先端欠損		
7	不明鉄製品	71土		板状製品、小片のため用途不明		
8	焙烙	82土 覆土	口 — 底 — 高 —	取っ手部分のみ残存	①細砂②普通 ③断面黒灰色 器表灰色	江戸時代
9	鉄釘?	855ピ ット	現存長 4.5	両端欠損		
10	不明鉄製品	遺構外	現存長 10.5	鉄鑿の茎か?		
11	須恵器 杯	遺構外	口 — 底 — 高 —	外面 底部右回転系切り無調整	①細砂 ②燻し焼成 ③黒灰色	破片
12	肥前磁器 皿	遺構外	口 (13.8) 底 (7.8) 高 4.0	外面 高台内界線1条 内面 口縁部に染め付け	①— ②普通 ③灰白色	波佐見系 18世紀
13	肥前磁器 皿	遺構外	口 — 底 — 高 —	外面 高台内「大明年製」崩れ銘 内面 五弁花コンニャク判	①— ②普通 ③灰白色	波佐見系 18世紀
14	瀬戸・美濃 陶器 碗	遺構外	口 — 底 3.8 高 —	外面 鉄泥を化粧掛ける 内面 鉄釉	①— ②普通 ③灰白色	
15	肥前磁器 皿	遺構外	口 — 底 (8.8) 高 —	外面 高台内「大明年製」崩れ銘 内面 五弁花コンニャク判	①— ②普通 ③灰白色	波佐見系 18世紀
16	石製品 砥石	125・ 126土 覆土	現存長 11.8 最大幅 2.9 最大厚 2.7	2面を主に使用、未使用の側面はノミによる仕上げか端部わずかに欠損	流紋岩	
17	木製品 漆碗?	141土 覆土		漆片のみ残存		写真のみ掲載
18	木製品 漆碗	141土 覆土		高台部等の漆片のみ残存		写真のみ掲載

南中道遺跡3区出土遺物

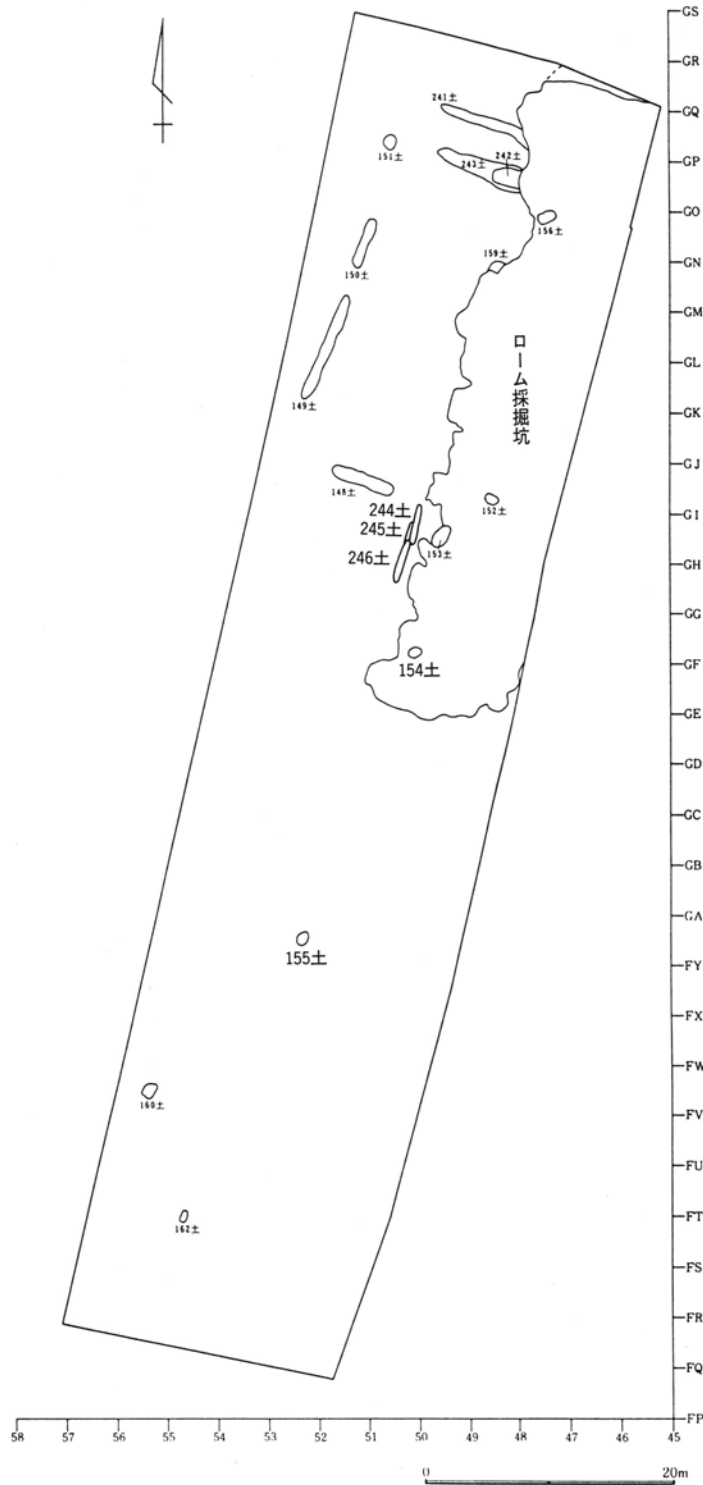


第81図 3区出土遺物

## 南中道遺跡3区

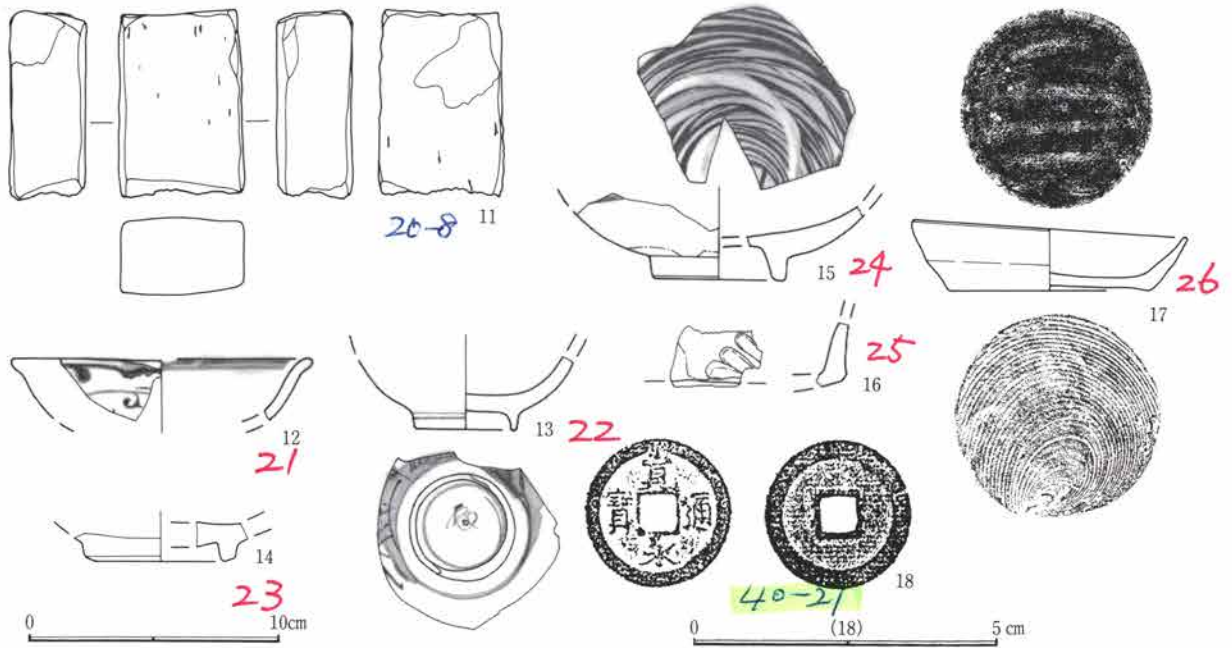
南中道3区は、調査区の北東部で中世のローム採掘坑を検出している。これは南中道4区にまで続く

大規模なものである。土坑の検出数は他の区に比べて少ない。155号土坑は前回の報告で人骨と寛永通寶5枚を掲載しているが、今回追加で釘と寛永通寶を掲載する。



第82図 南中道遺跡3区全体図

第5章 白井二位屋・南中道遺跡 (第1集補遺)



第83図 3区出土遺物

白井南中道遺跡3区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
1	不明鉄製品	154土	現存長 9.6	断面形丸い		
2	鉄釘	155土	現存長 2.4	頭部片、横方向の木目残る		
3	鉄釘	155土	現存長 3.0	頭部片、横方向の木目残る		
4	鉄釘	155土	現存長 1.5	頭部片		
5	鉄釘	155土	現存長 2.3	頭部片、錆により頭部形状不明		
6	鉄釘	155土	現存長 2.1	頭部片、錆により頭部形状不明		
7	鉄銭 寛永通寶	155土		永字部分の細片		
8	須恵器 杯蓋	ローム 採掘坑	口 14.0 高 —	外面 口縁部のみ自然釉 内面 口縁部のみ自然釉	①礫微量 ②良 ③灰白色	
9	カワラケ	ローム 採掘坑	口 — 底 (6.0) 高 —	外面 左回転糸切り無調整、口縁部油煙付着	①細砂 ②普通 ③黄橙色	16世紀
10	不明鉄製品	遺構外	現存長 9.0 長径 1.5	薄板を断面楕円形に丸める、用途不明、両端欠損		
11	石製品 砥石	ローム 採掘坑	幅 4.9 厚 3.0	ほとんど未使用の砥石、小口的一方を欠損、小口に櫛羽状タガネ痕、他はタガネ痕	流紋岩	18世紀以降
12	中国磁器 碗?	遺構外	口 — 底 — 高 —	外面 染め付け 内面 口縁端部界線 小片のため直径不明、釉はやや白濁	①— ②やや不良 ③白色	明代
13	肥前磁器 碗	遺構外	口 — 底 3.6 高 —	外面 高台内1重界線内に渦福銘 内面 無文	①— ②普通 ③灰白色	波佐見系 17世紀末~18 世紀中頃
14	青磁 碗?	遺構外	口 — 底 (5.7) 高 —	外面 高台内無釉 内面 無文	①— ②普通 ③—	
15	肥前陶器 鉢	遺構外	口 — 底 6.0 高 —	外面 無文 内面 白土による刷毛目	①— ②普通 ③灰色	18世紀か
16	瀬戸・美濃 陶器 不明	遺構外	口 — 底 — 高 —	外面 菊花状の文様を彫る、体部下位無釉 内外面 胎釉	①— ②普通 ③灰白色	江戸時代
17	カワラケ	遺構外	口 10.8 底 8.2 高 2.2~2.6	外面 底部左回転糸切り無調整、圧痕不明瞭 内面 底部指撫で轆轤調整	①細砂 ②普通 ③橙色	14~15世紀
18	銅銭 寛永通寶	遺構外		径2.455~2.453cm、厚さ0.114~0.145cm		

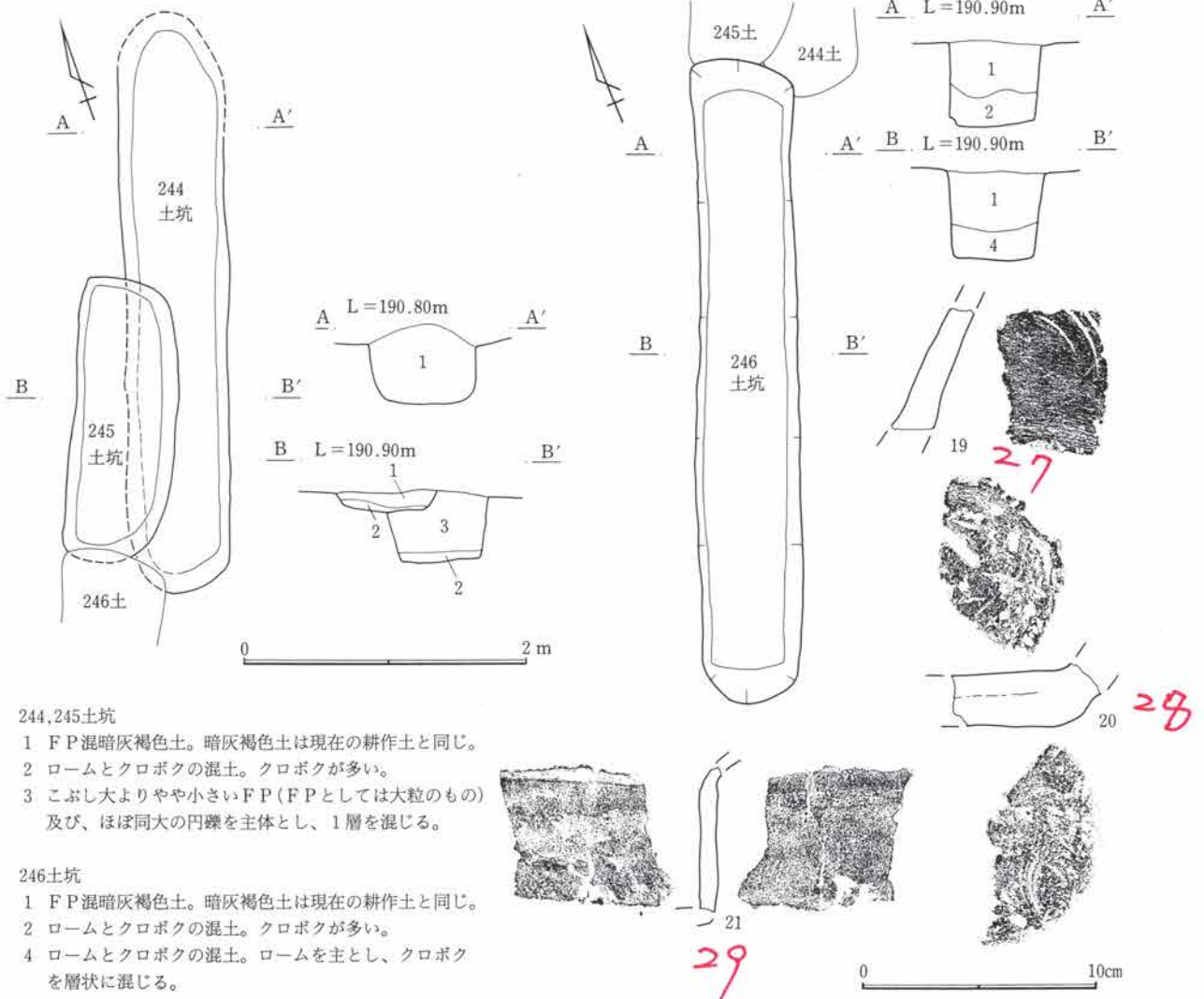


244号土坑 位置 GH-50、3区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×(3.3)×0.4mである。重複 245号・246号土坑より古い。

245号土坑 位置 GH-50、3区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×

(1.6)×0.1mである。重複 244号土坑より新しく、246号土坑より古い。

246号土坑 位置 GH-50、3区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×3.6×0.5mである。重複 244号・245号土坑よりも新しい。



244, 245土坑

- 1 F P混暗灰褐色土。暗灰褐色土は現在の耕作土と同じ。
- 2 ロームとクロボクの混土。クロボクが多い。
- 3 こぶし大よりやや小さいF P (F Pとしては大粒のもの)及び、ほぼ同大の円礫を主体とし、1層を混じる。

246土坑

- 1 F P混暗灰褐色土。暗灰褐色土は現在の耕作土と同じ。
- 2 ロームとクロボクの混土。クロボクが多い。
- 4 ロームとクロボクの混土。ロームを主とし、クロボクを層状に混じる。

第84図 244号～246号土坑平・断面図及び出土遺物

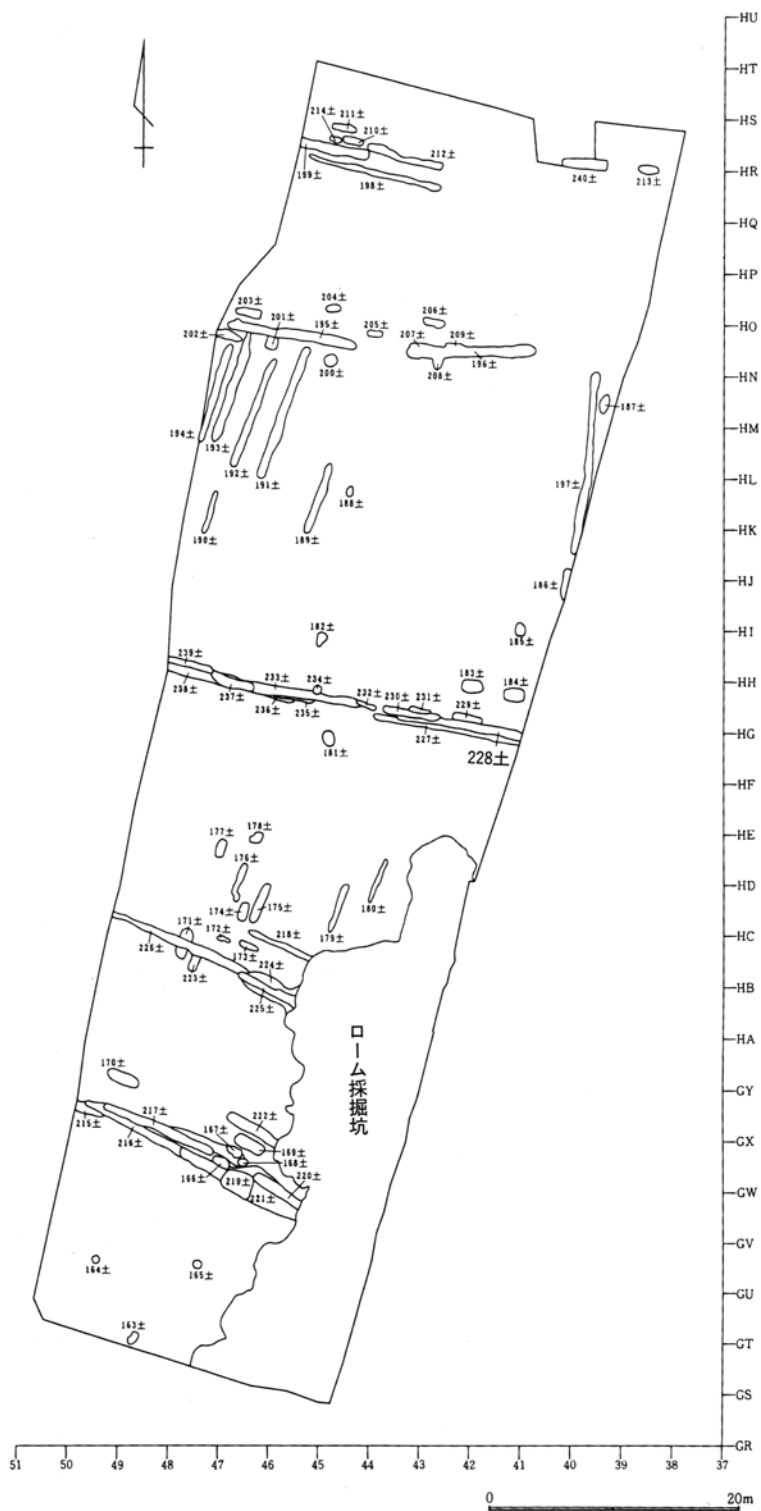
白井南中道遺跡3区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
19	すり鉢	244土 覆土	口 — 底 — 高 —	内面 すり目、使用により磨滅 外面 横撫で	①白色鉱物②普通 ③断面黒灰色 器表灰白色	体部下片 中世～近世初 頭
20	すり鉢	244土 覆土	口 — 底 — 高 —	外面 底部回転糸切り無調整、磨滅 内面 使用により磨滅	①赤色粒 ②普通 ③黄橙色	底部片 中世
21	内耳鍋	244土 覆土	口 — 底 — 高 —	口縁部横撫で、体部撫で 外面 煤付着	①細砂 ②普通 ③青灰色	体部小片 中世

## 南中道遺跡 4 区

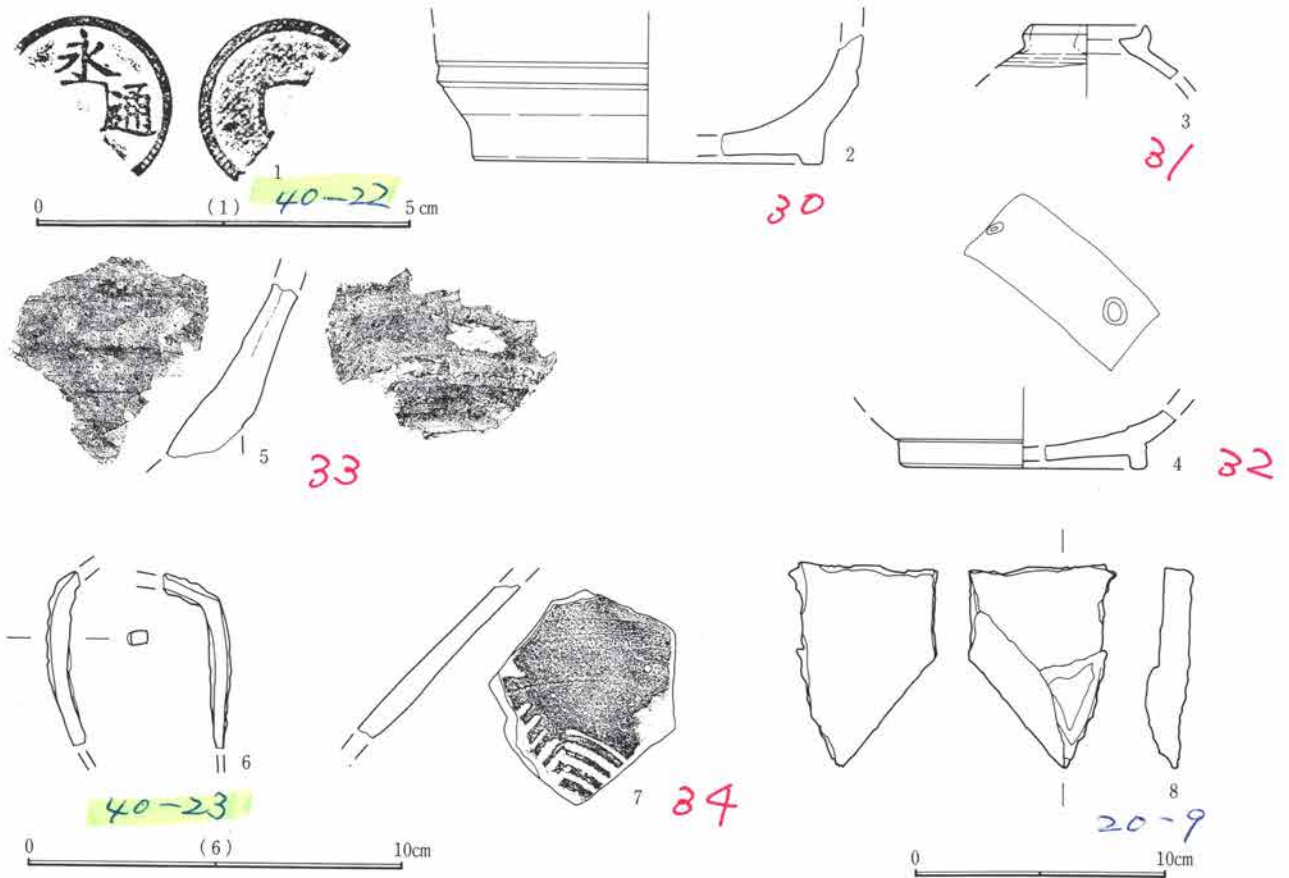
坑が広がる。溝状の土坑が多く、特に東西方向に延び列を成すものが目立つ。

南中道 4 区は、南東部に 3 区から続くローム採掘



第85図 南中道遺跡 4 区全体図

南中道遺跡4区出土遺物



第86図 4区出土遺物

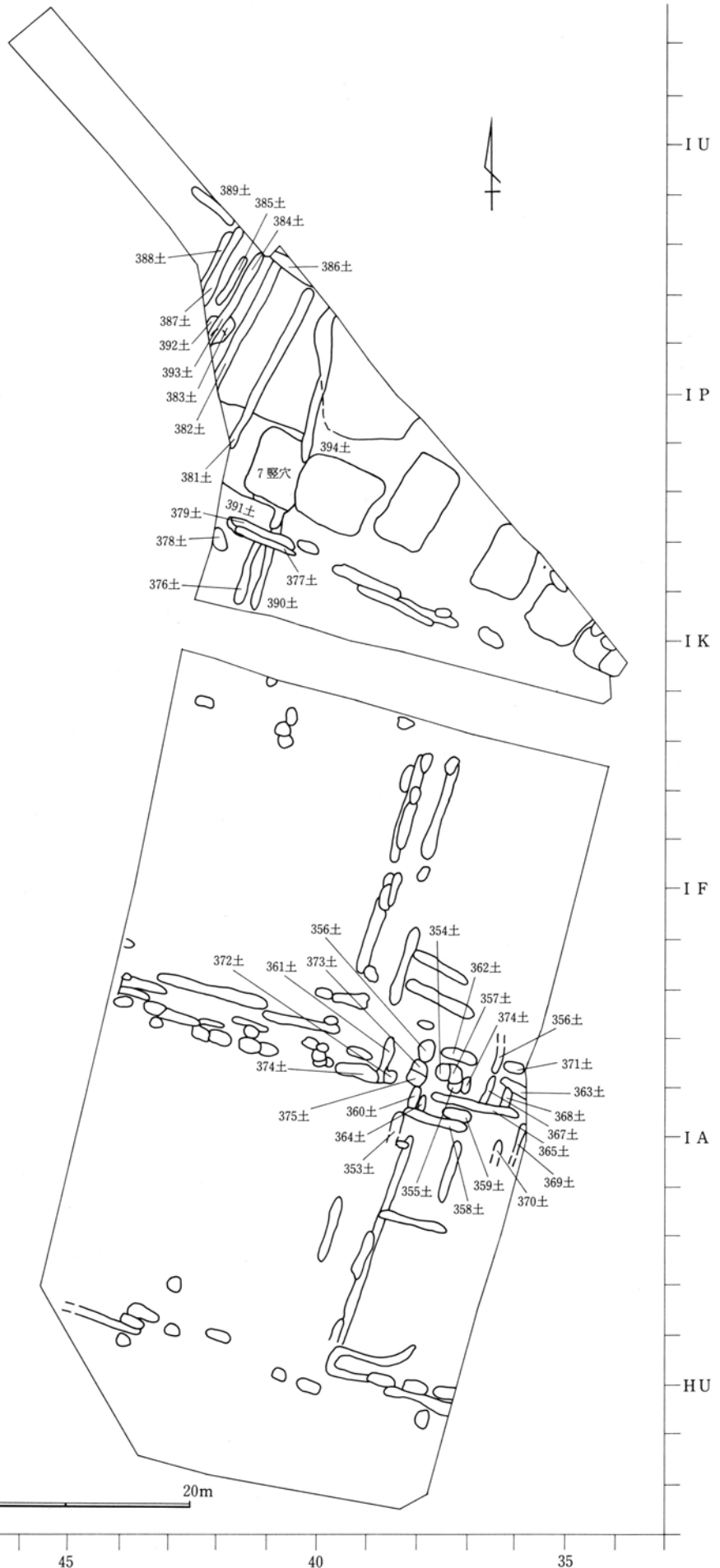
白井南中道遺跡4区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
1	銅銭 永楽通寶	228土		約1/2欠損		
2	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕	ローム 採掘坑	口 — 底 (13.9) 高 —	外面 錆釉、体部下端以下は無釉 内面 錆釉	①細砂 ②普通 ③灰白色	底部小片 18~19世紀
3	瀬戸・美濃 陶器 水注	ローム 採掘坑	口 (5.4) 底 — 高 —	外面 鉄釉に銅緑釉を流す 内面 無釉	①細砂 ②普通 ③黄灰色	1/3 18世紀
4	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢?	ローム 採掘坑	口 — 底 (9.9) 高 —	外面 残存部無釉 内面 鉛釉、目痕2ヶ所	①細砂 ②普通 ③黄灰色	1/2 18世紀か
5	知多 焼締陶器 甕	溝	口 — 底 — 高 —	内外面茶褐色を呈する	①粗砂 ②普通 ③灰白色	体部小片 中世
6	鉄釘?	ローム 採掘坑	現存長 5.2	頭部と先端部欠損、上部で折れ曲がる		
7	すり鉢?	ローム 採掘坑	口 — 底 — 高 —	器壁薄く、焼成も内耳鍋と同様である 内面 太いすり目	①細砂 ②普通 ③青灰色	体部小片 中世
8	石製品 不明	土坑群	最大厚 0.8	片岩小片、文字などは認められない 板碑小片か	結晶片岩	

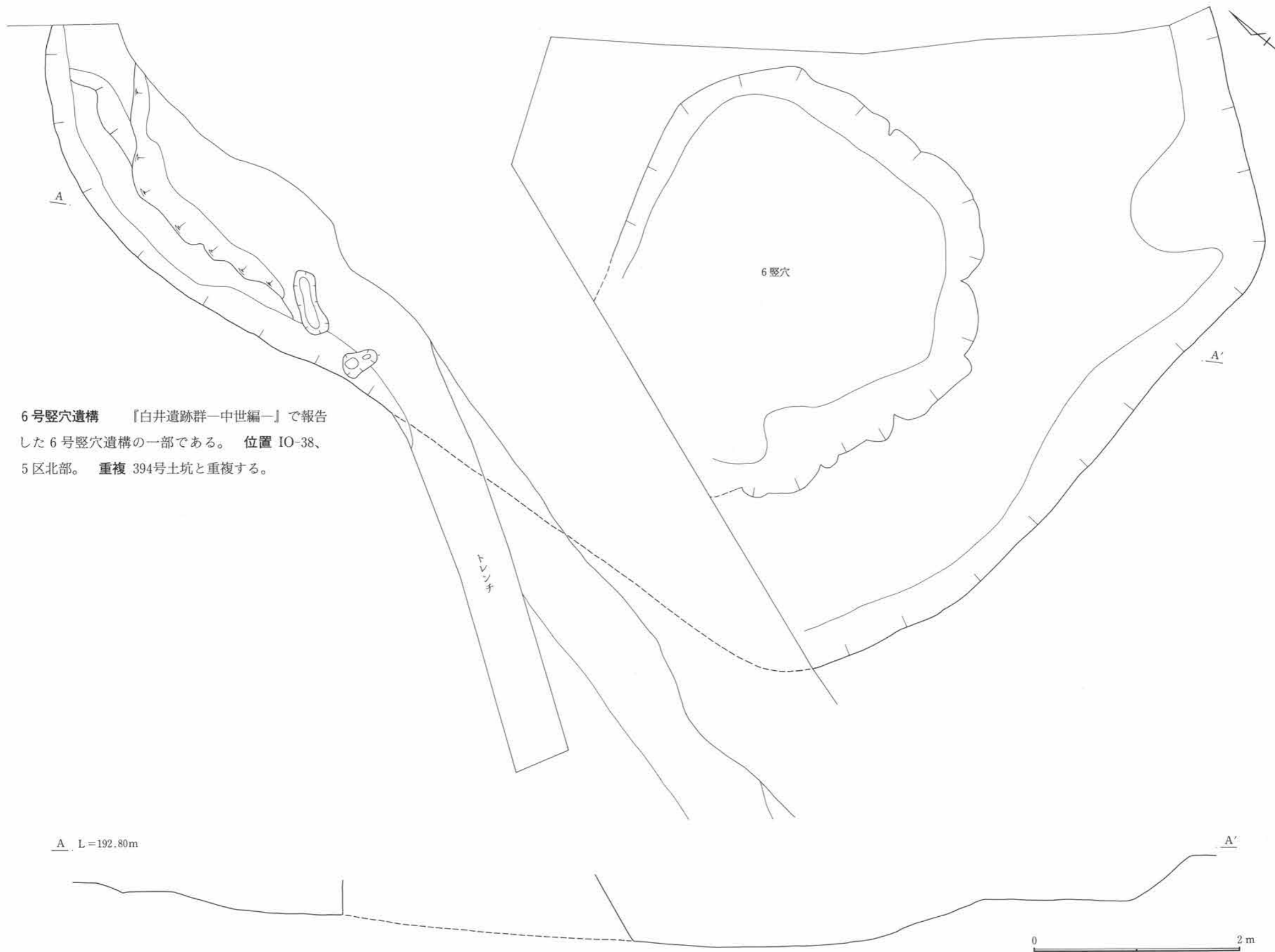
## 南中道遺跡5区

南中道5区は中央部と北西部の一部が、『白井遺跡群—中世編—』の編集時に未調査であったため、その後調査を行い本報告書で掲載するものである。

この区では円形～楕円形の土坑と溝状土坑、竪穴遺構の3種類が主な遺構で、竪穴状遺構は調査区の北部に並ぶようにして存在する。



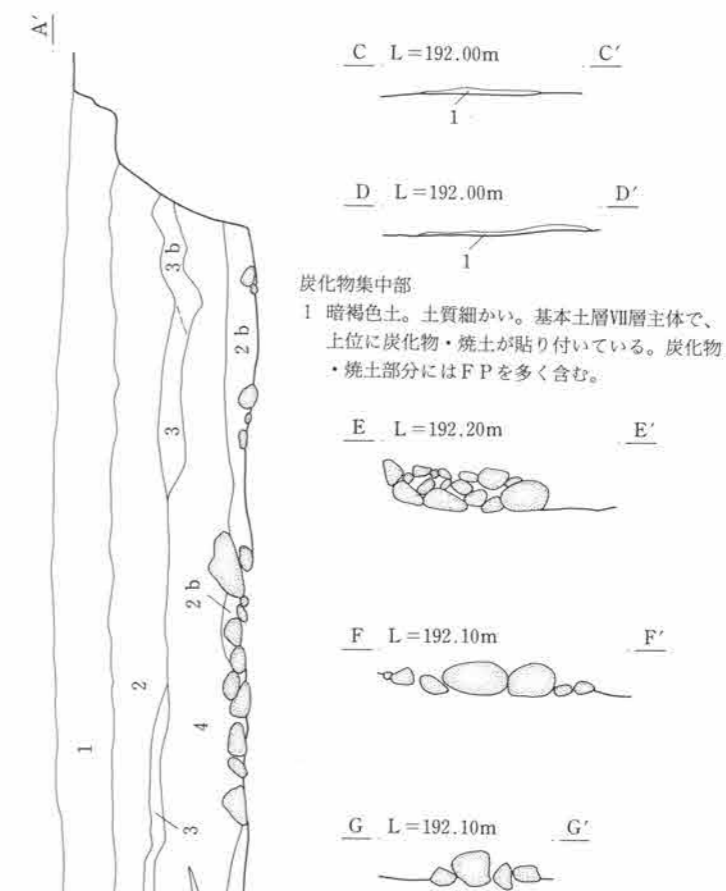
第87図 南中道遺跡5区全体図



第88図 6号竖穴平・断面図



7号竖穴遺構 位置 IN-40、5区北部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ(4.1)×5.4×1.1mである。中央から東寄りには深く掘り込んでおり、底面で炭化物の分布する箇所や円礫が集中して出土する箇所を確認した。西側は検出面からの深さが25cm程度と浅くなる。埋没土 FPを主体とする層と黒色土が互層をなす。重複 381号・391号・394号土坑と重複し、これら土坑の方が新しいと考えられる。



炭化物集中部  
1 暗褐色土。土質細かい。基本土層VII層主体で、上位に炭化物・焼土が貼り付いている。炭化物・焼土部分にはFPを多く含む。

7号竖穴  
1 黒褐色土。FA (S-1・2)をブロック状に含む。FPを含む。土質細かく基本土層VI層とローム土の混合土。キメ細かい。  
2 浅黄色。FPを主体とし少し黒褐色土で汚れている。  
2b 2層と同様だが大粒のFPで構成される。  
3 黒褐色土。FP主体で黒褐色土を多く含む。  
3b 黒色土特に多い。  
4 暗灰黄色。FP主体で黒褐色土で汚れている。2層より汚れている。  
5 黒色土。土質はやや粗くFPを多く含んでザラザラしている。FAブロックをごく少量含む。  
6 FP主体。

第89図 7号竖穴平・断面図





353号土坑 位置 IA-38、5区中央部。形状・規模 長方形?。短軸と深さは、それぞれ0.8×0.8mである。

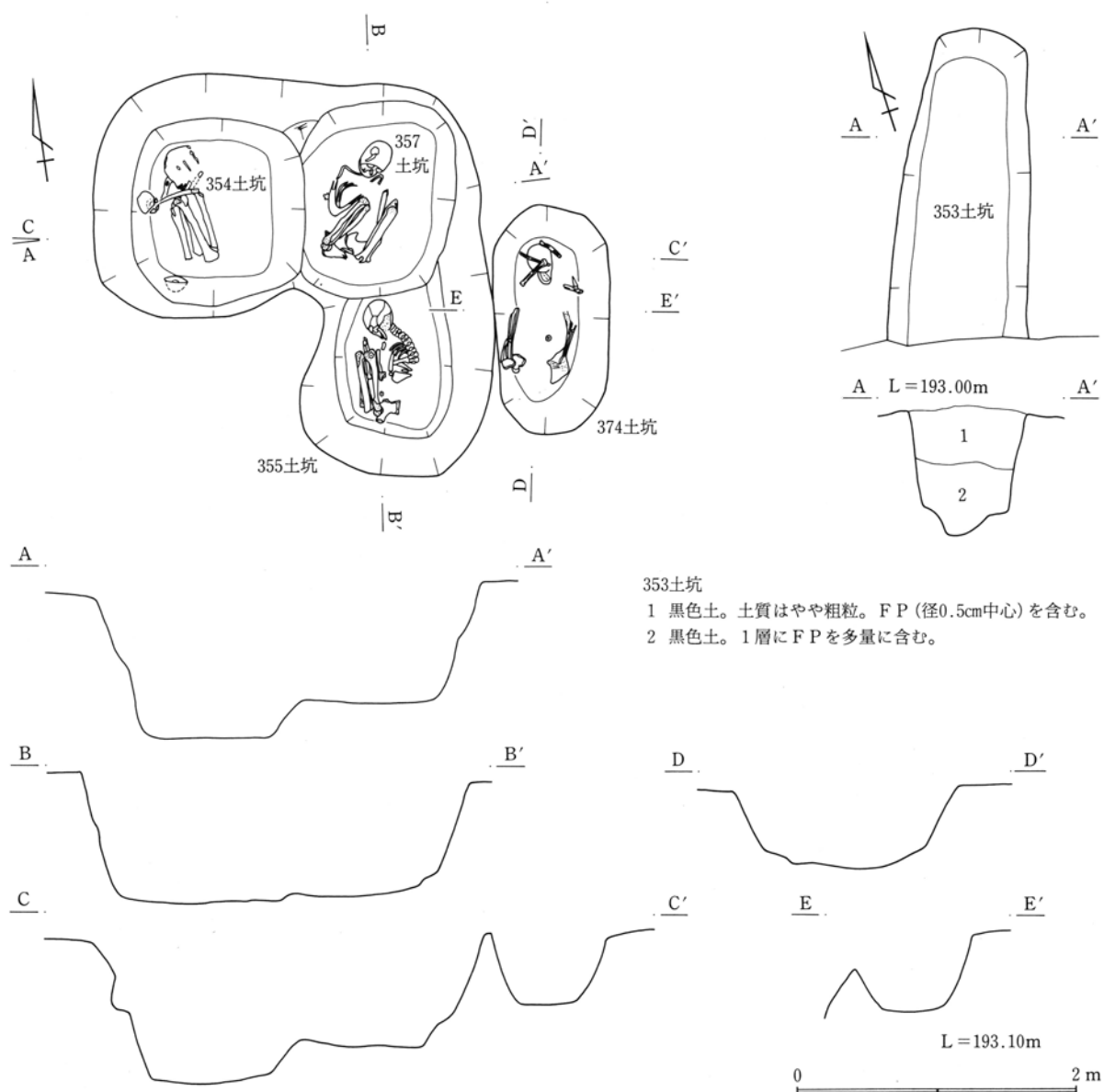
354号土坑 位置 IB-37、5区中央部。形状・規模 方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.0×1.1×0.8mである。遺物 人骨、陶器、火打金、火打石、鉄銭、煙管、寛永通寶等が出土。重複 357号土坑より新しい。

355号土坑 位置 IA-37、5区中央部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×

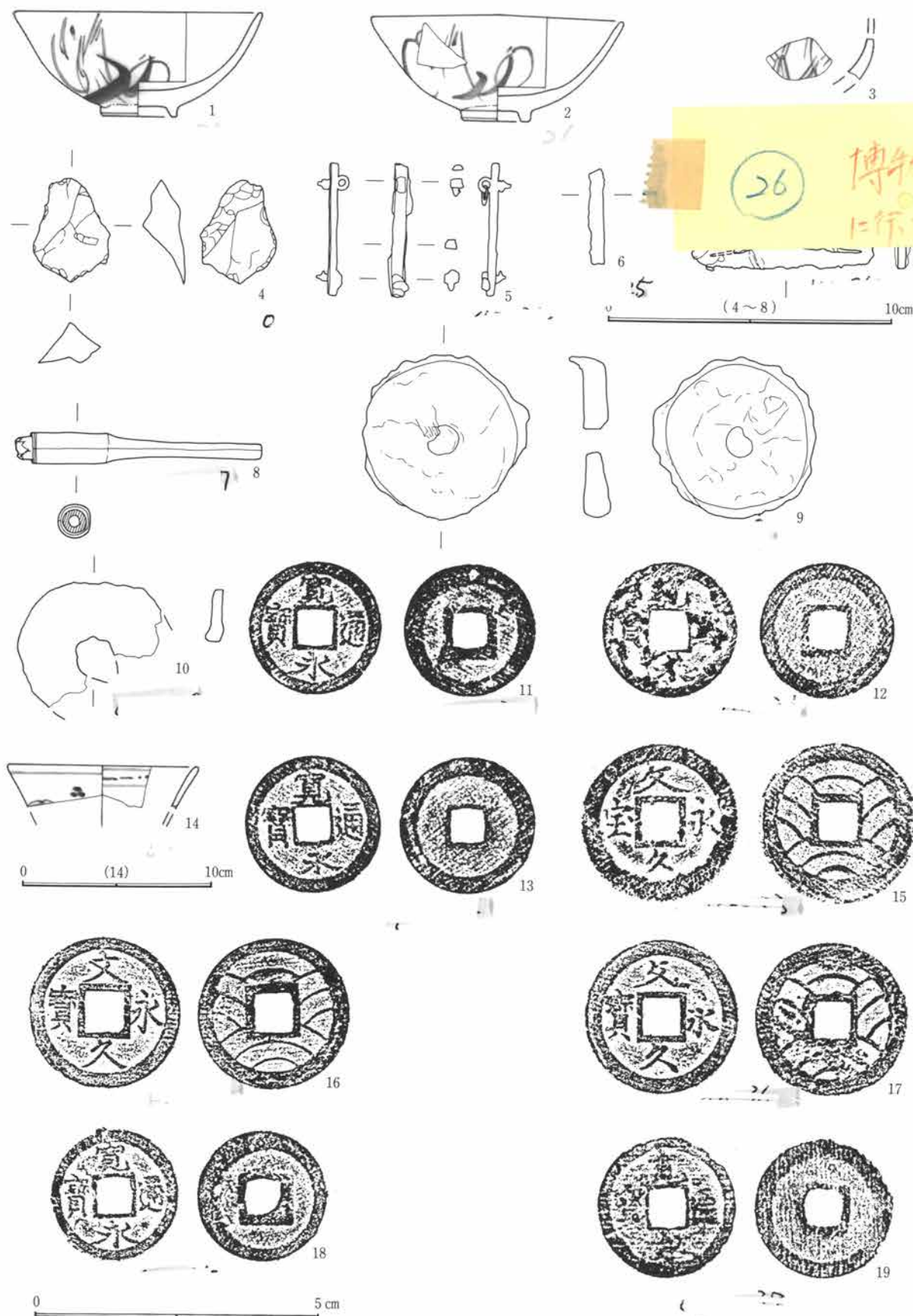
(1.0)×0.7mである。遺物 人骨、寛永通寶、文久永寶が出土。重複 357号土坑より古い。

357号土坑 位置 IB-37、5区中央部。形状・規模 円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ(0.9)×1.1×0.7mである。遺物 人骨、釘などが出土。重複 355号土坑より新しく、354号土坑より古い。

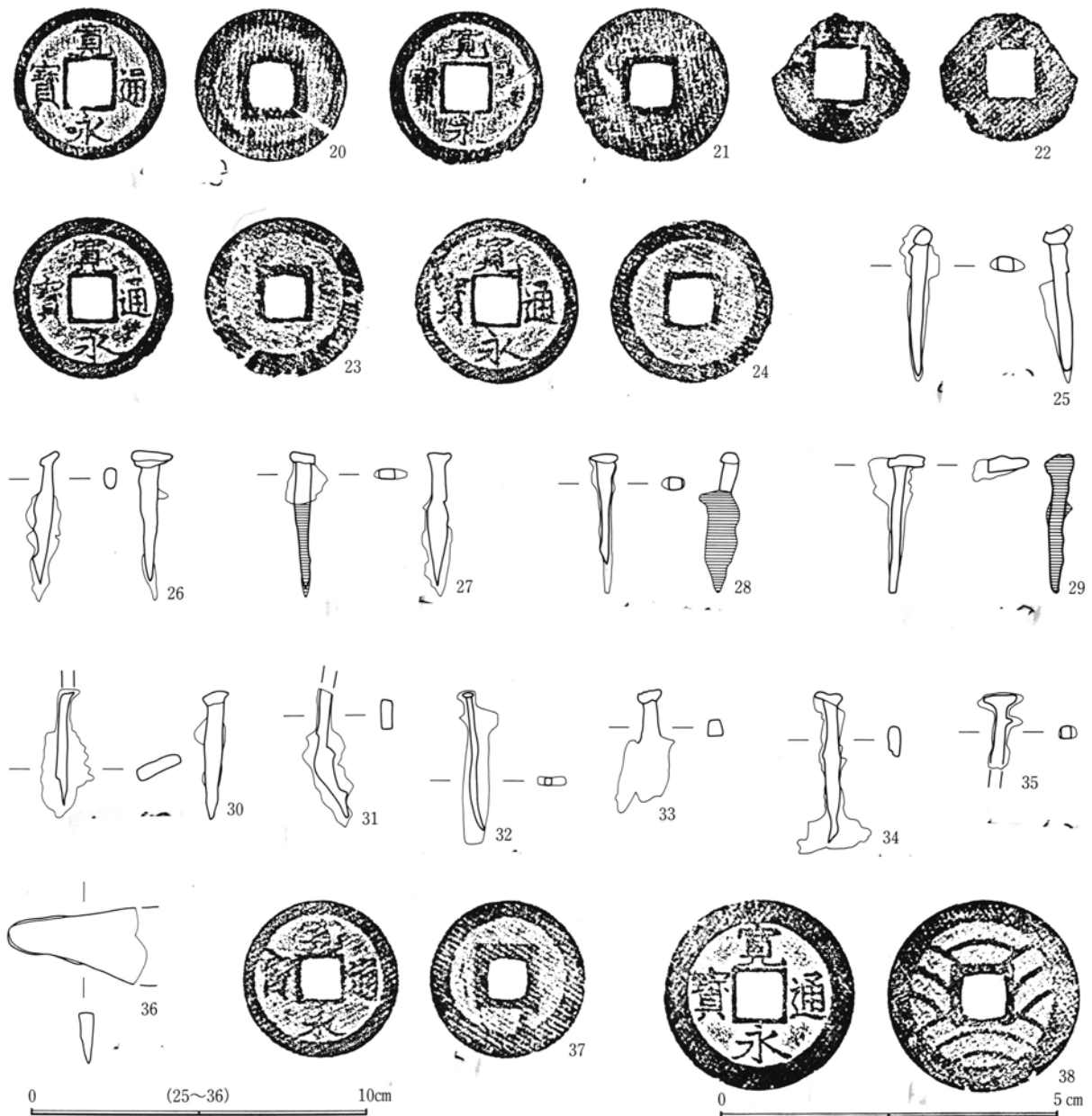
374号土坑 位置 IA-36、5区中央部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×1.3×0.5mである。遺物 人骨、寛永通寶が出土。



第90図 353号～355号・357号・374号土坑平・断面図



第91図 354号・355号土坑出土遺物



第92図 355号・357号・374号土坑出土遺物

白井南中道遺跡 5区

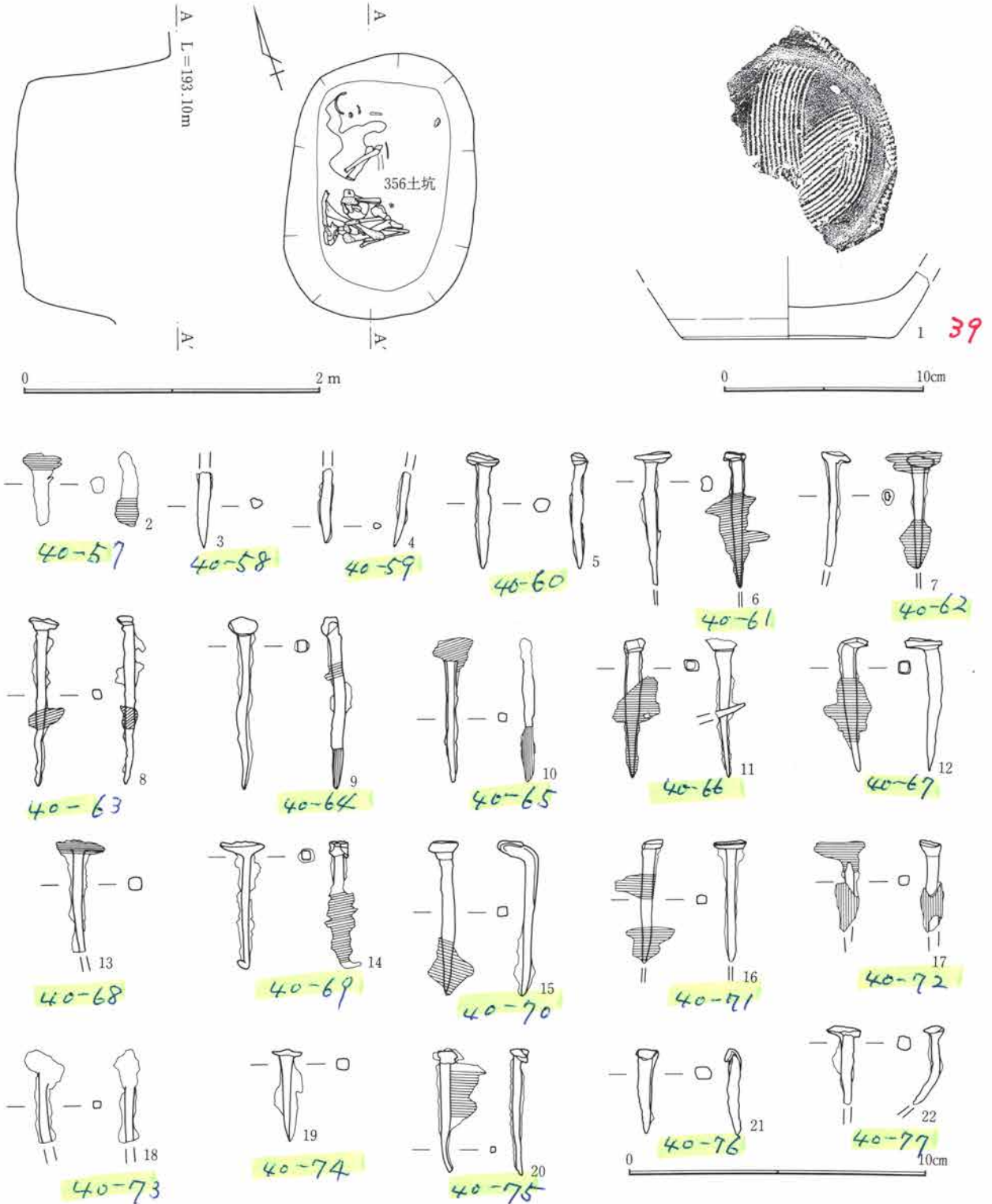
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
1	瀬戸・美濃 陶器 碗	354土 1	口 13.2 底 3.7 高 5.4	外面 一方に鉄絵具による枝垂れ柳文、高台脇以下を除き灰釉	①細砂 ②普通 ③灰白色	完形 18世紀末～ 19世紀前半
2	瀬戸・美濃 陶器 碗	354土 2	口 13.4 底 3.8 高 5.4	外面 一方に鉄絵具による枝垂れ柳文、高台脇以下を除き灰釉	①細砂 ②普通 ③灰白色	完形 18世紀末～ 19世紀前半
3	肥前磁器 碗	354土 覆土	口 — 底 — 高 —	外面 二重網目文	①— ②普通 ③灰白色	小片 混入品
4	石製品 火打ち石	354土 覆土		軽微な使用痕		玉髓
5	銅製品 用途不明	354土 覆土		銅薄板に、直径2mmの孔を有する釘状のものを通して、板に打ちつけたのであろう		板状部分欠損

第5章 白井二位屋・南中道遺跡（第1集補遺）

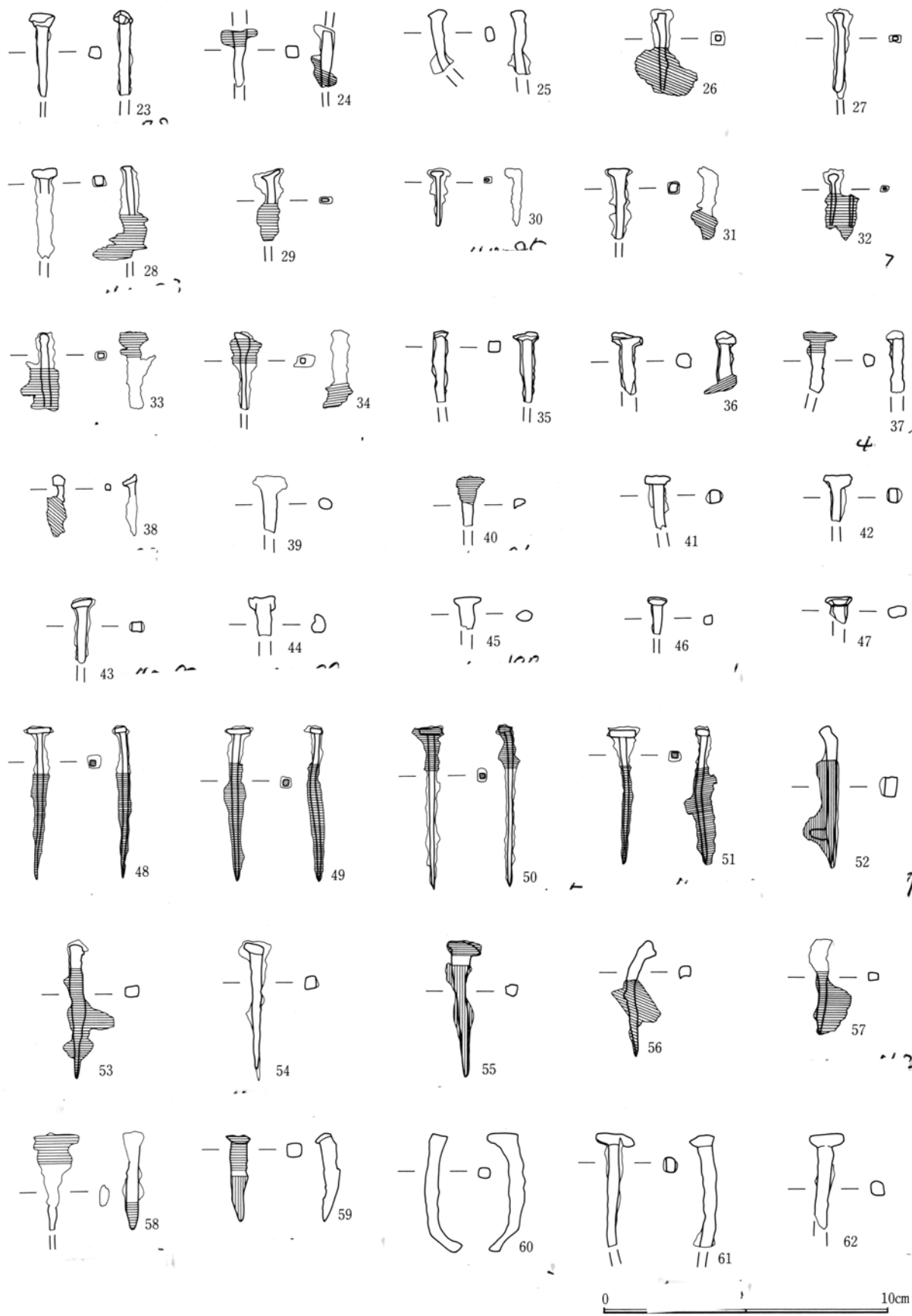
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
6	銅製品 用途不明	354土 覆土		銅薄板、小片のため用途不明		
7	鉄製品 火打金	354土 覆土	長さ 6.0	いわゆるねじり鎌、ねじり部分左捻り、中央部山形に盛り上がる、刃部厚さ0.6cm		一部欠損
8	銅製品 煙管吸い口	354土 3	最大径 1.10 最小径 0.5	全長8.1cm、羅宇竹が一部残存、羅宇を挿入する部分の周辺に浅い沈線を1条巡らす		
9	鉄製品 寛永通寶？	354土 4	径約 0.26	錆により径は不詳、銅銭と付着して出土していることや陶器の時期からして鉄銭であろう、2枚付着		完形11・12・13と付着
10	鉄製品 寛永通寶？	354土 覆土		錆により厚さ不詳、形態や出土遺構から考えて寛永通寶鉄銭であろう		3/4
11	銅製品 寛永通寶	354土 4		径2.316～2.322cm、厚さ0.113～0.104cm		完形9・12・13と付着
12	銅製品 寛永通寶	354土 4		径2.387～2.364cm、厚さ0.154～0.127cm遺存状態やや悪い		完形9・11・13と付着
13	銅製品 寛永通寶	354土 4		径2.384～2.375cm、厚さ0.117～0.094cm		完形9・11・12と付着
14	瀬戸・美濃 磁器 碗	355土 覆土	口 (10.0) 底 — 高 —	内外面 不明文様、広東形碗か？	①— ②普通 ③白色	1/4 19世紀前半か
15	銅製品 文久永寶	355土 1		径2.797～2.773cm、厚さ0.095～0.115cm、いわゆる玉宝銭文側に布付着		完形 15～18付着
16	銅製品 文久永寶	355土 1		径2.680～2.640cm、厚さ0.087～0.096cm、いわゆる真文		完形 15～18付着
17	銅製品 文久永寶	355土 1		径2.680～2.640cm、厚さ0.116～0.131cm、いわゆる草文		完形 15～18付着
18	寛永通寶	355土 1		径2.306～2.299cm、厚さ0.127～0.113cm		完形 15～18付着
19	寛永通寶	355土 11		径2.432～2.426cm、厚さ0.102～0.088cm		完形 19～24付着
20	寛永通寶	355土 11		径2.254～2.253cm、厚さ0.080～0.086cm		完形 19～24付着
21	寛永通寶	355土 11		径2.283～2.277cm、厚さ0.093～0.106cm		完形 19～24付着
22	寛永通寶	355土 11		厚さ0.109～0.095cm、孔は大きく銭径は小さい		周囲欠損 19～24付着
23	寛永通寶	355土 11		径2.374～2.373cm、厚さ0.087～0.079cm		完形 19～24付着
24	寛永通寶	355土 11		径2.446～2.442cm、厚さ0.092～0.074cm		完形 19～24付着
25	鉄釘	357土	現存長 4.6	ほぼ完形か		
26	鉄釘	357土	現存長 4.5	ほぼ完形か		
27	鉄釘	357土	現存長 4.3	ほぼ完形か		
28	鉄釘	357土	現存長 4.2	ほぼ完形か		
29	鉄釘	357土	現存長 4.1	ほぼ完形か		
30	鉄釘	357土	現存長 3.8	一部欠損		
31	鉄釘	335土	現存長 4.2	頭部欠損か		
32	鉄釘	357土	現存長 4.5	先端欠損		
33	鉄釘	357土	現存長 3.3	中央から欠損、体部と直交方向に木目		
34	鉄釘	357土	現存長 4.8	頭部、先端欠損		
35	鉄釘	357土	現存長 2.3	頭部のみ残存		
36	鉄製品 用途不明	357土 覆土	現存長 4.0	板状を呈するが厚みが均一ではない		
37	銅製品 寛永通寶	374土		径2.308～2.322cm、厚さ0.095～0.093cm		
38	銅製品 寛永通寶	374土		径2.818～2.813cm、厚さ0.115～0.120cm		

356号土坑 位置 IB-37、5区中央部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.3×1.8×0.9mである。遺物 人骨、火打金、煙管、寛永通寶、鉄銭?、挿り鉢などの他に、多量の釘が出

土している。頭蓋骨が2個体分あり、南側のもは他の骨との位置関係から、骨となってから動いたものと思われる。

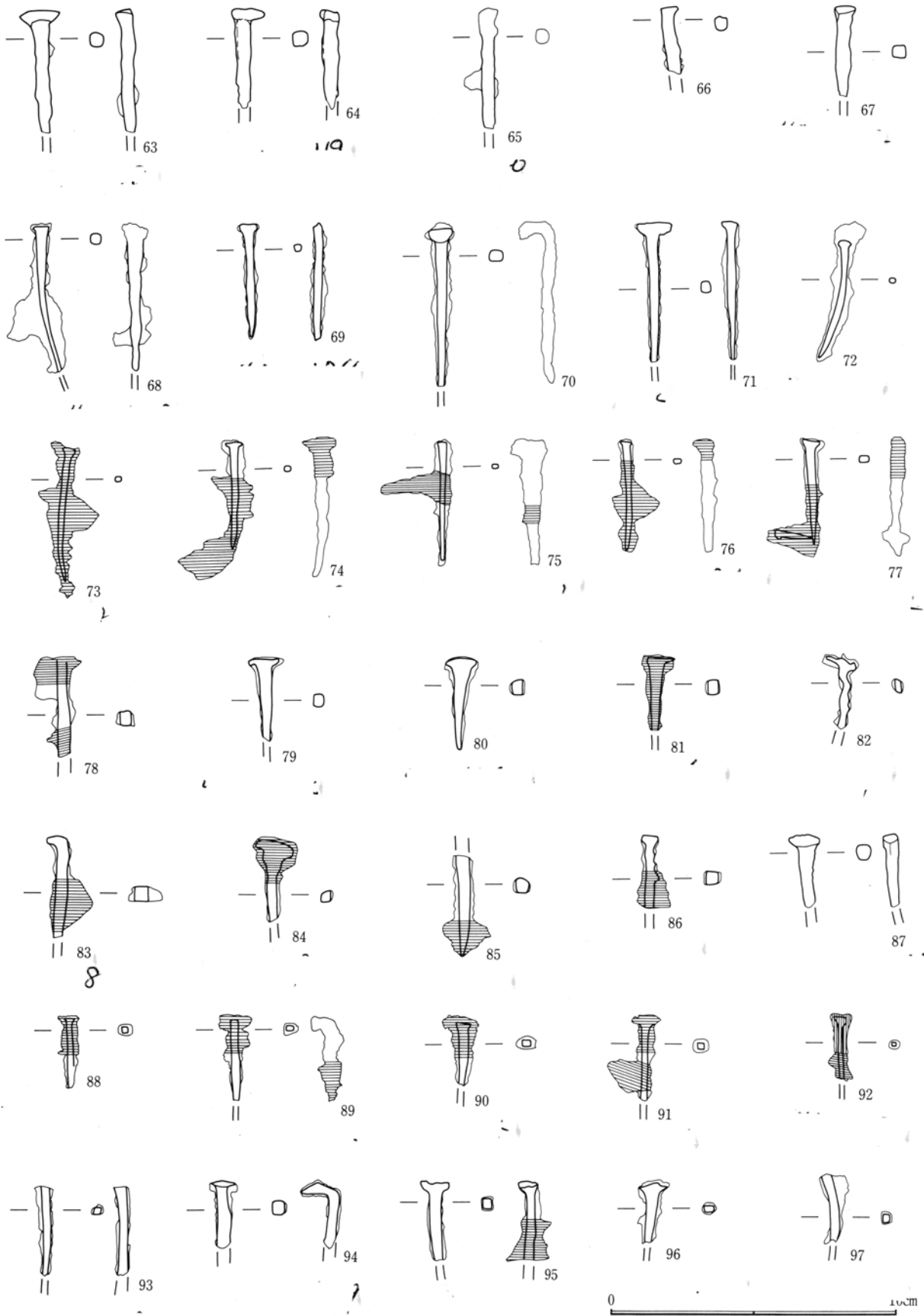


第93図 356号土坑平・断面図及び出土遺物



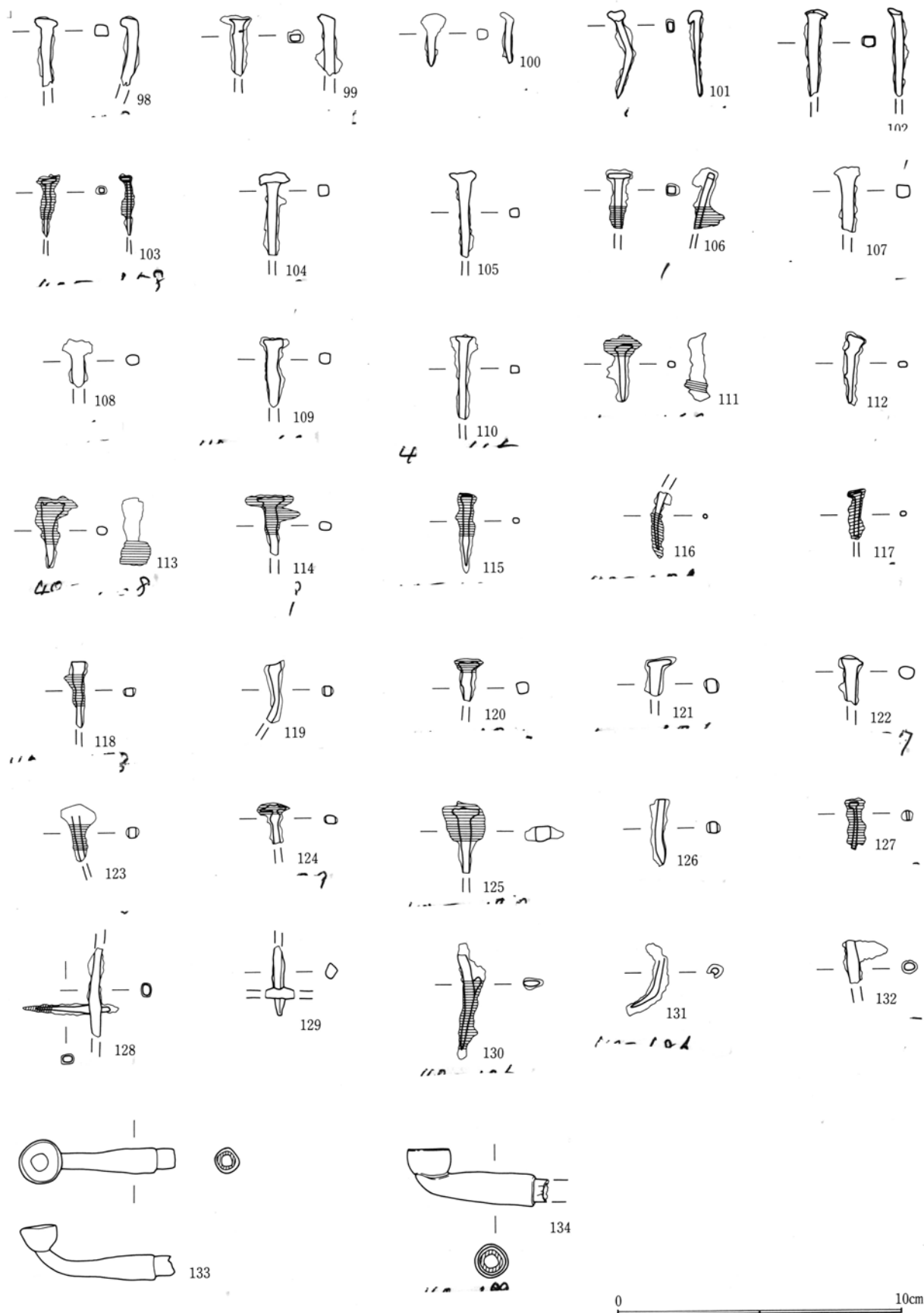
第94図 356号土坑出土遺物

第3節 白井南中道遺跡



第95図 356号土坑出土遺物

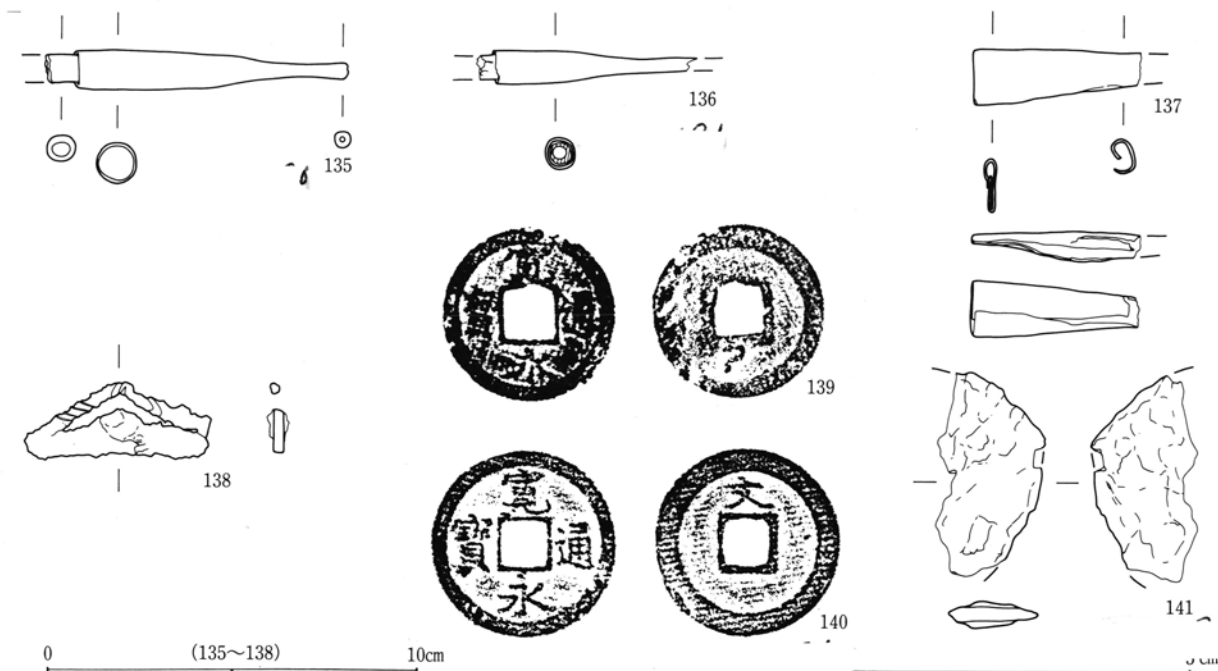
第5章 白井二位屋・南中道遺跡（第1集補遺）



第96図 356号土坑出土遺物



第3節 白井南中道遺跡



第97図 356号土坑出土遺物

白井南中道遺跡5区 356号土坑

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
1	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	覆土	口 — 底 (10.5) 高 —	外面 底部回転糸切り無調整 内外面 錆軸、底部外面のみ釉をぬぐい取る	①— ②やや不良 ③淡黄色	
2	鉄釘	覆土	現存長 2.4	頭部のみ残存、直交方向に木目残存		
3	鉄釘	覆土	現存長 2.5	先端部のみ残存		
4	鉄釘	覆土	現存長 2.5	頭部欠損		
5	鉄釘	覆土	現存長 3.9	ほぼ完形		
6	鉄釘	覆土	現存長 4.7	先端僅かに欠損、体部木目残存		
7	鉄釘	覆土	現存長 3.8	先端僅かに欠損、体部木目残存		
8	鉄釘	覆土	現存長 5.7	体部木目残存		
9	鉄釘	覆土	現存長 5.8	体部わずかに曲がる、先端の木目は体部と並行する		10と同じ木目
10	鉄釘	覆土	現存長 5.0	頭部の木目は釘と直交し、体部は並行する		9と同じ木目
11	鉄釘	覆土	現存長 4.8	完形、木目残存		
12	鉄釘	覆土	現存長 4.6	平折釘、完形、木目残存		
13	鉄釘	覆土	現存長 3.8	先端欠損、頭部に木目残存		
14	鉄釘	覆土	現存長 4.2	完形、先端曲がる、木目残存		
15	鉄釘	覆土	現存長 5.2	平折釘、先端に木目残存		
16	鉄釘	覆土	現存長 4.3	完形、木目残存		
17	鉄釘	覆土	現存長 3.2	先端部欠損、頭部木目は釘と直交し、体部の木目は並行する		
18	鉄釘	覆土	現存長 3.2	下半欠損		
19	鉄釘	覆土	現存長 3.2	下半欠損		
20	鉄釘	覆土	現存長 4.2	先端欠損、先端部曲がる、木目残存		
21	鉄釘	覆土	現存長 2.9	頭部折れ曲がる、木目残存		
22	鉄釘	覆土	現存長 2.6	下半欠損、中央で曲がる		
23	鉄釘	覆土	現存長 3.0	下半欠損		
24	鉄釘	覆土	現存長 2.2	頭部のみ残存、頭部と下部の木目直交		
25	鉄釘	覆土	現存長 2.2	下半欠損		
26	鉄釘	覆土	現存長 3.0	先端部欠損、木目残存		
27	鉄釘	覆土	現存長 3.2	先端部欠損		
28	鉄釘	覆土	現存長 3.3	先端部欠損、木目残存		
29	鉄釘	覆土	現存長 2.5	下半欠損、木目残存		
30	鉄釘	覆土	現存長 2.0	下半欠損、他に比して細い		
31	鉄釘	覆土	現存長 2.4	下半欠損、遺存状態不良		

第5章 白井二位屋・南中道遺跡（第1集補遺）

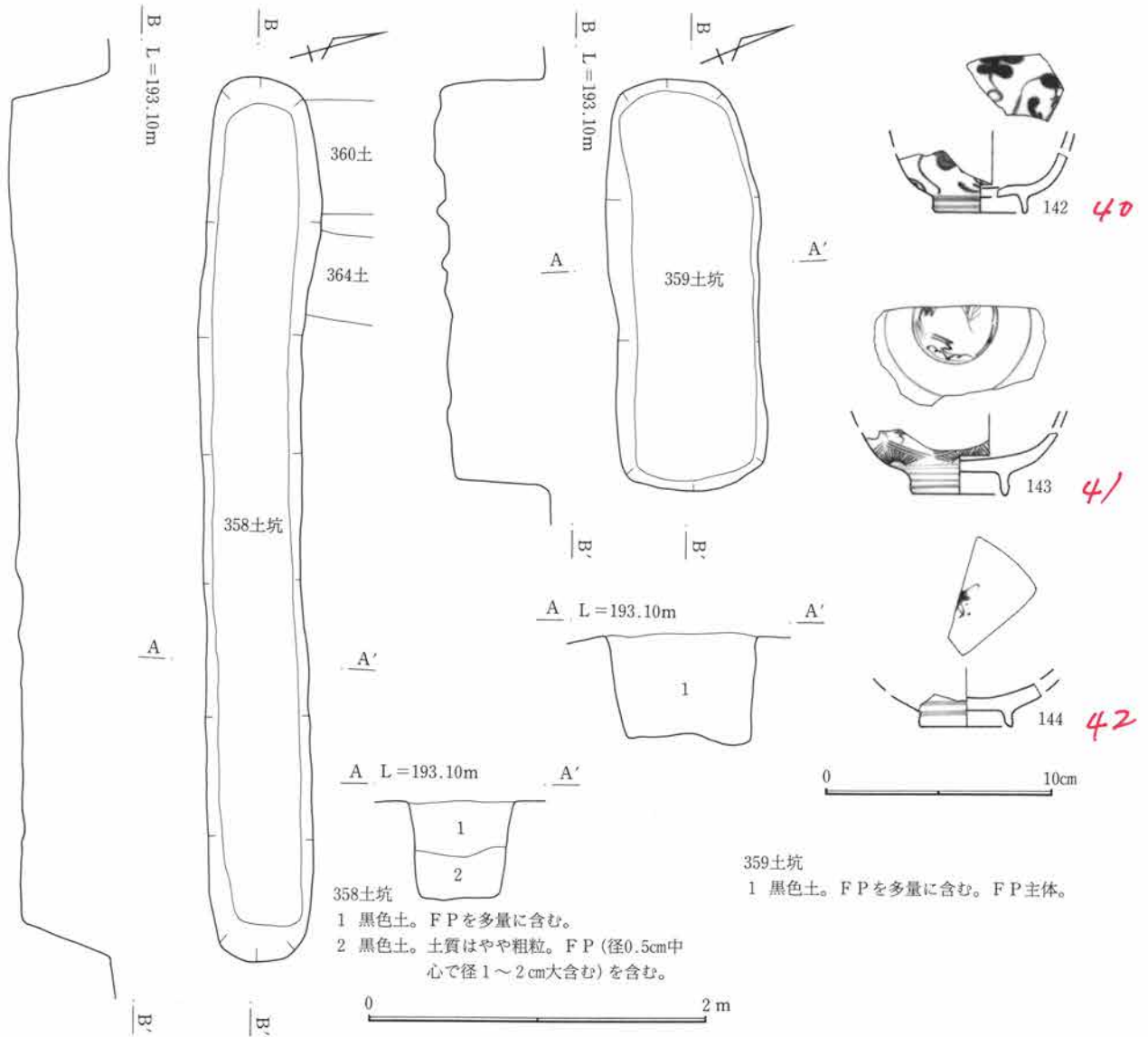
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
32	鉄釘	覆土	現存長 2.5	遺存状態不良、細い釘か		
33	鉄釘	覆土	現存長 2.8	遺存状態不良		
34	鉄釘	覆土	現存長 2.7	遺存状態不良、やや細い釘か		
35	鉄釘	覆土	現存長 2.5	下半欠損		
36	鉄釘	覆土	現存長 2.2	下半欠損		
37	鉄釘	覆土	現存長 2.1	下半欠損		
38	鉄釘	覆土	現存長 2.2	やや細い、木目斜行する		
39	鉄釘	覆土	現存長 2.0	頭部のみ残存、遺存状態不良		
40	鉄釘	覆土	現存長 1.8	頭部のみ残存、遺存状態不良		
41	鉄釘	覆土	現存長 1.8	頭部のみ残存		
42	鉄釘	覆土	現存長 1.6	頭部のみ残存		
43	鉄釘	覆土	現存長 2.3	頭部のみ残存		
44	鉄釘	覆土	現存長 1.4	頭部のみ残存		
45	鉄釘	覆土	現存長 1.2	頭部のみ残存		
46	鉄釘	覆土	現存長 1.3	やや細い、頭部のみ残存		
47	鉄釘	覆土	現存長 0.9	頭部のみ残存		
48	鉄釘	覆土	現存長 5.4	完形、木目残存		
49	鉄釘	覆土	現存長 5.5	完形、木目残存		
50	鉄釘	覆土	現存長 5.8	完形、木目残存		
51	鉄釘	覆土	現存長 5.0	完形、木目残存		
52	鉄釘	覆土	現存長 5.1	完形、遺存状態不良		
53	鉄釘	覆土	現存長 4.9	完形か、遺存状態不良		
54	鉄釘	覆土	現存長 5.0	完形、頭部形状不明		
55	鉄釘	覆土	現存長 4.8	完形か、遺存状態不良		
56	鉄釘	覆土	現存長 4.2	完形、上部で曲がる		
57	鉄釘	覆土	現存長 3.4	遺存状態不良、やや細い		
58	鉄釘	覆土	現存長 3.4	遺存状態不良、先端欠損か		
59	鉄釘	覆土	現存長 3.0	完形？短い釘か		
60	鉄釘	覆土	現存長 4.1	遺存状態不良、折れ曲がる		
61	鉄釘	覆土	現存長 4.0	先端部欠損		
62	鉄釘	覆土	現存長 3.4	先端部欠損		
63	鉄釘	覆土	現存長 4.2	先端部欠損		
64	鉄釘	覆土	現存長 3.5	先端部欠損		
65	鉄釘	覆土	現存長 4.2	頭部と先端部欠損		
66	鉄釘	覆土	現存長 2.3	上半が遺存		
67	鉄釘	覆土	現存長 3.1	先端部欠損		
68	鉄釘	覆土	現存長 5.2	完形		
69	鉄釘	覆土	現存長 4.0	先端欠損		
70	鉄釘	覆土	現存長 5.7	先端欠損、頭部折れ曲がる		
71	鉄釘	覆土	現存長 4.9	先端部欠損		
72	鉄釘	覆土	現存長 4.8	完形、遺存状態不良		
73	鉄釘	覆土	現存長 5.5	完形、遺存状態不良		
74	鉄釘	覆土	現存長 4.9	先端部欠損、遺存状態不良、やや細い		
75	鉄釘	覆土	現存長 4.4	先端部欠損、遺存状態不良、やや細い		
76	鉄釘	覆土	現存長 4.0	先端部欠損、遺存状態不良、やや細い		
77	鉄釘	覆土	現存長 4.1	完形、やや細い		
78	鉄釘	覆土	現存長 3.9	遺存状態不良、下半欠損か		
79	鉄釘	覆土	現存長 3.0	先端部欠損、短い釘か		
80	鉄釘	覆土	現存長 3.3	先端欠損、短い釘か		
81	鉄釘	覆土	現存長 2.7	先端部欠損		
82	鉄釘	覆土	現存長 2.6	遺存状態不良		
83	鉄釘	覆土	現存長 3.5	遺存状態不良		
84	鉄釘	覆土	現存長 3.0	先端部欠損、遺存状態不良		
85	鉄釘	覆土	現存長 3.6	遺存状態不良		
86	鉄釘	覆土	現存長 2.6	下半欠損、遺存状態不良		
87	鉄釘	覆土	現存長 2.6	先端部欠損		
88	鉄釘	覆土	現存長 2.5	両端欠損か、遺存状態不良、木目残存		
89	鉄釘	覆土	現存長 3.0	頭部折れ曲がる、木目残存		
90	鉄釘	覆土	現存長 2.5	頭部折れ曲がる		
91	鉄釘	覆土	現存長 3.0	細い釘か、木目斜行		

第3節 白井南中道遺跡

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
92	鉄釘	覆土	現存長 2.3	細い釘か、頭部木目は並行、体部木目は斜行		
93	鉄釘	覆土	現存長 3.2	両端欠損		
94	鉄釘	覆土	現存長 2.3	頭部のみ残存		
95	鉄釘	覆土	現存長 2.8	下半欠損、木目残存		
96	鉄釘	覆土	現存長 2.2	頭部残存、木目残存		
97	鉄釘	覆土	現存長 2.5	遺存状態不良		
98	鉄釘	覆土	現存長 2.4	下半欠損		
99	鉄釘	覆土	現存長 2.1	下半欠損		
100	鉄釘	覆土	現存長 1.8	頭部のみ残存、遺存状態不良		
101	鉄釘	覆土	現存長 3.0	中央で折れ曲がる		
102	鉄釘	覆土	現存長 3.0	先端部欠損		
103	鉄釘	覆土	現存長 2.2	先端部欠損、木目残存		
104	鉄釘	覆土	現存長 3.0	先端部欠損		
105	鉄釘	覆土	現存長 3.0	先端部欠損		
106	鉄釘	覆土	現存長 2.1	先端部欠損、木目残存		
107	鉄釘	覆土	現存長 2.2	下半欠損		
108	鉄釘	覆土	現存長 1.6	頭部のみ残存		
109	鉄釘	覆土	現存長 2.5	下半欠損		
110	鉄釘	覆土	現存長 3.0	先端部欠損、遺存状態不良		
111	鉄釘	覆土	現存長 2.3	下半欠損、遺存状態不良、細い釘		
112	鉄釘	覆土	現存長 2.5	遺存状態不良		
113	鉄釘	覆土	現存長 2.5	頭部のみ残存、遺存状態不良		
114	鉄釘	覆土	現存長 2.1	下半欠損、遺存状態不良		
115	鉄釘	覆土	現存長 2.8	遺存状態不良、短い釘か		
116	鉄釘	覆土	現存長 2.3	遺存状態不良、短い釘か		
117	鉄釘	覆土	現存長 1.8	先端部欠損、短い釘か		
118	鉄釘	覆土	現存長 2.4	両端欠損か、遺存状態不良		
119	鉄釘	覆土	現存長 2.2	両端欠損か、遺存状態不良		
120	鉄釘	覆土	現存長 1.5	頭部のみ残存		
121	鉄釘	覆土	現存長 1.4	頭部のみ残存		
122	鉄釘	覆土	現存長 1.8	頭部のみ残存		
123	鉄釘	覆土	現存長 2.0	頭部のみ残存		
124	鉄釘	覆土	現存長 1.5	頭部のみ残存、遺存状態不良		
125	鉄釘	覆土	現存長 2.5	下半欠損、遺存状態不良		
126	鉄釘	覆土	現存長 2.4	両端欠損、遺存状態不良		
127	鉄釘	覆土	現存長 1.8	遺存状態不良		
128	鉄釘	覆土	現存長 3.2	遺存状態不良、2本であろう		
129	鉄釘	覆土	現存長 2.4	頭部欠損		
130	鉄釘	覆土	現存長 4.2	頭部欠損、遺存状態不良		
131	鉄釘	覆土	現存長 2.6	頭部欠損		
132	鉄釘?	覆土	現存長 1.5	両端欠損		
133	銅製品 煙管雁首	覆土	火皿径 1.4 最大径 0.9	雁首はやや長い、羅字一部残存 羅字挿入部はやや太くなる		完形
134	銅製品 煙管雁首	覆土	火皿径 1.5 最大径 1.1	雁首は短く、新しいタイプ 雁首上部はやや潰れる、羅字一部残存		完形
135	銅製品 煙管吸い口	覆土	最大径 1.10 最小径 0.40	長さ8.1cm、羅字一部遺存		完形
136	銅製品 煙管吸い口	覆土	最大径 0.88 最小径 0.40	現存長6.1cm、遺存状態不良、羅字一部残存		一部欠損
137	銅製品 煙管吸い口	覆土	現存長 4.5	叩き潰されている		一部欠損
138	鉄製品 火打金	覆土	長 5.0	いわゆるねじり鎌、ねじり部は左捻り、刃部中央は山形に突出		完形
139	銅製品 寛永通寶	覆土		径2.307~2.296cm、厚さ0.146~0.100cm		
140	銅製品 寛永通寶	覆土		径2.499~2.484cm、厚さ0.123~0.116cm		
141	鉄製品 寛永通寶?	覆土		遺存状態不良、形状から寛永通寶鉄銭片であろう		

**358号土坑** 位置 IA-37、5区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×5.2×0.6mである。底面は平坦。埋没土 下層は黒色土で、上層はFPが主体となる。重複 360号・364号土坑よりも新しい。

**359号土坑** 位置 IA-37、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.9×2.4×0.7mである。底面には細かな凹凸がある。埋没土 FP主体の黒色土で埋まる。遺物 陶磁器片が出土。



第98図 358号・359号土坑平・断面図及び出土遺物

白井南中道遺跡5区

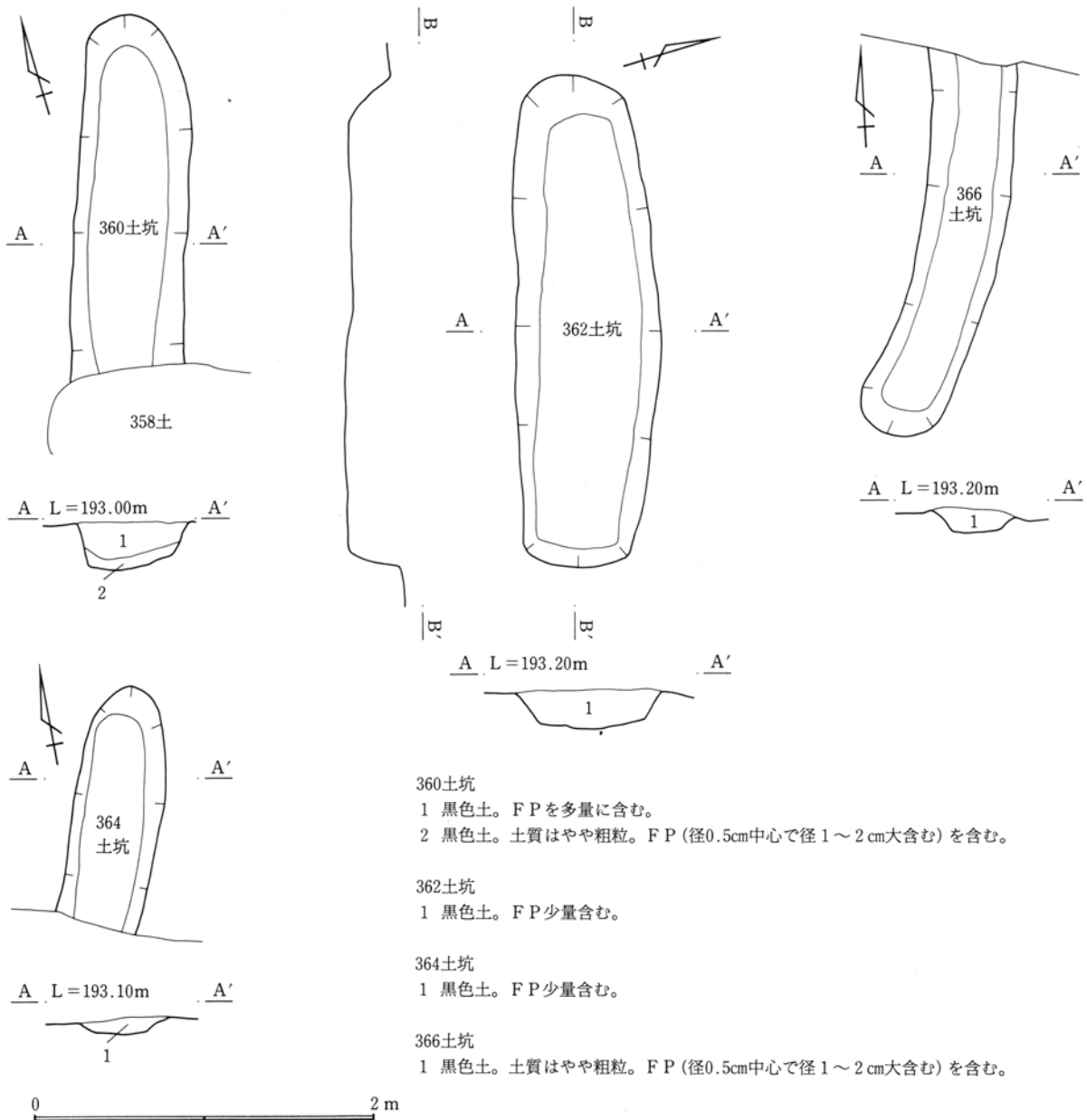
番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
142	瀬戸・美濃 磁器 碗	359土 覆土	口 底 高 — (4.1)	内外面 染め付け、人造須使用	①— ②普通 ③白色	明治～大正
143	肥前磁器 碗	359土 覆土	口 底 高 — (4.0)	内面 底部三友 内外面 細線による染め付け	①— ②普通 ③白色	19世紀前半～ 中頃
144	瀬戸・美濃 磁器か 碗	359土 覆土	口 底 高 — (5.6)	高台歪む 器表光沢あり 内外面 染め付け	①— ②普通 ③白色	19世紀前半～ 中頃

360号土坑 位置 IA-38、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×残存長2.1×0.3mである。埋没土 底部に黒色土があり、その上位はFP主体の層となる。重複 358号土坑よりも古い。

362号土坑 位置 IB-37、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.9×2.9×0.2mである。埋没土 FPを含む黒色土。

364号土坑 位置 IA-37、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×残存長1.4×0.1mである。埋没土 FPを含む黒色土。重複 358号土坑よりも古い。

366号土坑 位置 IB-36、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×残存長2.2×0.2mである。僅かに弧を描いている。埋没土 FPを含む黒色土。



第99図 360号・362号・364号・366号土坑平・断面図

**363号土坑** 位置 IA-35、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×残存長2.4×0.2mである。埋没土 FPを多量に含む黒色土。重複 368号土坑と重複するが新旧関係は不明である。

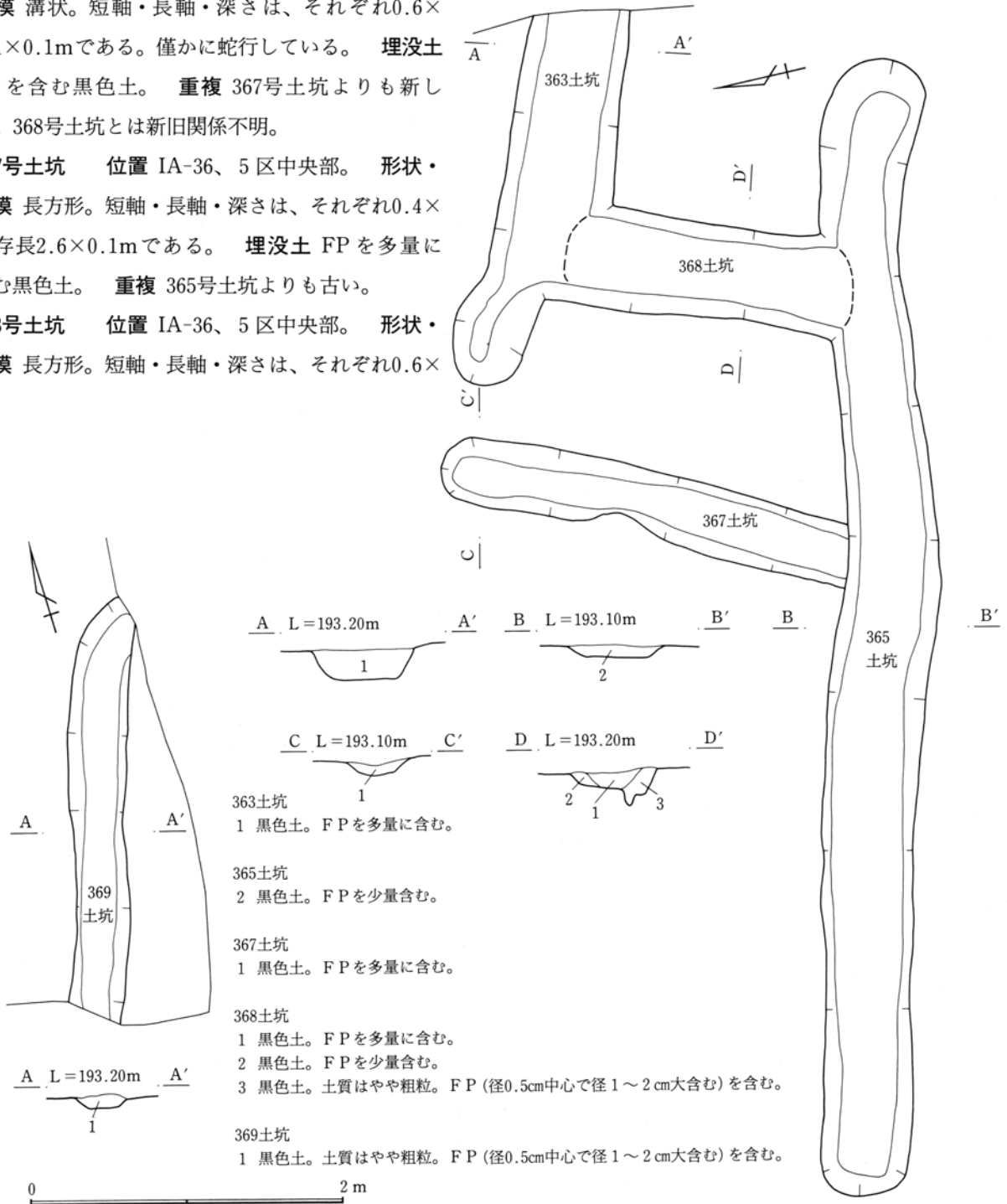
**365号土坑** 位置 IA-36、5区中央部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×7.1×0.1mである。僅かに蛇行している。埋没土 FPを含む黒色土。重複 367号土坑よりも新しい。368号土坑とは新旧関係不明。

**367号土坑** 位置 IA-36、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.4×残存長2.6×0.1mである。埋没土 FPを多量に含む黒色土。重複 365号土坑よりも古い。

**368号土坑** 位置 IA-36、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×

(1.8)×0.2mである。埋没土 FPを含む黒色土。重複 363号・365号土坑と重複するが新旧関係は不明。

**369号土坑** 位置 HY-35、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.4×残存長2.6×0.1mである。埋没土 FPを含む黒色土。



第100図 363号・365号~369号土坑平・断面図

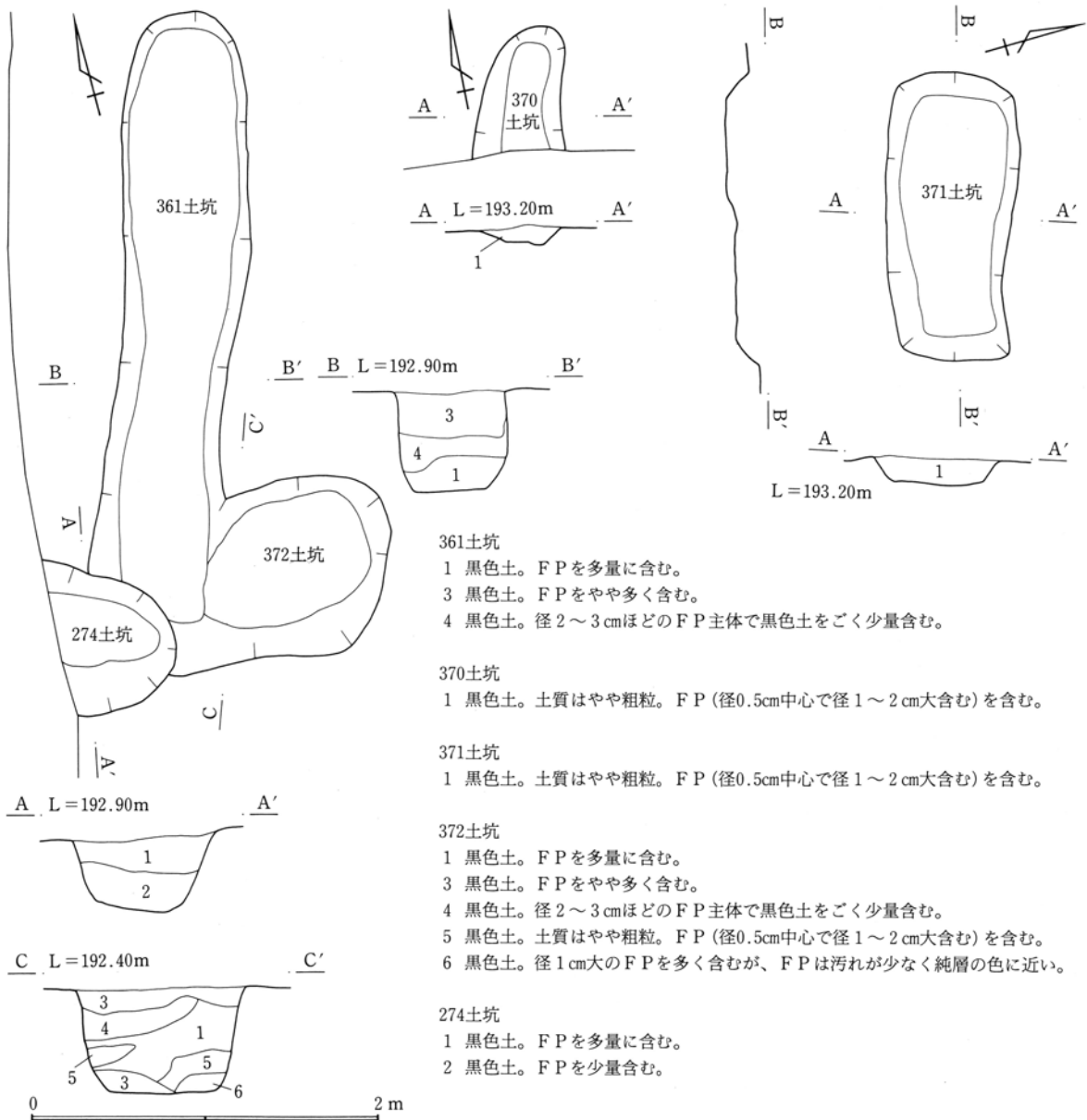
274号土坑 位置 IB-38、5区中央部。形状・規模 長方形。『白井遺跡群—中世編—』で報告した274号土坑の一部である。短軸および深さは、それぞれ0.8×0.4mである。埋没土 黒色土でFPが下部では少なく、上部では多量に含まれている。重複 361号土坑より新しい。

361号土坑 位置 IB-38、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、0.7×3.8×0.6mである。埋没土 FPを多量に含む黒色土。重複 274号土坑よりも古い。372号土坑との新旧は不明。

370号土坑 位置 HY-36、5区中央部。形状・規模 長方形?。短軸・長軸・深さは、0.5×残存長0.7×0.1mである。埋没土 FPを含む黒色土。

371号土坑 位置 IB-36、5区中央部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×1.7×0.1mである。埋没土 FPを含む黒色土。

372号土坑 位置 IB-38、5区中央部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ1.0×(1.4)×0.7mである。埋没土 FPを含む黒色土で、FPの量によって分層できる。重複 361号土坑と重複するが新旧は不明。



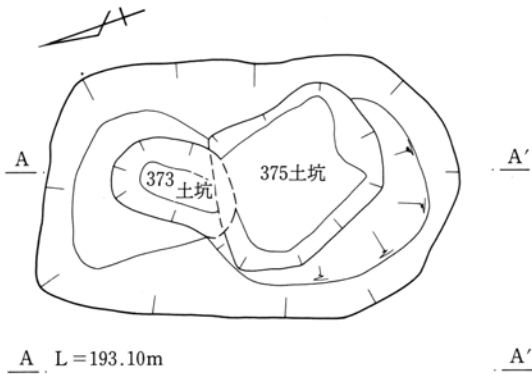
第101図 274号・361号・370号～372号土坑平・断面図

373号土坑 位置 IB-37、5区中央部。形状・規模 楕円形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.4×(0.7)×0.4mである。重複 375号土坑と重複するが新旧関係は不明。

375号土坑 位置 IB-37、5区中央部。形状・規模 方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×1.0×0.7mである。重複 373号土坑と重複するが新旧関係は不明。

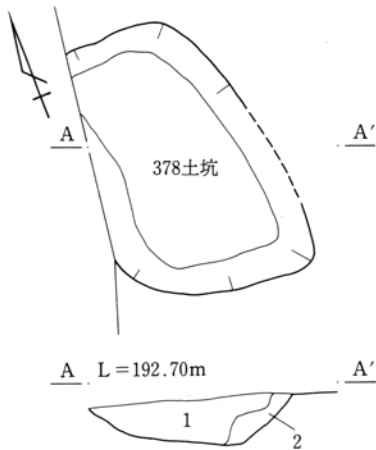
376号土坑 位置 IL-41、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×残存長5.1×0.1mである。中央部が浅くなる。埋没土 暗褐色土。重複 377号土坑より古い。

378号土坑 位置 IL-42、5区北西部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ(1.0)×1.5×0.3mである。埋没土 暗褐色土でFPを少量含む。



A L=193.10m

A'

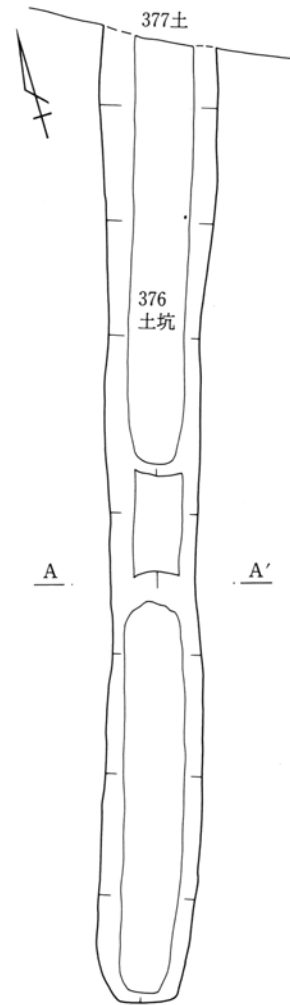


A L=192.70m

A'

378号土坑

- 1 暗褐色土。よごれたFP(径1.0cm)を少量含む。
- 2 崩れたFP。



A L=193.00m

A'

0 2 m

第102図 373号・375号・376号・378号土坑平・断面図



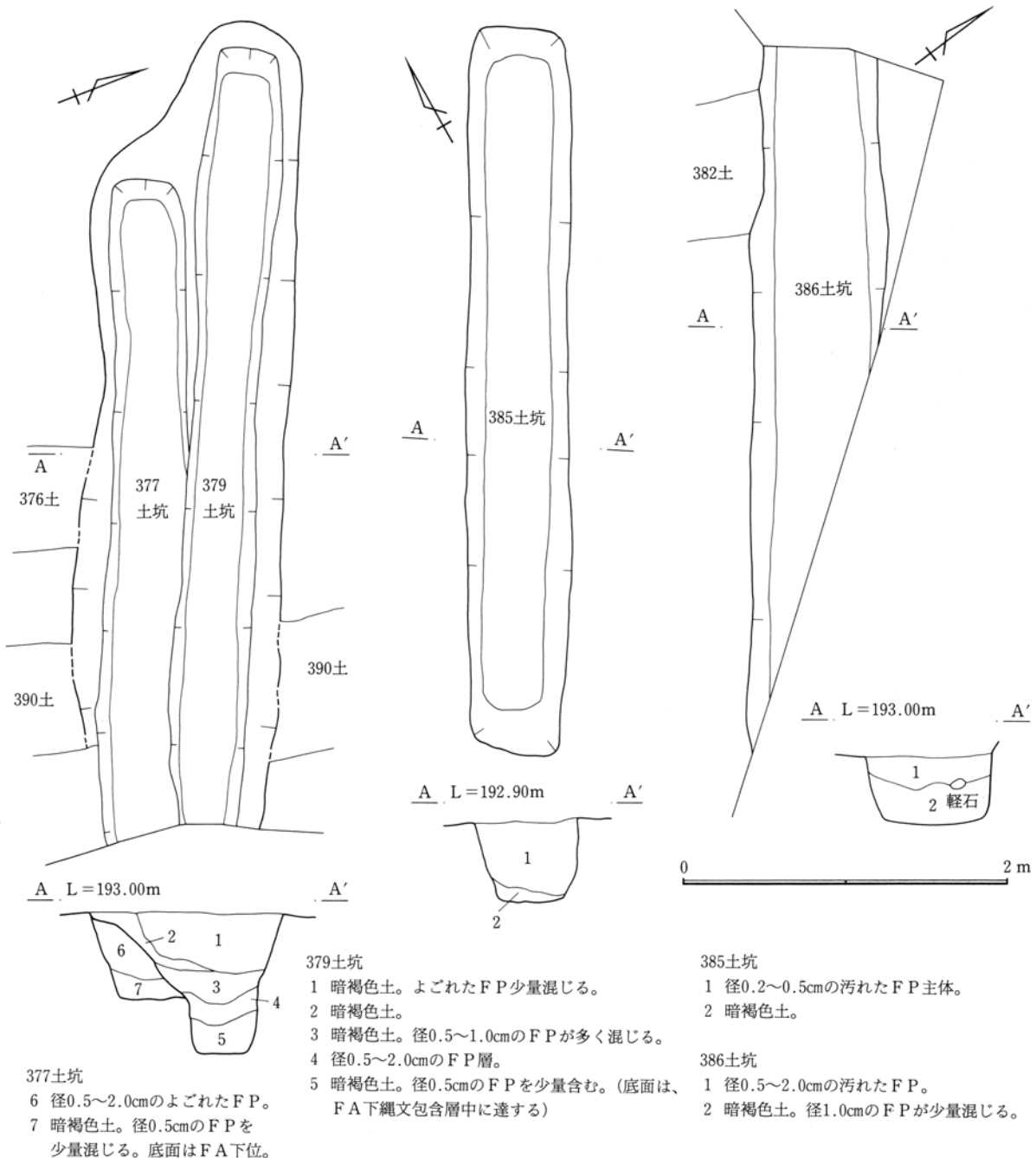
377号土坑 位置 IL-40、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.5×残存長4.0×0.5mである。埋没土 下部が暗褐色土で上部はFP主体。重複 379号土坑より古く、376号・390号土坑より新しい。

379号土坑 位置 IM-41、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、各1.2×残存長5.0×0.9m。埋没土 底部から暗褐色土→FP→暗褐色

土の順に堆積。重複 377号・390号土坑より新しい。

385号土坑 位置 IR-41、5区北西部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各0.6×4.2×0.5m。埋没土 底部に暗褐色土があり上部はFP主体。

386号土坑 位置 IR-40、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×残存長3.1×0.4mである。埋没土 底部に暗褐色土があり上部はFP主体。重複 382号土坑より新しい。

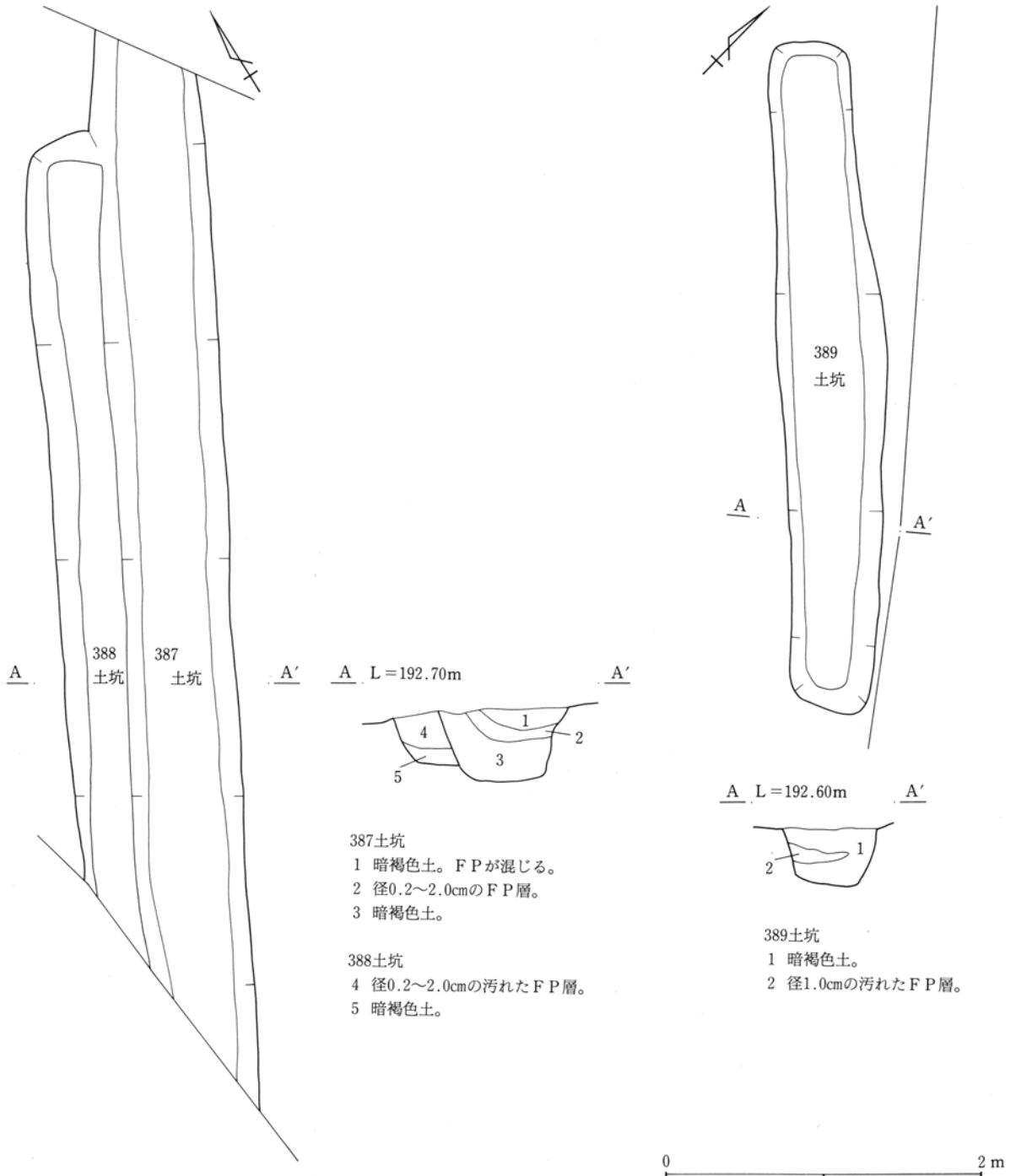


**387号土坑** 位置 IR-41、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×残存長6.1×0.5mである。埋没土 暗褐色土の中間にFP主体の層を挟む。重複 388号土坑より新しい。

**388号土坑** 位置 IR-42、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ(0.4)×残存長4.9×0.3mである。埋没土 底部に暗褐色土が

あり、その上位はFP主体となる。重複 387号土坑より古い。

**389号土坑** 位置 IS-42、5区北西部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×4.2×0.4mである。埋没土 暗褐色土で中間に汚れたFP層を挟む。



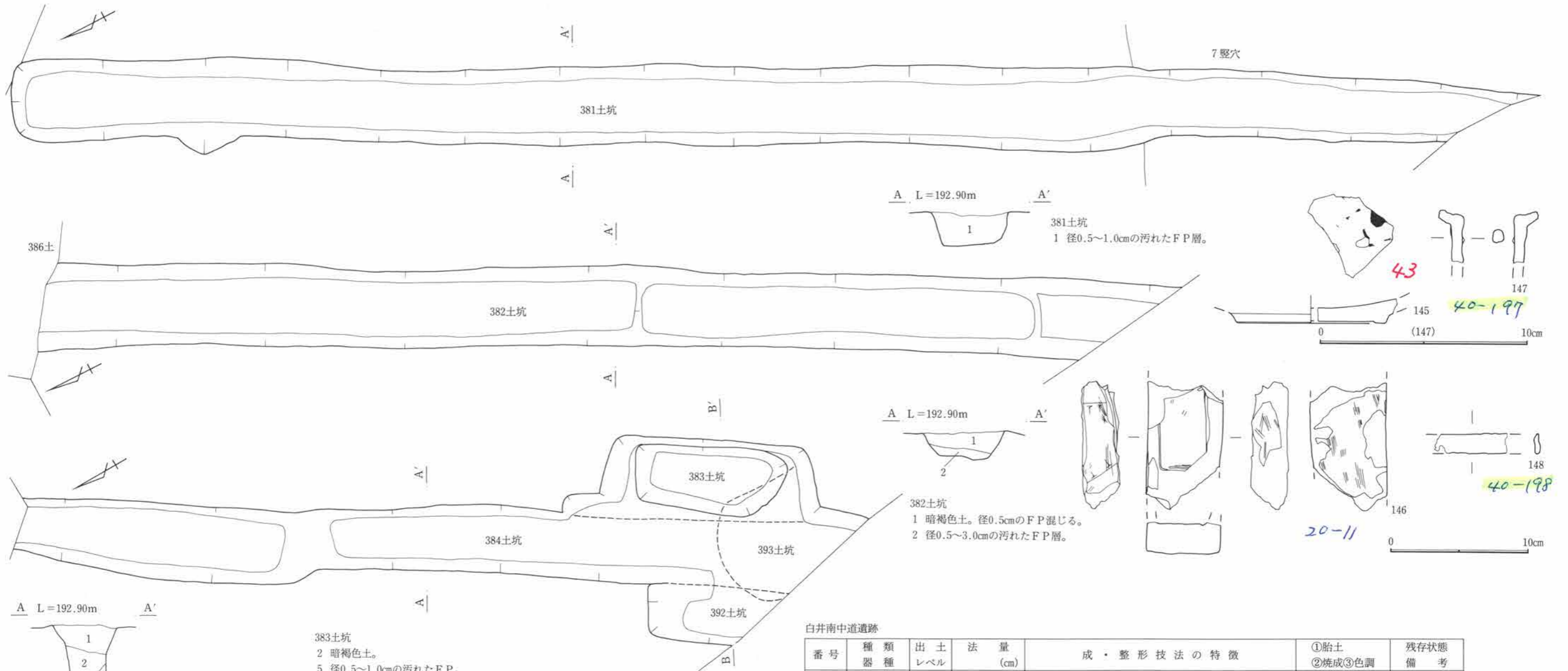
第104図 387号~389号土坑平・断面図

381号土坑 位置 IQ-40、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×残存長14.1×0.3m。埋没土 FPが主体。遺物 硯、陶器片などが出土。重複 7号竪穴遺構より新しい。  
 382号土坑 位置 IQ-41、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.8×残存長

10.5×0.3mである。埋没土 底部に汚れたFP層があり、その上位は暗褐色土となる。遺物 用途不明の金属片が出土。重複 386号土坑より古い。  
 383号土坑 位置 IQ-41、5区北西部。形状・規模 長方形。短軸・長軸・深さは、各0.6×1.4×0.5m。埋没土 下部は暗褐色土で上部はFPが主体。

重複 393号土坑より新しく、384号土坑より古い。  
 384号土坑 位置 IQ-41、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×残存長7.8×0.3mである。埋没土 汚れたFPが主体。重複 383号・392号・393号土坑より新しい。  
 392号土坑 位置 IQ-42、5区北西部。形状・

規模 長方形?。短軸・長軸・深さは、それぞれ(0.6)×残存長1.1×0.4mである。埋没土 汚れたFPが主体。重複 384号土坑より古い。  
 393号土坑 位置 IQ-42、5区北西部。形状・規模 長方形?。重複が激しくはっきりしない。埋没土 汚れたFP。重複 383号・384号土坑より古い。



- 383土坑  
 2 暗褐色土。  
 5 径0.5~1.0cmの汚れたFP。
- 384土坑  
 1 径0.5~3.0cmのよごれたFP層。  
 2 暗褐色土。  
 3 崩れたFP。  
 4 暗褐色土。径3.0cmの汚れたFP主体。
- 392土坑  
 6 暗褐色土。径0.5~2.0cmの汚れたFP主体。
- 393土坑  
 7 径0.5~2.0cmの汚れたFP。

白井南中道遺跡

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
145	瀬戸・美濃 陶器 鉢	381土 覆土	口 底 高 — —	内面 鉄絵 外面 高台内軸をぬぐい取る	①緻密 ②普通 ③灰白色	底部片 17世紀
146	石製品 硯	381土 覆土	長 幅 厚 — 2.5	使用により中央が少し窪む 側面は砥石として転用される	流紋岩	両端欠損
147	鉄釘?	381土	現存長 4.0	—	—	—
148	鉄製品 用途不明	382土 覆土	現存長 厚 幅 5.2 2.5 1.5	—	—	—

第105図 381号~384号・392号・393号土坑平・断面図及び出土遺物

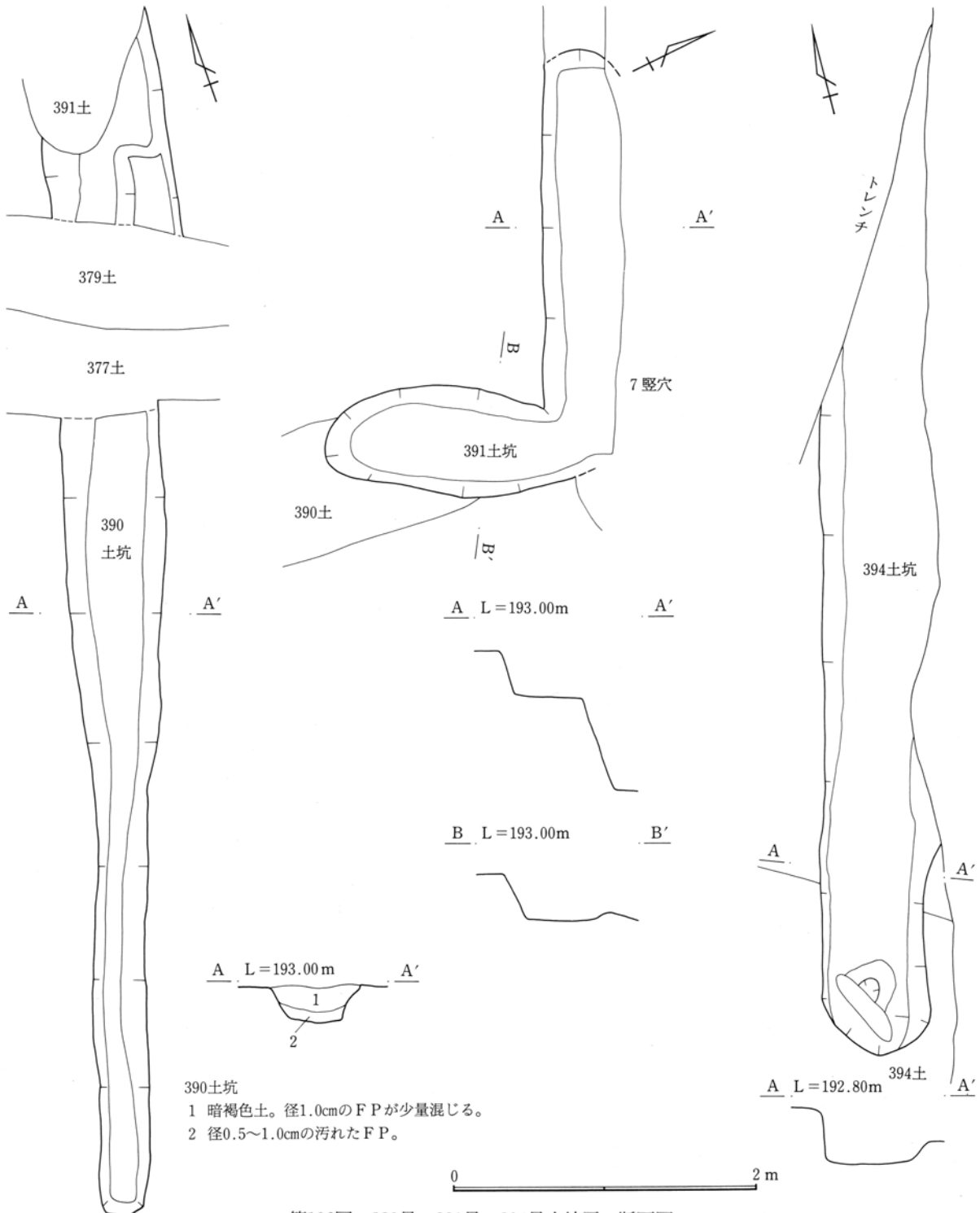


**390号土坑** 位置 IK-41、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.6×残存長7.8×0.2mである。埋没土 下部は汚れたFP層で上部は暗褐色土。重複 377・379・391号土坑より古い。

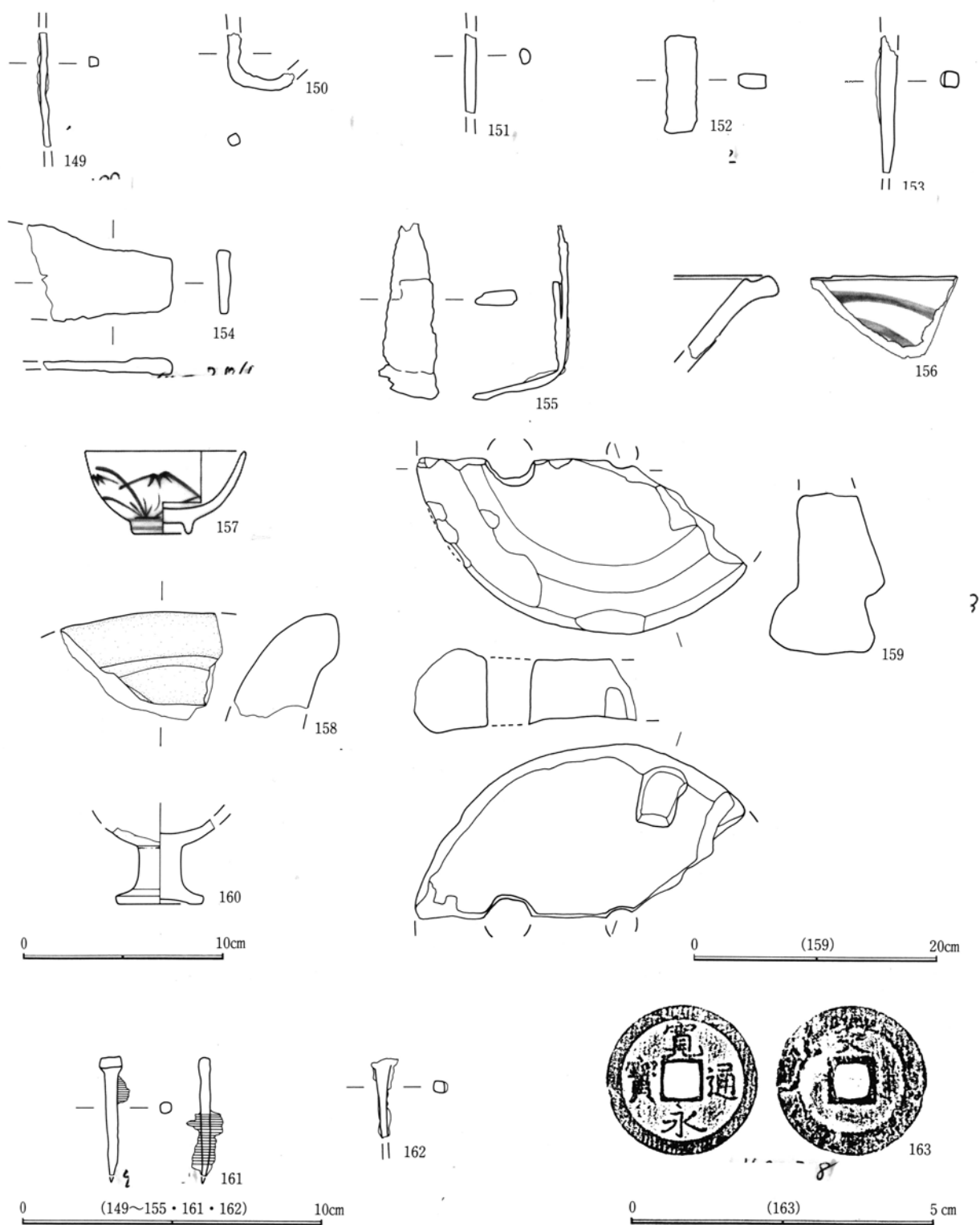
**391号土坑** 位置 IM-40、5区北西部。形状・規

模 L字状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×(1.8)×0.3mである。曲がる部分で二つに分離する可能性あり。重複 7号竪穴遺構・390号土坑より新しい。

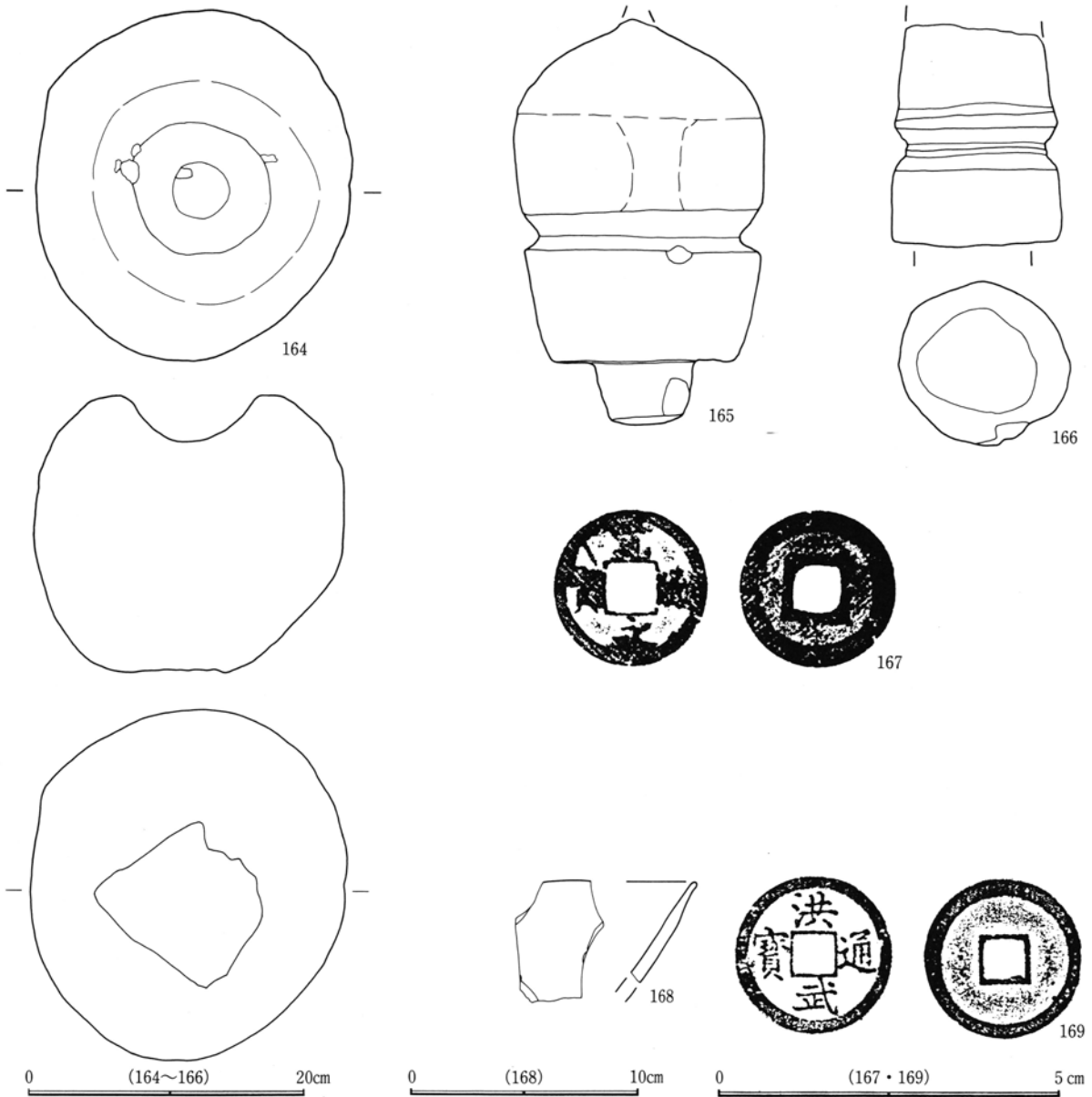
**394号土坑** 位置 IO-40、5区北西部。形状・規模 溝状。短軸・長軸・深さは、それぞれ0.7×残存長7.4×0.3mである。重複 7号竪穴遺構より新しい。



第106図 390号・391号・394号土坑平・断面図



第107図 5区出土遺物



第108図 5区出土遺物

白井南中道遺跡5区

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
149	鉄釘	1 竪穴	現存長 3.8	両端欠損、細い		
150	鉄釘	5 竪穴	現存長 2.0	両端欠損		
151	鉄釘	256土	現存長 2.6	両端欠損		
152	不明鉄製品	256土	現存長 3.3	小片のため用途不明		
153	鉄釘	271土	現存長 4.5	両端欠損		
154	鉄製品 用途不明	273・	現存長 7.4	板状製品、鑄造製品		
		274土	厚 0.8			
155	鉄製品 用途不明	286・	現存長 5.8	板状製品、小片のため用途不明、折れ曲がる		
		287土	厚 0.5			
156	瀬戸・美濃 陶器 鉢	286・	口 —	内面 鉄絵	①緻密 ②普通 ③灰	口縁部小片 17世紀
		287土	底 —			
			高 —			

第5章 白井二位屋・南中道遺跡（第1集補遺）

番号	種類 器種	出土 レベル	法 量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成③色調	残存状態 備考
157	肥前磁器 碗	遺構外 (墓地)	口 8.0 底 2.9 高 4.1	外面 笹文、高台内不明文様 内面 無文	①— ②普通 ③灰白色	完形 18世紀
158	石製品 粉挽き臼	遺構外 (墓地)	径 — 厚 —	はんぎり破片		
159	石製品 粉挽き臼	遺構外 (墓地)	径 (31.0) 厚 7.0	上臼、使用による磨滅が著しく、挽き手孔がすり面に露出する		1/3 中世であろう
160	肥前磁器 仏飯器	遺構外 (墓地)	口 — 底 4.3 高 —	外面 染め付け 脚端部以下無釉	①— ②普通 ③灰白色	杯部欠損 18～19世紀前半
161	鉄釘	遺構外	現存長 4.9	先端欠損		墓地
162	鉄釘	遺構外	現存長 2.7	先端部欠損		墓地
163	銅製品 寛永通寶	遺構外 (墓地)		径2.528～2.520cm、厚さ0.153～0.111cm、文銭		完形
164	石製品 五輪塔	遺構外 (墓地)	最大径 25.0 高 19.9	水輪、径に比べて高さがあり球形に近い	粗粒輝石 安山岩	
165	石製品 五輪塔	遺構外 (墓地)	最大径 18.2 残存高 28.9	空風輪	粗粒輝石 安山岩	
166	石製品 宝篋印塔	遺構外 (墓地)	最大径 12.4 残存高 15.7	相輪部片	粗粒輝石 安山岩	
167	銅製品 寛永通寶	遺構外		1文銭、径2.284～2.280cm、厚さ0.111～0.102cm、「寶」上に鑄型による傷		完形
168	瀬戸・美濃 灰釉陶器 椀	遺構外	口 — 底 — 高 —	内外面 灰釉薄くかかる	①緻密 ②普通 ③灰白色	口縁部片 平安時代
169	銅製品 洪武通寶	遺構外		径2.302～2.296cm、厚さ0.173～0.164cm		完形



# 第6章

## ま と め

## 白井城周辺における渡河と街道

飯森康広

### 1 はじめに

白井城は、交通上の要衝に選地した拠点的城市として知られる。また、政治的には室町期上野国守護となった山内上杉氏に代わり、守護代として在地支配に当たった白井長尾氏の拠点として位置づけられてきた。しかし、交通の具体的内容として、渡河施設とそれに結びつく街道を、白井城に関連づけて論じたものはなく、白井城が本拠として成立する要因も不透明なままであったと言わなければならない。

このため、本稿は白井城と関連づけられる渡船として、渡屋の渡し、落合の渡し<sup>(1)</sup>、各々の様相を見ると同時に、それに結びつく街道として、前橋—吾妻道、旧沼田道、高崎—沼田道<sup>(2)</sup>も合わせて考えたいと思う。なお、白井城は江戸初期に廃城及び廃藩という結末を迎えることとなるが、そこには中世から近世への変化の中で、立地的な重要性を喪失した側面があると考えられる。また、この時期は幕府交通政策の確立期に当たり、白井周辺の交通を考える上でも、三国街道と杳ヶ橋関所の成立を抜きに考えることはできない。したがって、絶えずそれを意識しながら、言及していく必要がある。白井城とその関連交通を見ることは、戦国期から江戸初期にわたる大きな変革期を追う作業と位置づけたい。

### 2 渡屋の渡しと前橋—吾妻道・旧沼田道

#### (1) 江戸期の状況

渡しの存続を確認できる史料は、必然的にその許可や禁止に係わるものが多い。したがって、渡しの開始時期を捉えることは難しい。白井では、元和2年(1616)に「白井渡」の存在が、「定船場之事」<sup>(3)</sup>によって確認できる。これは、利根川筋である可能性が高く、渡屋の渡しが想定できる。また、この定船場の法令は、幕府の関所制度確立過程で重要な段階に当たる。岡田昭二氏<sup>(4)</sup>によれば、「元和元年(1615)5月、大阪夏の陣で事実上の勝利をおさめた徳川幕

府は、その後、『一国一城令』や『武家諸法度』等の法令を制定して大名統制政策に着手するが、翌2年8月になると、関東の主要河川にある渡船場に対し、(中略)法令を公布した。「この法令は、利根川及び江戸川筋にある16か所の渡船場を幕府公認の定船場として設定したものであり、定船場以外では旅人の渡河を禁止するよう指示している」。また、「この法令こそが江戸幕府の関所法の最初の成文法として考えられている」。「近世の関所制度は、慶長期から元和初年にかけて徐々に整備されてきたが、寛永期に入ると一段とその整備が進み」、「寛永8年(1631)の規定によって明確に成文化されたと考えられることができる」としている。なお、「白井渡」が元和2年段階では、上野国内でも最有力な渡船場であったことに注意しておきたい。

一方、白井では正保2年(1645)頃「川通渡舟之御改」があり、落合の渡し(後述)が廃止された<sup>(5)</sup>という。これに関して渡屋の渡し或は「白井渡」との係わりを示す史料はない。ただし、状況は同じだという推測は可能である。そこで、元和2年から正保2年までの約30年間における状況変化を追ってみる必要がでてくる。

幕府の関所政策に係わるものとして、本地域では杳ヶ橋の関所が挙げられる。ここは、三国街道の吾妻川渡河点に設置されたものであり、従来五十嵐富夫氏<sup>(6)</sup>により「関所としての機能を完全に発揮することの出来るものが創設されたのは(中略)、寛永20年(1643)である」とされてきた。しかし、岡田氏<sup>(7)</sup>は「杳ヶ橋の関所は元和9年(1623)の將軍秀忠の上洛に際して設置され、寛永8年の幕府目付の検分で正式に関所に定められ、関所番も新たに3人が定番として勤めるようになった」とする。また、「寛永20年についても、この年が何を意味しているものなのか明らかでなく疑問が残る」としている。こうして見ると、正保2年頃の渡船改めが杳ヶ橋の関所の完備

を受けたものである可能性がでてくる。後述のとおり、杳ヶ橋は中世からその存在は明らかであり、元和2年の存在も疑いようがない。したがって、元和2年「白井渡」が重要視された時点でも、その重要性は比類なく、単に橋であったために言及されなかったものとする。一方、杳ヶ橋に関所が設置されたことは、三国街道の経路から見て必然的だが、同時に「白井渡」（渡屋の渡し）の弱体化を意味するのではないだろうか。それは、元和9年(1623)の白井城廃城及び白井藩廃藩が示すとおり、白井の政治的な位置が弱体化したためにほかならない。

渡屋の渡しに関して、正保2年の渡船改め時の状況は不明だが、その後の位置づけを象徴するものとして、「自分渡船」<sup>(8)</sup>という名称が注目される。その初見は、元禄13年(1700)の「村明細帳」であるが、内容として「商人荷物渡し候には、壺駄に付き船賃六文づつ、壺人にても六文、牛馬同前」<sup>(9)</sup>(読み下し文)とある。また、天明5年(1785)の「渡船取調書上」では、「近辺村々又は前橋市などへ通行致し、その外近村々より秣薪等当村へ附込売り払い申し候渡船にござ候。何方への通筋と申すにてはござなく候」<sup>(10)</sup>(読み下し文)とある。これにより、渡屋の渡しは人の往来や商品運送を有料で行う渡船であったことが判る。しかも、「何方への通筋と申すにてはござなく」、近辺村々等を相手にしていたことにより、「自分渡船」と称していたという。つまり、川向こうの農地を耕作するための出作船のように、利用者が限定されたものではなく、より多数数を対象とした渡船と言える。ただし、このような渡船が存在し得たのは、幕府関所制度のルーズさからではなく、岡田氏の言う「関所破りの発見者への褒賞は、関所が単に関所番などの関所役人だけで取締りが可能であったわけではなく、関所周辺に位置する地元村々の村民の協力が必要不可欠であったことを示唆しており、ここに近世関所の本質の一面が窺われる」<sup>(11)</sup>としたこととの共通性が認められ、白井村民の監視行為に対する信頼に委ねられていたものとする。また、「自分渡船」と称しながらも商業活動に関与す

る渡船として存在していたことは、専らこの渡船が他に代替することのできない利根川兩岸を結ぶ貴重な経路であったことに由来すると言わなければならない。

一方、白井が抱える商圈として、「近辺村々」という漠然とした言い方であるけれども、一定の範囲を示していたはずである。「白井」<sup>(12)</sup>では、月に6回の市が催され、馬草・薪等が商われた。近郷では、沼田・吾妻中之条・前橋・渋川に市があった<sup>(13)</sup>という。つまり、「白井」は、これらの近郷と同格の経済拠点として、周辺に商業圏を形成していたとすることができる。白井は、元和9年(1623)の白井城廃城以後、城下町から周辺郷村を相手とする六斎市を持った市場集落へと移行したけれども、その商業活動を交通面で支えていたものは、渡屋の渡しであったと位置づけることも可能である。

## (2) 戦国期の状況

白井内における前橋—吾妻道経路は、杳ヶ橋—白井—(渡屋の渡し)—八崎である。杳ヶ橋白井間(吾妻道)の往来は、従来から万里集九の紀行文<sup>(14)</sup>などによって紹介されてきた。一方、白井八崎間(前橋道)の往来は、直接の史料がなく取り上げられてこなかった。しかし、利根川の渡河点は、江戸期の状況から考えて【渡屋】(【 】は小字名を表す)周辺であったに違いなく、合戦記録もそれを示唆している。永禄10年(1567)武田信玄に白井城を攻略された長尾憲景は<sup>(15)</sup>、「白井ヲ退キ領内東上州不動山ノ館に入」<sup>(16)</sup>ったとされる。白井城と不動山城<sup>(17)</sup>の間には【渡屋】がある。また、天正8年(1580)真田昌幸に不動山城を落とされた城主杳和泉守は、「樽の郷に落下り白井をさして引退」<sup>(18)</sup>(「加沢記」)いたとされる。【樽】は【渡屋】の対岸【舟戸】の隣接地である。以上は、【渡屋】周辺が軍事的に重要な渡河点であったことを示す記録である。これは、利根川西岸に白井長尾氏の居城白井城があり、東岸にも不動山城や八崎城<sup>(19)</sup>など拠点的な城があったことを反映した事例である。また、江戸期における渡船の発達

を考慮すれば、当期から既に渡船が存在し、城下町経済を支える交通網を成していたと見るのが妥当だろう。

さて、【渡屋】から西に向かう前橋一吾妻道は、白井城惣曲輪内を東西に貫通していた。このため、この道は現在の町割においても、その軍事的性格を色濃く残している。つまり、経路に屈曲が多いことが、注目される。この道は、【渡屋】から西進して東の城戸から「白井の道しるべ」<sup>(20)</sup>に導かれて西の城戸に至るまでに、4回の屈曲を繰り返している。城の防衛面に着目すれば、曲がった道は見通しが効かず、通り抜け難く、防衛的に優れた構造である。また、「松原の道しるべ」<sup>(21)</sup>で北に折れて、北の城戸へ貫ける旧沼田道も、同様に2度折れている。つまり、城の虎口(入り口)を北上し「松原の道しるべ」を起点にして、北東西の3方向へ向かえば、必ず2度折れる構造になっている(第1図の→)。したがって、前橋一吾妻道・旧沼田道は、白井城下町を通る街道として、意図的に路線配置されたことが想定される。なお、両街道について再確認すべきことは、その成立当初から路線形状の屈曲があったはずはないことであり、それが城下町の形成あるいは再編成の過程で為されたということである。

### 3 落合の渡しと高崎一沼田道

#### (1) 江戸期の状況

江戸期における落合の渡しの運行は、極めて短期間であり、正保2年(1645)頃の渡船廃止以前に限られる<sup>(22)</sup>。渡船廃止となる政治背景については、前述のとおり、寛永20年(1643)の杓ヶ橋関所整備を契機とする渡船規制或は街道規制が考えられる。それでは、廃止以前の落合渡船は、どのようなものであったのだろうか。元禄8年(1695)の「秣渡船願」<sup>(23)</sup>では、「北国への往還渡船」つまり沼田道の渡しであったとされる。また、開始時期を考えるについて、この史料を最古として、正保2年(1645)頃の渡船を確認できるけれども、元和年中(1615～1624)という史料もある<sup>(24)</sup>。

前章でも述べたとおり、本地域では慶長年間(1596～1615)の三国街道設置が大きな変革期となり、経済的打撃となった。つまり、三国街道は杓ヶ橋から北牧宿を北上してしまい、それまでの沼田への経路(旧沼田道或は沼田道)と違い、白井を経由しなくなってしまったからである。したがって、それまで吾妻川の渡河点として、条件の良い杓ヶ橋が通用されていたのに対して、対抗上白井に直接渡河させる落合の渡しが成立した可能性が高い。ただし、運行条件が杓ヶ橋に比べ劣性だったことは容易に想像され、経済効果も限界があったと思われる。三国街道成立以前、既に白井に宿場機能が完備していたとすれば、成立後宿泊や運送に係わる様々な需用が根底から消滅したことを意味しただろう。したがって、市場集落への変換は、産業構造を根本から覆すこととなったに違いない。

ところで、落合の渡しは、渋川宿<sup>(25)</sup>との直接的な往来を確保できた点で、規制されない限り、三国街道を横目に第2の往還道として機能できたことを意味する。したがって、一時的にしても、落合の渡しと高崎一沼田道が相応の経済効果を生んだことが考えられる。つまり、旧沼田道が往還道から外れて、沼田道が主要道となり、「白井」が独立した路村として機能してくるのは、この時期を契機とする以外考えられない。その結果、落合の渡し廃止後についても、渡屋の渡しと沼田道の組合せの形で受け継がれていったものと思われる。

#### (2) 戦国期の状況

落合の渡しと高崎一沼田道の成立時期を、文献史料から考えた場合、まず長享2年(1488)禅僧万里が、白井城訪問を目的としながら、城の対岸を通り過ぎ、渋川から路を曲げて杓ヶ橋を渡ったこと<sup>(26)</sup>が挙げられる。ただし、この史料では落合の渡しの存在は、全く伺い知れない。

一方、天正18年(1590)には、前田利家が白井城攻略のため杓ヶ橋から侵入した時、「白井領内渋川の宿の人家を壊して、杓ヶ川に筏を渡し」<sup>(27)</sup>(読み下し文)た

資料 昭和六年国土地院  
 調査年 昭和六年  
 測図者 沼田道雄

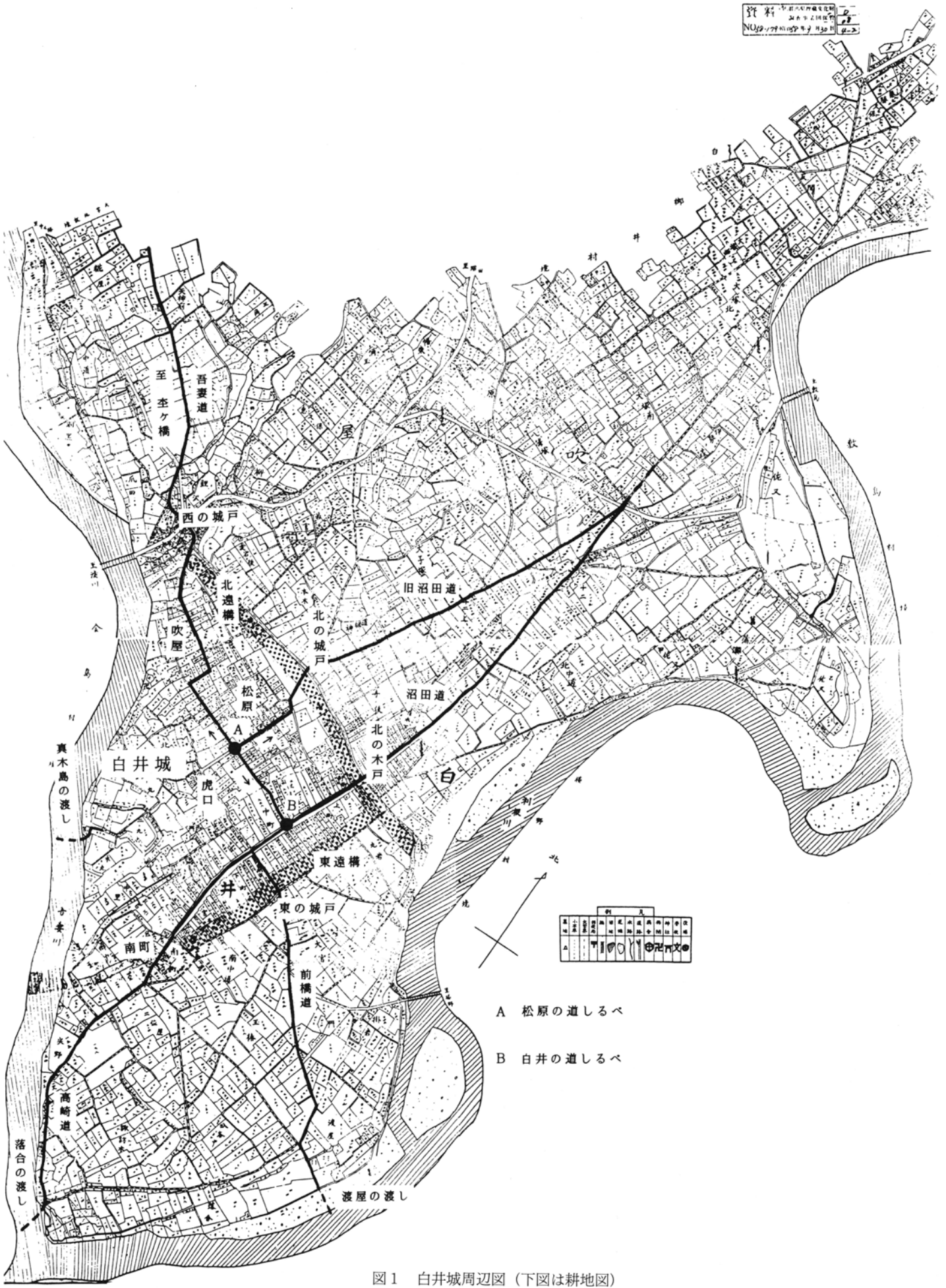


図1 白井城周辺図 (下図は耕地図)

という記録がある。杵(上牧)が、平時における吾妻川の渡河点であることは万里の記録で知れるが、軍事面でも白井への侵入路であったことがここで確認できる。

白井城の縄張りは、杵を渡り西方から寄せて来る敵に備えるものとなっている。この城では、西の城戸の手前辺りから急に下り込み、最下点では15m程の比高差を持つ。特に土塁などの施設は確認できないけれども、ここは鯉沢川によって形成された地形を利用した天然の堀であり、川水をせき止めれば、水田域一帯が水堀と化す恵まれた地形である。更に、この上流は、山崎一氏によって「館野の遠堀」<sup>(28)</sup>とされた所である。特に「同心林」と呼ばれるところには、現在も堀と土塁が残り、激戦地という伝承がある<sup>(29)</sup>。また、「御影之記」<sup>(30)</sup>の伝える武田氏の白井城攻めでは、城将矢野氏を双林寺の森に伏せさせたとあり、同じくこの付近が激戦地であったことを示している。つまり、城の西の備えは堅固であったがため、双林寺の南面辺りが戦場となったと思われる。

また、白井城は崖端城であり、吾妻川北壁の断崖によって、南からは全く敵を寄せつけないのが、基本的な選地条件である。そして、落合は城との位置関係から、当然そのような意図の影響下にあったと考えられ、むしろ渡河させない方向に作用したと推測される<sup>(31)</sup>。これは、地形的にもまた特に川が急流である点からも<sup>(32)</sup>、実現可能な方策である。つまり、南方からの敵が杵を渡ることは、城の選地意図から考えれば、必然的な経路なのであり、戦史上からも裏付けられた。また、落合の渡しは城との結びつきが認められず、前述のとおり「白井」の経済的危機を受けて成立したものと考ええる。その点で、元和元年(1615)頃を、この渡しの開始時期と伝える史料があるのは、最も理解し易いところである<sup>(33)</sup>。

#### 4 渡河と街道から見た白井城下町の形成

現在、通称「白井宿」と呼ばれている町並は、高崎一沼田道に沿って短冊状に町割され、その形成は

この道に規制されている。「白井」内の町名を記録した最古の例としては、寛永11年(1634)に西町・東町が確認できるけれども<sup>(34)</sup>、現在その町名は残っていない。しかし、この道を中心として、東西に分割された状況が想像され、現況ともよく合致しているため、この頃には既に現況の町割が、成されていたものと思われる。なお、この道の経路に着目すると、「白井」の中心を真直ぐに貫く状況は、城の防衛機能を担っていた吾妻道や旧沼田道と異なっており、【松原】・【吹屋】の状況と対照的である。それは、高崎一沼田道が白井城の大手道とは無関係に、城の東端を南北に走る状況が示すとおり、城に寄生するのではなく街道の往来を指向して形成された宿場的なものだからである。つまり、現在の町割は、江戸期では脇往還沼田道と呼ばれた往還道の宿場の機能を果たしていた「白井」往時の状況を反映しているからにちがいない。一方、【松原】・【吹屋】は、ともに松原屋敷・吹屋屋敷と呼ばれていた<sup>(35)</sup>その名のとおり、市とは関係の浅い地域であった。ただし、宿場すなわち直線的な町割、居住地すなわち屈曲した町割という機能からの分類は、法則性がなく偶然の一致でしかない。むしろ、この形態上の相違は、時代的な相違と考えるべきであって、【松原】・【吹屋】がより旧状をとどめていた結果だと考える。したがって、第2章で述べたとおり、屈曲した街道に規制されている点が、城下町白井の特徴であるという視点に立つと、直線的な特徴を持つ沼田道は新しい段階のものと判断され、前段階として【下之町】で北に曲がり、更に「白井の道しるべ」で西に曲がる前橋一吾妻道と旧沼田道だけの時期が想定できる。ここで便宜上、前者を第1段階、後者を第2段階と呼ぶ。こうした時期差は、「白井」の町割形態、特に短冊状地割の出現時期とも大きく係わることとなる。

白井の町並を示す史料として、長享2年(1488)禅僧万里が、白井城を訪問した折、「屋は京洛の如く、地は槃(盤)の如し」<sup>(36)</sup>(読み下し文)と白井を詠んだものがある。これは、平らな地形に家屋が建ち並

ぶ様子を詠んだものだが、地形から考えて【松原】や【吹屋】の状況としてはよく合致する。しかし、利根川岸の中位段丘面に位置して、白井城や【松原】・【吹屋】に比べ一段低く立地する「白井」を、考慮していたとは思えない。この長享2年頃は、文明の乱に係わり白井城に越後上杉氏が駐留していた時期であり<sup>(37)</sup>、上野国内が戦乱期の様相を呈し始めた頃に当たる。この点で、万里が見た町並が、未だ白井の第1段階の状況を示していた可能性は高い。

次に、第2段階の状況を考えるについて、「白井」を惣曲輪として囲い込み、この町割とほぼ平行かつ同様な長さを為す東遠構を無視することはできない。この構えの立地する地形に着目すると、これが利根川によって形成された軽微な段丘面の端部を、巧みに利用したものと看取される。したがって、城の縄張りに沿う形で、町屋が新設または再編されたと見るのが自然である。なお、落合の渡しは江戸期に運行を開始し、同時に高崎—沼田道の重要性が高まった状況を考えると、この道が白井城と並存するのも、江戸期以降と見るのが妥当だろう。したがって、「白井」も閉鎖性の高い防御面に優れた惣曲輪と見てよいものとする。この点で、南町(第1図参照)の形状が、城に見られる「馬出し」や「櫓形」に似ているのは示唆的であり、或は軍事的な機能を持った「虎口」(入り口)であった可能性もでてくる。以上を整理すれば、第1段階は北遠構・東遠構ともに存在せず、城と集落が分離した中を、前橋—吾妻道・旧沼田道が通行していた状況と考える。次に、両遠構の構築が計画され、ある程度屋敷地と町屋との分離も模索した集落再編がなされる。【吹屋】・【松原】が屋敷地、「白井」が町屋へと変換された段階を第2段階とすることができる。なお、【吹屋】・【松原】と「白井」では、立地的に大きな違いがあり、前者が本城と同じ上位段丘面にある一方、後者が一段低い中位段丘面に位置したことが、惣曲輪の機能とも係わりながら、集落再編に作用したものと想定できる。また、前章で見た落合の渡し(その後渡屋の渡し)と高崎—沼田道とが連携した市場集落への再生は、城

下町を克服した新たな展開であり、ここでは省略する。

## 5 まとめと課題

本稿は、白井城周辺の渡河と街道について、白井城との関係に注目し、戦国期では成立時期の検討と城下町との関係を見た。その結果として、渡屋の渡しの重要性が再認識されたが、史料不足は否めず、殆ど実態の把握ができなかった。また、街道に対する城の関与は、前橋—吾妻道、旧沼田道に明確に現れており、街道掌握に対する領主の姿勢を反映していた。一方、城下町形成については、2段階の発展形態を想定し、初歩的な方向性はつかめたものとする。今後は、城の縄張り研究と発掘調査成果の検討を加えていきたい。なお、白井城は、白井長尾氏や武田氏・後北条氏など複数の勢力が関係しており、本稿では言及できなかったが、いずれそれらの関与の仕方なども追う必要がある。

江戸期では、当初有力な渡船場であった渡屋の渡しは、幕府交通政策の変化によって「自分渡船」へと縮小化した経過を見た。また、落合の渡しも、三国街道の成立に僅かでも対抗したにちがいないが、結局廃止されたのである。これら渡船に見られる規制の状況は、白井城の廃城と無関係ではありえない。ただし、白井城の廃城と廃藩自体、全く不透明な事例であり、むしろ解明の糸口となることを期待する。上野国内では、白井藩以外に大戸藩・三之倉藩・総社藩・板鼻藩・豊岡藩・藤岡藩・長根藩・大胡藩・那波藩・阿保藩・青柳藩の計11藩が江戸前期で廃藩となっている。ただし、これらの事例を論究する力量もないのが現実である。しかし、白井藩と相通じる可能性は十分あり、中世から近世への変換期を追う上からも研究課題である。

### 註

- (1) 渡屋の渡しは、現子持村大字白井字渡屋と現北橋村大字八崎字舟戸間の利根川の渡船で、前橋—吾妻道に連絡していた。落合の渡しは、現子持村大字白井字尖野と現渋川市東町字落合間の吾妻川の渡船で、高崎—沼田道に連絡していた。
- (2) 前橋—吾妻道・旧沼田道・高崎—沼田道の名称は、子持村指定史跡「白井の道しるべ」・「松原の道しるべ」(後述)の刻字を参

## 第6章 まとめ

- 考にした。なお、位置は第1図に示したとおりである。ただし、白井を中心に考えている都合上、前橋—吾妻道は「松原の道しるべ」を境に二分し、東を前橋道、西を吾妻道とし、総称して前橋—吾妻道という。同じく高崎—沼田道は「白井の道しるべ」を境に二分し、南を高崎道、北を沼田道とし、総称して高崎—沼田道という。また、沼田道の新旧命名の意図は、本文中で明らかとなる。
- (3) 「御触書寛保集成」関所之部。
  - (4) 岡田昭二「寛永期における幕府の関所政策 一上州の関所及び番所の創設年代に関連して一」『双文』第3号 1986。
  - (5) 落合の渡しでは、正保2年(1645)頃往還渡船が廃止された際に、「川通渡舟御改御奉行」へ訴えて、一度「出作舟」のみ許されたけれども、更に不服としたため渡船は当初どおり廃止されてしまったという(元禄8年9月群馬郡白井村吾妻川秣渡船願群馬県史資料編13近世5中毛地域1〔以後県史中毛と略す〕334号)。
  - (6) 五十嵐富夫「杓ヶ橋関所の研究」『群馬文化』25号・3巻1号 1959。
  - (7) 註(4)と同じ。
  - (8) 元禄13年12月 群馬郡白井村明細帳(県史中毛 47号)に「自分渡船」、また天明5年10月 群馬郡白井村渡船取調書上(県史中毛337号)に、「利根川通自分渡船」とある。
  - (9) 註(8)初めの史料と同じ。
  - (10) 註(8)後の史料と同じ。
  - (11) 註(4)と同じ。
  - (12) 白井は、現子持村全域とほぼ重なる範囲として使用するが、特に集落を考える場合においては、現大字白井の中でも、北遠構・東遠構によって、城域として囲い込まれた範囲を想定している。また、特に狭義な使用として、通称「白井宿」と言われる沼田道沿道に発達した南北に長い町割を「白井」として区別して使用する。
  - (13) 註(8)初めの史料と同じ。
  - (14) 「梅花无尽蔵」万里集九(群馬県史資料編7中世2〔以後県史中世と略す〕1761号)には、長享2年(1488)「路をまげて吾妻河を渡る。危き橋有り。舟を編んで橋と為す。目という。白井城を歴観す」(読み下し文)とあり、また「北国紀行」堯恵(県史中世1782号)も、文明18年(1486)三国峠から白井を訪れ、棧路を経て草津へ向かったとあり、各々吾妻道—白井—(旧)沼田道の経路を紹介している。
  - (15) 武田氏の白井城攻略は、永禄10年であることが近年柴辻俊六氏によって明らかにされた(柴辻俊六「武田信玄の関東経略と西上野支配」『戦国期東国社会論』所収)。なお、筆者もこれを受けて、長尾憲景の白井城争奪を中心に論じたことがあるので参照願いたい(拙稿「武田氏の白井城攻略と長尾憲景の動向」『ぐんま史料研究』第7号 1996)。
  - (16) 「双林寺伝記」(県史中世2087号)所収「御影之記」。
  - (17) 現赤城村大字見立字二城に所在した城。利根川東岸の上位段丘面に在り、白井城と非常に近い。天正期には利根川東岸の拠点として争奪がなされた(筆者前掲論文参照)。
  - (18) 真田昌幸が不動山城を攻略した折、利根川東岸に拠っていた須田新左衛門尉などの北条方諸将は、川西に退き真田軍に道を譲った(天正9年7月10日付け 須田新左衛門尉宛 真田昌幸朱印状写(県史中世3071号)。同日付け 石田主計佐ほか10名宛 真田昌幸朱印状写(県史中世3072号))。当時川西(白井城とその支配地域)は、武田方にあったことから、杓氏が川西へ後退することは考え難い。この点で「加沢記」の記事には、事実認定の混乱がある。
  - (19) 現北橋村大字分郷八崎字城に所在した長尾氏の居城。天正6年頃から同10年にかけて、白井長尾氏の本拠であった(筆者前掲論文参照)。
  - (20) 白井字中町 金井建三郎家前に所在。嘉永2年(1849)建立。「日光江戸道 㚇ちご・くさつ道 ぬまた道」と彫られる。
  - (21) 白井字松原 四本辻に所在。嘉永3年(1850)建立。「右 まいバ志 おほご道 右 ぬまた 双林寺道 左 㚇ちご あがつま道」と彫られる。
  - (22) 正保2年(1645)の廃止以降、元禄8年(1695)再度渡船許可を願い出たけれども(元禄8年9月 群馬郡白井村吾妻川秣渡船願〔県史中毛 334号〕)、元禄13年(1700)の「群馬郡白井村明細帳」(県史中毛47号)に記載されていないことから許可されなかったことが判り、明治元年(1868)の「渋川村白井村落合渡船往来願」(渋川市誌第5巻歴史資料編 537号)まで復活されなかった。
  - (23) 註(22)の史料と同じ。
  - (24) 明治2年12月 群馬郡渋川・白井村吾妻川渡船許可につき取替議定(県史中毛 346号)。
  - (25) 渋川宿は三国街道の宿駅として、同市内梅木谷戸から集落移動して慶長18年(1613)に町割が完成したという(渋川市誌第2通史編上 573頁)。つまり、落合の渡しに通船しても、渋川側も早い段階から、三国街道に係わる整備に着手しており、白井との交通の関連性は希薄だった。
  - (26) 註(14)の万里集九紀行文と同じ。
  - (27) 註(16)参照。
  - (28) 山崎 一「群馬県古城址の研究 下巻」82頁。
  - (29) 子持村誌補遺編「伝承と路傍の文化」9頁。
  - (30) 註(16)と同じ。
  - (31) 吾妻川の渡しで、白井城内に位置するものに、真木島の渡しがある(第1図)。この渡しの経路は、白井城の本丸と二ノ丸間の堀切を降って、吾妻川河岸に至り、中州の真木島から対岸阿久津へ渡るものとするのが、「赤城行」(「高山彦九郎日記第1巻」千々和寛 萩原 進)記載の経路と現況地形に合致すると思われる。ただし、北郭と三ノ丸の間の堀を伝わったという伝承もあるらしく(註(29)同書15頁)、経路には多少混乱がある。戦国期に存在していた場合、城に強く帰属する施設と位置づけられるが、城の縄張りとして可能なものか疑問がある。いずれにしても、本稿で扱う街道と関連した渡しではない。
  - (32) 吾妻川は、非常に急流であつたらしく、明治に入って再開された落合の渡船は、「放ちごし」という方法を使ったという。「放ちごし」とは、「兩岸に綱を張り渡して、それを手繰って運行する」(子持村誌上巻1079頁)方法で、船が急流に流されないように考えられた方法らしい。
  - (33) 落合の渡し及び高崎道が、短期間しか存在していなかったことを肯定する事例を、地名の中に認めることもできる。白井では、字名に往時の交通状況をとどめたものが多く、大字白井では、字渡屋が渡屋の渡し、字南中道が吾妻道、大字吹屋でも、字大道が吾妻道の存在を伝えている。また、明治6年段階では、イクラミチ(伊熊道)という字名が確認でき(地券発行にかかる地引絵図群馬郡吹屋村所載〔県立文書館所蔵〕)、旧沼田道と対応する位置にある。このような見地から、「白井」の南町以南において、渡しや道に関係する地名が見られないのは示唆的である。
  - (34) 寛永11年9月 西町畑方寄帳。同 東町畑方寄帳。同 下之畑方寄帳(子持村誌上巻 638頁に紹介記事あり)。
  - (35) 註(29)同書15頁。
  - (36) 註(26)と同じ。
  - (37) 文明9年(1477)越後上杉定昌は、長尾景春蜂起を受けて白井城に張陣し(「松陰私語」群馬県史資料編5)以後支配下とした。白井長尾氏の白井城復帰は、永正2年(1505)と言われる(落合厚志「長尾右衛門尉景英について」『戦国史研究』第30号 1995)。



## 溝状土坑について

井上昌美

### 1 はじめに

白井遺跡群では、溝状もしくは細長い長方形の土坑が数多く検出されており、白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡でも北中道6区を除くすべての調査区で検出されている。土坑の長さはまちまちであるが、幅は概ね0.5～0.8m程度で、断面形はU字状を呈する。

このような土坑について、遺跡周辺に在住の方々聞き取り調査を行ったところ、近年に至るまで畑の境界に沿って土坑を掘り、冬期に芋類やごぼうなどの根菜類を貯蔵していた例があることが確認できた。土坑の底部に藁や籾殻を敷き、作物を入れた後30～40cmほど土を埋め、場合によっては藁で簡単な覆い屋根を作っていたとのことである。

このことから溝状や細長い長方形の土坑の下限は、現代まで下ることが明かであるが、上限についてはわかっていない。ただ出土遺物は明治時代以降のものは少なく、江戸時代後期が主であるため、この時期の土坑があることは確実と思われる。

そこで、これらの土坑を考える手掛かりとして形状や分布を確認することとする。

### 2 土坑の分類

平面形態は似たような溝状や細長い長方形であるが、掘り込みの深さや埋土の状況に差異が見られる。白井遺跡群周辺では表土下に、榛名山二ツ岳の6世紀中葉の噴火に伴う軽石層（FP）が平均して約80cm堆積しており、土坑の底面がこの軽石層の途中で止まっているか軽石層を掘り抜いているかで、大別することができる。また埋土に注目すると、FPを主体としたりFPを多量に含む層のみで埋まるものと、FPをあまり含まない黒～黒褐色土の層が最下層にあり、その上位はFPを多量に含む層で埋まるものに大きく分けることができる。

この遺跡における土坑についてはA～Fの6種類に大別したが（凡例参照）、このうち今回扱う溝状土

坑等はB類として以下のような4種類に分類した。

B1……掘り込みがFP軽石層中で、埋土の最下層にFPをあまり含まない黒色～黒褐色土があるもの。

B2……掘り込みがFP軽石層中で、埋土はFP主体で最下層に黒色～黒褐色土がないもの。

B3……掘り込みがFP軽石層下位におよび、埋土の最下層にFPをあまり含まない黒色～黒褐色土があるもの。

B4……掘り込みがFP軽石層下位におよび、埋土はFP主体で最下層に黒色～黒褐色土がないもの。

### 3 土坑の分布

土坑と地割りととの関係や土坑の種類による分布傾向は以下のとおりである。なお地割りととの比較は耕地図（群馬県群馬郡長尾村全図）を用いた。

丸岩遺跡1区では、地割りに沿うように延びる土坑が多い。ただし北部の境界のない部分にも土坑は存在する。南東部には掘り込みがFP下面に達する土坑が多い。2区・3区でも地割りと合うものが多い。3区北西部に集まるB3・B4土坑は、同じ3区の浅い土坑群と地番が異なる。

北中道遺跡1区では基盤の目のように土坑が存在するが、地割りととの関係は認められない。これらの土坑は掘り込みがFP中に留まる浅いものがほとんどで、近世の遺物が出土する。2区では地割りに沿う土坑は少なく、1号溝やそれに平行する一群も耕地図には境界がない。3区で地割りに沿うように土坑が存在するのは、道路遺構周辺と畠の畝間の走向が約90°変化する境界の部分である。また逆に畝間の検出できた範囲の南側には地割りはないが、南端の畝間のさらに南側に土坑列が存在する例があり、何らかの境があったことを窺わせる。3区は近世の遺物が多量に出土したり、他の区に比較して深い土坑が多いなどの特徴がある。4区・5区は地割りに沿う土坑と、沿わない土坑が同程度ずつ存在する。

両遺跡とも、近世の遺物を出土する土坑が多いが、これらの土坑に関して形態（B1～B4）や地割りととの関係に特別な傾向は認められず、近世遺物が出土す

る土坑が特定の箇所に集中するようなこともない。

#### 4 土坑の性格

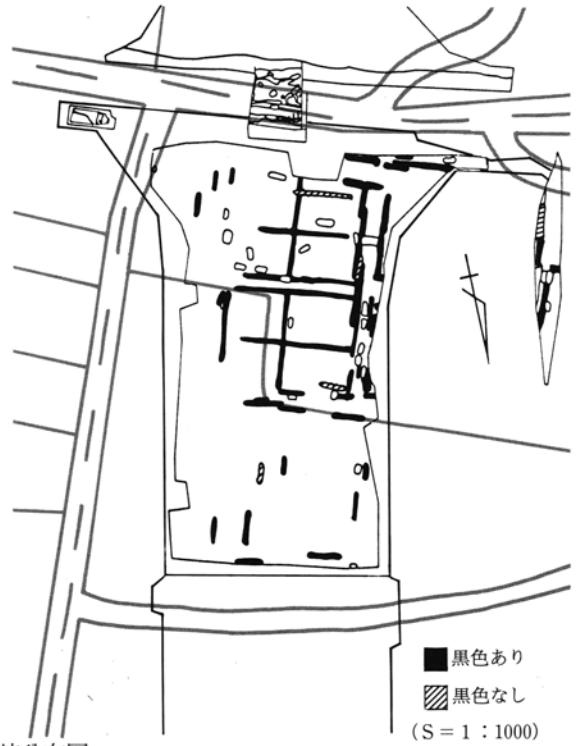
溝状や細長い長方形の土坑は、地割りに沿うものが多く認められた。耕地図の地割りに沿わない土坑も、近接する土坑と直行または平行に位置しており、

断続的に長く直線状に並ぶケースが多い。このことから、これらの土坑も土地利用の境界に形成されていると考えられ、そのほとんどは近世から現代にかけて連綿と作られた作物貯蔵用の土坑と考えられる。また、形態別の分布からは一部を除いては規則性は見いだせなかった。

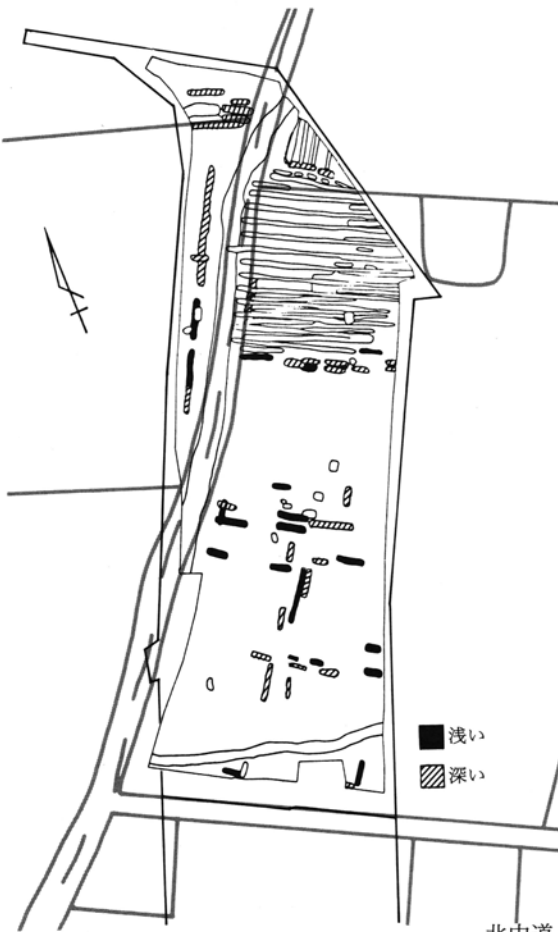




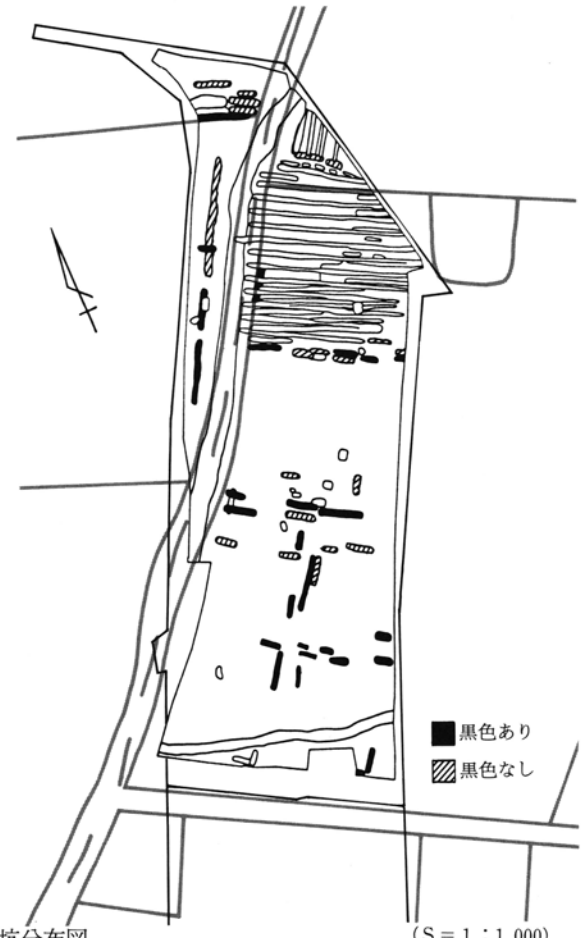
北中道1区土坑分布図



(S = 1 : 1000)



北中道3区土坑分布図



(S = 1 : 1,000)

## 白井遺跡群の人骨・馬骨

群馬県立大間々高等学校 宮崎重雄

白井遺跡群は、群馬県北群馬郡子持村大字白井にあり、一般国道17号鯉沢バイパス建設に伴い、平成2年度から開始された発掘調査により出土した中世～近世の人骨のうち、ここに報告するのは丸岩遺跡・北中道遺跡・南中道遺跡からのものである。馬骨も1点含まれる。

南中道遺跡の人骨については、発掘現場における記録をまとめたものである。

### 丸岩遺跡

#### 1区62号土坑

土坑は卵形である。頭蓋はなく、左寛骨、左大腿骨、左右脛骨、足根骨が残存する。下腿骨が膝関節で強く西側に折れ曲がり、西向きの横臥屈葬姿勢と思われるが、それにしては土坑が小さすぎるのが気になる。

大腿骨最大長(1)は420mmあり、大腿骨頭垂直径(18)は43.6mmである。藤井(1960)の式によって求められる推定身長は男性と仮定した場合158.6cmである。

#### 1区117号土坑

脳頭蓋片、脛骨または大腿骨片など8片が残存するが、保存状態が悪く詳細は不明である。

#### 1区217号土坑(表一)

土坑は楕円形で、体軸はほぼ南北方向を向いている。仰臥屈葬姿勢で、顔を右に向け、右上肢を強く折り曲げ、左手は腰まで伸ばしている。

右上腕骨最大長(1)は278mmあり、中央最大径(5)16.8mm、中央最小径(6)14.9mmである。左尺骨最大長(1)は219mm前後であり、大腿骨頸垂直径(15)27.6mm、同矢状径(16)19.8mmである。(右)脛骨は栄養孔位最大径(8a)31.3mm、同横径(9a)は22.8mm、脛骨中央最大矢状径(8)31.3mm、同横径(9)18.2mmである。栄養孔位における脛骨の扁平度は0.657で中脛に分類される。

藤井(1960)の式による上腕骨最大長から求められる推定身長は男性と仮定した場合150.8cm、女性と仮定した場合147.5cmである。

矢状縫合は内板・外板とも癒合がみられない。右ラムダ縫合も内板・外板とも癒合はみられない。ただし右上顎第2大臼歯では4つの咬頭に象牙質の点状の露出があり、壮年期には達しているようである。

推定身長の小さいわりに歯が大きいのが特徴的である。

右上顎犬歯の頬側がごくわずかに齶蝕されていて、右上顎第2小臼歯にも頬側にC2の、左下顎第2小臼歯にも頬側にC1の齶蝕があり、さらに右下顎第2大臼歯にはC3の齶蝕があって、孔の大きさは5.0×4.9×深さ8.4mmで、歯槽縁は陥凹している。左第1大臼歯は欠損していて歯槽が閉鎖している。おそらく齶蝕による欠損であろう。右上顎第1大臼歯は槽間中隔が吸収されている。

#### 1区土坑(番号不明)(表一2)

土坑の形状は不明。左岩様部など頭蓋片が数十片と歯が7本残存する。

ほとんどの歯に齶蝕があり、歯石の付着もある。

左上顎第3大臼歯は咬合面のエナメル質がほぼ全面咬耗されいることや切歯の咬耗度から壮年期の個体と思われる。乳様突起幅が11.0mmと小さく、下顎の犬歯も近遠心径が5.6mmと小さく、女性の可能性を示している。

前歯部の咬耗のようすは鉗子咬合の可能性を示している。

#### 2区30号土坑

土坑は卵形である。頭蓋・上肢骨・下肢骨・寛骨片などが残存する。体軸は北西―南東方向に走り、顔面を南西に向けた横臥屈葬姿勢である。

左大腿骨の骨体中央横径は23.2mm、同矢状径は21.0mmである。左脛骨の栄養孔位の横径は18.2mm、同位の最大径は26.4mmで、脛指数68.9の中脛である。座高は約72cmで、この値から130cm代の小柄な身長が推定される。歯の咬耗度から青年期後半から壮年期の前半の個体と思われる。

齶歯は少なくとも8本あり、歯石の付着のみられる歯も多い。大白歯には歯冠部が齶蝕されて歯根が1本だけ残ったものがあり、検出されていない上顎右第2・第3大白歯、下顎第2・第3大白歯のうちのいくつかは齶蝕によって欠損した可能性がある。

前歯部の咬耗状態をみると鉗子咬合のようである。

## 2区34号土坑

アワビの貝殻片のみが出土し、人骨の痕跡はない。

## 3区303号土坑

最大保存長62.6mmの大腿骨片数十片であるが、詳細は不明である。

## 3区311号土坑

最大保存長70.0mmの脛骨片数十片であるが、詳細は不明である。

## 3区土坑（番号不明）

脛骨または大腿骨片と思われるが、詳細は不明である。

## 北中道遺跡

### 1区89号土坑

墓壇は楕円形で、北端で上顎中切歯が検出され、南端には大腿骨骨頭部など大腿骨片が出土する。青年期以上の年齢に達している。

### 2区51号土坑

卵形の墓壇で、頭蓋・上腕骨・大腿骨・脛骨などが確認される。埋葬姿勢は横臥屈葬のようである。

上項線、下項線、外後頭稜の発達が比較的よい。

下顎第1大白歯では左右の歯とも近心舌側咬頭以外に帯状から面状の象牙質が露出し、壮年期～熟年期が推定される。

右下顎中切歯、側切歯が欠損していて、歯槽縁が凹湾している。左中切歯も欠損(?)し、側切歯も検出されない。左第1大白歯、第2大白歯の歯槽縁は大分陥凹している。齶歯は少なくとも1本はある。

### 3区畠跡

ウマ

出土したのは右橈骨である。右橈骨最大長316.0

mm、中央幅36.4mm、中央矢状径26.2mmを計測する。

この橈骨最大長を林田・山内(1957)の体高推定式の式にあてはめると、125.5cmと算出され、日本の小型在来馬と中型在来馬の中間的な体高の個体ということになる。

## 南中道遺跡

### 5区354号土坑墓

体軸は南北方向で、顔面は西を向き、膝を強く屈曲して膝を抱えるような横臥屈葬姿勢である。

脳頭蓋最大長(1)170mm、大腿骨最大長410mm、上顎犬歯近遠心径8.0mm、下顎犬歯近遠心径7.1mm、上顎第1大白歯近遠心径10.8mm、右下顎第1大白歯12.0mmである。

藤井(1960)の方式によって大腿骨最大長から求められる身長は153.4cmである。

座骨切痕の角度が広く、女性であることを示している。

下顎第1大白歯は各咬頭に点状の象牙質が露出し、第2大白歯は1咬頭に点状の象牙質が露出し、第3大白歯はエナメル質のみ咬耗している。上顎白歯の咬耗はいくぶん下顎白歯より弱い。青年期後半から壮年期前半であろう。

右上顎第2大白歯遠心歯頸部にC2齶蝕あり、歯石の付着が顕著である。

### 5区355号土坑墓

354号土坑墓のものと基本的に同じ姿勢で同じ方向を向いて埋存している。脳頭蓋最大長は181.0mm、大腿骨最大長は420.6mm、脛骨中央横径21.9mm、同矢状径29.5mmである。上顎犬歯・下顎犬歯・上顎第1大白歯・下顎第1大白歯それぞれの近遠心径は7.9mm・6.6mm・9.8mm・11.0mmである。

大腿骨最大長から推定される身長(藤井、1960)は男性と仮定した場合158.6cmである。

歯の咬耗度は354号土坑墓のものよりいくらか進んでいて、上顎・下顎とも第1大白歯は各咬頭に点状の象牙質が露出し、第2大白歯も同様に、第3大白歯はエナメル質だけが面状に咬耗されている。壮

年期の個体であろう。

齶歯はなく、歯石は中程度に付着している。

### 5区356号土坑墓

楕円形の土坑墓で2個体が埋存している。埋存姿勢は不明である。そのうちの一つは脳頭蓋の最大長が190.0mm、脛骨中央横径20.4mm、同矢状径29.3mmである。男性の可能性はある。どの個体のものかは不明であるが、上顎犬歯・下顎犬歯・下顎第1大臼歯それぞれの近遠心径は、8.2mm・7.0mm・9.8mm・11.2mmである。

観察された限り齶歯はない。

### 5区357号土坑墓

体軸は南北方向で、顔面は斜め上南を向き、膝を強く屈曲して膝を抱えるような仰臥屈葬姿勢である。

脳頭蓋最大長177.5mm、大腿骨最大長387.0mm、脛骨中央横径18.0mm、同矢状径28.5mm、下顎犬歯近遠心径6.6mm、上顎第1大臼歯近遠心径9.5mm、右上顎第2大臼歯近遠心径9.8mmである。

大腿骨最大長から推定される身長（藤井、1960）は、女性と仮定した場合148.0cmである。歯の残存状況は下記のように、●印は歯を欠損し、歯槽閉鎖していることを意味する。ただし、第3大臼歯については未萌出の可能性もある。

● 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 ●
●●● 5 4 ???	??? 4 5 ●●●

ほとんどの歯が歯頸部を齶蝕されていて、右上顎第1大臼歯の歯根部は上顎洞へ開孔している。

歯の咬耗はそれほど進んでなく、第2大臼歯は左右ともエナメル質のみが咬耗されている。青年期の個体であろう。

### 5区374号土坑墓

楕円形の土坑墓である。仰臥屈葬姿勢で、体軸は南北方向を向き、頭部を北にし、顔面を東に向け、下肢を強く屈曲させている。

脳頭蓋最大長は156.0mm、大腿骨最大長399.0mm、脛骨中央横径21.0mm、同矢状径26.4mmである。

大腿骨最大長から推定される身長（藤井、1960）

は、女性と仮定した場合150.8cmである。

下顎には歯がなく、上顎第1大臼歯の近遠心径は10.5mmである。この歯は咬合面に象牙質が面状から帯状に露出していることで、壮年期～熟年期が想定される。

参考・引用文献

- 馬場悠男 1981 人骨計測法「江藤盛治編・人類学講座一別館」, pp359, 雄山閣, 東京.
- Brothell. D. R., 1981 *Digging up bones*. pp208, British Museum of Natural History, London.
- 藤井 明 1960 四肢長骨の長さとの関係に就いて, 順天堂大学体育学部紀要, 3, 49-60
- 藤田恒太郎 1959 歯の計測基準について, 人類学雑誌, 61, 27-32
- 林田重幸・山内忠平 1957 馬における骨長より体高の推定法, 鹿児島大学農学部学術報告, 6, 146-156
- Hillson. S., 1996 *Dental Anthropology*. pp373, Cambridge Univ. Press, Cambridge.
- 石守 晃 1996 群馬県における出土人歯の咬耗状況について—室町・江戸時代人の永久歯を中心として—, 群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要, 13, 127-156
- 上條雍彦 1992 「日本人永久歯解剖学」, pp272, アナトーム社, 東京
- 片山一道 1990 「古人骨は語る」, pp210, 同朋社, 京都
- Kelley. M.A. & Larsen. C. S., 1991 *Advances in Dental Anthropology*. pp389, Wiley-Liss, New York.
- 木村邦彦 1979 発育—出生から成人まで—「木村邦彦編・人類学講座8—成長」, 61-180, 雄山閣, 東京.
- 宮崎重雄 1993 白井遺跡群の人骨「白井遺跡群—中世編—(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡)」, 242-251, 建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団.
- 森本岩太郎 1981 日本古人骨の形態学的変異—扁平脛骨と蹲踞面—「小丘 保編・人類学講座—日本人 I」, 157-188, 雄山閣, 東京.
- Page. R.C. & Schroeder. H.E., 1982 *Periodontitis in Man and Other Animals*. pp330, Karger, Basel.

表一1 丸岩1区217号土坑  
切歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯間長	舌側面窩の分類	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎 左	9.7	7.5	10.8	2-3型	なし	少量	切縁帯状象牙質露出

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎 右	8.6	8.6	9.3	頬側わずか齲蝕	なし	尖頭部に面状象牙質露出

上顎小白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	9.1	7.1	6.5	頬側C.2	なし	面状象牙質露出

上顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	カラベリ結節	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	9.2	10.2	6.0	なし	なし	なし	エナメル面に咬耗
右	9.9	10.6	6.2	なし	なし	なし	4咬頭に点状象牙質露出

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	10.6	9.8	?	なし	なし	エナメル面に咬耗
右	10.6	不可	?	C 3径5.0×4.9×8.4	なし	点状象牙質露出
左	11.0	11.0	?	なし	なし	面状象牙質露出

表一2 丸岩1区土坑 (番号不明)  
切歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	全長	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎 右	9.5	7.7+	11.0	22.6	頬側歯頸部	頬側歯頸部	切縁線状象牙質露出
上顎 右	6.0+	6.9	9.0		頬側歯頸部?	頬側歯頸部	
下顎 左	5.7	6.1	8.4	19.2	頬側歯頸部	少量	切縁帯状象牙質露出
下顎 左	5.6	6.5	8.9		頬側歯頸部		切縁線-帯状象牙質露出

表一2 続き  
犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
下顎 左or右	5.6	7.8	9.7	なし	舌側	尖頭部象牙質点状露出

下顎小白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌側咬頭の位置	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
左	7.1	8.6	8.1	21.3	頬側歯頸部	なし	

上顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	遠心舌側咬頭の退化	カラベリ結節	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
左	8.9	11.0	4.7	20.5	なし	頬側歯頸部 C.1	近心側少量	エナメル全面咬耗

表一3 北中道2区51号土坑  
犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎 右	7.7	9.1	8.6	頬側歯頸部?	なし	尖頭部に面状象牙質露出

下顎小白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌側咬頭的位置	舌側溝・舌側溝	Blackの分類	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	7.5	9.8	6.3			Y	なし	なし	頬側咬頭帯状象牙質露出
左	7.4	9.1	6.0	近心	あり		頬側歯頸部?	なし	頬側咬頭帯状象牙質露出
左	7.4	9.7	6.3			Y	なし	近心舌側面	頬側咬頭帯状象牙質露出

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎 右	11.9	12.0	6.8	舌側歯頸部?	なし	近心舌側咬頭以外帯-面状象牙質露出
下顎 左	11.8	11.8	6.6	遠心歯頸部?	なし	遠心頬側3咬頭帯-面状、近心舌側咬頭点状に象牙質露出
下顎 左	6.0+	11.2	6.7	遠心半齲蝕	なし	近心舌側咬頭面状象牙質露出

表一 4 丸岩 2 区 30 号土坑人歯記録  
切歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齶 蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎	右 2	6.8	6.6+	なし	なし	切線線状エナメル咬耗
	右 1	8.8	7.0	なし	あり	切線線状象牙質露出
左	1	8.6	7.1	なし	あり	切線線状象牙質露出
	2	7.0	6.9	頰側歯頸部 C 2	なし	切線線状エナメル咬耗
右	2	6.0	5.9	なし	あり	切線線状象牙質露出
	1	5.5	5.7	なし	あり	切線線状象牙質露出
左	1	5.5	5.5	なし	あり	切線線状象牙質露出
	2	6.3	6.2	なし	あり	切線線状象牙質露出

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齶 蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎	右	7.5	7.7	なし	あり	尖頭部に点状象牙質露出
	左	7.3	6.9+	唇側 C 1 ?	あり	尖頭部に点状象牙質露出
下顎	右	6.6	6.6	なし	あり	尖頭部に点状象牙質露出
	左	6.4	6.7	唇側 C 1 ?	あり	尖頭部に点状象牙質露出

上顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齶 蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度	
右	2	6.6	9.6	6.8	なし	なし	
	1	7.4	9.9	8.5	頰側歯頸部 ?	あり	舌側咬頭点状象牙質露出
左	1	7.5	9.5	7.8	なし	あり	エナメルのみ面状咬耗
	2	6.6	9.2	6.7	遠心歯頸部 C 2	あり	頰側・舌側咬頭点状象牙質露出

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌側溝・舌面溝	Black の分類	齶 蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	2	7.2	8.5	7.6		なし	あり	エナメルのみ咬耗
	1	7.1	7.6	7.9		頰側歯頸部	あり	頰側咬頭点状象牙質露出
左	1	7.3	7.7	6.9	あり	なし	あり	舌側咬頭象牙質露出
	2	7.3	8.0	7.2	Y	舌側歯頸部 ?	あり	エナメルのみ咬耗

上顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	カラベリ結節	外形の諸型	齶 蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	1	9.9	11.6	なし	A	なし	あり	舌側 2 咬頭点状象牙質露出
	1	9.9	11.2	なし	A	近心側 C 3	あり	咬頭点状象牙質露出
左	2	9.5	11.2	なし		なし	あり	各咬頭点・帯状に象牙質露出
	3	8.8	11.0	なし		頰側歯頸部 C 2	少量	帯状エナメル咬耗 エナメル僅かに咬耗

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齶 蝕	歯石	咬耗部位・咬耗度	
右	3	10.9	10.1	6.6	歯冠部齶蝕 C 3	なし	エナメル質点状咬耗
	2	10.6	10.0	6.7	なし	少量	近心舌側咬頭点状象牙質露出
左	1	10.9	11.0	6.2	舌側歯頸部 C 3 (3.6×3.6)	なし	全咬頭点状象牙質露出
	1	11.1	10.5	6.7	遠心歯頸部 C 2	少量	全咬頭点状象牙質露出

以上の表の計測値の単位は mm

表一 5 白井遺跡群出土人骨計測値

計測法は馬場 (1981) による。

丸岩 1 区 217 号土坑

北中道 2 区 51 号土坑

計測部位	計測番号	計測値	計測部位	計測番号	計測値
オトガイ高	69	27.3	脳頭蓋最大幅	8	140.1
下顎体高 (オトガ)	69(1)	27.8	向耳幅	11	130.1
下顎体高 (M 2)	69(2)	25.2	外耳道幅	11(1)	106.3
下顎体厚	69(3)	13.0	ラディクラール幅	11 b	127.8
下顎体高 (M 2)	69 b	16.5	最大後頭幅	12	114.2
最小枝高	70(2)	40.2	乳突起間幅	13	107.2
大臼歯列長	80(3)	32.2	乳突起最大幅	13(1)	126.3
			乳突起幅	13 a	13.5
			後頭頭頂弦長	30(3)	80.2

単位: mm

単位: mm



## 仁居谷城の地下レーダー探査について

応用地質株式会社

### 1 調査の概要

調査の対象となった白井二位屋遺跡は、群馬県子持村大字白井地区に位置する古墳時代～平安時代、および中世～近世にかけての複合遺跡である。この地域は子持村の南東部に当たり、国道17号線バイパスが計画されている地域である。また、この地域の周辺には、白井城や白井宿があり、集落一帯には近世城下町の面影が残されている。今回の調査区域には仁居谷城跡といわれる区域であり、この仁居谷城を区画する堀跡の一部がバイパス建設に伴う発掘調査によって検出されている。

今回の地下レーダー探査による調査は、この仁居谷城を区画する堀跡を地表から非破壊的に探査し、未発掘区域における堀跡遺構の分布状況を推定するのに必要な基礎的資料を得ることを目的としたものである。

### 2 地下レーダー探査の方法

本調査において実施した地下レーダー探査とは、地表から地中にむけて電磁パルス波を放射し、その反射波を捉えることによって、地下浅部の地盤構造や、空洞、埋設物などの異物を非破壊的に探査する方法である。図-1に地下レーダー探査の測定概念図を示す。

一般に媒質内を伝播する電磁波は、媒質内での誘電率や導電率の異なる境界面において反射、屈折する。実際の地盤においては、地層境界面、締め固め状態の急変面などが反射面となる。地下に埋蔵されている遺跡の場合には、旧生活面、旧地表面などが地層境界面を形成しており、そこに見られる地層の凹凸や連続性が地下レーダー探査によって把握される。また、地中の空洞や埋設物はそれ自体が電磁波の反射体となるため、局所的な反射異常として捉えられる。

#### 2-1 地下レーダー装置

地下レーダー装置は、電磁波を放射・捕捉するた

めの送受信アンテナ、アンテナでの送受信を制御し、受信信号の増幅やフィルター処理などを行なうコントローラ、受信信号を可視記録として出力するグラフィックレコーダ、および、受信信号を磁気記録として収録するデータレコーダなどから構成されている。

図-2に地下レーダー装置の構成をブロックダイアグラムで示す。また、表-1に今回使用した地中レーダー装置の仕様を示す。

グラフィックレコーダによる記録方法は、図-3に示すように、あるしきい値（スレッシュホールドレベルと呼ぶ）を設定して、このしきい値を超える反射波形の振幅に対し放電記録し、濃淡記録として表示する方法である。

#### 2-2 測定方法

図-4に、送・受信アンテナを決められた測線に沿って移動させて測定するプロファイル測定の方法を示す。通常の探査はこのプロファイル測定によって行なわれる。

プロファイル測定は、送信アンテナと受信アンテナの間隔を一定に保ったまま、送・受信アンテナを一对にして測線上を一定速度で移動させ測定する方法である。この測定によって、測線下の地下構造が時間断面として、グラフィック記録上に得られる。この記録の横軸は測線上の距離、縦軸は反射面までの往復伝播時間であるが、伝播時間は深度に換算できるので、この記録から地下の構造を深度断面として把握することができる。

いま、図-5のように反射面までの深度をD、送・受信アンテナの間隔をX、地中の電磁波伝播速度をVとすると、往復伝播時間Tは次のように表わされる。

$$T = \frac{1}{V} \cdot \sqrt{X^2 + 4D^2}$$

$$\therefore D = \frac{1}{2} \cdot \sqrt{(T \cdot V)^2 - X^2}$$

ここで、Tは記録から読み取ることができ、Xは

既知であるから、Vが分かれば反射面までの深度Dが求められる。電磁波伝播速度は、以下に述べるワイドアングル測定によって求められる。

ワイドアングル測定は、図-5に示したように送信アンテナを一定位置に固定し、受信アンテナだけを一定速度で移動させて、反射面までの往復伝播時間の走時変化を測定する方法である。

このとき、往復伝播時間Tは、プロファイル測定の場合と同様に、次式で表される。

$$T = \frac{1}{V} \cdot \sqrt{X^2 + (2 \cdot D)^2}$$

ただし、ワイドアングル測定の場合、送・受信アンテナの間隔Xは変数となっている。

この式より、

$$T^2 = \frac{X^2}{V^2} + \frac{4D^2}{V^2}$$

となり、 $X^2 - T^2$ 平面上で $T^2$ と $X^2$ は直線関係となる。したがって、記録から読み取ったT、Xを $X^2 - T^2$ 平面上にプロットして、その直線の勾配mを求めれば、反射面までの地盤の電磁波伝播速度は、

$$V = \sqrt{\frac{1}{m}}$$

として求められる。

### 2-3 探査データの解析・整理

グラフィックレコーダで得られた記録は、横軸が水平距離、縦軸が往復反射時間となっているが、往復反射時間は深度に換算できるので、この記録は地盤構造の深度断面と見ることができる。

反射面からの反射波は3~4波を一組として、その連続性を見てゆき、反射面となっている地層境界の起伏や構造の変化を把握する。埋蔵物などの異物が地中に存在する場合には、このような連続した反射波はとぎれて、アーチ状の強い反射パターンが局部的に記録に表われる。

遺跡探査の場合には、このような反射記録に表われた反射波の連続性や、特異な反射パターンに着目し、地層の変化や異常地点の検出を行なう。このような探査記録の判読結果に基づき、反射面の起伏や

反射体の分布状況を断面図や平面図に整理して、遺跡の埋蔵状況を推定する。

### 3 地下レーダー探査の結果

白井南中道遺跡では仁居谷城の堀跡を追跡するために地下レーダー探査を実施した。既に発掘調査によって確認されている堀跡の位置から、堀の伸びる方向を推測し、その堀跡を横断するように地下レーダーの探査測線を設定した。以下では、地下レーダー探査による調査の結果について述べる。

#### 3-1 探査測線の配置

地下レーダー探査の測線の配置を図-6に示す。地下レーダー探査の測線は堀跡が続くと思われる方向をあらかじめ推測し、堀の位置が確認できるように配置した。

以下に各測線の測線長をまとめる。

1 測線61m、2 測線88m、3 測線122m、4 測線70m、5 測線68m、6 測線55m、7 測線72m、8 測線72m、9 測線99m、10 測線67m、11 測線54m、12 測線100m、13 測線51m、14 測線51m、15 測線52m、16 測線53m、17 測線52m、18 測線51m、19 測線52m、追加-1 測線81m、追加-2 測線93m、追加-3 測線101m、合計1,565m

#### 3-2 探査結果

各測線での地下レーダー探査によるプロファイル測定記録は図-7~図-29にまとめて示す。

本調査における電磁波伝播速度は、以前の測定により深度2.0m付近までの平均的な電磁波伝播速度が9.0cm/ns程度となっている。したがって、プロファイル測定記録の深度の計算には電磁波伝播速度9.0cm/nsを使って深度換算を行なった。

調査地域は子持村の南東部に位置し、この地域一帯には榛名山二ツ岳の噴火による軽石層が10~20cm程度の層厚で堆積しているが、仁居谷城の付近では平安時代の住居跡や仁居谷城の遺構などによって、軽石層は攪乱を受け、所によっては欠如している。特に、今回の探査の目的とした堀跡は、軽石層の上から掘られたものであり、その場所では軽石層が大

仁居谷城の地下レーダー探査について

きく欠如している。地下レーダー探査では、この軽石層が強く反応するため、軽石層が分布する範囲と欠如している部分は比較的明瞭に見分けることができる。

地下レーダー探査の結果から推定された遺構の分布状況を図-6に示す。この遺構分布状況によれば、仁居谷城の堀跡は調査地域の北寄りの位置を西から東へといくつかの屈曲を持ちながら続いているものと推定される。東側の段丘崖の手前でその堀跡は一旦途切れるが、再び段丘崖に取り付くような堀跡が東端部に認められる。

このほかの主な遺構としては、調査地の西側部分にはほぼ南北に連続する溝跡や平安時代の住居跡と思われる落ち込みが見られる。また、調査地のほぼ中央部には、軽石層が比較的広範囲にわたって欠如している部分や石と思われる反応がやや集中して見られる部分が認められる。掘り込み地業を伴う何らかの遺構が分布するものと考えられる。更に調査地の東側部分の堀跡の途切れ部の付近には2基の古墳が見られる。

表-1 地下レーダー探査装置仕様

名 所	仕 様	
地下レーダーシステム GEORADAR-1	コントローラー	レンジ：25、50、100、200、300、500、1000ns 帯域増幅器制御 スキャンコントロール：10～20pps モニタ用プリンター内蔵 電源：直流12v
	グラフィックレコーダ	記録速度：400～25ms/scan 有効記録幅：204mm 放電方式プリンター
	データレコーダ	7chカセットテープ用 アナログ方式 記録速度：1.2～38cm/sec
	アンテナ	中心周波数：350MHz 長広域進行波ダイポールアンテナ (類似多点装荷方式)

応用地質株式会社製

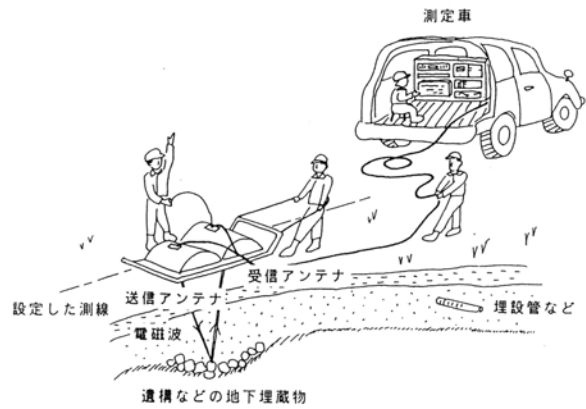


図-1 地下レーダー測定方法

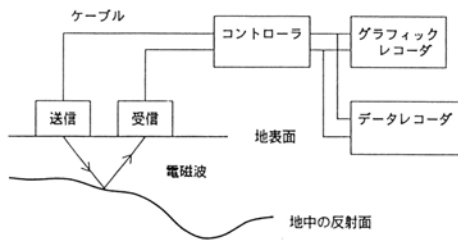


図-2 地下レーダーシステム

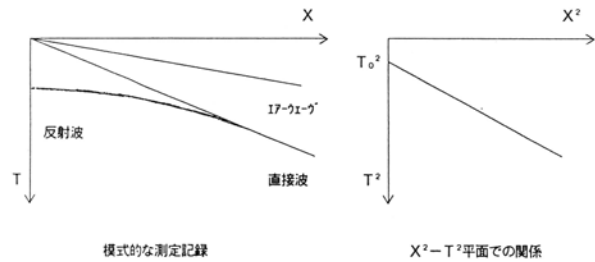


図-5 ワイドアングル測定

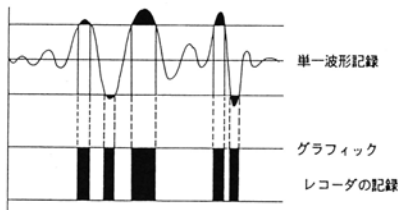
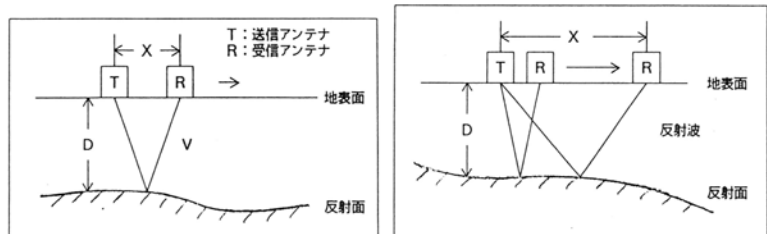


図-3 グラフィックレコーダによる記録方式



測定方法

図-4 プロファイル測定

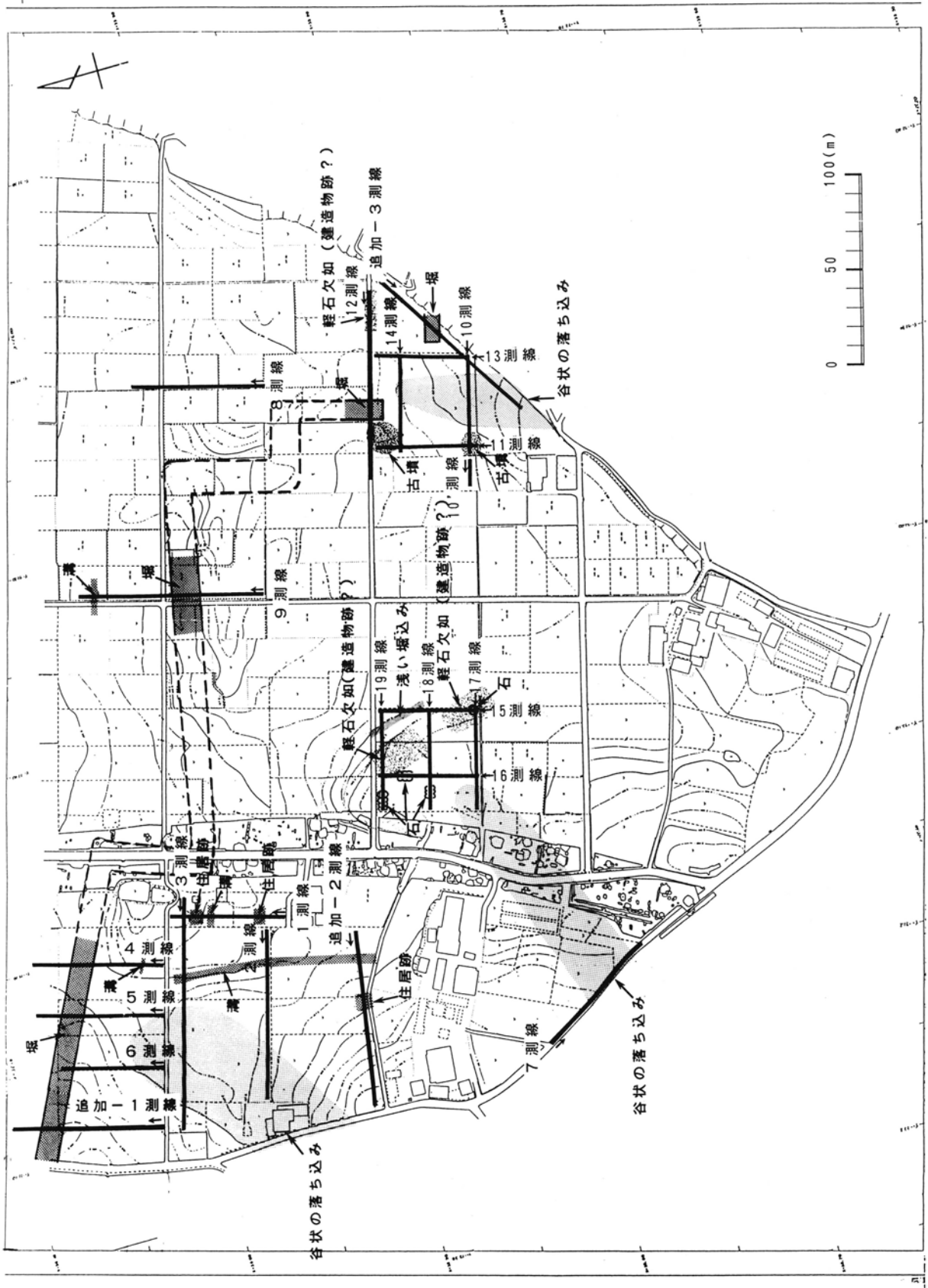
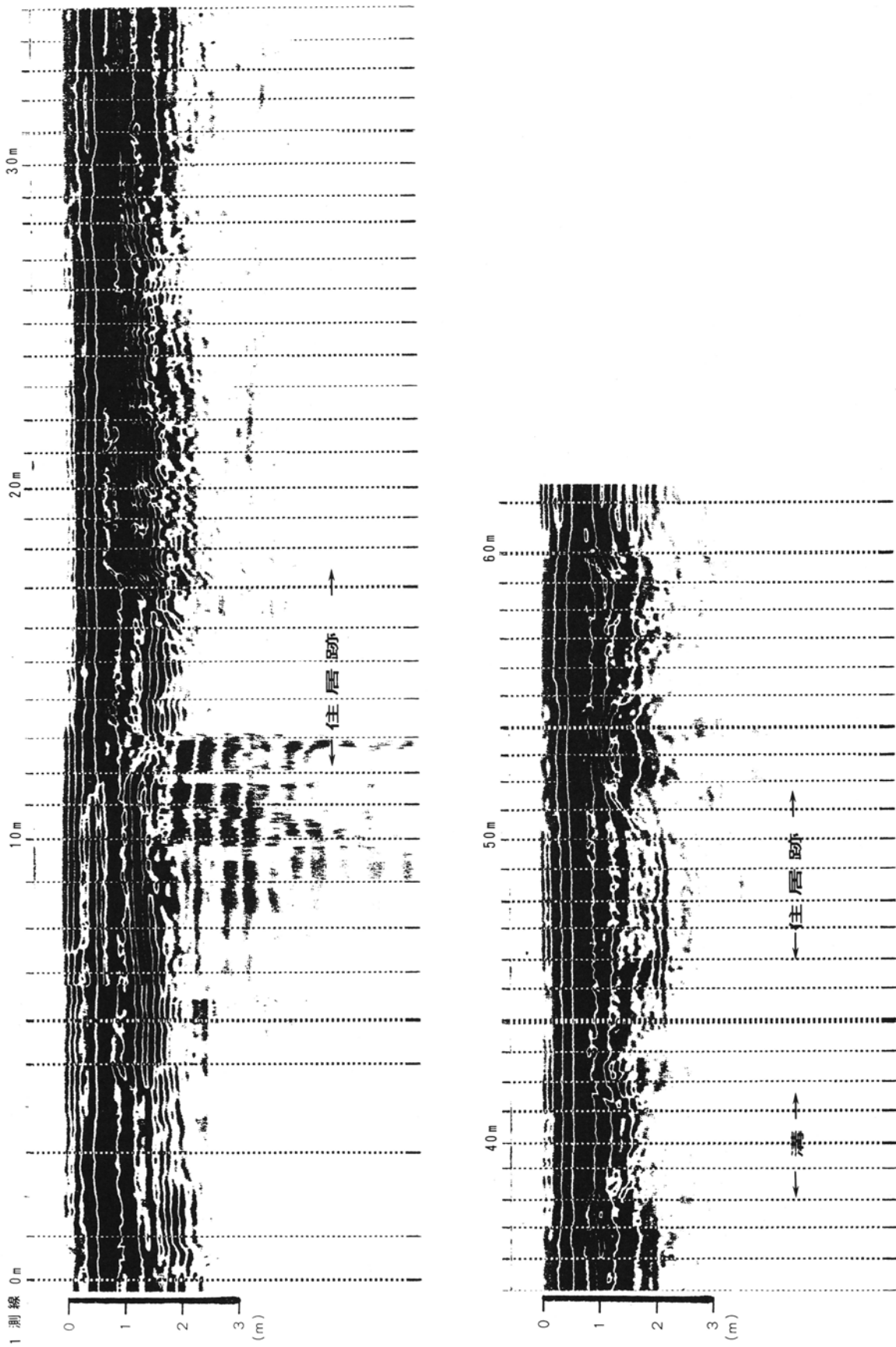


図-6 遺構分布推定図



図一七 地下レーダー探査、プロファイル測定記録（1測線）

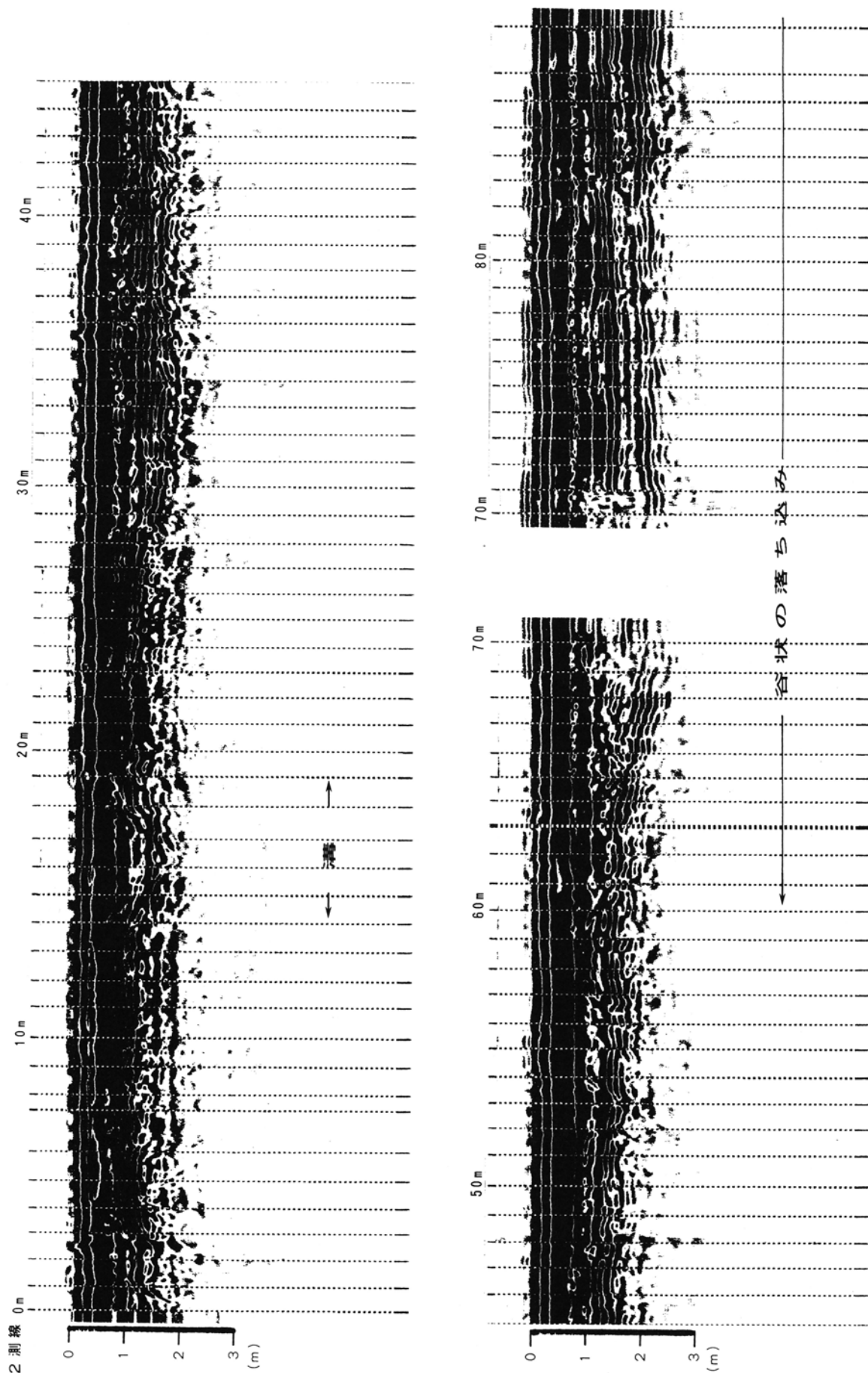
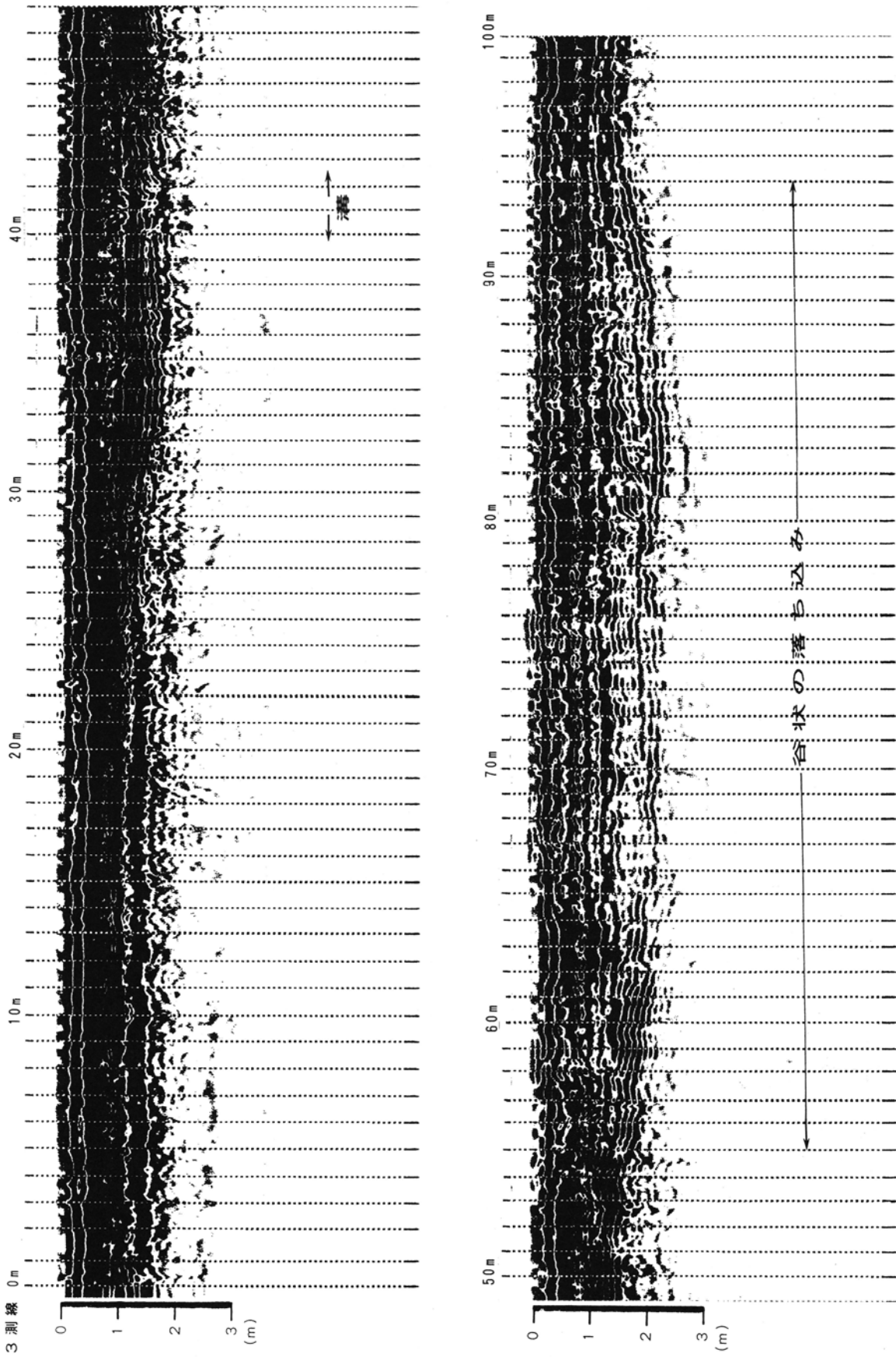


図-8 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (2 測線)



図一9 (1) 地下レーダー探査、プロフィール測定記録 (3 測線)

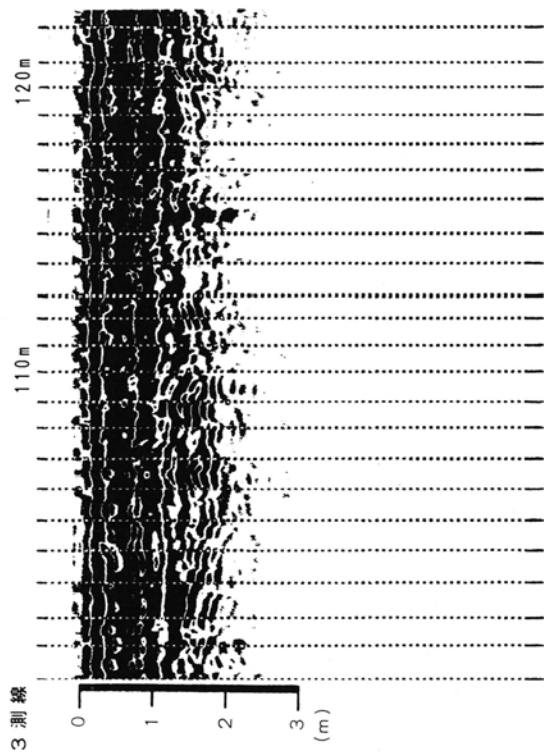


図-9 (2) 地下レーダー探査、プロフィール測定記録 (3 測線)



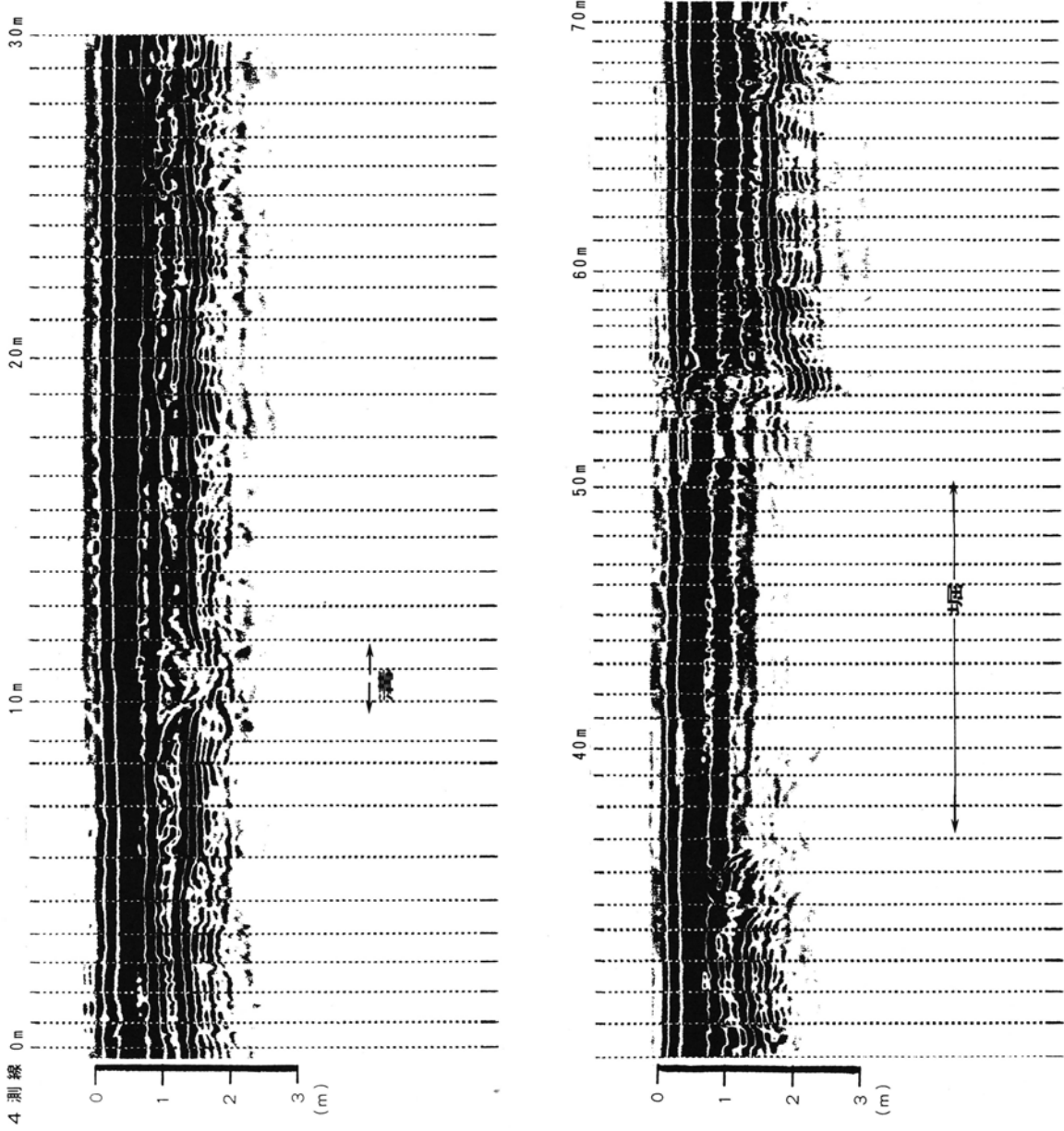


図-10 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (4 測線)

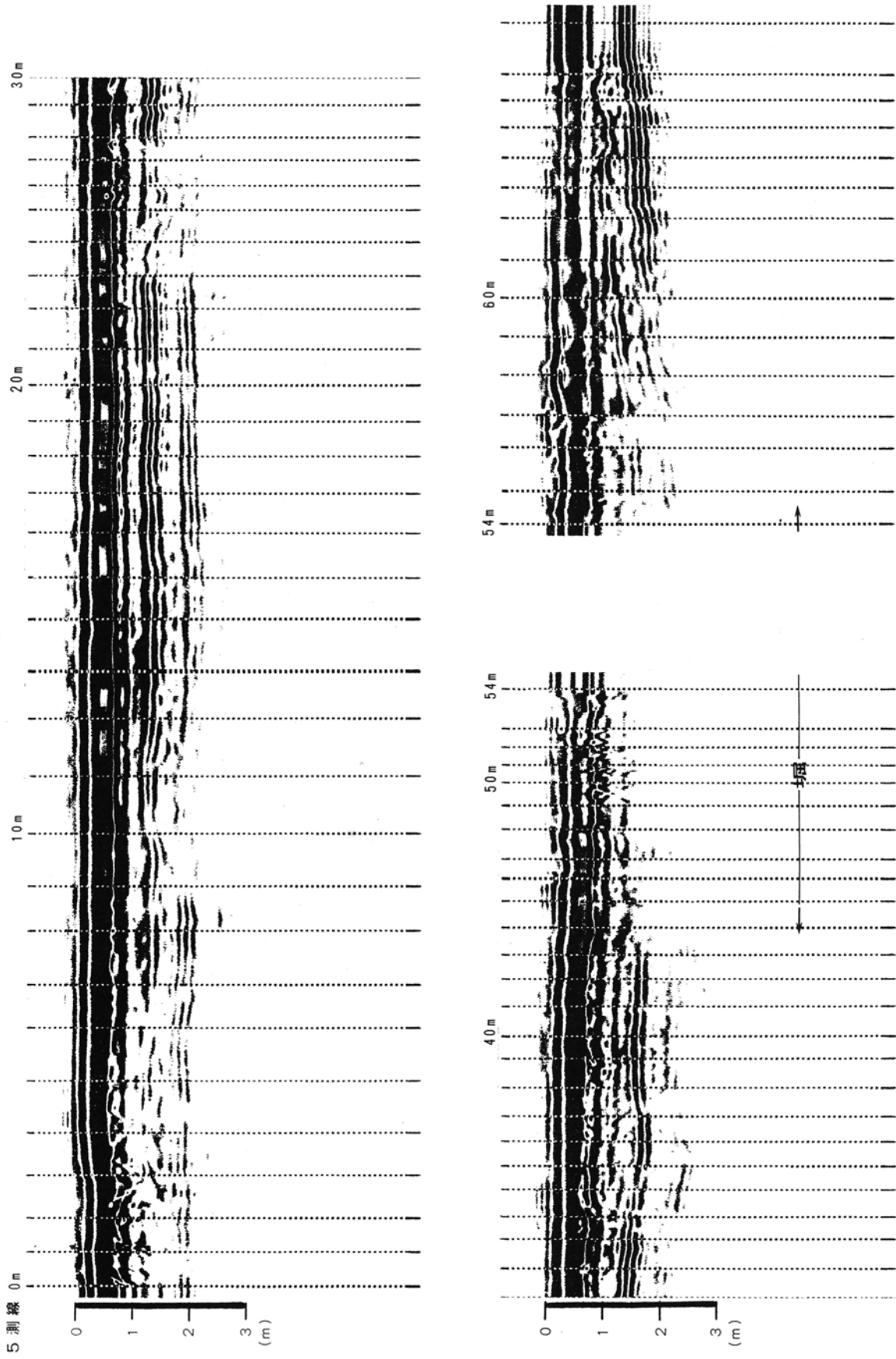


図-11 地下レーダー探査、プロファイル測定記録（5測線）

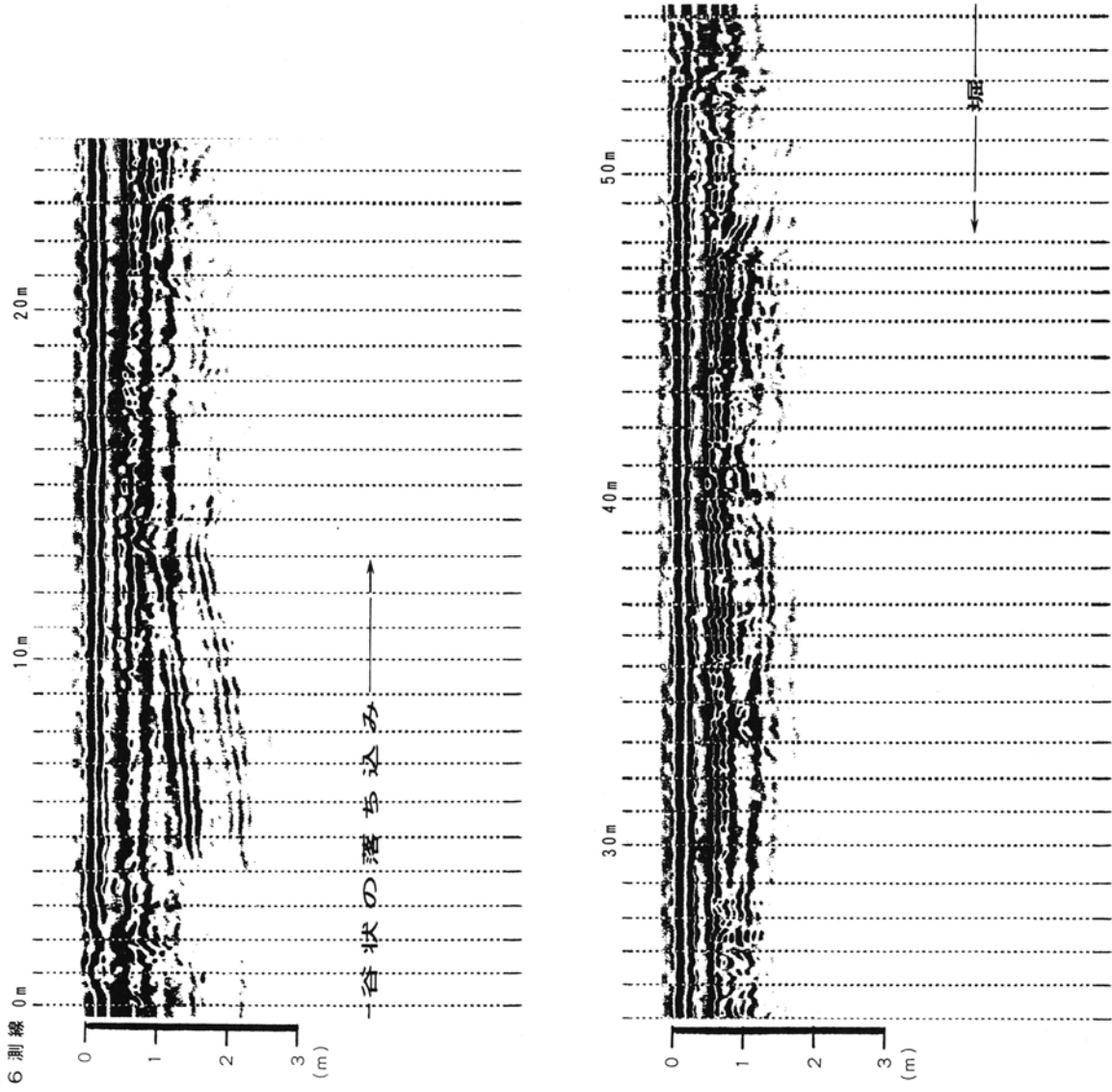
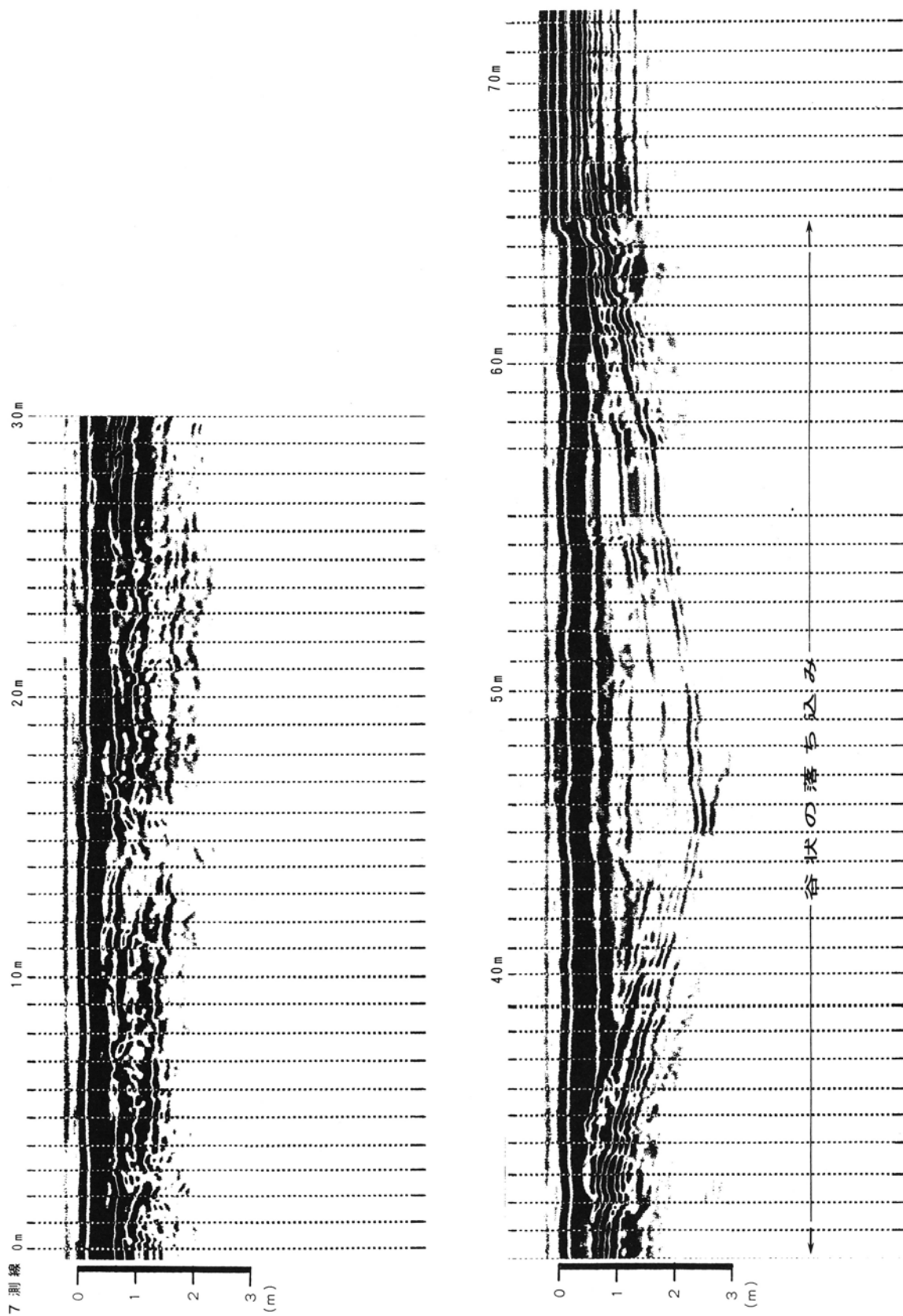


図-12 地下レーダー探査、プロファイル測定記録（6 測線）



図—13 地下レーダー探査、プロファイル測定記録（7測線）

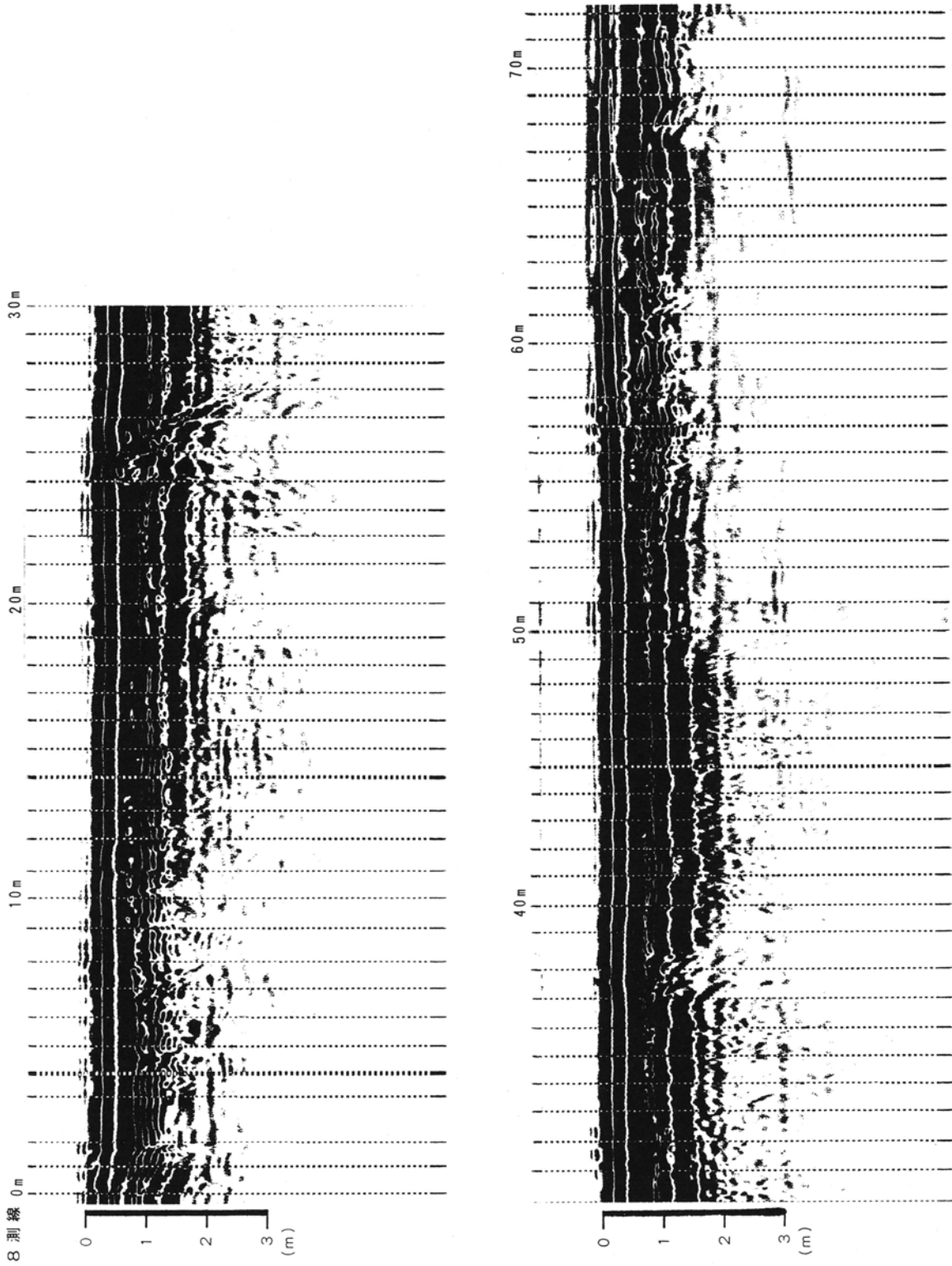


図-14 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (8 測線)

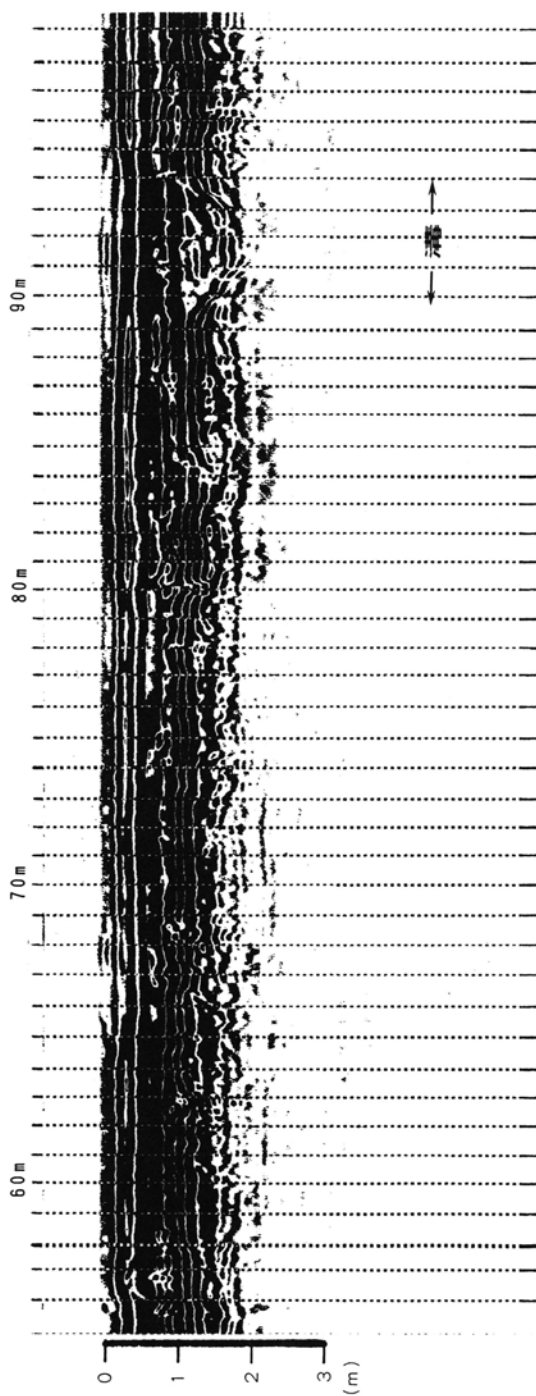
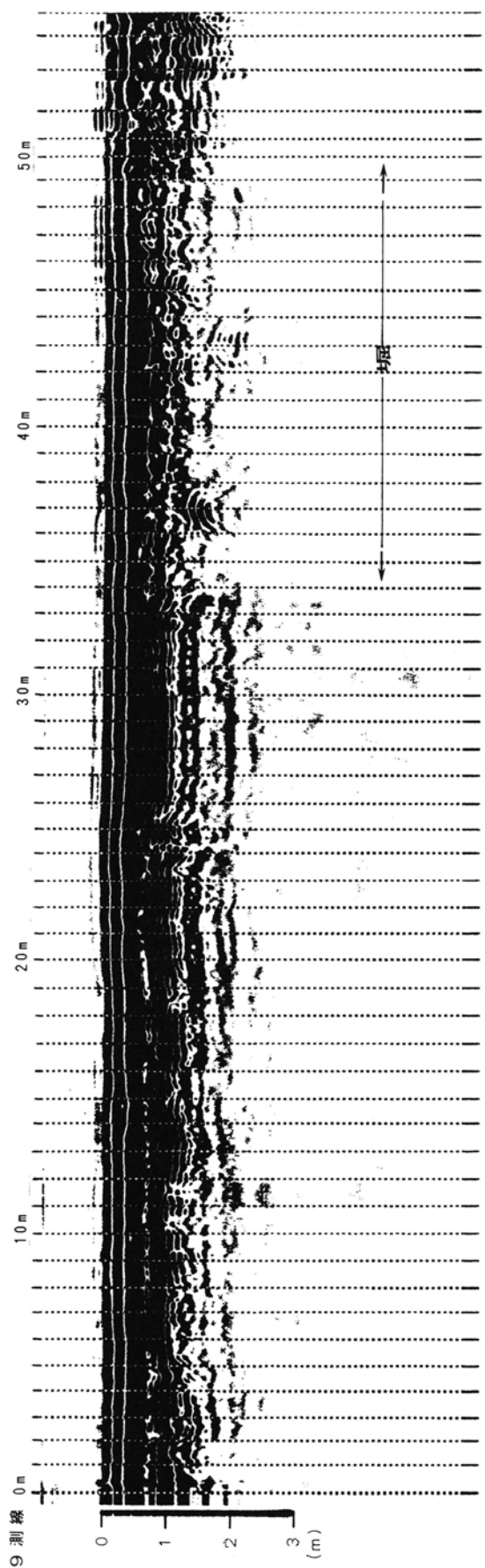
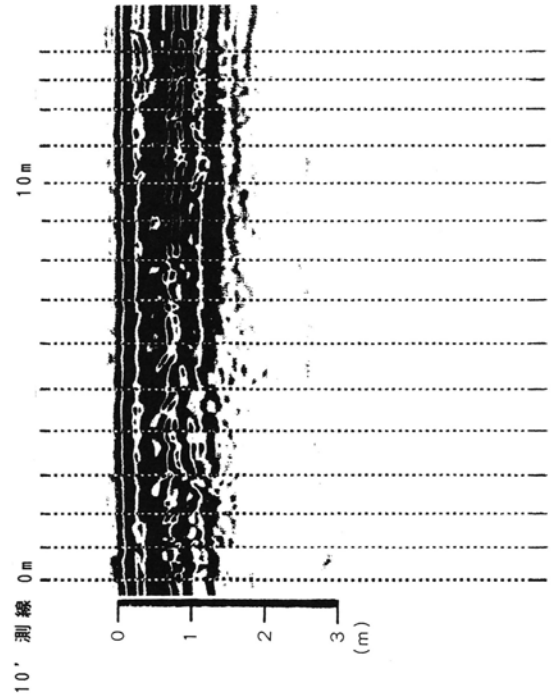
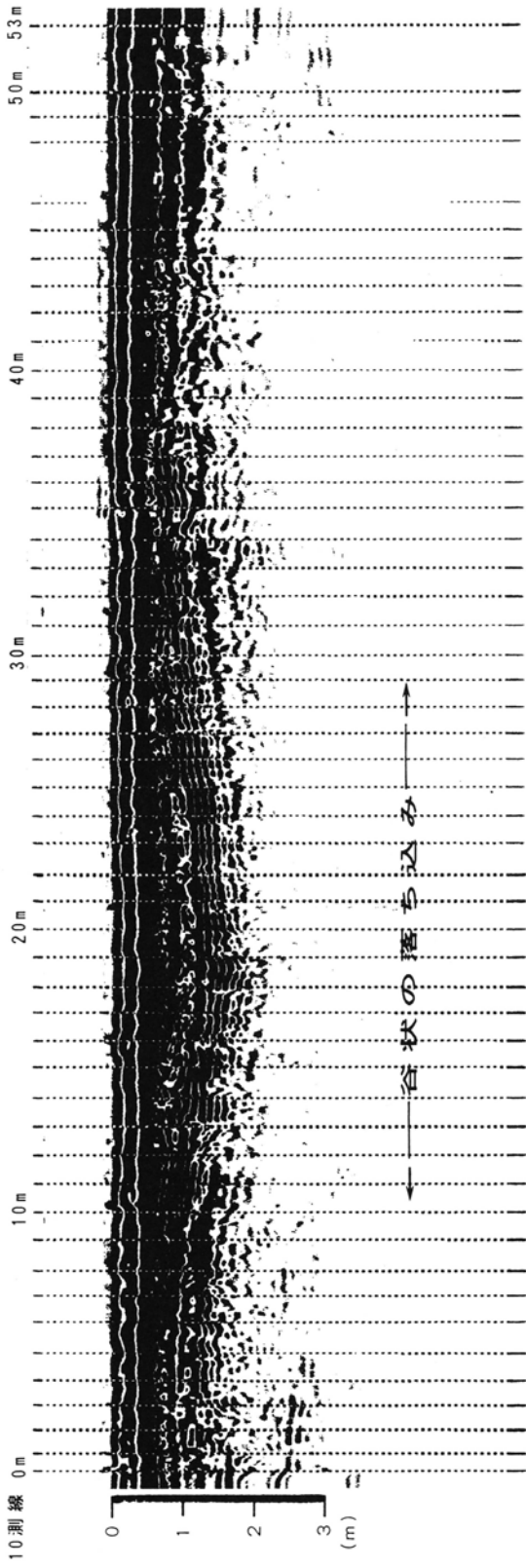


図-15 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (9 測線)



図一16 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (10測線)

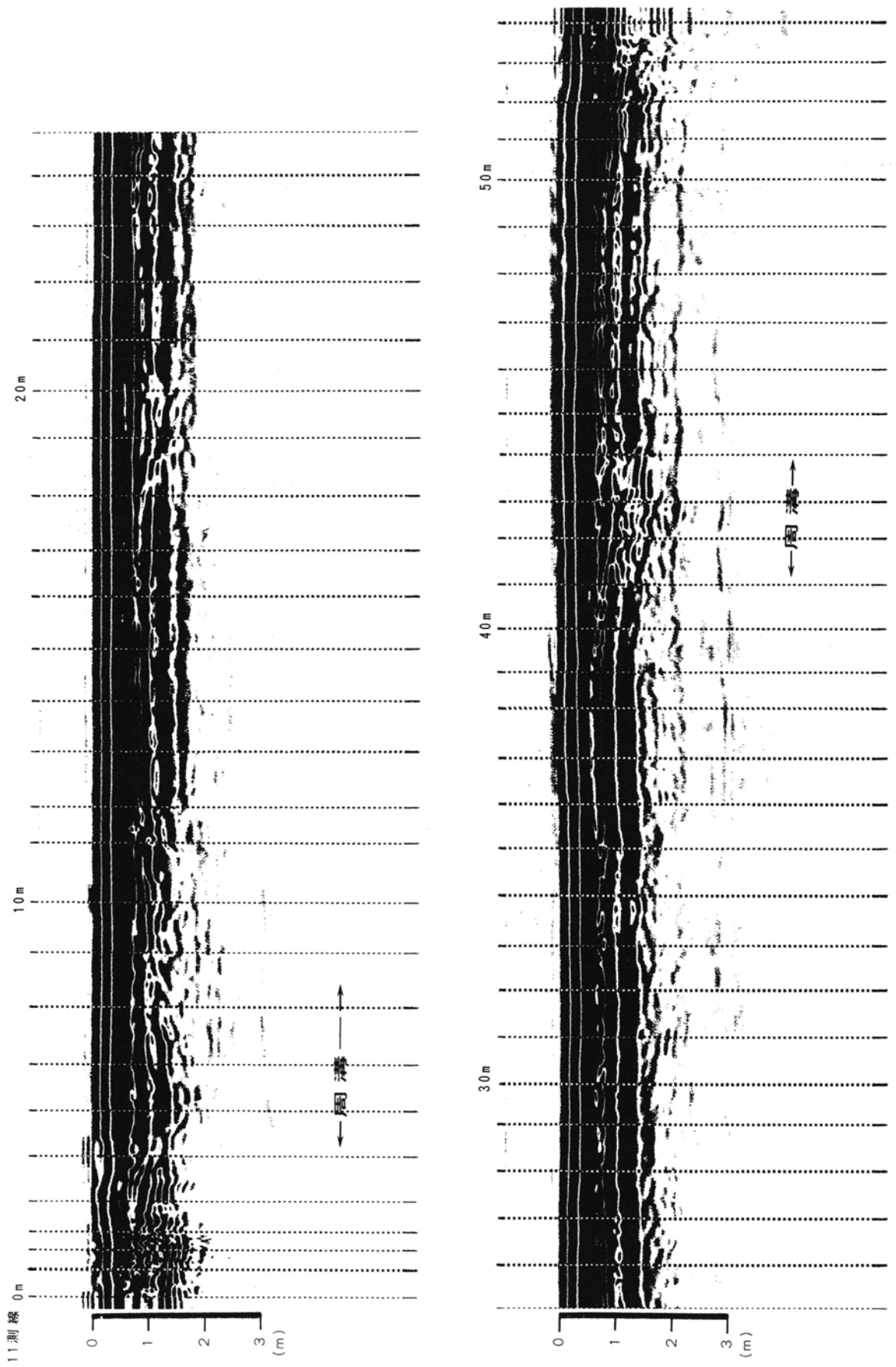


図-17 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (11測線)



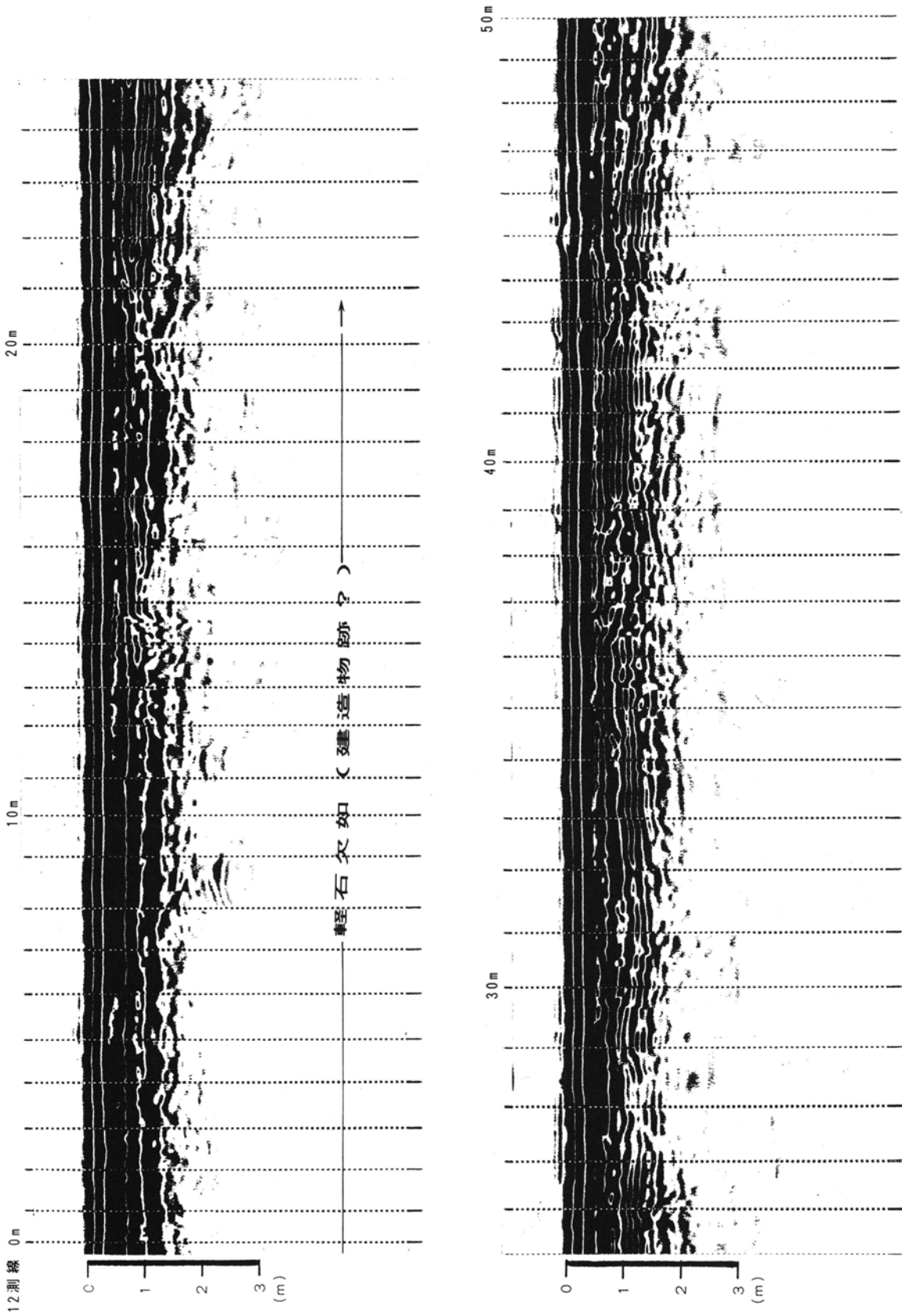


図-18 地下レーダー探査、プロフィール測定記録(12測線)

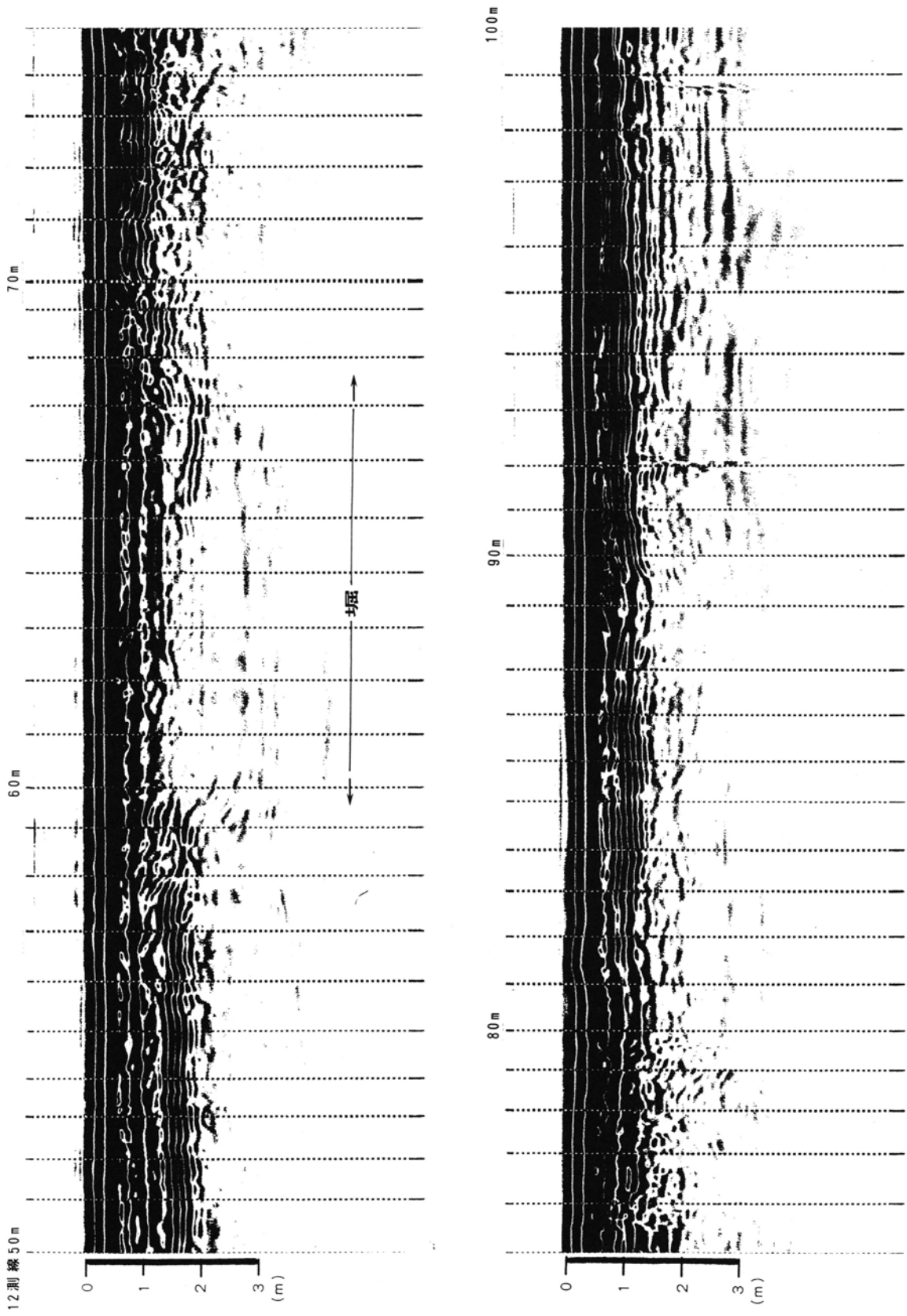


図-19 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (12測線)

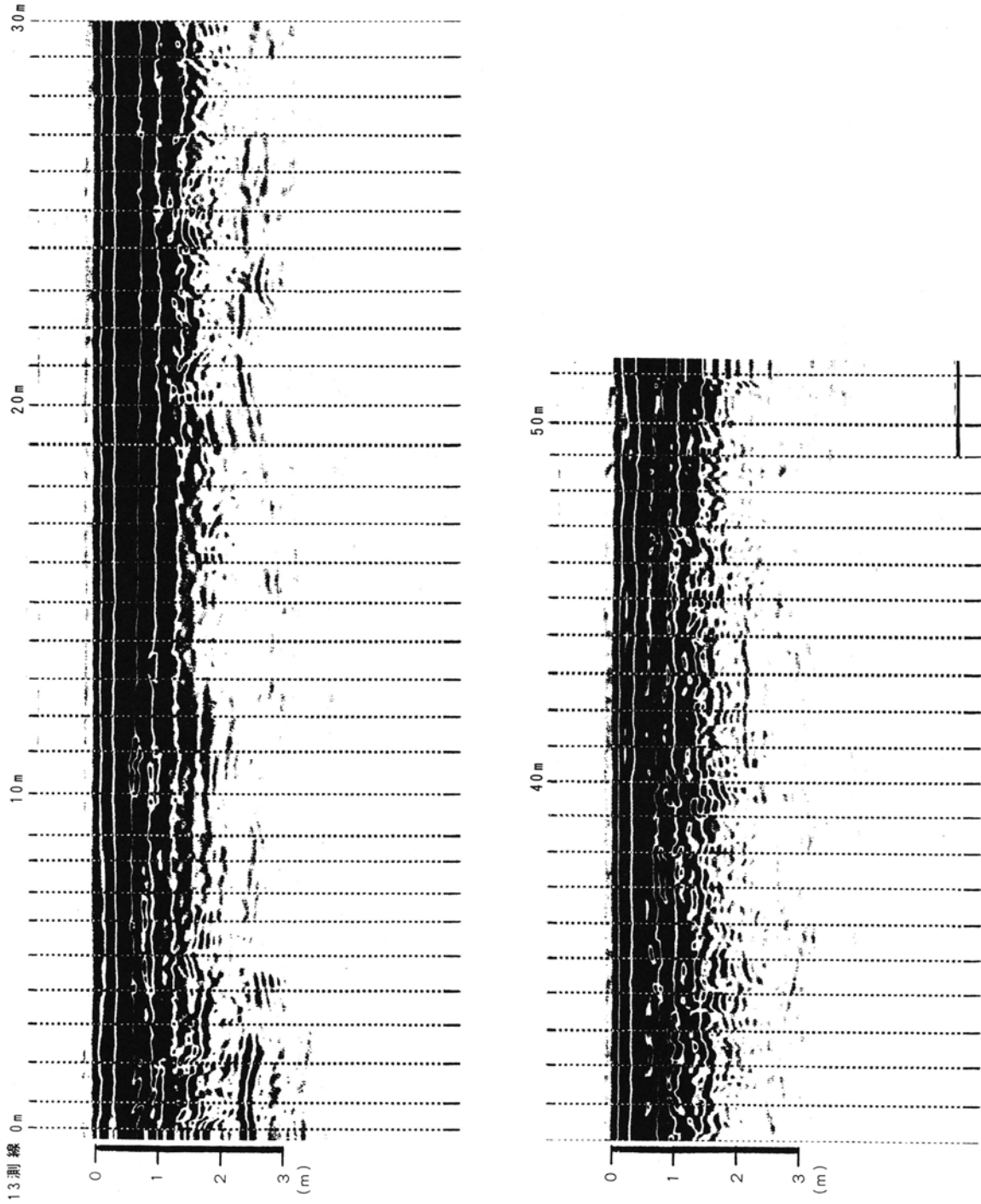


図-20 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (13測線)

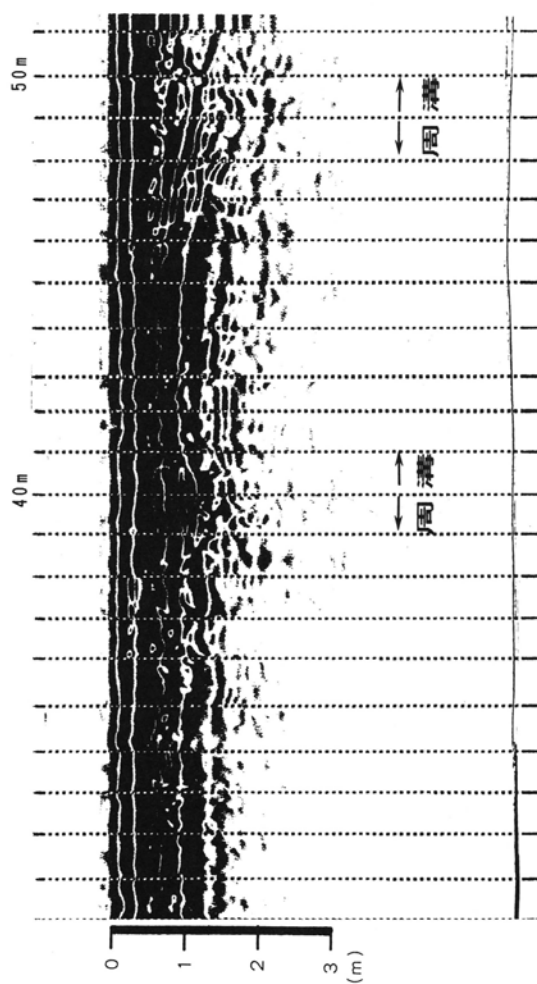
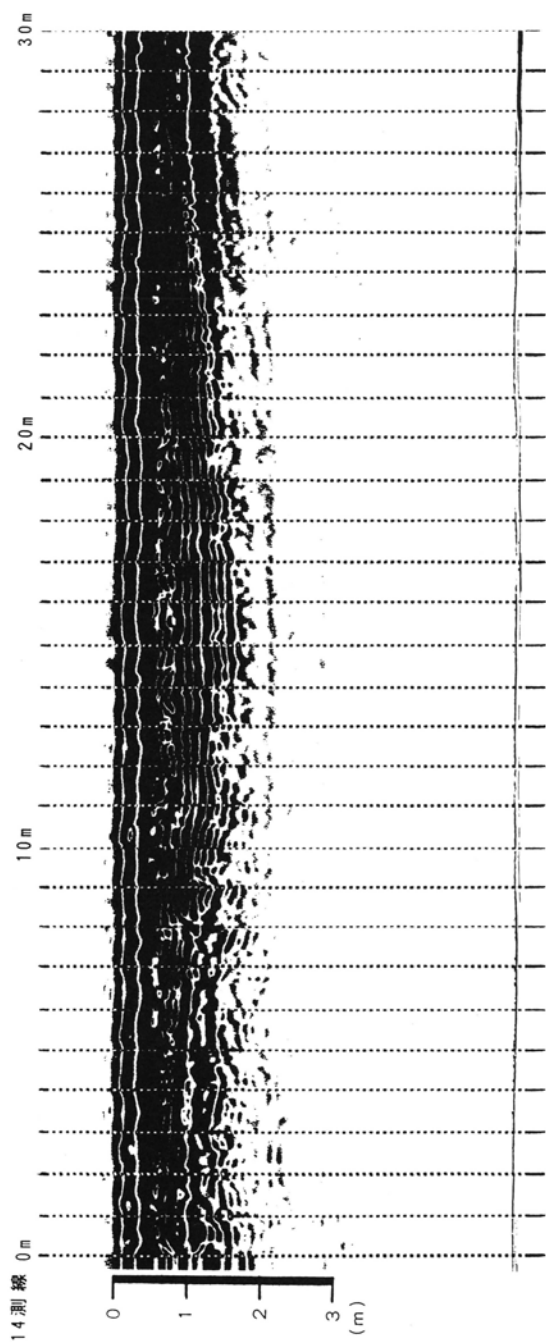


図-21 地下レーダー探査、プロフィール測定記録 (14測線)

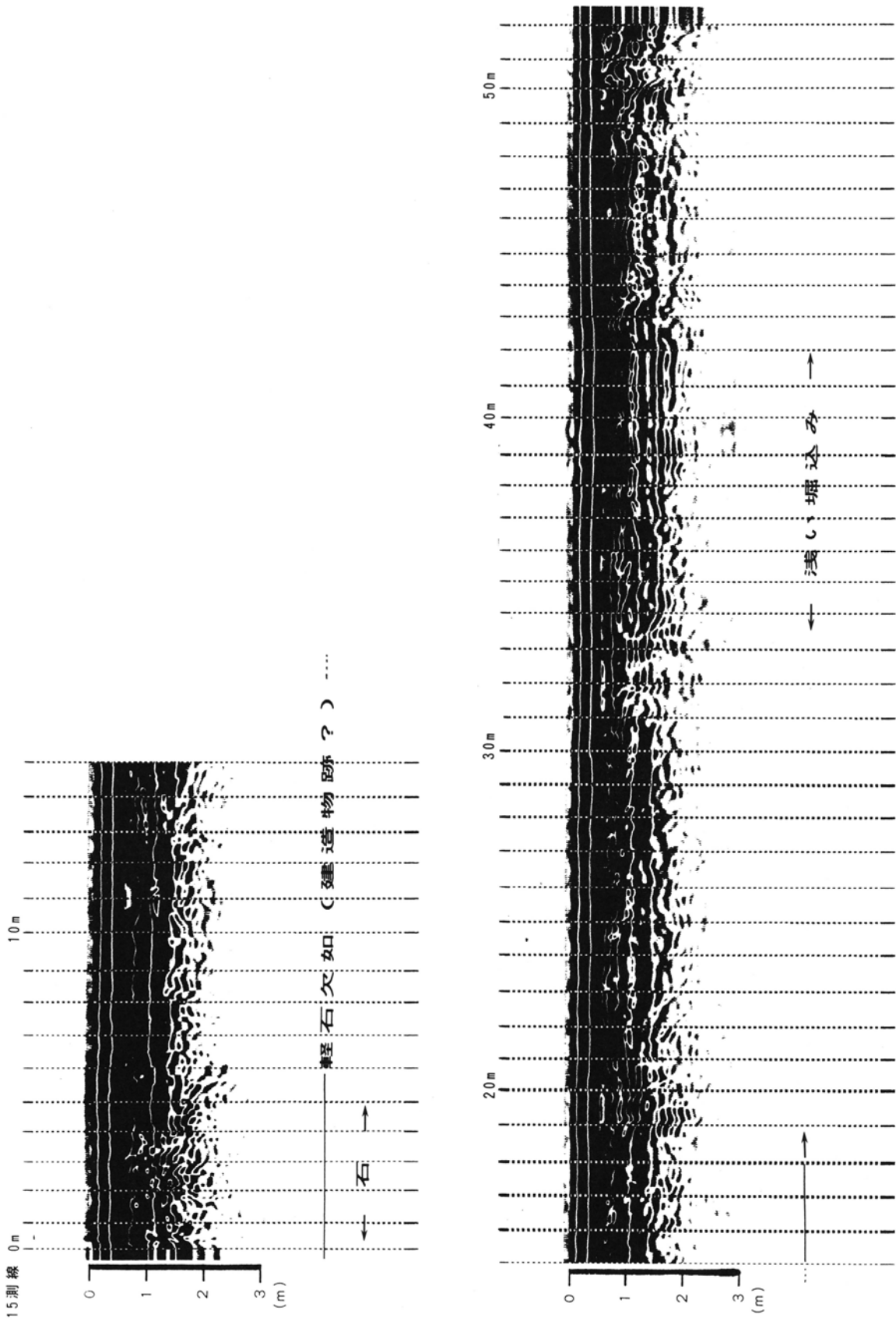


図-22 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (15測線)

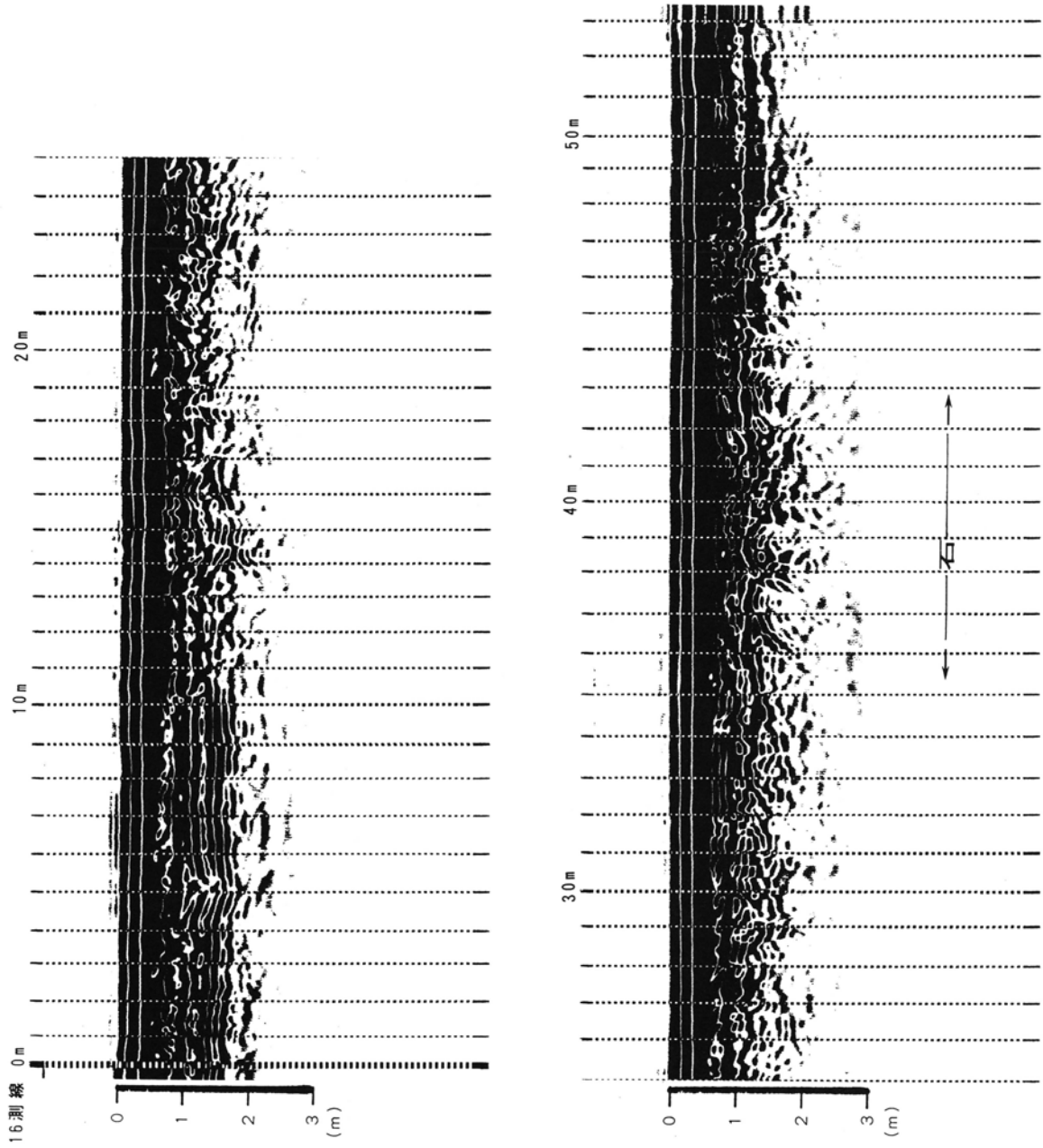


図-23 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (16測線)

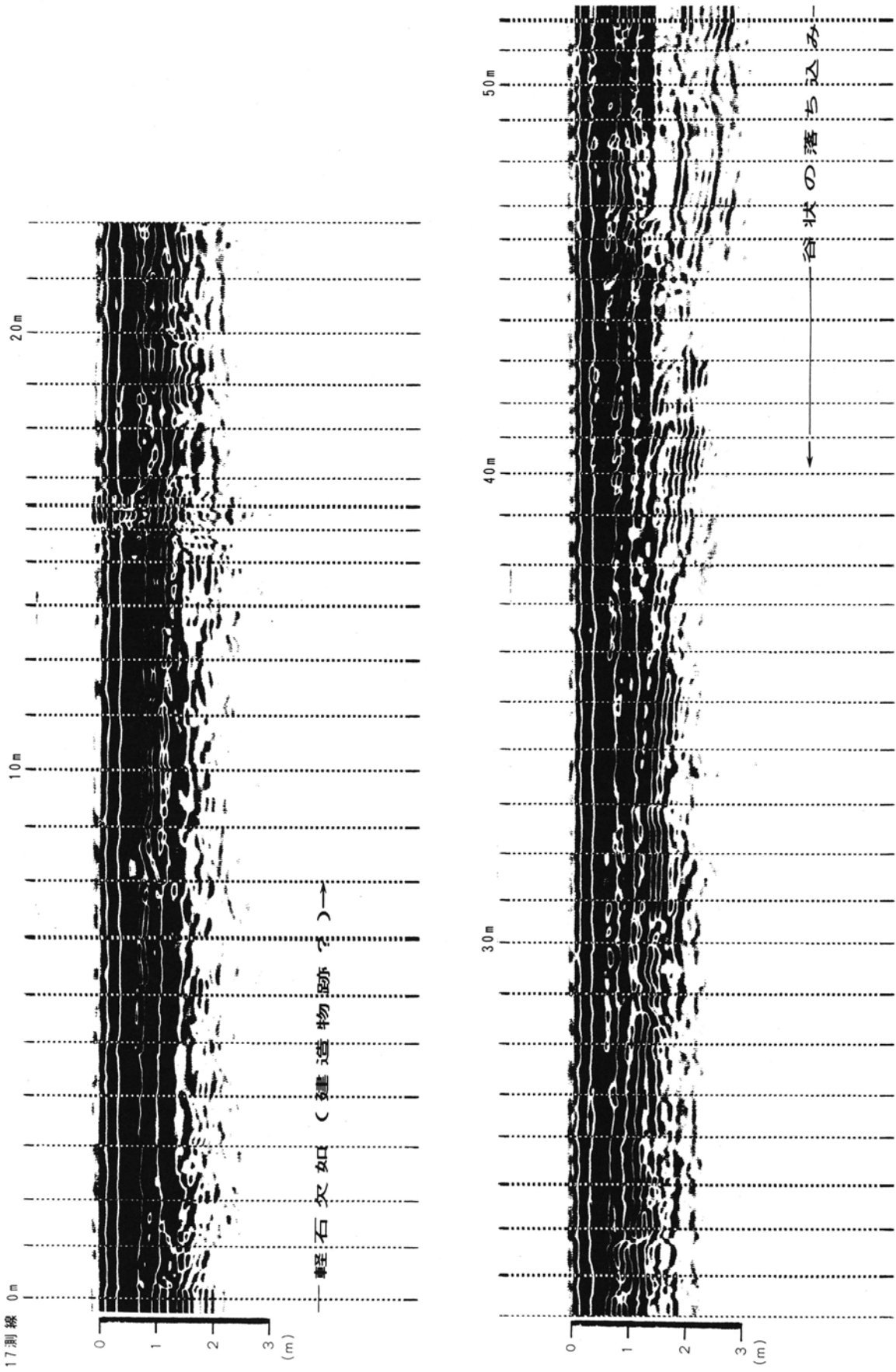


図-24 地下レーダー探査、プロファイル測定記録(17測線)

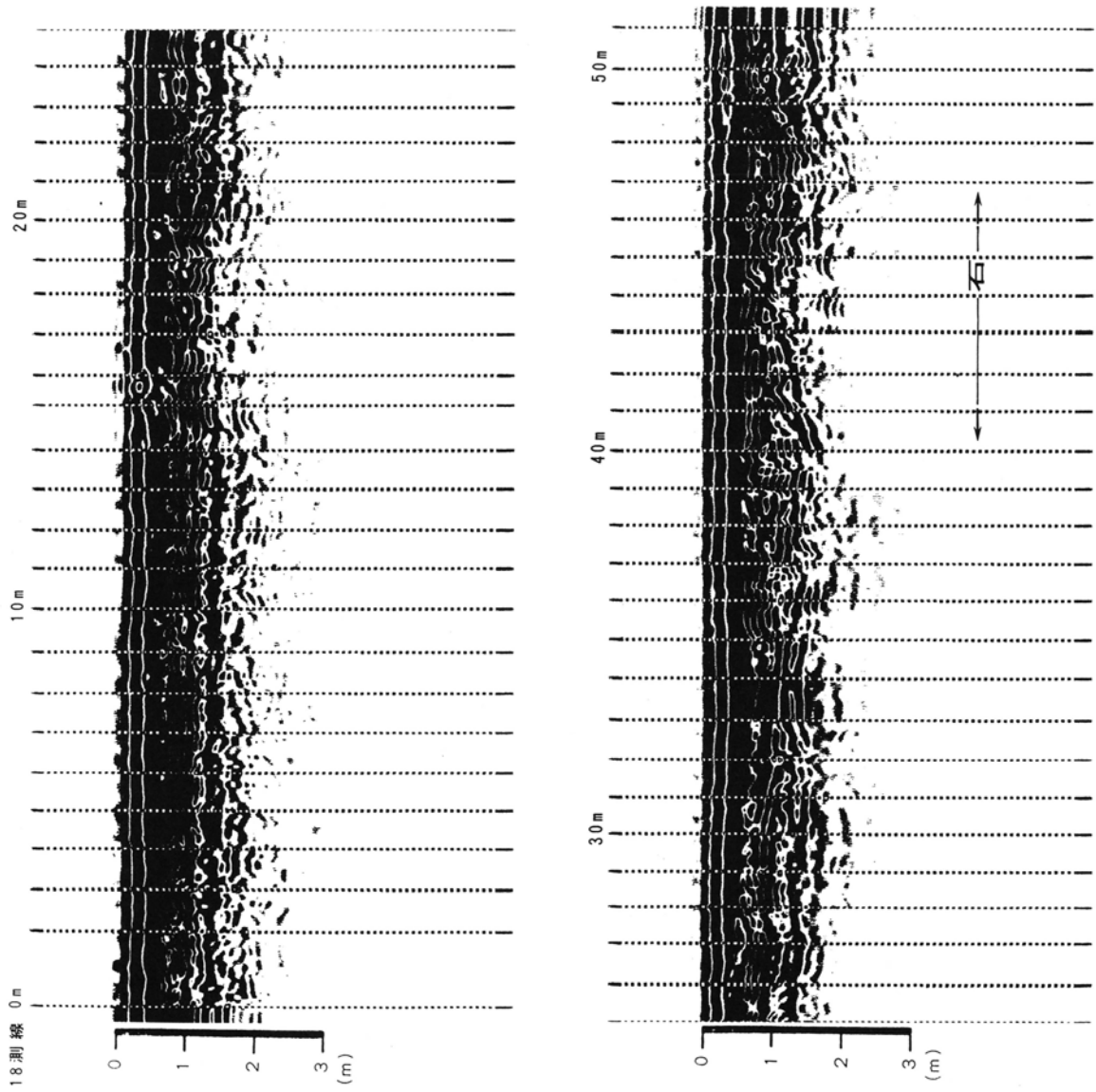


図-25 地下レーダー探査、プロファイル測定記録(18測線)



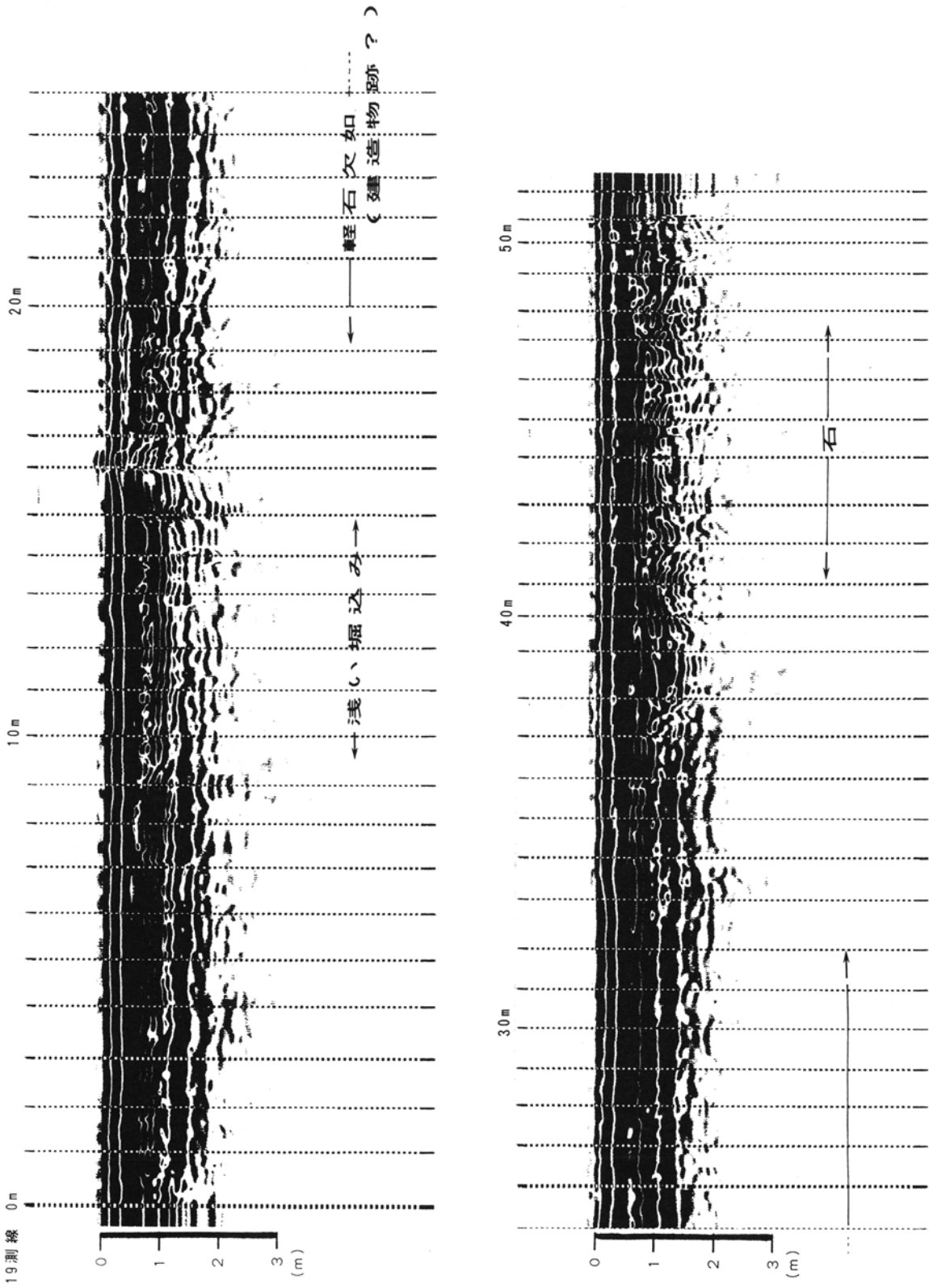


図-26 地下レーダー探査、プロフィール測定記録 (19測線)

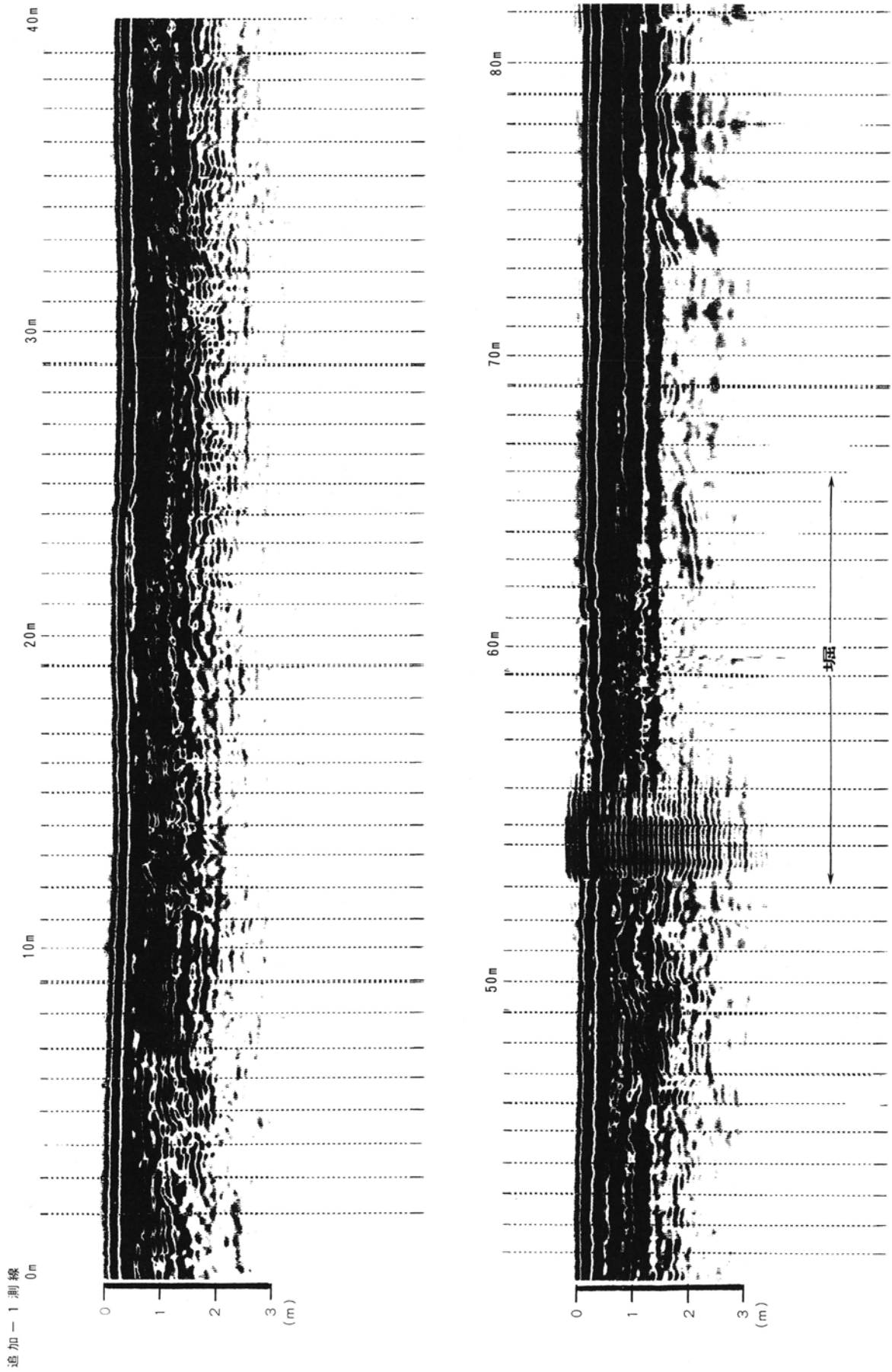


図-27 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (追加-1 測線)

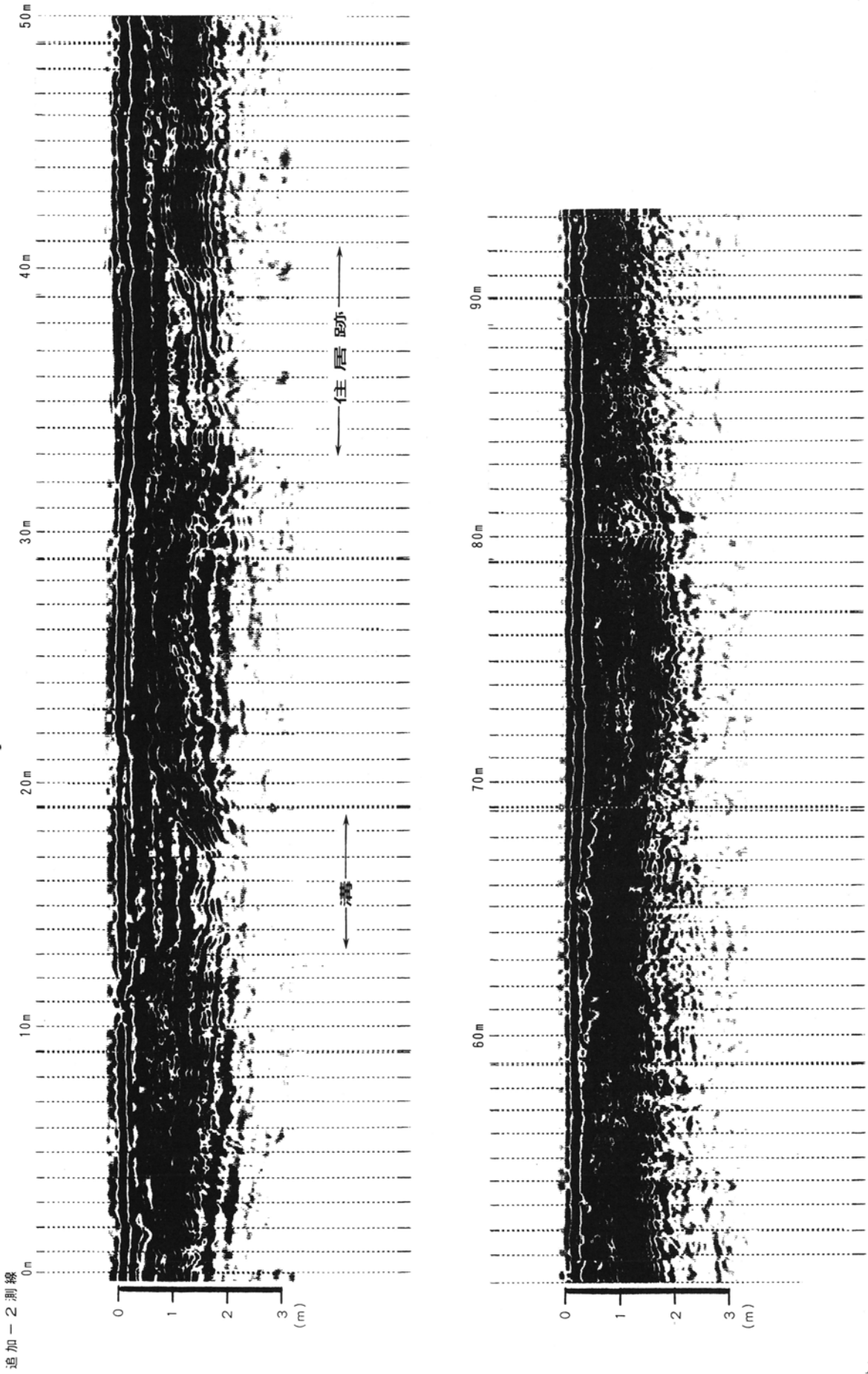


図-28 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (追加-2測線)

追加-3測線

184

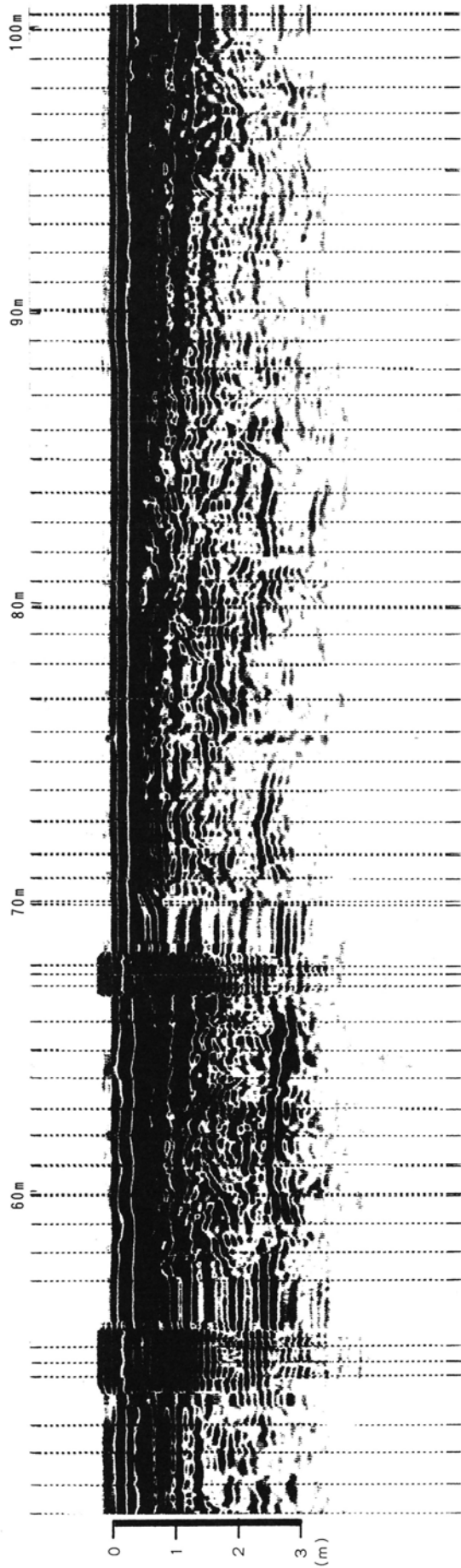
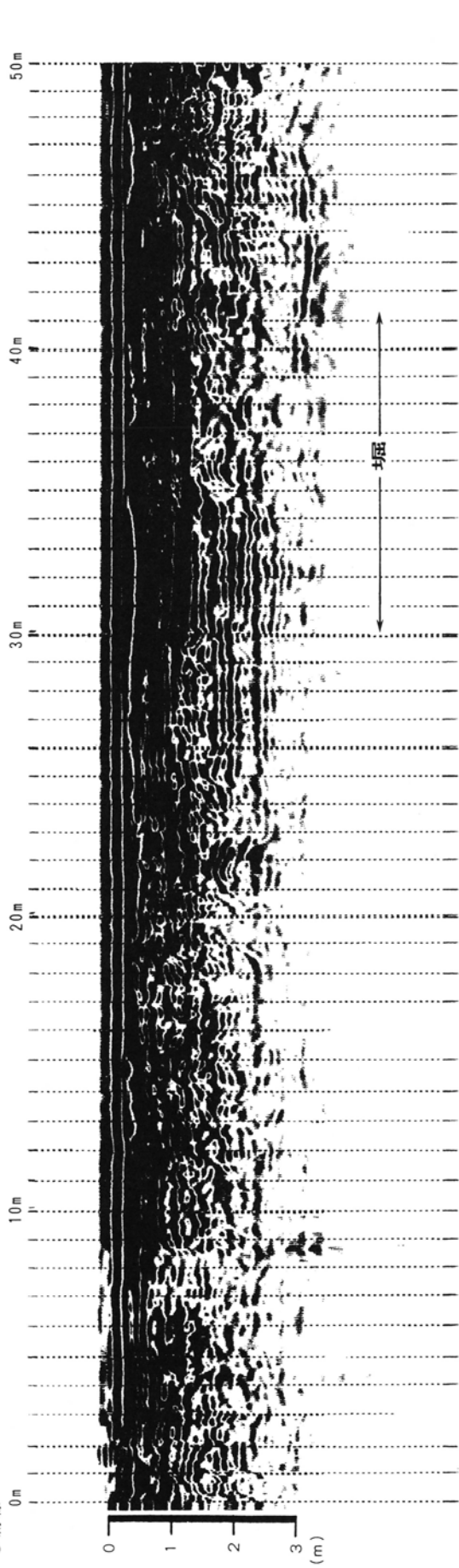
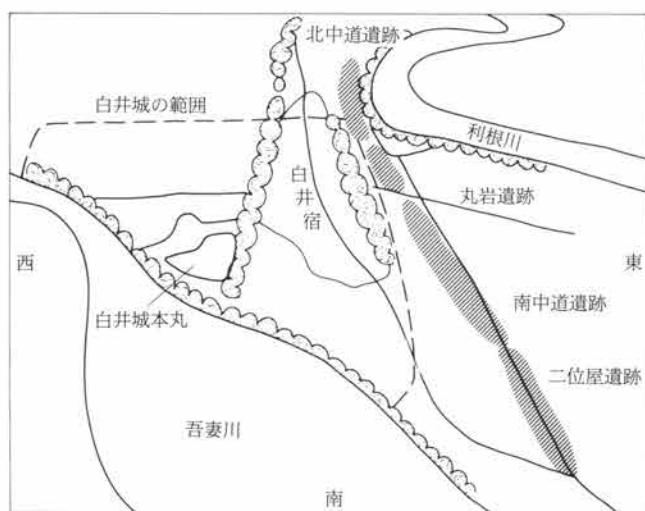


図-29 地下レーダー探査、プロファイル測定記録 (追加-3測線)

# 写 真 图 版

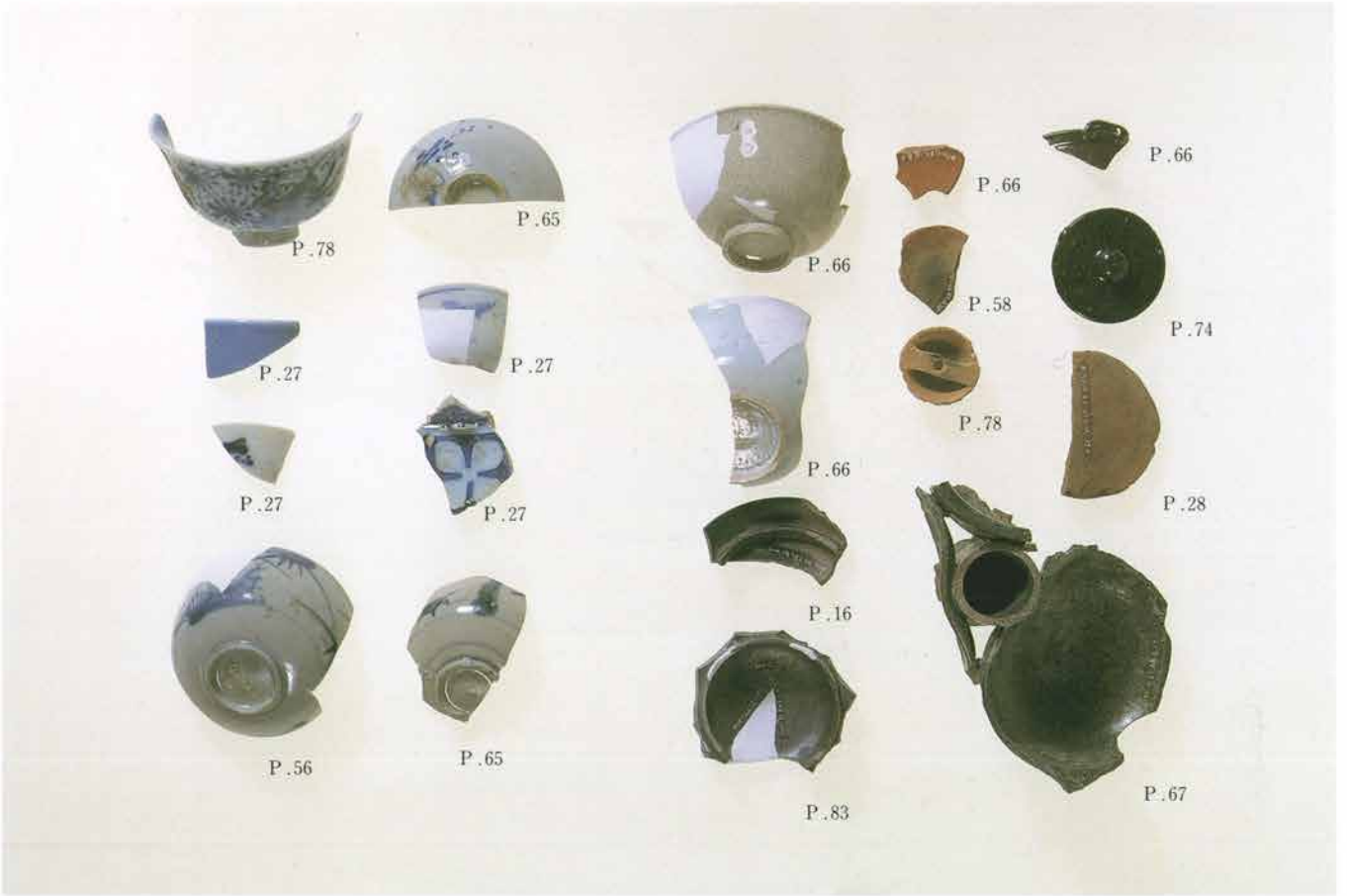




画面の左手前を流れる吾妻川と右上を流れる利根川の、合流点付近の河岸段丘上に白井遺跡群は立地する。中央の家並みは近世の市場町白井宿で、その左手側の一段高い段丘面上に白井城の本丸がある。







白井丸岩・白井北中道遺跡出土遺物(陶磁器)



白井丸岩・白井北中道遺跡出土遺物(陶器)



白井丸岩・白井北中道遺跡出土遺物(播り鉢等)



白井丸岩・白井北中道遺跡出土遺物(青磁・中国染付)



1区全景（南から）



1区南東部（北から）



ピット群全景 (北から)



ピット群全景 (南から)



ピット群全景 (西から)



ピット群全景 (南から)



ピット群全景 (西から)



62号土坑全景 (南から)



62号土坑遺物出土状況



P.152



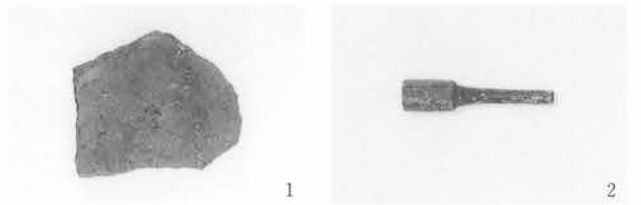
1~6の集合



68・69・70・87・300号土坑全景 (南から)



68・87号土坑断面 (北から)



68号土坑出土遺物



72号土坑断面 (南から)



74号土坑断面 (南から)



75号土坑断面 (南東から)



76号土坑断面 (南から)



77号土坑断面（南から）



78号土坑断面（南から）



82号土坑断面（南から）



78号土坑出土遺物



83号土坑断面（南から）



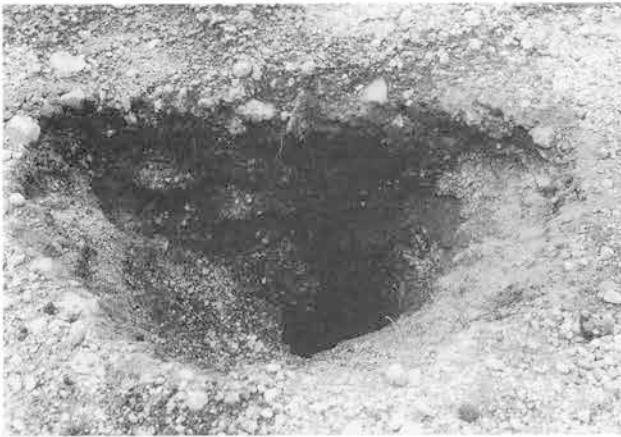
84号土坑断面（南から）



85・86号土坑断面（南から）



89号土坑断面（南から）



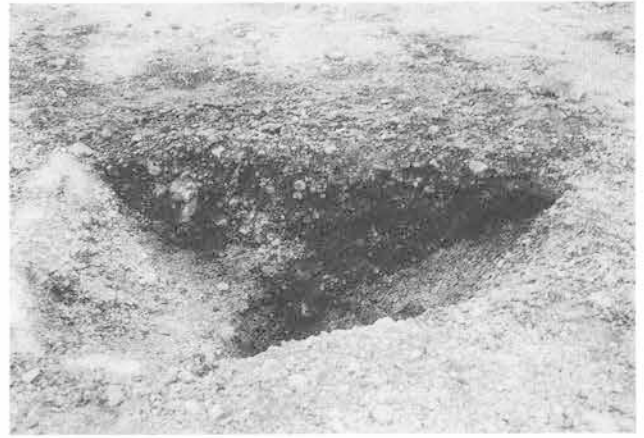
91号土坑断面（南から）



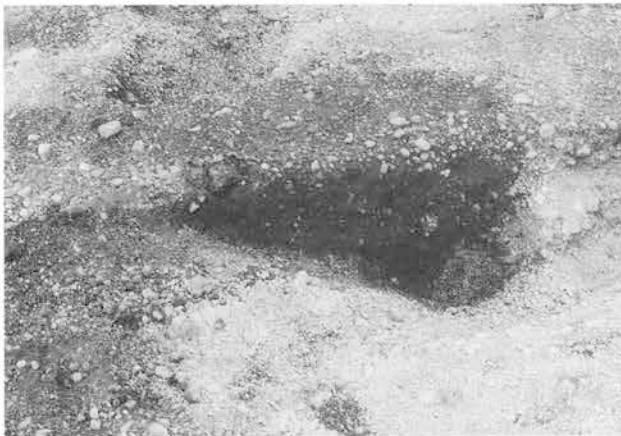
92号土坑断面（南から）



93号土坑断面（南から）



94号土坑断面（南から）



96号土坑断面（東から）



98号土坑断面（南から）

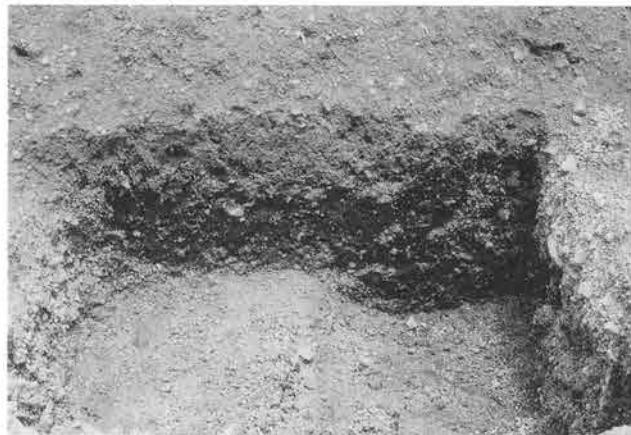


100号土坑断面（南から）



108号土坑断面（南から）





110・111号土坑断面（南から）



113号土坑断面（東から）



114号土坑断面（南から）



115号土坑断面（南から）



119号土坑断面（南から）



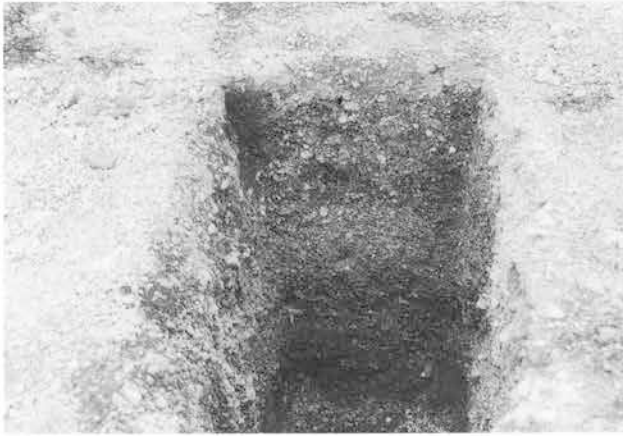
122号土坑断面（西から）



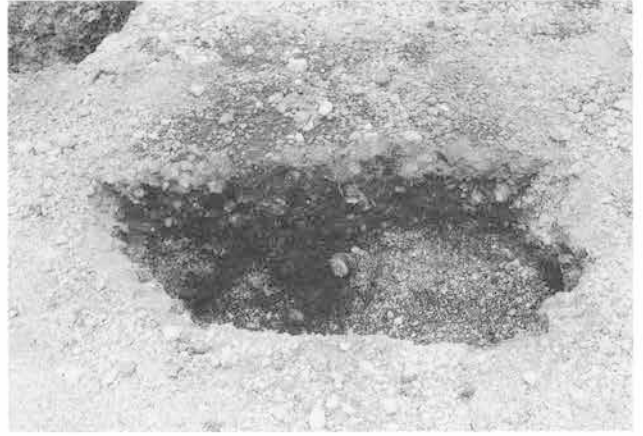
123号土坑断面（南東から）



123号土坑出土遺物



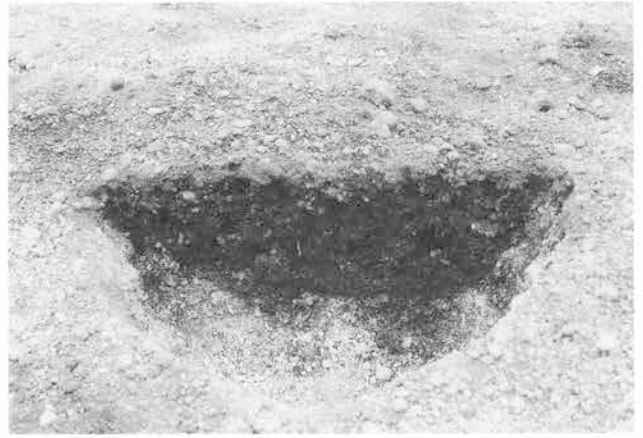
126号土坑断面 (南から)



127号土坑断面 (南から)



129号土坑断面 (南から)



131号土坑断面 (西から)



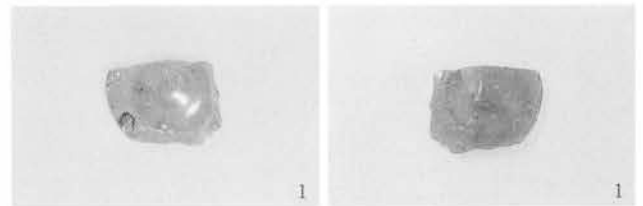
132号土坑断面 (南から)



134・135号土坑断面 (東から)



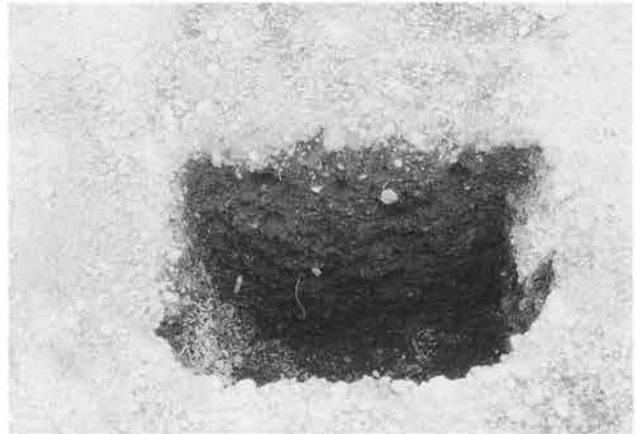
139・140号土坑断面 (南から)



134号土坑出土遺物



156号土坑断面 (南から)



160号土坑断面 (南から)



161号土坑断面 (北から)



161号土坑出土遺物



163号土坑断面 (東から)



165号土坑断面 (南から)



167号土坑断面 (南から)



168号土坑断面 (東から)



170号土坑断面 (南から)



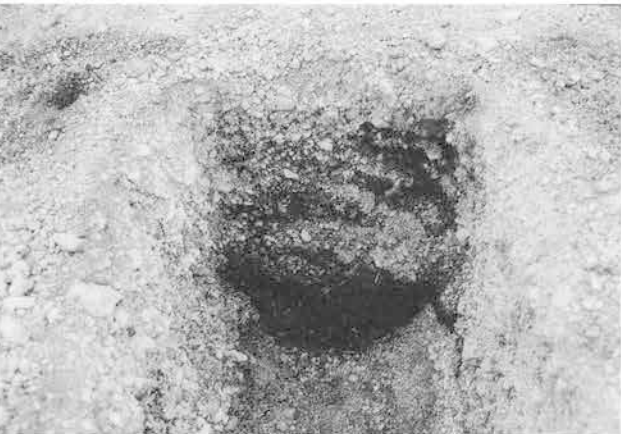
174号土坑断面 (東から)



176号土坑断面 (南から)



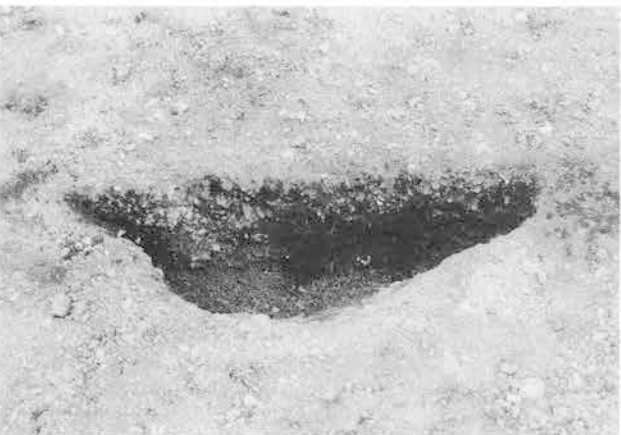
179号土坑断面 (東から)



184号土坑断面 (東から)



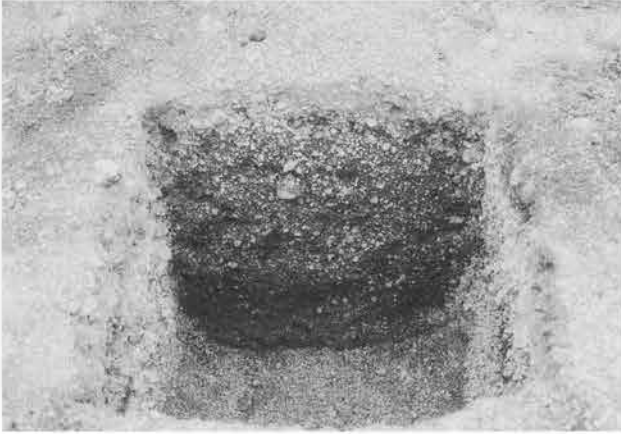
185号土坑断面 (西から)



189号土坑断面 (南から)



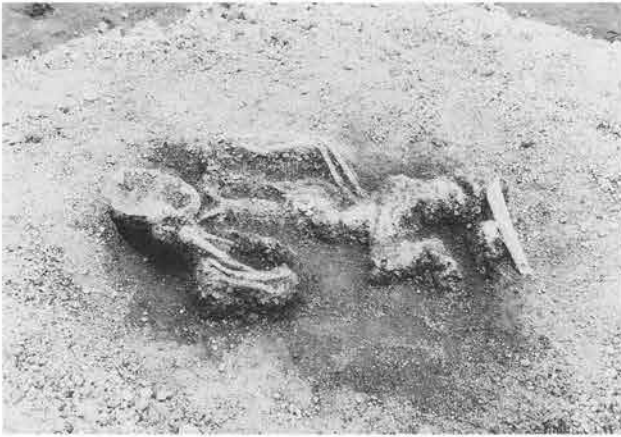
191号土坑断面 (南から)



199号土坑断面 (西から)



101・202号土坑断面 (南から)



217号土坑人骨出土状況 (西から)



P.152

P.152

217号土坑人骨



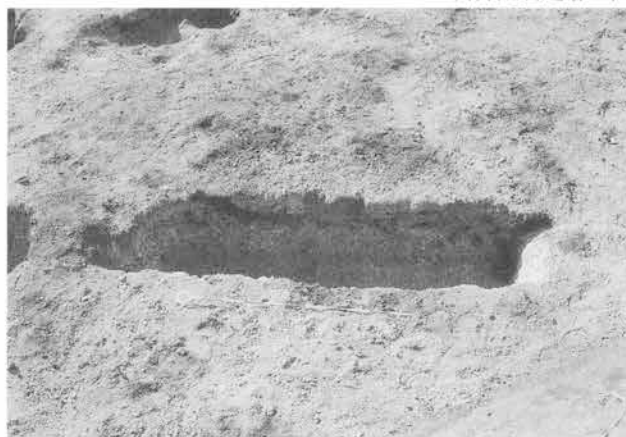
219号土坑全景 (南から)



219・220・222・224・226・227号土坑全景 (北から)



228・231・234号土坑全景（東から）



237号土坑全景（東から）



240～246号土坑全景（東から）



243・244号土坑全景（東から）



244号土坑断面（南から）



244号土坑出土遺物



251号土坑出土遺物



250・251号土坑全景（北から）



251号土坑断面（西から）



264号土坑全景 (南から)



255~263号土坑全景 (北から)



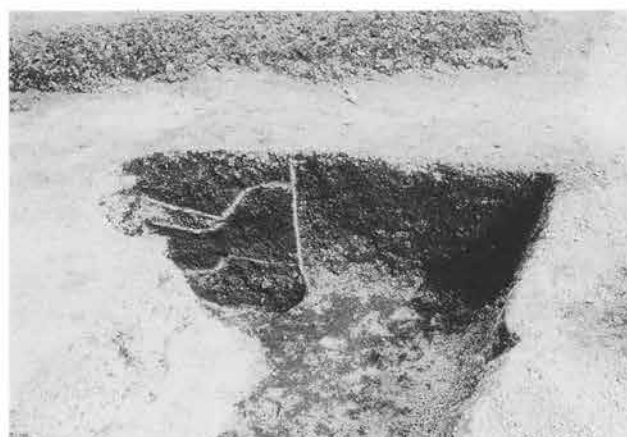
264・266号土坑全景 (南から)



265~267・272・273・277~280号土坑全景 (北から)



267号土坑全景 (西から)



266・267号土坑断面 (西から)



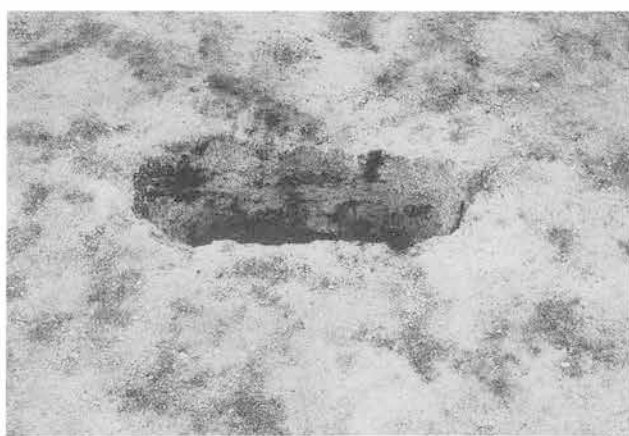
278・281~283号土坑全景 (西から)



287号土坑断面（西から）



284～288号土坑全景（西から）



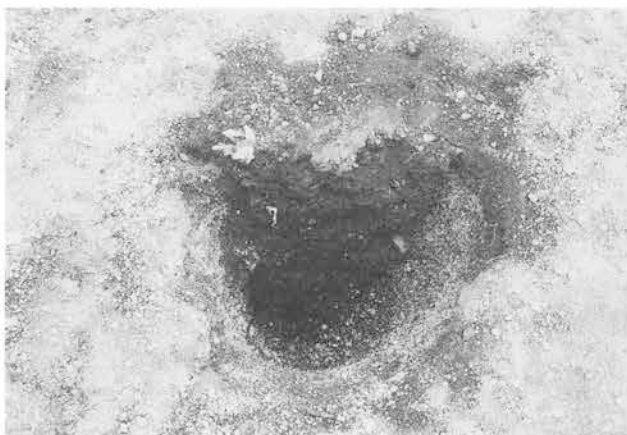
289号土坑全景（東から）



294～296号土坑全景（東から）



297号土坑全景（南から）



298号土坑断面（南東から）



299号土坑全景（南から）



調査風景





2区全景 (北から)



1号土坑断面 (西から)



5・6号土坑全景 (南から)



5号土坑断面 (東から)



調査風景



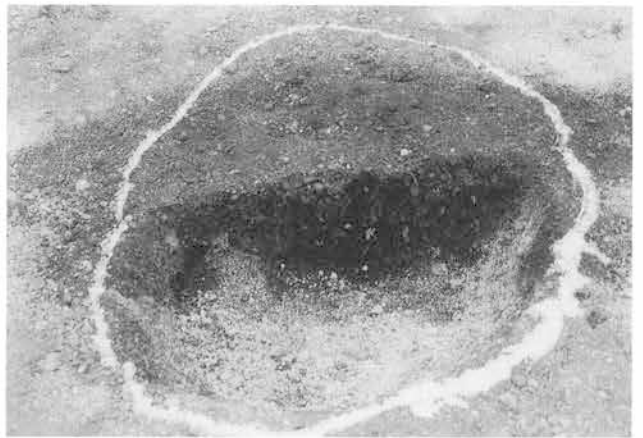
6号土坑断面（東から）



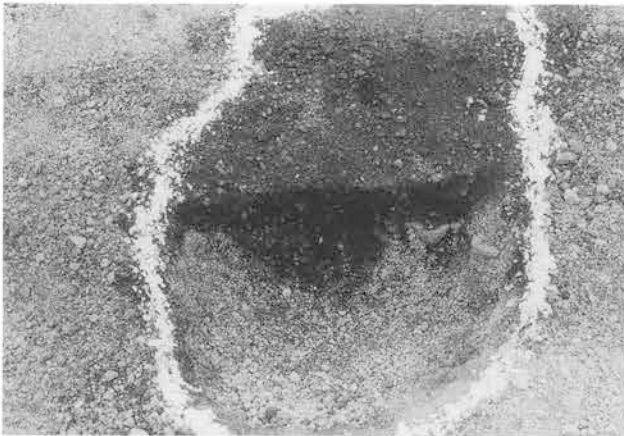
9・10号土坑断面（東から）



6号土坑出土遺物



15号土坑断面（南から）



16号土坑断面（南から）



17・18号土坑断面（南から）



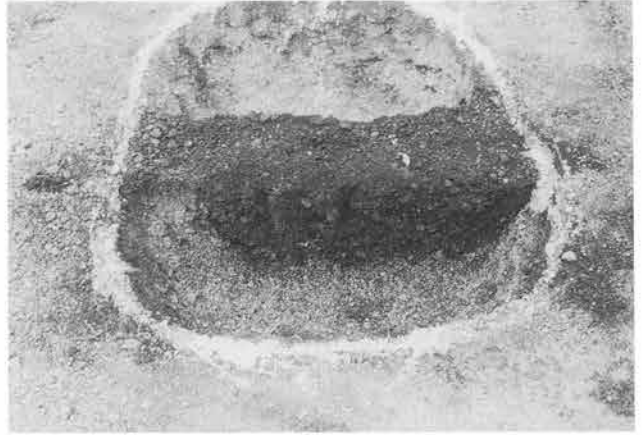
19号土坑断面（南から）



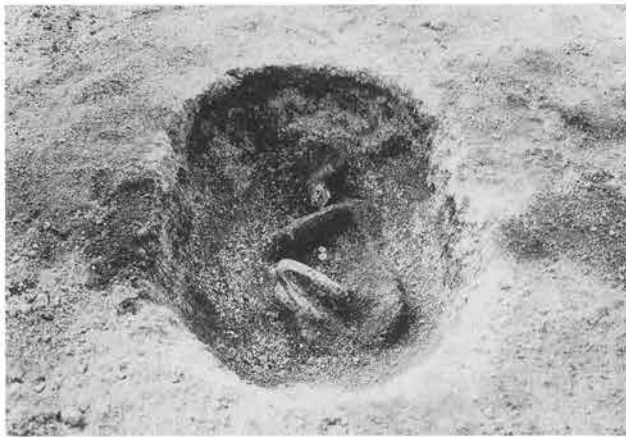
22・23号土坑全景（北から）



22号土坑断面（北から）



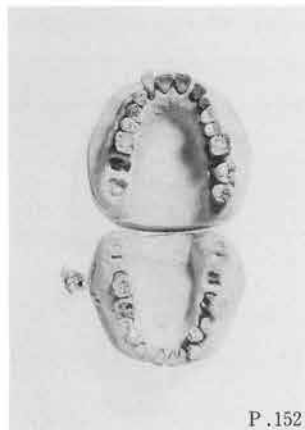
24号土坑断面（南から）



30号土坑全景（南から）



30号土坑断面（南東から）



P.152



P.152

30号土坑出土遺物



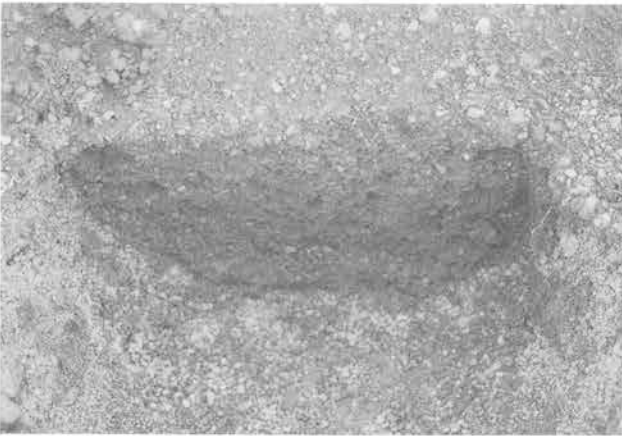
34号土坑全景（北から）



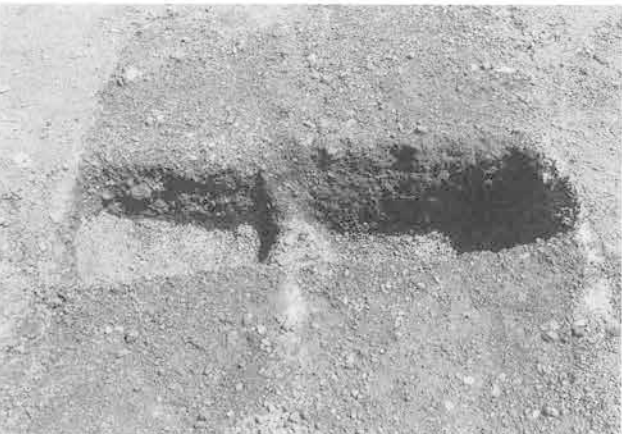
34号土坑断面（南から）



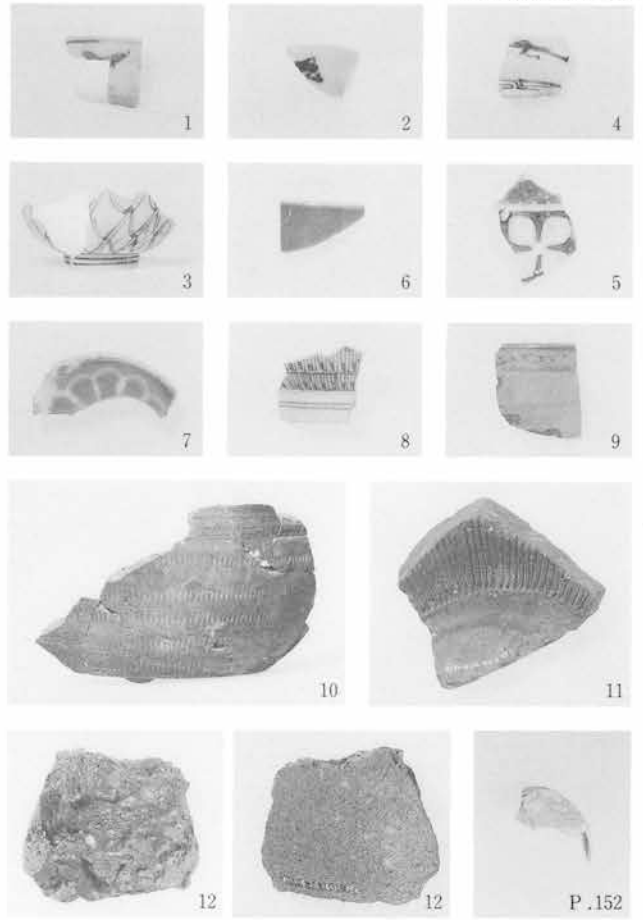
35号土坑断面（南から）



36号土坑断面（西から）



38・39号土坑断面（南東から）



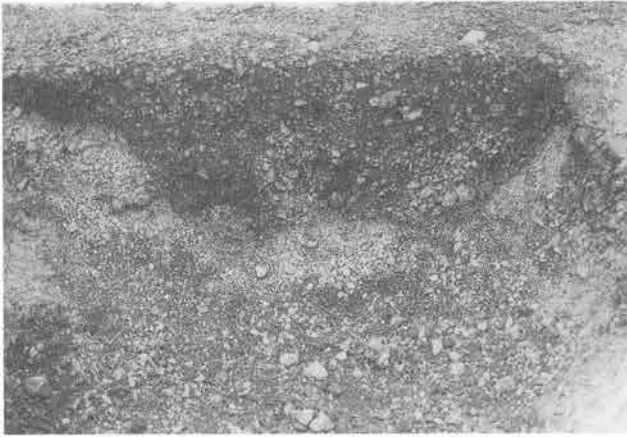
34号土坑出土遺物



37号土坑断面（南東から）



40号土坑断面（東から）



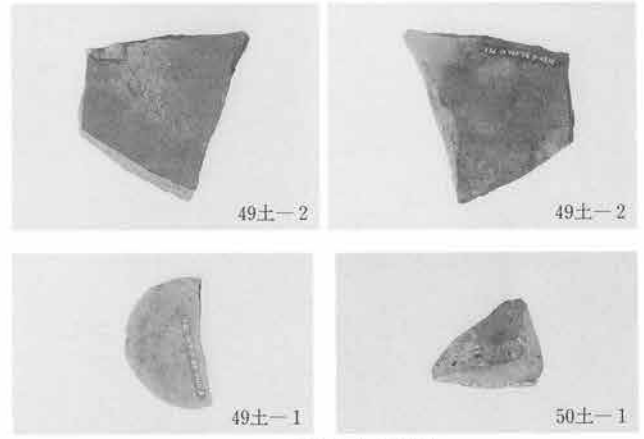
42号土坑断面（北西から）



45号土坑断面（南から）



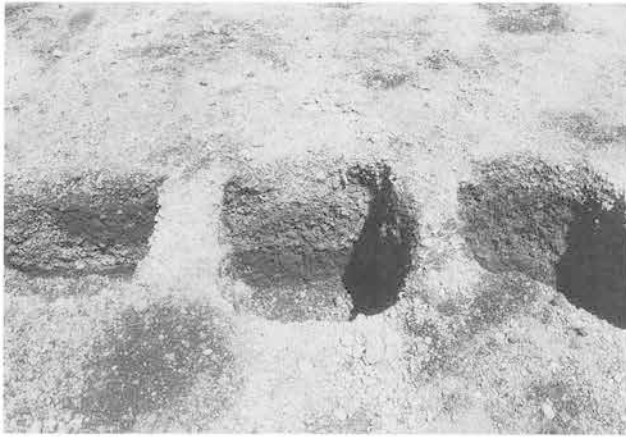
46号土坑断面（南から）



49・50号土坑出土遺物



47～51・63号土坑全景（西から）



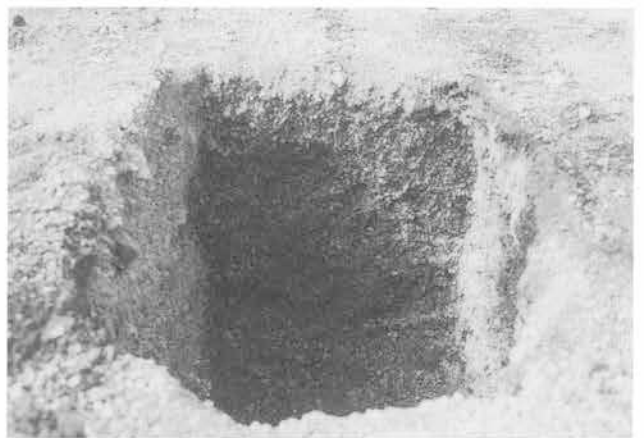
48~50・63号土坑断面（西から）



54号土坑断面（北から）



56号土坑断面（西から）



57号土坑断面（南から）



212号土坑断面（北から）



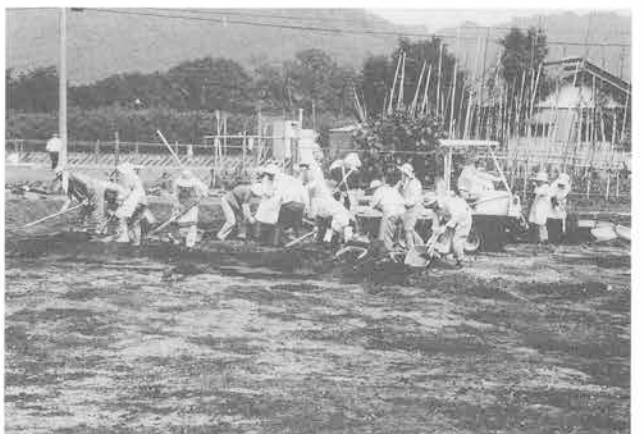
1 57号土坑出土遺物



1 61号土坑出土遺物



213号土坑断面（西から）



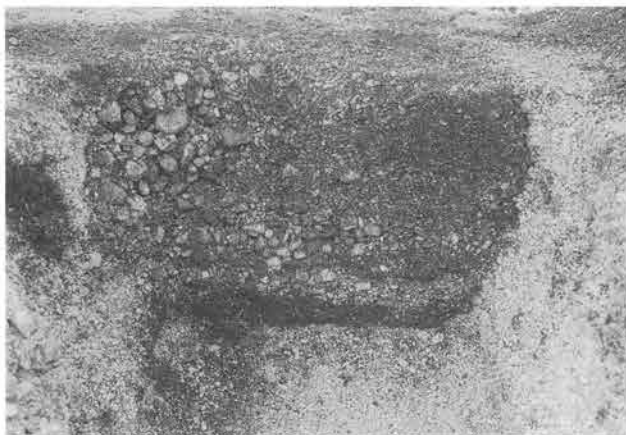
調査風景



3区全景（南から）



302号土坑全景（南から）



304号土坑断面（東から）



304・309号土坑全景（東から）



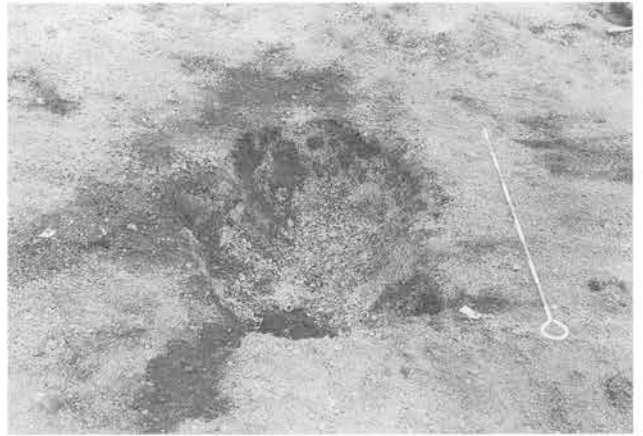
303号土坑全景 (南から)



306A・306B号土坑全景 (南から)



307・308号土坑全景 (東から)



311号土坑全景 (南から)



312~314号土坑全景 (北から)

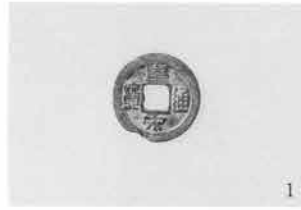


315・325号土坑全景 (西から)





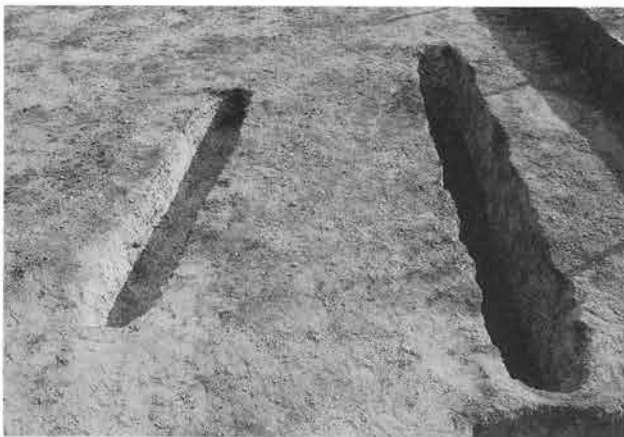
316・317号土坑全景（東から）



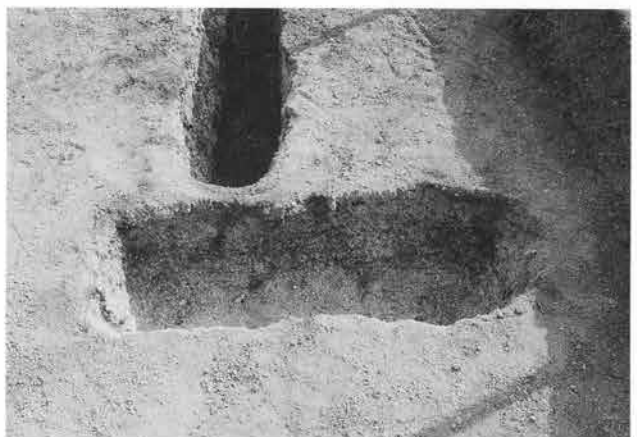
316号土坑出土遺物



319号土坑出土遺物



319・320号土坑全景（北から）



321号土坑全景（北から）



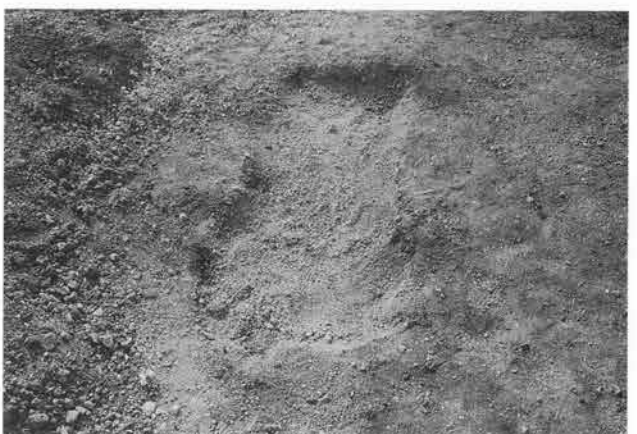
322号土坑全景（南東から）



323・324号土坑全景（南から）



326～328号土坑全景（西から）



330号土坑全景（東から）



331号土坑全景 (東から)



337号土坑全景 (西から)



333~336号土坑全景 (南から)



334号土坑出土遺物



338号土坑断面 (南から)



345号土坑全景 (南から)



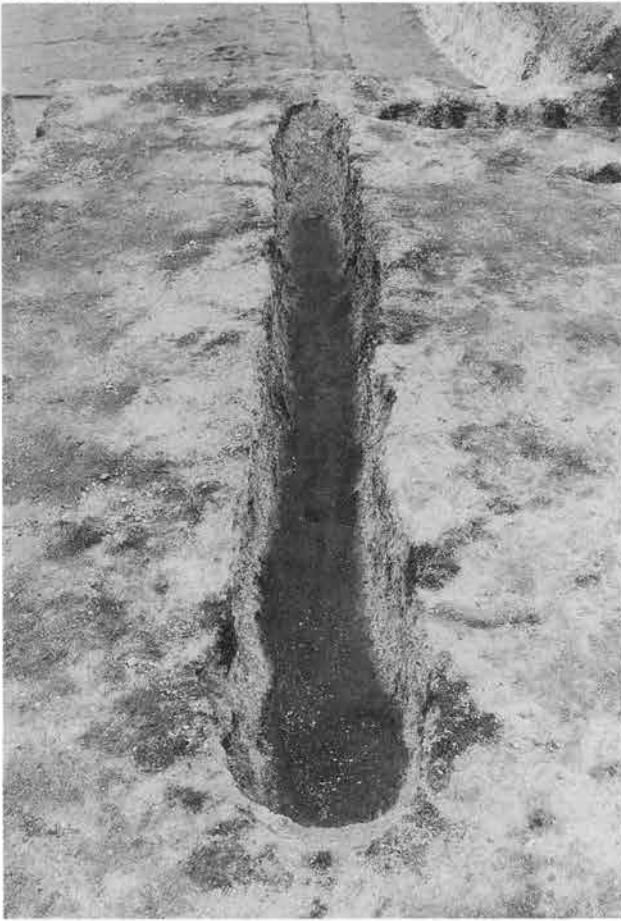
338号土坑全景 (南から)



343号土坑全景 (北から)



347号土坑全景 (東から)



344号土坑全景（北から）



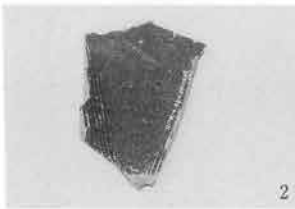
346号土坑全景（南から）



344号土坑断面（北から）



346号土坑断面（南から）



346号土坑出土遺物



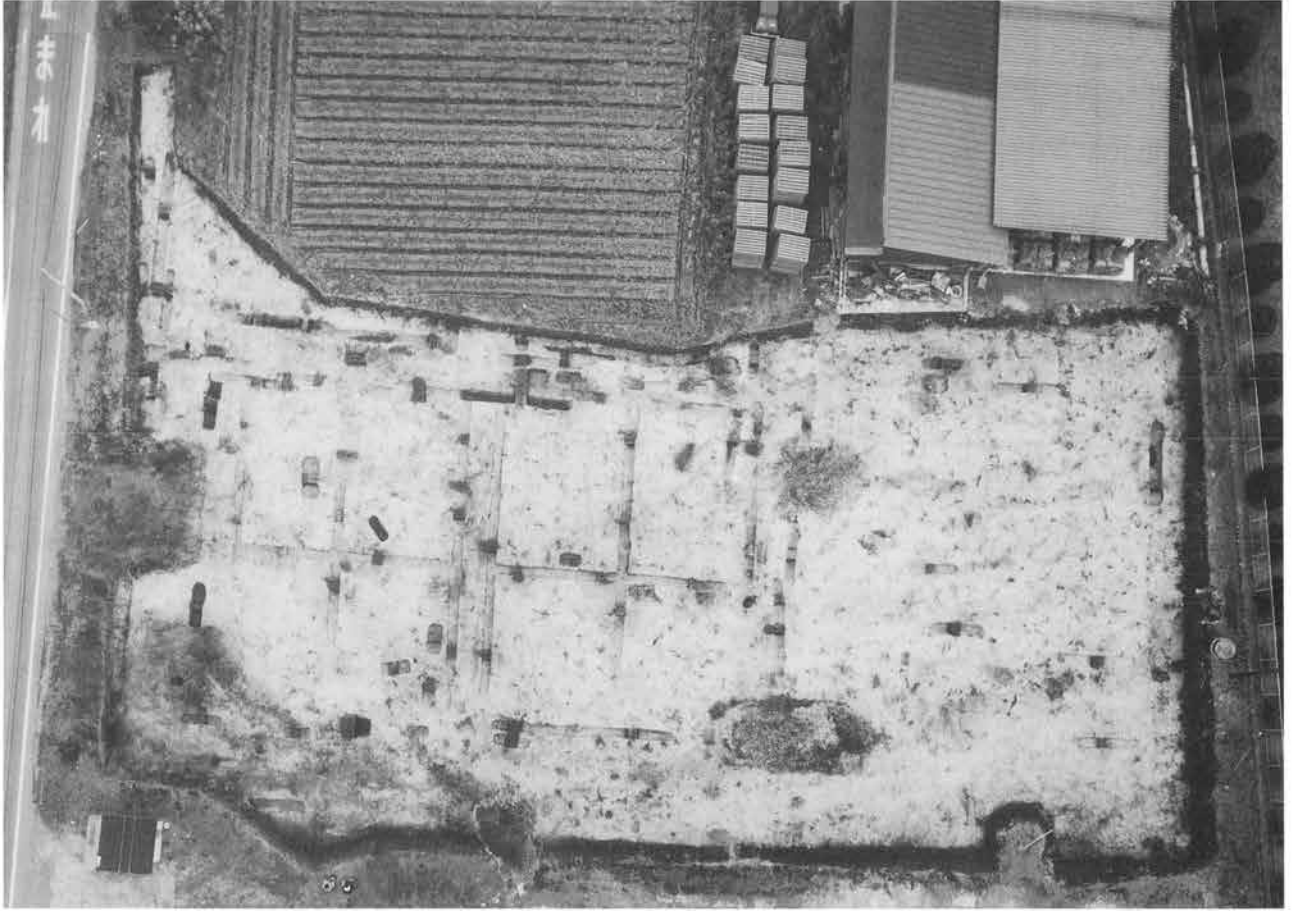
344号土坑出土遺物



遺構外出土遺物



調査風景



1区全景（上から）



北遠構全景（西から）



西壁断面全景（東から）



西壁断面（東から）



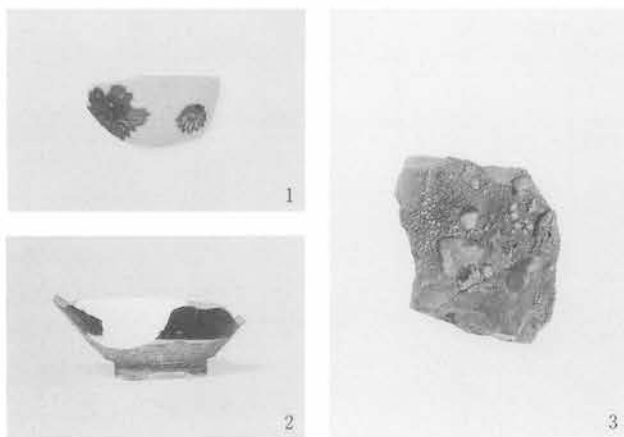
東壁断面全景（西から）



東壁断面（西から）



北遠構全景（北から）



北遠構出土遺物



東遠構全景（南から）



東遠構（東から）



1号土坑全景 (南から)



2号土坑全景 (西から)



3号土坑全景 (南から)



4号土坑全景 (西から)



6号土坑全景 (南から)



5号土坑全景 (南から)



12号土坑全景 (南から)



12号土坑出土遺物



12号土坑断面 (南から)



7・8号土坑全景（南から）



18号土坑全景（東から）



13号土坑全景（南から）



14号土坑全景（東から）



15号土坑全景（東から）



16・17号土坑全景（西から）

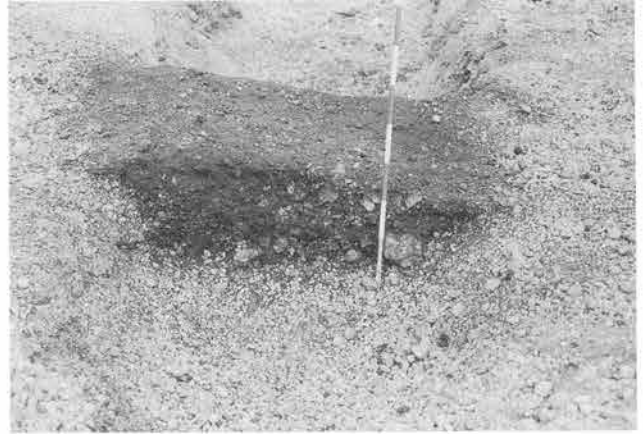


19～22・26・27号土坑全景（東から）





23~25・30~32・36~38・42・48・49・69~73・84号土坑(南から)



32号土坑断面(南から)



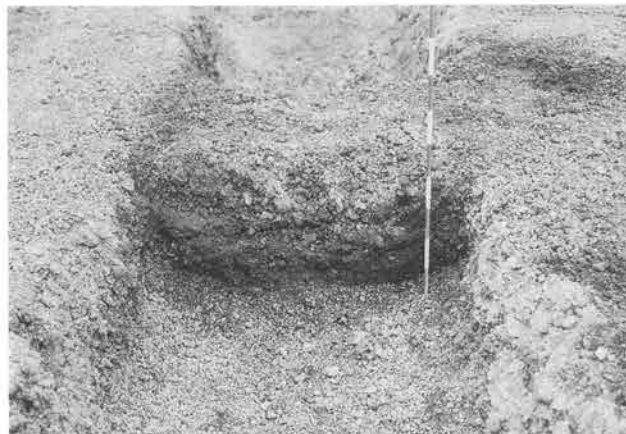
38号土坑断面(南から)



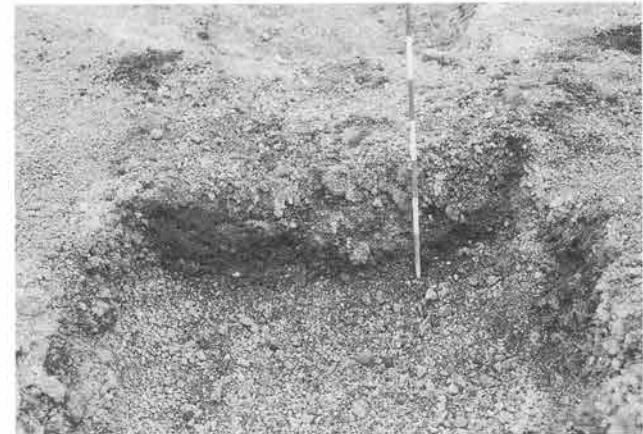
33号土坑全景(東から)



33号土坑断面A(東から)



33号土坑断面B(東から)



33号土坑断面C(東から)



34・39号土坑全景（南から）



40・41・88号土坑全景（南から）



43～46号土坑全景（東から）



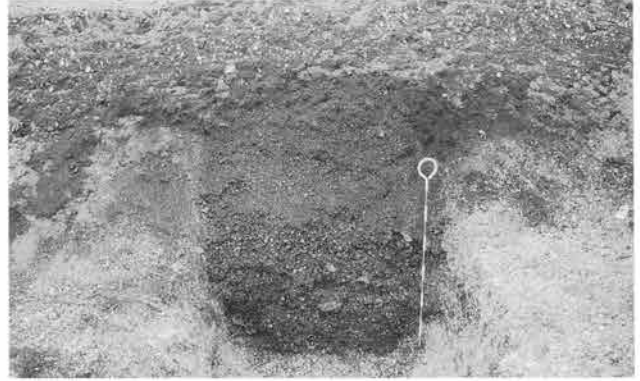
43号土坑断面A（東から）



43号土坑断面B（東から）



47・75号土坑全景（北から）



47号土坑断面（西から）



50～52・61号土坑全景（南西から）



53～55号土坑全景（東から）



58号土坑全景（南から）



60号土坑全景（南から）



56号土坑全景（西から）



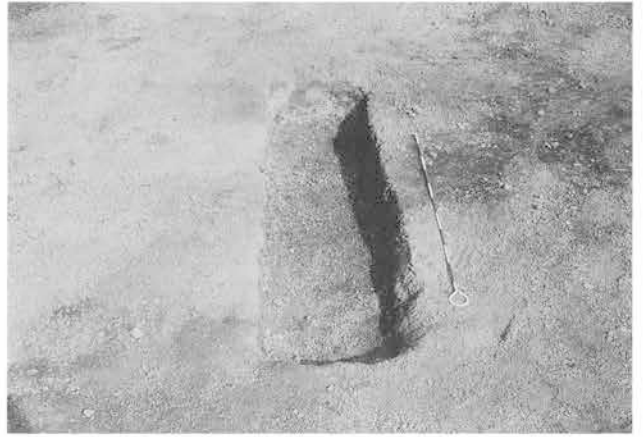
57号土坑全景（南西から）



63号土坑全景（南から）



62号土坑全景 (南から)



64号土坑全景 (南から)



68号土坑全景 (西から)



74号土坑全景 (西から)



79～83・85号土坑全景 (西から)



79・80号土坑断面 (西から)



80号土坑出土遺物



86・87号土坑全景（南から）



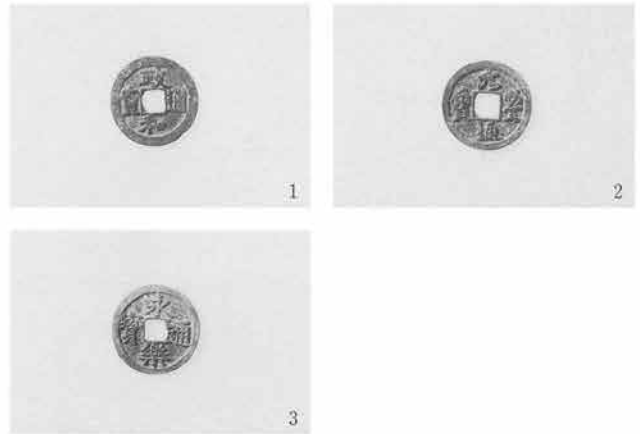
89号土坑全景（東から）



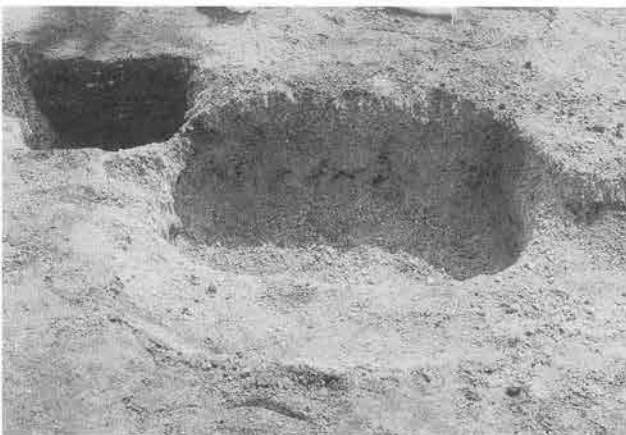
89号土坑骨出土状況



道路拡張部全景（北から）



89号土坑出土遺物



92・93号土坑全景（西から）



調査風景（南から）



2区北半部全景（南から）



2区南半部全景（上から）



1号溝・畠・ピット列全景（北から）



北遠構全景（西から）



1～7・11・15・16号土坑群 (南から)



8号土坑全景 (南から)



9号土坑全景 (東から)



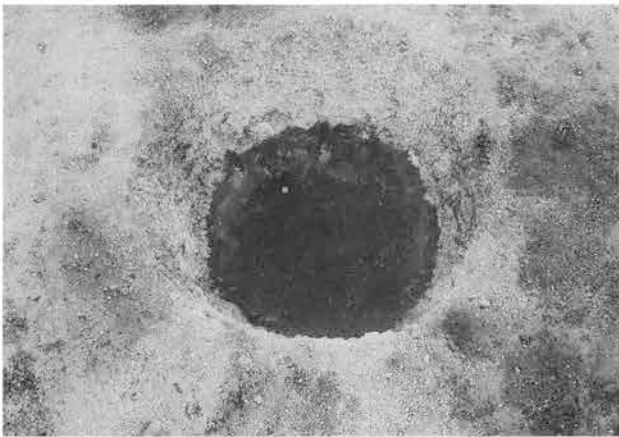
10号土坑全景 (東から)



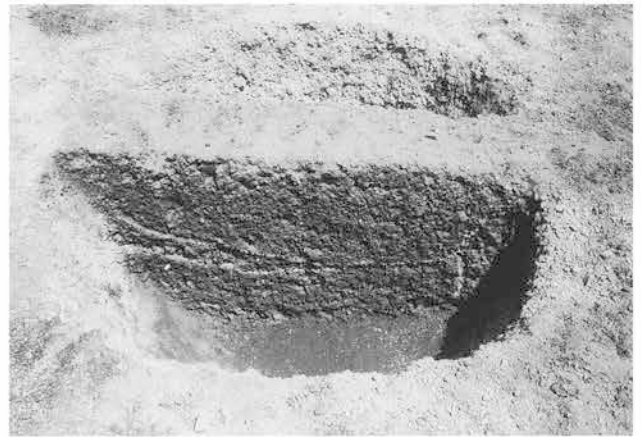
12号土坑全景 (南から)



13・14号土坑全景 (南東から)



23号土坑全景 (南から)

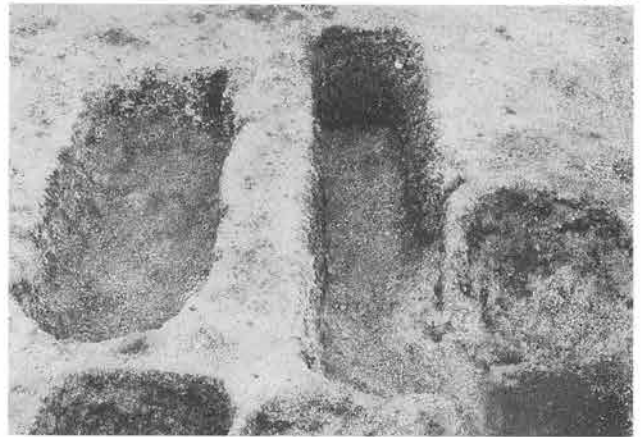


23号土坑断面 (南から)





24号土坑全景 (東から)



26号土坑全景 (南から)



25~29号土坑全景 (南から)



26・27号土坑断面 (南から)



1 26号土坑出土遺物



30号土坑全景 (東から)



31・32・36・37号土坑全景 (北から)



33~35号土坑全景 (南から)



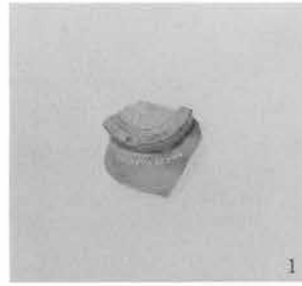
38・39号土坑全景（南から）



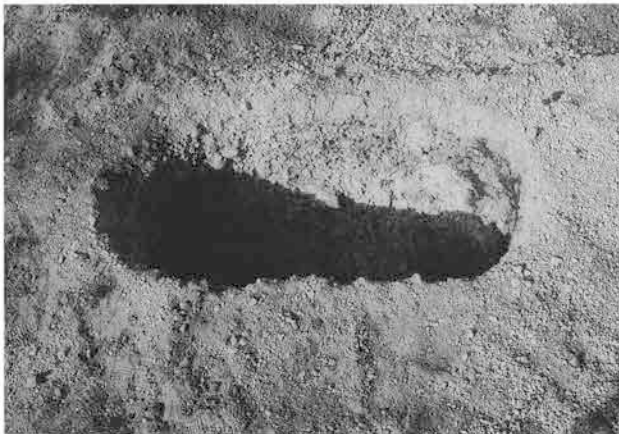
39号土坑断面A



39号土坑断面B



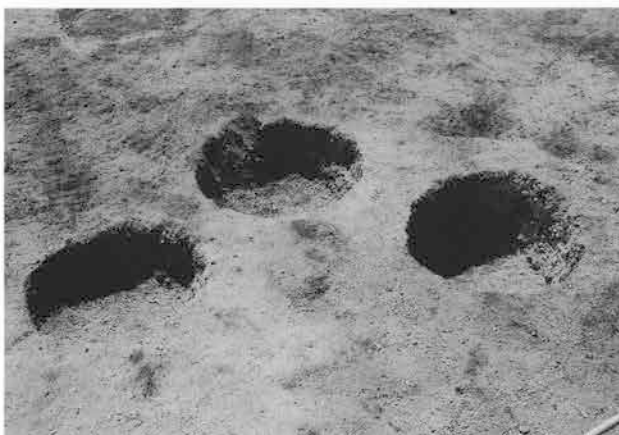
39号土坑出土遺物



40号土坑全景（北西から）



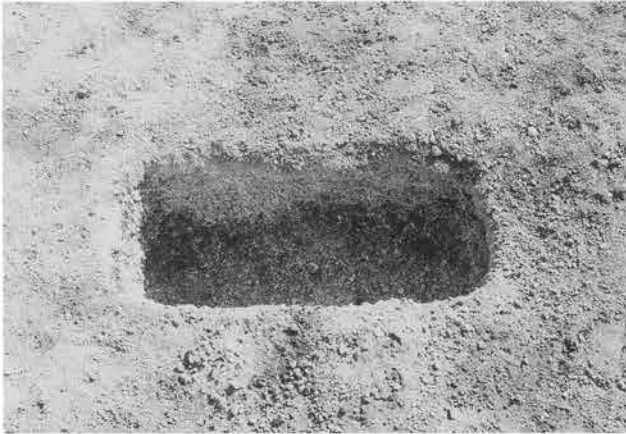
41・42号土坑全景（南から）



43～45号土坑全景（北から）



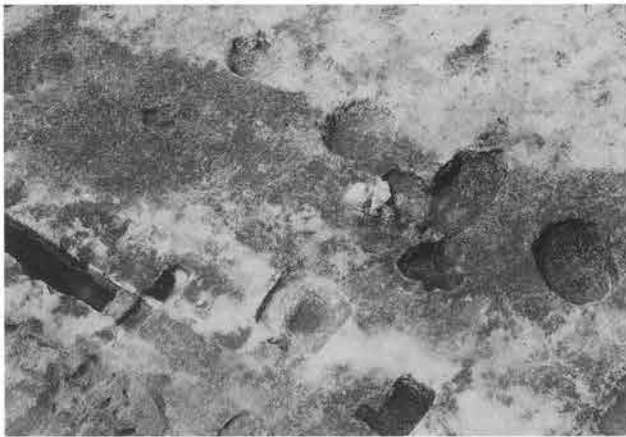
43～45号土坑断面（南から）



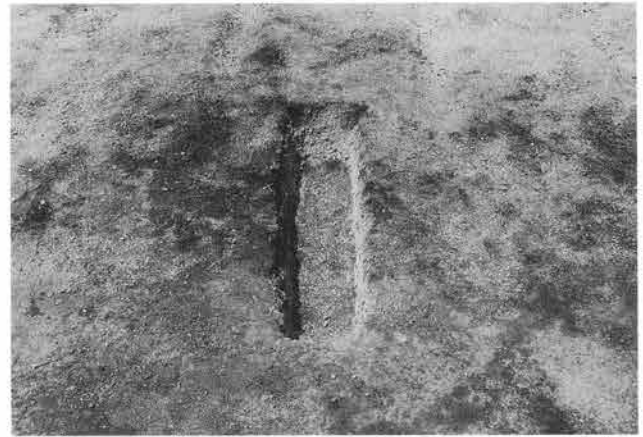
46号土坑全景 (南から)



47号土坑全景 (西から)



48・49・52・54～57号土坑全景 (北東から)



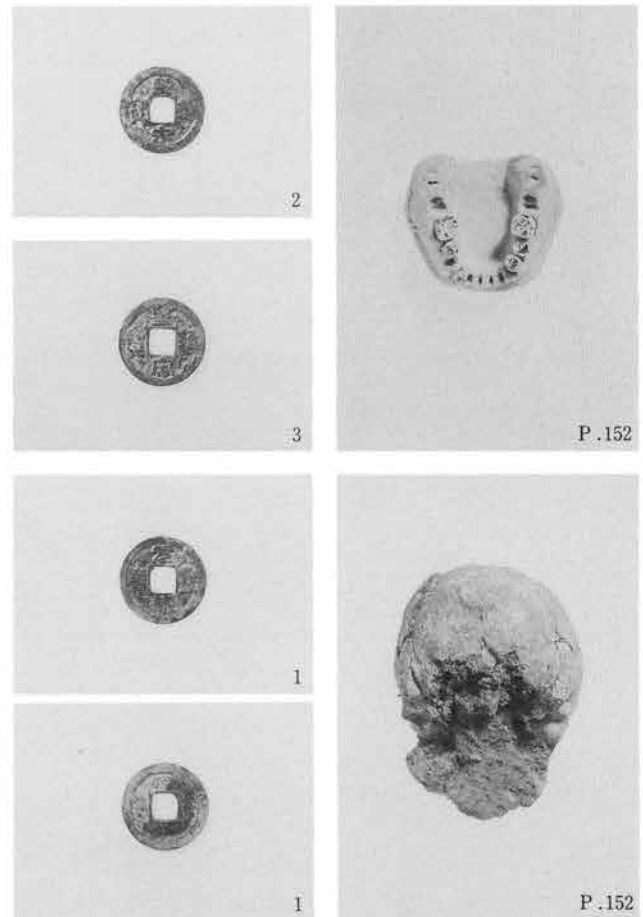
53号土坑全景 (東から)



51号土坑全景 (東から)



51号土坑遺物出土状況 (南から)



51号土坑出土遺物



3区全景（北から）



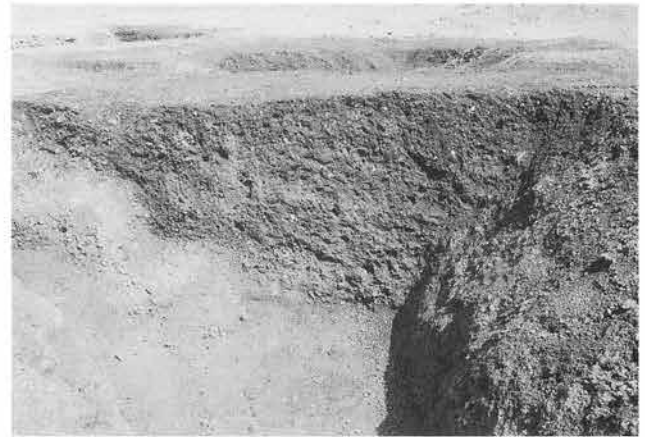
3区西部全景（北から）



1号溝全景（東から）



1号溝断面A（東から）



1号溝断面B（東から）



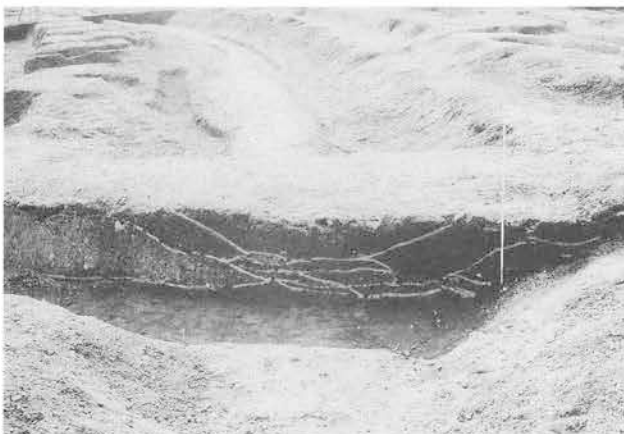
1号溝断面C（西から）



1号溝断面D（西から）



道路遺構全景（南から）



道路遺構断面A（南から）



道路遺構断面B（南から）



道路遺構断面C（南から）



道路遺構出土遺物



畠跡全景（北東から）



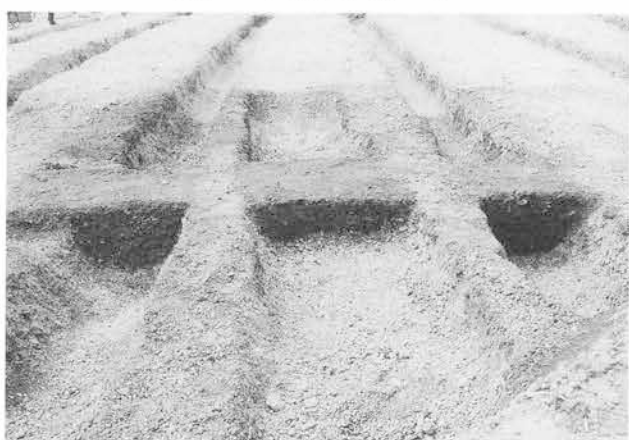
畠跡全景（北から）



畠跡 a～d 列断面 (南から)



畠跡 e～h 列断面 (東から)



畠跡 j～l 列断面 (東から)



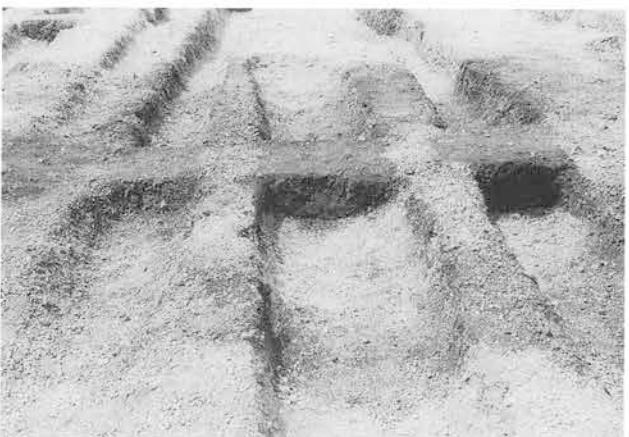
畠跡 m～q 列断面 (東から)



畠跡 n・p 列断面 (東から)



畠跡 s・t 列断面 (東から)



畠跡 u～x 列断面 (東から)



畠跡 y～ab 列断面 (東から)





畠跡 ac・ae 列断面 (東から)



畠跡 ad~af 列断面 (東から)



畠跡 af~ah 列断面 (東から)



畠跡骨出土状況 (西から)



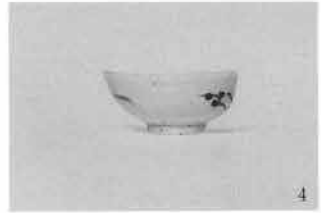
1



2



3



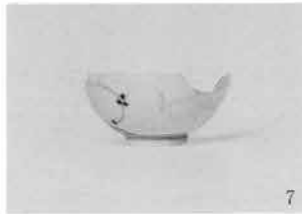
4



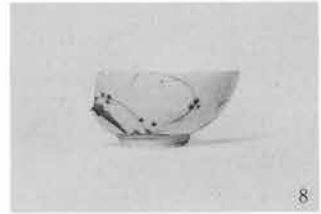
5



6



7



8



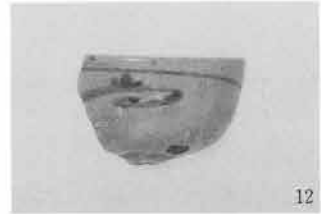
9



10



11



12



13



14

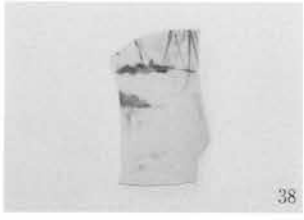
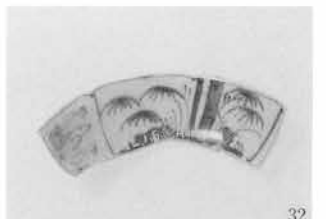
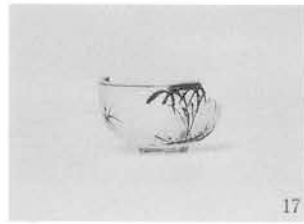


16



15

畠跡出土遺物





45



47



46



48



46



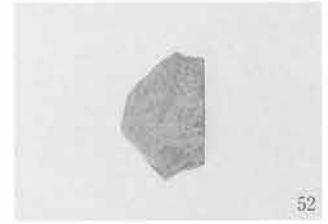
49



50



51



52



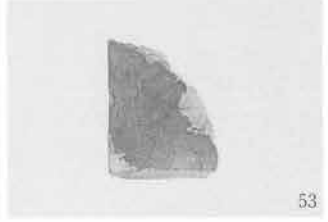
54



57



53



53



55



55



56



56



58



59



60



61



62



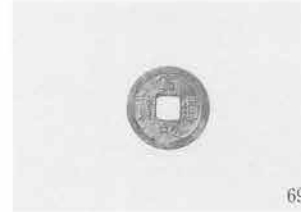
63



64



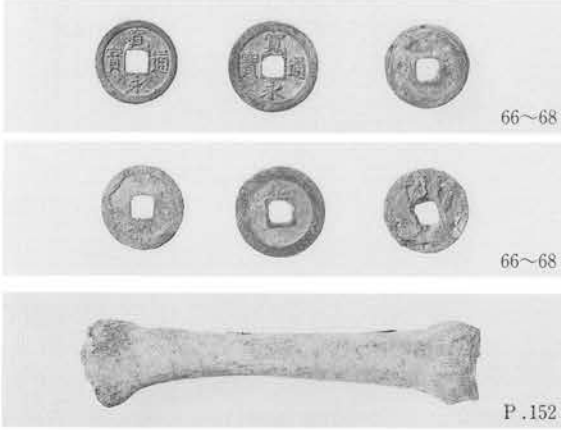
65



69



70



畠跡出土遺物



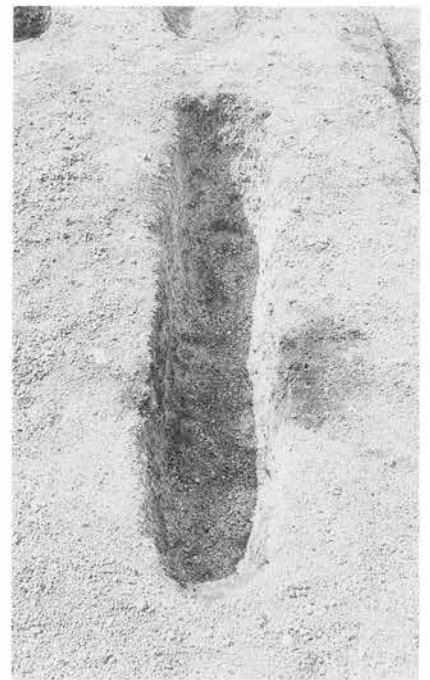
調査風景 (南東から)



1号土坑全景 (南から)



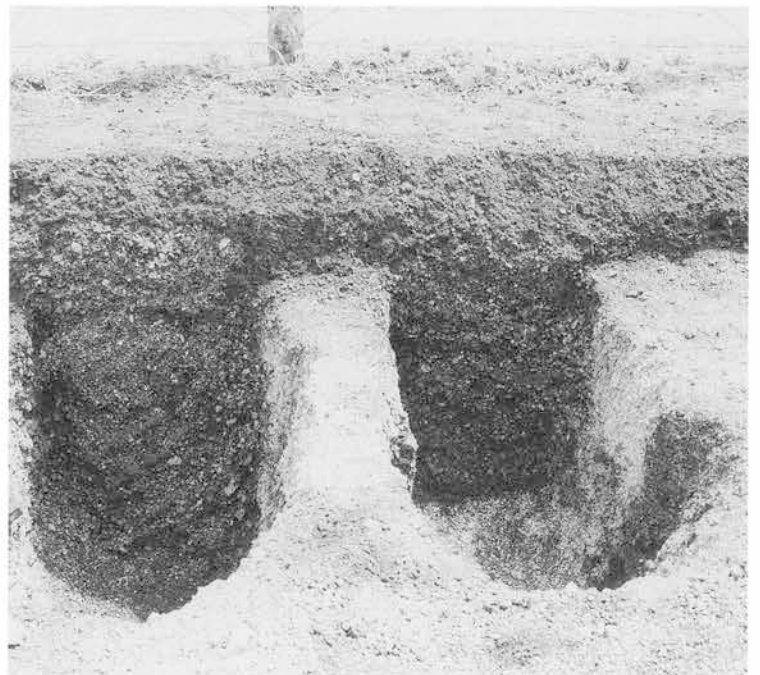
2号土坑全景 (東から)



3号土坑全景 (東から)



4・5号土坑全景 (西から)



4・5号土坑断面 (西から)



6号土坑全景（東から）



8・9・10号土坑全景（東から）



12号土坑全景（東から）



7号土坑全景（南から）



11・44号土坑全景（西から）



13号土坑全景（南から）



14号土坑全景（西から）



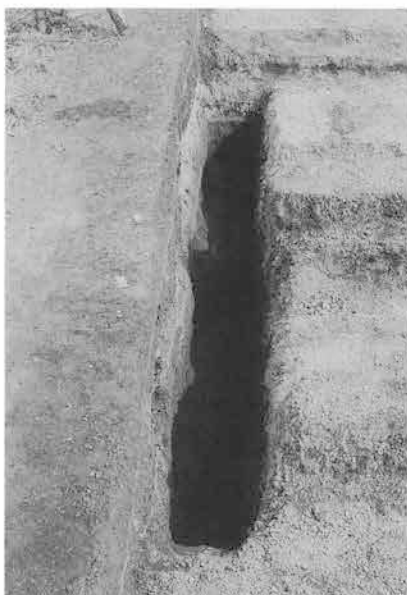
16号土坑全景（東から）



17・50号土坑全景（西から）



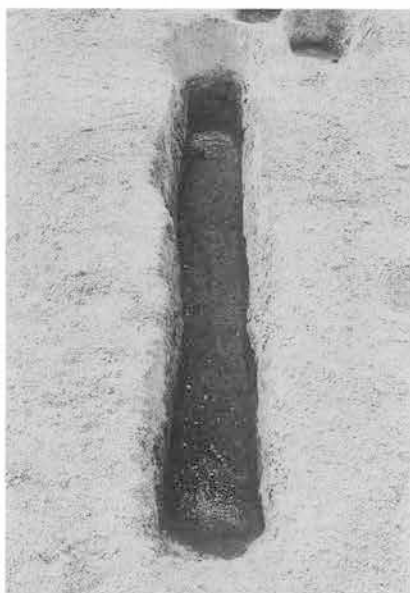
15号土坑全景 (北から)



20号土坑全景 (南から)



22号土坑全景 (東から)



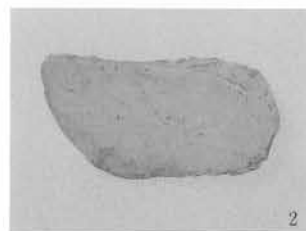
18号土坑全景 (東から)



18号土坑断面 (東から)



1



2

18号土坑出土遺物



19号土坑全景 (南から)



19号土坑断面 (北から)



21号土坑全景 (北西から)



21号土坑断面 (南東から)



1



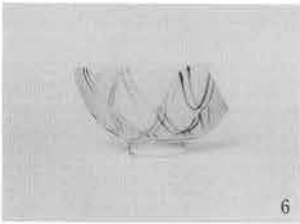
2



3



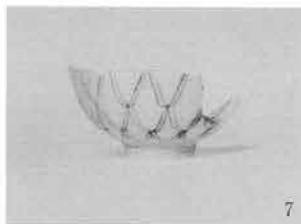
4



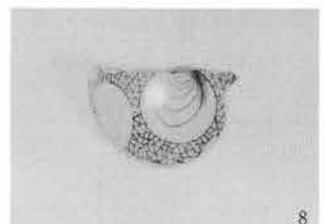
6



5



7



8



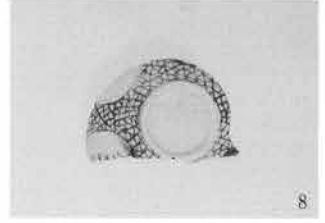
9



10



11



8



12



14



13



15



17



18



16



16

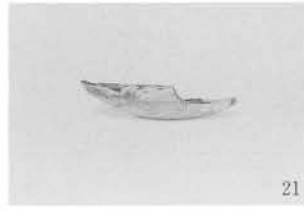
21号土坑出土遺物



19



20



21



22



23



25



25

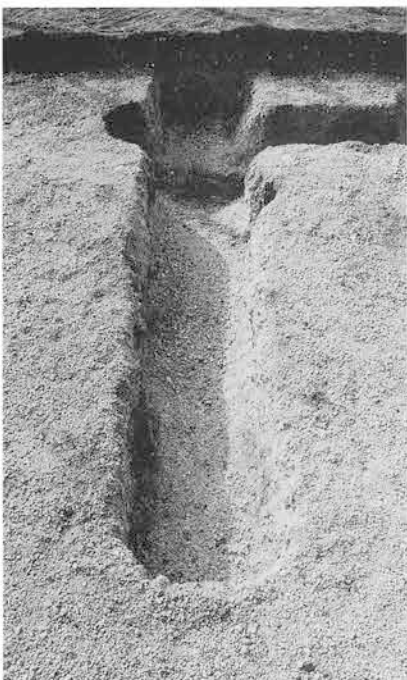


24



26

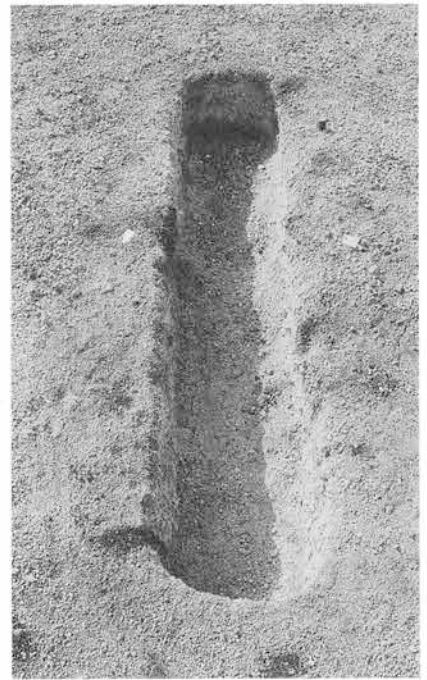
21号土坑出土遺物



23号土坑全景 (東から)



24号土坑全景 (東から)



25号土坑全景 (東から)



26号土坑全景 (東から)



28号土坑全景 (南から)



29号土坑全景 (南から)





30号土坑全景 (西から)



31号土坑全景 (西から)



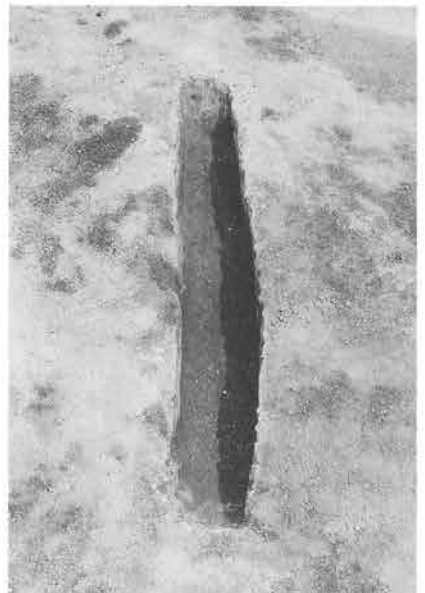
32号土坑全景 (東から)



33号土坑全景 (東から)



34号土坑全景 (東から)



36号土坑全景 (南から)



37号土坑全景 (北から)



40号土坑全景 (南から)



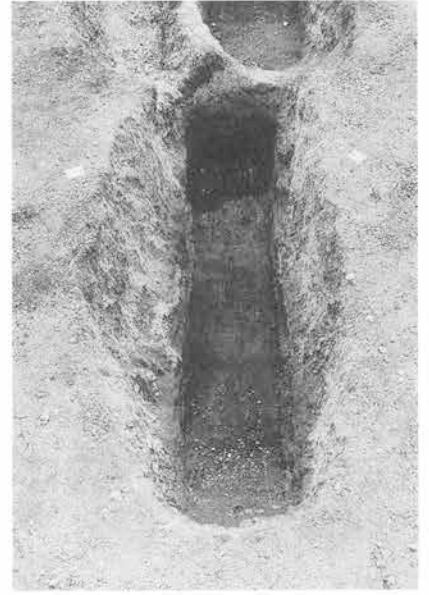
41号土坑全景 (西から)



42号土坑全景 (南から)



43号土坑全景 (西から)



45号土坑全景 (東から)



46・47号土坑全景 (西から)



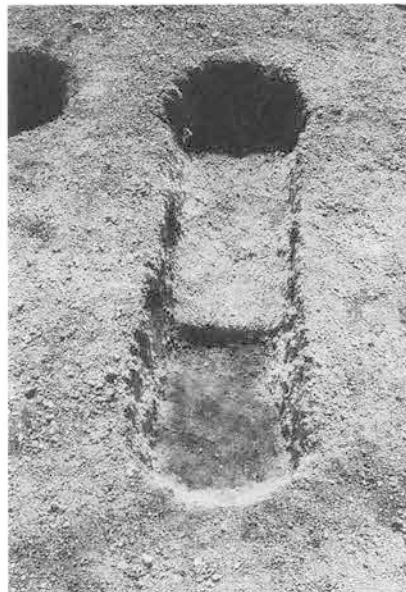
48号土坑全景 (西から)



49号土坑全景 (南から)



51号土坑全景 (南から)



52号土坑全景 (西から)



53号土坑全景 (南から)



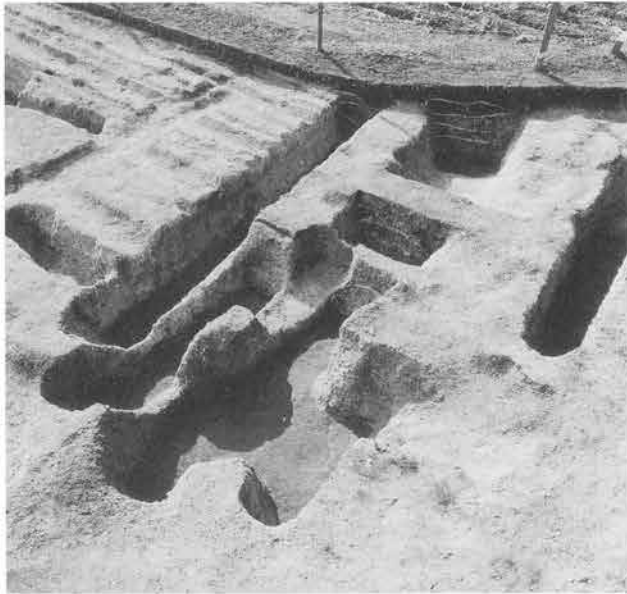
54・55号土坑全景（西から）



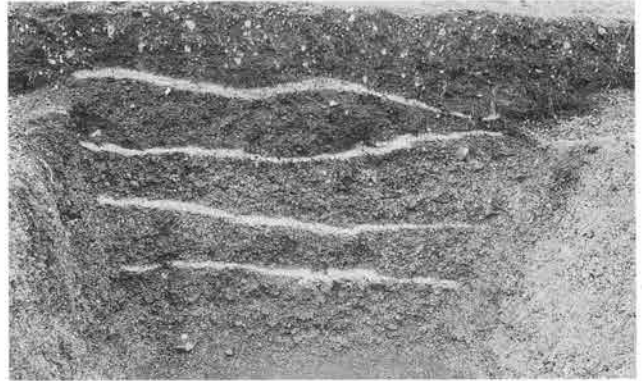
56号土坑全景（南から）



57・58号土坑全景（南から）



59～65号土坑群（東から）



61号土坑断面（東から）



68・69号土坑断面（南から）



66～72号土坑断面（南から）



調査風景



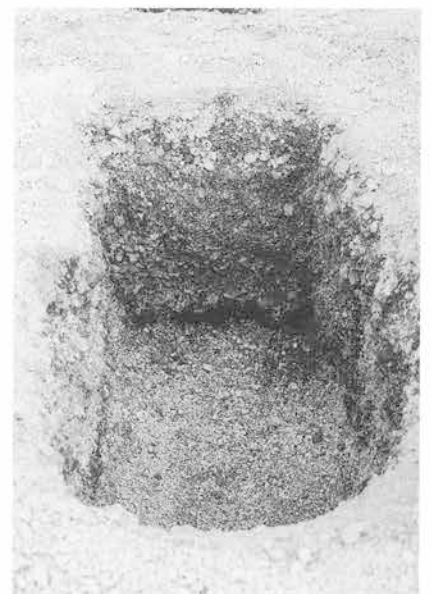
4・5区全景



1号土坑断面（西から）



2号土坑断面（西から）



6号土坑断面（西から）



12号土坑断面 (南から)



14号土坑断面 (北から)



10土-1



15土-1



18土-1



24土-1

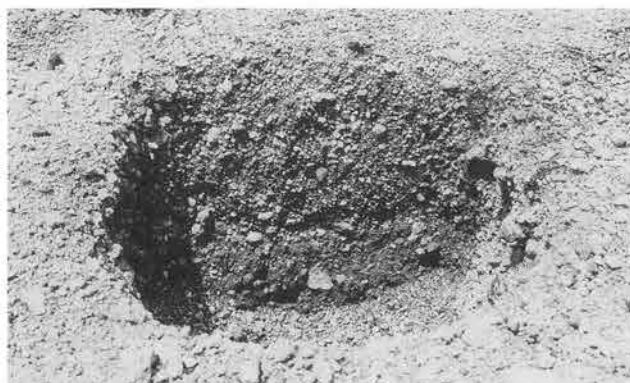
土坑出土遺物



5号土坑断面 (西から)



26号土坑断面 (南から)



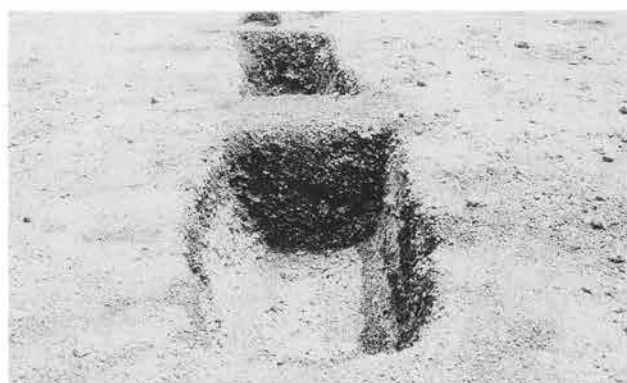
27号土坑断面 (東から)



28号土坑断面 (南から)



29号土坑断面 (南から)



35号土坑断面 (西から)



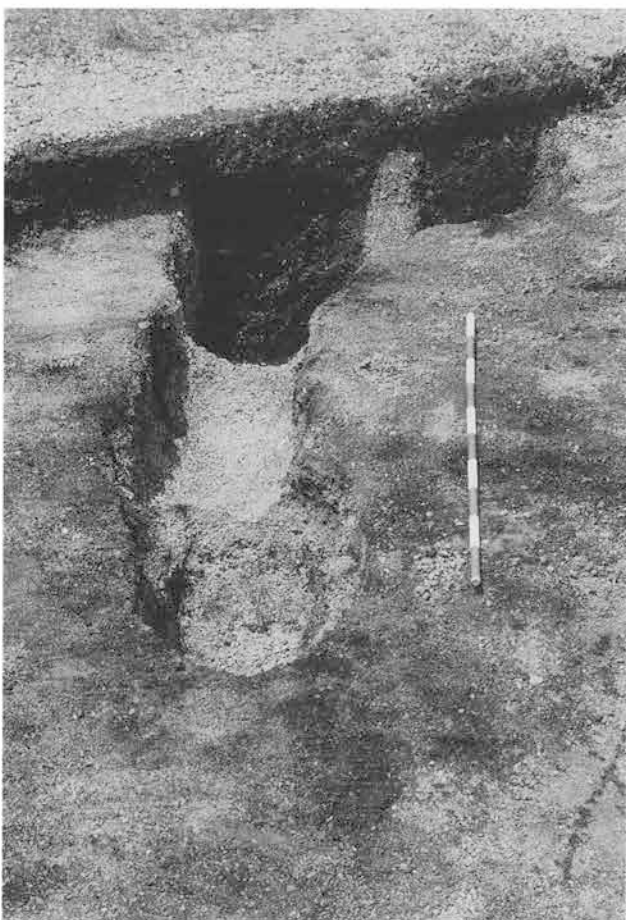
38・39号土坑全景（東から）



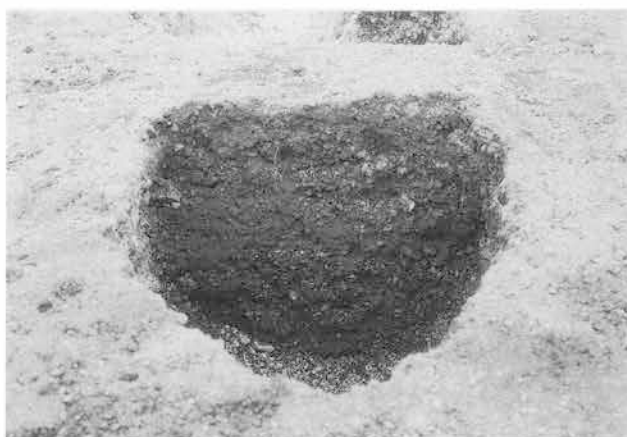
38・39号土坑断面（西から）



38号土坑出土遺物



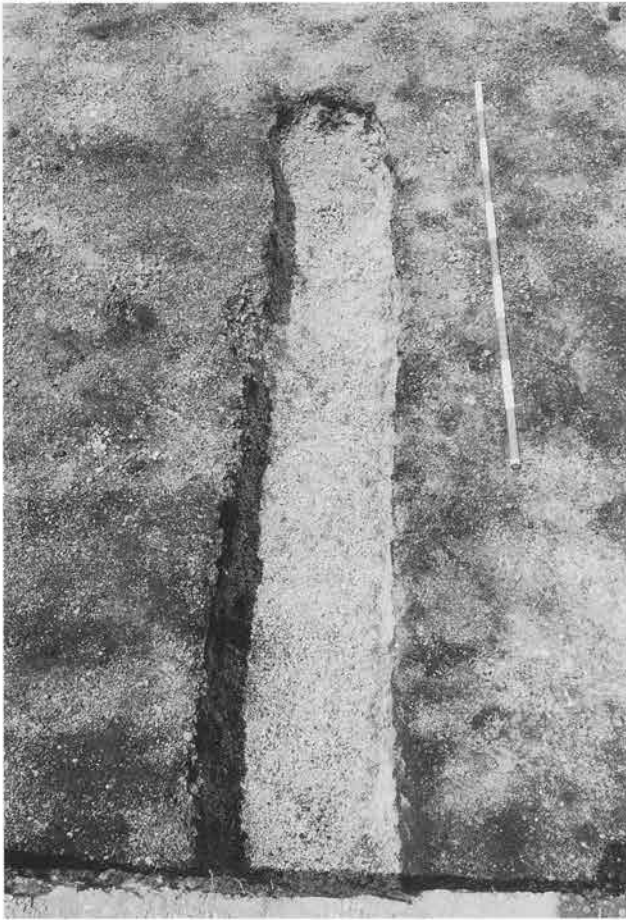
40～43号土坑全景（東から）



40号土坑断面（東から）



42・43号土坑断面（東から）



44号土坑全景（東から）



44号土坑断面（西から）



44号土坑出土遺物



45・61号土坑全景（北から）



45号土坑全景（北から）



45号土坑断面A（北から）



45号土坑西壁の工具痕 (南東から)



45号土坑北壁の工具痕 (南から)



45号土坑北壁の工具痕 (南から)



61号土坑全景 (北から)



61号土坑断面A (西から)



61号土坑断面B (北から)



46・47号土坑全景 (北から)



46・47号土坑断面 (南から)





48~51号土坑全景（東から）



48・49号土坑断面（東から）



50号土坑断面（西から）



50号土坑断面（東から）



51号土坑断面（東から）



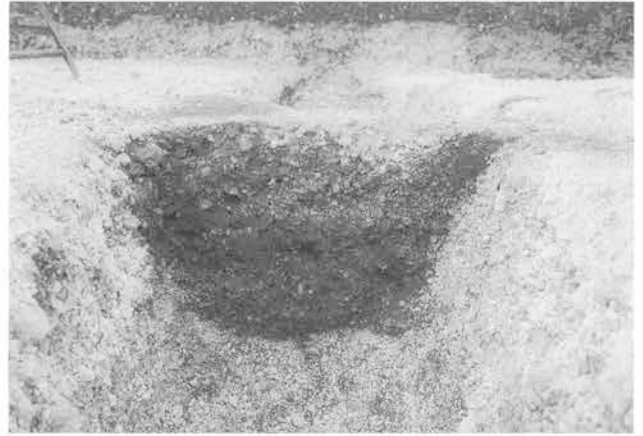
52・53号土坑全景（西から）



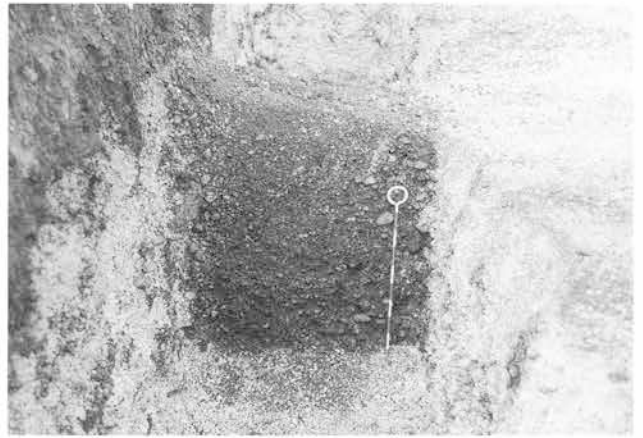
52号土坑断面（西から）



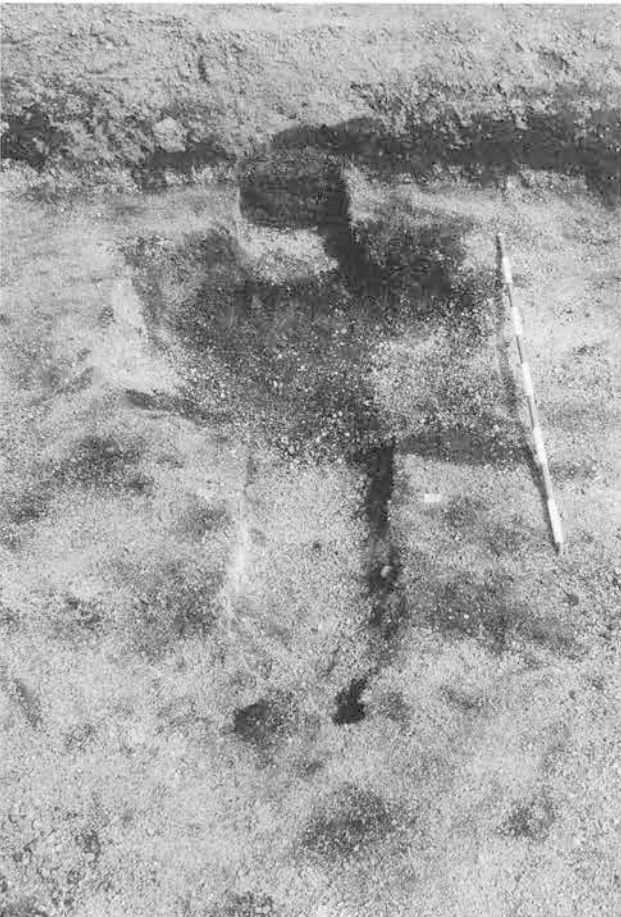
54号土坑全景（北東から）



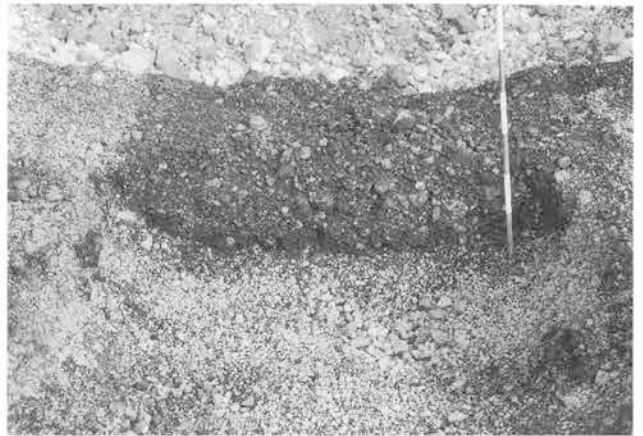
53号土坑断面（東から）



54号土坑断面（南から）



55号土坑全景（西から）



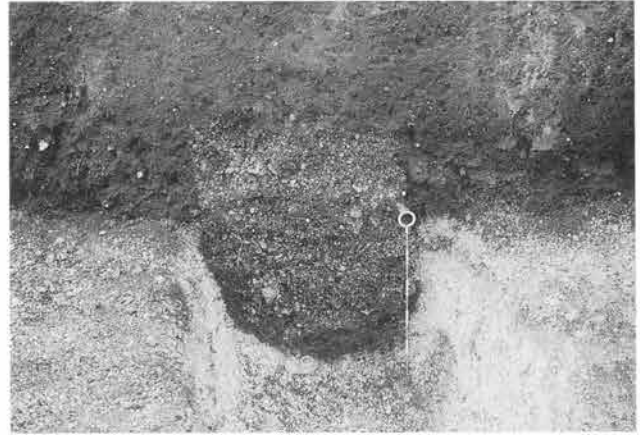
55号土坑断面（西から）



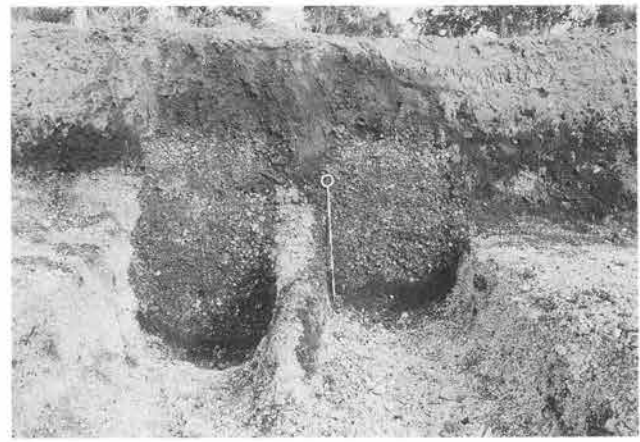
56号土坑全景（東から）



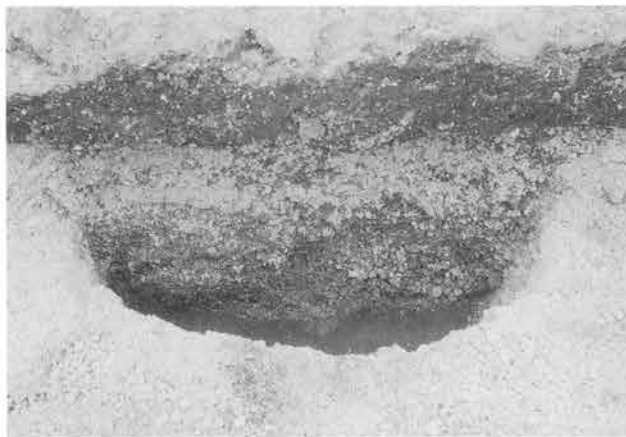
57~59号土坑全景 (西から)



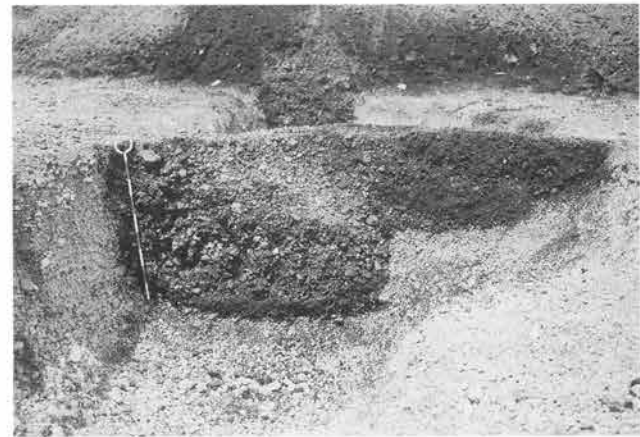
57号土坑断面 (東から)



57・58号土坑断面 (西から)



60号土坑断面 (東から)



57・59号土坑断面 (東から)



調査風景



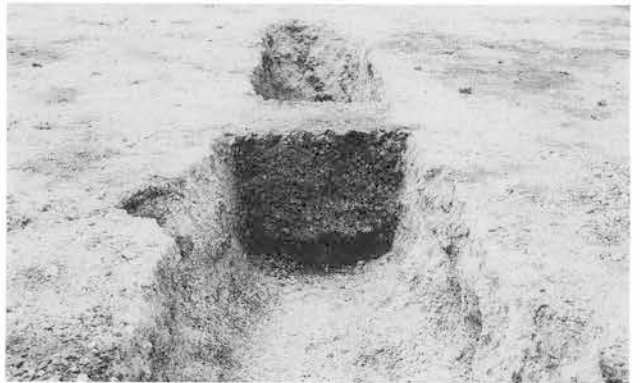
4区全景 (南から)



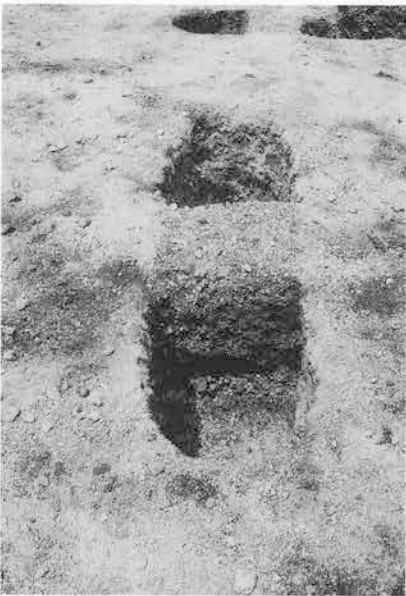
5区全景（上から）



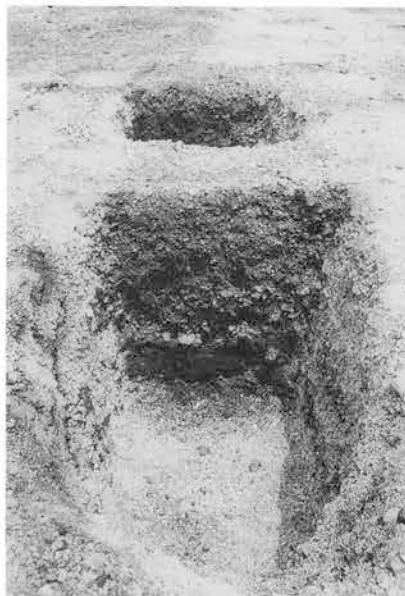
調査風景



25号土坑断面（東から）



9号土坑断面（東から）



13号土坑断面（南から）



7号土坑出土遺物



12号土坑出土遺物



調査発掘前全景（北から）



調査発掘後現在の状況



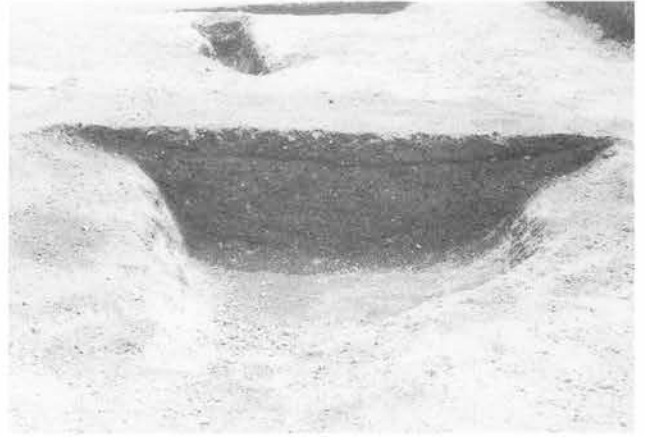
6区試掘風景（北から）



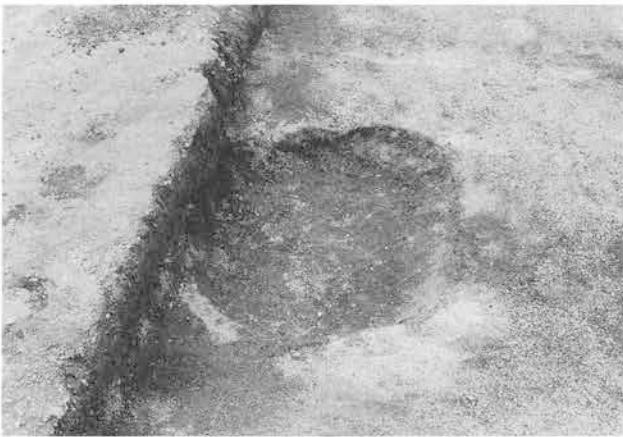
1・2号土坑、1号石組全景（南から）



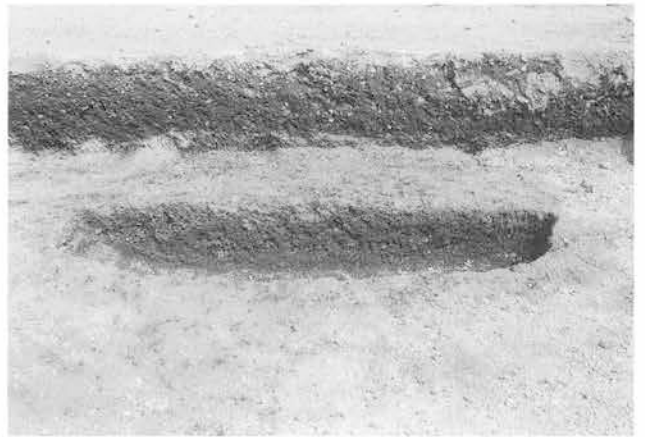
1号土坑全景 (北から)



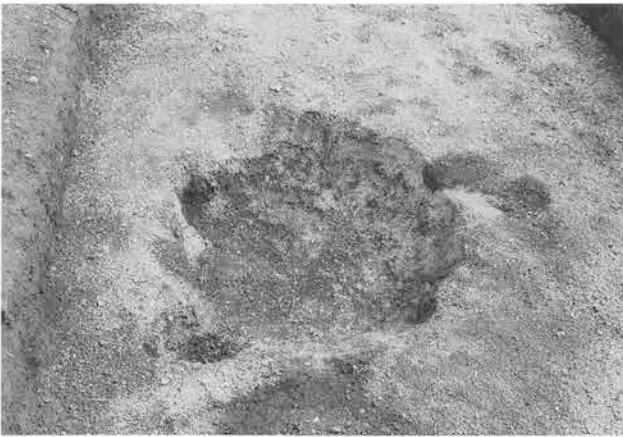
1号土坑断面 (北から)



2号土坑全景 (北から)



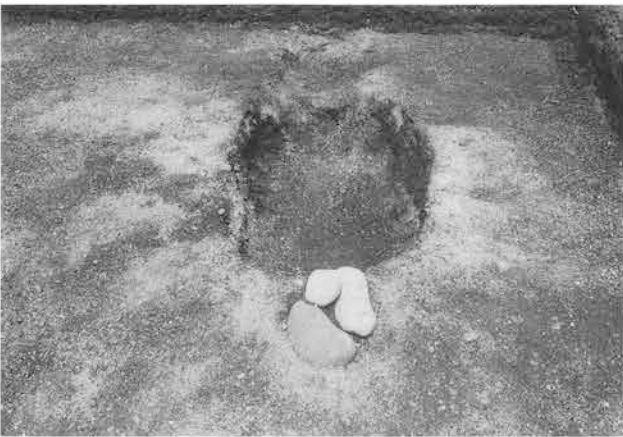
2号土坑断面 (北から)



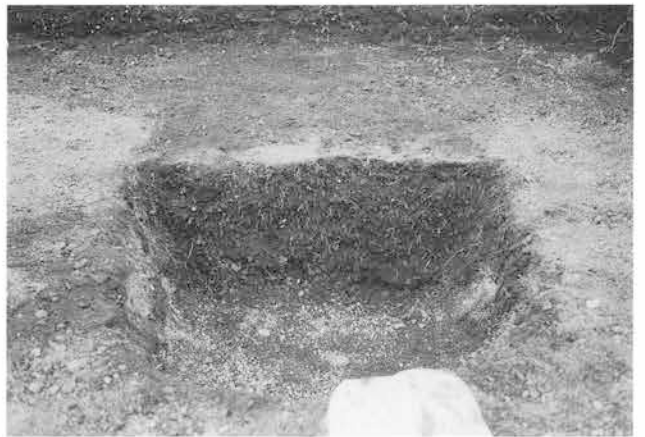
3号土坑全景 (南から)



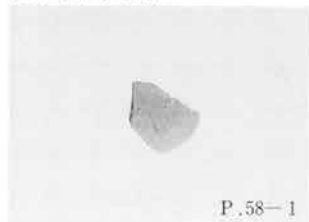
3号土坑断面 (西から)



4号土坑全景 (東から)



4号土坑断面 (東から)



P.58-1



P.58-2



P.78-1



P.78-2



P.78-3



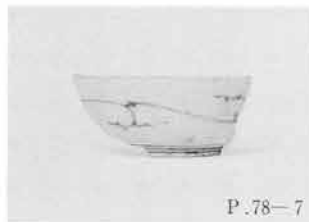
P.78-4



P.78-5



P.78-6



P.78-7



P.78-7



P.78-8



P.78-10



P.78-11



P.78-13



P.78-14



P.78-9



P.78-12



P.78-15



P.79-19



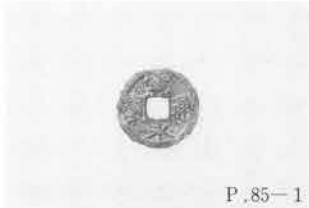
P.79-16



P.79-17



P.79-20



P.85-1



P.79-18

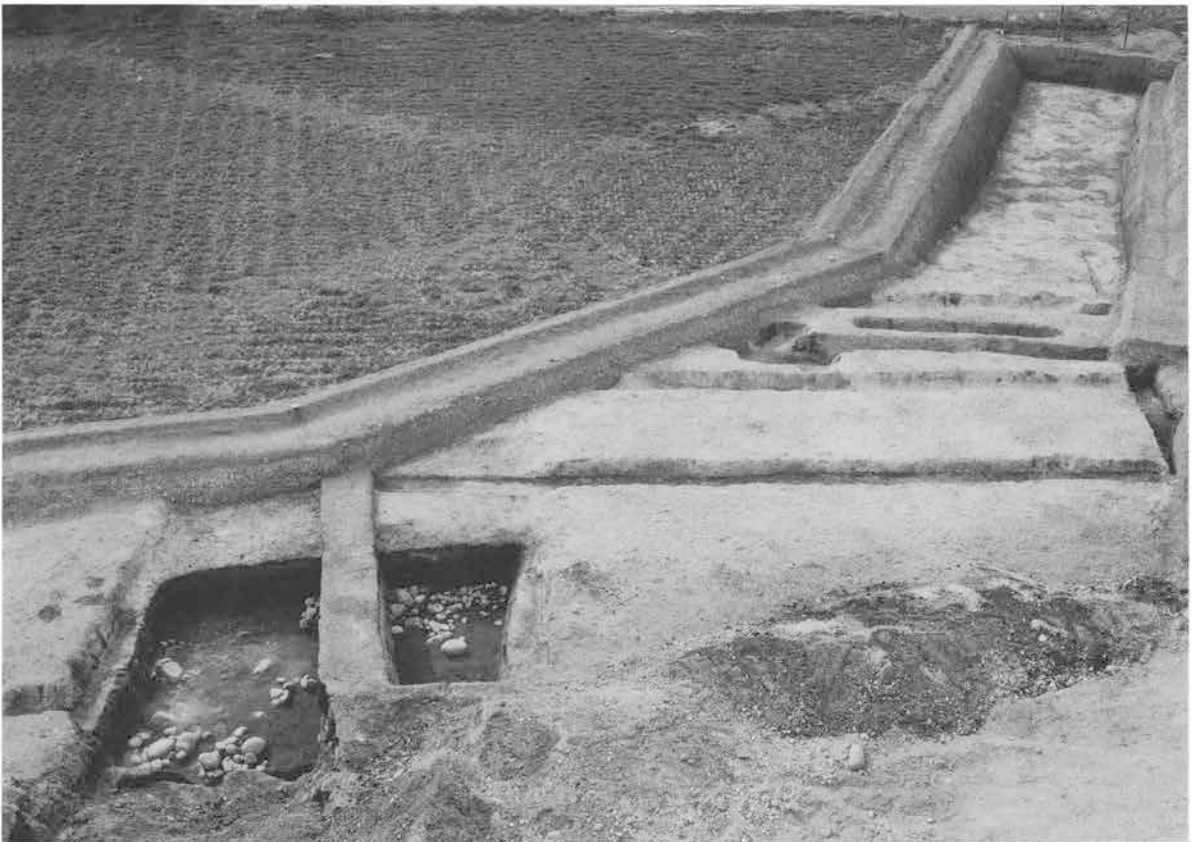


P.79-21





5区北西部全景（南から）



5区北西部全景（南東から）

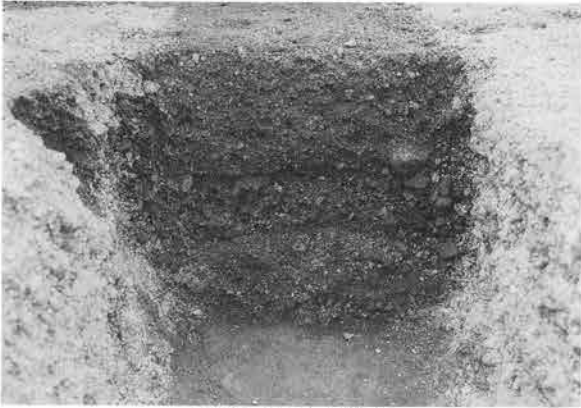




274・361・372号土坑全景



274号土坑土層断面



361号土坑土層断面



372号土坑土層断面



353号土坑全景



353号土坑土層断面



354・355・357号土坑全景



357号土坑人骨出土状態



356号土坑全景



356号土坑人骨出土状態



358号土坑全景



358号土坑土層断面



359・365号土坑全景



359号土坑土層断面



365号土坑土層断面



360・364号土坑全景



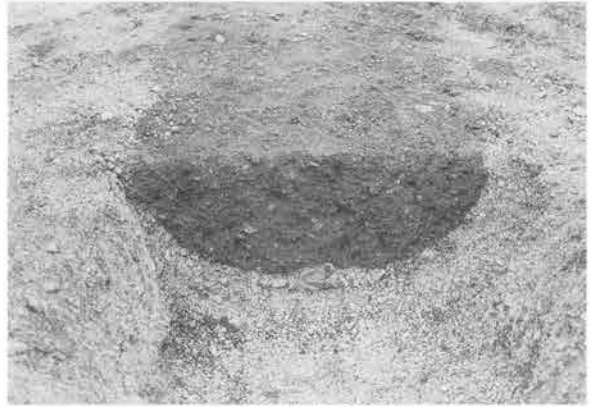
360号土坑土層断面



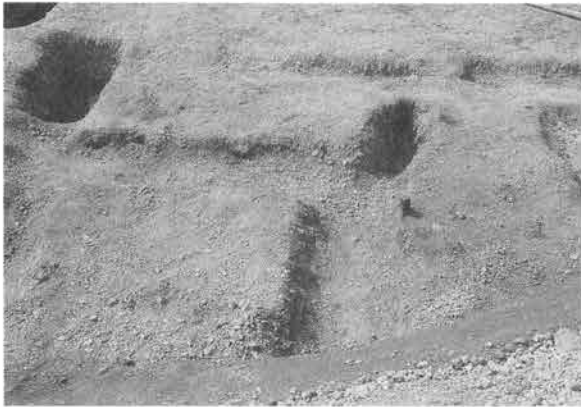
364号土坑土層断面



362号土坑全景



362号土坑土層断面



363・367・368号土坑全景



363号土坑土層断面



367号土坑土層断面



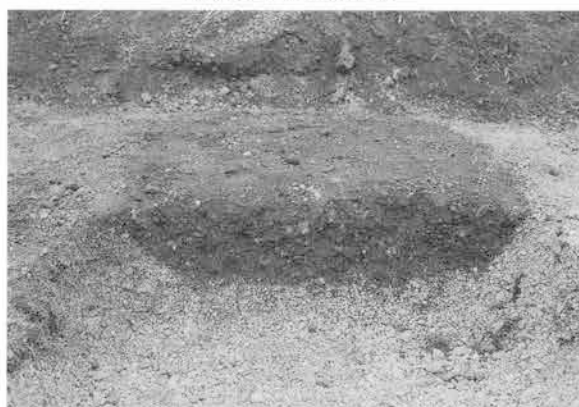
368号土坑土層断面



366・371号土坑全景



366号土坑土層断面



371号土坑土層断面



369・370号土坑全景



369号土坑土層断面



370号土坑土層断面



373・375号土坑全景



374号土坑全景



374号土坑人骨出土状態



374号土坑人骨出土状態



374号土坑人骨出土状態



376・390号土坑全景



376号土坑土層断面



390号土坑土層断面



377・379号土坑全景



377・379号土坑土層断面



378号土坑全景



378号土坑土層断面



381号土坑全景



382号土坑全景



383・384・392号土坑全景



383・384・392号土坑土層断面



384・385号土坑全景



386号土坑全景



386号土坑土層断面



387・388号土坑全景



389号土坑全景



7号竪穴全景



7号竪穴土層断面



7号竪穴河原石出土状態



7号竪穴河原石出土状態（西壁部）



7号竪穴河原石出土状態（南東コーナー部）



7号竖穴西壁工具痕



7号竖穴西壁工具痕



7号竖穴北壁近く焼土・炭化物出土状態



244号土坑土層断面



244~246号土坑全景



244号土坑骨出土状態



246号土坑土層断面





P.109-19



P.109-20



P.109-21



P.118-1



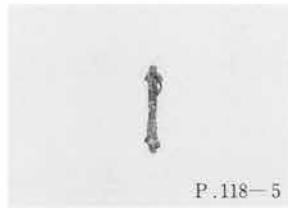
P.118-2



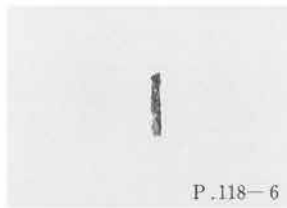
P.118-3



P.118-4



P.118-5



P.118-6



P.118-7



P.118-8



P.118-9



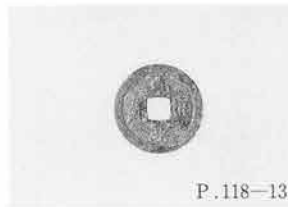
P.118-10



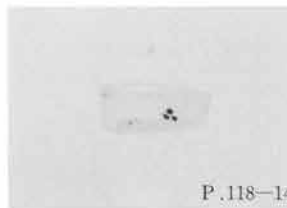
P.118-11



P.118-12



P.118-13



P.118-14



P.118-14



P.118-16



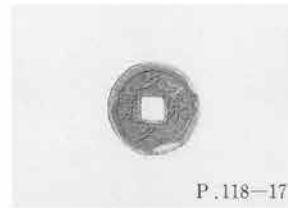
P.118-16



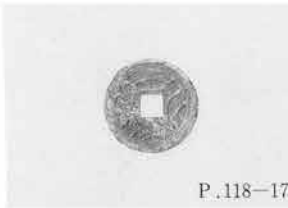
P.118-15~18



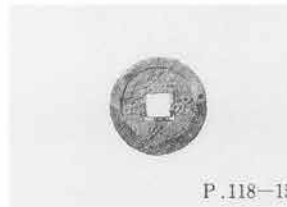
P.118-15~18



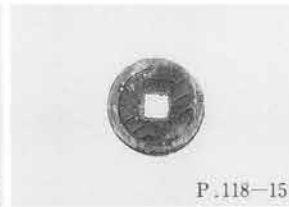
P.118-17



P.118-17



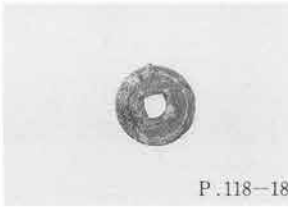
P.118-15



P.118-15



P.118-18



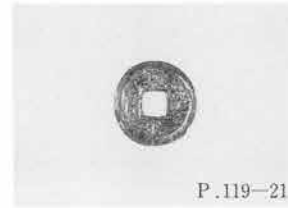
P.118-18



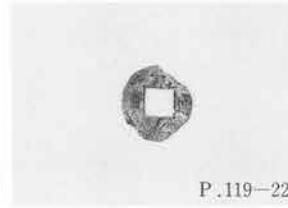
P.118-19



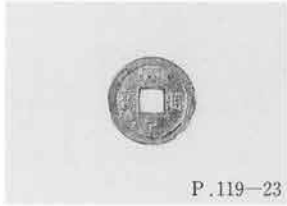
P.119-20



P.119-21



P.119-22



P.119-23



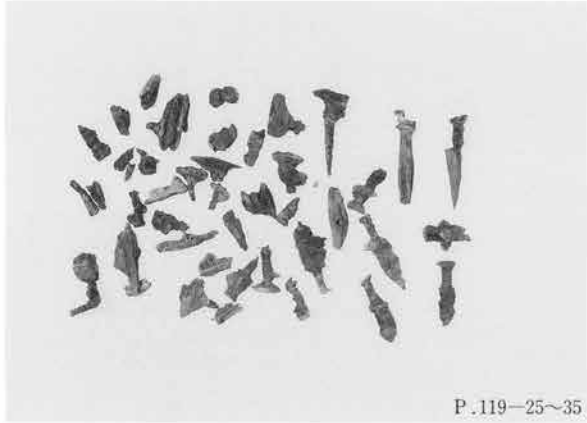
P.119-24



P.119-37



P.119-37



P.119-25~35



P.119-38



P.119-38



P.119-36



P.121-1



P.121-5~47



P.121-2



P.121-3



P.121-4



P.124-133



P.122~124-49~132



P.124-134



P.125-135



P.125-136



P.125-137



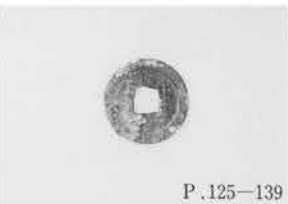
P.125-138



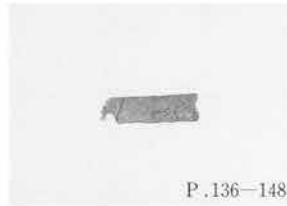
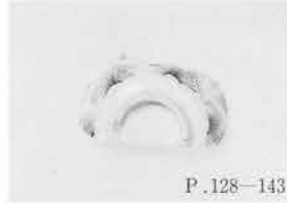
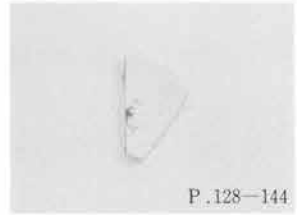
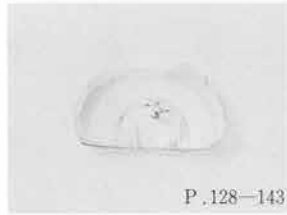
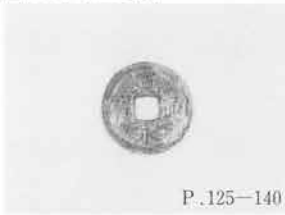
P.125-141



P.125-139



P.125-139





P.103-20

P.103-20

P.103-20



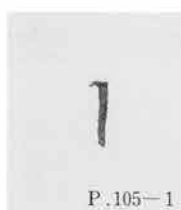
P.102-18



P.103-21



P.103-21



P.105-1



P.105-2



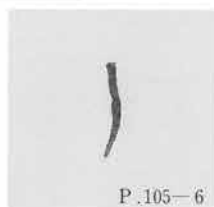
P.105-3



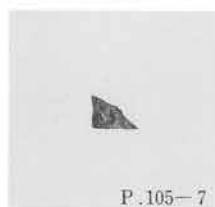
P.105-4



P.105-5



P.105-6



P.105-7



P.105-8



P.105-12



P.105-15



P.105-9



P.105-16



P.105-16



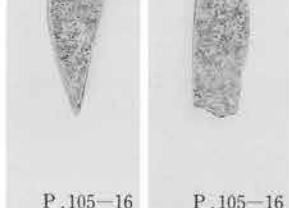
P.105-12



P.105-15



P.105-11



P.105-16



P.105-16



P.105-13



P.105-14



P.139-167



P.106-1



P.106-2



P.106-3



P.106-4



P.106-5

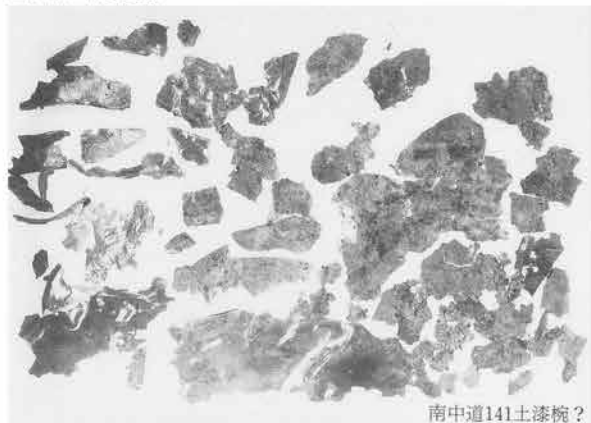


P.106-6

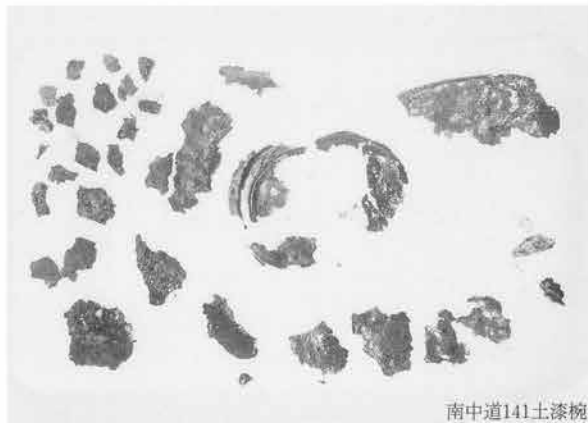


P.106-7

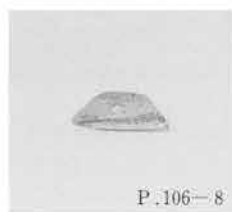
出土遺物



南中道141土漆碗?



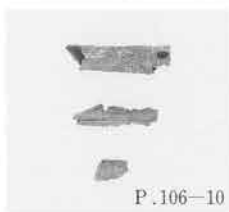
南中道141土漆碗



P.106-8



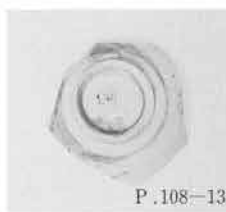
P.106-9



P.106-10



P.108-11



P.108-13



P.108-12



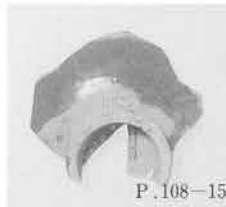
P.108-16



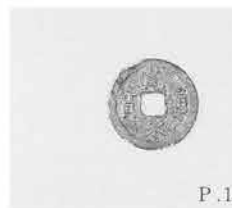
P.108-14



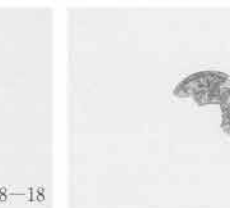
P.108-17



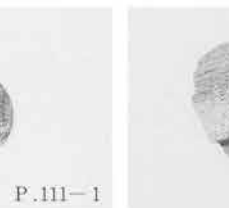
P.108-15



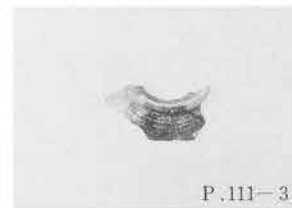
P.108-18



P.111-1



P.111-2



P.111-3



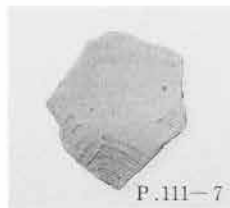
P.111-5



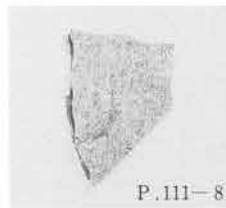
P.111-4



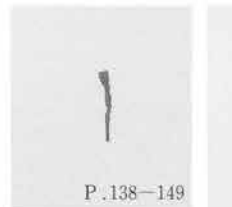
P.111-6



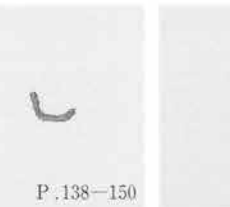
P.111-7



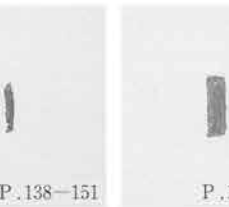
P.111-8



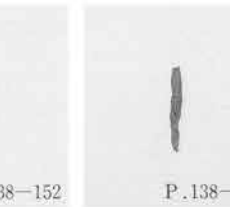
P.138-149



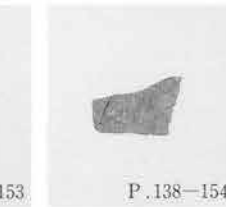
P.138-150



P.138-151

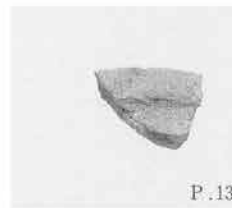


P.138-152

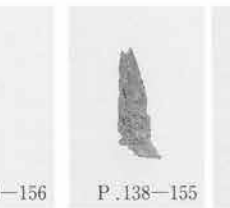


P.138-153

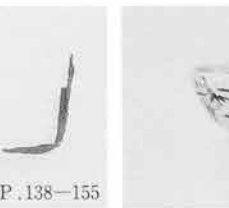
P.138-154



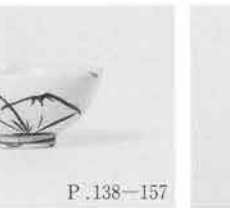
P.138-156



P.138-155



P.138-155



P.138-157



P.138-158

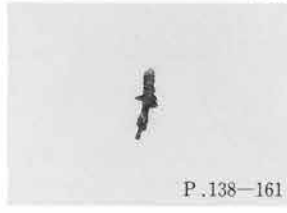
出土遺物



P.138-159



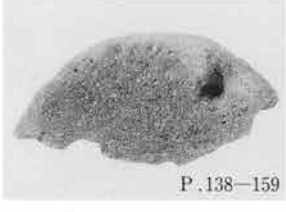
P.138-160



P.138-161



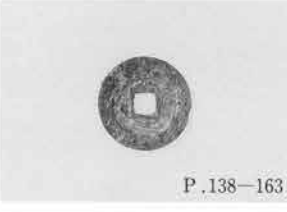
P.138-162



P.138-159



P.138-163



P.138-163



P.139-166



P.139-165



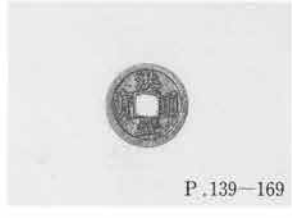
P.139-164



P.139-164



P.139-168



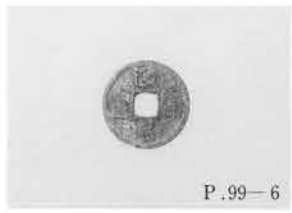
P.139-169



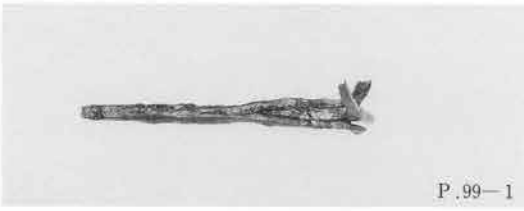
P.99-1



P.99-1



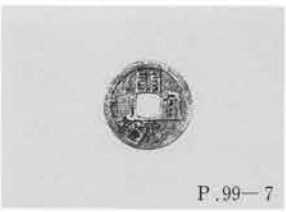
P.99-6



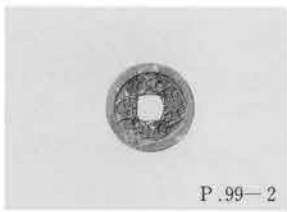
P.99-1



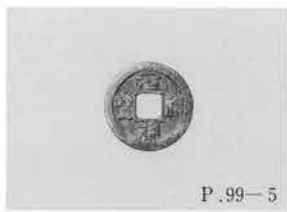
P.99-3



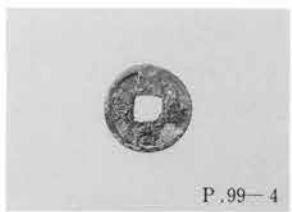
P.99-7



P.99-2



P.99-5



P.99-4

出土遺物



静岡県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第235集

## 白井遺跡群 -中世・近世編-

(白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

平成10年3月16日 印刷

平成10年3月25日 発行

編集・発行/財団法人静岡県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷/朝日印刷工業株式会社



白井城東遠構 現地測量図 (平成5年測量、本文P.45参照)

